新潟県埋蔵文化財調査報告書　第238集

一般国道８号

白根バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

小坂居付遺跡

２０１２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道８号

白根バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

小坂居付遺跡

（こさかいづけ）

２０１２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道８号白根バイパスは、新潟市南区保坂から同区戸頭に至る延長 5.9km の道路です。国道８号は京都市から新潟市に至る、関西圏と北陸を結ぶ主要幹線道路です。また、新潟市民の生活を支える道路として重要な役割を果たしています。現在、国道８号は白根地域の市街地を通過するため交通混雑、交通騒音等の問題が発生しており、これらの問題を解消するため白根バイパスが計画されました。

本書は一般国道８号白根バイパス建設に伴って実施した、「小坂居付遺跡」の発掘調査報告書です。3 か年にわたり中世の屋敷地と、周辺に広がる水田跡を調査しました。屋敷地は掘立柱建物１棟をはじめ、多数の柱根・土坑・溝・ピット・杭列等を検出しました。この屋敷地には中世の絵巻物の屋敷に描かれるような柳の並木が植栽され、区画溝が廻っていました。遺物は屋敷地から珠洲焼・土師質土器・青磁等の土器・陶磁器類、硯・砥石等の石製品、鉄椀・鉄皿・鉄鍋等の金属製品が少量と大量の木製品が出土しました。木製品の中には刀子の柄と鞘の未製品があり、屋敷地で生産していたことが分かりました。また、刀子の柄に唐木である紫檀製のものがあり、当時の東アジアとの交易を考える上で注目されます。また、紀年銘のある茅札や米の品種を書いた種子札が出土し、周辺に同時期に存在した馬場屋敷遺跡との関連が伺えます。

水田の畦畔は良好に残っており、度重なる洪水に遭いながらもほぼ元通りの区画を復旧し、5 面が重なっていました。屋敷地と生産域との関係が分かる貴重な調査例となりました。

発掘調査で得られたこれらの資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多大な御協力と御理解をいただきました新潟市歴史文化課、並びに地元の方々、また、発掘調査から本書の作成まで格別な御配慮をいただきました国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成 24 年 8 月

新潟県教育委員会

教育長　高　井　盛　雄

例　　言

1　本書は、新潟県新潟市南区小坂字居付 177 番地ほかに所在する小坂居付遺跡の発掘調査記録である。

2　この調査は一般国道 8 号白根バイパス建設事業に伴い、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼した。

3　埋文事業団は、掘削作業等を株式会社ノガミに委託して発掘調査を実施した。

4　遺物の註記は、2010 年度・2011 年度出土遺物には略記号の前に 10・11 を付した。小坂居付遺跡の略記号「コサカイ」にグリッド No.・遺構名・層位等を併記した。

5　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は日本平面国家座標（新座標）のＸ軸方向を示す。

6　掲載遺物の番号は、2009 年・2011 年に出土した土器・土製品・石製品・金属製品・木製品は年度毎に図版を作成し、種別ごとに通し番号を付した。2010 年出土遺物は、少量であることから種別に関係なく通し番号を付した。本文および観察表、図面図版、写真図版の遺物番号はすべて一致している。

7　本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は、著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

8　第Ⅵ章　自然科学分析の分析・原稿は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。炭化米の調査は株式会社ジエネテックが協力した。編集は佐藤友子（埋文事業団）が行った。

9　遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアス・有限会社不二出版に委託してデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ渡し印刷した。

10　本書の執筆は、鈴木俊成（埋文事業団　課長代理）、佐藤友子（同　専門調査員）、荒谷伸郎・石垣義則・折原洋一・佐藤　俊（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査課　調査員）が行い、編集は佐藤友子が担当した。執筆分担は鈴木：第Ⅰ章 2A2）b、荒谷：第Ⅱ章、第Ⅳ章 3 水田（2009・2010）、第Ⅴ章 6 漆器・柱根、第Ⅶ章 1A、折原 ：第Ⅳ章 2 屋敷地（2009）、石垣：第Ⅳ章 2 屋敷地(2011)・3 水田(2011)、佐藤俊：第Ⅳ章 2 屋敷地(2009)、第Ⅴ章 1 ～ 5・8A ～ C、第Ⅶ章 1B、これ以外は佐藤友子である。

11　土器・陶磁器の時期、石製品の産地に関しては水澤幸一氏（胎内市教育委員会）に、金属製品の用途等に関しては久保智康氏（京都国立博物館）、五十川伸矢氏（京都橘大学）にご教示いただいた。文章化にあたっての誤りの責は佐藤俊にある。

12　調査成果の一部は、小坂居付遺跡現地説明会（2009 年 7 月 18 日、2010 年 6 月 19 日、2011 年 9 月 10 日）、2009 ～ 2011 年埋文事業団年報、『木簡研究』第 32 号、2011 年新潟市遺跡発掘調査速報会等で公表しているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。

13　出土遺物および調査・整理・自然科学分析等に係る各種資料・データ類は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターで保管・管理している。

14　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関、地元の方々から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

相澤　央　　浅井勝利　　五十川伸矢　　卜部厚志　　久保智康　　小坂・保坂・神屋町内会
白根郷土地改良区　　高橋一樹　　竹田和夫　　田村　裕　　燕市教育委員会
新潟県農業総合研究所作物研究センター　　新潟市歴史文化課　　飛田範夫　　前嶋　敏　　水澤幸一

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の経過 …… 3

A　試掘・確認調査 …… 3
B　本発掘調査 …… 7
C　整 理 作 業 …… 11

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 12

1　地理的環境 …… 12

2　歴史的環境 …… 14

A　文献から見た遺跡の周辺 …… 14
B　周辺の遺跡 …… 14
C　「よしえ」と吉江館（城）について …… 18

第Ⅲ章　遺跡の概要 …… 19

1　グリッドの設定 …… 19

2　基 本 層 序 …… 20

A　水　田　域 …… 20
B　屋　敷　地 …… 23

第Ⅳ章　遺　　構 …… 24

1　遺構の概要と記述の方針 …… 24

2　屋敷地の調査 …… 25

A　SR1-1・2 層の遺構 …… 25
B　SR1-3 層の遺構 …… 39
C　SR2、XVII層の遺構 …… 47

3　水田域の調査 …… 48

A　水田調査の概要 …… 48
B　VIII層水田面（1 枚目水田）の遺構 …… 50
C　X層水田面（2 枚目水田）の遺構 …… 51
D　XII層水田面（3 枚目水田）の遺構 …… 56
E　XIV層水田面（4 枚目水田）の遺構 …… 60
F　XVI層水田面（5 枚目水田）の遺構 …… 61

第Ⅴ章　遺　　物 …… 64

1　土器・陶磁器 …… 64

A　概　　要 …… 64
B　器 種 分 類 …… 64
C　各　　説 …… 64

2　土　製　品 …… 67
3　石　製　品 …… 68
A　概　　要 …… 68
B　各　　説 …… 68
4　金属製品 …… 69
A　概　　要 …… 69
B　各　　説 …… 69
5　銭　　貨 …… 71
A　概　　要 …… 71
B　各　　説 …… 71
6　木　製　品 …… 72
A　概　　要 …… 72
B　器種分類 …… 72
C　記述の方法 …… 74
D　各　　説 …… 75
7　2010年度出土遺物 …… 85
A　近世磁器 …… 85
B　銭　　貨 …… 85
C　木　製　品 …… 85
8　2011年度出土遺物 …… 85
A　土器・陶磁器 …… 85
B　石　製　品 …… 86
C　金属製品 …… 87
D　木　製　品 …… 87
第Ⅵ章　自然科学分析 …… 90
1　はじめに …… 90
2　SR1埋土微細物分析 …… 90
A　試　　料 …… 90
B　分析方法 …… 91
C　結　　果 …… 92
D　考　　察 …… 94
3　SK399・SX5・332微細物分析 …… 95
A　試　　料 …… 95
B　分析方法 …… 95
C　結　　果 …… 95
D　考　　察 …… 97
4　2009年度植物珪酸体分析 …… 98
A　試　　料 …… 98
B　分析方法 …… 98
C　結　　果 …… 98
D　考　　察 …… 101

5　2010 年度植物珪酸体分析 …… 102
A　堆積物及び採取試料 …… 102
B　分 析 方 法 …… 103
C　結　　果 …… 103
D　考　　察 …… 104

6　^{14}C 年代測定 …… 105
A　試　　料 …… 105
B　分 析 方 法 …… 105
C　分析結果及び考察 …… 106

7　2009 年度樹種同定・漆膜観察・X 線回折分析 …… 107
A　試　　料 …… 107
B　分 析 方 法 …… 107
C　結　　果 …… 107
D　考　　察 …… 114

8　2010 年度樹種同定 …… 121
A　試　　料 …… 121
B　分 析 方 法 …… 121
C　結　　果 …… 121
D　考　　察 …… 121

9　2011 年度樹種同定 …… 122
A　試　　料 …… 122
B　分 析 方 法 …… 122
C　結　　果 …… 122
D　考　　察 …… 122

10　漆塗膜および顔料分析 …… 125
A　試　　料 …… 125
B　分 析 方 法 …… 125
C　結　　果 …… 125
D　考　　察 …… 129

11　花 粉 分 析 …… 129
A　試　　料 …… 129
B　分 析 方 法 …… 129
C　結　　果 …… 130
D　考　　察 …… 130

12　炭化したイネ種子の DNA 鑑定 …… 131
A　は じ め に …… 131
B　試料・分析方法 …… 132
C　結　　果 …… 134
D　考　　察 …… 135

第Ⅶ章　ま　と　め …… 138

1　遺　　構 …… 138
A　屋敷地について …… 138
B　水田域について …… 142

２　遺　　物 …… 147
Ａ　土師質土器について …… 147
Ｂ　木　製　品 …… 150

３　総　　括 …… 159
Ａ　屋敷地と水田について …… 159
Ｂ　屋敷内の生業 …… 159

《要　　約》 …… 161

《引用・参考文献》 …… 162

《観　察　表》 …… 166

挿図目次

第１図　白根バイパス法線と遺跡の位置 …… 2
第２図　試掘・確認調査トレンチ位置 …… 4
第３図　水田確認調査土層柱状図 …… 4
第４図　C–2T拡張区平面図 …… 4
第５図　水田確認調査 …… 6
第６図　越後平野の地形区分図 …… 13
第７図　周辺の中世遺跡 …… 15
第８図　グリッド設定図 …… 19
第９図　基本層序 …… 22
第10図　遺構の平面・断面形態の分類 …… 25
第11図　遺構覆土の堆積形状の分類 …… 25
第12図　畦畔・擬似畦畔模式図 …… 50
第13図　刀子名称 …… 69
第14図　下駄の計測部位 …… 74
第15図　挽物椀・皿の計測部位 …… 74
第16図　指物の組接ぎ模式図 …… 74
第17図　継手と仕口模式図 …… 74
第18図　自然科学分析試料採取位置及び土層柱状図 …… 91
第19図　SR1種実遺体・灰像 …… 93
第20図　SK399・SX5・332種実遺体 …… 96
第21図　2009年度植物珪酸体含量 …… 100
第22図　2009年度植物珪酸体 …… 101
第23図　2010年度植物珪酸体含量 …… 104
第24図　2010年度植物珪酸体 …… 104
第25図　2009年度木材 …… 111
第26図　漆塗膜断面 …… 113
第27図　X線回折図(1) …… 116
第28図　X線回折図(2) …… 117
第29図　X線回折図(3) …… 118
第30図　2010年度木材 …… 121
第31図　漆塗膜断面 …… 125
第32図　X線回折図 …… 126
第33図　FT-IRスペクトル …… 127
第34図　2011年度木材 …… 128
第35図　花粉化石 …… 128
第36図　分析試料の外観写真 …… 132
第37図　第Ⅵ染色体上のプライマーの位置 …… 132
第38図　サンプル表面画像 …… 134
第39図　温帯ジャポニカ型と熱帯ジャポニカ型のDNA増幅断片の泳動写真 …… 134
第40図　熱を受けて穴の開いた表面 …… 135
第41図　溝による区画模式図 …… 140
第42図　屋敷地と水田域との相関関係図 …… 143
第43図　水田面の変遷 …… 145
第44図　阿賀南地域の土師質土器編年案 …… 149
第45図　阿賀北・阿賀南地域の土師質土器の分布 …… 149
第46図　13世紀末～14世紀の漆器(白根地区) …… 152
第47図　13世紀末～14世紀の下駄(白根地区) …… 154

表　目　次

第１表　周辺の中世遺跡 ……16
第２表　木製品集計表(遺跡全体) ……73
第３表　下駄分類 ……74
第４表　SR1微細物分析結果 ……93
第５表　SK399・SX5・332微細物分析結果 ……96
第６表　2009年度 植物珪酸体含量(1) ……99
第７表　2009年度 植物珪酸体含量(2) ……99
第８表　2010年度 植物珪酸体含量 ……103
第９表　放射性炭素年代測定結果
及び暦年較正結果 ……106
第10表　X線回折測定条件 ……107
第11表　2009年度 樹種同定結果(木製品) ……109
第12表　2009年度 樹種同定結果(漆製品) ……112
第13表　2009年度 樹種同定結果(自然木) ……112
第14表　漆塗膜断面観察結果 ……113
第15表　履物の形態別分類群構成 ……115
第16表　2010年度 樹種同定結果 ……121
第17表　2011年度 樹種同定結果 ……123
第18表　2011年度 器種別種類構成 ……124
第19表　SK853花粉分析結果 ……130
第20表　出土木簡の時期と遺跡名 ……131
第21表　試料名の記載された農書と年代、
栽培地域 ……131
第22表　温帯ジャポニカ型と熱帯ジャポニカ型を
判別するプライマーリスト ……132
第23表　プライマーの温帯・熱帯ジャポニカ型の
増幅とアニーリング温度 ……132
第24表　在来系統のDNA解析の結果 ……133
第25表　SSRプライマーの配列 ……133
第26表　各プライマーで増幅される領域・長さ・
対立遺伝子数 ……133
第27表　サンプルのDNA断片の増幅結果 ……135
第28表　新潟県内中世水田跡検出遺跡一覧 ……146
第29表　浦廻遺跡漆器内訳 ……150
第30表　小坂居付遺跡漆器内訳 ……151

図 版 目 次

【図面図版】

図版１　Ⅷ層遺構分割図
図版２　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構全体図
図版３　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構分割図(1)
図版４　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構分割図(2)
図版５　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構分割図(3)
図版６　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構分割図(4)
図版７　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構分割図(5)
図版８　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構分割図(6)
図版９　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構分割図(7)
図版10　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(1)水田
図版11　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(2)水田、水口
図版12　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(3)SB336
図版13　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(4)SK3・4・29・65・69・70
図版14　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(5)SK72・75・85・86・94・167
図版15　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(6)SK169・267・334・335・381・399・400
図版16　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(7)SK410・473・488・527・529・534・547・562・802
図版17　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(8)P22・28・39・43・56・63・76A・76B・80・81・84・88・159・386・414・447・449・611・620
図版18　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(9)P750・752～754・756～759・804・805・807・818・832
図版19　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(10)SA12～14・145、SX30・55・97・98・151～154・439・566
図版20　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(11)SX5・91・209・332・345～347・485・487
図版21　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(12)SD111～114・129・130・150・166、SR165
図版22　Ⅹ層、SR1-1・2層遺構個別図(13)SD166・172・330・331・339・436・445・448・461・540・593・597・598
図版23　Ⅻ層、SR1-3層遺構全体図
図版24　Ⅻ層、SR1-3層遺構分割図(1)
図版25　Ⅻ層、SR1-3層遺構分割図(2)
図版26　Ⅻ層、SR1-3層遺構分割図(3)
図版27　Ⅻ層、SR1-3層遺構分割図(4)
図版28　Ⅻ層、SR1-3層遺構分割図(5)
図版29　Ⅻ層、SR1-3層遺構分割図(6)
図版30　SR1-3層遺構個別図(1)SK174・177・179・201・678、P74
図版31　SR1-3層遺構個別図(2)SK206・207・211・227、P222

図版32　SR1-3層遺構個別図(3)SK260・476・490・491、SX277
図版33　SR1-3層遺構個別図(4)SK492・502～504・508・512
図版34　SR1-3層遺構個別図(5)SK514・520・528・530・542・543・589
図版35　SR1-3層遺構個別図(6)SK554・619・641・660・837・853
図版36　SR1-3層遺構個別図(7)P551・669、SA215、SX116～124・248・507・518・537、SD259・499・531・590・606・635・857
図版37　XIV層、SR1-3層遺構全体図
図版38　XVI層、SR2・XVII層遺構全体図
図版39　SR2・XVII層遺構分割図(1)
図版40　SR2・XVII層遺構分割図(2)・遺構個別図SK679、SA16～18、SX676
図版41　X層遺構全体図(南区1・2)水田・遺構個別図SD700・水口
図版42　X層遺構全体図(北区1)水田・遺構個別図SK808、SD701・702・806・914
図版43　X層遺構全体図（北区２・３）水田・遺構個別図（1）水口、SK849・850、P890、SX822・823・889-2、SD848
図版44　X層遺構個別図(2)
図版45　XII層遺構全体図(南区1・2)水田・遺構個別図SX703・707・708
図版46　XII層遺構全体図(北区1～3)水田・遺構個別図(1)　水口
図版47　XII層遺構個別図(2)P904・905・915～919、SA910・911、SX876・886・887・888・901・902・906、SD810・851・852・861
図版48　XIV層遺構全体図(南区1・2)水田・遺構個別図SX710～713、SD709、畦畔402・406粗朶
図版49　XIV層遺構全体図(北区1・2)水田・遺構個別図水口、SX878
図版50　XVI層遺構全体図(南区1・2)水田・遺構個別図SA716・717、SX714、畦畔501樹皮・粗朶
図版51　XVI層遺構全体図(北区1)・遺構個別図SX864～868
図版52　水田土層断面(1)　北区1(南側)
図版53　水田土層断面(2)　南区1
図版54　水田土層断面(3)　南区1
図版55　水田土層断面(4)　南区2
図版56　水田土層断面(5)　北区1(北側)
図版57　水田土層断面(6)　北区2
図版58　水田土層断面(7)　北区2
図版59　水田土層断面(8)　北区2
図版60　2009年度　土器・陶磁器(1)
図版61　2009年度　土器・陶磁器(2)、土製品
図版62　2009年度　石製品(1)
図版63　2009年度　石製品(2)、金属製品(1)
図版64　2009年度　金属製品(2)・銭貨
図版65　2009年度　木製品(1)
図版66　2009年度　木製品(2)
図版67　2009年度　木製品(3)
図版68　2009年度　木製品(4)
図版69　2009年度　木製品(5)
図版70　2009年度　木製品(6)
図版71　2009年度　木製品(7)
図版72　2009年度　木製品(8)
図版73　2009年度　木製品(9)
図版74　2009年度　木製品(10)
図版75　2009年度　木製品(11)
図版76　2009年度　木製品(12)
図版77　2009年度　木製品(13)
図版78　2009年度　木製品(14)
図版79　2009年度　木製品(15)
図版80　2009年度　木製品(16)
図版81　2009年度　木製品(17)
図版82　2009年度　木製品(18)
図版83　2009年度　木製品(19)
図版84　2009年度　木製品(20)
図版85　2010年度　近世磁器、銭貨、木製品
図版86　2011年度　土器・青磁、石製品
図版87　2011年度　金属製品、木製品(1)
図版88　2011年度　木製品(2)
図版89　2011年度　木製品(3)
図版90　2011年度　木製品(4)

【写真図版】

図版91　遺跡の位置
図版92　遺跡と周辺の地形
図版93　X層・SR1-1・2層全景・遺構集中部
図版94　基本層序⑫・⑱・⑲
図版95　遺物出土状況(1)
図版96　遺物出土状況(2)
図版97　SR1-1・2層(7・8Iグリッド)完掘、SR165、SD112
図版98　X層水田全景
図版99　X層水田畦畔、水田土層断面、水口
図版100 SB336-P2・3・4・6、P751
図版101 SB336-P7・8、SK4・29・65
図版102 SK69・70・72・75
図版103 SK85・86・94・167
図版104 SK169・267・334・335
図版105 SK381・399・400・410・473
図版106 SK488・527・529・534・547
図版107 SK534・547・562・802、P22・28

図版108 P39・43・56・63・76A・76B・80・ 81・88・159、SK65
図版109 P386・414・447・449・611・750・752・753・756
図版110 P754・757・804・805・807・818・832、SA12-10
図版111 SA13-23・SA14-6、SX5・55・91・332・439
図版112 SX345・346・347・485・487
図版113 SX209、SD111・113・150
図版114 SD112・114・129・130・166、SR165
図版115 SD172・330・331・338・339
図版116 SD436・445・448・540・593・597・598
図版117 SR1-3層南区1、農道下全景
図版118 SR1-3層(7・8Iグリッド)完掘、遺物出土状況
図版119 SK174・177・179・201・678
図版120 SK206・207・211・227
図版121 SK260・476・490、SX277
図版122 SK491・492・502・503
図版123 SK504・508・512・514
図版124 SK520・528・530・542、SD541
図版125 SK543・554・589・619
図版126 SK641・660・837・853
図版127 P551・669、SA215・812・823、SX116～119・122～124
図版128 SD259・499・590・606・635・857、SK498、第四号木簡
図版129 SA280
図版130 SA16～18、SD150
図版131 基本層序
図版132 水田土層断面(南区1)(1)
図版133 水田土層断面(南区1)(2)
図版134 水田土層断面(北区1)
図版135 水田土層断面(北区2)(1)
図版136 水田土層断面(北区2)(2)
図版137 水田土層断面(北区1・2)
図版138 Ⅷ層水田(北区2)、SX879・880
図版139 Ⅹ層水田全景(南区1・2、北区1)
図版140 Ⅹ層水田
図版141 Ⅹ層水田、SD701・702、足跡
図版142 Ⅹ層水田　水口、SD700
図版143 Ⅹ層水田(北区1)、SK808
図版144 Ⅹ層水田(北区2)
図版145 Ⅹ層水田　水口、SD848
図版146 Ⅹ層水田、SK849・850、SD848
図版147 Ⅹ層水田、SA871
図版148 SD870、SA871・872・875
図版149 SD848・870、SA871
図版150 Ⅹ層水田(北区2)、SA889、SX882～885、P890
図版151 Ⅻ層水田
図版152 Ⅻ層水田、SX703・707・708
図版153 Ⅻ層水田(北区1)、SD810
図版154 Ⅻ層水田(北区2)
図版155 Ⅻ層水田(北区2)、SD851
図版156 Ⅻ層水田(北区2)、水口
図版157 Ⅻ層水田(北区2)、水口、SD851・852
図版158 Ⅻ層水田(北区2)、SX886・887
図版159 P915～919、SA910
図版160 SA910・911、SX901・902・906
図版161 XIV層水田、畦畔402粗朶
図版162 XIV層水田
図版163 畦畔402粗朶、SD709、SX710～713
図版164 XIV層水田(北区2)
図版165 XIV層水田(北区1・2)、水口
図版166 XIV層水田(北区2)、水口
図版167 XVI層水田、畦畔501樹皮敷き
図版168 XVI層水田
図版169 XVI層水田、畦畔501樹皮敷き、遺物出土状況、SX714
図版170 SA716・717、SX718・719
図版171 XVI層上面、SX866～868
図版172 木簡赤外線写真
図版173 2009年度　青磁、漆器椀・皿・合子、蓋
図版174 2009年度　漆器椀・皿
図版175 2009年度　漆器椀・皿・片口鉢
図版176 2009年度　櫛、烏帽子？、編組
図版177 2009年度　土器・陶器(1)
図版178 2009年度　土器・陶器(2)
図版179 2009年度　土器・陶器(3)、土製品、石製品(1)
図版180 2009年度　石製品(2)・金属製品
図版181 2009年度　銭貨・木製品(1)
図版182 2009年度　木製品(2)
図版183 2009年度　木製品(3)
図版184 2009年度　木製品(4)
図版185 2009年度　木製品(5)
図版186 2009年度　木製品(6)
図版187 2009年度　木製品(7)
図版188 2009年度　木製品(8)
図版189 2009年度　木製品(9)
図版190 2009年度　木製品(10)
図版191 2009年度　木製品(11)
図版192 2009年度　木製品(12)
図版193 2010年度　近世磁器、銭貨、木製品
図版194 2011年度　青磁・漆器椀・皿・曲物
図版195 2011年度　土器、石製品、金属製品
図版196 2011年度　木製品(1)
図版197 2011年度　木製品(2)
図版198 2011年度　木製品(3)

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯（第１図）

一般国道８号は、新潟県と関西・関東地方を結ぶ主要幹線道路としての役割を担い、地域経済・日常生活活動を支える基盤施設としての役割も果たしている。しかしながら、近年の自動車交通の増大と車両の大型化により、白根地区では交通渋滞・騒音・振動・交通事故など生活環境に与える悪影響、及び冬期の除雪障害などの問題が発生している。そこで、これらの問題を解消し、主要幹線道路としての機能充実を図り、ほかの都市計画と一体となった道路網を構成し、秩序ある都市の発展に寄与することを目的として白根バイパスは計画された。

白根バイパスは新潟市南区保坂を起点とし、同区戸頭までの延長 5.9km の道路である。1984 ～ 1986 年（昭和 59 年～ 61 年度）に道路計画の調査が実施され、1991 年（平成 3 年度）に事業化が決定した。

事業区域内の埋蔵文化財の分布調査は、国土交通省（以下、国交省）と新潟県教育委員会（以下、県教委）の協議を経て、県教委から委託された（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が 2001 年（平成 13 年度）に行った。分布調査では珠洲焼などの遺物も採取されたが、盛土や建物・アスファルト舗装のために、遺物散布状況の確認が不可能な部分があった。また、事業区域は沖積平野にあり、遺跡が存在したとしても地中深く埋没している可能性もあった。このように、分布調査で遺跡の有無を判断できない状況から、事業区全域で試掘調査が必要である旨を県教委に報告した。県教委はその結果を国交省に通知し、試掘調査の協議が行われた。

試掘調査は事業計画に合わせ複数回行われ、本遺跡周辺の調査は 2008 年（平成 20 年度）に行った。その結果、現地表下 2m から遺構・遺物が出土した。中世の集落である可能性が高いと考えられ、本発掘調査が必要であると県教委に報告した。

2008 年 9 月に行った国交省・県教委・事業団による協議の結果、2009 年（平成 21 年度）に本発掘調査を行うことになった。

白根バイパス関係では 2002 年（平成 14 年度）に浦廻遺跡［本間ほか 2003］の発掘調査が行われ、本遺跡と同時期(13 世紀末～ 14 世紀)の遺構･遺物が出土した。特に 108 点に上る葬送に関係する木簡が出土し、一部には鎌倉時代後期の紀年銘もあり、遺物は新潟県指定文化財に登録されている。

第１図　白根バイパス法線と遺跡の位置

（旧白根市役所作成「白根市全図其一・其二」平成６年修正　1：10.000 を使用　『浦廻遺跡』から転載・加筆）

2　調査の経過（第２～５図）

A　試掘・確認調査

2008・2009 年度（平成 20・21 年度）の試掘・確認調査の体制・期間は以下のとおりである。

調査年度	2008 年	2009 年
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）	
調査機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団	
管　理	木村　正昭（事務局長） 斎藤　　栄（総務課長） 藤巻　正信（調査課長）	
庶　務	長谷川　靖（総務課班長）	
調査期間	2008 年 9 月 2 日～ 9 月 12 日	2009 年 4 月 6 日～ 10 日、6 月 29・30 日、7 月 31 日～ 8 月 4 日、10 月 13 日～ 16 日・28 日～ 30 日、11 月 5 日
調査担当	田海　正義（調査課試掘・確認調査担当課長代理）	鈴木　俊成（調査課本発掘調査担当課長代理）
調査職員	畠野　義昭（　　同　　主任調査員）	佐藤　友子（　　同　　主任調査員） 荒谷　伸郎（株式会社ノガミ　埋蔵文化財調査部主任） 小村　正之（　　同　　調査員）

1）試　掘　調　査

調査対象面積 22,093m² に任意の試掘坑（トレンチ、以下 T）を 18 か所設定し、重機（バックホー）及び人力による掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。実質調査面積は 607.8m² で試掘確認率は 2.8% である。20–13T から掘立柱建物と考えられる 3 本の柱根（角柱）列、そして 20–8・13・14T では木製品や多量の炭化物・灰を検出した。土器や陶磁器の出土はなかったが、中世に出現する差歯下駄の歯や中世に多くなる角柱が出土したことから中世の集落遺跡と考えた。調査中に周辺住民から振動に対する苦情が寄せられ調査を休止した。この時点では、本発掘調査必要範囲の設定ができていなかったが、20–13・14T を中心に 4,620m² について本発掘調査が必要であると県教委に報告し、小坂居付遺跡として新遺跡登録した。

2）確　認　調　査

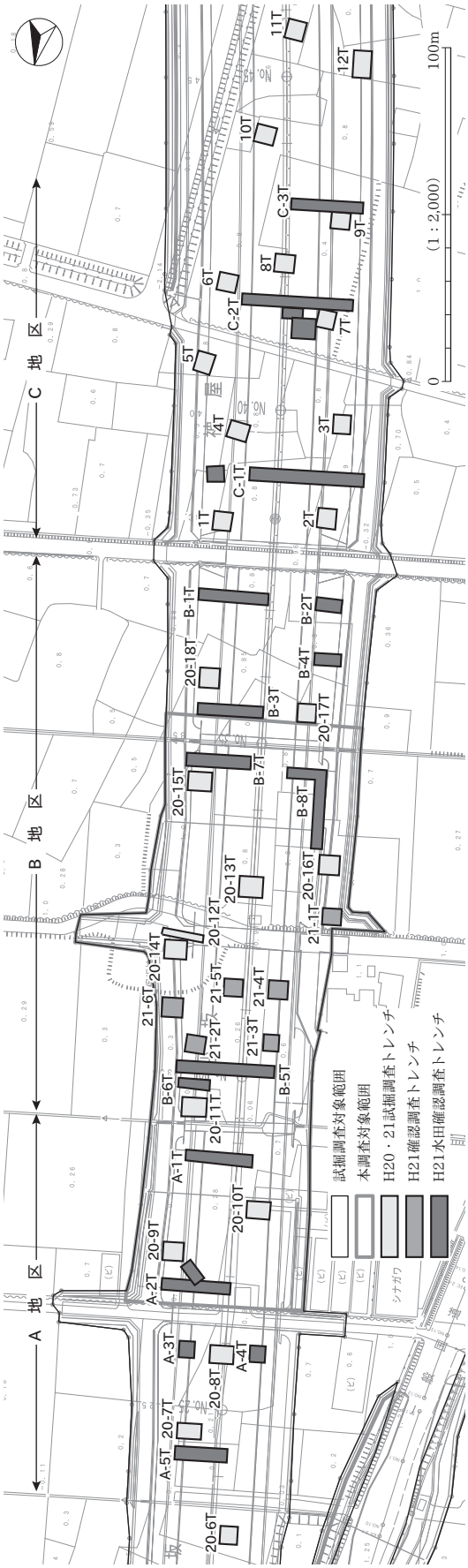
a　遺跡範囲確認調査

試掘調査の結果を受け、本発掘調査の範囲を確定するため確認調査を行った。任意のトレンチを 6 か所設定し、人力で掘削・検出を行い遺構・遺物の有無を確認した。21–1 ～ 5T では遺構・遺物は出土しなかったが、21–6T で 13 世紀後半～ 14 世紀初頭ごろと考えられる土師質土器と木製品が出土し、中世の遺跡であることを確認した。県教委には 2008 年度に実施した試掘調査内容も含め、遺構・遺物が出土した 3,000m² について本発掘調査が必要であると報告した。

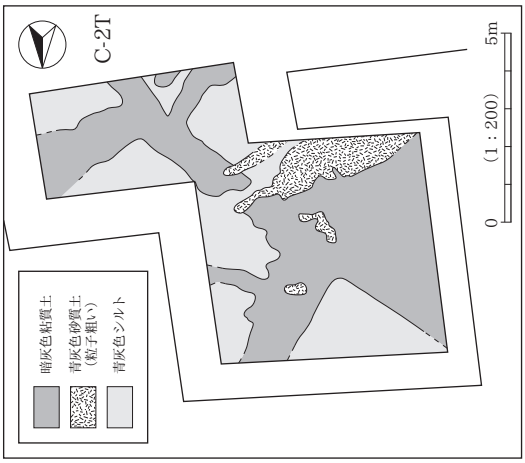
b　水田確認調査

2009 年の本発掘調査で中世の居住域と水田を検出し、水田は調査区外に伸びることが想定された。この水田の広がりと遺存状態を確認するため調査を行った。

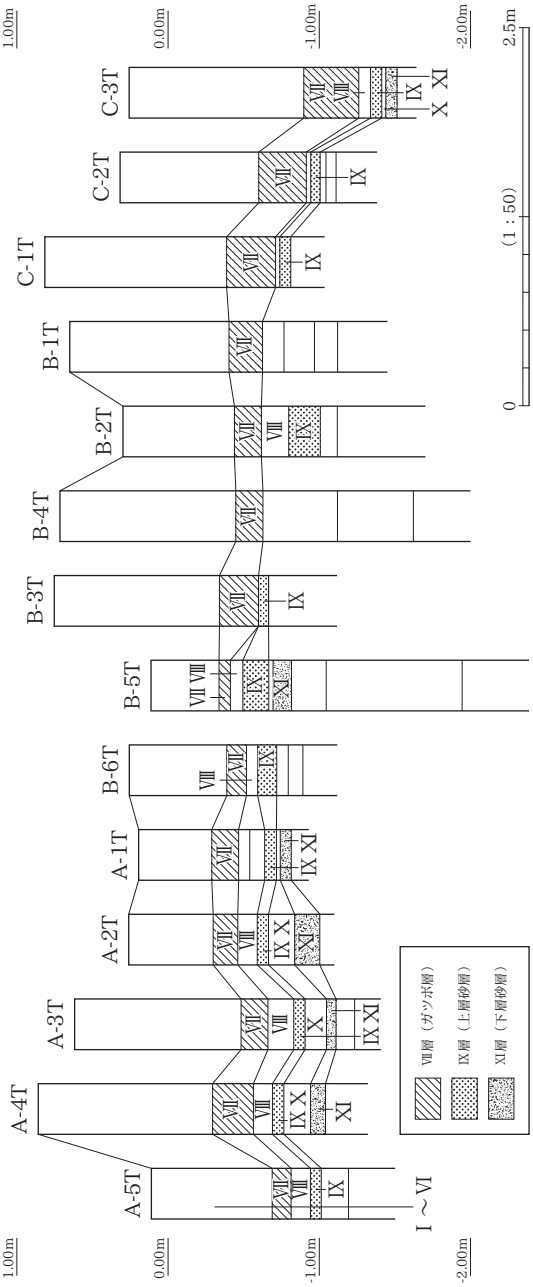
今回の調査範囲は 2008･2009 年度実施の試掘･確認調査で遺跡の存在を確認していない地区に当たる。17 か所のトレンチを任意に設定し調査した。掘削は 2009 年度本発掘調査で分層したⅧ層までを重機で、水田耕作土を覆うⅧ層下の砂層以下は人力で行った。トレンチ長軸の片側縁には排水を兼ねた幅 30cm



第２図　試掘・確認調査トレンチ位置



第４図　C−2T 拡張区平面図 (S=1/200)



第３図　水田確認調査土層柱状図 (S=1/50)

前後のサブトレンチを設け、この断面で畦畔の高まりや耕作土の撹拌状況を確認した。検出した遺構（主に畦畔）については写真に記録し、必要なものは簡易的な平面図を作成した。

調査対象範囲を北から便宜的にＡ～Ｃの三地区に分けた。水田耕作土と考えられる撹拌土は、ほとんどのトレンチで確認でき、2009 年度本発掘調査区で検出した水田域は調査区外に伸び、しかも広範囲に存在することが推測される。ただし、水田を覆う砂層（洪水堆積物）の厚さや状態は一様ではなく、堆積が薄い地点やブロック状に途切れながら堆積する地点、砂層に水田耕作土（粘質土）が混入する地点など様々である。砂層が厚い地点で遺構の残りは良く、厚くても層界が凸凹し、層中にブロック状の粘質土を混入する地点では不明瞭となる。

遺物はＡ地区 A–4T の水田耕作土と考えられる撹拌土中から木製品１点（84–297）が出土したのみである。遺構はＡ地区 A–2T とＢ地区 B–7・8T で高さ約 10cm、幅約 40cm の水田畦畔を検出した。そのほかＣ地区 C–2T の断面でも畦畔状の高まりを検出し、この地区を平面的に拡張したが、遺構の残りは悪く水田区画も明瞭ではなかった（第４図）。

以下、それぞれの地区の概要を記す。2009 年度の本発掘調査で得られた基本層序に相当する層をローマ数字で示した。

Ａ 地 区　南側は砂層が比較的厚く、粒子も粗い（大粒）。砂層は薄い粘質シルト（Ｘ層）を挟み、上・下２枚（以下、砂上層：Ⅸ層、砂下層：Ⅺ層とする）存在する。A–1T の砂上層（Ⅸ層）下で遺構検出を試みたが、流路状の砂（砂上層：Ⅸ層）の落ち込みを複数検出したのみで、遺構と判断できるものはなかった。畦畔を検出したのは A–2T の砂下層（Ⅻ層）下である。南北方向に走る幅（下幅）40cm 前後の畦畔を約 10m にわたって検出した。

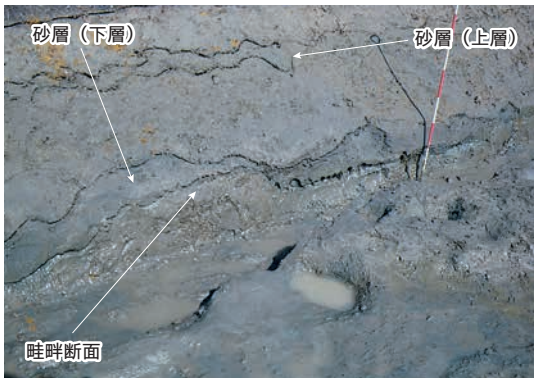
北側でも２枚の砂層を確認した。A–3・4T の砂層下の粘質土は撹拌され水田耕作土と考えられるが、砂層は薄く粘質土との層界は凸凹している。また砂層には粘質土（耕作土がブロック状になったもの）が含まれることから、砂堆積時に水流等で水田耕作土表層が流された可能性が高い。そして、A–5T ではこの傾向が更に強く、砂層が西側に大きく傾斜することから、砂を供給した流路の一つが近くに存在した可能性がある。この辺りは流水や洪水による水田耕作土への影響が他地区よりも大きかったことが推測される。

Ｂ 地 区　2009 年度本発掘調査区の隣接地である。南側の B–7・8T で畦畔を検出したが、更に南の B–1 ～ 4T では砂の堆積が薄く、ブロック状に途切れる地点もありＣ地区 C–1T の状況に近い。おそらくＣ地区も含め、この辺り一帯は水流の影響により水田耕作土表層が流された可能性が高い。

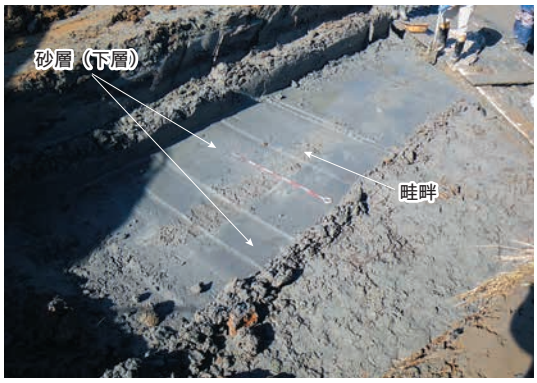
一方、北側の B–5・6T では砂層が比較的厚く、水田耕作土との層界は平坦で、層界の様子は畦畔を検出した B–7T の水田面に極めて似ている。また、B–6T の水田耕作土上面からはヒトの足跡に似た砂の落ち込みを複数検出した。

Ｃ 地 区　南に向かい砂層が厚くなるが、C–1T の砂層はブロック状に途切れ、C–3T の西側はシルトに変質、東側は存在すら不明瞭となる。水田耕作土と砂層の境は凸凹し、水流などの影響で水田耕作土表層は流されている可能性が高い。

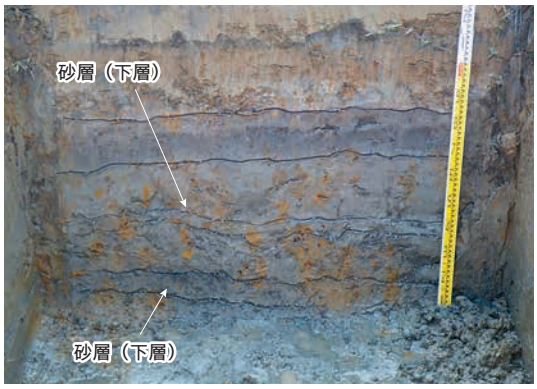
調査によって、2009 年度本発掘調査区の周辺には中世の水田跡が広がっていることが分かった。ただし、その領域までは確認することができなかった。水田は耕作土と考えられる撹拌土の枚数から二時期以上にわたる可能性がある。ただし、遺構の残りは悪く、砂層堆積時に耕作土表層が流されたと考えられる地点が多い。その中でも、Ａ地区 A–2T ～ Ｂ地区 B–7T の間は遺構の残りが比較的良好で、平面的な発掘調査においても遺構（畦畔・水田面・水路など）の検出が期待される範囲と言えよう。このことから本発



A 地区 2T 畦畔断面（下層）



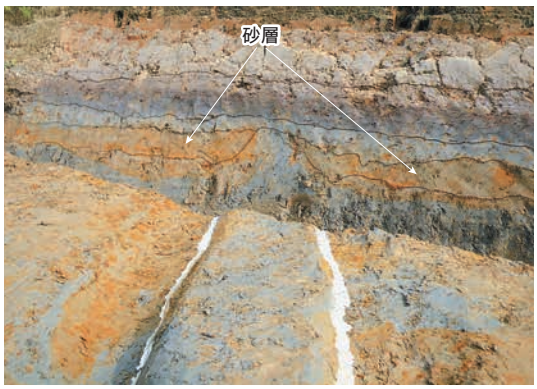
A 地区 2T 畦畔検出（下層）



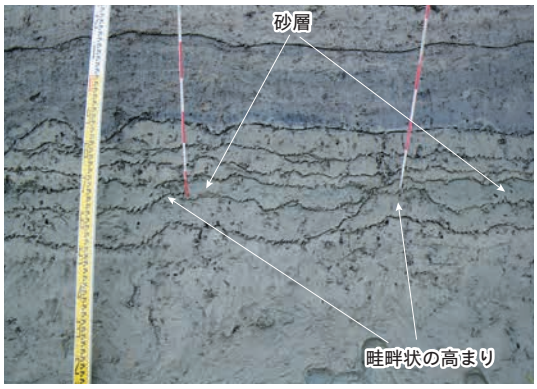
A 地区 4T 断面（北から）

A 地区 4T 木製品出土状況

B 地区 6T ヒト足跡？検出（上層）



B 地区 7T 畦畔検出（上層）



C 地区 2T 断面（南から）

C 地区 2T 拡張区遺構検出（西から）

第 5 図　水田確認調査

掘調査必要面積はA地区A–2T～B地区B–7Tを中心に7,500m^{2}であると県教委に報告した。

B　本発掘調査

2009～2011年度（平成21～23年度）の本発掘調査の体制・期間は以下のとおりである。

2009年度

調査期間	2009年4月20日～2009年11月5日
整理期間	2009年11月6日～2010年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）
調査機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	木村　正昭（事務局長） 斎藤　　栄（総務課長） 藤巻　正信（調査課長）
庶務	松原　健二（総務課班長）
調査担当	鈴木　俊成（調査課本発掘調査担当課長代理）
調査員	佐藤　友子（　同　主任調査員）
支援組織	株式会社ノガミ
現場代理人	伊藤　正紀（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部現場代理人）
調査員	荒谷　伸郎（　同　主任） 折原　洋一（　同　調査員） 小村　正之（　同　調査員）7月20日まで
補助員	佐藤　　俊、土田　洋子、大矢美和子、渡辺　容子、小出　有紀、増井　明美、星山　　薫

2010年度

調査期間	2010年4月13日～2010年10月12日
整理期間	2010年10月13日～2011年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）
調査機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	木村　正昭（事務局長） 今井　　亘（総務課長） 藤巻　正信（調査課長）
庶務	伊藤　　忍（総務課班長）
調査指導	鈴木　俊成（調査課本発掘調査担当課長代理）
調査担当	佐藤　友子（　同　班長）
支援組織	株式会社ノガミ
現場代理人	伊藤　正紀（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部現場代理人）
調査員	荒谷　伸郎（　同　主任）
補助員	佐藤　　俊（　同　調査員）

2011年度

調査期間	2011年4月12日～2011年12月27日
整理期間	2011年12月28日～2012年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）
調査機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	木村　正昭（事務局長） 今井　　亘（総務課長） 北村　　亮（調査課長）
庶務	伊藤　　忍（総務課班長）
調査指導	田海　義正（調査課本発掘調査担当課長代理）
調査担当	佐藤　友子（　同　専門調査員）
支援組織	株式会社ノガミ
現場代理人	伊藤　正紀（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部現場代理人）
調査員	石垣　義則（　同　調査員）
調査員	佐藤　　俊（　同　調査員）
補助員	土田　洋子　武田裕紀子

1）2009 年度

調査区は７グリッドにある農道を挟んで北側を北区 1、南側を南区 1、農道部分を農道下と呼称した。以下、地区ごとに調査経過を述べる。調査区の呼称及び年度毎の調査範囲は第 8 図に示す。

北 区 1　　調査区は湧水が著しく、排水するため暗渠敷設工事を 4 月 20 日～ 24 日に行い、続いて表土除去を 5 月 7・8 日に行った。5 月 11 日から作業員を入れ、調査区の東壁から農道側の南壁で基本層序の確認を行った。また、4 月の確認調査で存在を想定した自然流路に直交する土層観察用のベルト 3 本とサブトレンチを併用し、堆積状況の把握に努めた。

自然流路の西岸近くで約 2m 間隔の直線的に並ぶ複数の樹根を検出し、断面の精査からこの部分は両脇に土留め杭を打設した盛土であることを確認した。このことから、樹根は幅 2m ほどの盛土によって築かれた土手状の高まりに植栽したものと判明した。

調査が進むにつれ、出土遺物や検出遺構から遺跡は単なる木製品が廃棄された自然流路跡ではなく、人の手が加わった場所であると認識され始めた。自然流路の埋め土の黒色腐植土から大量の木製品が出土していたが、6 月 5 日には最下層から第一号木簡が出土した。黒色腐植土については大きく 3 層に分層し、上層から掘削して各層で遺構検出を行った。特に北区 1 南側で、土坑と見られる落ち込みや流路に直交する溝を検出したが、これが水流による自然の凹凸であるのか人工の土坑・溝であるのか判断できず、遺構と認定せず掘削してしまったものが少なからず存在する。7 月 24 日には自然流路を埋める黒色腐植土の成因を調べるため試料採取を行った。また、樹根列の西側に区画溝と想定されるものを検出し、区画溝の西には撹拌土が広がり水田の存在が想定されたが、畦畔等は検出できなかった。このためプラントオパールの分析を行った（第Ⅵ章 4）。

南 区 1　　暗渠敷設工事を 4 月 27 日～ 5 月 8 日に行い、表土掘削は 5 月 11 日～ 20 日に行った。

南区 1 は試掘調査で灰や柱根等が検出され、建物等が存在する可能性があった。5 月 26 日には編組の一部や烏帽子と見られる漆の塗膜片が出土した。5 月 28 日には灰の周辺から鉄鍋が出土した。6 月 12 日には調査区の東側から水田畦畔と推定される帯状のシルト層の高まりを検出した。6 月 19 日には鉄椀が出土した。灰の周囲からは柱根・杭・土坑・溝等の多数の遺構と漆器椀・茅針・下駄・櫛等の多様な木製品や青磁・珠洲焼などの陶磁器が少量出土した。各層には土坑や溝・柱根・杭列等の遺構が検出され、これらの遺構群から調査区は屋敷地ではないかと考えられた。また、鉄椀・鉄皿の出土から宗教的性格も検討した。南区 1 の南端では樹根列が直角に東へ曲がり、西側の溝も連続したことから屈曲部分が屋敷地の南端と判明した。7 月 15 日には北区 1 も含めて空中写真撮影を行った。

7 月 18 日には現地説明会を行い、雨天にもかかわらず地元住民を中心に 115 名の参加者が訪れた。

7 月 30 日には SK179 の底面から第二号木簡が出土した。水田面については、すべての畦畔を検出した後、水口の調査をした。その後、畦畔に直交する十字のベルトを設定し、脇にトレンチを掘削し下層の水田の有無を確認したが、検出できなかった。また、畦畔を人力で掘削し、盛土以外の畦畔構築材の有無を確認したが検出できなかった。8 月 4 日～ 7 日までは水田耕作土を重機で除去し、未調査がないことを確認した。

8 月 17 日に北区 1 の調査で実施した黒色腐植土の自然科学分析の結果が届いた。黒色腐植土には稲の頴を焼いたものが大量に含まれていたことから、自然流路の窪地を人工的に埋め整地した可能性が高まった。

8月21日には居住域を中心に2回目の空中写真撮影を行った。

農 道 下　農道部分は調査が終了した南区にう回路を造成した後、調査を行った。8月31日から南区1の一部を埋め戻し、う回路は9月8日に完成した。9月9・10日に表土除去を行った。足枠付田下駄や柱根が多数出土し、南区1よりも遺構・遺物の密度が濃いと感じた。調査前に神社があった直下には掘立柱建物となる柱根を多数検出した。9月25日にはSK399から楕円形の曲物に蓋板が付いた状態で出土した。10月16日には3回目の空中写真撮影を行い、県教委から調査の終了確認を得た。10月21日からは農道の復旧工事に入り、11月5日には作業をすべて終了し、国交省に調査現地を引き渡した。

2）2010年度

2010年は前年度の調査区周辺に確認した水田跡の調査である。当初、前年度の確認調査や本発掘調査成果から2枚の水田を想定しており、2枚目（Ⅹ層）から調査する予定であった。1枚目（Ⅷ層）は土層断面で畦畔が検出できなかったことから、平面的な調査は行っていない。

南 区 1　南区は2グリッドの排水路で分断されたので排水路の北側を南区1、南側を南区2と呼称した。4月14日～19日に暗渠敷設工事を行った。調査区には前年の調査終了後、防草のため厚さ60cmの盛土がされており、この盛土の撤去を4月26日から行った。続いて表土除去を5月6日～21日に行った。この表土除去によって3C・3D・4Cグリッド付近が極端に落ち込んでいることが判明した。また、この周辺には地震の噴砂脈が多数検出されたことから、地震による液状化の影響で地盤沈下したと推測した。南区1の基本層序を確認中に北西隅に畦畔を検出したが、その直下にも別の畦畔の高まりを検出したことから、3枚目の水田を認識した。5月11日から作業員で南区2の畦畔の検出作業を開始した。南区1も5月25日から畦畔の検出作業を行った。6月17日には南区全体の2枚目の水田面（Ⅹ層）の空中写真撮影を行った。6月19日には現地説明会を行った。前年に続き雨天のため、参加者は50名と少なかった。

6月22日には畦畔に直交する位置に十字のベルトを設定し、脇にトレンチを掘削して2枚目（Ⅹ層）の耕作土の厚さや3枚目（Ⅻ層）の畦畔の有無や耕作土の厚さを確認し、写真・図面等に記録した。畦畔を掘削し、畦畔盛土に粗朶などの混入物や杭等の構築物がないか確認したが見つからなかった。2枚目（Ⅹ層）の耕作土はベルトを残しながら0.4㎥の重機で除去し、3枚目の畦畔の検出作業を行った。

6月30日には4枚目（ⅩⅣ層）、7月2日には5枚目（ⅩⅥ層）の畦畔を西壁で検出し、畦畔がほぼ同じ位置にある4面（2～5枚目）の水田が重層することを確認した。当初想定した水田枚数を大きく超えることから今後の調査方法について、7月6日に県教委と協議し、耕作土や間層の除去に重機を使用するなど調査効率を高めることとなった。7月6日から3枚目（Ⅻ層）水田の畦畔検出作業を行った。7月16日に南区2、8月4日に南区1の3枚目（Ⅻ層）畦畔検出状況の写真撮影を行った。南区2は8月6日から、南区1は8月11日から4枚目（ⅩⅣ層）水田の畦畔検出作業に入った。8月27日には比較的残りの良い4枚目畦畔の検出状況を空中写真撮影した。4枚目畦畔の一部には粗朶を入れているものがあり、これをすべて検出し記録した。9月1日からは最も残りの良い5枚目（ⅩⅥ層）の畦畔検出作業を行った。9月16日には5枚目の畦畔検出状況を空中撮影した。5枚目の畦畔には上面に樹皮を敷いているものが1条あり、樹皮を除去すると畦畔中央に細杭が打たれていた。また、この畦畔上面から人形が出土したことから祭祀を行っていたことが判明した。この畦畔は、ほかの畦畔より幅があることから、道の役目をしていたと推測される。

9 月 17 日には工事用道路部分の表土を除去し、9 月 20 日から 2 枚目の水田畦畔の検出作業を行った。南区 2 では 1 条の畦畔が検出されたが、南区 1 では検出できなかった。9 月 24 日に検出状況の写真撮影を行った。工事用道路部分の 3 ～ 5 枚目の畦畔は断面で確認し記録し、下層については畦畔の構造が推定できることから平面的な調査は行わなかった。

10 月 12 日に全ての調査を終了し国交省に調査現地を引き渡した。

北 区 1　表土除去は 6 月 30 日～ 7 月 6 日に行った。2 枚目の水田を覆う砂層（Ⅸ層）は厚く堆積していたが、畦畔は平面的に検出できず、畦畔盛り上げに伴う畦畔脇の掘削痕が 2 条検出されたのみであった。また、3 枚目以下の畦畔も断面で検出できず、平面的な調査を行っても畦畔の検出は困難であるということから県教委の状況確認を得て、基本層序等必要な記録を取り、9 月 7 日に調査を終了した。

3）2011 年度

調査区は 2009 年に調査出来なかった屋敷地の一部（農道下 7・8HI グリッド）と 2010 年度に調査した水田域（10 グリッドまで）の北側で、13 グリッドの排水路までを北区 1、排水路から 19 グリッドの農道までを北区 2、農道から北側を北区 3 と呼称した。4 月 12 日から準備工を開始し、4 月 14 日～ 27 日まで 2009 年に盛られた防草用盛り土の除去作業を行った。

農 道 下　調査範囲は 100m^2 で、現地表面から 3m ほど掘削する予定であった。使用中の農道に近接することから安全確保のため、周囲に長さ 9m の矢板を 4 月 26・27 日に打設した。屋敷地は SR1–1 ～ 3 層に分層し調査を行った。東端で 2009 年度に検出していた屋敷地の区画溝 SD112 の延長と SR165 を検出した。また、掘立柱建物 SB336 の北東端の SB336–P8 と柱根を検出した。遺物は珠洲焼・青磁椀、漆器椀・櫛等多く出土した。5 月 23 日には黄色いワラが良好に残った草履が出土した。5 月 26 日には上層の 1・2 層の完掘写真を撮影した。6 月 13 日には第三号木簡、6 月 29 日には第四号木簡が出土した。7 月 5 日には下層の 3 層の完掘写真を撮影した。7 月 7 日には SR2–1 層の完掘写真を撮影し、調査を終了した。SR1–3 層の一部と SK853 の埋め土の一部については水洗を行い、籾殻・種子類・炭化米等を採取した。

北 区 1　表土除去は 4 月 28 日～ 5 月 13 日まで行った。2010 年度の調査範囲では畦畔の遺存状況は不良であったが、2011 年はわずかに畦畔が検出できた。5 月 25 日にⅩ層水田完掘写真撮影、6 月 14 日にⅫ層水田完掘写真撮影、7 月 6 日にⅩⅣ層水田完掘写真撮影、7 月 22 日にⅩⅥ層水田完掘写真撮影を行った。ⅩⅥ層については、畦畔は検出できなかったが杭を検出した。また、ⅩⅥ層は砂とシルトの互層となっており、撹拌された様子が確認できなかったことから、水田化されなかった可能性が高い。耕作土は 0.4㎥の重機で掘削し、作業効率を高めた。

北 区 2　調査は工事工程等の関係で 4 分割して行った。暗渠敷設工事を 4 月 19 日～ 28 日まで行い、先行引き渡しを求められていた南側 15 グリッドまでを 5 月 19 日～ 25 日に表土除去を行った。Ⅹ層では初めて畦畔と平行に掘削された SD848 を検出し、水路と考えられた。6 月 8 日にⅩ層水田の空中写真撮影、6 月 30 日にⅫ層水田の空中写真撮影、7 月 15 日にⅩⅣ層水田完掘写真撮影を行った。ⅩⅥ層は北区 1 と土層堆積状況が同一であった。このことからトレンチ調査を行ったが、畦畔を検出できず平面的な調査は行なっていない。7 月 20 日～ 8 月 3 日まで 16 ～ 18 グリッドの表土除去を行った。この間、7 月 28 日～ 30 日まで新潟・福島豪雨で調査区は冠水し、8 月 2 日まで排水作業を余儀なくされたが、壁面のわずかな崩壊程度で被害は済んだ。表土除去の過程で、調査区の北西側 18C グリッドでⅧ層段階の

広範囲な高さ 40cm ほどの高まりを検出した。人為的な盛土の可能性を考え、Ⅷ層の平面調査を行った。後に高まりは自然堆積と判明したが、この結果 15・16C グリッドで初めてⅧ層の畦畔状の高まりを検出した。8 月 9 日にⅧ層の完掘写真撮影を行った。Ⅹ層では SD848 の延長と、Ⅷ層で検出した高まりの直下に SD870 を検出した。SD870 の岸には杭が連続して打設されていたが、杭以外の遺物は出土しなかった。8 月 25 日にⅩ層の空中写真撮影を行った。9 月 10 日には現地説明会を行い、天候にも恵まれ前年度より若干増えて 71 名の参加者があった。9 月 15 日にⅫ層の空中写真撮影、10 月 12 日にⅩⅣ層完掘写真を撮影した。

調査区の東側の工事用道路下と西側に地元農家のために残していた進入路下についても、遺構が良好に残存していたことから調査を行い、11 月 30 日に終了した。

北 区 3　北区 2 の SD870 の状況から、農道から北にも延伸すると考えられた。調査区外に範囲を確認する為のトレンチを 3 か所入れたところ、溝の延伸と杭の存在を確認した。県教委・国交省と協議を行い、拡張して調査することとなった。11 月 7 日～ 9 日に表土除去を行った。SD870 はかなり蛇行し、北区 2 より細い杭を連続して検出した。また、SD870 の東側で柱根を複数検出したことからさらに拡張して調査を行い、柱根 5 本、細杭列、炭化物分布域等を検出した。柱根の周囲からはほかの水田域とは異なり、鋤・下駄・漆器・砥石等の生活道具が出土した。調査は 12 月 13 日に終了し、県教委の終了確認を得た。その後埋め戻し等を行い、国交省に 12 月 27 日に現地を引き渡し、3 年に及ぶ調査を完了した。

C　整　理　作　業

遺物の洗浄・分類・註記作業は現地調査と並行して行った。遺物の大半は木製品であったことから洗浄・分類後に集計作業を行った。現地調査終了後は（株）ノガミ整理所で本格的な整理作業を行った。図面の整理、写真整理、図版作成、遺物の接合・実測・トレース作業、遺物の写真撮影、原稿執筆、各種台帳作成等を行った。2012 年 3 月は全体の編集作業を行った。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地 理 的 環 境

小坂居付遺跡の位置する越後平野は、我が国でも第三紀以降、特に第四紀の地殻変動が最も活発なところとして知られており、地形の主な配列はこの運動によって規定されている。越後平野周辺の地形は褶曲運動による北北東－南南西に雁行配列する山地・丘陵列が最も顕著であり、新第三紀以降の向斜構造の中を信濃川が流れている。それに対して、阿賀野川・胎内川・荒川などの河川はそれらの主方向と直行するように先行谷を形成しつつ越後平野に流入している。このような褶曲運動は現在も継続しており、沈降速度は平野中央部に位置する白根付近で４～5mm/y.、東縁及び西縁の丘陵に近い平野部では１～2mm/y. と見積もられている。そのため白根付近の完新統の厚さは、約 140m にも達すると言われている。越後平野はこのような褶曲運動による凹地を信濃川・阿賀野川・胎内川・荒川などの河川が埋積して作り上げたものである。

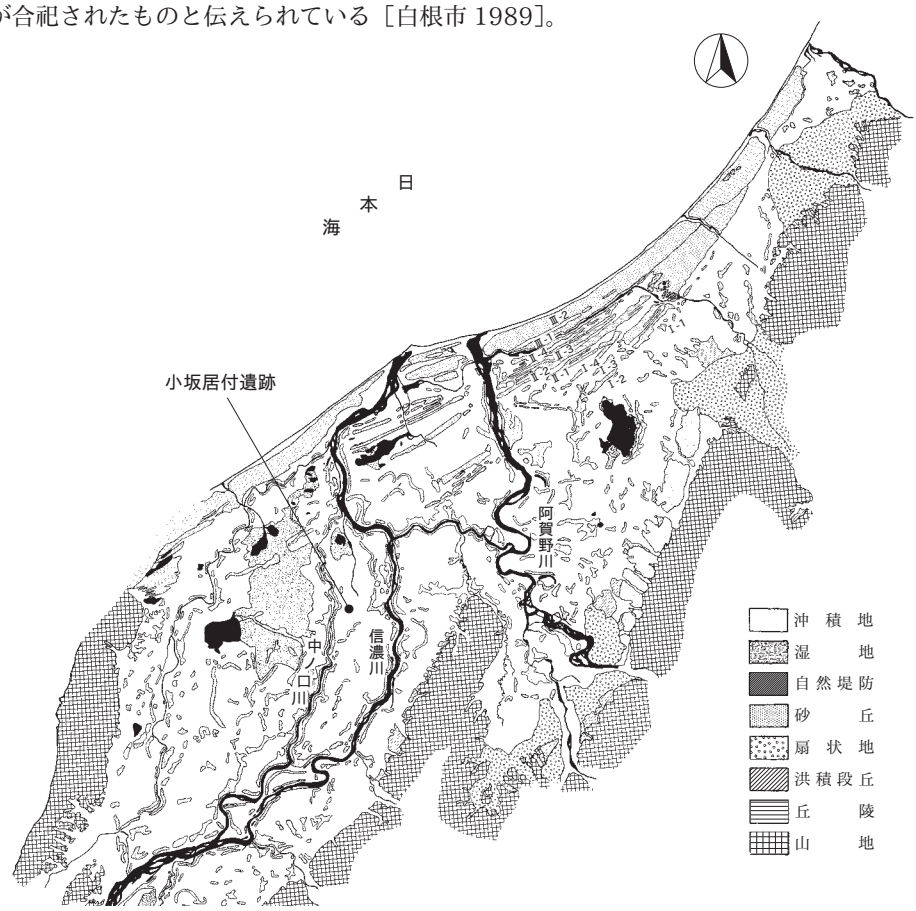
越後平野は濃尾平野とともに日本最大の沖積地の一つであり、面積は約 2,000km^2 に達する。越後平野の地形的な特徴の一つは、海岸部に砂丘･砂堆が著しく発達していることである。もう一つは関東平野･濃尾平野などの太平洋側の平野と比べて、更新世に形成された段丘地形の発達が悪く、平野の大半が完新世に形成された標高の低い平坦な沖積平野からなっていることである（第６図）。

新潟砂丘は日本最大級の規模をもち、海岸線に沿って角田山麓から三面川河口まで約 70km に達する。場所によっては海岸線から内陸へ 10km に及ぶ砂丘・砂堆列を構成しており、北東端と南西端ではより新しい砂丘が古い砂丘を覆い、一列の砂丘列となっている。一般に内陸部の砂丘・砂堆ほど連続性が悪いが、これについては侵食されてしまったか、あるいは沈降運動によって沖積面下に沈んでいるためと考えられている。新潟古砂丘グループは、砂丘表面の腐植層、砂丘砂の風化度、及び地形的特徴から新砂丘Ⅰ（Ⅰ－１・Ⅰ－２・Ⅰ－３・Ⅰ－４）、新砂丘Ⅱ（Ⅱ－１・Ⅱ－２・Ⅱ－３・Ⅱ－４）、新砂丘Ⅲ（Ⅲ－１・Ⅲ－２）の３つの砂丘列群に区分した。そして、それらの形成時期を主に遺跡の立地、遺物の分布から、それぞれ縄文時代中期以前（新砂丘Ⅰ－１は縄文時代中期末葉）、古墳時代以前、室町時代以降とした［新潟古砂丘グループ 1974］。しかし、その後の資料の増加により砂丘の形成をさらに古く捉える傾向が強まってきている。大平は、ボーリング資料の解析、珪藻分析、放射性炭素年代測定の結果を基に検討し、砂丘列の基礎となる浜堤列の形成期として新砂丘Ⅰ－１は縄文時代前期以前、新砂丘Ⅰ－２・Ⅰ－３・Ⅰ－４は縄文時代前期以降中期以前、新砂丘Ⅱは縄文時代中期以降晩期以前、新砂丘Ⅲは縄文時代晩期以降の形成であると推定している［大平 1992］。

砂丘・砂堆列の背後には、標高 5m 以下の沖積低地が広がり、信濃川や阿賀野川のほか、中小河川の旧流路が形成した自然堤防や後背湿地が数多く見られる。そこには、かつて鎧潟（よろいがた）・白蓮潟（しらぼすがた）・鳥屋野潟（とやのがた）・紫雲寺潟（うんじがた）（塩津潟）といった潟湖が多数形成されていた。正徳～明和年間の絵図には、多数の潟湖やそれを結ぶ河川流路が描かれている。入手できる最古の明治 44（1911）年測量の地形図にも多数の湖沼が描かれており、さらに潟をもつ地名が平野全面に渡って分布している。1947 年に米軍が撮影した航空写真（図版 91）でも、きわめて新しい時代まで多数の湖沼が存在したことが分かる。また、信濃川の河川勾配

は平野の始まる長岡から下流にかけて僅か 3,000 分の 1 であり、傾斜がきわめて緩やかである。さらに、標高 5m 線は信濃川河口から直線距離で 28km も内陸になり、庄内平野の最上川が河口から 9km、富山平野が海岸線から 7.5km などに比べれば、その低平性は著しい。この平坦な地形は、平野の形成において信濃川などが頻繁に大きく蛇行し、河道変遷を繰り返してきたことを意味している。以上列挙したように、越後平野の低湿性はほかの平野に見られない特徴であり、沖積低地については潟湖が土砂の堆積により陸化したとしても、河川の氾濫、流路変遷により湖沼化することが再三繰り返されたことによると思われる。実際、潟湖周辺の土地は古くから水害の多発地帯であり、2011 年の集中豪雨による被害は記憶に新しいところである。そのため、これらの潟湖では近世以降、排水工事と干拓が大規模に行なわれてきた。白根周辺も開発が進められてきたが、1818 年の新川掘削による鎧潟・田潟（たがた）・大潟（おおがた）の悪水抜きや 1922 年の大河津分水の通水、さらには、昭和に入ってからの土地区画整備がなされるまでは、排水不良の低湿地帯だった。

本遺跡は中ノ口川の右岸、南北に伸びる集落と現行の国道 8 号が乗る自然堤防の東側に位置する。遺跡周辺の現況は水田と畑が混在しており、自然堤防の外縁部に位置すると考えられる。これは国土地理院が 1988（昭和 63）年に刊行した『土地条件図』において、遺跡が「自然堤防」と「海岸平野・三角州」にまたがって位置していることからも読み取ることができる。標高は約 1.5m ～ 0m と比高差を持つが、旧保坂神社跡地ほか一部には客土による盛土もみられ、これを除くと概ね 1m 前後の範囲が自然堤防部分、0m 前後の範囲が後背地であったと考えられる。なお、調査区内に位置していた保坂神社の社殿はバイパス建設に先立ち、同じ小坂地内へと移転した。今は諏訪社として建御名方命が祭られているが、神明宮と稲荷社が合祀されたものと伝えられている［白根市 1989］。



第 6 図　越後平野の地形区分図（［岡本 1986］を一部改変して使用）

2　歴 史 的 環 境

A　文献から見た遺跡の周辺

中世社会は、荘園と国衙領（公領）を基礎とする土地・人民支配体系で、荘園・公領制を骨格としている。その頂点に位置したのは当初、皇族・公家・有力寺社でそこに新興の在地領主が荘園・公領制に有機的に関連しつつ構造的に組み込まれていた。これは平安時代末期の源平争乱で平氏を滅ぼした後、文治元（1185）年に源頼朝が各地に守護地頭を設置したことに始まる。越後では下越を中心に勢力をはっていた平家方の城氏没落後、伊豆や関東の武士が地頭となり、それ以前に成立していた荘園経営を掌握することで確立する。

遺跡が所在する旧白根市周辺には、青海荘・弥彦荘、公領である金津保が存在した。白根市史によると青海荘は永正年間（1504 ～ 1521 年）頃の『蒲原郡段銭帳』の記述では井栗条・坂田条・下条・河滑川条・蓑口条・山ノ内条・小吉之条にわかれており、現在ある地名から加茂市を中心に中ノ口川右岸、旧白根市蓑口に北限を置いている。公領である金津保は建武 3（1336）年の「羽黒義成軍忠状写」にある「引籠于金津保新津城」が初見である。しかし、旧白根市域は地名が中世史料に見出すことができないことから金津保には含まれないものと推測する。弥彦荘については『蒲原郡段銭帳』の記述から、中ノ口川の左岸以西であったとする［白根市 1989］。しかし、時が下り享和 3（1803）年の『新発田藩越後国蒲原郡村仮名附帳』では、遺跡の位置する「小坂」の字名を含む旧白根市域の多くが弥彦荘に組み入れられており、相違が認められる。このように、遺跡周辺は各荘園・公領の境界と推定されている範囲に近接しており、その所属を明確にし難い地域といえる。

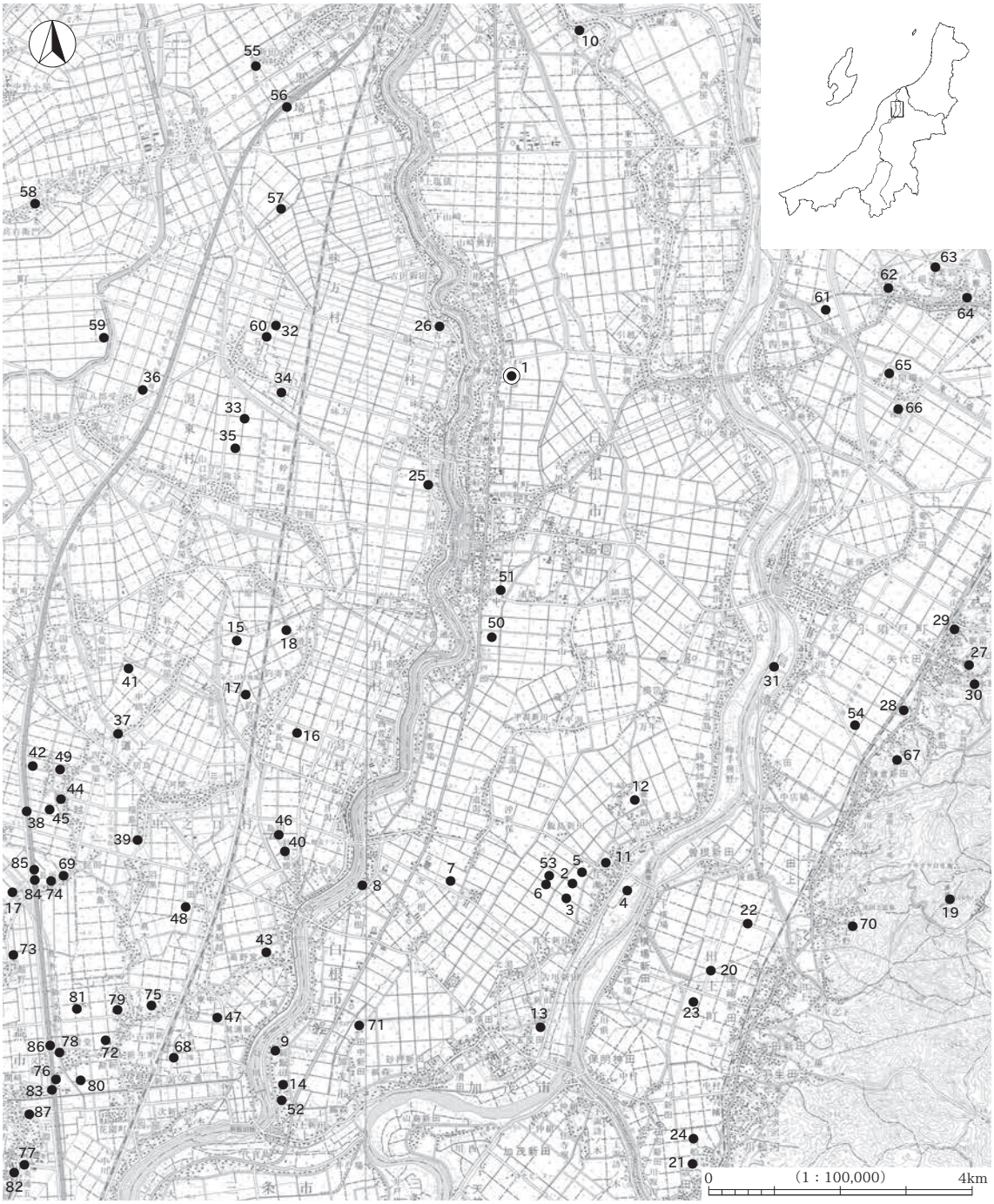
青海荘の初見は、『吾妻鏡』の文治 2（1186）年 3 月 12 日条で、ここでは高松院領とある。高松院は鳥羽天皇皇女で、二条天皇中宮となった妹子内親王である。北条執権政治期にあたる鎌倉時代中期、文永 8（1271）年の「関東引付勘文」では、青海荘曽根新保の地頭として桓武平氏千葉氏一族の下総泰俊の名がある。南北朝争乱期、建武 3（1336）年の「足利尊氏御教書与」では、青海荘上条村を近衛局が領していることがわかる。室町時代には、幕府は守護を配置し領国支配をおこなわせた。越後は上杉氏が守護職をつとめ、守護代長尾氏とともに支配を拡大する。文明 9（1477）年の『結番日記』では青海荘が吉良義信の所領で上杉氏が守護請をつとめていたことがわかる。さらに時代が下り、永正年間に至ると先述の『蒲原郡段銭帳』から青海荘が上杉氏の所領となったことがわかる。ここで守護代をつとめていた長尾氏が領国支配を掌握し、後の戦国大名として成長することとなる。

B　周 辺 の 遺 跡

新潟市と合併（平成 17 年 3 月）する以前の旧白根市域に所在する遺跡は、平成 16 年 4 月 1 日時点で 18 が知られるばかりであった。この数は、新市として合併した 13 市町村のなかでも潟東村と並び 4 番目に少ない。これは、市域の大部分が近代の土地改良事業以前は低湿地だったこともあり、絶対的な遺跡立地数の少なさに起因する部分が大きいと考えられる。これに加え、信濃川・中ノ口川の度重なる氾濫による土砂の堆積と地盤沈下により、遺跡が現在の地表面から大きく離れ、発見されがたい現況にあるだろうこともその一因としてあげられる。これは本遺跡の南西約 1km、中ノ口川の対岸に位置する味方排水機場遺跡において地下約 19m の地点から縄文時代中期後葉～後期前葉とされる土器片が採集され、そこ

が当時の地表面であったと推測された事例からもうかがうことができる［味方村 2000］。このような状況下にあり、旧市域における本発掘調査は県営圃場整備に先立っておこなわれた馬場屋敷遺跡ほか４遺跡と本遺跡と同じ一般国道８号白根バイパス建設に先立っておこなわれた浦廻遺跡の２例を数えるのみである。しかし、調査数は少ないものの、共に低地に立地する中世遺跡の調査事例として貴重な成果をあげている。

遺跡の時代は古代までさかのぼるものが１遺跡あるのみで、これ以外は中世以降となる。中世の遺跡では城館跡が４、集落跡が１、石塔が３あるほかはいずれも遺物包含地として登録されているものである。



国土地理院1:50,000原図「新津」平成9年1月発行　「弥彦」平成4年10月発行

第７図　周辺の中世遺跡

以下、この旧白根市における中世遺跡の様相について概観する。

城館は平野部に位置するもののみで、庄瀬館跡（11）、牛崎館跡（12）、兎館跡（13）、新飯田館跡（14）がある。いずれも小領主の館と考えられており、庄瀬館跡は天正５（1577）年の『三条同名同心家風給分御帳』に「井口分、志やう瀬村」とあり、三条城将山吉氏の家臣井口氏の館とされている。これ以外の城館については諸説［白根市 1989］あるものの、その詳細は明らかでない。

馬場屋敷遺跡（3）は 1983（昭和 58）年に調査がおこなわれた。本遺跡から南へ約 8km、信濃川左岸

№.	遺跡名	立地	時期	種類
1	小坂居付遺跡	沖積地	鎌倉～室町	屋敷地・生産遺跡
2	若宮様遺跡	自然堤防	室町	集落
3	馬場屋敷遺跡	自然堤防	鎌倉～室町	集落
4	元屋敷遺跡	信濃川河川敷	中世	製鉄関連
5	興野遺跡	自然堤防	室町	集落
6	戸石墓	沖積地	中世？	遺物包含地
7	嵐潟遺跡	沖積地	鎌倉	遺物包含地
8	永安寺の五輪塔群	境内	室町	石塔
9	等雲寺の五輪塔	境内	室町	石塔
10	林葉寺の五輪塔	境内	中世	石塔
11	庄瀬館跡	自然堤防	戦国	城館跡
12	牛崎館跡	自然堤防	戦国	城館跡
13	兎館跡	自然堤防	戦国	城館跡
14	新飯田遺跡	自然堤防	戦国	城館跡
15	兵蔵遺跡	微高地	弥生・中世	遺物包含地
16	本行寺遺跡	自然堤防	室町	遺物包含地
17	長所館跡	自然堤防	中世（室町～戦国）	館（館城）
18	長田遺跡	微高地	鎌倉・室町	遺物包含地
19	護摩堂城跡	山頂	南北朝・室町・戦国	城館跡
20	田上館跡	沖積地	室町	城館跡
21	金屋鉄滓出土地	台地先端	中世	製鉄関連
22	糠吐遺跡	沖積地	中世	遺物包含地
23	上谷内遺跡	沖積地	鎌倉	遺物包含地
24	大坪遺跡	沖積地	奈良・平安・鎌倉	遺物包含地
25	江向遺跡	沖積地	鎌倉	遺物包含地
26	吉江館跡（未登録）	自然堤防	室町	城館跡
27	了専寺跡	丘陵	室町	社寺跡
28	五本田館跡	独立峯（丘）	室町	城館跡
29	三沢遺跡	台地上	室町	製鉄関連
30	西善寺石仏	丘陵、稜線部	南北朝	石造物
31	横川浜外堤外地	信濃川河床	縄文・平安・鎌倉・南北朝・室町	遺物包含地
32	ブギリ遺跡	沖積微高地	平安・室町	遺物包含地
33	与平潟遺跡	沖積微高地	平安・室町	遺物包含地
34	芋畑遺跡	沖積微高地	室町	遺物包含地
35	三條田遺跡	沖積微高地	平安・室町	遺物包含地
36	二丁下遺跡	沖積微高地	室町	遺物包含地
37	万坊江遺跡	自然堤防	平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国	遺物包含地
38	茶院遺跡	微高地	平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国・江戸	遺物包含地
39	上向遺跡	自然堤防	平安・鎌倉	遺物包含地
40	梅田遺跡	自然堤防	平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国・江戸	遺物包含地
41	荒田遺跡	微高地	平安・鎌倉	遺物包含地
42	高六遺跡	微高地	鎌倉	遺物包含地
43	円明寺跡	自然堤防	室町	社寺跡
44	宇賀古志神社	自然堤防	室町	墳墓
45	茶院Ｂ遺跡	自然堤防	南北朝・室町	遺物包含地（古銭）
46	島田Ｂ遺跡	自然堤防	鎌倉	遺物包含地
47	高野宮館跡	自然堤防	室町	城館跡
48	東船越館跡	自然堤防	室町	城館跡
49	打越館跡	自然堤防	室町	城館跡
50	浦廻遺跡	沖積地	鎌倉	遺物包含地
51	前遺跡	自然堤防	鎌倉	集落跡
52	古町遺跡	自然堤防	鎌倉	集落跡
53	下田保遺跡	沖積地	鎌倉	遺物包含地
54	大沢谷内遺跡	沖積地	中世	集落
55	木場城跡	自然堤防	中世	城館跡
56	釈迦堂遺跡	自然堤防	平安・南北朝・室町	遺物包含地
57	巳ノ明遺跡	（水田）	南北朝・室町	遺物包含地
58	西川大関館跡	自然堤防	中世	城館跡
59	長潟遺跡	沖積地	中世？	遺物包含地
60	六十歩下遺跡	沖積地	平安・室町	遺物包含地
61	川根遺跡	低湿地	平安・鎌倉・南北朝・室町	遺物包含地
62	小戸下組遺跡	旧自然堤防・低湿地	平安・鎌倉・南北朝・室町	遺物包含地
63	浄楽遺跡	自然堤防	室町	遺物包含地
64	諏訪神社石仏	―――	中世	石造物
65	下梅ノ木遺跡	低湿地	平安・鎌倉・南北朝・室町	集落跡
66	曽根遺跡	旧自然堤防	平安・鎌倉	遺物包含地
67	西紕屋山遺跡	丘陵	奈良・室町	城館跡
68	上小吉遺跡	沖積地	中世	遺物包含地
69	長所天神遺跡	平地	平安・鎌倉	遺物包含地
70	山田古銭出土地	山腹	鎌倉	遺物包含地（古銭）
71	西屋敷遺跡	―――	中世	遺物包含地
72	諏訪ノ木遺跡	平地	平安・鎌倉	遺物包含地
73	桑橋遺跡	平地	平安・鎌倉	遺物包含地
74	浦田乙遺跡	平地	平安・鎌倉・南北朝・室町	遺物包含地（集落跡）
75	境浦遺跡	平地	平安・鎌倉・南北朝・室町	遺物包含地
76	ヤケ屋敷遺跡	平地	平安・中世	遺物包含地
77	大野遺跡	平地	鎌倉・南北朝・室町	遺物包含地
78	下郷屋遺跡	平地	鎌倉・南北朝・室町	遺物包含地
79	大船渡遺跡	平地	室町	遺物包含地
80	囲内遺跡	平地	南北朝・室町	遺物包含地
81	善性寺跡遺跡	平地	室町	社寺跡
82	万福寺址	平地	室町	社寺跡
83	君ノ塚（キイミ塚）遺跡	平地	室町	塚
84	僕田遺跡	平地	室町	墳墓
85	長所遺跡	平地	室町	遺物包含地
86	アヤメ（菖蒲）塚	平地	室町	墳墓
87	杣木館跡	自然堤防	中世	館（館城）

第１表　周辺の中世遺跡

の自然堤防上に位置する。調査は、15 世紀～ 16 世紀前半を主体とする上層とこれから約 1.5m の間層[1)]を挟んで存在する 13 世紀後半～ 14 世紀前半を主体とする下層でおこなわれた。

上層の調査は計 2 面でおこなわれ、土坑 5 基のほか溝やピットが検出された。遺物は珠洲焼、越前焼のほかでは青花の皿 14 枚の一括出土がある。

下層の調査では、竪穴の可能性のある建物 1 軒、溝 2 条、特殊遺構 5 基などが検出された。遺物は青磁、珠洲焼、瀬戸焼･美濃焼、土師質土器のほか鉄製品、石製品、古銭などが出土した。さらにこれらに加え、52 点の木簡をはじめとする 2000 点を超える木製品の出土が特筆される。

木簡は、鑑札と考えられる許可証木札と呪符に大別される。木札には年号・花押が書かれ、焼印が押されている。その内容は「よしへのかやのふた」、「古川のうらの々かやかるへし」などとあることから、特定の場所の萱を刈ることを許可したものと考えられる。ここに書かれた年号には、「正応 2（1289）年」から「延慶 3（1310）年」のものがある。呪符には、「急々如律令」や無病息災を祈る「蘇民将来子孫」などがある。

これらの木簡の内容から報告者は、遺跡を「呪いを行ない、各所の権利を有し、且つこれを分配した人々が居た」場所と考えた［川上・遠藤 1983］ほか、「入会地での茅刈りに際して、陰陽師の仲介で呪的祭祀がなされた」場所との見解もある［河野 2001］。また、これに関連して木製品では祭祀・呪術に用いられたと考えられる人形、陽物形、舟形、刀形なども出土している。木製品では、このほかに箸、曲物、下駄、鍬などの日常生活に用いられたと思われるものも多く出土している。なお、出土遺物は平成 5 年に白根市指定文化財に指定された後、現在は新潟市指定有形文化財考古資料に引き継がれている。

浦廻遺跡（50）は、2002（平成 14）年に調査がおこなわれた。本遺跡から南へ約 4km、中ノ口川右岸の低湿地に位置する。遺構は土坑 3 基、畝状遺構 2 区画に加えて 86 歩の足跡群が検出された。遺物は土師質土器 1 点に対して、木製品は 2081 点出土しており、なかでも卒塔婆・呪符を含む 108 点の木簡と人骨の出土が遺跡を特徴付ける。木簡には「南無阿弥陀佛」、「南無大日如来」と書かれた卒塔婆や「急々如律令」と書かれた呪符、「妙法蓮華経」と書かれた柿経などがあり、葬送・供養儀礼に関連するものとされている。また､その中の 1 点には「元應 2（1320）年」と鎌倉時代末期の年号が記されたものもある。人骨片は最小では 5 体分が出土し、人為的な切り傷や犬の噛み痕と考えられる傷を残すものがある。このような状況から、遺跡の性格について報告者は、水辺における葬送・供養に関連した遺跡とした。さらに石造物が出土しないこと、周辺に城館が存在しないことから、ここに葬られた対象を武士以外の村落民衆とし、村の祭祀場、もしくは祭祀具の廃棄場であったとしている［本間ほか 2003］。

こうした成果は県内では初見の「遺体の遺棄に関わる遺跡」［戸根 2004］の調査として評価される一方で、遺跡の性格や位置付けについては様々な見解［戸根 2004］、［前嶋 2005］、［水澤 2007］が出されており、多くの問題提起をおこなった遺跡といえる。なお、出土遺物については 2004（平成 16）年に県指定考古資料の指定を受けている。

1）報告書では、下層は洪水堆積で一夜にして 1.5m 埋没したとされるが、現水田面からは、確かに 1.5m 下にあるが、上層が間にあることから、土層断面図から読み取れる上層との間層は厚さ 0.7m 程度である。再検証が待たれる。

C 「よしえ」と吉江館（城）について

ここまでは、旧白根市域を中心とした様相を概観してきたが、本遺跡に関わりの深い旧味方村にある吉江（よしえ）地区についても触れておきたい。

「吉江」の初見は前述の馬場屋敷遺跡から出土した木簡で確認された地名「よしへ」にみることができ、本遺跡から約 1.2km 北西の中ノ口川対岸の吉江地区に比定されている［川上ほか 1983］。吉江地区で確認されている遺跡としては室町時代とされる吉江館が知られており、以前は県遺跡台帳にも記載されていた。しかし、現在ではその所在を失い、県遺跡台帳のほか『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』にも記載がない。

吉江城としては宝暦 6（1756）年の『越後名寄』とこの後に刊行された『越後野誌』、『越後古城誌』、『温古の栞』などにも記載がある。これらによると城主の吉江氏は上杉氏の重臣で、城は慶長 3 年（1598 年）、上杉景勝の会津移封に従って破却されるまで存続したとある。吉江氏については『太平記』に名がみえる吉江小四郎を祖とし、観應 2（1351）年に高師泰を武庫川堤で討つとある。このように文書に記載がある一方で、吉江氏直系の末裔に伝わる家系図では吉江小四郎の名は無く、その祖を「延徳 3（1491）年北蒲原郡奥山荘の三浦和田氏の臣、中条義周が長尾能景から吉江の荘を領せられ、吉江氏を名乗り、その子中務丞景宗が軍功により長尾為景から蒲原の地に千貫文の地を賜った」［味方村 2000］とあり、両者で内容が大きく異なっている。いずれにしても、その内容については文書の資料批判が必要であり、失われた吉江館の所在と吉江周辺の開発の歴史は、文書とともに発掘調査で得られた成果を基に今後議論されるものと考える。

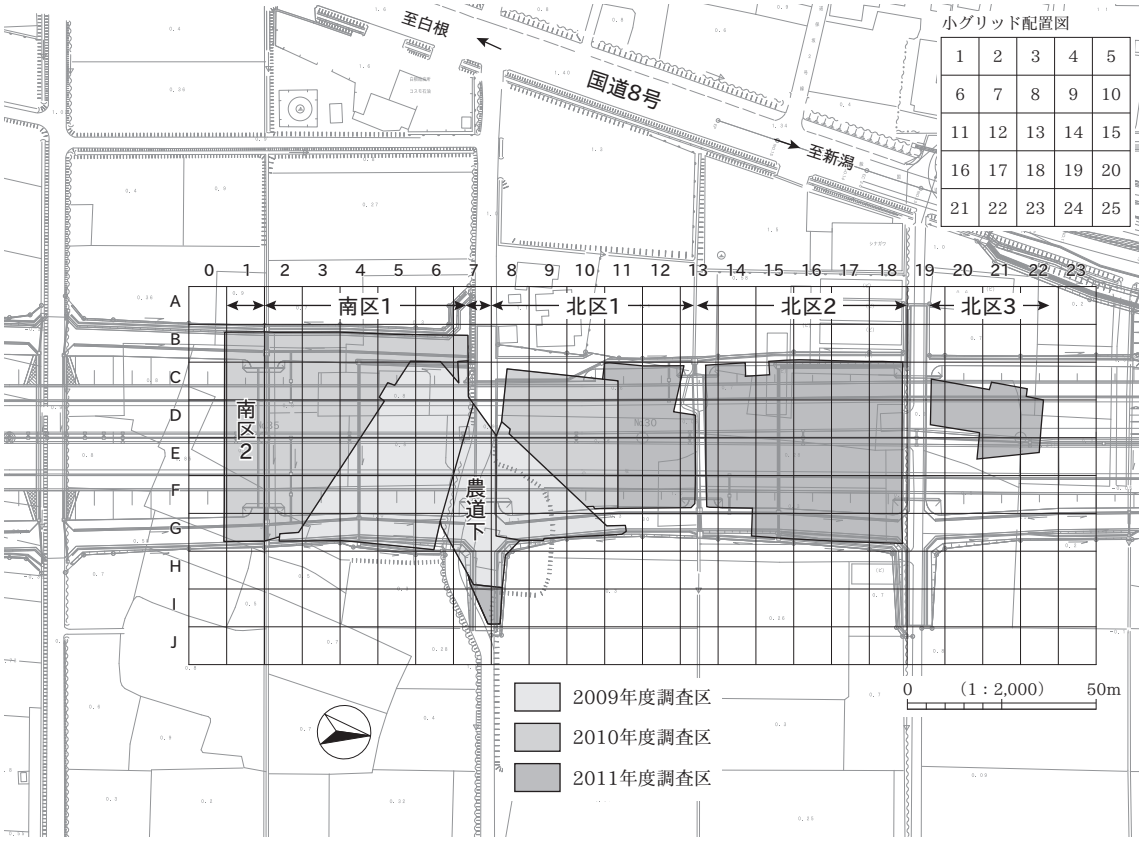
第Ⅲ章　遺 跡 の 概 要

1　グリッドの設定（第８図）

白根バイパスでは、2002 年度に浦廻遺跡［本間ほか 2003］の発掘調査を行っていることから、グリッドの設定は、同様にバイパスのセンター杭を基準とすることとした。

グリッドの長軸は白根バイパスのセンター杭 STA.No.30 と STA.No.35 を直線で結び、STA.No.35 を基準にして 10m ごとの方眼を組み大グリッドとした。その結果グリッドの長軸は、真北から 0 度 19 分 09 秒西偏している。

大グリッドは 10m 方眼を 1 単位とし、南西側から長軸を算用数字の 0 ～ 23、短軸をアルファベットの A ～ J とし、両者の組み合わせで「7F」のように表した。小グリッドは大グリッドを更に 2m 方眼に分け、南西方向から 1 ～ 25 の算用数字を用い「7F15」のように表した（第 8 図）。なお、国家座標値（新座標）は STA.No.30（12E1 グリッド） X：198288.388、Y：45859.804 と STA.No.35（2E1 グリッド） X：198189.486、Y：45874.579 である。



第８図　グリッド設定図

2 基 本 層 序（第９図）

本遺跡は 2009 ～ 2011 年度の３か年で、中世の屋敷地と周辺に広がる水田跡を調査した。水田については、2009 年度は平面的にはⅩ層の１面しか検出できなかった。2010 年度はⅩ・Ⅻ・ⅩⅣ・ⅩⅥ層の４面、2011 年度はⅧ・Ⅹ・Ⅻ・ⅩⅣ層の４面の調査を行っている。

屋敷地は古い自然流路（SR1）の窪地を埋め整地しており、複数回の浸水・洪水等にもあっていると考えられる。屋敷地には２条の柳の並木が植栽されていた。屋敷地と周辺の水田の間には溝が掘られ、区画とされた。屋敷地と水田跡の基本層序は表土からⅧ層までが共通するが、屋敷地の範囲は上記の理由から全く違う様相を示す。このことから、屋敷地と水田域と分けて説明を行う。

水田面と屋敷地の対比はⅩ層（２枚目水田耕作土）と SR1-1･2 層が同時期と考えられる。SR1-3 層とⅫ･ⅩⅣ層（３・４枚目水田）が同時期と考えられる。屋敷地造成前の旧流路 SR2-1 層とⅩⅥ層（５枚目水田）が同時期と考えられる。

A 水 田 域

検出した水田５面はすべて中世の水田である。

盛土：2009 年の冬期に防草のために盛られたサンドマットである。

Ⅰ層：（現表土）：にぶい黄褐色土　黄褐色シルト・暗褐色土等のブロックが混合する。しまり粘性共になし。現代の水田耕作土・畑の耕作土・神社跡地の盛土・農道路盤等である。基本的には盛土である。

Ⅱ層：黄褐色シルト　暗灰色シルトブロックを混合する。酸化が著しく、基本的はに盛土である。しまりはあるが、粘性は弱い。

Ⅲ層：褐色粘質土　１～ 3mm ほどの炭化物を少量含む。旧表土と見られ、出土した磁器から近・現代である。しまり粘性共に強い。南区では旧水田の耕作土または床土となっており酸化マンガンが沈殿する。

Ⅳ層：黄褐色シルト　Ⅱ層と比べ細かい粒子のシルトである。全体に酸化が著しい。盛土である。しまりは強いが、粘性は強い。

Ⅴ層：褐灰色粘質土　１～ 3mm ほどの炭化粒をごくわずかに含む。上半分はシルト質、下半分は粘質土である。近世以降の旧水田耕作土の可能性が高い。しまり、粘性共にある。

Ⅵ層：褐灰色粘質土　黒色腐植層（厚さ１～ 2mm）が数枚介在する。ラミナ堆積が認められる。近世磁器（85-1）が出土していることから近世以降の堆積と考えられる。しまり、粘性共に非常に強い。

Ⅶ層：黒褐色腐植土　いわゆるガツボ層と言っている植物腐植土層である。10 ～ 20 枚ほどのラミナ堆積が認められる。ラミナは２～ 5mm ほどの未分解腐植層と粘性土の互層である。各ラミナは水平堆積でなく細かく波打つ。上半分は茶色が強く、下半分は黒色が強い。しまり、粘性共に強い。

このⅧ層は白根バイパスの試掘調査（第２図）でも広範囲に検出されることから、一時周辺は潟湖等の滞水域となっていたと考えられる。調査対象となる中世の遺跡はこのⅦ層から下で、検出時の鍵層となっている。層の中間に噴砂が水平に広がる部分が検出されたことから、このときの地震によって遺跡消滅後地盤が部分的に沈下したと考えられる。この噴砂の上下位部分については ^{14}C 年代測定を行っており、上は 15 世紀中葉～後半、下は 13 世紀末～ 14 世紀末頃という数値が得られている（第Ⅵ章６参照）。この結果から地震については、14 世紀末～ 15 世紀中葉頃が想定される。このころの文献に残る越後の地震

の記事は、永仁元（1293）年４月13日に起こった「諸国大地震、魚沼郡山岳崩れ、死者多数という」もの、正平16（1361）年６月20日「頸城郡大地震」、応永９（1402）年「この年、越後国川々大洪水、冬地震」という３つがあり、いずれも『北蒲原郡史』に載るものである［南2002］。出土した遺物の年代観も勘案すると応永９年の地震が最も可能性が高いと考えている。

Ⅷ層：灰色シルト　黒色粘質土の小ブロックを少量含む。１～2mmほどの黒色粒（炭化粒）を1%以下含む。しまり、粘性共にある。北区では、やや砂質となる。17・18Cグリッドで高さ40cmほどの広範囲な高まりを検出したが、ラミナ堆積が認められたことから自然堆積であると判明した。この高まりはSD870の上部に限る。Ⅷ層は屋敷地の上にも堆積していることから、屋敷が消滅した後周辺は水田に改変されたと考えられる。屋敷地の北区１東壁では掘り込みを持つ柱根が検出されている（第９図⑬）。撹拌土が確認できることから水田と考え１枚目水田耕作土としていたが、直上が厚い腐植土で断面観察から畦畔の遺存状況が悪いことから、2009・2010年度は平面的な調査は行っていない。2011年度の調査で初めて15・16Cグリッドで畦畔状の高まりを検出した。

^{14}C年代測定を行っているが、12世紀中葉～13世紀初頭と５枚目の水田より古い結果が出ており、層順と不整合である。また、遺物の年代とも齟齬が生じている。

Ⅸ層：褐灰色砂　下面に流木や腐植土を少量含む。しまり、粘性共にない。洪水によって運ばれた砂層である。この砂で覆われたことで畦畔が良好に保護された。屋敷地の東端では屋敷地の盛土であるSR1-1層をわずかに覆うことを確認した。屋敷地全体を洪水砂が覆ったが屋敷地の範囲は取り除いたか、屋敷地は微高地状であったため洪水砂が全体には及ばなかったかのいずれかであろう。

Ⅹ層：暗緑灰色シルト　２枚目水田耕作土である。細かな植物遺体（茎）が少量混入する。φ２～3cmの硬質の黄灰色の偽礫を少量含む。しまり、粘性共にある。屋敷地のSR1-1・２層上面と同時期である。

Ⅺ層：暗緑灰色砂　細砂が互層をなし、木片を少量含む。しまり、粘性共になし。洪水堆積層である。場所により層厚が異なり堆積しない場所も存在する。

Ⅻ層：暗オリーブ灰色シルト　３枚目水田耕作土である。φ１～4cmの偽礫を多く含む。下部は黒色腐植土がラミナ状に入る。しまり、粘性共にある。北区３の東側（第９図⑧）では上面に炭化物が入り、木製品が他の水田耕作土より多く出土した。

ⅩⅢ層：暗オリーブ灰色砂　洪水堆積層である。しまり、粘性共になし。ⅩⅣ層との境にφ３～5cmのやや硬質の偽礫が多く含まれる。場所により層厚が異なり堆積しない場所も存在する。

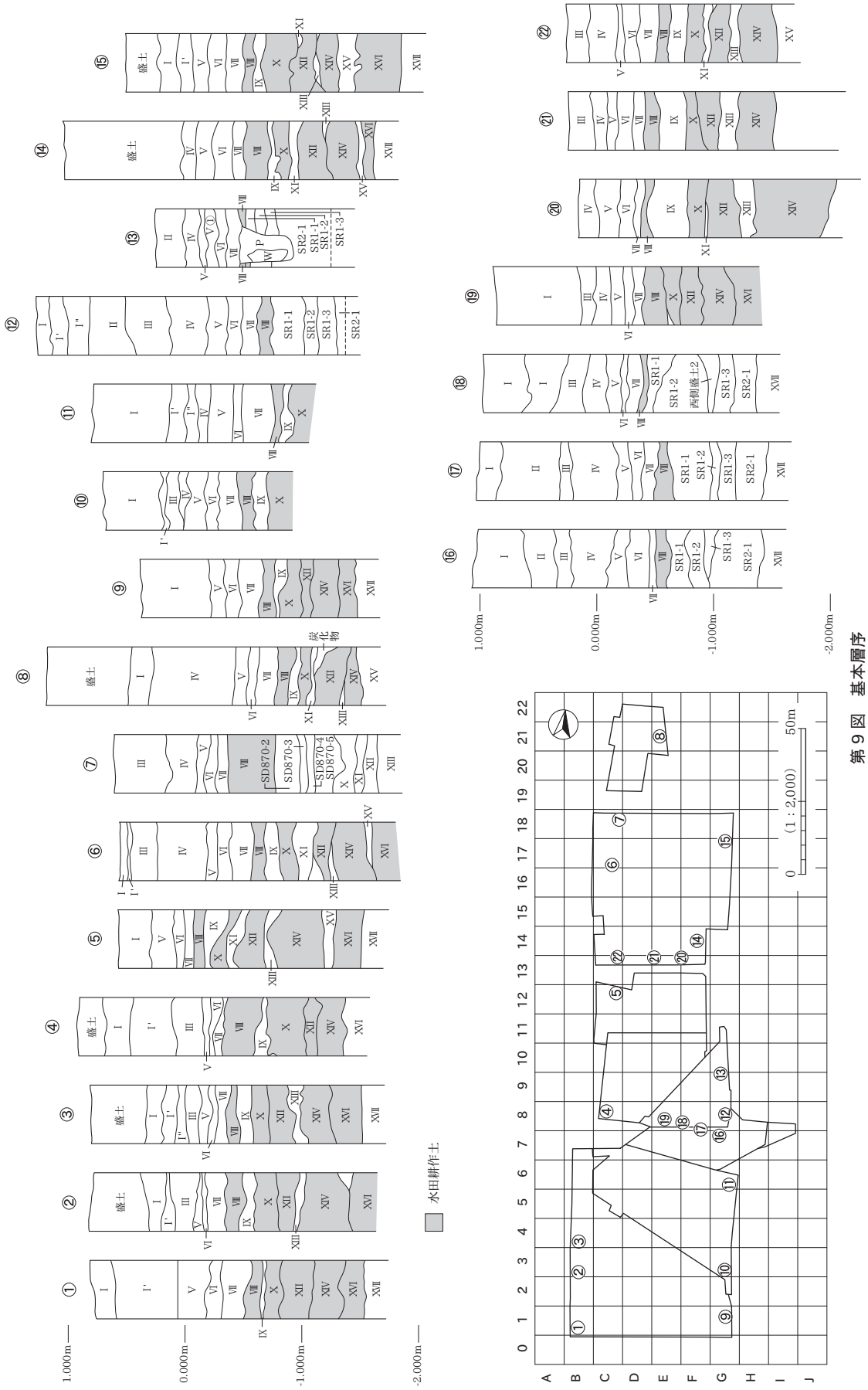
ⅩⅣ層：暗灰色シルト　４枚目水田耕作土である。南区１の北寄りでは層が極めて厚く、上半部は黄灰色の0.5～2cmの硬質な偽礫を多量に含み、下半部は砂を多く含み灰白色の偽礫を少量含む。しまり、粘性共にある。偽礫はⅫ層より多い。

ⅩⅤ層：暗灰色砂　厚さ１～2cmの腐植土を帯状に含む。木片混入する。しまり、粘性共になし。洪水堆積層である。場所により層厚が異なり堆積しない場所も存在する。

ⅩⅥ層：暗灰色シルト　ⅩⅦ層に似るがシルトの割合が多い。軟質の偽礫を一部に含む。ⅩⅦ層との境には腐植土が入るところもある。しまり、粘性共になし。５枚目水田耕作土である。北区１・２のように畦畔が未検出でシルトと砂と互層になるところは自然堆積であり、水田化されなかった可能性が高い。

^{14}C年代測定を行っているが、14世紀前葉～末頃の年代が得られた。Ⅷ層（１層目水田）より新しい値が出ており不整合である。

ⅩⅦ層：暗灰色砂　シルトとの互層あるいは粗い砂層である。しまりはあるが粘性はない。湧水が著しく、


1.000m
0.000m
-1.000m
-2.000m
盛土
水田耕作土
炭化物
SD870-2
SD870-3
SD870-4
SD870-5
SR1-1
SR1-2
SR1-3
SR2-1
SR2-2
西側盛土-2
(1：2,000)
50m

第９図　基本層序

この層から下では遺構・遺物は検出していない。

B 屋　敷　地

屋敷地は、南西から北東に向かい広がっている。溝の内側で南西幅は約 12m、中央部幅は約 19m、北東幅は 30m である。長さは 67m 以上で、現状での平面積は 1,100m^2 ほどである。北東端は調査区外に延びる。屋敷地に SR1 という略記号を付しているのは、当初自然流路跡と考えたからである。屋敷地は自然流路跡の窪地に、整地（埋土）のために人為的に入れた灰や土砂と自然堆積した土砂が複雑に堆積しており、微高地状をなす。本来自然流路跡の窪地であるということは、すでに流水は無く SR（river）という表記はふさわしくないが、調査時のものをそのまま使用している。SR1–1・SR1–2・SR1–3 層という区分は、ラミナや灰層・黒色腐植土層・シルト層など複雑な堆積状況を示すことと、場所により大きく堆積状況が変わることから、大きくとらえて分層したものである。遺構確認は SR1–1 層上面、SR1–2 層上面 SR1–3 層上面 SR2 層上面で行い、各層掘削時に検出したものは適宜調査を行った。SR1–1 ～ 3 層（遺物包含層）と各層で検出した遺構から遺物のほとんどが出土した。時期を決める国産陶磁器類の年代は 13 世紀末～ 14 世紀後半（珠洲Ⅳ期）が中心である。

SR2 は SR1 以前の自然流路である。

Ⅷ層：屋敷地全体を覆う。水田域と同じ。

SR1–1 層：黒色腐植土　シルト層と互層をなし、部分的にブロック状に堆積する。しまり、粘性共にある。露出し乾燥すると黒色腐植土の一部が灰のように観察されたことから微細物分析を行った。イネの頴や炭化物、イネ属頴珪酸体で構成される珪化組織片やイネ属およびヨシ属の単細胞列が確認された（第Ⅵ章 2 参照）。SR1–1 層上面はⅩ層（2 枚目水田）耕作土と同時期である。

SR1–2 層：灰色シルト　黒色腐植土がブロック状に混入する。層厚の薄いところでは黒色ブロックの含有が多い。しまり、粘性共にある。

SR1–3 層：SR1–1 の黒色腐植土（いわゆるガツボ）層と SR1–2 の灰色シルトがブロック状または互層状に堆積する。灰色シルトは砂質が強いが、しまり、粘性共にある。最下部には茅のような植物遺体や籾殻、樹皮のようなものが多く堆積しており、排水の効果を期待して入れたものと考えている。

SR1–1 層と同様に乾燥すると黒色土の一部が灰のように観察されたことから微細物分析を行ったところ、イネの頴や炭化物、イネ属頴珪酸体で構成される珪化組織片やイネ属およびヨシ属の単細胞列が確認された。SR1–1 層と比べ非炭化のイネの頴が多いという特徴がある（第Ⅵ章 2 参照）。また、この結果から屋敷地周辺ではすでに水田耕作が行われ、脱穀等の作業が行われていたことが判明した。この層から出土した第一号木簡の紀年銘から元亨 3（1323）年前後から埋土が始まったものと考えられる。

SR2–1 層：灰色シルト　黒色粒を含み、層全体が若干黒味を帯びる。自然流路の埋土である。しまり、粘性共にある。この層の表面から第四号木簡が出土し、元亨 5（1325）年の紀年銘があるが、第一号木簡の紀年銘と層位的に整合しない。

ⅩⅦ層：水田域と同様である。

第Ⅳ章　遺　　構

1　遺構の概要と記述の方針

小坂居付遺跡は、水田が営まれる範囲と水田以外の遺構が構築される範囲の２つに大別される。ここでは便宜的に水田範囲を「水田域」、それ以外の範囲を「屋敷地」として記述する。なお、後述するが「水田域」と「屋敷地」の遺構検出面は土地利用状況と堆積過程の違いから両者で異なり、単純な相互関係を成していない。

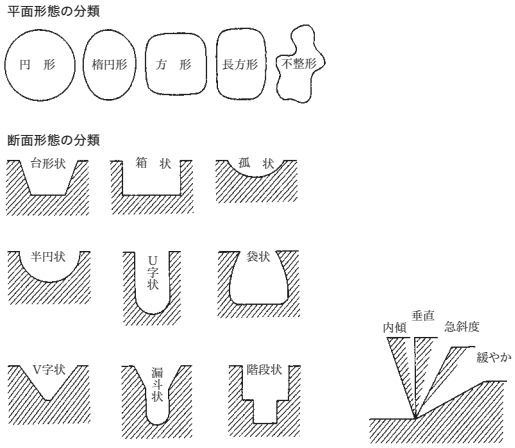
屋敷地の調査は、2009 年度及び 2011 年度に行った。「屋敷地」では多くの遺構が構築され、これを上位面から『SR1 の１層及び２層を掘削中に検出した遺構（SR1-1・2 層遺構）』、『SR1 の３層を掘削中に検出した遺構（SR1-3 層遺構）』、『SR2 の底面またはⅩⅦ層の上面で検出した遺構（SR2・ⅩⅦ層遺構）』の３期で捉えた。

遺構は掘立柱建物（SB）１棟、土坑（SK）109 基、柱・柱穴（P）272 基、杭列（SA）18 列、杭・串（SX）387 基、灰分布範囲（SX）２か所、焼土遺構（SX）７基、杭集中部（SX）１か所、集石（SX）４基、溝（SD）72 条、樹根列２列、窪地（SX）６基を検出した。

「柱・柱穴」は単独で検出した柱根が残存する柱、若しくは柱穴である。柱根は杭としたものより太く、側面加工の有無にもよるが、径が 9cm 以上のもの[1] とした。図版の平面図では、径の大きなものは「形状をトーン「▒」で、小さいものは「■」のトーンで示した。柱根の設置方法については断面観察から「掘形に柱を埋設したもの（掘形柱）」と「打ち込みで柱を立てたもの（打ち込み柱）」の大きく２つと理解し、「打ち込みで柱を立てたもの」はさらに『柱を据える位置を掘り込み、柱根を立たせてから打ち込んだと考えられるもの（半打ち込み柱）』を分離した計３種類に分類した。柱の先端形状は、掘形柱では平坦に加工するものが多い。一方の打ち込み柱・半打ち込み柱では先端を細く加工するものが多くなり、ともに設置方法に合わせた先端形状の選択がうかがわれる。

「杭・串」は木質の加工物で、これを打ち込んで立てたものが遺構となる。前述の柱としたものより総じて小さく、杭としても杭列を構成しないものとした。図版の平面図では「▲」のトーンで示した。これらには単独の杭のほか、祭祀との関連が指摘される串を「地面に突き刺した」［畑 2006］ものを含むと考えられる。本来、杭と祭祀具では、両者の性格は大きく異なる。しかし、今回出土した串の多くは定型的な斎串と異なり「端部が細く（略）指し込む機能」［畑 2006］を意図した先端加工を施すものの、全体の加工については粗雑な印象を受けるものが多い。中には先端加工を施さず、部材を転用した杭との分離を明確にできないものも存在する。さらに形態も幅 3cm 前後の短冊状を基本とするが、長さや厚さのばらつきが大きい。このような状況から杭とは性格の異なる串の存在は明らかなものの、その区別を明確にできなかった。そのため、ここでは両者を一括して扱うが、一部は調査時の所見と遺物としての観察を基にして杭と串への分離を試みた。また、明らかに杭とできるものでは径４～ 9cm のものが多く、9cm 以上のもの[2] についてはひとまず「打ち込み柱」としている。加工は先端に限られ、これ以外には樹皮を

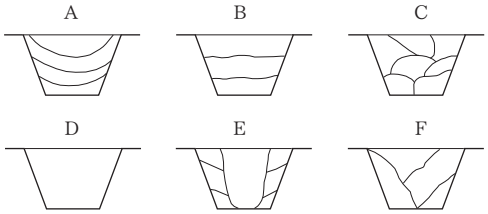
1）P755 や SX439 のように、調査時の所見を優先してこの原則に拠らないものも存在する。
2）1）に同じ。



円形	長径が短径の1.2倍未満のもの。
楕円形	長径が短径の1.2倍以上のもの。
方形	長軸が短軸の1.2倍未満のもの。
長方形	長軸が短軸の1.2倍以上のもの。
不整形	凸凹で一定の平面形をもたないもの。

台形状	底部に平坦面を持ち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
箱状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
弧状	底部に平坦面を持たない弧状で、緩やかに立ち上がるもの。
半円状	底部に平坦面を持たない椀状で、急斜度に立ち上がるもの。
U字状	確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
袋状	確認面の径よりも底部の径が大きく、内傾した後に垂直ないし外傾して立ち上がるもの。
V字状	点的な底部を持ち、急斜度に立ち上がるもの。
漏斗状	下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。
階段状	階段状の立ち上がりを持つもの。

第 10 図　遺構の平面・断面形態の分類（［荒川・加藤 1999］から転載）



A　レンズ状	複数層がレンズ状に堆積する。
B　水平	複数層が水平に堆積する。
C　ブロック状	ブロック状に堆積する。
D　単層	覆土が単一層のもの。
E　柱痕	柱痕と思われる土層が堆積するもの。
F　斜位	斜めに堆積するもの。

第 11 図　遺構覆土の堆積形状の分類（［荒川 2004］から転載・一部改変）

残すものもみられる。遺構出土遺物で図化したものは（図版 No. – 報告 No.）を記した。

なお、遺構の平面形・断面形の分類は［荒川・加藤 1999］を、遺構覆土の堆積形状の分類は［荒川ほか 2004］を参考とした（第 10・11 図）。土層断面図の色調は［小山・竹原 1995］に基づいている。

以下、上位面から順に記述する。

2　屋敷地の調査

A　SR1–1・2 層の遺構

SR1 の 1 層及び 2 層を掘削中に検出した遺構である。遺構数では最も多く、掘立柱建物 1 棟、土坑 46 基、柱・柱穴 171 基、杭列 8 列、杭・串 223 基、灰分布範囲 1、焼土遺構 7 基、杭集中部 1、集石 4 基、溝 31 条、樹根列 2 列を検出した。

遺構は、SD111・112・114 に囲まれた内に構築されている。この SD111 沿いでは樹木を植栽したと考えられる樹根列 1 がある。樹種は同定を行ったものはすべてヤナギ属で、これは一部では人為的な盛土と合わせて植栽された可能性がある。

掘立柱建物は調査区の東側、7G・H、8G・H グリッドで 1 棟検出した。しかし、これ以外にも柱根が残存する 69 基を含む 171 基の柱・柱穴を検出したことから、調査区内にはこれ以外にも建物が存在する可能性が高い。また、焼土遺構、杭集中遺構、集石といったほかの遺構検出面では見られない遺構もあり、多様な遺構が構築される時期とも言える。

水田域との相互関係について確証を得ることはできなかったものの、基本層序や遺構検出標高、出土遺物から類推してⅩ層水田面は『SR1–1・2 層遺構』とほぼ同時に存在したものと考えられる。

1）掘 立 柱 建 物

SB336（図版 8・12・100・101）

7G･H、8G･H グリッドに位置する。この周辺では建物以外にも多数の柱、柱穴が検出されたことから、建て直しや重複する建物の存在もうかがえる。また、杭や串も多く検出したことから、周囲が祭祀の場であった可能性がある。

建物は SB336–P1 ～ 8 の 8 基の柱で構成される。いずれも柱根が残存するもので、掘形に柱を埋設した掘形柱である。柱根 8 本のうち SB336–1（65–1）、SB336–3（65–2）、SB336–4（65–3）、SB336–8（87–1）の 4 本を図示した。柱根の径は 9 ～ 20cm と大きく、下面は平坦に作出されているものが多い。樹種は SB336–P1 がスギ、SB336–P3･4 がヤナギ属である。遺物は P6 の覆土から連歯下駄が出土している。

これらの柱を用いて、梁間は 1 間で 4.45m、桁行は 3 間で 6.55m の長軸方向 N–43°–W の掘立柱建物を想定した。桁行方向の柱間が 1.96 ～ 2.28m に対して、梁間はほぼ倍の間隔となる。また、建物内及び隣接する位置には焼土遺構である SX345・346 が位置するが、建物との関連は不明である。

このほかにも建物周辺では多くの柱がある。P751・760 のように建物を構成する柱に近く、新旧関係をうかがわせるもの、径が 4cm と串としたものに近い P755 などがある。このほか、明らかに他用途に用いたであろう製品を柱に転用した P754 などがある。このように周辺に存在する多くの柱の中には機能･定義からの再検討を要するものもあり、建物としてだけでは様相を捉え難い。

2）土　　抗

45 基検出した。SB336 の内では検出されないことから、建物の周囲に配置されたものが多いとみられる。特徴的なものでは、曲物を人為的に設置した SK399、覆土に多量の細長い木片が混入していた SK534 がある。

SK3（図版 13）

8G9・10・14・15 グリッドに位置するが、東側は調査区外へ続いている。平面形は楕円形と考えられ、残存長径 110cm、短径 120cm である。断面形は台形状で、深さ 30cm である。壁は急傾斜で、底面は平坦である。覆土の堆積は水平で、黒色腐植土を主体とした 3 層に識別される。遺物は出土していない。

SK4（図版 7・13・101）

8G1 グリッドに位置する。平面形は円形で、長径 110cm、短径 106cm である。断面形は台形状で、深さ 20cm である。壁は急傾斜で、底面は平坦である。覆土の堆積は水平で、黒色腐植土を主体とした 2 層に識別される。遺物は箸状木製品・砥石（62–11）が出土した。

SK29（図版 6・13・101）

6E17・18・22・23 グリッドに位置する。平面形は長方形で、長径 134cm、短径 90cm である。断面形は台形状で、深さ 63cm である。壁は急傾斜だが、北東側にテラス状の平坦面があり、そこでは階段状となる。覆土の堆積は水平で、黒色土を主体とした 5 層に識別される。遺物は斎串･箸状木製品･部材･串が出土した。

SK65（図版 6・13・101・108）

5D25、5E5、6E1 グリッドに位置する。重複関係は SK69、P64･159 に切られ、SK164 を切っている。平面形は長方形で、長径 188cm、短径 49cm である。断面形は漏斗状で、深さ 46cm である。底面は幅

が 6cm と狭く、壁は急傾斜である。覆土の堆積はブロック状で、灰色シルトを主体とした 5 層に識別される。遺物は土師質土器・舟形（70–74）・連歯下駄・箸状木製品が出土した。

SK69（図版 6・13・102）

5D25、5E4・5 グリッドに位置する。重複関係は SK65 を切っている。平面形は長方形で、長径 164cm、短径 94cm である。断面形は台形状で、深さ 40cm である。壁は急傾斜だが、南西側に平坦面があり、そこから上半は緩やかに立ち上がっている。覆土の堆積はレンズ状で、灰オリーブ色シルトを主体とした 5 層に識別される。遺物は箸状木製品が出土した。

SK70（図版 6・13・102）

6F3・4・9 グリッドに位置する。平面形は暗渠による削平を受けて不明だが、残存長径 150cm、短径 116cm である。断面形は台形状で、深さ 82cm である。壁は急傾斜だが、南西側にテラス状の平坦面があり、そこでは階段状となる。覆土の堆積はレンズ状で、5 層に識別される。遺物は串・棒状木製品が出土した。

SK72（図版 3・14・102）

6D13・14・18・19 グリッドに位置する。平面形は不整形で、長径 248cm、短径 186cm である。断面形は台形状で、深さ 38cm である。底面はほぼ平坦である。壁は急傾斜だが、北壁は緩やかに立ち上る。覆土の堆積はレンズ状で、4 層に識別される。遺物は烏帽子？（176–300）・漆器皿（70–76）・曲物側板・箸状木製品・板材・柱根が出土した。

SK75（図版 3・14・102）

5C19 グリッドに位置する。重複関係は SD172 を切っている。平面形は暗渠による削平により不明で、残存長径 158cm、残存短径 80cm である。断面形は台形状で深さ 44cm である。底面はほぼ平坦である。壁は急傾斜となる。覆土の堆積は水平で、植物遺存体細片を多く含む黒色土を主体とした 4 層に識別される。遺物は漆器椀・漆器皿（70–77・78）・箸状木製品・杭が出土した。

SK85（図版 3・14・103）

5C24・25 グリッドに位置する。重複関係は SD172 を切っている。平面形は不整形で、長径 144cm、短径 134cm である。断面形は半円状で、深さ 38cm である。壁は急傾斜だが、西側にテラス状の平坦面があり、そこでは階段状となる。覆土は 9 層に識別される。1 ～ 3・5・6 層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、遺構覆土は 7 ～ 9 層となり、レンズ状に堆積している。杭は覆土が堆積した後、SR1 が堆積する前に打ち込まれたものと考えられ、4 層は掘形ではなく、打ち込まれた杭の一部が腐植した部分と考えられる。平面形態や堆積状況などから、本遺構は断面図の杭の部分で分割される 2 基の重複した土坑の可能性がある。遺物は箸状木製品・部材・杭が出土した。

SK86（図版 3・14・103）

5D3・4 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 172cm、短径 112cm である。断面形は弧状で、深さ 26cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は 5 層に識別される。1 ～ 4 層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、遺構覆土は単層となり、レンズ状に堆積している。遺物は珠洲焼片口鉢・珠洲焼壷・漆器皿（70–79）が出土した。

SK94（図版 6・14・103）

6E21・22、6F1・2 グリッドに位置する。平面形は長方形で、長径 189cm、短径 74cm である。断面形は台形状で、深さ 36cm である。壁は北側が垂直に立ち上がる以外は、急傾斜となる。覆土の堆積はレンズ状で、5 層に識別される。4 層は壁の崩落土である。遺物は箸状木製品・部材・不明木製品（70–80）

が出土した。

SK167（図版 6・14・103）

6E4・5・9 グリッドに位置する。平面形は方形で、長径 146cm、短径 106cm である。断面形は台形状で、深さ 46cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、6 層に識別される。遺物は箱・箸状木製品・部材・板材が出土した。

SK169（図版 6・14・104）

6E5・10、7E1 グリッドに位置する。平面形は暗渠による削平により不明で、残存長径 154cm、残存短径 120cm である。断面形は台形状で、深さ 44cm である。本遺構底面付近で径 14 ～ 20cm のピットを検出した。壁は急傾斜だが､底面から 35cm 付近を境に緩やかに立ち上がる。覆土は 3 層に識別される。1 層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、遺構覆土は 2・3 層となり、暗赤褐色土を主体として、レンズ状に堆積する。遺物は箸状木製品が出土した。

SK267（図版 3・15・104）

5C22・23、5D3 グリッドに位置する。遺構中央は、開渠による削平を受けている。平面形は不整形と考えられ、長径 197cm ×残存短径 140cm である。断面形は台形状で、深さ 42cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、腐植土を主体とした 4 層に識別される。遺物は珠洲焼片口鉢（60–21）・箸状木製品・部材・杭が出土した。

SK334（図版 7・15・104）

6F20 グリッドに位置する。平面形は円形で、長径 92cm、短径 82cm である。断面形は弧状で、深さ 20cm である。壁は緩かに立ち上る。覆土の堆積はレンズ状で、腐植土を主体とした 4 層に識別される。遺物は土師質土器（60–22）・箸状木製品が出土した。

SK335（図版 6・15・104）

6E25、6F5 グリッドに位置する。南壁は暗渠の削平を受けている。平面形は不整形で、長径 150cm、残存短径 138cm、である。断面形は台形状で、深さ 83cm である。壁は急傾斜だが、北側にテラス状の平坦面があり、そこでは階段状となる。覆土は 3 層に識別される。1・2 層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、遺構覆土は単層となる。遺物は火鑽臼（70–82）・下駄歯・折敷・箱・箸状木製品が出土した。

SK381（図版 7・15・105）

6F19・24 グリッドに位置する。平面形は長方形で、長径 160cm、短径 90cm である。断面形は台形状で、深さ 18cm である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦になっている。覆土は黒褐色腐植土の単層である。遺物は珠洲焼片口鉢・箸状木製品が出土した。

SK399（図版 6・15・96）

7E6・7・11・12 グリッドに位置する。重複関係は SK400 に切られている。平面形は長方形で、長径 212cm、短径 180cm である。断面形は台形状で、深さ 38cm である。壁は急傾斜である。土手状の高まりが北東から南西に延び、底面は南北に分かれている。土手状の高まりは南側が低く、北側では緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は水平で、5 層に識別される。遺物では、土坑東南端で 1 枚の板で蓋をした曲物が、人為的に設置されたと考えられる状況で出土した。曲物内の堆積土を微細遺物分析したところ、稲の穎のほか、昆虫遺体を多く含むという結果が得られた（第Ⅵ章 3）。そのほか、珠洲焼片口鉢（61–26）・土師質土器（61–24・25）・曲物（71–83）・曲物蓋（71–84）・折敷底板・箸状木製品・部材が出土した。

SK400（図版 6・15・105）

7E6・7・11・12 グリッドに位置する。重複関係は SK399 を切っている。平面形は長方形で長径 152cm、短径 64cm である。断面形は半円状で、深さ 22cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、3 層に識別される。遺物は部材が出土した。

SK410（図版 6・16・105）

7F11 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 120cm、短径 67cm である。断面形は弧状で、深さ 28cm である。壁は急傾斜で、底面は中心に向い緩やかに窪んでいる。覆土の堆積はレンズ状で、灰オリーブ色シルトを主体とした 5 層に識別される。遺物は曲物側板・串が出土した。

SK473（図版 7・16・105）

6F15･20、7F11･16 グリッドに位置する。重複関係は SX332･489 に切られている。平面形は楕円形で、長径 180cm、短径 131cm である。断面形は深さ 24cm の弧状である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。北壁隅にピットがある。覆土の堆積はレンズ状で、3 層に識別される。遺物は箸状木製品･部材が出土した。

SK488（図版 6・16・106）

7E20、8E16 グリッドに位置する。北側は暗渠の削平を受けている。平面形は楕円形と考えられ、残存長径 145cm、残存短径 90cm である。断面形は弧状で深さ 28cm である。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、覆土は黒色腐植土の単層である。遺物は出土していない。

SK527（図版 7・16・106）

7G15・19・20 グリッドに位置する。重複関係は P792、SX793 に切られている。平面形は円形で、長径 138cm、短径 132cm である。断面形は弧状で、深さ 30cm である。壁は急傾斜で、底面の西側隅に深さ 8cm のピットがある。覆土の堆積はレンズ状で、4 層に識別される。また、1 層は腐植した杭の痕跡と考えられる。遺物は箸状木製品が出土した。

SK529（図版 7・16・106）

7G12・13・17・18・22・23 グリッドに位置する。重複関係は SK621、SD445 に切られている。平面形は不整形で、長径 290cm、短径 185cm である。壁・底面共に不整だが、断面形は弧状で、深さ 32cm となる。覆土は、籾殻が混入する黒色腐植土の単層である。遺物は漆器椀・人形（71–85）・折敷・箸状木製品・部材・不明木製品（71–86）・鎹が出土した。

SK534（図版 7・16・106・107）

7G6・7・11・12 グリッドに位置する。重複関係は SX375–8 に切られ、SK547 を切っている。平面形は方形で、長径 190cm、短径 165cm である。断面形は台形状で、深さ 44cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、4 層に識別される。2 層の黒色土中には、多量の細長い木片が混入する。これらは木材加工の際に生じた木片を廃棄したものと考えられる。遺物は珠洲焼甕(61–28)･漆器椀･刀子柄(71–87)・草履芯・曲物側板・曲物底板（71–88）・折敷・箸状木製品・杭が出土した。

SK547（7・16・106・107）

7G6・11 グリッドに位置する。重複関係は SK534、SX365 に切られ、SK562 を切っている。平面形は楕円形で、長径 158cm、残存短径 88cm である。断面形は台形状で、深さ 40cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、3 層に識別される。腐植土と青灰色シルトの互層である。遺物は箸状木製品・部材が出土した。

SK562（図版 7・16・107）

7G11 グリッドに位置する。重複関係は SK547 に切られている。平面形は円形で、長径 116cm、短径 106cm である。断面形は台形状で、深さ 35cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、黒色腐植土を主体とした 2 層に識別される。遺物は折敷・箸状木製品・部材が出土した。

SK802（図版 8・16・107）

7I10、8I6 グリッドに位置する。平面形は円形で、長径 92cm、短径 82cm である。断面形は台形状で、深さ 34cm である。覆土の堆積は水平で、暗オリーブ灰色シルトを主体とした 2 層に識別される。遺物は杭・板材・角材が出土した。

3）柱　・　柱　穴

171 基検出した。柱根の残存していたものは掘形柱 55 基、打ち込み柱 14 基の計 69 基で、柱穴に対する柱根の残存比率は 40%となる。掘立柱建物の位置する 8G グリッド周辺以外では、6E･F、7F グリッドに集中域を見いだせる。

P22（図版 6・17・107）

6F8 グリッドに位置する半打ち込み柱である。掘形は長径 29cm、短径 18cm で、深さ 44cm である。覆土は 2 層に識別され、1 層が掘形、2 層はしまりが無いことから柱根表面の腐植部分と考えられる。柱根は芯持丸木材を用い、先端に向かって細く加工されている（72–89）。樹種はコナラ属コナラ亜属コナラ節である。

P28（図版 6・17・107）

6E18 グリッドに位置する半打ち込み柱である。掘形は長径 46cm、短径 34cm で、深さ 44cm である。覆土は 5 層に識別される。柱根は芯持丸木材を用い、先端に向かって細く加工されている（72–90）。樹種はサクラ属である。

P39（図版 6・17・108）

6E2･7 グリッドに位置する半打ち込み柱である。掘形は長径 35cm、短径 32cm で、深さ 52cm である。覆土は単層である。柱根は芯持丸木材を用いるが、途中に段を設け、この下半は削り出しにより角状に加工される特異な形状となる（72–91）。樹種はクリである。遺物は箸状木製品が出土した。

P43（図版 6・17・108）

6E11 グリッドに位置する掘形柱である。重複関係は SX5 に覆われている。掘形は長径 32cm、短径 28cm で、深さ 28cm である。覆土は単層である。柱根は芯去削り出し材を用い、先端は平坦である（65–10）。樹種はマツ属複維管束亜属である。

P56（図版 3・17・108）

6D21 グリッドに位置する半打ち込み柱である。掘形は長径 24cm、短径 21cm で、深さ 34cm である。覆土は単層である。

P63（図版 3・17・108）

6D21 グリッドに位置する柱穴である。掘形は長径 26cm、短径 23cm で、深さ 52cm である。覆土は 2 層に識別される。

P76A（図版 6・17・108）

6E17 グリッドに位置する打ち込み柱である。重複関係は SX5 に覆われている。柱根は先端に向かっ

て細く加工されている。

P76B（図版 6・17・108）

6E17 グリッドに位置する打ち込み柱である。重複関係は SX5 に覆われている。柱根は芯持偏半割材を用い、先端に向かって細く加工されている（72–92）。樹種はサクラ属である。

P80（図版 6・17・108）

6E12 グリッドに位置する柱穴である。重複関係は SX5 に覆われている。掘形は長径 30cm、短径 24cm で、深さ 52cm である。覆土は 3 層に識別され、2 層は柱痕の可能性がある。

P81（図版 3・17・108）

5D15 グリッドに位置する柱穴である。掘形は長径 30cm、短径 29cm で、深さ 58cm である。覆土は 2 層に識別される。遺物は土師質土器（60–1）が出土した。

P84（図版 6・17）

6E2 グリッドに位置する柱穴である。掘形は長径 30cm、短径 22cm で、深さ 7cm である。

P88（図版 6・17・108）

6E1・2 グリッドに位置する半打ち込み柱である。掘形は径 24cm で、深さ 42cm である。覆土は単層である。柱根は芯持丸木材を用い、先端に向かって細く加工されている（65–11）。樹種はサクラ属である。遺物は箸状木製品が出土した。

P159（図版 3・17・108）

5D25 グリッドに位置する柱穴である。重複関係は SK65 を切っている。掘形は長径 28cm、短径 20cm で、深さ 40cm である。覆土は 3 層に識別され、2 層は柱痕の可能性がある。遺物は珠洲焼が出土した。

P386（図版 6・17・109）

6F9 グリッドに位置する打ち込み柱である。柱根は芯持丸木材を用い、先端に向かって細く加工されている（72–93）。樹種はモクレン属である。

P414（図版 6・17・109）

6F15 グリッドに位置する柱穴である。掘形は長径 36cm、短径 28cm で、深さ 56cm である。覆土は 3 層に識別され、1 層は柱痕の可能性がある。遺物は珠洲焼片口鉢（61–27）が出土した。

P447（図版 6・17・109）

6F15 グリッドに位置する掘形柱である。掘形は長径 32cm、短径 30cm で、深さ 68cm である。覆土は3層に識別される。柱根は芯持丸木材を用いる。先端は細く作出されるが、加工はほかの柱根より粗く、伐採痕のままの可能性がある。樹種はスギである。

P449（図版 7・17・109）

7F16 グリッドに位置する半打ち込み柱である。掘形は長径 33cm、短径 26cm で、深さ 30cm である。覆土は単層である。柱根は芯持丸木材を用いる（65–12）。側面への加工は顕著だが、先端は比較的平坦に作り出される。樹種はクマシデ属イヌシデ節である。

P611（図版 7・17・109）

7G12 グリッドに位置する柱穴である。掘形は長径 36cm、短径 30cm で、深さ 30cm である。覆土は単層である。遺物は砥石（61–12）が出土した。

P620（図版 7・17）

7G7 グリッドに位置する柱穴である。重複関係は P364 に切られている。掘形は長径 50cm、短径 23cm で、深さ 55cm である。遺物は珠洲焼片口鉢（61–29）・箸状木製品が出土している。

P750（図版 7・8・18・109）

7H9 グリッドに位置する半打ち込み柱である。重複関係は P756 を切る。掘形は長径 20cm、短径 19cm、深さ 10cm である。覆土は単層である。柱根は芯去削り出し材を用い、先端は平坦である（65–4）。樹種はスギである。

P752（図版 7・8・18・109）

7G22 グリッドに位置する掘形柱である。重複関係は SK546 に切られる。掘形は長径 30cm、短径 26cm、深さ 60cm である。覆土は黒褐色シルトが主体で、2 層に識別される。柱根は芯持木材を用いている（65–5）。樹種はヤナギ属である。

P753（図版 7・8・18・109）

7H9 グリッドに位置する掘形柱である。堀形は長径 36cm、短径 27cm、深さ 67cm である。覆土はシルトが主体で、3 層に識別される。覆土 3 層は旧段階の柱痕で、覆土 2 層は旧段階の柱の抜き取り痕の可能性が考えられる。

P754（図版 7・8・18・110）

7H15 グリッドに位置する掘形柱である。掘形は長径 32cm、短径 31cm、深さ 60cm である。覆土 1 層が黒色シルト、覆土 2 層が灰色砂に識別される。柱根は芯持扁半割材を用いており（65–6）、先端の加工から別用途に用いたであろう製品が転用されている。樹種はスギである。

P756（図版 7・8・18・109）

7H9 グリッドに位置する柱穴である。重複関係は P750 に切られる・規模は長径 24cm、短径 20cm、深さ 62cm である。覆土は黒褐色シルトが主体で、2 層に識別される。

P757（図版 7・8・18・110）

7G25 グリッドに位置する打ち込み柱である。柱根は板目材を用いており、先端に向かって細く加工されている（65–8）。樹種はブナ属である。

P758（図版 7・8・18）

7G24 グリッドに位置する半打ち込み柱である。掘形は長径 15cm、短径 14cm、深さ 28cm である。覆土は黒褐色シルトの単層である。柱根は柾目材を用いており、先端に向かって細く加工されている（65–9）。樹種はスギである。

P759（図版 7・8・18）

7G19 グリッドに位置する半打ち込み柱である。掘形は長径 18cm、短径 18cm、深さ 14cm である。覆土は黒褐色シルトの単層である。

P804（図版 8・18・110）

8H21 グリッドに位置する半打ち込み柱である。掘形は長径 35cm、短径 34cm、深さ 60cm である。覆土は暗オリーブ灰色シルトの単層である。柱根は芯持丸木材を用いており、先端は平坦に加工されている（87–2）。

P805（図版 8・18・110）

7H20、8H16 グリッドに位置する掘形柱である。掘形は長径 20cm、短径 15cm、深さ 46cm である。

覆土は暗オリーブ灰色シルトの単層である。

P807（図版 8・18・110）

7H20、8H16 グリッドに位置する半打ち込み柱である。掘形は長径 30cm、短径 22cm、深さ 11cm である。覆土は暗オリーブ灰色シルトの単層である。

P818（図版 8・18・110）

8I2 グリッドに位置する掘形柱である。掘形は長径 29cm、短径 28cm、深さ 34cm である。覆土は黒色シルトの単層である。

4）杭　　列

8 列検出した。SD111 の壁面に沿って SA12・145・479 を検出した。このほか SA13・14・141 の 3 列についても SD111 に平行して構築されていることから、両者の関連がうかがわれる。

SA12（図版 9・19・110）

8F、9F・G グリッドに位置する 17 基の杭によって構成される。SD111 の東側の壁に直線状に並び、全長は 14.8m である。杭の径は 2 ～ 11cm で、残存長は 7 ～ 66cm である。図化した SA12–8（72–96）の樹種はヤナギ属である。

SA13（図版 9・19・111）

8E･F、9F･G、10G グリッドに位置する 24 基の杭によって構成される。SD111 の東側の上端に沿って直線状に並び、全長は 26.5m である。また、樹根列 1 と軸方向を同じくしており、一部では位置も重なる。杭の径は 2 ～ 10cm で、残存長は 2 ～ 70cm である。SA13–10・23 は図示した（72–97・98）。SA13–23 は建築材の転用で、樹種はスギである。SA13–10 の樹種はヤナギ属である。

SA14（図版 9・14・111）

8E･F、9F･G グリッドに位置する 20 基の杭によって構成される。SD111、SA13 と平行する位置で、蛇行しながら並び、全長は 22.8m である。杭の径は 2 ～ 7cm で、残存長は 13 ～ 53cm である。図化した SA14–20（72–99）の樹種はヤナギ属である。

SA145（図版 9・14）

9・10G グリッドに位置する 7 基の杭によって構成される。SD111 の東側の壁に直線状に並び、全長は 4.2m である。杭の径は 2 ～ 18cm で、長さ 11 ～ 31cm である。図化した SA145–2（72–100）の樹種はヤナギ属である。

5）杭　・　串

223 基検出した。分布は概ねほかの遺構の粗密と連動するが、特に掘立柱建物を検出した周辺、7G･H、8H グリッドで集中が認められる。この範囲で検出したものは、串に分類できるものが大半を占めている。なかでも掘立柱建物の北東、8H グリッドでは互いに間隔を置かずに密に指し込まれており、特異な状況を示している。

SX30（図版 6・19）

6E22 グリッドに位置する。径 3cm、残存長 63cm である。長く、径は大きくないものの下端を 3 面に渡って加工していることから杭（72–103）と考えた。樹種はスギである。

SX55（図版 3・19・111）

6D22 グリッドに位置する。径 3cm、残存長 40cm である。定型的な斎串とは異なるが、比較的偏平な棒の下端を加工することで斎串状の尖端を作り出すことから串（72–104）と考えた。樹種はスギである。

SX97（図版 6・19）

6E19 グリッドに位置する。径 2cm、残存長 23cm である。箸状木製品としたものより径が大きいことから、串と考えた。

SX98（図版 6・19）

6E19 グリッドに位置する。径 1cm、残存長 17cm である。箸状木製品としたものより径が大きいことから、串と考えた。

SX151・152・153・154（図版 6・19）

6E18 グリッドに位置し、4 基が 44cm の間に近接して打ち込まれている。SX151 は径 3cm、残存長 26cm、SX152 は径 2cm、残存長 20cm、SX153 は径 2cm、残存長 17cm、SX154 は径 2cm、残存長 17cm である。箸状木製品としたものより径が大きいことから、串と考えた。

SX439（図版 6・19・111）

7E21 グリッドに位置する。径 10cm、残存長 71cm である。長く、径も大きいことから柱の可能性もある（73–108）。樹種はスギである。

SX566（図版 7・19）

7G7 グリッドに位置する。重複関係は P364 に切られている。径 7cm、残存長 35cm である。断面形が円形であることから、杭（73–109）と考えた。樹種はヤナギ属である。

6）灰 分 布 範 囲

灰の分布を確認した範囲を 1 基検出した。重複関係は P364 に切られている。ほぼ平坦地で検出し、本遺構に伴う掘形は確認できなかった。

SX5（図版 6・20・111）

6E6 ～ 8・11 ～ 13・17 グリッドに位置する。重複関係は P43・76・77・79・80、SX78 を覆っている。このほか、杭である SX6 ～ 9 が重複していたが新旧は不明である。確認した範囲は不整形で、長径 450cm、短径 202cm である。焼土など被熱の痕跡を確認できなかったことから、灰はほか地点から搬入された可能性が高い。灰を含む堆積土は 2 ～ 4cm と薄く、炭化物も多く含んでいる。また、6E8・12 グリッドで採取した堆積土の微細物分析では稲の穎とブナ属やコナラ節の木材の炭化物、未炭化の稲の穎が多量に検出された（第Ⅵ章 3）。遺物は箸状木製品・杓子（72–101）・柄付木製品（72–102）・鍋（63–32・33）・釘（63–29）・鋤（63–30・31）が出土した。鉄鍋は小片で、形態の異なる 2 個体が認められた。

7）焼　土　遺　構

SX332・345・346・347・485・487・645 の 7 基検出した。SX332 は掘形を持ち、壁面の一部が焼土化している。これ以外の 6 基は掘形を持たず、平面的に形成された焼土の範囲を捉えたものである。

SX332（図版 7・20・111）

6F15・20、7F11・16 グリッドに位置する。重複関係は SK473 を切っている。平面形は方形で、長径 81cm、短径 71cm である。断面形は弧状で、深さ 8cm である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平

坦である。北東壁が幅 10 ～ 14cm の範囲で被熱し、赤色の焼土が形成されている。覆土の堆積はレンズ状で、3 層に識別される。1･3 層は灰が多く混入する黒色土、2 層は焼土を含む灰オリーブ色の灰層である。2 層から採取した覆土の微細物分析では、稲の穎とブナ属・コナラ節の木材の炭化物、未炭化の稲の穎が多量に検出された（第Ⅵ章 3）。遺物は箸状木製品・部材が出土した。

SX345（図版 7・8・20・112）

7H5・10 グリッドに位置する。本遺構は SB336 内に位置するが、関連は不明である。焼土化する範囲は楕円形で、長径 52cm、短径 32cm である。被熱による変質は、検出面から 4cm に及ぶ。遺物は出土していない。

SX346（図版 7・8・20・112）

7G23･24、7H3･4 グリッドに位置する。焼土化する範囲は不整形で、長径 56cm、短径は 27cm である。被熱による変質は、検出面から 3cm に及ぶ。遺物は出土していない。

SX347（図版 7・8・20・112）

7G23 グリッドに位置する。焼土化する範囲は不整形で、長径 50cm、短径 45cm である。被熱による変質は、検出面から 6cm に及ぶ。遺物は出土していない。

SX485（図版 7・20・112）

6F20・7F16 グリッドに位置する。重複関係は、杭である SX451 に切られている。焼土化する範囲は楕円形で、長径 39cm、短径 30cm である。被熱による変質は、深さ 8cm に及ぶ。重複する SX451 は径 7cm、残存長 16cm である。被熱による変質層では 2 層で焼土の赤色が濃く、3・4 層ではこれより薄い色調となっている。遺物は焼土中から箸状木製品・串が出土した。

SX487（図版 7・20・112）

6F15、7F11 グリッドに位置する。焼土化する範囲楕円形で、長径 38cm、短径 26cm である。被熱による変質は、検出面から 3cm に及ぶ。遺物は出土していない。

8）杭　集　中　部

1 基検出した。打ち込まれていたのは比較的、規模の大きい杭で、前述の串の集中とは異なるものである。

SX209（図版 5・20・113）

5F10、6F6 グリッドに位置する 42 基の杭によって構成される。溝である SD112 に隣接している。ここでは溝も幅を狭めていることから、両者の関連がうかがわれる。杭は、長径 198cm、短径 140cm のほぼ方形の範囲内に打ち込まれている。この範囲内には、遺存状態が不良で断定はできなかったが、樹根が位置しており、杭はこの樹根を取り囲むように打ち込まれた可能性がある。

杭は方形の外周に沿うものはほぼ垂直に打ち込まれているが、中央部のものは斜位に打ち込まれている。杭の径は 1 ～ 8cm、残存長は 4 ～ 102cm で、平均残存長は 29.8cm である。SX209–1・4 は図化した（73–106・107）。杭には樹皮が残存するものが目立ち、先端加工も簡易な印象を受けるものが大半である。なお、SX209–4 については樹種同定を行い、ハンノキ属ハンノキ亜属との結果を得た。

9）集　　石

SX91・92・178・204 の 4 基検出した。いずれも平面的に礫が集中する範囲で、掘形は持たない。各集石を構成する礫の点数は、SX91 が 12 点、SX92 が 25 点、SX178 が 7 点、SX204 が 27 点である。

SX91（図版 3・20・111）

6D3 グリッドに位置する。南北 87cm、東西 54cm の範囲で、破砕礫 4 点を含む 12 点の礫を検出した。礫は長径が 3.3 ～ 7.0cm、短径が 2.6 ～ 5.0cm、重量が 61.7 ～ 339.2g で、いずれも被熱痕は認められなかった。

10）溝

31 条検出した。大きくは「屋敷地」の周囲を取り囲んで構築されるもの（SD111･112･114）と「屋敷地」の内部に構築されるものの 2 つに分けられる。

「屋敷地」の周囲を取り囲んで構築される溝は、総じて規模が大きく、「屋敷地」と「水田域」を隔てる役割が考えられる。一方、「屋敷地」の内部に構築される溝の方向については、掘立柱建物の軸方向と同じ、若しくは直交するものが多い。これらについては掘立柱建物と同一の規則性の下で配置されたものと考えられる。

SD111（図版 3・6・9・21・113）

5・6C、6・7D、7・8E、8 ～ 10F、9・10G グリッドに位置し、下の 2 面でもほぼ同位置で溝を確認している。重複関係は、壁面で杭列 SA12・145・479 のほか、単独の杭も 8 基検出した。本遺構に沿って樹根列 1 が並ぶほか、溝の東側の 8F、9F･G グリッドでは、杭列が 3 列平行して検出されている。直線状に北東から南西方向に延びるが、5C グリッドで大きく折れている。両端は調査区外へ続いており、確認長は 63.8m である。断面形は弧状で幅が 60 ～ 330cm、深さは 35 ～ 40cm である。覆土の堆積はレンズ状で、砂を含む緑灰色シルトの 3 層に識別される。遺物は漆器椀（69–55）・下駄歯・曲物側板・箸状木製品・部材・串・杭・錐（63–16）・銭貨（64–52）・砥石（62–2）が出土した。

SD112（図版 5・6・21・97・114）

5E ～ G、6F･G グリッドに位置し、北東側は調査区外へと続いている。水田耕作土とした SR165 を切っている。西に 4m 離れて同方向の SD114 がある。本遺構に接して杭集中遺構 SX209 が位置し、そこでは幅を 105cm まで狭めることから、両者の関連がうかがわれる。緩やかに湾曲しながら北東から南西方向に延びており、確認長 16.6m である。断面形は弧状で、幅が 105 ～ 360cm、深さは 65 ～ 70cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積はレンズ状で、灰色シルトを主体とした 4 層に識別される。遺物は扇（69–57）・斎串・箆・草履芯・曲物側板・箸状木製品・板材・有孔円板・折敷（87–3）・刀子（63–17）が出土した。

SD114（図版 3・5・6・21・114）

5D･E グリッドに位置し、南西側は調査区外へと続いている。水田耕作土とした SR165 を切っている。東に 4m 離れて SD112 がある。直線状に北東から南西方向に延びており、確認長 11.4m である。断面形は弧状で、幅が 130 ～ 240cm、深さは 35 ～ 40cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積はレンズ状で、砂を含む黒褐色シルトを主体とした 2 層に識別される。遺物は曲物側板･箸･部材が出土した。

SD129・130（図版 9・21・114）

8F グリッドに位置し、90cm 離れて平行する溝である。両端は認識できなかった。直線状に北西から南東方向に延びており、SD129 が確認長 3.9m、SD130 が確認長 4.5m である。SD129 の断面形は半円状または台形状で、幅は 70 ～ 98cm、深さが 34cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で 7 層に識別される。遺物は曲物側板が出土した。SD130 の断面形は弧状で、幅は 84 ～ 90cm、深

さが 24cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、4 層に識別される。遺物は箸状木製品・杭が出土した。

SD166・339（図版 6・21・22・114・115）

6E・F、7E グリッドにて調査区を跨いで位置する 2 本の溝を同一遺構と考えた。重複関係は SD116 とした部分では P24・44・49、SX25・51・95 に切られ、SK208 を切る。同じく SD339 とした部分では SX415、SD175 を切る。

SD166 はＴ字状で、北西から南東方向と北東から南西方向に延びている。長さは、北西から南東方向の部分が 4.9m、北東から南西方向の部分が 8.3m である。断面形はＶ字状またはＵ字状で、幅が 35 ～ 104cm、深さが 18 ～ 36cm である。壁は直立している。覆土の堆積は、上部がレンズ状だが、下部はブロック状に堆積する。遺物は漆器椀・斎串・蓋・曲物側板・桶底板（73–111）・折敷底板・箱・箸状木製品・部材・串・杭・茅針（73–110）・不明鉄製品（63–34）が出土した。

SD339 は直線状に北西から南東方向に延びており、長さは 8.9m である。断面形はＵ字状で、幅が 35 ～ 100cm、深さが 23cm である。壁は急傾斜で、底面は平坦である。覆土の堆積は水平で、腐植土を主体とした 2 層に識別される。遺物は籌状木製品・題箋状木製品（73–114）・針状木製品（73–112）・曲物側板・箸状木製品・部材・不明木製品（73–113）・錐が出土した。

SD172（図版 3・22・115）

5・6C グリッドに位置する。重複関係は SK75・85 に切られている。一部で途切れるが、同一遺構と考えた。環状で、長さは 4.8m と 3.5m である。断面形は弧状で、幅が 70 ～ 100cm、深さが 10 ～ 26cm である。壁は急傾斜である。覆土はレンズ状で、2 層に識別される。遺物は出土していない。

SD330（図版 6・22・115）

7E グリッドに位置する。直線状に北西から南東方向に延びており、長さは 4.2m である。断面形は台形状で、幅が 115cm、深さが 35cm である。壁は急傾斜で、底面は平坦である。覆土の堆積はレンズ状で、黒色腐植土を主体とした 4 層に識別される。遺物は曲物側板・箸状木製品・鏃（63–36・37）が出土した。

SD331（図版 6・22・115）

7F グリッドに位置する。直線状に北西から南東方向に延びており、長さは 4.3m である。断面形は弧状で、幅が 44cm、深さが 12cm である。壁は急傾斜で、底面は平坦である。覆土の堆積はブロック状で、灰色シルトを主体とした 3 層に識別される。遺物は箸状木製品が出土した。

SD436（図版 7・22・116）

7G グリッドに位置する。重複関係は P600、SX574、SD593 を切っている。直線状に南東から西北方向に延びており、長さは 3.6m である。断面形は箱状で、幅が 60cm、深さが 35cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、黒褐色シルトを主体とした 5 層に識別される。遺物は連歯下駄・箸状木製品・部材が出土した。

SD445（図版 7・8・22・116）

7G グリッドに位置する。重複関係は SK529 を切っている。直線状に北西から南東方向に延びており、長さは 3.1m である。断面形は台形状で、幅は 92cm、深さが 30cm である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は南東に向かって次第に低くなっている。覆土の堆積はレンズ状で、黒色シルトを主体とした 3 層に識別される。遺物は斎串・曲物底板・箸状木製品が出土した。

SD448（図版 7・22・116）

7F・G グリッドに位置し、SD461 と平行に並ぶ。東側は暗渠の削平を受けている。重複関係は P334 に切られている。直線状に北東から南西方向に延びており、確認長は、2.8m である。また SD597 と同一溝の可能性がある。断面形は弧状で、幅が 50cm、深さが 16cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積は水平で 2 層に識別される。遺物は箱・箸状木製品が出土した。

SD461（図版 7・22）

7F グリッドに位置し、SD448 と平行に並ぶ。東側は暗渠の削平を受けている。重複関係は P471 に切られている。直線状に北東から南西方向に延びており、確認長は 1.7m である。断面形は U 字状で、幅が 50cm、深さが 20cm である。壁は急傾斜で、底面は南西側が段を持って低くなる。遺物は曲物側板・箸状木製品・部材が出土した。

SD540（図版 7・8・22・116）

8G グリッドに位置する。西側は暗渠の削平を受け、東側は調査区外へと続いている。重複関係は SK539、SX794 ～ 796 に切られている。直線状に北東から南西方向に延びており、確認長は 3.0m である。断面形は弧状で、幅が 71cm、深さが 14cm である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや起伏がある。覆土の堆積は黒色シルトの単層である。遺物は箸状木製品・部材が出土した。

SD593（図版 7・8・22）

7G グリッドに位置する。重複関係は SD436 に切られている。直線状に北西から南東方向に延びており、長さは 4.5m である。断面形は台形状で、幅が 20cm、深さが 5 ～ 20cm である。壁は急傾斜で、底面はやや起伏がある。覆土の堆積は灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD597（図版 7・22・116）

7G グリッドに位置し、SD598 と平行に並ぶ。北西側は暗渠の削平を受けている。直線状に北西から南東方向に延び、北西端では湾曲することから、SD448 と同一遺構の可能性がある。確認長は 4.1m である。断面形は弧状で、幅が 20～36cm、深さが 9cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は青灰色シルトの単層である。遺物は漆器椀（73-119・120）・露卯下駄歯（73-118）・箸状木製品が出土した。

SD598（図版 7・22・116）

7F・G グリッドに位置し、SD597 と平行に並ぶ。直線状に北西から南東方向に延びており、長さは 3.8m である。断面形は弧状で、幅が 30 ～ 50cm、深さが 19cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は青灰色シルトの単層である。遺物は連歯下駄・箸状木製品・部材が出土した。

11）樹　根　列

複数の樹木の根が列状に並ぶものを樹根列とし、2 列検出した。樹根は根の部分と、わずかながらも幹の部分も遺存しており、検出した状態は切株のようであった。これらの樹根は SD111 に沿って検出したこと、樹根間をおおむね 2 ～ 3m 前後とすること、樹種に選択性が認められることから、人為的に植栽されたものと考えた。

樹根列 1（図版 3・6・9）

5・6C、6・7D、7・8E、8・9F、9・10G グリッドに位置する 24 基の樹根で構成され、確認長は 63.8m である。SD111 の南東側の上端に沿って延び、5C グリッドでは溝に合わせて大きく折れている。樹根は樹種同定を行った 9 基全てがヤナギ属で、幹と考えられる部分の径の平均は 18.9cm であった。

樹根の間隔は 9 と 10、15 と 16 の間で約 10m と大きく空けているが、ここを除いた平均では 2.56m となる。

樹根列 2（図版 9）

8・9G グリッドに位置する 5 基の樹根で構成され、全長は 7.2m である。南から北に延びており、樹根の間隔の平均は 1.88m である。樹根は樹種同定を行った 4 基中 3 基がヤナギ属、1 基がバラ科ナシ亜属で、幹と考えられる部分の径の平均は 10.0cm であった。

B　SR1–3 層の遺構

SR1 の 3 層を掘削中に検出した遺構である。2010 年度の調査から、遺構群の周囲は上位面である SR1–1･2 層検出遺構群と同様に、水田に囲まれていたことが明らかとなった。この「水田域」と「屋敷地」の境については未調査のため不明な部分が多い。しかし、5D グリッドから 6F グリッドにかけて「屋敷地」から「水田域」へと約 40cm 下る段差が捉えられており、ここを境としていた可能性がある。同様に、水田面との時間的関係についても明らかにし得ないが、基本層序の堆積状況から類推して、「Ⅻ層水田面」と「ⅩⅣ層水田面」が営まれていた時期の遺構群と考えられる。遺構の種別と総数では上位面である SR1–1･2 層検出遺構を下回る、土坑 62 基、柱・柱穴 82 基、杭列 5 列、杭・串 108 基、溝 40 条、窪地 6 を検出した。

遺構は土坑・溝は数を増やしているほか、窪地といったこの面でしか検出されていないものもあり、上位面との性格の違いがうかがわれる。

1）土　　抗

62 基検出した。溝は北西から南東方向へ延びるものが多いのに対して、土坑は方向を一定とせず、形態も不整形とするものも多い。

SK174（図版 25・30・119）

6D16・21 グリッドに位置する。重複関係は P74 に切られ、SK210 を切っている。平面形は方形で、長径 112cm、短径 110cm である。断面形は台形状で、深さ 65cm である。壁は急傾斜である。覆土は 6 層に識別される。1 ～ 4 層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、遺構覆土は 5・6 層となり、レンズ状に堆積する。遺物は下駄歯・箸状木製品が出土した。

SK177（図版 25・30・119）

6D23 グリッドに位置する。重複関係は SK678 に切られ、SK176・742 を切っている。平面形は長方形で長径 142cm、残存短径 86cm である。断面形は台形状で、深さ 43cm である。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜である。覆土の堆積は水平で、4 層に識別される。遺物は俎（79–200）･横櫛（79–201）･草履芯･折敷・箸状木製品が出土した。

SK179（図版 25・30・119）

6E11 グリッドに位置する。重複関係は SD268 を切っている。平面形は円形で、長径 116cm、短径 96cm である。断面形は台形状で、深さ 56cm である。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、4 層に識別される。遺物は種子札（79–204）・烏帽子？・漆器椀（79–202・205）・漆器皿（79–203）・箆・箸状木製品が出土した。種子札は 4 層の底面直上から出土し、3 層から漆器が集中して出土した。

SK201（図版 25・30・119）

6D22・23、6E1 ～ 3・6・7 グリッドに位置する。重複関係は SX205・231 に切られている。平面形は長方形で、長径 504cm、短径 95cm である。断面形は台形状で、深さ 26 ～ 50cm である。壁は急傾斜だが、南東側にテラス状の平坦面があり、そこでは階段状となる。覆土は 11 層に識別される。1 ～ 8 層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、遺構覆土は 9・10 層となり、レンズ状に堆積する。また、11 層は本遺構構築前の SR1 の堆積層と考えられる。遺物は漆器椀・漆器皿（79–206）・斎串・楔（79–209）・草履芯（79–207）・曲物側板・曲物底板（79–208）・箸状木製品・部材・串が出土した。

SK206（図版 26・31・120）

6E18･23 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 145cm、短径 107cm である。断面形は台形状で、深さ 33cm である。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜である。覆土は 5 層に識別される。1 ～ 4 層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、遺構覆土は単層となり、レンズ状に堆積する。遺物は曲物底板･円形板（79–212）・箸状木製品・部材・障子？（79–210・211）・串が出土した。

SK207（図版 25・26・31・120）

6E12・13・17・18 グリッドに位置する。重複関係は P222 に切られている。平面形は方形で、長径 160cm、短径 142cm である。断面形は台形状で、深さ 38cm である。壁は急傾斜だが、西側にテラス状の平坦面があり、そこでは階段状となる。覆土は 6 層に識別される。1・2 層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、遺構覆土は 3 ～ 6 層となり、灰オリーブ色シルトを主体に水平に堆積する。遺物は漆器椀・斎串・曲物側板・曲物底板・箸状木製品・部材・脚？（79–213）が出土した。

SK211（図版 25・31・120）

6E7・8 グリッドに位置する。重複関係は SK227 を切っている。平面形は長方形で、長径 230cm、短径 132cm である。断面形は台形状で、深さ 41cm である。壁は急傾斜で、底面南側に深さ 30cm のピットがある。覆土は 7 層に識別される。1 ～ 3 層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、遺構覆土は 4 ～ 7 層となり、黒色土を主体としたレンズ状に堆積する。また、黒色土に多量のシルトブロックが含まれることから、埋戻しが行われたと考えられる。遺物は茅針（79–214）・曲物側板・折敷・小型蓋・有孔円板（79–215）・箸状木製品・部材・串・杭・楔状鉄製品（64–43）が出土した。

SK227（図版 25・31・120）

6E7・12 グリッドに位置する。重複関係は SK211 に切られている。平面形は方形で、残存長径 178cm、短径 157cm である。断面形は弧状で、深さ 32cm である。壁は急傾斜だが、南壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積はレンズ状で、3 層に識別される。遺物は草履芯・箸状木製品が出土した。

SK260（図版 26・32・121）

5E20・25、6E16・21 グリッドに位置する。重複関係は SX277 に切られている。平面形は楕円形で、長径 320cm、残存短径 235cm である。断面形は弧状で、深さ 60cm である。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、覆土は黒色腐植土の単層である。遺物は漆器椀・鳥形（80–217・218）・刀形（79–216）・斎串・連歯下駄（80–219）・露卯下駄（80–200）・下駄歯・曲物側板・折敷・蓋（80–222）・箸状木製品・柄付木製品・角材・杭・鋏（64–44）・鎌柄（80–221）が出土した。

SK476（図版 26・32・121）

7E12・13・16 ～ 18・21・22 グリッドに位置する。重複関係は P668、SX670 に切られている。平面形は長方形で、長径 558cm、短径 150cm である。断面形は台形状で、深さ 38cm である。壁は急傾斜で、

底面はほぼ平坦となる。覆土の堆積は斜位で、腐植土を主体とした５層に識別される。遺物は漆器椀（80–224）・茅針（80–226）・曲物側板・曲物底板・箸状木製品・枘付木製品（80–225）・部材・角材・杭・不明木製品のほか、底面から編組が出土した（176–306）。

SK490（図版 26・32・121）

7F18・19・23・24 グリッドに位置する。重複関係は SK512、P661 を切っている。平面形は長径 210cm、短径 84cm の楕円形である。断面形は深さ 62cm の台形状である。壁は急傾斜だが、北西側にテラス状の平坦面があり、そこでは階段状となる。覆土は６層に識別される。１～５層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、以降覆土は単層となり、レンズ状に堆積する。遺物は曲物底板・箸状木製品・杭・釘が出土した。

SK491（図版 26・32・122）

7F2・7・8・12 グリッドに位置する。平面形は不整形で、長径 294cm、短径 189cm である。断面形は弧状で、深さ 20cm である。壁は緩やかに立ち上がる。底面にはピットが２基あり、東側のものは深さ 9cm である。覆土は４層に識別される。１～３層は本遺構埋没後の SR1 の堆積層で、覆土は単層となり、レンズ状に堆積する。遺物は茅針・曲物側板・箸状木製品・部材・銭貨が出土した。銭貨（64–72～81）は 10 枚が重なった状態で出土した。

SK492（図版 26・33・122）

6F10・15、7F6・11 グリッドに位置する。重複関係は SX626 を切っている。平面形は不整形で、長径 270cm、短径 172cm である。断面形は弧状で、深さ 48cm である。壁は急傾斜だが南側は、緩やかに立ち上がる。覆土の堆積はレンズ状で、６層に識別される。遺物は漆器椀・刀子柄・鑿柄（80–227）・曲物側板・折敷・箸状木製品・部材が出土した。

SK502（図版 26・33・122）

7F11･12 グリッドに位置する。平面形は円形で、長径 144cm、短径 120cm である。断面形は弧状で、深さ 30cm である。壁は急傾斜だが、北西側は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。覆土の堆積はレンズ状で、６層に識別される。また、腐植土が底面を覆うように堆積する。遺物は木製円板・箸状木製品・部材・編組籤（80–228）が出土した。

SK503（図版 26・33・122）

6F15・20、7F11・16 グリッドに位置する。重複関係は SK514 を切っている。平面形は楕円形で、長径 230cm、短径 146cm のである。断面形は弧状で、深さ 29cm である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土の堆積はレンズ状で、灰オリーブ色シルトを主体とした５層に識別される。堆積状況などから、遺構が重複していた可能性がある。遺物は茅針・曲物側板・曲物底板・箸状木製品・部材・杭が出土した。

SK504（図版 25・33・123）

7E3･8･9 グリッドに位置する。重複関係は SD113 に切られている。平面形は遺構の重複により不明で、残存長径 280cm、残存短径 89cm である。断面形は台形状で、深さ 28cm である。壁は急傾斜で、底面は平坦である。覆土の堆積は斜位で、灰色土を主体とした４層に識別される。遺物は珠洲焼片口鉢（61–41）・箸状木製品が出土した。

SK508（図版 26・33・123）

7F11 グリッドに位置する。平面形は円形で、長径 61cm、短径 52cm である。底面はほぼ平坦で、断

面形は弧状で、深さ 36cm である。壁は直立し、底面は平坦である。覆土の堆積は腐植土の単層である。遺物は銭貨（64–82）が出土した。

SK512（図版 26・33・123）

7F18・19 グリッドに位置する。重複関係は SK490 に切られている。平面形はプランを確認できずに掘り下げてしまったため不整形で、残存長径 180cm、短径 146cm である。断面形は弧状で、深さ 26m である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は水平で、7 層に識別される。遺物は漆器椀･箸状木製品･部材が出土した。

SK514（図版 26・34・123）

6F20 グリッドに位置する。重複関係は SK544 に切られている。平面形は楕円形で、残存長径 94cm、短径 68cm である。断面形は弧状で、深さ 20cm である。壁は緩やかに立ち上がるが、東壁は急傾斜である。覆土はレンズ状で、3 層に識別される。遺物は出土していない。

SK520（図版 26・34・124）

6F19・20・24・25、6G5 グリッドに位置するが、南側は調査区外へ続いている。重複関係は P605、SX653 を切っている。平面形は不整形で、長径 306cm、残存短径 150cm である。断面形は弧状で、深さ 22cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は水平で、8 層に識別される。各層の厚さは薄く、4 ～ 8 層は黒色土と腐植土の互層となる。遺物は漆器椀・斎串・下駄歯・曲物側板・杓子・箸状木製品・部材が出土した。

SK528（図版 26・34・124）

6F20・25、7F16・21 グリッドに位置する。重複関係は SX518 に切られ、SD595 を切っている。平面形は不整形で、長径 170cm、短径 118cm である。断面形は弧状で、深さ 20cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は水平で、灰オリーブ色シルトを主体とした 3 層に識別される。遺物は出土していない。

SK530（図版 27・28・34・124）

7H5、8H1 グリッドに位置する。重複関係は SD531 を切っている。平面形は不整形で、長径 122cm、短径 85cm である。断面形は台形状で、深さ 18cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は斜位で、2 層に識別される。遺物は出土していない。

SK542（図版 27・28・34・124）

7H10、8H6 グリッドに位置する。重複関係は、SD541 に切られている。平面形は方形で、残存長径 96cm、短軸長 78cm である。断面形は台形状で、深さ 29cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、4 層に識別される。遺物は漆器椀・連歯下駄・箸状木製品・部材が出土した。

SK543（図版 27・28・34・125）

7H9・10 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 150cm、短径 90cm である。断面形は台形状で、深さ 14cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は斜位で、2 層に識別される。遺物は箸状木製品･部材が出土した。

SK554（図版 27・28・35・125）

7G19・20・23・24 グリッドに位置する。平面形は長径 232cm、短径 110cm の不整形である。断面形は台形状で、深さ 17cm である。壁は急傾斜である。覆土は黒色腐植土の単層である。遺物は下駄歯･箸状木製品・部材が出土した。

SK589（図版 27・28・34・125）

8G11・12・16・17 グリッドに位置する。平面形は不整形で、長径 356cm、短径 120cm である。断面形は弧状で、深さ 11cm である。壁は緩やかに立ち上がるが、南西側に細長いテラス状の平坦面があり、そこでは階段状になる。覆土は黒褐色シルトの単層である。遺物は折敷底板（80–229）・箸状木製品・部材・杭が出土した。

SK619（図版 27・35・125）

7G3 グリッドに位置する。平面形は方形で、長径 84cm、短径 70cm である。断面形は台形状で、深さ 24cm である。壁は急傾斜で、底面は平坦である。覆土の堆積はレンズ状で、3 層に識別される。遺物は出土していない。

SK641（図版 26・35・126）

7E11・12・16・17 グリッドに位置する。重複関係は SD495 に切られている。平面形は長方形で、長径 180cm、短径 75cm である。断面形は弧状で、深さ 9cm である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土の堆積はレンズ状で、2 層に識別される。遺物は箸状木製品・部材が出土した。

SK660（図版 25・26・35・126）

6E15、7E11 グリッドに位置する。平面形は暗渠による削平により不明で、残存長径 191cm、残存短径 115cm である。断面形は弧状で、深さ 9cm である。遺物は箱・箸状木製品（81–230 ～ 237）・板材・木釘（81–238 ～ 242）が出土した。なかでも底面直上からは、箸状木製品 8 本と木釘 36 本がそれぞれまとまった状態で出土した（図版 126）。

SK678（図版 25・30）

6D18・23・24 グリッドに位置する。重複関係は SK176・177 を切っている。平面形は長方形で、長径 138cm、短径 108cm である。断面形は台形状で、深さ 29cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積は斜位で、黒色土を主体とした 3 層に識別される。遺物は出土していない。

SK837（図版 27・28・35・126）

8H11・12 グリッドに位置する。重複関係は SK853 を切る。平面形は円形で、長径 125cm、短径 110cm である。断面形は台形状で、深さ 36cm である。覆土の堆積はレンズ状で、1・3 層が灰色シルト、2 層がオリーブ黒色腐植土、4 層が灰オリーブ色植物腐植土に識別される。遺物は箸状木製品・部材・板材・角材が出土した。

SK853（図版 27・28・35・126）

8H11・12・16・17 グリッドに位置する。重複関係は SK837 に切られる。平面形は楕円形で、長径 214cm、短径 66cm である。断面形は台形状で、深さ 56cm である。覆土の堆積はレンズ状で、1・3 層が黒色腐植土、2 層がオリーブ黒色シルトに識別される。遺物は珠洲焼片口鉢（86–2）・珠洲焼甕または壺の体部片・箸状木製品、部材が出土した。

2）柱　・　柱　穴

82 基検出した。柱根の残存していたものは掘形柱 6 基、打ち込み柱 7 基の計 13 基である。上位面に比べて、柱根の残存比率が 16%と低くなる。

P551（図版 26・27・36・127）

7F11 グリッドに位置する打ち込み柱である。柱根は芯去削り出し材を用い、先端は平坦である（81–

244)。別の用途に用いられた材の転用とも考えられる。樹種はスギである。

P669（図版 26・36・127）

7F1 グリッドに位置する打ち込み柱である。柱根は半割材を用い、先端に向かって細く加工されている（81-245)。また、側面にも加工痕が残る。樹種はモクレン属である。

3）杭　　列

5 列検出した。上位面のものと比べて規模も小さく、特定の溝に沿って構築されるものような特徴も見出せない。

SA215（図版 25・26・36・127）

6E13・18・19 グリッドに位置する 5 基の杭によって構成される。杭は直線状に並び、全長は 2.2m である。杭の径は 1 ～ 5cm で、長さ 6 ～ 35cm である。

4）杭　・　串

108 基検出した。SD113 の内部に構築されるものは、上位面で検出した SD111 の内部に構築された杭列や杭と同様の機能が考えられる。串に分類できるものでは、6E11・12 グリッドで多く検出したが、上位面ほどの集中は見いだせなかった。なお、杭とともに部材が関連すると考えられる遺構を 3 基(SX277・507・537）検出したが、いずれも全容が不明であるため、ここで扱うこととした。

SX116・117・118・119（図版 29・36・127）

8F5 グリッドに位置し、4 基が 60cm の間に近接して打ち込まれている。SD113 の底面で検出した。SX116 は径 2cm、残存長 4cm、SX117 は径 4cm、残存長 9cm、SX118 は径 4cm、残存長 22cm、SX119 は径 3cm、残存長 6cm である。溝と関連した構築物と考え、杭とした。

SX120（図版 29・36）

8F4 グリッドに位置する。SD113 の底面で検出した。径 3cm、残存長 10cm である。溝と関連した構築物と考え、杭とした。

SX121（図版 29・36・127）

8F10 グリッドに位置する。SD113 の壁面で検出した。径 4cm、残存長 36cm である。溝と関連した構築物と考え、杭とした。

SX122・123・124（図版 29・36・127）

8F15 グリッドに位置し、3 基が 75cm の間に近接して打ち込まれている。SX501 の壁面で検出した。SX122 は径 5cm、残存長 34cm、SX123 は径 4cm、残存長 34cm、SX124 は径 2cm、残存長 27cm である。いずれも断面形が円形であることから杭と考えた。

SX248（図版 26・36）

6F12 グリッドに位置する。径 3cm、残存長 49cm である。径は大きくないものの、長さがあることから杭（81-247）と考えた。樹種はスギである。

SX277（図版 26・32）

5E25 グリッドに位置し、4 基の杭（SX277-1 ～ 4）と曲物底板（SX277-5）で構成される。杭は SK260 の上端近くに打ち込んであり、SX277-1 は曲物底板（82-249）に当たって止まっている。この曲物底板が本来SK260に伴う遺物とすると、杭はSK260の覆土堆積後に打ち込まれたものと考えられる。

SX277–1 は径 8cm、残存長 13cm、2 は径 4cm、残存長 44cm、3 は径 3cm、残存長 35cm で、4 は径 6cm、残存長 16cm である。図示した SX227–2（81–248）の樹種はヤナギ属である。

SX507（図版 25・36）

7E12・13 グリッドに位置し、板状の部材（SX507–1）と 2 基の杭（SX507–2・3）で構成される。部材は長さ 110cm、幅 14cm、厚さ 3cm が残存しており、これを留めるように 2 基の杭が打ち込まれていた。SX507–2 は径 2cm、残存長 17cm、3 は径 3cm、残存長 17cm である。

SX518（図版 26・36）

7F16 グリッドに位置する。径 8cm、残存長 35cm である。部材を転用し、打ち込んだものと考えられる（81–250）。樹種はコナラ属コナラ亜属コナラ節である。

SX537（図版 26・36）

7F21 グリッドに位置し、板状の部材（SX537–1）と 1 基の杭（SX537–2）で構成される。部材は長さ 72cm、幅 8cm、厚さ 3cm が残存しており、これを留めるように杭が打ち込まれていた。SX537–2 は径 1cm、残存長 22cm である。

5）溝

40 条検出した。大きくは「屋敷地」の周囲を取り囲んで構築されるもの（SD113）と「屋敷地」の内部に構築されるものの 2 つに分けられる。

上位面で「屋敷地」の周囲を取り囲んで構築されていた溝は、北西側にある SD113 のみとなる。「屋敷地」の内部に構築される溝は北西から南東方向に延びるものが多く、配置の規則性がうかがえる。

SD113（図版 21・24・25・29・113）

5・6C、6・7D、7・8E、8 ～ 10F、9・10G グリッドに位置し、上下 2 面でもほぼ同位置で溝を確認している。重複関係は SK504 を切っているほか、壁・底面で単独の杭 11 基を検出した。直線状に北東から南西方向に延びるが、5C グリッドで大きく折れている。両端は調査区外へ続いており、確認長は 63.8m である。断面形は弧状または台形状で、幅が 90 ～ 320cm、深さが 24 ～ 40cm である。覆土の堆積はレンズ状で、4 層に識別される。西壁は水田耕作土であるⅫ・ⅩⅣ層を掘り込んでいるのに対し、東壁は砂を含む緑灰色シルトを用いた人為的な盛土によって築いた土手を壁としている。遺物は露卯下駄歯（81–252）・曲物側板・底板・小型円板（81–251）・箸状木製品・部材・枘付木製品（81–253）・柱根・杭が出土した。

SD259（図版 24・36・128）

5・6C グリッドに位置する。SD111 に沿って、調査区南端にある。湾曲しながら北西から南東方向に延びており、長さは 4.7m である。断面形は V 字状で、幅が 58 ～ 86cm、深さが 28cm である。壁は急傾斜である。底面は北西側が高く、南東側に向かって低くなる。遺物は土師質土器(61–40)・箸状木製品・部材・枘付木製品（81–254）が出土した。

SD499（図版 26・36・128）

7E・F グリッドに位置する。重複関係は SK498 に切られている。ほぼ直線状に北西から南東方向に延びており、長さは 4.5m である。断面形は台形状で幅が 54 ～ 64cm、深さが 16cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は斜位で、3 層に識別される。青灰色シルトと黒色腐植土の互層である。遺物は部材が出土した。

SD531（図版 27・28・36）

7G・H、8G・H グリッドに位置し、北側は調査区外へと続いている。重複関係は SK530 に切られ、SD590 を切っている。直線状に北西から南東方向に延び、北側は調査区外へ延びており、確認長は 4.9m である。断面形は台形状で、幅は 30 ～ 66cm、深さが 30cm である。壁は急傾斜で、底面は平坦である。遺物は出土していない。

SD590（図版 27・28・36・128）

7G・H、8G グリッドに位置する。重複関係は SD531 に切られている。直線状に北西から南東方向に延びており、確認長は 2.2m である。断面形は台形状で、幅が 34 ～ 42cm、深さが 16cm である。壁は急傾斜である。覆土の堆積はレンズ状で、黒褐色シルトの 2 層に識別される。遺物は箸状木製品・部材が出土した。

SD606（図版 26・36・128）

7F グリッドに位置する。重複関係は SX537 に切られる。直線状に北西から南東方向に延びており、長さは 2.0m である。断面形は弧状で、幅が 64cm、深さが 12cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は斜位で、灰オリーブ色シルトの 2 層に識別される。遺物は出土していない。

SD635（図版 27・28・36・128）

8G グリッドに位置する。直線状に北西から南東に延びており、長さは 2.4m である。断面形は半円状で、幅が 10 ～ 29cm、深さが 7cm である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土の堆積は斜位で、2 層に識別される。1 層は黄灰色シルト、2 層は黒色シルトである。遺物は出土していない。

SD857（図版 28・36・128）

8H・I グリッドに位置する。直線状に北東から南西方向に延びており、残存長は 2.5m である。断面形は弧状で、幅が 55 ～ 65cm、深さが 14cm である。覆土の堆積はレンズ状で、2 層に識別される。1 層は灰色シルト、2 層は黒色腐植土である。遺物は珠洲焼片口鉢（86-3）・箸状木製品・板材・角材が出土した。

6）窪　　地

大型の窪地 3 基（SX501・536・556）と小型の窪地 4 基（SX813・816・820・821）を検出した。人為的に掘削された遺構ではなく SR1 の流路痕跡であるが、遺構番号を付けて報告する。いずれの窪地も調査区外へと延びていることもあり、その規模を明確にし得ない。また、大型の窪地は掘り上がりの段階で始めて認識し、そのために図版　の SD111・113・150 の断面 A–A' と B–B'（図版 21）では、本来あるはずの SX501 が表現されていない。

SX501（図版 26・27・29）

7E・F、8E・F・G、9F・G、10G グリッドに位置するが、東側は調査区外へ続いている。重複関係は P115、SX103 ～ 105、108 ～ 110、122 ～ 124 を壁・底面で検出した。確認長径 26.8m、短径 5.5m、深さ 28cm である。遺物は折敷・箸状木製品・部材が出土した。

SX536（図版 26・27・29）

7F・G、8F・G グリッドに位置するが、東側は調査区外へ続いている。重複関係は SX106・570 ～ 572・581・665 を壁・底面で検出した。確認長径 14.5m、確認短径 4.9m、深さ 23cm である。遺物は出土していない。

SX556（図版 27・28）

7H グリッドに位置するが、確認できたのはその一部である。確認長径 9.2m、確認短径 2.6m、深さ 14cm である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は曲物側板、箸状木製品、部材、杭が出土した。

C　SR2、XVII層の遺構

SR2 の底面またはXVII層の上面で検出した遺構である。2010 年度の調査から、遺構群の周囲は上位面と同様に水田に囲まれていたことが明らかとなり、SR2 とした範囲は上位 2 面で「屋敷地」とした部分に、XVII層とした範囲は「水田域」とした部分にほぼ対応する。「屋敷地」の北西側は上位 2 面と同様に溝が水田域との境となり、南西側ではコンタが密となる段差として捉えられた。水田面との時間的関係については明らかにし得ないが、基本層序の堆積状況から類推して、概ね「XVI層水田面」が営まれていた時期の遺構群と考えられる。土坑 1 基、柱・柱穴 19 基、杭列 5 列、杭・串 56 基、灰分布遺構 1 基、溝 2 条を検出した。遺構数は少ないが、上位 2 面の遺構掘削に伴って失われたものも多いと考えられる。また、2011 年度調査では遺構はなかったが、8I7 グリッドで第四号木簡（89–39）が出土した。

1）土　　坑

SK679（図版 40）

7G14・19 グリッドに位置する。平面形は暗渠による削平により不明で、確認長径 44cm、短径 73cm、深さ 12cm である。遺物は出土していない。

2）柱　・　柱　穴

19 基検出した。柱根の残存していたものは掘形柱 2 基、打ち込み柱 2 基の計 4 基である。特筆すべき配置・集中は認められなかった。

3）杭　　列

5 列検出した。SA16 ～ 18、134 の 4 列は、8E・F、9F・G グリッドでほぼ平行して構築されている。残る SA280 は 153 基の杭が密に打ち込まれるもので、異質な印象を受ける。さらにこの杭列の南東方向には畦畔 501 が位置する。この畦畔 501 でも、畦畔上に杭列（SA716）が構築されていることを考え合わせれば、SA280 が畦畔と関連していた可能性が高い。

SA16（図版 40・130）

8F、8･9G グリッドに位置する 14 基の杭によって構成される。杭は弧状に並び、全長は 17.9m である。杭間は SA16–7 から 14、10 の間では 2.3 ～ 4.7m と長くなる。杭の径は 2 ～ 6cm で、残存長は 13 ～ 57cm である。

SA17（図版 40・130）

8F、8･9G グリッドに位置する 4 本の杭によって構成される。杭は直線状に並び、全長は 4.7m である。杭の径は 4 ～ 10cm で、残存長は 17 ～ 66cm である。

SA18（図版 40・130）

8F・G グリッドに位置する 3 基の杭によって構成される。杭は直線状に並び、全長は 4.9m である。

杭の径は 2 ～ 7cm で、残存長は 15 ～ 43cm である。

SA280（図版 39・129）

5D、5・6E グリッドに位置する 153 基の杭によって構成される。杭は直線状に並び、全長は 12.8m である。杭は全て径が小さく、残存長も平均 16.1cm と短い。これらの杭は互いに近接し、ほぼ垂直に打ち込まれている。杭の径は 1 ～ 2cm で、残存長は 5 ～ 42cm である。

4）杭　・　串

56 基検出した。杭と考えられるものが多く、特に SA16 に近接して検出されたものは本来、杭列を構成するものの可能性がある。串に分類できるものでは、6F1 ～ 3、6 ～ 8 グリッドで多く検出したが、SR1–1・2 層で確認したほどの集中は見いだせなかった。

5）灰 分 布 範 囲

灰の分布を確認した範囲で、1 基検出した。周囲に遺構は存在せず、単独で位置する。

SX676（図版 40）

7G1 グリッドに位置する。灰が分布する範囲で、これと共に骨片が少量散布していた。確認した範囲は不整形で、長径 71cm、短径 40cm である。被熱によるものか断定にまでは至らないが、周囲がわずかに赤く変色していた。

6）溝

2 条検出した。SD150 は「屋敷地」の周囲を取り囲んで構築されたものと考えられる。

SD150（図版 21・40・113・130）

5・6C、6・7D、7・8E、8 ～ 10F、9・10G グリッドに位置し、上位 2 面でもほぼ同位置で溝を確認している。直線状に北東から南西方向に延びるが、5C グリッドで大きく折れている。両端は調査区外へ続いており、確認長は 63.8m である。断面形は弧状または台形状で、幅が 100 ～ 260cm、深さが 15 ～ 55cm である。XIV層の堆積により埋没していることから、SD150 はXVI層水田面時に機能していた可能性が高い。遺物は漆器椀（84–296）・箸状木製品・部材・杭が出土した。

SD279（図版 39）

6F グリッドに位置する。北東側は平面的に確認できなかった。等高線に沿って直線状に北東から南西方向に延びており、確認長は 3.2m である。幅は 4.5cm、深さが 33cm である。遺物は出土していない。

3　水田域の調査

A　水田調査の概要

水田域は 2009 ～ 2011 年度に調査を行い、VIII層、X 層、XII層、XIV層、XVI層を水田耕作土とする水田を検出した。

2009 年度の調査では、南区 1 屋敷地の南西側、3G グリッドから北は 6G、西は 4D グリッドの範囲で水田を検出した（第 8 図参照）。2010 年度の調査におけるX 層水田と連続する同一面である。平面的な調査はこの 1 面のみで、これ以下の土層についてもトレンチ調査し断面を観察したが、XII層、XIV層、

XVI層については認識できなかった。そのため 2009 年度の調査時ではⅩ層以下を、自然流路による堆積と考えて「SR165」として調査を行った。しかし、2010 年度の調査を経て、これは誤りでⅩ層以下にも 3 面の水田が存在したと認識を改めた。これを受け、報告に際しては「SR165」は用いずに各水田層に振り替えて行うべきであると考えた。しかし、SR165 については 2010 年度の調査との整合に不確定な部分を残すほか、出土遺物の取り扱いにも苦慮した。そのため、以下の報告については「2009 年度の調査で SR165 とした範囲は自然流路ではない。正しくはⅩ層及びXII層、XIV層、XVI層の各水田耕作土が重なって形成された水田域であった」ことを再度明示し、過度の修正は行わないものとした。そのため、図版 21 の断面図と土層説明についても、2010 年度の調査の知見を補足するに留めている。SR165 として調査した部分について以上のように理解すると、Ⅹ層水田段階では北西の「屋敷地」との間はほぼ平坦であるが、これは両者の間にあった段差が水田耕作土の堆積により、徐々にその差を縮めて平坦になった可能性がある。また、SR165 出土遺物としたものの中には、人形（69–59）や斎串（69–60）などがあり、杭 19 本と雑木 659 点については畦畔構築材や粗朶であった可能性が高い。これ以外にも、2009 年度の調査時に大畦畔や溝としていたものが 2010 年度の調査を経て、「地盤沈下により生じた地形の凹凸」であったと認識を改めた部分がある。

2010 年度の調査では、南区全域・北区 1（南側）でⅩ層、XII層、XIV層、XVI層を水田耕作土とする水田を検出した（第 8 図参照）。このうち畦畔の検出が困難と予想された最も新しい段階のVIII層を除く、Ⅹ層、XII層、XIV層、XVI層の水田について、南区 1・2 では平面的な調査を行った。しかし、北区 1（南側）はトレンチによる土層観察の結果、南区と比べ畦畔の遺存状態が不良であることが想定されたため、平面的な調査は溝 2 条を検出したⅩ層のみとした。調査によって検出した地形は水田埋没後に発生した噴砂による地盤沈下の影響を大きく受けており、特に南区 1・2 で顕著であった[1)]。そのため調査で得られた各水田面の標高や地形は水田が営まれていた当時のものではなく、本来有していたと考えられる各水田区画の高低差についても明確にすることができなかった。水田以外の遺構は溝、杭列、杭、性格不明遺構を検出した。水田との関連がうかがわれる溝と SA716 以外の遺構はいずれも 5C・D グリッド周辺に位置し、数も多くはない。これらは屋敷地の外縁に位置するものと考えられる。

2011 年度は、10 グリッドから北側を調査した。これに該当する調査区は北区 1（北側）、北区 2、北区 3 である（第 8 図参照）。これまでの調査から水田が 5 面あることが確認されており、北区 1（北側）・北区 2 でも南区と同様に水田が存在することを想定し調査を行った。調査区の周囲に土層観察用のトレンチを掘削し、水田耕作土の堆積状況及び畦畔の高まりを確認した上で、平面的な調査を行う水田面を決定した。その結果、北区 1（北側）はXVI層上面、北区 2 はXIV層上面とした。水田以外では溝、土坑、杭列、杭、ピットを検出した。また、北区 3 は北区 2 のⅩ層上面で検出した SD870 及び SA871 が北へ延びることを想定し、追加調査を行った範囲である。北区 3 では、XII層で珠洲焼や砥石、木製品が出土し、柱穴や杭列を検出したことからXII層についても調査を行った。なお、2010 年度の調査で顕著に認められた墳砂の影響はほとんどなかった。

以下、各水田について検出順に、水田域は屋敷地を境に南区 1・2 と北区 1 ～ 3 に分かれるため、南区と北区に分けて記述する。各水田については層位での表記と併記して、検出順を示す 1 ～ 5 枚目水田の表記を用いる場合もある。畦畔については、直進する 1 本を一単位とし、番号は百の位に検出順の番号

1）参考までに図版 41・45 に破線で平面的に確認できた噴砂の筋を示した。この筋の周囲で特に沈下が顕著となる。

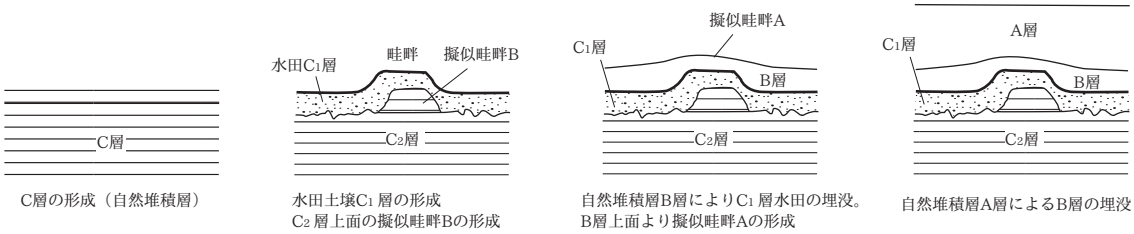
を冠した３桁の数字を用い、例えばⅫ層の３枚目水田であれば「畦畔 301」からとした。なお、畦畔がわずかしか残存しない場合も一単位とし、個別の番号を付した。記述に用いる用語、部位名称などは西部遺跡Ⅳの調査［村田ほか 2009］を参考とした。また、擬似畦畔の認識や名称に関しては、斎野裕彦氏の分類［斎野ほか 1987］を参考にした（第 12 図）。模式図の説明は以下の通りである。

「C_1 層が水田土壌であり、C_1 層上面において水田耕作が行われており他層は自然堆積層である。また C_1 層は C 層最上部が水田土壌化された層であり、C_2 層は水田土壌化されなかった C 層である。

擬似畦畔 A：C_1 層水田の畦畔直上に認められる自然堆積層 B 層上面の畦畔状の高まりをいう。これは B 層が C_1 層上面の起伏の影響を受けて堆積した結果形成されたものである。

擬似畦畔 B：C_1 層水田の畦畔直下に認められる C_2 層上面の畦畔状の高まりをいう。これは C_1 層水田の耕作の影響をさほど受けない畦畔直下において C_2 層が畦畔状に残存したものである。この擬似畦畔 B については、C_1 層上面において畦畔が検出されなくとも C_2 層上面での擬似畦畔 B の検出により C_1 層水田の存在が想定される。

尚、擬似畦畔 A・擬似畦畔 B は全ての畦畔に関して認められるものではない。」



第 12 図　畦畔・擬似畦畔模式図

（『富沢－富沢遺跡第 15 次発掘調査報告書』［斎野ほか 1987］P.91-92 を改変）

B　Ⅷ層水田面（1 枚目水田）の遺構

1）南　　区

Ⅷ層を水田耕作土とした水田で、下層で屋敷地であった所を含む調査範囲全域に広がると考えられる。平面的な調査を行っていないが、土層観察時に堆積土の撹拌が認められたことから想定した最も新しい段階の水田である。このⅧ層の上には、いわゆるガツボを主体としたⅦ層が堆積する。Ⅷ層からⅦ層へは漸移的な変化で移行しており、湿地化に伴う堆積環境の変化をうかがわせた。そのため畦畔の遺存状態も不良であることが想定され、調査区壁での土層観察でも畦畔の高まりを確認できなかったことから、平面的な調査を行わないものとした。

2）北　　区

Ⅷ層は調査区全域に広がる。南区同様に、Ⅶ層（ガツボ層）の影響により水田面の遺存状態は不良である。Ⅷ層は灰色砂質シルトで、白色粒が混入する。Ⅷ層下位は、砂質がより強い。Ⅷ層下面は耕作の影響で、やや起伏する。北区 1 では、調査区壁面の土層観察で畦畔が確認できなかったことから、平面的な調査は行わないものとした。北区 2 西側で、Ⅷ層の高まりを検出したことから平面的な調査を行い、Ⅷ層上面が高まる SX880 と杭 1 基（SX879）を検出した。

SX880（図版 1・138）

15C5・9・10、16C1・6 グリッドに位置する。規模は遺存長 4.2m、下端幅 90 ～ 105cm である。

高さは 10 ～ 14cm である。方向は N-62°-W で、直線的に延びる。Ⅷ層が水田耕作土と考えられることから、SX880 はⅧ層水田に伴う畦畔と考えた。畦畔は水田耕作土を盛り上げて構築していることから、畦畔土と水田耕作土との識別は困難であった。水田面の標高は -0.55 ～ -0.59m で、SX880 を境に北側がわずかに低くなる。SX880 を掘削したが、遺物は出土しなかった。

SX879（図版 1・138）

15C4 グリッドに位置する。断面観察では掘形は認められず、打ち込まれたものと考えられる。杭の大きさは直径 6cm、残存長 60cm である。北側には SX880 が位置するが、SX880 との関係は不明である。

C　X層水田面（2 枚目水田）の遺構

1）南　　区

X層を水田耕作土とする水田である。この範囲は、2009 年度及び 2010 年度に調査を行った。2009 年度の調査では畦畔 4 条、2010 年度の調査では畦畔 13 条のほか、溝 1 条を検出した。南区 1・2 では、Ⅷ層との間に砂を主体とするⅨ層を挟んでいた。そのため、このⅨ層を取り除くと畦畔が露出することで、その検出は比較的容易であった。しかし、畦畔の遺存状態は東側ほど不良である。これが原因してか、遺存状態が比較的良好であった 2010 年度で検出した水田とは畦畔形状が一致せず、不整合となってしまった部分も存在する。

a　水　　田（図版 2・40・98・99・139 ～ 142）

畦畔は、2009 年度の調査では 4 条（畦畔 201 ～ 204）、2010 年度の調査では 13 条（2009 年度に検出した畦畔 201 の続きを含む）を検出した。いずれも断面形状は台形である。畦畔はX層の水田耕作土を盛り上げて構築していることから、畦畔構築土と水田耕作土の識別は困難であった。

畦畔の下面幅は 0.26 ～ 3.70m である。畦畔 201 は調査年度によって幅が異なるなど、遺存状態と調査経過に起因した差異が存在する。畦畔 201 については、遺存状態が良好であった 2010 年度調査の幅が正しく、2009 年度に検出した幅は一部の畦畔に起因する擬似的な高まりを誤認したものと考えられる。2010 年度に検出した畦畔 201 では、畦畔 209 と接する部分で階段状に幅を広くするほか、畦畔 209 では2Dグリッドで1.4mに渡り、幅1.44mまで張り出す部分がある。畦畔の高さは4～22cmとなっている。なお、畦畔 216 は調査区壁の断面観察時に確認したもので、平面的には認識できなかったものである。

方向は軸を西に 21°～ 41°傾く一群（畦畔 204、205、209 ～ 214）とこれに直交するように東に 40°～ 72°傾く一群（畦畔 201、206 ～ 208）により方形基調の水田区画を形成したものと考えられる。だたし、畦畔 202・203 のように東に 5°～ 14°傾く畦畔も、調査区の東側で確認できる。また、畦畔 215 のみ南北方向とほぼ軸線が一致することから、軸方向を違えた水田区画が調査区の東側に広がる可能性が指摘できる。なお、屋敷地との境界を成す畦畔は検出されず、水田域との間にわずかな段差を検出したに留まる。そのため境界は明確にできないが、SD112 と SD114 の間の幅 4m の空間を「屋敷地と水田域を行き来する土橋」と仮定するならば、両溝が水田との実質的な境であったと考えられる。

水口は 5 か所で確認した。水口 A と B は 3G7・8・13 グリッドの畦畔 204 上に間隔 1.7m と近接して位置する。掘形は畦畔を切り、さらに水田面から水口 A では 2cm、水口 B では 5cm 下まで深く掘りこまれていた。また、2D5 グリッドの畦畔 209 上にも水口が位置する。掘形は畦畔を切り、さらに水田面から 3cm 下まで深く掘りこまれていた。SD700 の両末端がそれぞれ畦畔を切っており、これも同様

の機能を果たしたと考えられる。いずれの水口も水田を覆うものと近似した砂により閉塞していたことから、Ⅸ層堆積時には開口していたものと考えられる。

畦畔によって構成される水田区画については、調査範囲の制約もあり、全体を把握できたものはない。水田区画を推定できる部分では、畦畔 201・202・203 により想定される推定面積 60m² の区画、畦畔 201・208・209・210・213 により想定される推定面積 330m² の区画、畦畔 206・209・211・216 により想定される推定面積 160m² の区画、畦畔 207・209・211・216 により想定される推定面積 350m² の区画がある。

水田面は砂で埋没した大小無数の足跡と考えられる凹凸で覆われていた。これらの平面形態は特定の形状を有さない不整形で占められている。中には、平面形が人間の素足に似た足跡状のものもあるが、断定までは至らない。この凹凸は大きなものでは長径 25cm 前後となり、深さは 1 ～ 4cm のものが多い。そのほか牛や馬といった動物の足跡については、その存在を含めて明確にできなかった。

b　溝

1 条を検出した。軸方向に畦畔との共通性がうかがわれ、水田と共通の規格性の下で構築されたものと考えられる。形成要因については畦畔盛り上げに伴う畦畔脇の掘削痕などが想定できる。

SD700（図版 41・142）

2D・E、3E グリッドに位置する。重複関係は畦畔 209・210 を切る。直行しながら北東から南西方向に延びており、全長は 18.2m である。断面形は弧状だが、畦畔 210 を切っている部分など一部では台形状となる。幅が 56cm、深さが 4 ～ 9cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は褐色砂の単層である。遺物は出土していない。両末端が畦畔 209、210 を切っており、それぞれ水口としても機能したと考えられる。

2）北　　区

Ⅹ層は調査区全域に広がる。Ⅹ層水田面は、Ⅸ層で覆われていたことから、遺存状況は比較的良好であった。Ⅹ層の水田耕作土は、Ⅺ層とⅫ層の撹拌土からなる。土質は灰色シルトで、直径 2 ～ 3mm の偽礫がまばらに混入し、細かな植物遺体も少量認められる。Ⅹ層下面は耕作の影響で上下に起伏する。畦畔 217・219 を境にして南東側は、北西側よりも掘削深度が深く、Ⅹ層下面がⅫ層に達する。Ⅹ層に混入する偽礫は、Ⅻ層を巻き上げた際に混入したものとみられる。Ⅹ層上面では、水田区画にともなう畦畔のほかに、溝 6 条、土坑 3 基、杭列 5 列、杭 6 基、ピット 1 基を検出し、足跡も多数確認した。なお、北区 1（南側）の溝 2 条（SD701・702）は、2010 年に検出した遺構である。

a　水　　田（図版 2・42・43・139・143 ～ 146・149・150）

北区では、南区で検出した畦畔 16 条（畦畔 201 ～ 216）と面を同一とする畦畔 7 条（畦畔 217 ～ 223）を検出した。これらの畦畔は、Ⅸ層掘削中に確認した（図版 143・145）。SD848 を境に北側（16 ～ 22 グリッド）では、畦畔は確認できなかった。畦畔の断面形は台形である。畦畔はⅩ層の水田耕作土を盛り上げて構築していることから、畦畔盛土と水田耕作土の識別は困難であった。

畦畔 217 の下端幅は 0.6 ～ 2.95m で、12C グリッドでは西側へ一部張り出す。その延長に位置する西壁断面を観察すると、Ⅹ層の高まりが認められたことから、この張り出した部分は畦畔と考えられる。

畦畔の途切れた部分は、水口の可能性が高い。畦畔 218 ～ 223 は下端幅 0.42 ～ 1.32m で、高さは 2 ～ 10cm である。方向は軸を東に 14° ～ 28° 傾く一群（畦畔 217 ～ 221）と、これに直行するように軸が西に 49° ～ 70° 傾く一群（畦畔 222・223）に分けられる。また、Ⅹ層の畦畔に伴う擬似畦畔 B も 3 条（畦畔 224 ～ 226)検出した。畦畔 225 の北東延長線上にあたる北区 2 東壁ではⅩ層の高まりが認められた(図版 137)。畦畔 225 の位置するところには、Ⅹ層の畦畔が構築していた可能性が高い。

水口は畦畔 220 と畦畔 221 で各 1 か所確認した。いずれの畦畔も軸が東へ傾く一群である。水口はⅨ層で埋没していた。

水田区画については、調査範囲の制約もあり、全体を把握できたものは少ない。水田区画は、長方形や台形となる。畦畔 219･221 ～ 223･225 で構成された水田区画の形状は台形で、面積は 127.5m² である。

Ⅹ層水田面では大小多数の足跡を検出した。Ⅹ層上面がⅨ層で覆われていたこともあり、足跡の凹凸に明瞭に残っていた。南区同様に、牛や馬などの動物の足跡については確認できなかった。

b　溝

北区 1 で 4 条（SD701・702・806・914)、北区 2 で 2 条（SD848・870）の計 6 条を検出した。北区 1 で検出した溝 4 条は畦畔を盛り上げる際の掘削痕と考えられる。SD848 は水路として掘られた溝で、SD870 は自然流路の落ち際と想定される。

SD701（図版 42・141）

8D グリッドに位置する。平面形は不整だが、直行しながら北西から南東方向に延びており、全長は 4.0m である。断面形は台形状で、幅が 108cm、深さが 2cm である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が著しい。覆土の堆積は明黄褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD702（図版 42・141）

7C、8C・D グリッドに位置し、南西側は調査区外へと続いている。平面形は不整だが、直交しながら北東から南西方向に延びており、確認長は 12.2m である。断面形は弧状で、幅が 92cm、深さが 12cm である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が著しい。覆土の堆積は明黄褐色シルトの単層である。遺物は部材が出土した。

SD806（図版 42）

12F に位置する。確認長は 3m である。断面形は弧状で、幅が 5 ～ 15cm で、深さが 5cm である。底面には凹凸が認められる。覆土は灰白色砂が主体の単層である。覆土はⅨ層と酷似する。土層断面を観察すると、SD806 南西側にはⅩ層畦畔に伴う擬似畦畔 B が確認できる。これを考慮すると、SD806 の南西側にはⅩ層の畦畔が位置していた可能性が高い。

SD848（図版 43・145・146・149）

14E、15D・E、16C・D グリッドに位置する。南東から北西方向に延びる直線状の溝で、SD870 と直交すると考えられる。SD848 の南西際には溝と同方向の畦畔 223 が延びる。また、15 グリッド付近で、SD848 の北東際にはⅩ層畦畔に伴う擬似畦畔 B（畦畔 226）を検出したことから、この位置にⅩ層の畦畔が存在していた可能性が高い。確認長は 31.5m である。断面形は弧状で、幅は 143 ～ 220cm で、深さは 2 ～ 29cm である。底面標高は南東端が –0.81m、北西端が –0.98m で、南東方向から北西方向に向かって緩やかに低くなる。この溝は水田の水量を調整する機能を持ち、水は SD870 に流れ込んでいたと想定される。覆土の堆積はレンズ状で、浅黄色粗砂が主体の 2 層に識別される。1・2 層ともにⅨ層土と酷似

することから、Ⅸ層の堆積時に埋没したと想定される。遺物は出土しなかった。

SD870（図版 43・44・148・149）

17 ～ 21C・D、22D グリッドに位置する。当初は、人為による溝と想定し調査を行ったが、調査を進めるうちに規模が大きいことからも自然流路と捉えることとした。流路は調査区外へと延びており、検出したのは東側の岸のみである。また、遺構の深度は想定していたよりも深く、また湧水の影響で、遺構底面を確認することは出来なかった。北区 2 から北区 3 に向かって、大きく蛇行しながら北南方向に延びており、確認長 57m である。断面形は緩やかに立ち上がるが、18D グリッドではテラス状の平坦な部分もある。幅が 13.4m 以上、深さは 54cm 以上である。覆土の堆積はレンズ状で、砂層とシルト交互に堆積し、5 層に識別される。5 層（明青灰色砂）では、杭列 2 列（SA893・989）、杭 4 基（SX891・892・895・896）を検出した。3 層（明黄褐色砂）では、護岸施設の可能性がある SA872 の杭列を検出した。1 層（灰白色砂質シルト）では、SK874 を検出した。これらの遺構の検出状況から、SD870 の埋没過程において地表化していた時期は少なくとも 3 時期あると考えられる。遺物は箸状木製品･串･折敷･蓋板･部材･板材・角材が出土した。SD848 と西側調査区外で繋がっていると考えられ、SD870 の性格は水田に伴う排水施設として利用されていたと考えられる。

落ち際では杭列 3 列（SA871･875･897）を検出した。これらの遺構は､護岸施設の可能性が考えられる。また､17C､18D グリッド付近の落ち際は､腐植土層がⅩ層直上に堆積する。残存状況が良好な部分では､繊維方向が水平及び垂直方向に堆積する様子が認められた（図版 149）。しかし、水平を保つための杭などは検出していない。腐植土層は SD870 に伴う護岸施設の構造材の一部であった可能性が高い。なお、腐植土層がなくなる南西隅では、SA871 の打ち込みが密になる傾向がある。

SD914（図版 42）

11・12C に位置する。畦畔 217 の南東際に延びる直線状の溝である。確認長は 8m である。断面形は弧状で､幅は 30cm､深さは 1 ～ 7cm である。底面には凹凸がわずかに認められ､部分的に溝が途切れる。覆土は単層で、明黄褐色砂が主体である。覆土はⅨ層と酷似する。遺物は出土しなかった。畦畔 217 を盛り上げる際の掘削痕の可能性が高い。

c　土　　坑

土坑は 3 基検出した。いずれもⅩ層上面の水田区画内で検出したことから、水田面が機能していない時期に、掘削されたものと考えられる。

SK808（図版 42・143）

11D20・25 グリッドに位置する。平面形は円形で長径 90cm、短径 80cm である。断面形は弧状で、深さ 20cm である。覆土の堆積状況はレンズ状で、砂質シルトを主体とした 3 層に識別される。遺物は出土しなかった。

SK849（図版 43・146）

14D2･7 グリッドに位置する。畦畔 222 を切る。平面形は楕円形で長径 175cm､短径は 105cm である。断面形は半円形で、深さ 40cm である。覆土の堆積はレンズ状で、浅黄色粗砂を主体とした 2 層に識別される。覆土はⅨ層に酷似することから､Ⅸ層堆積時に SK849 は埋没したものとみられる。底面付近には、栗とみられる植物遺体が認められた。土器などは出土しなかった。

SK850（図版 43・146）

14D3 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 81cm、短径 66cm である。断面形はＵ字状で、深さは 56cm である。覆土の堆積は下位が水平、上位がレンズ状で、4 層に識別される。1・2 層は黄灰色シルトが、3･4 層は灰色シルトが主体である。4 層には直径 20 ～ 30mm の炭化材、栗が混入する。3･4 層は人為による埋土の可能性が考えられる。土器などは出土しなかった。

d　杭　　列

杭列は 5 列検出した。SA871・SA875・SA897 は SD870 の落ち際に沿って検出したことから、両者の関連がうかがわれる。

SA871（図版 43・44・147 ～ 149）

16 ～ 18C、17・18D グリッドに位置する 50 基の杭によって構成される。SD870 の落ち際に沿って並び、全長は 20.5m である。杭の径は 3 ～ 9cm で、平均値は 6.2cm である。残存長は 22 ～ 164cm で、平均値は 89.1cm である。いずれの杭も樹皮が残る芯持ちの丸木材が用いられている。SA871–9・15 の樹種は、ヤナギ属である。杭の下端部には鋭利な加工が認められ、1 方向からのみの加工される杭（90–40）と、多方向からの加工される杭（90–41・42）がある。SA871–15（90–42）には丁寧な加工が施されており、加工面と自然面の境には幅 1cm ほどの溝が施されている。杭には節が目立ち、曲がった材も多く利用されている（SA871–2・4 ～ 6・10・11・21・41・44・45）。SA871–6 は自然の歪みを利用し下端部を鋭利に加工している。杭の打設方法には垂直に打ち込むものと、SD870 の落ち際に沿って斜めに打ち込むものがある。前者には、上端部が水圧や土圧によって歪んだ可能性のある杭（SA871–9・15・19・34）もみられる。後者については、調査当初、垂直に打ち込んだ杭が水圧や土圧によって傾いたものと想定したが、傾いた時に生じる層の乱れが確認できなかったことから、意図的に斜めに打ち込んだものと考えた。18D グリッドでは直立に打ち込んでいる杭が多く、17C・D グリットでは斜めに打ち込んだ杭が多い。また、南西方向に向かって、杭の間隔が狭くなる。SD870 の外側には、落ち際に対して反対方向に向かって斜めに打ち込む杭列（SA875）及び杭（SX884・885）を検出した。さらに、SA871 から 20m 程北側の SD870 落ち際で杭列 SA897 を検出した。

SA875（図版 43・44・148）

17C17・18・23 グリッドに位置する 3 基の杭によって構成される。SA871 の東側に直線状に並び、全長は 2.8m である。断面観察では掘形は確認できず、打ち込まれたものと考えられ、いずれの杭も北西から南東方向に、斜めに打ち込まれる。杭の径 4 ～ 4.5cm、残存長は 12 ～ 68cm である。

SA889（図版 43・150）

17G24・25 グリッドに位置する 3 基の杭によって構成される。南北方向に蛇行しながら並び、全長は 2.2m である。杭の径は 5cm、残存長は 37cm である。SA889 の周辺には遺構が検出されておらず、SA889 の性格は不明である。

SA897（図版 43）

20・21D グリッドに位置する 15 基の杭によって構成される。SD870 の東際に直線状に並び、全長は 8m である。いずれの杭も打ち込まれたもので、杭の径は 2 ～ 5cm、遺存長は 38 ～ 79cm である。SA871 と同様に、SD870 の落ち際で検出したことや杭の規模が共通していることから、SA871 と同一の杭列であった可能性が考えられる。

SA899（図版 43・150）

19・20D グリッドに位置する 10 基の杭によって構成される。南西から北東方向に蛇行しながら並び、全長は 3.5m である。

e　杭（図版 43・44・150）

16G グリッドで 2 基（SX882、SX883）、16C グリッドで 2 基（SX884、SX885）、18D グリッドで 1 基（SX877）を検出した。径は 3 ～ 8cm、残存長は 23 ～ 112cm である。断面観察では掘形は確認できず、打ち込まれたものと考えられる。

f　ピ　ッ　ト

P890（図版 43・150）

19D15 グリッドに位置する。平面形は円形で長径 47cm、短径 38cm である。断面形は U 字状で、深さ 21cm である。覆土の単層で、暗青灰色腐植土が主体である。覆土は人為による埋土と考えられる。箸状木製品が 1 点出土した。

D　Ⅻ層水田面（3 枚目水田）の遺構

1）南　　区

Ⅻ層を水田耕作土とする水田である。当初、畦畔はトレンチ断面で確認した。X 層との間には砂を主体とするⅪ層を挟んでいるが、その範囲は南区 2 と南区 1（南側）にほぼ限られる。X 層・Ⅺ層を掘削し、Ⅻ層上面が平面的に露出するにつれ、再び砂で埋没した足跡状の凹凸が目立ち始めたことから、ここが水田面であるとの認識に至った。水田区画を構成する畦畔のほかでは、杭 7 基を検出した。

a　水　　田（図版 23・45・151・152）

畦畔は 11 条検出した。いずれも断面形状は台形である。畦畔は水田耕作土を盛り上げて構築していることから、畦畔土と水田耕作土との識別は困難であった。検出した畦畔の下面幅は 0.25 ～ 0.88m で、畦畔の高さは 5 ～ 17cm となっている。方向は軸を西に 24° ～ 44° 傾く一群（畦畔 301、306 ～ 309、311）とこれに直交するように東に 48° ～ 67° 傾く一群（畦畔 302 ～ 305）により方形基調の水田区画を形成したものと考えられる。畦畔の配置はX層水田と大きく変わらないが、X 層水田段階では調査区壁の断面観察時でしか確認できなかった畦畔 216 の位置で畦畔 303 を検出した。また、Ⅻ層の畦畔に伴う擬似畦畔 B も断面で確認した（図版 132・133）。

畦畔によって構成される水田区画については、調査範囲の制約もあり、全体を把握できたものはない。水田区画を推定できる部分では畦畔 304・307・308 と 305 の延長線により想定される推定面積 330m^2 の区画、畦畔 303・305・307・309 により想定される推定面積 350m^2 の区画、畦畔 302・303・306・307 と 309 の延長線により想定される推定面積 160m^2 の区画がある。

水田面は砂で埋没した大小無数の足跡と考えられる凹凸で覆われていた。

b　杭（図版 45・152）

5C グリッドで 7 基検出した。径は 2 ～ 8cm、残存長は 8 ～ 34cm となる。断面観察では掘形は確認

できず、いずれも打ち込まれたものと考えられる。

2）北 区 1 ・ 2

南区同様に、Ⅻ層は全域に広がる。Ⅺ層に覆われており、水田面の遺存状況は比較的良好であった。ただし、北区１ではⅩ層の水田耕作の影響がⅫ層の上面に達しており、遺存状況が悪い部分もあった。Ⅻ層の水田耕作土はⅩⅢａ～ⅩⅢｃ層の撹拌土からなる。土質は灰色シルトで、偽礫が多く混入する。この偽礫は、ⅩⅢｂ層に由来する。畦畔 315･316 を境に、南東側では掘削深度が深くなりⅩⅢｃ層のみ堆積する。Ⅻ層の水田区画に伴う畦畔のほかに、溝４条、杭５基を検出した。

a　水　　田（図版 23・46・153 ～ 158）

北区では、南区で検出した畦畔 11 条（畦畔 301 ～ 311）と面を同一とする畦畔 15 条（畦畔 312 ～ 326）を検出した。試掘トレンチ（A–2T）で検出した畦畔は、畦畔 322 の一部である（第５図参照）。畦畔の断面形状は台形である。畦畔はⅫ層の水田耕作土を盛り上げて構築していることから、畦畔盛土と水田耕作土の識別は困難であった。畦畔直下には、擬似畦畔Ｂが伴うものも存在した（畦畔 320・321・319・322）。

畦畔 312 ～ 326 の下端幅は 32 ～ 95cm で、高さは２～ 17cm である。方向は軸を東へ 14°～ 55°へ傾く一群（畦畔 312・315 ～ 319・326）と、これに直交するように軸が西へ 39°～ 72°へ傾く一群（畦畔 313・314・320 ～ 325）がある。また、Ⅻ層畦畔に伴う擬似畦畔Ｂも２条（畦畔 327・328）検出した。いずれの土層断面もⅩⅢ層が台形状に高まり、帯状に検出したことから擬似畦畔Ｂと判断した（図版 56・134）。畦畔 327 は畦畔 314、SD810 と直交するものとみられる。畦畔 328 は畦畔 327 とＴ字状に交差するが、西へ延びるにつれ大きく南側へ湾曲する。

水口は畦畔 314・316・318 で各１か所、畦畔 325 で２か所、畦畔 319 で３か所確認した。畦畔 325 の水口以外は、方向軸が東へ傾く一群の畦畔に位置する。Ⅹ層水田跡と同様に、水口は方向が東へ傾く一群の畦畔に付属する傾向がある。

水田区画については調査範囲の制約もあり、全体を把握できたものは少ない。水田区画は、長方形や台形である。畦畔 316・319・321・322 で構成された水田区画の面積は約 315.3m^2 である。畦畔 315・316･320･318･321 で構成された水田区画は、西側の一部が不明であるが面積は約 317m^2 が想定される。

水田面には大小多数の足跡を確認した。Ⅹ層水田面と同様に、牛や馬などの動物の足跡については確認できなかった。

b　溝

北区１で１条、北区２で３条検出した。いずれの溝もⅫ層の上面で検出した。溝の覆土はⅪ層土が主体となることから、これらの溝はⅪ層によって埋没したものと考えられる。また、いずれの溝からも遺物は出土しなかった。

SD810（図版 46・47・153）

10E、11D グリッドに位置する。直線状に北西から南東方向に延びている。確認長は 12.5m である。断面形は弧状で、幅は 40 ～ 60cm で、深さが３～ 10cm である。底面の標高は北西端が約 –1.29m、南東端が約 –1.37m で、南東方向に向かって水が流れていたと考えられる。覆土は青灰色砂が主体で、2

層に識別される。青灰色砂はⅪ層土に酷似し、1 層には腐植土層との互層が認められる。

SD851（図版 46・47・155・157）

14D グリッドに位置する。直線状に南東から北西方向に延びている。確認長は 8m である。断面形は弧状で、幅は 49 ～ 67cm、深さは 12 ～ 26cm である。底面標高は南東端が約 –1.11m、北西端が約 –1.22m で北西方向に向かって水が流れていたと考えられる。覆土の堆積はレンズ状で、灰色砂を主体とした 3 層に識別される。2 層には枝や樹皮、直径 3mm 程度の細かな植物遺体が極めて多量に含まれる。

SD852（図版 46・47・157）

14D グリッドに位置する。直線状に北東から南西方向に延びている。確認長は 3.3m である。幅は 26 ～ 72cm で、南西方向に向かって幅が広くなる。断面形は弧状で、深さは 4cm 程度である。底面標高は南西に向かってやや低くなるが、確認長が短いことから、水の流れていた方向は不明である。覆土は灰色砂が主体の単層である。

SD861（図版 46・47）

14E グリッドに位置する。直線状に北西から南東方向に延びている。溝の方向は、軸が西へ傾く畦畔群の方向と類似する。確認長は 4.75m である。断面は弧状で、幅は 15 ～ 38cm で、深さは 3 ～ 5cm。底面には凹凸が認められる。SD861 の南西際には畦畔が位置していたと想定されることから、SD861 は畦畔を盛り上げる時の掘削痕と考えられる。

c　杭

16C グリッドで 2 基（SX887、SX888）、17C グリッドで 2 基（SX886–1・2）、18C グリッドで 1 基（SX876）を検出した。いずれの杭も断面観察では掘形は確認できず、打ち込まれたものと考えられる。いずれの杭も芯持丸木材で、先端に向かって細く加工されている。

SX876（図版 46・47）

18C21 グリッドに位置する。杭の径は 7cm、長さは 49cm である。

SX886（図版 46・47・158）

17C1・6 グリッドに位置し、杭 2 本（SX886–1・2）からなる。SX886–1 の径は 6cm、長さは 110cm である。SX886–1 はⅪ層とⅫ層の境で折れていることから、Ⅺ層堆積時に杭が折れた可能性が高い。SX886–2 の径は 5cm、長さは 47cm である。

SX887（図版 46・47・158）

16C10 グリッドに位置する。杭の径は 8cm、長さは 42cm である。北西から南東方向に向かって斜めに打ち込まれている。

SX888（図版 46・47）

16C10 グリッドに位置する。杭の径は 4cm、長さは 9cm で、杭の先端部分のみ検出した。SX887 と同様に、北西から南東方向に向かって斜めに打ち込まれている。

3）北　区　3

北区 3 では水田区画を構成する畦畔は認められなかったが、柱根が遺存する柱穴 7 基、杭列 5 基、杭 7 基を検出した。北区 1・2 と北区 3 では同一面と考えられるが、遺構の様相は異なる。

a　柱　　穴（図版 46・47・159）

北区 3 では柱穴を 7 基（P904・905・915 ～ 919）検出した。いずれの柱穴にも、柱根が遺存する。底面標高は –1.42 ～ –2.03m である。柱根には芯持丸木材を用いており、大半の樹皮も残っている。P916･917 の柱根を図化した（90–45･46）。両方とも､樹種はヤナギ属である。P916 の柱根（90–45）は、先端は平坦に仕上げられている。これ以外の柱根は、先端に向かって細く加工されており、先端が樹芯部に位置するもの（P917 ～ 919）と、先端が縁辺部に位置するもの（P904・905・915）がある。これらの柱穴には掘形が認められないことから、打ち込み柱と考えられる。ただし、P916 のように先端が平坦で、径が 18cm と太めの柱根の設置については、柱根の直径とほぼ同じ大きさの掘形を掘削して、柱を据えた可能性も否定できない。このように柱根を設置した場合、断面観察では掘形を識別することは非常に難しいと考えられる。

検出した柱穴の位置からは、建物跡の構造を復元することは出来なかった。ただし、図版 46 で示したように、柱穴群周辺の遺物出土状況は、明らかにほかの水田域とは分布の差が認められる。遺物が出土しない範囲に建物が位置していた可能性が高い。

b　杭　　列

5 列検出し、そのうちの 4 列（SA910 ～ 913）は柱穴群を囲むように位置する。

SA894（図版 46）

20C・D グリッドに位置する 4 基の杭によって構成される。南西から北東に向かって直線状に並び、全長は 0.4m である。

SA910（図版 46・47・159・160）

21D6・11・12・17 グリッドに位置する 13 基の杭によって構成される。SA910–1 ～ 11 は南東から北東に向かって直線状に並び、SA910–12・13 はやや北へ振れる。全長は 4.8m である。杭の径は 2 ～ 3cm、遺存長は 9 ～ 28cm である。SA910–2・12 の樹種は、ヤナギ属である。SA910 を境に、北側で柱穴が検出され、木製品が出土したことから、境界杭の可能性が高い。

SA911（図版 46・47・160）

22D21・22、22E1 グリッドに位置する 16 基の杭によって構成される。南東から北西方向に向かって直線状に並び、全長は 4m である。SA910 を境に南西側で柱穴が検出され、木製品などが出土したことから、SA910 と同様に境界杭の可能性が高い。

SA912（図版 46）

21D6 グリッドに位置する 4 基の杭によって構成される。南北方向に直線状に並び、全長は 0.7m である。SA910 と一連の遺構と考えられる。

SA913（図版 46）

21D22 グリッドに位置する 3 基の杭によって構成される。南北方向に直線状に並び、全長は 0.3m である。

c　杭（図版 46・160）

21D グリッドで 4 基（SX901、SX903、SX907、SX908）、21E グリッドで 1 基（SX906）、22D グリッ

ドで３基（SX902、SX909、SX921）検出した。径は４～7cm、残存長は29～37cmである。断面観察では掘形は確認できず、打ち込まれたものと考えられる。

E　XIV層水田面（４枚目水田）の遺構

1）南　　区

XIV層を水田耕作土とする水田である。当初、畦畔はトレンチ断面で確認した。加えて、XII層との間には砂を主体とするXIII層が断続的ながらも広い範囲で確認できたため、水田面も認識しやすかったといえる。水田区画を構成する畦畔のほかでは、溝１条、杭４基を検出した。また、5C22グリッドで樹根を１基確認した。

a　水　　田（図版37・48・161～163）

畦畔は11条検出した。いずれも断面形状は台形である。畦畔は水田耕作土を盛り上げて構築していることから、畦畔土と水田耕作土との識別は困難であったが、畦畔402については粗朶を畦畔構築材に用いていたことから水田耕作土と識別することができた。

畦畔402では18mに渡って畦畔盛土中の粗朶を確認した。粗朶はエレベーション図が示すように畦畔盛土の構築途中に敷設したものと考えられる。粗朶には径１～2cm前後の細い樹木、若しくは樹木の枝を用いている。長さは長いものでは50cmほどとなり、先端には伐採の痕跡が残るものもある。敷いた方向は一定しないが、おおむね畦畔の長軸方向に沿って敷いたものと考えられる。また、畦畔402を掘削したところ、箸状木製品や板状木製品が出土した。畦畔403・407・408は畦畔の遺存が不良な為、帯状の段差や畦畔際の掘削痕を基に、畦畔の下端のみを図示した。また、XVI層で検出した畦畔502はXIV層水田に伴う擬似畦畔Ｂである。

検出した畦畔の下面幅は0.38～1.44mで、畦畔の高さは５～25cmとなっている。方向は軸を西に23°～40°傾く一群（畦畔401、406～411）とこれに直交するように東に50°～66°傾く一群（畦畔402～405）により方形基調の水田区画を形成したものと考えられる。畦畔の配置はXII層水田と大きく変わらないが、畦畔403と3Cグリッドで直交する畦畔406と407はわずかにずれて十字に交差しないなどのわずかな違いがある。

畦畔によって構成される水田区画については、調査範囲の制約もあり、全体を把握できたものはない。水田区画を推定できる部分では畦畔403・405・407・408により想定される推定面積320m^{2}の区画、畦畔403・404・407・409により想定される推定面積340m^{2}の区画、畦畔402・403・406と409の延長線により想定される推定面積160m^{2}の区画がある。

水田耕作土であるXIV層は比較的固いシルトのブロックの混入が特徴的である。水田面は砂で埋没した大小無数の足跡と考えられる凹凸で覆われていた。しかし、上位２面と比較するとその数を減らしている。

b　溝

１条検出した。X層水田面の溝と同様に、軸方向に畦畔との共通性がうかがわれる。

SD709（図版48・163）

2Fグリッドに位置する。調査区外へと続いているため両端を確認できなかった。直行しながら北西から南東方向に延びており、確認長は2.7mである。断面形は弧状で、幅が32cm、深さが5cmである。

壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。SD709は畦畔を盛り上げる際の掘削痕と考えられる。

c　杭（図版 48・163）

5D グリッドで 4 基検出した。径は 2 ～ 4cm と細身で、残存長も 10 ～ 28cm と短い。断面観察では掘形は確認できず、いずれも打ち込まれたものと考えられる。

2）北　　区

XIV層は調査区全域に広がる。XIV層水田面は、XIII層で覆われていることから遺存状況は比較的良好であった。XIV層下面は耕作の影響で、上下に起伏する。XIV層の水田耕作土は、XV層とXVI a 層の撹拌土からなる。XIV層の土質は、シルトで偽礫が多量に混入する。また、北区 2（南側）ではXIV層中に灰色細砂層が堆積することで、XIV層がさらに分層できる部分もあった（図版 46・57）。灰色細砂層は堆積状況から自然堆積層と考えられ、XIV層水田は少なくとも 1 度、自然堆積層で覆われた可能性が高い。

a　水　　田（図版 37・49・164 ～ 166）

北区 1・2 では、南区で検出した畦畔 11 条（畦畔 401 ～ 411）と面を同一とする畦畔（畦畔 412 ～ 424）を検出した。畦畔の断面形は台形である。畦畔は水田耕作土を盛り上げて構築していることから、畦畔土と水田耕作土との識別は困難である。畦畔 402 のように多量の粗朶を用いる畦畔はなかったが、畦畔 414 からは木製品や粗朶など 5 点出土した（図版 166）。

畦畔の下端幅は 15 ～ 193cm、高さは 1 ～ 17cm である。畦畔 413 と畦畔 418・421 が交差する部分は幅広である。方向は軸が東へ 9° ～ 52° 傾く一群（畦畔 412 ～ 414・416・424）と、これに直交するように軸が西へ 39° ～ 60° 傾く一群（畦畔 415・417 ～ 423）がある。また、畦畔 420 の北西方向の延長線上には、XIV層畦畔に伴う擬似畦畔 B（畦畔 425）を検出した。畦畔 420 の土層断面を観察すると、その直下にはXV層の高まりが確認できる（図版 58・136）。畦畔 425 は畦畔 420 の擬似畦畔 B であり、畦畔 420 は畦畔 425 の検出位置まで延びていた可能性が高い。

水口は畦畔 414 で 1 か所確認した。方向が東へ傾く一群の畦畔に水口が付属する点は、X層水田、XII層水田と共通する。

水田区画については、調査範囲の制約もあり、畦畔で四方を囲んだ水田区画は確認できなかった。

b　杭（図版 49）

17D グリッドで 1 基（SX878）を検出した。径は 5cm、残存長は 27cm である。断面観察では掘形は確認できず、打ち込まれたものと考えられる。

F　XVI層水田面（5 枚目水田）の遺構

1）南　　区

XVI層を水田耕作土とする水田である。水田耕作土であるXVI層はシルトを基本とするが、直下層が砂層であることから、ほかの水田耕作土よりも砂質が強い。当初、畦畔はトレンチ断面で確認した。XIV層との間にある砂を主体とするXV層はごく狭い範囲にしか堆積しておらず、XVI層上面の水田面を認識する

ことが難しかったと言える。水田区画を構成する畦畔のほかでは、杭列２条、杭２基、性格不明遺構１基を検出した。

なお、畦畔 501 と 507 が交わる 5C21 グリッドから北東方向の先は水田面より１段高い平坦面となっている。XVI水田耕作時は、屋敷地はまだ造成されていないが、5C16・17 グリッドの畦畔上から水田面にかけて、８点の木製品と２点の礫が出土した。水田部分において、これだけの遺物が集中して出土したのはここだけであり、屋敷地造成前の人々の活動の痕跡がうかがえる。

a　水　　田（図版 38・50・167 ～ 169）

畦畔は 15 条検出したが、遺存状態の良くない部分があり、一部では畦畔が途切れる部分もある。いずれも断面形状は台形であるが、畦畔 503・507・515 の一部では上面幅が下面幅に比べ狭く、三角形に近い部分もある。畦畔は水田耕作土を盛り上げて構築していることから、畦畔土と水田耕作土は非常に良く似る。ただし、上位の水田面の畦畔と比較し、畦畔土と水田耕作土には土質の差が認められ、畦畔 501・513 については粗朶を畦畔構築材に用いていることから、畦畔土と水田耕作土を識別することが可能であった。

畦畔 501 では 13m、畦畔 503 では 37m に渡って畦畔盛土中の粗朶を確認した。畦畔 502 では上位面の同位置に位置する畦畔 402 と同様の径１～ 2cm 前後の細い樹木、若しくは樹木の枝を用いているが、長さが短いものが多く、量も及ばない。一方の畦畔 503 でも粗朶は短いものが多いが、こちらは粗密に差があるもののおおむね畦畔の軸方向と直交させて並べた様子がうかがえる。加えて、畦畔 502 の上面には長さ 7.8m に渡って樹皮と考えられる厚さ 1cm 弱の植物が敷かれており、さらにこれの固定を目的とするように杭列（SA716）が配されていた。また、この東側の 4C15 グリッドでは 1.5m に渡って畦畔下に樹皮が敷かれた部分を確認した。しかし、この部分は後世の地盤沈下の影響が大きく、畦畔の遺存状態も不良であったため、本来は畦畔上に敷かれていたものを誤認した可能性がある。

検出した畦畔の下面幅は0.24～1.62mで、ほかの水田跡と比べて幅の広いもの（畦畔501）と狭いもの（畦畔 502）の差が明確と言える。畦畔の高さは４～ 20cm となっている。方向は軸を西に 13°～ 40°傾く一群（畦畔 506 ～ 513、515）とこれに直交するように東に 48°～ 65°傾く一群（畦畔 501 ～ 505）により方形基調の水田区画を形成したものと考えられる。なお、畦畔 514 は調査区壁の断面観察時に確認したもので、平面的には認識できなかったものである。

畦畔の配置はXIV層水田と同じ部分が多いが、畦畔の遺存状態に地点による差もあると考えられることから不明とせざるを得ない部分もある。畦畔 503 は上位２面で畦畔が配置されない畦畔 502 と 504 の間に置かれる。ほかでは、大半を欠くものの畦畔 501 と 502 を結ぶ位置に畦畔 507 と 508 がある。この２つの畦畔によって推定される区画は上位３面で想定されたものより小さく、畦畔 503・505・510 ～ 512・514 では 130m^2、畦畔 501・502・506 ～ 508 では 80m^2 の区画が推定できる。

水田面での足跡と考えられる凹凸は上位面と比べて大きく数を減らし、わずかに散見できる程度となる。

b　杭　　列

２列検出したが、その性格は大きく異なるものと考えられる。SA716 は前述のとおり、畦畔 501 上で検出した樹皮の範囲と一部が重複しており、これの固定を目的とした可能性がある。一方の SA717 は杭の径が 8cm 前後と太い。これが３基並ぶと畦畔と同じ方向を指すことから、こちらも水田との関連がう

かがえた。

SA716（図版 50・170）

4B・C グリッドの畦畔 501 上に位置し、南西側は調査区外へ続いている。間隔に粗密を持つものの畦畔上面に並ぶ 32 本により構成され、確認長は 12.72m である。杭の径は 3cm 以下の細身のものが多く、残存長は 1 ～ 46cm と幅広い。また、SA717–2・10 の断面図が示すとおり、杭の頭が北側に傾くものが大半を占めている。樹種は SA716–2 がヤナギ属であった。

SA717（図版 50・170）

5C グリッドに位置する。3 本の杭がほぼ直線上に並び、全長は 4.04m である。杭の径は 4 ～ 9cm で、残存長は 54 ～ 58cm である。なお、南東側の延長線上には同規模の杭、SX718 が位置している。

c　杭（図版 50・170）

杭列を構成しない単独の杭を 5C グリッドで 2 基検出した。規模は SX718 で径 4cm、残存長 37cm、SX719 で径 8cm、残存長 51cm となり、SA717 を構成する杭と近似する。断面観察では掘形は確認できず、共に打ち込まれたものと考えられる。

d　性格不明遺構

SX714（図版 50・169）

5C17・18・22 グリッドに位置し、水田面からは 20cm ほど高い平坦面に構築される。この平坦面と畦畔の関連から 5 枚目水田に伴うものと考えたが、覆土は 3 枚目水田の耕作土であるⅫ層によって覆われていることから、4 枚目水田に伴う可能性もある。平面形は不整形で、長径 167cm、短径 58cm である。断面形は弧状で、深さ 14cm である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積はオリーブ黒色シルトの単層である。遺物は出土していない。

2）北　　区

北区 1･2 では水田に伴う畦畔は検出されなかった。XVI 層はシルトと砂が幾層にも堆積して互層をなし、また XVI 層下面には耕作の影響による起伏は認められなかった。北区では、XVI 層において水田稲作が行われていたとは言いがたい。ただし、北区 1 では杭・串を検出したことから、一時的に生活面が形成されていたものとみられる。なお、XVI 層直上に堆積する XV 層からは祭祀具である陽物形（90–48）、漆器椀（90–49）が出土した。

a　杭　・　串（図版 51・171）

北区 1 区の杭 5 基、10F グリッドで杭 1 基（SX864）、12F グリッドで串 1 基（SX865）、11 グリッドで串 3 基（SX866 ～ 868）を検出した。SX864 は割材で、杭の径は 4cm、遺存長は 18cm である。SX865 ～ 868 の串の径 2 ～ 3cm、遺存長 16 ～ 27cm である。

第Ⅴ章　遺　　物

遺物は調査年度毎に種類別に図版・観察表を作成している。2009 年度調査分および試掘・確認調査出土分については図版 60 ～ 84、2010 年度調査分は図版 85、2011 年度調査分は図版 86 ～ 90 である。各種類の概要は 3 年分の成果をまとめて記載している。個別の説明については、年度毎の図版に則して記載しているので、煩雑であるが御留意願いたい。基本層序の項でも説明したが、屋敷地出土は SR1–1 ～ 3 層、SR1 の下の自然流路出土は SR2–1 層、水田域出土はⅧ～ⅩⅦ層である。

1　土器・陶磁器

A　概　　要（2009 ～ 2011 年度）

土器･陶磁器は浅箱で 8 箱出土した。主体となる時期は中世で、珠洲焼･土師質土器･瀬戸美濃焼に加え、輸入陶磁器の青磁がある。このほか古代の須恵器 2 点と近世の陶磁器 3 点の出土がある。しかし、共に遺構からの出土ではなく、主体的な存在ではない。

出土量の大半を占めるのは珠洲焼で、個体数は 50 数点、報告外の破片数は 59 点である。個体数にして土師質土器は 22 点、青磁は 13 点の出土である。珠洲焼の器種は、わずかに認められる壺・甕以外は片口鉢で占められる。土師質土器は［品田 1997］の手づくねの A 類、ロクロ成形で底部ヘラ切りの C 類があり、ロクロ成形で底部糸切りの B 類は出土していない。瀬戸美濃焼は、合子若しくは水滴と考えられる 1 点のみの出土である。青磁はいずれも龍泉窯系で、器形を判別できたものは椀と杯に限られる。

出土傾向は、屋敷地では珠洲焼が 7G グリッドを中心に広く出土しており、土師質土器は SD166・339 から西側で多く出土している。輸入陶磁器は SD598 から東側と、5・6D グリッド付近の 2 か所に集中して出土している。水田域では、Ⅻ層 22D21 グリッドで珠洲焼片口鉢の小片が 1 点出土しているのみである。また、調査対象としたⅧ層より上のⅥ層から近世磁器の小片が出土している。

時期は、国内産陶磁器の場合、珠洲焼は 13 世紀末から 14 世紀後半のものを主体に、一部 14 世紀末から 15 世紀前半のものもある。瀬戸美濃焼は 14 世紀の初めである。一方、輸入陶磁器は 13 世紀の初めから前半と、13 世紀の中ごろから 14 世紀の初めの 2 時期がある。また、在地生産の土師質土器はいずれも 14 世紀前半に位置付けられ、陶磁器の年代幅に収まるものである。

B　器　種　分　類

珠洲焼は［吉岡 1994］、土師質土器は［品田 1997］･［鶴巻 2004］、瀬戸美濃焼は［藤澤 2008］、輸入陶磁器は［山本 2000］の分類と編年に従った。なお、土師質土器の皿の器種細分については、本遺跡出土資料の計測値から便宜的に口径 10.8cm 以上のものを「皿」、以下のものを「小皿」とした。

C　各　　説

調査順に SR1 の 1 層から行い、各層は「遺構出土」から「包含層出土」の順とする。出土地点、層位等は巻末の観察表を参照されたい。

1）2009 年度 SR1–1 層検出遺構出土土器・陶磁器（図版 60–1、図版 177）

P81（1）　土師質土器の皿で、A 類である。底径は小さく、内面はヨコナデである。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は摘み上げられている。時期は 14 世紀前半である。

2）2009 年度 SR1–1・2 層検出遺構出土土器・陶磁器（図版 60–2～5、図版 173・177）

SR165（2 ～ 5）　2 は青磁椀である。外面に鎬蓮弁文が施され、高台周辺は一部が露胎する。また、底部の破損面では漆継ぎ痕が認められる。椀Ⅱ –b 類で、時期はＥ期（13 世紀初頭～前半）である。3 は珠洲焼の片口鉢で、焼き歪みが著しい。SK399、SR1 出土片と接合している。入り組み技法による卸目は使用による摩滅が少なく、太目の櫛目が良く残る。口縁端部はわずかに窪んでいる。時期はⅤ期（14 世紀末～ 15 世紀前半）である。4 は珠洲焼の片口鉢である。卸目は太めの櫛目で施される。口縁端部は内傾し、わずかに窪んでいる。時期はⅣ期（Ⅳ期は 13 世紀末～ 14 世紀後半）でも終わりころである。5 は珠洲焼の片口鉢である。口縁部は方頭で、わずかに外傾する。卸目は、細めの櫛目で施される。時期はⅣ期でも初めころである。

3）2009 年度 SR1–1 層出土土器・陶磁器（図版 60–6 ～ 20、図版 173・177・178）

6･7 は青磁椀である。いずれも外面に鎬蓮弁文が施される椀Ⅱ –b 類で、時期はＥ期（13 世紀初頭～前半）である。6 は口縁端部が肉厚で、丸みを帯びる。7 は口縁部がわずかに外傾し、端部に向かってやや薄くなる。8 は青磁椀である。器厚は薄く、高台畳付の釉は掻きとられ、その境目は赤みがかっている。また、底部の破損面では漆継ぎ痕が認められる。分類は椀Ⅲ –1 類で、時期はＦ期（13 世紀中ころ～ 14 世紀初頭）である。

9 は土師質土器の小皿で、ロクロで成形される。底面外縁が強くナデ消されている。時期は 14 世紀前半である。10 は土師質土器の皿で、A 類である。時期は 14 世紀前半である。11 は土師質土器の皿で、ロクロで成形される。口縁部は肉厚のまま立ち上がり、端部がわずかに外傾する。時期は 14 世紀前半である。

12 は近世の所産と考えられる陶磁器の小皿である。施釉は外面を掻きとることで、内面と口縁端部のみに施される。器高は低く、体部から口縁部までなだらかに立ち上がる。また内面には櫛のようなもので 4 本の条線が施されている。調査区と調査区外の境である 7G6 グリッドから出土したが、この上部には現代まで存続した神社とこれに隣接する溝の存在が伝えられている。このことから、神社に関係する陶磁器と推測され、中世の包含層に帰属しない可能性が高い。

13 は珠洲焼の片口鉢である。口縁部はわずかに内傾し、口唇部はわずかに窪んでいる。個体自体に歪みがあり、本来はより径が大きくなると推測される。時期はⅣ期でも後半のものである。14 は珠洲焼の片口鉢で、底部切り離しは静止糸切りである。太めの櫛目で施された卸目は、大きく体部から底部にかけて施した後、さらにその間を埋めるように密に施されている。口縁部は方頭で、外傾する。時期はⅣ期でも後半である。15 は珠洲焼の片口鉢である。卸目は細めの櫛目で施される。口縁端部は外傾し、外への引き出しの特徴から、時期はⅣ期でも中ごろのものである。16 は珠洲焼の片口鉢である。口唇部はほぼ平坦で、細めの櫛目で施された卸目は使用による摩滅が顕著である。時期はⅣ期でも終わりころのものである。17 は珠洲焼の片口鉢の底部である。底部切り離しは静止糸切りである。卸目は細めの櫛目で、入り組み技法により施される。時期はⅤ期である。18 は珠洲焼の壺である。口縁部は緩やかに外傾し、端

部は平らな面を持っている。時期はⅣ期である。19 は珠洲焼の壺である。器種はＴ種で、底部外面に板目状圧痕が付く。時期はⅣ期である。20 は古代の佐渡小泊産の須恵器甕である。タタキで整形され、内面は平行のあて具痕、外面は格子状のタタキが残る。また、外面は摩滅して磨面が形成されることから、研磨具として転用されたものである。

4）2009 年度 SR1–2 層検出遺構出土土器・陶磁器（図版 60・61–21～29、図版 179）

SK267（21）　珠洲焼の片口鉢である。卸目は太めの櫛目で施される。口縁部は方頭で、やや外傾する。時期はⅣ期でも中ごろである。

SK334（22）　土師質土器の小皿で、A 類である。薄手の底部と比較すると、口縁部は肉厚となる。時期は 14 世紀前半である。

SK381（23）　珠洲焼の片口鉢である。卸目は、やや細めの櫛目で施している。口唇部はわずかに窪んでおり、外への引き出しが見られる。時期はⅣ期でも中ごろのものである。

SK399（24 ～ 26）　24 は土師質土器の皿で、C 類である。SK65、SR1 出土片と接合したが、残存割合が一番高い SK399 出土のものとして、ここで報告する。体部下半は外反しながら立ち上がる。C 類とした底部の回転ヘラ切りは、中世前半（13 世紀中ごろ～ 15 世紀）では阿賀北地方に特徴的な技法との指摘がある。そのなかでも本遺跡から出土した C 類は、いずれも 14 世紀代とされる「口端が外反し、体部下半がくびれて内湾」する「阿賀北系 a2 類」で占められている［鶴巻 2004］。25 は土師質土器の皿で、A 類である。内・外面はヨコナデが見られる。底部からは肉厚なまま、口縁部へと立ち上がる。また、底面では板目状圧痕が認められる。時期は 14 世紀前半である。26 は珠洲焼の片口鉢で、体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は方頭でわずかに外傾している。卸目は太めの櫛目で施される。時期はⅣ期でも中ごろである。

P414（27）　珠洲焼の片口鉢である。SD331・SR1 出土片と接合したが、残存割合が一番高い P414 出土のものとして、ここで報告する。器厚は薄手で、卸目は太めの櫛目で施される。幅の広い口唇部は内傾し、断面は鋭角の長三角形となる。時期はⅤ期である。

SK534（28）　珠洲焼の甕の体部である。タタキで整形され、内面は無文あて具痕、外面は平行タタキが残る。時期はⅣ期である。

P620（29）　珠洲焼の片口鉢である。SK492・520・SR1 出土片と接合したが、残存割合が一番高い P620 出土のものとして、ここで報告する。口縁部は方頭で、口唇部はわずかに窪んでいる。底部切り離しは静止糸切りで、やや細い櫛目で施される卸目は摩滅が顕著である。時期はⅣ期でも後半である。

5）2009 年度 SR1–2 層出土土器・陶磁器（図版 61–30 ～ 39、図版 173・178・179）

30・31 は青磁椀である。分類は椀Ⅱ –b 類で、時期はＥ期（13 世紀初頭～前半）である。30 は口縁部まで直線的に立ち上がり、外面には鎬蓮弁文が施される。31 は外面に幅の広い鎬蓮弁文が施されている。

32 は土師質土器の皿で、A 類である。体部から口縁部にかけて肉厚で、口縁端部は摘み上げられている。時期は 14 世紀前半である。33 は瀬戸美濃焼の合子または水滴の口縁部で、灰釉を内・外面に施釉している。口縁部が体部からわずかに立ち上がる器形から、中期様式のⅠ期で、時期は 14 世紀の第 1 四半期である。

34 は珠洲焼の片口鉢である。卸目は細めの櫛目で施される。口縁部は外傾し、外への引き出しが著しい。時期はⅣ期でも前半のものである。35・36 は珠洲焼の片口鉢の口縁部である。卸目は細めの櫛目で施さ

れている。口唇部はわずかに窪んでいる。時期はⅣ期でも後半である。37 は珠洲焼の片口鉢の底部である。卸目は細めの櫛目で隙間なく、内面の底部と体部でそれぞれ別に施される。底部切り離しは静止糸切りである。時期はⅤ期である。38 は珠洲焼の片口鉢の底部で、底部切り離しは静止糸切りである。卸目は細めの櫛目で施され、内・外面にススが付着している。内面では中心部分が剥落し、環状にススが付着している。時期はⅣ期である。39 は古代の須恵器の杯で、本遺跡で最も古い時代の土器となる。佐渡小泊産の無台杯で、時期は 9 世紀前半である。

6）2009 年 SR1–3 層検出遺構内出土土器・陶磁器（図版 61–40・41、図版 179）

SD259（40）　土師質土器の皿 C 類である。口縁部は肉厚で丸みを持っている。24 と同様に「阿賀北系 a2 類」で、14 世紀代とされるものである。

SK504（41）　珠洲焼の片口鉢である。卸目は細めの櫛目で、入り組み技法により施される。底部切り離しは静止糸切りである。時期はⅣ期でも初めごろのものである。

7）2009 年 SR1–3 層出土陶磁器（図版 61–42、図版 179）

珠洲焼の片口鉢である。卸目は細めの櫛目で施され、口唇部はわずかに窪んでいる。時期はⅣ期でも前半である。

8）2009 年層位不明（図版 61–43、図版 179）

近世の染付皿で、見込みが露胎している。調査のための暗渠掘削中に出土したもので、層位は不明である。中世の包含層に帰属しない可能性が高い。

2　土　製　品

土製品は土錘 1 点と土玉 1 点が出土した。また炉壁の可能性のある焼粘土塊 3 点と、羽口の先端 1 点が出土した。焼粘土塊と羽口に関しては小片のため実測していない。

1）Ⅷ層出土土製品（図版 61–44、図版 179）

いわゆる太型の土錘である。棒状のものに粘土板を巻きつけて形作られ、中央部が大きく膨らむ。外面には帯状に指頭痕が残るほか、繊維の圧痕も見られる。円孔の径は約 1.9cm である。また、胎土への長石の混入が特徴的である。

2）SR1–2 層出土土製品（図版 61–45、図版 179）

45 は土玉である。土玉としたが、形態は方形に近い。これは直方体から球形状に整形したためと考えられ、図の上・下面には整形前の平坦面が残る。

3 石　製　品

A 概　　要（2009 ～ 2011 年度）

石製品は砥石が49点、硯が１点、軽石を加工したものが２点出土している。砥石は、仕上げ砥が３点あり、これ以外は荒砥・中砥と考えられるものである。出土傾向は屋敷地から多く出土し、特に 6E グリッドに出土が集中している。水田域ではⅫ層 21D10 グリッドで砥石が１点出土しているのみである。

B 各　　説

1）2009 年度Ⅷ層出土石製品（図版 62–1、図版 179）

砥石で、砥面の線状痕は多方向に走る。石材は凝灰岩である。

2）2009 年度 SR1–1 層検出遺構出土石製品（図版 62–2、図版 179）

SD111（2） 砥石である。正面及び両側面と下面にススが付着しているが、砥面ではこれが認められないことから、付着後も使用が継続されたものと考えられる。線状痕のほか、正面と裏面の下端では、断面が半円形の溝状の使用痕も見られる。石材は凝灰岩である。

3）2009 年度 SR1–1 層出土石製品（図版 62–3 ～ 10、図版 179）

3 は軽石を加工したもので、正・裏面から径 6mm の穴を穿つ。用途は不明である。4 は硯である。長辺が 8cm と小型で、断面は逆台形となる。墨池は陸から海に向かって細くなる台形状で、中心からやや右側で摩耗が顕著である。石材は頁岩である。5 ～ 10 は砥石である。5 は軟質な砂岩で、正面の右半は削り取られて特異な形態となる。器種については他に類例が見られず、砥面の形成からひとまず砥石として報告する。砥面は左側面と正面にあるが平滑ではなく、凹凸が若干残る。右側面には 1.2cm 前後の単位の加工痕が見られる。6 は両側面では横位の、下面では縦方向の鋸目が顕著である。石材は粘板岩で、仕上げ砥と考えられる。7 は斜方向の線状痕が目立つ。破損した裏面の左側辺部を含め 5 面が砥面として使用されている。石材は砂岩である。8 は 3 面が砥面として使用されている。石材は凝灰岩である。9 は 4 面が砥面として使用されている。石材は凝灰岩である。10 は 3 面が砥面として使用されている。正面は節理面の範囲が広く、砥面の範囲は小さい。斜方向の線状痕が目立つ。全面にススの付着のほか、被熱により赤化する部分もある。石材は砂岩である。

4）2009 年度 SR1–2 層検出遺構内出土石製品（図版 62–11・12、図版 179・180）

SK4（11） 砥石で、砥面の線状痕は多方向に走る。石材は凝灰岩である。

P611（12） 砥石である。表面は凹凸が多く、斜方向の線状痕が目立つ。正・裏面はほぼ平坦となる。石材は流紋岩である。

5）2009 年度 SR1–2 層出土石製品（図版 62・63–13・14、図版 180）

13 は砥石である。4 面が砥面として使用されている。石材は凝灰岩である。14 は凝灰岩の砥石である。

斜方向の線状痕が目立つ。石材は凝灰岩である。

6）2009 年度 SR1–3 層出土石製品（図版 63–15、図版 180）

15 は凝灰岩の砥石である。4 面が砥面として使用され、右側面に深い線状痕がある。

4　金　属　製　品

A　概　　要（2009 ～ 2011 年度）

金属製品は計 76 点出土した。銅製のものは、装飾金具が 3 点、返角 1 点である。これ以外は鉄製で、種別が判別できるものでは椀 1 点、皿 1 点、鍋 3 点、火箸 2 点、刀子 17 点、鈎 1 点、鎹 19 点、鎌 4 点、釘 7 点、錐 3 点、鋏 1 点、鏃 2 点、楔状鉄製品 2 点、環状鉄製品 1 点・鑿状鉄製品 1 点がある。出土傾向は屋敷地では、SR1・1 層の 6E1・2 グリッドから銅製品の装飾金具 2 点と返角が出土した。2 点出土した鏃は、ともに SD330 の 4 層から並んで出土した。SX5 の灰層からは鉄鍋が 2 点、釘、鎹が集中して出土している。

また、いずれも小片であるが生産に関わる遺物として、炉壁の可能性がある発泡した焼粘土塊 3 点と先端の残る羽口 1 点、鉄滓が数点出土している。すべて 8H グリッドからの出土である。焼粘土塊と羽口鉄滓に関しては小片のため実測していない。水田域ではX層 19D5 グリッドから鎹が 1 点出土したのみである。

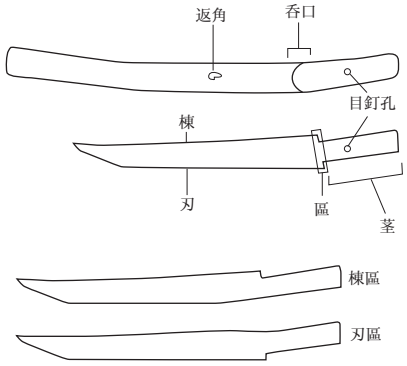
B　各　　説

1）2009 年度 SR1–1・2 層検出遺構出土金属製品（図版 63–16 ～ 19、図版 180）

SD111（16）　下端が鋭角になることから、錐と考えられる。

SD112（17）　刀子である。棟區（むねまち）・刃區（はまち）ともに明瞭で、茎の先端は欠損している。

SR165（18・19）　18 は鎹を打ち伸ばしたものである。断面は薄く、本来の屈曲部分は直線状にされたために歪んでいる。19 は鈎（かぎ）で、漁撈用のものである。返しはなく、柄との結合部は反り返り、先端は鋭角に作られている。大型のため、遺跡に近接する信濃川水系の内水面を遡上するサケ漁に用いられた可能性が指摘される。



第 13 図　刀子名称

2）2009 年度 SR1–1 層出土金属製品（図版 63–20 ～ 28、図版 180）

20 は菊座 3 枚を軸棒で留めた銅製の装飾金具である。菊座の花弁のＵ字文様は、外から中心に向けて鑿で彫りこんだものである。造形からは手慣れた印象を受けず、在地の職人の作である可能性も指摘される。軸棒は一本で、先端の孔に留め具を入れて固定するものである。これは厚い板を貫くこともできることから、分解可能な家具（厨子など）の釘隠しに用いられた可能性もある。21 は 20 と同様の銅製の装飾金具である。20–4 と同形で、最も外側の菊座である。22 は銅製の返角である。結合部分は内傾しており、突起の先端は鋭角である。返角は打刀の拵えに付属し、腰に差した刀が揺れないよう帯に固定する金具で

ある。南北朝時代から存在し、中世の遺跡からは広島県草戸千軒町遺跡で出土例があるが、こちらは鞘との結合部分が板状で、本遺跡とは形状が異なるものである［岩本ほか 1996］。23 は椀である。ほぼ完形の鋳造品で、底面中央に丸型湯口が付く。底部は丸みを持ち、口唇部は内傾する。中世前期の段階では鉄椀の器形は定型化していないことから、器形は在地の土師質土器を模倣したものと考えられる。椀は、県内では胎内市江上館跡［水澤 1996］で出土がある。24 は皿である。鋳造品で底部から口縁部まで残存している。底面は平坦で、口縁部は丸みを帯びる。25 は鎹である。完形で、爪の長さが上下で異なる。26 ～ 28 は刀子である。26 には棟區が見られ、茎には目釘穴が見られる。27 は棟區を設けるが、刃部側は不明である。茎には目釘穴が見られる。28 は棟區を設けるが、刃部側は明瞭でない。茎には楕円形の目釘穴がひとつ見られる。

3）2009 年度 SR1–2 層検出遺構出土金属製品（図版 63–29 ～ 37、図版 180）

SX5（29 ～ 33） 29 は釘である。先端部は折損している。30・31 は鎹である。30 は上下の爪先端が欠損しており、下側の爪はやや外反する。31 の本来の屈曲部分は直線状に打ち伸ばされたために歪んでいる。32・33 は鍋である。32 は「弦をつけるための穴のあいた吊耳部分を口縁に付加し」、「底部に短い三足がつく」鍋 B とされるものである［五十川 1992］。2 本の獣脚が残存する底部から胴部下半及び口縁部が残存する。鋳造品で、一文字の湯口が底部に付く。口縁部は蓋受けのため屈曲している。鍋 B は、県内では上越市子安遺跡［上越市教育委員会 1993］、新潟市内野遺跡［立木ほか 2002］で出土がある。一方の 33 は、底面径の 1/3 以上が残存するものの、脚が見られないことから、「内側に吊すための耳がつく」「「内耳鍋」と呼ばれる」鍋 C［五十川 1992］である。底部と内耳の口縁部分が残存する。内耳は蓋受けの屈曲部分の上につき、口縁部はやや外傾する。胴部に対して口縁部は厚く、端部の断面は逆三角形となる。底部は丸みを持つ。鍋 C は、県内では前述の子安遺跡などで出土している。

SD166（34） 形状は鎹を直線状に伸ばした 18・31 に近いが、伸ばした際に生じる屈曲部分の歪みが見られないことから器種不明としたものである。細長い板状で、図の下端は丸く、上端は角状となる。鑿に類するものの可能性もある。

SK168（35） 鎹である。完形で、爪の長さが上下で異なる。

SD330（36・37） 36・37 は鏃である。完形で、先端はいわゆる鑿根状である。篦継部付近は 8 角形の多面体になっている。

4）2009 年度 SR1–2 層出土金属製品（図版 64–38 ～ 42、図版 180）

38 は環状鉄製品で、幅 6 ～ 8mm、厚さ 2mm 前後の細長い板状のものから作出している。39 は鎹である。完形で、爪はやや外反している。40 ～ 42 は刀子である。40 は柄（78–192）が装着された状態で出土した。棟區・刃區ともに明瞭で、茎の目釘穴では目釘も残存していた。41 は棟區・刃區ともに明瞭で、目釘穴は見られない。42 は棟區･刃區ともに明瞭である。完形での出土で、茎には目釘穴が見られる。また茎の一部側面に鑢状の工具で削ったと思われる痕跡が残る。

5）2009 年度 SR1–3 層検出遺構出土金属製品（図版 64–43・44、図版 180）

SK211（43） 楔状の鉄製品である。厚さ 2 ～ 3mm の板状のものを折り曲げて成形している。

SK260（44） 鋏である。刃部の片側が欠損しており、形態はいわゆる「U 字状握りばさみ」［岡本

1979］で、残存する側の刃部長は5.5cmである。県内の類例として胎内市の下町・坊城遺跡［水澤1999］において握り鋏が出土しており時期は15世紀前半である。

6）　2009年度SR1–3層出土金属製品（図版64–45～50、図版180）

45は両端の先を尖らせており、細身の錐若しくは針と考えた。46は釘である。先端部は折損している。47は火箸である。両端を欠損するものの、一部を螺旋状にねじっている。48は釘である。先端部は折損している。49・50は刀子である。49は區の有無は錆によって不明瞭である。50は棟區・刃區ともに明瞭である。完形での出土で、茎には目釘穴が見られる。

5　銭　　貨

A　概　　要（2009～2011年度）

銭貨は73枚出土した。遺構内からは28枚出土している。銭種は22種類あり、最古銭は開元通寶（初鋳年621年）、最新銭は紹熙元寶（初鋳年1190年）である。多くが北宋銭で、南宋銭は淳熙元寶（初鋳年1174年）と紹熙元寶（初鋳年1190年）の2種類である。最も出土枚数が多いのは開元通寶（初鋳年621年）が12枚、次いで元豊通寶（初鋳年1078年）で10枚である。

出土傾向は、屋敷地ではSD166・339から西側で多く出土している。また、調査対象としたⅧ層より上層のⅤ層から寛永通寶（初鋳1626年）が1枚出土している。

本遺跡の銭種構成を出土備蓄銭の研究［鈴木1999］と比較すると、洪武通寶・永楽通寶の2銭が出土しないことから、14世紀第4四半期以前の様相を示していると言える。

掲載遺物の選別は銭種の網羅に努め、22種類すべてを掲載した。

B　各　　説

1）2009年度水田出土銭貨（図版64–51、図版181）

元符通寶（初鋳年1098年）で、水田を覆う砂（Ⅸ層）から出土している。

2）2009年度SR1–1・2層検出遺構出土銭貨（図版64–52～67、図版181）

SD111（52）　元祐通寶（初鋳年1086年）である。

SR165（53～67）　SR165（6F12グリッド）の1層から一括出土したものである。上から、53～60の8枚は整然と重なり、この下部では61～67の7枚が斜めに倒れこむような状態で出土した。

3）2009年度SR1–1層出土銭貨（図版64–68～71、図版181）

68の開元通寶は背文字に「興」が入れられるもので、845（会昌5）年に補鋳された紀地銭（会昌開元）である。「興」は鋳造地である山南道興州（現在の陝省略陽）を表している。69は乾元重寶（初鋳年758年）である。70は大観通寶（初鋳年1107年）である。71の淳熙元寶（初鋳年1174年）は背文字に「十三」が入れられている。これは鋳造された年号を記しており、「十三」は1186（淳熙13）年に鋳造されたことを示す。

4）2009 年度 SR1-3 層検出遺構出土銭貨（図版 64-72 ～ 82、図版 181）

SK491（72 ～ 81） SK491 の 1 層から 10 枚重なった状態で出土した。

SK508（82） 政和通寶（初鋳年 1111 年）である。

6 木 製 品

A 概 要（2009 ～ 2011 年度）

木製品の種類と数量は第 2 表のとおりである。第 2 表は 3 か年分の集計表で破片 1 つを 1 点として集計しており、個体数を示すものではないが全体の傾向は示していると考える。各層で検出した遺構から出土した木製品は検出層位に含めており、個別の遺構から出土した木製品については遺構観察表に種類を記載した。23,300 点を超える木製品の内訳は器種も多様であるが、欠損品や分類に困難なものも多く雑木として一括したものが 12,500 点以上で半数を占める。屋敷地である SR1 と周囲の溝からの出土分が 90%である。次に多いのが SR165（2010 年度調査成果から水田の可能性が高い）から出土した 1,267 点で 5%、あとは水田からである。SR165 からは箸状木製品が纏まって出土している。一般に溝から木製品が出土することが多いが、本遺跡では江渫い作業を行い管理が行き届いていたのか、屋敷を区画する溝からの出土は少ない。水田からは杭が各層に一定量あるが、X 層では SD870 に護岸と見られる杭列が検出されたことから突出して多い。

木製品の時期は、共伴する陶磁器類の年代から 13 世紀末～ 14 世紀代のものと考えられる。

B 器 種 分 類

木製品の種類・器種名については、奈良国立文化財研究所の『木器集成図録近畿古代編』［奈文研 1984」『木器集成図録近畿原始編』［奈文研 1993」を基本に、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所の『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』［広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996］等を参考に付したが、不明木製品としたものもある。細分類したのは、出土数の多い下駄のみである。

1）下 駄 の 分 類（第 3 表）

下駄の分類は第 3 表のとおりである。また、巻末に観察表とは別に計測表を作成しているが、計測部位は第 14 図のとおりである。

下駄はその構造から、一枚の板から台部・歯部を作り出す一木下駄、台部に歯部を差し込む構造の差歯下駄に大きく分かれる。一木下駄の内、歯があるものを A:連歯下駄、歯が無いものを B:無歯下駄とした。無歯下駄の内、幅が 17.0cm を超える大型のもの（68-49）と、緒穴が中央に寄って開けられているもの（79-199）を田下駄の可能性が高いと考え農具として報告した。

差歯下駄は、台表に歯を差し込む枘穴が見えているものを C：露卯下駄、台裏の溝に歯を差し込み、台表に枘穴が見えないものを D：陰卯下駄とした。

台部については平面形態と側面形態で分類した。平面形態は長方形のものをⅠ、楕円形のものをⅡとした。長方形と楕円形の判別は、台前部と台後部の形態が水平か丸みを持つかを基準にした。更に台部の幅について幅 / 台長が 1/2 未満の細身のものを a、1/2 以上の幅広ものを b とした。台側面は長方形のも

種類	器種	Ⅷ層	Ⅸ層	Ⅹ層	Ⅺ層	Ⅻ層	XIII層	XIV層	XV層	XVI層	SR165	SD111	SD112	SD113	SD114	SD150	SR1 -1 層	SR1 -2 層	SR1 -3 層	SR2 -1 層	XVII層	小計	合計	%
文房具	種子札木簡																		1			1	7	0
	茅札木簡																		1	1		2		
	荷札状木簡																	1	2			3		
	呪符																		1			1		
装飾具	無歯下駄					1											8	6	1			16	341	2
	連歯下駄					1											10	18	4			33		
	差歯下駄					1					1						9	26	13			50		
	下駄の歯					4					2	1					5	21	13			46		
	草履芯										58		1				5	82	30			176		
	櫛										1							3	4			8		
	扇												1					2	1			4		
	烏帽子																1	5	2			8		
祭祀具	箸状木製品			2	2	17	5	12	3	14	369	2	6	14	1	1	661	2595	2706	29	1	6440	6713	29
	人形									1	1							4				6		
	舟形																	2	1			3		
	鳥形																	1	2			3		
	刀形																		4			4		
	羽子板形																		1			1		
	陽物形								1									1				2		
	木鍬																	1				1		
	形代																	1				1		
	斎串										7		1				7	20	15			50		
	串			2	1		2			1	6	1					39	87	62		1	202		
食事具	漆器椀					1	1		1		2	1				1	13	39	24	1		84	153	0
	漆器皿										1						4	15	8		1	29		
	漆器鉢																1				1	2		
	漆器合子蓋																1					1		
	漆器器種不明										1						3	9	8		1	22		
	漆器片口鉢																		1			1		
	菜箸																	1	2			3		
	漆塗杓子									1												1		
	杓子																2	4	4			10		
容器	折敷			1		2		2			1		2				5	39	24			76	708	3
	編組・編組籠										1						1		2			4		
	曲物側板					5	6	5			26	4	2	2	2		35	141	177	4		409		
	曲物底板										12			2			23	56	32	1		126		
	曲物枠木										1							2				3		
	柄杓																	2	1			3		
	鍋蓋																1	1	3			5		
	蓋			1				1			1						2	7	2			14		
	箱										6						12	31	9			58		
	刳物箱																		1			1		
	桶																	6	1			7		
	栓																	2				2		
工具	刀子鞘										1							1				2	48	0
	刀子柄										1						1	5	1			8		
	錐柄																	1				1		
	鑿柄																		1			1		
	柄										1							4	3			8		
	楔																		1			1		
	筵												1				1	8	3			13		
	茅針																1	7	6			14		
指物・建築材等	棒状木製品										3						3	12	51	1		70	2778	12
	枘付木製品													1			2	4	4			11		
	針状木製品																	1	16			17		
	角柱状木製品							21		4												25		
	部材			10	2	11	5	23	5	25	26	1		2	1	1	66	228	232	7		645		
	脚										1						1	3	1			6		
	角材			17			4	2	2	5	6		4				6	12	216	8		282		
	板材		2	11	6	9	8	25	6	18	31		12				7	50	537	29	2	753		
	木釘										1							4	36			41		
	杭	1	52	103	8	18		10	1	12	19	1		1		1	50	285	176	63		801		
	柱根			1		7					1						42	47	24	4	1	127		
農具	田下駄																2	1				3	15	0
	鎌柄							1			1						1		2			5		
	木錘																2	1	4			7		
雑具	題箋状木製品										1							2				3	14	0
	有頭木製品																1	1	2			4		
	火鑽弓																		1			1		
	火鑽臼																2	2				4		
	鈎																	2				2		
そのほか	有孔円板										1						3	5	2			11	12564	54
	小型有孔円板												1	1								2		
	円形板																1	3	2			6		
	漆膜																	2	1			3		
	把手																2	2	1			5		
	俎							2											1			3		
	雑木		2	10	4	30	2	13	4	13	676	62	87	21	7	5	1875	5419	4141	157	6	12534		
合計		1	56	158	23	107	33	117	23	94	1267	73	118	44	11	9	2917	9343	8628	305	14	23341	23341	100

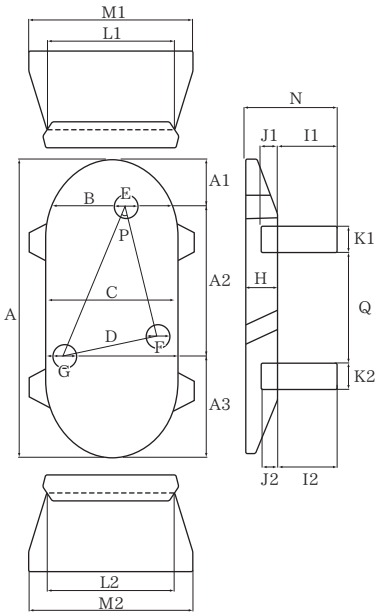
第２表　木製品集計表（遺跡全体）

構造	器種	台部平面分類		台部側面分類	歯部分類	
一木下駄	A：連歯下駄	Ⅰ：長方形 Ⅱ：楕円形	a：幅／台長が1/2未満 b：幅／台長が1/2以上	1：長方形 2：舟底形	Ⅰ：縦断面が台形 Ⅱ：縦断面が長方形	
	B：無歯下駄					
差歯下駄	C：露卯下駄					a：両歯枘1 b：両歯枘2 c：前歯枘2・後歯枘1 d：前歯枘3・後歯枘2
	D：陰卯下駄					

第3表　下駄分類

のを1、船底形のものを2とした。船底形は、枘付の歯の取り付けを安定させるためのものと考えられることから露卯下駄についてのみ見られる。

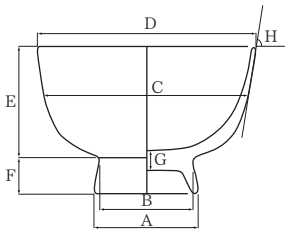
歯部については、歯の縦断面が台形（いわゆる銀杏歯）のものをⅠ、歯の縦断面が長方形のものをⅡとした。更にCの露卯下駄については、枘の数で、枘が前後の歯共に1か所のものをa、前後の歯共に2か所のものをb、前歯が枘2か所・後歯が枘1か所のものをc、前歯が枘3か所・後歯が枘2か所のものをdとした。



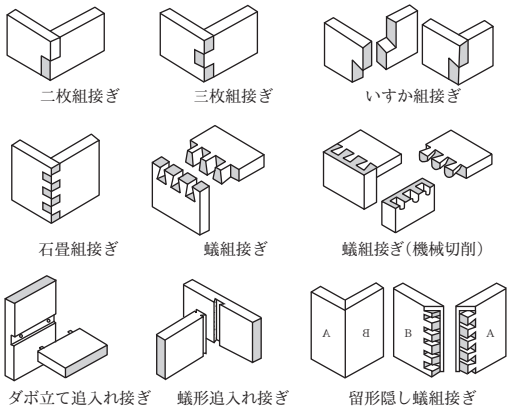
第14図　下駄の計測部位
（［北陸中世土器研究会 1996］より転載）

C 記述の方法

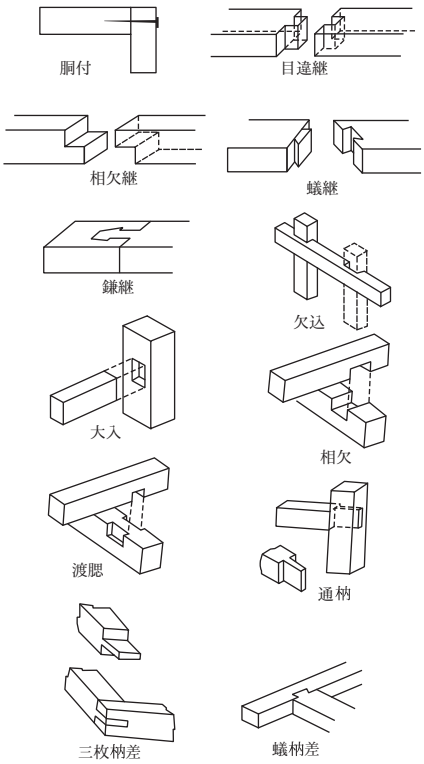
記述はほかの遺物と同じく調査年度毎に図版・観察表を作成しており、2009年度は調査順に、X層検出遺構出土木製品（以下、木製品省略）、SR1–1層検出遺構出土、SR1–1層出土、SR1–1～2層検出遺構出土、SR1–2層検出遺構出土、SR1–2層出土、SR1–3層検出遺構出土、SR1–3層出土、SR2出土、試掘・



第15図　挽物椀・皿の計測部位
（［北陸中世土器研究会 1997］より転載）



第16図　指物の組接ぎ模式図
（［府中家具 2000］より出力）



第17図　継手と仕口模式図
（［黒崎 1994］より転載）

確認トレンチ（以下、Tとする）出土の順に行う。次に2010年度、2011年度の順である。

漆器類の観察表計測部位については第15図のとおりである。名称等については、四柳嘉章氏の各論稿［四柳2006a・b、2009］を参考にした。柱材の分類は［春日2008］、実測図の加工痕の表現方法は［加藤ほか2003］による。継手・仕口・組継の表現は第16・17図を参考にした。出土地点、法量等は巻末の観察表を参照願いたい。

D　各　　説

1）2009年度SR1-1層検出遺構出土木製品（図版65-1～12、図版181・182）

SB336（1～3）　1～3は柱根である。

SB336-P1（1）　芯去削り出し材を用い、先端に向かって細く加工されている。欠損するが、枘穴と考えられる加工痕が残ることから、別の用途に用いられた材の転用とも考えられる。

SB336-P3（2）　一部に樹皮が残存する芯持丸木材を用いる。先端に向かって細く作出されるが、加工はほかの柱根より粗く、伐採痕のままの可能性がある。

SB336-P4（3）　一部に樹皮が残存する芯持丸木材を用いる。ほぼ平坦に作出される先端は加工がほかの柱根より粗く、伐採痕のままの可能性がある。

P750（4）　芯去削り出し材を用い、先端は平坦である。別の用途に用いられた材の転用とも考えられる。

P752（5）　一部に樹皮が残存する芯持丸木材を用い、先端に向かって細く加工されている。

P754（6）　芯持ち材であるが、芯が偏っており下部の膨らんだ部分の下面は平坦に作られている。途中のくびれはよく使用され平滑である。何らかの部材の転用と考えられる。

P755（7）　長さ43.0cm・幅4.2cm・厚さ2.2cmと柱根としては細く、斜めの状態で検出されたことから杭の可能性がある。

P757（8）　半割材を用い、先端に向かって細く加工されている。また、側面に弧状の刃物痕が残る。

P758（9）　芯去削り出し材を用い、先端に向かって細く加工されている。

P43（10）　柱根である。芯去削り出し材を用い、先端は平坦である。

P88（11）　柱根である。芯持丸木材を用い、先端に向かって細く加工されている。

P449（12）　柱根である。芯持丸木材を用いる。側面への加工は顕著だが、先端は比較的平坦に作出される。

2）2009年度SR1-1層出土木製品（図版66～69-13～54、図版173・182・183）

13･14は串としたものである。いずれも長さ30cm、幅2cm、厚さ1cm程度の板の先端を細く加工する。

15は漆器の椀で、内外面共に黒色漆を施す。他の出土漆器と比較して薄手である。16は漆器の椀である。内外面共に黒色漆を施しているが、高台の内側では塗膜を確認できなかった。17は漆器の椀で、内外面共に黒色漆を施す。他の出土漆器と比較して高台が明瞭で、器高も低いことから異質な印象も受ける。18は漆器の椀である。内外面に黒色漆を施した後に、赤色漆により手書きで漆絵が描かれる。塗膜の剥離により全容はうかがい知れないが、内面中央を鶴、左の植物文を竹、もしくは沢瀉とすると蓬莱文様の可能性を指摘できる。19は漆器である。漆の塗膜は残存しないが、器面に下地と考えられる黒色の粒子がわずかながらも確認できることから漆器と考えた。器種は明確にし得ないが、器壁が他の椀よりも厚いことから鉢の可能性も考えた。20は蓋で、表裏面に黒色漆を施す。また、表面には薄い短冊状の木質を

漆塗膜で貼り付けることにより「三つ又」状と「V」状の装飾が加えられる。

21 は編組製品の一部であり、下部に折り返し部分が残る。2 本飛ばし 2 本潜りの網代組みである。器種は不明であるが、樹種同定の結果素材はスギであった。22 は箱の側板である。左右 5 か所に釘孔がある。23 は箱の底板で断面に釘孔が残る。24 は有孔円板である。中央に 1.8cm ほどのやや大きめの孔があり、左側に 2 個の小孔がある。25 は鍋蓋で中央にツマミを付けるための方形の孔が開く。26 は折敷の底板か。27 は曲物の底板である。側板と結束する孔に樺皮が 3 か所残る。28･29 は容器の把手と見られ、両端は削って紐掛け部を作りだしている。

30 ～ 39 は下駄である。30 ～ 34 は連歯下駄、35･36 は無歯下駄、37 ～ 39 は差歯下駄の露卯下駄である。30 は長さ 15.7cm と小さいことから子供用であろう。歯の横断面は楕円形である。31 の歯は磨滅しわずかに残る。32 の前歯は良く残るが、後歯は一部のみ残る。33 は腐食が進み、歯がわずかに残る。台表に炭化した小さい丸い凹みが 3 か所ある。34 は長さ 13.1cm と小さく、子供用（1 才程度）か、歯の摩耗がほとんどないことから儀礼用の可能性もある。35 は腐食のため板の厚さが不均等である。36 は使用のためか台裏が 2/3 ほど斜めになっている。37 は歯が抜け落ちている。台板の断面形は舟底型で中央部が低くなっている。39 は前歯を差し込む枘孔が 3 か所開いている。浦廻遺跡［本間ほか 2003］で類例がある。台板の側面形は船底型であるが、中央部が最も高いものである。

40 は杭である。上部は切り欠き、先端は斜めに加工している。42・43 は枘付木製品である。差物の部材と考えられる。同類のもの（179 ～ 181・275）が多数出土しているが、いずれも大きさが異なる。新発田市住吉遺跡［高橋保ほか 2006］や上越市下割遺跡［山崎ほか 2003］でも出土例がある。膳の脚の可能性もある。44 は不明木製品である。長方形の板材に 4 本の溝が鋸で入れられている。連歯下駄の未成品あるいは下駄の台板を取った残りの端材の可能性もある。左側面が部分的に炭化する。45 は脚の一部と見られる。両端を装飾的に加工している。46 は刀子の柄の未成品で、内面が未加工である。47 は木錘である。角材を面取りし、中央に鑿で溝を彫っている。溝には紐等を巻きつけた痕跡が残る。48 は鎌の柄である。刃部は大半が失われているが、柄の中に基部がわずかに残る。下部は握りやすくするために細く削っている。49 は田下駄と判断した。無歯下駄の内最も大きく、緒孔が台の中央寄りに開けられており、現在残る田下駄の緒孔の位置と似る。樹種はスギである。51 は田下駄である。横に長い板を使用した板型田下駄である。表に U 字状の足囲いの枠が刳りぬかれている。枠の高さは 5.1cm である。枠の両側の下方には 2 か所孔が開いており、縄を通し足首に固定するためのものである。板の右側に 1 か所孔があるが、これは縄等を通して板を斜めにし、田から田下駄を抜きやすくするためのものである。裏面には踵側に 4cm 四方で高さ 1.5 ～ 2cm の 4 つの脚が付く。この脚は転倒防止、深田から田下駄を抜きやすくするためのもとされる。この形の田下駄は弥生時代後期から現代まで使用されている。現代では代踏み用に使用されていた［潮田 1973］。県内では、新潟市馬場屋敷遺跡［川上･遠藤 1983］、上越市新保遺跡［石川ほか 2001］の中世遺跡から出土している。樹種はクリで新保遺跡出土のものもクリであった。田下駄は水を含むと重くなるため、スギなどの軽い樹種が選ばれることが多いが、足枠を刳りぬくという形態から丈夫で硬いクリが選択されたものであろう。

51 は火鑽臼である。6 か所の使用痕が残り、上下が欠損している。52 ～ 54 は用途不明の木片である。同様の大きさの木片が纏まって出土したことから接合を行い、3 点のみ図化した。角棒状の材を斜めに切り、更に厚さ 0.5 ～ 0.8cm の薄い板を切り出している。52 は楔のような形態に更に加工されていることからこの形が最終形のようにも考えられるが、詳細は不明である。

3）2009 年度 SR1–1・2 層検出遺構出土木製品（図版 69・70–55～73、図版 173・183・184）

SD111（55）　漆器の椀で、内外面共に黒色漆を施す。

SD112（56・57）　56 は箆で上部に 2 か所の切り欠きが入る。下部は裏表から削り刃部のように加工している。57 は扇の骨である。要には 0.3cm の孔が開く。素材はスギである。

SR165（58 ～ 73）　58 は曲物の枠木の可能性がある。左側は加工し、紐等が掛けられるようにしている。59 は人形である。角棒状の材を加工し立体的に折烏帽子等を表現している。顔も丁寧に表現される。60 は斎串である。圭頭で左右に切り欠きが 2 か所入れられる。文字は確認できない。61 は不明木製品である。中央に方形の孔が有り、左右に 2 か所釘孔がある。表面に黒色の部分があるが、漆の一部か木質が黒変したものか定かでない。62 は箱の側板である。両側面・底面に 2 か所釘が打たれている。63 は箱の側板である。木釘が側面に 2 か所、底面に 3 か所ある。残存している木釘は直径 0.4cm、長さ 1.1cm である。裏面には接合する側板の圧痕が残る。64 は蓋である。把手を接合する部分に釘孔が 8 か所残る。65 は連歯下駄である。台板の後部は鋸のようなもので切断されている。台表に刃物痕が残る。歯の摩耗はほとんどない。66 は草履芯で一部欠損している。上部に方形の孔が開けられ、右側面は切り欠きが行われている。67 は刀子の鞘である。長さ 20.3cm、幅 2.4cm であるが、実際入れる刀子は刃渡り 11.5cm 前後である。68 は題箋状木製品で、転用品か 1 か所木釘が残る。69 は草履芯である。表のワラの痕跡が横方向に残る。70 は脚で中央に溝が入る。接地面の幅が同一でない。71 は部材で大小の孔が開く。73 は漆器椀で内外面共に黒色漆を施し、内面には赤色漆により手書きで植物文と考えられる漆絵が描かれる。

4）2009 年度 SR1–2 層検出遺構出土木製品（図版 70～73–74～120、図版 173・174・184～186）

74 は舟形である。辺先は削りで加工されており、ほぼ中央に帆を差し込む穴が残る。75 は連歯下駄で右半分が欠損している。ほぼ中央の位置に縦に 3 個の小孔があり、2 個には木釘が残ることから、転用品の可能性がある。76 ～ 79 は漆器皿である。76 は内外面共に黒色漆を施す。底面及び側面の一部では加工痕が明瞭に残るほか、底面では「＊」状の刻線が施される。77 は内面に赤色漆、外面に黒色漆を施す。78 は皿で、漆の塗膜は残存しない。しかし、器面に下地と考えられる黒色の粒子がわずかながらも確認できることから漆器と考えた。79 は内面に赤色漆、外面に黒色漆を施す。また、自然科学による分析を行い、漆塗膜断面観察では漆層は内外ともに単層で、X 線回折分析では内面の赤色顔料は水銀朱との結果を得た。

SK94（80）　部材である。長辺に抉りが 2 か所ある。孔が 2 か所あり、1 か所には木釘が残る。

SK168（81）　連歯下駄である。表の下部から裏面の一部に炭化した痕がある。

SK335（82）　火鑽臼である。使用痕が 9 か所ある。

SK399（83・84）　83 は楕円形の曲物である。土圧で側板がつぶれ変形している。側板の上 1/3 が斜めにきれいに切断され、底板との接合部のみが高さ 1.5cm ほど残る。側板の内側には毛引きが施される。84 の板が蓋として付く。本遺跡では曲物側板の断片が百数十点、底板数点出土しているが全体の器形がわかるものはこの 1 点のみである。時代は下がるが、19 世紀前半の石川県金沢市本町一丁目遺跡［増山ほか 1995］出土品に同形の曲物が「おまる」と報告されており、83 も「おまる」の可能性が高い。84 は 83 の蓋板である。腐食が進んでいるが、本来は 1 枚の長方形の板であったと考えられる。裏側に曲物の縁の圧痕が残る。84–1 の下部に切り取られた部分が左右に 2 か所と釘孔が 2 か所残る。この板も転用品

であろう。この曲物と蓋の出土状態から墓やトイレ等を想定し内容物について微細物分析を行ったが、昆虫の化石が多いということ以外用途を特定できる結果は得られていない（第Ⅵ章３参照）。

SK529（85・86） 85 は人形とした。頭部に当たる部分はわずかに削られている。顔の表現は無い。86 は部材である。上部に貫通する孔が１か所ある。

SK534（87･88） 87 は刀子の柄である。目釘孔が１か所ある。刀子の基部の長さは 8.2cm、幅 1.3cm である。88 は曲物の底板で、孔が２個ずつ３か所残る。

P22（89） 柱根である。芯持丸木材を用い、先端に向かって細く加工されている。

P28（90） 柱根である。芯持丸木材を用い、先端に向かって細く加工されている。

P39（91） 柱根である。芯持丸木材を用いるが、途中に段を設け、この下半は削り出しにより角状に加工される特異な形状となる。

P76–B（92） 柱根である。芯持偏半割材を用い、先端に向かって細く加工されている。

P386（93） 柱根である。芯持丸木材を用い、先端に向かって細く加工されている。

P447（94） 柱根である。芯持丸木材を用いる。先端は細く作出されるが、加工はほかの柱根より粗く、伐採痕のままの可能性がある。

P521（95） 刀子の柄の未成品である。内面の炭化したところは刀子の茎を熱し当てたところである。本来この部分を削り刀子の茎をはめ込むのであるが、未成品のまま廃棄されている。95 の出土により屋敷地内で刀子の柄を生産していたことが判明した。

SA12–8（96） 西側盛土の土留めの杭である。芯持ち丸木を使用している。

SA13–10（97） 西側盛土の土留めの杭である。枝を打ち払い先端を細く加工している。

SA13–23（98） 西側盛土の土留めの杭であるが、杭とするには薄く平らなスギの板材を使用している。上部は斜めに切られ、左側に台形状に切られた部分がある。

SA13–20（99） 杭である。樹皮がわずかに残る。芯持ち丸木を使用している。

SA145–2（100） 杭である。樹皮がわずかに残る。芯持ち丸木を使用している。

SX5（101・102） 101 は杓子である。柄は両端を面取りし、身はやや薄く削る。102 は枘付の木製品である。角棒状の材から丸い枘を作り出している。

SX30（103） 杭である。多角形の材を使用し、先端は３面を加工し細く仕上げている。

SX55（104） 串である。やや幅広の材を使用し、先端は２面加工している。

SX62（105） 部材としたが、２つの貫通した孔があり、木錘や栓の可能性もある。上部を面取りしている。

SX209（106・107） いずれも杭である。107 はハンノキと判明した。

SX439（108） 杭である。芯去削り出し材を用い、先端の加工は顕著ではない。別の用途に用いられた材の転用とも考えられる。また、上部の１面が炭化している。

SX566（109） 杭である。芯持ち丸木を使用し、樹皮が残る。

SD166（110・111） 110 は茅針の先端部分で柄はほとんど欠損している。111 は蓋で、ツマミ部分の先端が欠損している。全体に灰汁が付着し黒く光沢がある。

SD339（112 ～ 114） 112 は木針である。扁平な板の先端をとがらせ、頭部に三角形の針耳を開けている。113 は左右の側面を鋸歯状に丁寧に加工したものである。先端は欠損している。装飾品の部材であろうか。時代は古代であるが、上越市延命寺遺跡［山崎ほか 2008］に類例が報告されている。114 は題箋状木製品である。薄い柾目板の先端を細く加工している。文字は確認できない。

SD371（115）　鉤である。クリの枝の屈曲部をうまく利用している。上に縄掛けの孔が開けられ使用痕が見える。水平部分にも 1 か所孔が開けられている。

SD405（116）　鳥形である。尖った嘴や水平に伸びる飛行体形を表現しているようである。

SD436（117）　連歯下駄である。台板は楕円形である。

SD597（118 ～ 120）　118 は露卯下駄の歯で下辺面に石の粒が残る。119 は漆器の椀である。内外面共に黒色漆を施し、内面には赤色漆により漆絵が描かれる。120 は漆器の椀で、内外面共に黒色漆を施す。

5）2009 年度 SR1–2 出土木製品（図版 74～79–121～199、図版 174･176･186～189）

121 は荷札状木簡である。第一号木簡の蓋板（255–1・3）に形状が類似する。斜め方向に長い刃物痕が複数残る。左下の一部が欠損している。文字は確認できない。

122 は舟形である。正面に帆を立てるための孔が 1 か所開く。123 は木鏃の可能性があるが祭祀用か。124 は陽物形である。角棒状の材を使用し丁寧に加工している。

125 ～ 127 は漆器皿である。125 の塗膜は残存せず、下地についても観察できないため白木皿の可能性を残す。観察表 H の角度も他の漆器の皿が示す値より小さく、異なる印象を受ける。126 は内外面共に黒色漆を施す。底面では加工痕が明瞭に残る。127 も内外面共に黒色漆を施す。底面及び側面の一部では加工痕が明瞭に残る。底面の漆は大部分が剥離し、わずかに残るのみである。

128 ～ 132･134 ～ 137 は漆器椀である。128 は口縁部片である。破片の正面左側では内外にまたがって布が貼り付けられている。これは、いわゆる「布着せ」とは異なるものであり、使用に伴う欠損の補修を意図したものとも考えられる。129 は内外面共に赤色漆が施される、いわゆる「皆朱漆器」で、本遺跡ではこの 1 点のみの出土である。腐植が進んでいるため写真のみの掲載である。外面には赤色漆により手書きで植物文と考えられる漆絵が描かれる。また、自然科学分析を行い、漆塗膜断面観察では漆層は内外ともに単層で、X 線回折分析では赤色顔料は水銀朱との結果を得た。130 は内外面共に黒色漆を施す。131 は底面に「兀」状の刻線が施される。また、自然科学分析を行い、漆塗膜断面観察により内面の漆層は 12 層で、遺存状態の悪い外面においても 6 層が確認された。132 は内外面共に黒色漆を施す。133 は内面に黒色漆、外面では漆の塗膜は残存しないが、器面に下地と考えられる黒色の粒子がわずかながらも確認できることから、こちらにも塗面が形成されていたと考えられる。また、底面には「中央が円錐状の爪」によるものと考えられる「ロクロ爪あと」［高橋保ほか 2008］が 2 つ認められる。器種は明確にし得ないが、器壁が他の椀よりも厚いことから鉢の可能性も考えた。134 は内外面共に黒色漆を施す。126・131・134 の漆器は SR1（6F8 グリッド）の 2 層中から 3 個体が重なって出土したものである。126 を上とし、その下の 131 と 134 は隙間無く密着した状態であった。セット関係を表している可能性がある。135 は内外面に黒色漆を施した後に、赤色漆により巴文が加えられる。巴文は最外周の円のみ型押しで、これ以外の部分は手書きで右三つ巴が描かれる。内面では中央に 1 つ、外面では側面にほぼ均等な割り付けで 4 つが施されている。また、自然科学分析を行い、漆塗膜断面観察では外面では少なくとも 3 層以上の漆層を確認し、X 線回折分析では赤色漆絵の顔料は水銀朱との結果を得た。136 は内外面共に黒色漆を施し、内面には赤色漆により手書きで植物文と考えられる漆絵が描かれる。137 は漆器の椀で、内面に赤色漆、外面に黒色漆を施す。外面には赤色漆により手書きで扇文が描かれる。また、自然科学による分析を行い、漆塗膜断面観察では漆層は内外ともに単層で、X 線回折分析では内面の赤色顔料は水銀朱との結果を得た。

138 は杓子である。柄が若干厚い。139 は菜箸とした。140 は折敷の底板である。側板を結束する孔が 2 個 1 単位で 3 か所確認できる。刃物痕が残る。141 も折敷の底板である。右側がわずかに欠損する。142 は栓である。全体を細かく面取りしている。上部に栓をした時のタタキ痕が残る。143 は楕円形の曲物の蓋板である。把手を付ける溝が 2 本切られている。刃物痕が多数残る。144 は小型木製品の把手であろうか。145 も把手である。丁寧に面取りして整形している。146 は四方転びの箱の側板である。底面側面共に釘孔が多数残る。147 は口がやや狭くなる箱の側板である。上部は欠損しており、炭化した部分も残る。148・149 は柄杓である。ほぼ同寸法で同一の材を使用しているが、組接ぎの方法が異なることから同一個体ではない。148 はほぼ中央に柄を固定する孔が開く。左右の側面は二枚組接ぎで、木釘で留めている。149 は左右の継手は胴寸で、木釘で留めている。

150 は小型の円板である。やや楕円形になり、木釘が 1 か所残る。151 も小型円板である。周囲は面取りされている。樹種はコウヤマキであると判明した。材が搬入されたのか製品が搬入されたのか不明だが、西日本で主に生育する樹種で、福島県西会津町あたりが北限［石村 1997］とされる地域性の高いものである。152 も小型円板である。表面に刃物痕が残る。153 は有孔円板である。中央に直径 3mm ほどの孔が開く。小型容器の蓋であろうか。154 は蓋である。中央にツマミを取り付ける方形の孔が開く。孔の下部に釘孔が 2 か所確認できる。裏面に刃物痕と円形の圧痕がつく。155 は蓋で 3 枚の長方形の板に半円形の材が上中下 3 か所につく。半円形の材は長方形の板に紐状のもので結う構造である。156 は蓋板である。把手を付ける溝を切っている。裏面には刃物痕と刺突痕がある。157 は曲物底板である。158 も曲物底板で、樺皮で綴じる孔が 4 か所残る。159 は曲物の枠木と考えた。160 は箱の蓋と考えた。中央に長方形の孔が開く。釘孔が多数あり木釘も残る。

161 は横櫛である。解き櫛で歯は 3cm 当たり 8 本である。全体に黒漆が塗られ、棟に銀？の蒔絵のような装飾が見られる。素材の分析は行っていない。162 も黒漆塗りの横櫛である。梳き櫛で歯は 3cm 当たり 26 本である。形態から中世後期の可能性がある。樹種はいずれもイスノキであった。本遺跡で出土した 6 点（内 3 点は 2011 年出土未報告）について樹種同定を行ったが、すべてイスノキであった。イスノキは今日では主に西日本に生育することから、製品の搬入あるいは原木の搬入によるものと見られる。

163 ～ 175 は下駄である。165 ～ 171 は連歯下駄である。163 は表裏に 1 か所ロクロ針痕のような丸い痕跡があるが、下駄にロクロ使用は考えられず詳細は不明である。芯持ち板目材を使用している。164 は台表に右足の痕跡が明瞭に残る。165 は中央で半割している。後ろ緒孔は方形である。左の側面に切り欠きが入るが用途は不明である。166 は連歯下駄であるが、歯はほとんど摩耗している。緒孔が中央寄りに開けられる。167 は連歯下駄であるが歯はほとんど摩耗している。後ろ歯は斜めに作り出されている。168 は楕円形の歯が作り出されている。過半は腐植が進んでいる。169 も楕円形の歯が作り出されている。168・169 は大きさや形態が似ることから 1 組の可能性がある。170 は無歯下駄である。

171 ～ 174 は差歯下駄の露卯下駄である。171 は前歯の枘は 2、後歯の枘が 1 のものである。台板側面の中央が低くなる作りである。172 も露卯下駄で枘穴は前歯・後歯共に 1 個のタイプである。台表には「米」字状の刻書がある。173 も露卯下駄で枘穴は前歯・後歯共に 1 個のタイプである。174 は露卯下駄枘穴 1 つ用の歯である。

175 は陰卯下駄である。陰卯下駄はこの 1 点のみである。大きさから子供用であろう。台板の側面形は長方形で表に足跡痕が残る。丁寧な作りである。歯は「蟻差」という差し込み部を斜めに削り、接続強固にしたものである。この下駄で技法が使われている中では古い例となろう。馬場屋敷遺跡出土の陰卯下

駄には無い。176 は陰卯下駄の歯である。台板の溝との装着部分は厚みを減じている。177 も下駄の歯の一部である。中央部が欠損しているため露卯下駄か陰卯下駄かは不明である。側面は細かく面取りしており、上部がやや張り出す。

178 は草履芯である。ほぼ完形である。右側の孔がやや大きい。

179 ～ 181 は枘付木製品である。いずれも角柱の材の四隅を面取りし、枘部分はほぼ円形に成形している。同じ用途の部材であろうと推測されるが、長さ･幅が少しずつ異なる。枘部分に鋸痕が明瞭に残る。180 は元の角柱がやや不整形であったのか、面取りや細かな表面のケズリで成形している。一部炭化している。枘部分も細かなケズリで円形に成形されている。

182 は有頭棒である。頭部の上端は炭化している。このような形態の木製品は馬場屋敷遺跡では石棒状木製品とされ一般に祭祀具に分類される。ほかに頭頂部が丸いこともあり擂りこぎ棒の可能性もある。

183 は脚である。両端に木釘穴が 4 か所ある。同様の部材 4 枚で箱状の脚となる。下面はケズられ透かしのようになる。184 も脚である。断面形は逆三角形である。下部に大きく透かしが入る。左の端部が炭化している。185 は部材としたが詳細は不明である。186 は不明木製品である。木の葉状に成形された板に 4 か所穴が開く。上下はノミ状のもので、左右は錐状のもので開けている。187 は不明木製品である。先端が細く加工されている。188 も不明木製品である。右側面に鋸歯状の加工がされている。189 も不明木製品である。187 と同様に右側面に鋸歯状の加工がされるが不均等である。190 は 189 と一緒に出土したが同一製品の部材かは不明である。191 は部材で上下両端に枘が切られる。この板の上に幅 6 ～ 7mm 高さ 7 ～ 8mm の細い角材が乗り木釘で留められている。

192 は刀子の柄である。刀子（64-40）が装着した状態で出土した 193 も刀子の柄である。内側に刀子の柄の一部が残る。目釘も残る。194 は錐の柄である。断面形はほぼ円形に成形され、下部がやや細くなる。上部に刃部を差し込む円形の穴が開けられている。

195 は茅針の先端部である。縄を入れる穴から下が欠損している。196 も茅針で完形品である。長さ 103.4cm・幅 2.8cm・厚さ 1.6cm で現在も残る民俗資料の茅針とほぼ同規模である。縄を入れる穴は長さ 1.8cm 幅 1.0cm である。197 は篦である。平坦面は丁寧にケズリを施され、刃部は両面から削り出されている。198 は木錘である。上部に紐掛けの切り欠きが施される。199 は田下駄である。下部の凹みは前緒穴が欠損したものであろうか。

6）2009 年度 SR1-3 層検出遺構出土木製品
（図版 79 ～ 82-200 ～ 254、図版 172・175・176・189・190）

SK177（200・201）　200 は俎である。上下左側面が面取りされる。板の厚みが均一ではなく、中央が窪む。201 は、黒漆塗りの横櫛である。両端は欠損し、歯の本数は 3cm 当たり 35 本で梳櫛である。切通し線は背の上線に並行して曲線を描く。

SK179（202 ～ 205）　202 は漆器の椀である。内外面共に黒色漆を施すが、外面の高台内側では塗膜が剥離して残存しない。203 は皿で、漆の塗膜は残存しない。しかし、器面に下地と考えられる黒色の粒子がわずかながらも確認できることから漆器と考えた。202 と 203 は並んだ状態で出土していることから同時に廃棄されたと考えられるが、203 の塗膜は廃棄以前からこのような状態であったと推測される。204 は第二号木簡の種子札である。スギの板目材を使用し下部をケズリとがらせている。木簡の釈文等については別項（第Ⅶ章 2B4）を設けた。205 は漆器の椀で、内外面共に黒色漆を施す。

SK201（206 ～ 209） 206 は皿で、内面に黒色漆、外面に赤色漆を施す。207 は草履芯である。側面に長方形の切り欠きが施される。208 は曲物の底板である。側面に木釘が残る。209 は楔と考えられる。

SK206（210 ～ 212） 210・211 は同一の製品の部材と考えられる。210 は上下部に枘が切られ上の枘には釘孔が残る。211 は中央に相欠継という継ぎ手で継がれるが釘孔は無い。障子の桟という意見もあるが、詳細は不明である。212 は円形板である。小孔が多数開くが、植物根の痕の可能性もある。

SK207（213） 213 は部材で下部に目違継となる枘が切られている。窪みのほぼ中央に木釘孔が 1 か所確認できる。

SK211（214・215） 214 は茅針の先端部である。縄を入れる穴から先端のみ残存している。先端部はほぼ円形に成形されている。215 は有孔円板である。長さ 3.0cm と小型である。蓋であろうか。

SK260（216 ～ 222） 216 は刀形である。刃部の長さ 12.5cm、柄の長さ 6.8cm である。片面は丁寧にケズリを施している。217 は鳥形で表裏面を丁寧にケズリ調整している。尾は跳ね上がり、付け根に貫通した 2mm の三角形の小孔が開く。目も丸く表現されている。218 も鳥形とした。全体に抽象化され尾が極端に長い。体部に四角形の孔が開く。219 は連歯下駄である。台表に多数の刃物痕と横に並んだ 3 個の小孔がある。裏面は丁寧に細かなケズリ調整を施す。220 は差歯下駄の露卯下駄である。足指痕から右足用である。歯は銀杏歯で枘が 2 本付く。歯の高さは枘部分を除いても 11cm と高い。歯の接地面に砂利が付着する。221 は鎌の柄である。刃部の基部が残り、錆びて瘤状になっている。目釘孔は 2 か所である。柄の下部には滑り止めになる指掛け部が 4 か所作り出されている。222 は把手が 2 本付く蓋である。縁が面取りされる。表裏面共に刃物痕が多数あり俎としても使用か。裏面は炭化しており鍋・釜等の蓋であろう。

SK399（223） 折敷と見られる板の内側に漆あるいはタール状の黒色の繊維を含むものが盛り上って付着している。成分分析は行っていない。

SK476（224 ～ 226） 224 は漆器の椀で、内面に赤色漆、外面に黒色漆を施す。外面には赤色漆により手書きで植物文と考えられる漆絵が描かれる。また、自然科学による分析を行い、漆塗膜断面観察では漆層は内外ともに単層で、X 線回折分析では外面の赤色顔料は水銀朱との結果を得た。225 は枘付木製品である。体部に貫通する幅 5mm の木釘が 1 か所ある。枘付木製品は複数出土しているが、木釘が残るのはこの 1 点のみである。226 は不明木製品である。先端は薄く尖る。

SK492（227） 鑿の柄である。先端に 8mm の刃部を入れる三角形の孔が開く。

SK502（228） スギの籤である。短いものと長いものは折り長さを揃えて 10 枚重ね、外側のもので全体を巻いている。21 の編組に使用されたものの残りであろう。幅・厚みが共通する。スギ材の編組は現在も類例がある。

SK589（229） 折敷の側板の一部で綴じ紐が残る。綴じ紐は幅 1mm で柾目の材から作ったもので樺皮ではない。

SK666（230 ～ 242） 230 ～ 237 は箸状木製品である。置いたように 8 本は揃って出土した。いずれもスギ材で長さ 17.2 ～ 19.2cm で両端を細く加工している。本遺跡では 6,000 本以上の箸が出土しているが、ほとんどが両端を細く加工したものである。238 ～ 242 は木釘であろうか。36 本纏まって出土した内 5 本を図化した。幅 2 ～ 5mm の角材を 6cm 程度に切りそろえている。木釘であればこれを更に切断して使用するものと考えられる。

P275（243） 漆器の片口鉢である。塗膜の遺存状態は不良であるが、本来は全面に黒色漆が施されて

いたと考えられる。

P551（244）　柱根である。芯去削り出し材を用い、先端は平坦である。別の用途に用いられた材の転用とも考えられる。

P669（245）　柱根である。芯持丸木材を用い、先端に向かって細く加工されている。また、側面にも加工痕が残る。

SX131（246）　茅針の先端部である。縄を入れる孔から下を欠損している。先端部はほぼ円形に加工している。

SX248（247）　杭である。角棒状の先端を細く加工している。

SX277-2（248）　杭である。芯持ち丸木材の先端を 3 面加工し細くしている。樹皮が残る。

SX277-5（249）　楕円形曲物の底板である。表裏面に刃物痕が多数残る。綴じ孔が 2 個 1 単位で 6 か所残る。うち 1 か所には樺皮で綴じた痕跡が残る。

SX518（250）　250 は部材である。上部は通枘に加工している。中央にほかの部材と組み合わせる枘穴が開けられている。

SD113（251 ～ 253）　251 は円板である。側面に釘の痕跡のような窪みが 1 か所ある。表面に C 字状の圧痕が多くある。柄杓の底板であろうか。252 は差歯下駄の歯である。枘が 2 本付くタイプで、歯の右側が欠損している。差し込み付近を薄く削り調整している。253 は枘付木製品である。本体・枘部共に面取りを細かく行い断面形はほぼ円形である。

SD259（254）　自立することから脚の可能性がある。上部の突起は枘が切断されたものか。

7）2009 年度 SR1-3 層出土木製品（図版 82～84-255～295、図版 172･175･191･192）

木簡（255）　第一号木簡である。スギ板が 3 枚重ねで出土した。文字の書いてある板は中央の板で表裏に文字がある。釈文等詳細は別項（第Ⅶ章 2B4）を設けた。

祭祀具（256 ～ 258）　256 は羽子板形の小型品である。長さ 9.8cm、柄の長さ 3.0cm である。257 は刀形である。柄の中央に溝が入る。刃部の表現は粗雑である。258 は串である。

食事具（259 ～ 265）　259・261 は菜箸とした。261 は漆器の椀である。内外面共に黒色漆を施し、内面中央には赤色漆により漆絵が描かれる。262 は漆器の椀で、内外面共に黒色漆を施す。263・264 は杓子である。265 は漆器の椀と考えた。腐植が進み写真のみの掲載である。内面に黒色漆、外面に赤色漆を施す。外面には赤色漆により手書きで植物文と考えられる漆絵が描かれる。また、自然科学分析を行い、漆塗膜断面観察では漆層は内外ともに単層で、X 線回折分析では内面の赤色顔料は水銀朱との結果を得た。

容器（266 ～ 273）　266 は折敷の底板である。表面に刃物痕が多数残る。267 は刳物の長方形の箱である。縁を 1.5cm 程残し、内側へ斜めに掘り込んでいる。268 は箱の側板の可能性がある。彫り込んで入れた文様の一部がある。269 は箱の側板である。木釘が 2 か所ある。裏面には刃物痕が多数ある。俎や台板などに再利用されたのであろう。270 は曲物の底板である。側面に釘孔が 5 か所ある。271 も容器の底板と考えられ、側面に木釘が残る。272 は鍋蓋である。把手を付けるための釘孔 4 か所がある。表は全面にコゲが付着している。裏面のコゲは斑である。273 は把手である。中央に長方形の透かしが入る。

草履芯（274）　草履芯で上下辺が水平に切られるタイプのものである。

部材（275 ～ 295）　用途不明木製品であるが、他の部材と組み合わせて製品となるものである。275

は枘付木製品であるが体部・枘部分の断面がかまぼこ状になるものである。276 は長方形の板材の両端に 2 枚組接ぎの枘が切ってあり 3 か所木釘で止める箱状のものである。中央付近に並ぶ木釘は仕切り板を止めるものと底板を止めるものか。刃物痕も多数あり、転用されている可能性がある。277 は断面形がかまぼこ状をなす。木釘が 1 か所残っている。下部はやや細く成形されている。278 は細棒状で上から 2cm のところから幅 1cm の溝が彫られる。断面形が楕円形をなす。279 は脚であろうか。木釘が 3 か所打たれる。

280 は断面かまぼこ状の棒に 2 か所段を作り厚さを減じているものである。281 は角棒状の材の両側を加工したものである。下部は厚さを 1/3 にし、上部は細かく切り欠き部を作り出している。ケズリの厚さを半分にしたものである。282 は長方形の板材に 7 か所穴があき、中央の長楕円形の穴には幅 1.7cm、厚さ 0.4cm 薄板が差し込まれる。283 は板材の両端に U 字状の切り欠きが入れられる。断面は下が平らで上を斜めに切り三角形となる。織機の一部で横糸を入れる板杼に形態は似る。284 も 283 と似た形態であるが、中央に切り欠きが入る。279・283・284 は一緒に出土している。285 は細い角材の両端を三枚枘差という継手で組み、木釘で留めて長方形の枠を複数作るものである。両端が破損しているので全体の大きさが不明であるが、障子の桟等の可能性もある。286 は細い板材の両端に相欠継の継手が作られ木釘で留められる。裏にも 2 か所相欠の仕口が作られ、1 か所に木釘孔が残る。断面は中央がやや厚く弓なりに曲がる。287 は薄い板材に方形の孔が開けられている。下端は一部方形に切り取られている。288 は薄い板材の右側面に V 字状の切り欠きが多数入れられている。間隔は一定ではなく、大きさも異なる。刃物痕が 6 か所認められる。289 ～ 293 は針状木製品である。木釘あるいは楊枝の可能性もある。294 は有頭木製品としたが木錘の可能性もある。頭部に孔は無い。295 も有頭木製品である。左右に切り欠きが入り、頭部は丁寧に面取りされる。

8）2009 年度 SR2–1 層検出遺構出土木製品（図版 84–296、図版 175）

296 は漆器の椀である。内外面共に黒色漆を施し、内面中央には赤色漆により手書きで「一」状の漆絵が描かれる。観察時の所見では、他の出土漆器と比較して塗面が平滑な印象を受けた。

9）試掘・確認調査出土木製品（図版 84–297・298、図版 192）

297 は祭祀具の鋤形と考えられる。鋤身を形取り下端は刃部が作りだされる。折敷を転用したもので側板を留める孔が 2 か所残る。水田耕作土から出土しており、祭祀を行ったものと考えられる。

298 は柱根である。芯去削り出し材を用いる。両端が折損し、一部には炭化範囲も認められることから、別の用途に用いられた材の転用とも考えられる。

10）烏帽子？・編組製品（図版 176–299 ～ 306、図版 176）

烏帽子？の可能性がある布圧痕が残る黒色漆膜（299 ～ 304）と編組製品の一部（305・306）は写真のみ掲載した。烏帽子の可能性のあるものについては、破片が複数あるが全体の形は不明である。第Ⅵ章 7 の分析結果を参照願いたい。305 の編組は 2 本飛ばし 2 本潜りの網代組みで斜方向に組む綾杉文となっている。306 は縦方向の籤が密に良く残り、2 重になっている。横方向には樺皮のような黒色のもので編んでいるところが確認できる。素材の分析は行っていない。

7　2010 年度出土遺物（図版 85、図版 193）

A　近　世　磁　器（1）

1 はⅥ層出土の肥前系磁器の染付湯飲み椀である。草花文が描かれる。18 世紀代と考えられる。

B　銭　　貨（2・3）

2 は江戸時代の「寛永通寶」で文字の特徴から 1 期（1636 ～ 1659 年鋳造）の古寛永である。3 は北宋銭の「元祐通寶」で 1086 年の初鋳である。

C　木　製　品（4 ～ 14）

4 は鎌の柄である。刃部の基部がわずかに残る。目釘孔が 2 か所あるが木釘は欠損している。更に下位に鉄釘が打たれるが、刃部の基部を貫通しておらず用途は不明である。樹種はスギである。5 は蓋を転用したもので、右側縁の上部に鋸歯状のキザミをいれている。6 は折敷の底板を転用したもので両側縁に 1 か所抉りを入れている。7 は部材で 2009 年度出土遺物（84–284）に類似品がある。8 は部材である。用途は不明である。9 は 5 枚目水田の畔道と見られる畦畔の盛土の上面から出土した立体形の人形である。横向きの状態で出土した。折烏帽子が細かく表現されている。顔は線刻されるが板の幅が狭いため弱い。10 は部材で畦畔の盛土中からの出土である。中央が高く木釘が 1 本ある。左右を丁寧に削り出している。図版 53–46 の脚としたものに似る。11 は SA716 の 2 本目の杭である。畦畔上に敷かれた樹皮を留めるものである。樹種はヤナギ属である。12 は SA717 の 1 本目の杭である。樹皮が残る丸木の先端を加工しとがらせている。13 は黒漆塗りの杓子である。樹種はモクレン属である。村上市大館跡［青木ほか 2009］で 15 世紀代の類例があり、樹種は同じくモクレン属であった。14 は暗渠掘削中に出土したもので層位は不明であるが、水田耕作土中からの出土であろう。呑口式刀子の鞘の未成品である。2009 年度出土遺物に刀子の柄の未成品（72–95）があったことから屋敷内で生産されていたと考えられたが、当然ではあるが鞘も生産していたことが判明した。

8　2011 年度出土遺物（図版 86 ～ 90、図版 172・194 ～ 198）

2011 年は屋敷地の東端 300m^2（100m^2 × 3 層）を調査したことから、木製品を中心に出土遺物は多い。

A　土器・陶磁器

1）SR1–1・2 層検出遺構出土土器・陶磁器（図版 86–1、図版 194）

SR165（1）　1 は青磁杯である。外面に細めの鎬蓮弁文が施され、見込みに双魚の貼り付け文を施す。高台周辺は一部が露胎する。体部の破損面では漆継ぎ痕が認められる。また内外両面の体部にはススが付着している。分類は杯Ⅲ –4b 類で、時期はＦ期（13 世紀中ころ～ 14 世紀初頭）である。

2）SR1–3 層検出遺構出土土器・陶磁器（図版 86–2・3、図版 195）

SK853（2）　2 は珠洲焼の片口鉢である。ロクロナデの稜が顕著で、口縁端部はほぼ平坦で摩耗してい

る。時期はⅣ期である。

SD857（3）　3 は珠洲焼の片口鉢である。口縁端部はややゆがみがあるが、平坦でわずかに窪んでいる。時期はⅣ期である。

3）SR1–3 層出土土器・陶磁器（図版 86–4 ～ 7、図版 195）

4 は土師質土器の小皿で、ロクロで成形される。底面の外周部分が強くナデ消されている。内側の底面は手持ちによるナデが顕著である。時期は 14 世紀前半である。5 は珠洲焼の片口鉢である。卸目は摩耗しており細めの櫛目で、密に施される。底部切り離しは静止糸切りである。外側の底面は摩滅して磨面が形成されることから、研磨具として転用された可能性がある。時期はⅣ期である。6 は珠洲焼の片口鉢である。口縁部は方頭で外傾する。口縁端部をつまむように指頭の痕跡がみられることから、注口部付近である。時期はⅣ期でも中ころのものである。7 は珠洲焼の甕である。内面は無文のあて具痕、外面は平行のタタキが残る。タタキ目の 1 単位が 6mm と著しく大きく、珠洲市大畠 2 号窯出土甕 No.64［平田 2006］と類似する。時期はⅣ期でも初めのころのものである。

4）SR1–1 ～ 3 層出土土器・陶磁器（図版 86–8・9、図版 195）

8 は珠洲焼の壺である。体部から頸部片である。口頸部の接合痕が残る。9 は珠洲焼の片口鉢である。ロクロナデの稜が顕著で、口縁端部は平坦で摩耗している。時期はⅣ期である。

B　石　製　品

1）SR1–1・2 層検出遺構出土石製品（図版 86–10、図版 195）

SR165（10）　砥石である。4 面が砥面として使用されており、中でも左側面は摩耗が弱く、線状痕が縦横に残る。石材は凝灰岩である。

2）SR1–2 層出土石製品（図版 86–11・12、図版 195）

11 は磨石として使用された軽石である。表面と裏面の中心部分が、平滑に摩耗している。12 は砥石である。5 面が砥面として使用されており、砥石に対して斜位の線状痕が見られる。石材は凝灰岩で、仕上げ砥の可能性がある。

3）SR1–1 ～ 3 層出土石製品（図版 86–13、図版 195）

13 は 5 面が砥面として使用されており、節理により破損した上部側面では、細めの線状痕が砥石に対して斜位に見られる。石材は凝灰岩である。

4）SR2–1 層出土石製品（図版 86–14、図版 195）

14 は 4 面が砥面として使用されており、左側面では、幅 2mm 程の線状痕が砥石に対して縦位に見られる。両側面に対し、表裏面ではやや摩耗が弱い。石材は凝灰岩である。

C　金　属　製　品

1）SR1–3 層出土金属製品（図版 87–15 ～ 17、図版 195）

15 は銅製の装飾金具である。軸棒は欠失しており、円形の飾り板のみ出土している。中央部に横 4mm、縦 3.2mm の方形の孔が見られる。上方は格子状に、下方が斜格子状の透かし彫りで成形している。5mm 程度の円形の浮彫りを四方に持ち、さらにその中に 1mm 程度の円形が 4 ないし 5 個みられる。16・17 は鋏である。16 は下の爪先が折損しており、爪はやや外反している。17 は完形で、わずかに両方の爪が下方に屈曲している。

2）SR1–1 ～ 3 層出土金属製品（図版 87–18、図版 195）

18 は鋏である。下の爪先が折損しており、爪に厚みがある。

D　木　製　品

1）SR1–1 層検出遺構出土木製品（図版 87–1・2、図版 196）

SB336–P8（1）　2009 年度の調査で検出した SB336 の北東隅の柱根である。底部は伐採時のままで両面から斜めに伐採されている。

P804（2）　底部は平らで、周囲は底部付近のみ加工を行っている。根元に近く厚さを調整したのであろう。

2）SR1–1・2 層遺構出土木製品（図版 87–3・4、図版 196）

SD112（3）　屋敷地の東側の区画溝からの出土である。折敷の転用品と見られ、周囲に 8 個の釘孔がある。

SR165（4）　部材である。板材の両端と中央に孔が開く。

3）SR1–2 層検出遺構出土木製品（図版 87–5・6、図版 196）

SA825–7・8（5・6）　5・6 は祭祀用の串である。杭とは異なり薄い板の 1 端を加工し、とがらせたものである。

4）SR1–2 層出土木製品（図版 87–7、図版 196）

7 は長方形の板の上部をかまぼこ状に成形し、裏表に 2 個の円を錐状のもので刻んで、中央に刺突を加えている。詳細は不明であるが、作りが丁寧であることから祭祀具と考えた。寺前遺跡［高橋ほか 2008］に類似品（図版 129–933）がある。

5）SR1–3 層出土木製品（図版 87 ～ 89–8 ～ 36、図版 194・196・197）

8 は第三号木簡・呪符である。文字面を下にして出土した。墨の残りは不良である。符籙という呪いの記号が複数書かれる。最後の五芒星は墨が良く残り判別しやすい。詳細については第Ⅶ章 2B 4）に別稿を設けた。9 は長さ 6.1cm と小さく、舟と見るには舟先が浅く問題もあるが丁寧な作りで、ここでは舟形とした。10 は刃部が作られるが、右端が半円に切られ柄の部分が無い。転用の可能性もあるが、こ

こでは刀形とした。11 も刀形としたが、刀子を模したというより切り出しナイフのような形態である。12・13 は串である。12 は上部が細く下部が幅広で、厚さも 5mm と薄い板で作られる。先端の加工は鋭利である。14 は漆器皿である。底部は欠損している。15 は漆器椀である。内外に赤漆絵が描かれる。間隔を均等に空けた道具で一気に書き上げている。16 は柄杓の下部である。側板の周囲を別の材で巻いて木釘と紐状の材で結束している。通常曲物の結束は樺皮が多いが、これは側板と同じ材を細くしたものを使用している。底板は平らでなく複数の段が付き、粗雑な作りである。17 は曲物に黒漆を内外面に塗った容器である。底部は欠損している。結束は樺皮を使用している。18 は曲物の側板である。結束は樺皮である。ケビキ、釘孔が見える。19 は連歯下駄である。使用痕が残り、下部に浅い刃物痕が多数ある。20 は無歯下駄である。長さ 15.4cm と小さく、子供用か。21 は露卯下駄の歯である。枘は 1 つで台板との接合部近くは丁寧に面取りしている。接地面に砂利が 1 粒めり込んである。22 は草履である。芯の板と周囲を覆うワラが残存している。出土時黄色いワラが全面に残っていたが、気づかず多くを取り除いてしまった。ウレタンで周囲の土とともに取上げ、クリーニングを行った。図化したワラが良く残っている面は出土時に裏になっていた面である。ワラは数分のうちに酸化し茶色く変色した。23 も草履の芯である。ワラがわずかに残る。24 は杭としたが、串の可能性も残る。25 は枘付の木製品である。部材と考えられるが、本遺跡では 2009 年度にも多数出土している。26 は鎌や錐等の柄の未成品か。先端に浅い十字の切り込みが入る。27 は刀子の柄であろうか。木釘が 2 個残り表面は丁寧に削られ、裏面は平らである。28 は棒状木製品である。先端がわずかに細く加工している。29 も柄か。断面はかまぼこ状で、孔が 3 か所開く。30 は把手の未成品であろうか。底面はわずかに湾曲し不安定である。31 は不明木製品である。上下が一回り太く加工され孔があく。浮きであろうか。32 は不明木製品である。先端は斜めに切られ、2 本の細い溝が切られる。33 は不明木製品である。中央に刻みが入れられる。厚みが右側に行くほど薄く、楔か。34 は鎌の柄である。刃部がわずかに残る。目釘孔は 1 か所である。鎌は全部で 5 点出土しているが長さ 32.4cm と最も大きい柄である。35 は上部が欠損している。木錘としたが欠損部に長い棒状のものが付いた場合には木鏃の可能性もある。36 は木錘である。幅 1.3cm と細いことから比較的細い糸や紐を結んで使用したものであろう。

6）SR1–1 ～ 3 層出土木製品（図版 89–37・38、図版 194・197）

開渠から出土したものである。37 は漆器の皿で低い輪高台が付く。ロクロ目が顕著である。38 は鎌の柄で、下部に 5 か所の切り欠きを入れ滑り止めとしている。刃を入れる溝を切った後に中央で裂けてしまったのであろう。目釘孔が無いことから未成品と考えられる。刀子の柄鞘のほかに鎌の柄も製作していたことが判明した。

7）SR2–1 層出土木製品（図版 89–39、図版 172・197）

39 は第四号木簡の茅札である。SR1–3 層の汚れた土を取り除いたところ、SR2–1 層の上面に食い込むように文字面を上にした状態で出土した。上下が斜めに切断されている。両側面の上下に切り込みが入れられている。第一号木簡とは異なり孔は無い。釈文等については第Ⅶ章 2B 4）に詳述した。

8）X 層出土木製品（図版 90–40 ～ 44、図版 198）

40 ～ 44 はX層で検出した自然流路 SD870 に打たれていた杭である。SA871 は岸辺に、SA872 は

岸から内側に入ったところで検出した。

SA871–3（40）　SA871 の中では比較的細い杭で長さ 53.3cm、幅 3.8cm である。丸木取りで伐採面のままかと思えるほど先端を簡単に加工したものである。

SA871–9（41）　41 は SA871 の典型的な杭である。長さ 100.8cm、幅 8.0cm で、先端は細かく加工し尖らせている。土圧でわずかに湾曲している。

SA871–15（42）　42 は横方向にくびれを作り、更に先端を細かく加工し細くしている。土圧でかなり湾曲しており、横方向のひびが多数入る。

SA872–2（43）　43 は長さ 30.5cm 幅 4.6cm で、先端は不規則な 6 回の細かい加工を行っている。

SA872–6（44）　44 は長さ 35.0cm 幅 3.8cm で先端を細く加工している。

9）Ⅻ層検出遺構出土木製品（図版 90–45 ～ 47、図版 198）

P916（45）　長さ 90.8cm、幅 18.3cm の柱根である。樹皮が残り下部は伐採のままか平坦である。

P917（46）　長さ 96.0cm、幅 15.9cm の柱根である。これも樹皮が残り、下部は伐採のままの未加工である。

10）Ⅻ層出土木製品（図版 90–47、図版 198）

47 は不明木製品である。中央に丸孔 2 個と方形の孔が 1 個開けられている。折敷の転用品か。側面に釘孔が 2 か所開けられている。

11）XV 層出土木製品（図版 90–48・49、図版 194・198）

48 は陽物である。丸木材の自然な形を使い、先端を削って成形している。49 は漆器の椀である。低い輪高台が付く。

第Ⅵ章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　は　じ　め　に

新潟県新潟市南区小坂に所在する小坂居付遺跡は、信濃川の支流である中ノ口川右岸の沖積地に立地する。本遺跡の発掘調査によって、鎌倉時代末～室町時代頃の水田跡（畦畔、水口）のほか、同時期の屋敷地に区画溝あるいは排水路と想定される溝跡や植栽とみられる樹根列などの遺構を検出している。また、屋敷地では陶磁器や金属製品、多量の木製品が出土したほか、その埋没段階には柱穴や土坑などの遺構が構築されたことが明らかとなっている［(財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2009］。

本報告では、稲作の可能性や遺構覆土中における微細植物片の産状、出土木製品の樹種、漆器の製作及び顔料の検討、水田などの放射性炭素による年代測定を目的として、自然科学分析調査を実施する。

試料採取位置及び土層柱状図を第 18 図に示す。

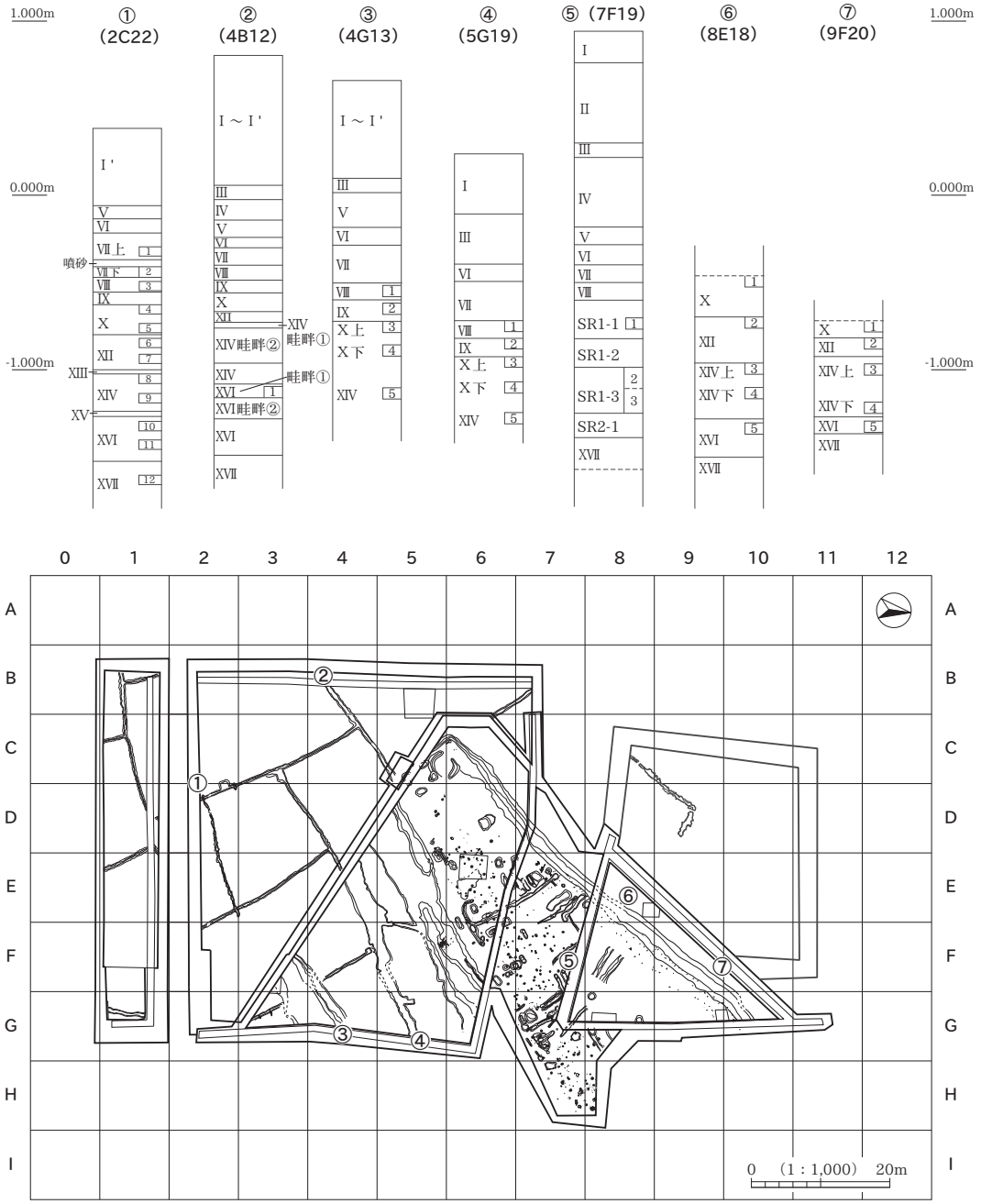
2　SR1 埋土微細物分析（第 18・19 図・第 4 表）

A　試　　料

試料は、北区 1 南壁（7F19 グリッド）の自然流路（SR1）埋積物中に認めた黒色の堆積物（1・3 層）から採取した土壌 2 点である。以下に、SR1 埋積物の観察所見を記す。

SR1 は、灰色粘土を基底として上位に埋積物が堆積する。SR1 埋積物最下位は植物遺体が折り重なって堆積した植物遺体層からなり、その上位には微細な炭化物や炭化した稈などが混じる黒色砂質土（3 層）が堆積する。黒色砂質土（3 層）は、色調から黒灰色の下部と黒色の上部に分けられるほか、レンズ状に植物遺体層が挟在する。黒色砂質土上位には、下位より灰色粘土、植物遺体層、灰色極細粒砂混じりシルトがそれぞれ不整合に堆積する。灰色極細粒砂混じりシルト上位には、黒色砂質土（3 層）と類する堆積物が認められ、さらに上位には、不整合で塊状の灰色粘土が堆積する。黒色砂質土と灰色粘土は、層厚が薄く、また、側方方向への連続性は不明瞭である。灰色粘土上位には、偽礫が多量混じる暗灰色粘土～シルトが厚く堆積する。暗灰色粘土～シルトに混じる偽礫は、とくに下部に偏在し、上部のそれよりも粗粒である。暗灰色粘土～シルト上位には、下位の黒色砂質土と同様の堆積物（1 層）が不整合に堆積する。黒色砂質土（1 層）上位には、淡暗灰色シルト～粘土が堆積する。同堆積物下部は、亜角礫状の偽礫（最大径約 4cm）が混じるが、上部は偽礫の混入は少ない。また、最上部はやや暗色化する。淡暗灰色シルト～粘土上位には、植物遺体混じりの褐色シルト、灰色粘土～シルトが堆積し、その上位には灰色砂質土が堆積する。

分析試料は、上記した堆積物のうち、SR1 下部に確認した黒色砂質土（3 層）と、同上部に確認した黒色砂質土（1 層）である。黒色砂質土（3 層）は、上記したように色調から上･下部に分けられたことから、3 層（黒色）と同（黒灰色）に分割し、それぞれ分析に供した。これらの試料を対象に微細物分析を行う。なお、黒色砂質土（1・3 層）は、肉眼および実体鏡観察により微細な繊維状の物質が観察されている。こ



第 18 図　自然科学分析試料採取位置及び土層柱状図

れらの物質は、微細かつ脆弱であり水洗選別による回収は困難と判断したことから、これらを特徴的に観察した 3 層（黒灰色）について、顕微鏡下による記録・観察を実施する。

B　分　析　方　法

試料（3 層黒灰色）を双眼実体顕微鏡下で観察し、確認した微細な繊維状物質を写真記録後、ピンセットを用いて微量採取し、400 倍の光学顕微鏡下で観察する。

微細物分析は、1 層は試料 200cc、3 層は各試料 100cc（計 200cc）を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。現生標本及び［石川 1994］、［中山ほか 2000］などとの対照から、

種実遺体の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。試料中に確認した炭化物（炭化材）は、70℃48 時間乾燥後の重量（g）と最大径（mm）を表示する。分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れ、70％程度のエタノール溶液で液浸し、保管する。

C　結　　果

SR1–1・3 層の各試料に確認した微細な炭化物のうち、3 層（黒灰色）を対象とした実体顕微鏡による観察の結果、灰化し灰白色のイネの穎や炭化物、更にイネ属穎珪酸体で構成する珪化組織片やイネ属及びヨシ属の短細胞列を確認した。

また、微細物分析では、被子植物 10 分類群（草本のヘラオモダカ・オモダカ属・イネ・ヒエ近似種・ムギ類・イネ科・カヤツリグサ科・マメ類・メロン類・タカサブロウ）951 個の種実、ムギ類の稈、イネ科の稈？を含む炭化材（最大径 16mm）、昆虫を検出した（第 4 表）。

栽培種は、イネの穎 412 個（3 層）、炭化したイネの穎 467 個（1・3 層）・胚乳 32 個（1・3 層）、炭化したムギ類の胚乳 1 個（3 層：黒灰色）・稈 1 個（3 層：黒灰色）、炭化したマメ類の種子 1 個（3 層：黒灰色）、メロン類の種子 1 個（3 層：黒色）と、栽培種の可能性がある炭化したヒエ近似種の穎・胚乳 9 個（1・3 層）を確認した。特に、イネの穎が多く、全体の 9 割を占める。栽培種以外の種実は、浮葉 – 抽水植物のヘラオモダカ、オモダカ属、湿生 – 中生植物のイネ科、カヤツリグサ科、タカサブロウなどを確認した。以下に、検出した種実の形態的特徴を記す。

＜栽培種＞

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳と穎を検出した。穎は淡 – 灰褐色、一部の穎と胚乳は炭化しており黒色。一部の穎は灰化し灰白色である。長楕円形でやや偏平。胚乳は長さ 4–5.5mm、幅 2.5–3.5mm、厚さ 1.5mm 程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2–3 本の隆条が縦列する。表面に穎が付着する個体も見られる（1・3 層：黒色）。胚乳を包む穎（果）は、完形ならば長さ 6–7.5mm、幅 3–4mm、厚さ 2mm 程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と 1 対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、ともに舟形で、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・ヒエ近似種（*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno）　イネ科ヒエ属

胚乳と穎を検出した。炭化しており黒色、長さ 1.5mm、幅 1–1.2mm、厚さ 0.8mm 程度の狭卵 – 半偏球体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、胚乳の長さの 2/3 以上を占める縦長で馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面またはやや平滑。胚乳表面に付着する穎（果）は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。

・ムギ類（*Hordeum valgare* L.-*Triticum aestivum* L.）　イネ科オオムギ属－コムギ属

胚乳を検出した。炭化しており黒色、長さ 4mm、幅 3.5mm、厚さ 2.5mm 程度の楕円体。両端の状態はやや丸みを帯びるが不明瞭。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝がある。背面は不明瞭で、基部正中線上にある丸く窪む胚の痕跡が確認されない。胚乳表面には微細な縦筋がある。

・マメ類（Leguminosae）　マメ科

種子を検出した。炭化しており黒色、長さ 8.92mm、幅 5.71mm、厚さ 4.43mm のやや偏平な長楕円体。腹面の子葉合わせ目上に、長さ 2.5mm、幅 0.5mm 程度の細長い長楕円形の臍がある。種皮表面は

分類群	部位	状態			SR1（7F19 グリッド）1 層	3 層 黒色（上部）	3 層 黒灰色（下部）	備考
栽培種								
イネ	胚乳	完形		炭化	9	7	2	
		破片		炭化	2	8	2	
	胚乳・穎	完形		炭化	1	1	-	
	穎	破片	基部	炭化	75	107	74	灰化個体含む
		破片		炭化	71	88	52	灰化個体含む
		完形			-	4	-	
		破片	基部		-	158	118	
		破片			-	68	64	
イネ？	胚乳	完形		炭化	-	2	-	未熟個体？
ヒエ近似種	胚乳	完形		炭化	2	2	2	
		破片		炭化	-	1	-	
	胚乳・穎	完形		炭化	-	-	1	
	穎	破片		炭化	-	1	-	
ムギ類	胚乳	完形		炭化	-	-	1	
	稈	破片		炭化	-	-	1	
マメ類	種子	完形		炭化	-	1	-	長さ 8.92mm, 幅 5.71mm, 厚さ 4.43mm
		破片		炭化	-	-	1	臍部
メロン類	種子	破片			-	1	-	
その他の草本								
ヘラオモダカ	果実	完形			-	1	-	
オモダカ属	果実	完形			-	1	-	
イネ科	胚乳	完形		炭化	-	-	1	
	果実	完形			-	8	-	
		破片			-	3	4	
カヤツリグサ科	果実	完形		炭化	-	2	1	
		完形			-	2	-	
		破片			1	-	-	
タカサブロウ	果実	完形			-	1	-	
炭化材				炭化	0.33g 15mm	0.24g 13mm	0.39g 16mm	イネ科の稈？含む 最大径
昆虫					5	21	5	
				分析量	200cc 210.95g	100cc 112.32g	100cc 108.04g	

第 4 表　SR1 微細物分析結果

やや平滑だが、焼け膨れ、表面が崩れている。

・メロン類（*Cucumis melo* L.）　ウリ科キュウリ属

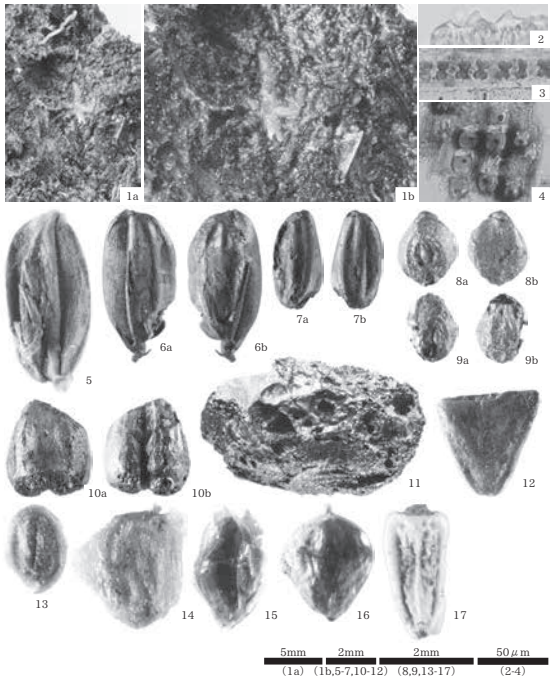
種子の破片を検出した。灰褐色、完形ならば狭倒皮針形で偏平。破片は倒「ハ」の字形の凹みがある基部が確認でき、長さ・幅 4mm、厚さ 1mm 程度。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。

＜その他の草本＞

・ヘラオモダカ（*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche）

オモダカ科サジオモダカ属

果実を検出した。淡灰褐色、長さ 1.8mm、幅 1.3mm 程度のやや偏平な広卵体。基部は切形。背面に深い縦溝が 1 本走る。果皮は海綿状で中に入る 1 個の種子が透けて見える。種子は茶褐色、長さ 1.5mm、幅 1mm 程度の倒 U 字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄く膜状で、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。



1 試料状況；イネ 穎（3層；黒灰色）　2 イネ属穎珪酸体（3層；黒灰色）
3 イネ属短細胞列（3層；黒灰色）　4 ヨシ属短細胞列（3層；黒灰色）
5 イネ 穎（3層；黒灰色）　6 イネ 胚乳・穎（1層）
7 イネ 胚乳（1層）　8 ヒエ近似種 胚乳（3層；黒灰色）
9 ヒエ近似種 胚乳・穎（3層；黒灰色）　10 ムギ類 胚乳（3層；黒灰色）
11 マメ類 種子（3層；黒色）　12 メロン類 種子（3層；黒色）
13 ヘラオモダカ 果実（3層；黒色）　14 オモダカ属 果実（3層；黒色）
15 イネ科 果実（3層；黒色）　16 カヤツリグサ科 果実（3層；黒色）
17 タカサブロウ 果実（3層；黒色）

第 19 図　SR1 種実遺体・灰像

・オモダカ属（*Sagittaria*）　オモダカ科

果実を検出した。淡黄褐色、径 2.5mm 程度の偏平で歪な倒卵体。果皮は薄く翼状で、表面には微細な網目が縦列する。中に入る 1 個の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、長さ 1.5mm、幅 1mm 程度の倒 U 字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄く膜状で、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・イネ科（Gramineae）

果実と胚乳を検出した。果実は淡灰褐色、胚乳は炭化しており黒色。果実は、長さ 2.5–3.5mm、径 1.5–2mm 程度の狭卵 – 半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。胚乳は、長さ 1–1.2mm、径 0.6–0.8mm 程度の広卵 – 楕円体。ヒエ近似種よりも細身で小型個体をイネ科としている。胚乳の背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実を検出した。灰 – 黒褐色、一部は炭化しており黒色。長さ 1.5–2.5mm、幅 1.5–2mm 程度のレンズ状広倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面はやや平滑または微細な網目模様がある。

・タカサブロウ（*Eclipta prostrata* L.）　キク科タカサブロウ属

果実を検出した。淡灰褐色、長さ 2.8mm、径 1.3mm 程度のやや偏平な三角状倒狭卵体。両端は切形、果皮は海綿状で、両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり、水に浮きやすい。

D　考　　察

自然流路（SR1）の黒色砂質土（1・3 層）からは、炭化した種実遺体を多く確認した。検出した種実遺体群は、栽培種を含む被子植物 10 分類群（951 個）から構成され、各層位とも栽培種のイネの穎を主体とするという特徴を示した。栽培種では、イネとメロン類に未炭化の種実を確認したほかは、ムギ類（胚乳・稈）やマメ類、栽培種の可能性があるヒエ近似種（穎・胚乳）はいずれも炭化した個体であった。一方、栽培種を除く分類群では、ヘラオモダカ（果実）、オモダカ属（果実）、イネ科（果実）、カヤツリグサ科（果実）、タカサブロウ（果実）などを検出したが、その多くは未炭化であった。

種実遺体群の検出状況を比較すると、1 層ではイネの胚乳・穎はいずれも炭化していたのに対し、3 層は非炭化および炭化したイネの穎が混在する、単位容量（cc）当りの検出個数が極めて多いという特徴が指摘できる。このほかに、3 層ではイネを除く栽培種や栽培種を除く分類群が多く確認できるという特徴も指摘できる。

また、栽培種を除く分類群は、生態性を踏まえると、周辺の水湿地に普通に生育していた雑草などに由来すると推定される。また、栽培種のイネやムギ類、マメ類、メロン類、ヒエ近似種の種実などの検出から、当該期の利用が示唆される。さらに、イネの穎の多量検出やイネ科の稈を含む炭化物（炭化材）片を多く確認したことや、微細な炭化物の観察ではイネの穎や葉部、ヨシ属の葉部に由来する珪化組織からなる灰化物を確認したことなどから、SR1 埋積物に確認した黒色砂質土の成因として、イネを主体とする植物体（穎や葉部、稈など）に由来する炭化物（灰化物）の埋積が推定される。とくに、イネの産状を考慮すると、脱穀や籾摺り後の残滓（籾殻や稲藁）の資材（燃料材）としての利用が窺われる。

3　SK399・SX5・332 微細物分析（第 20 図・第 5 表）

A　試　　料

試料は、SX332・SK399・SX5 から採取した土壌 4 点である。SX332 は浅い掘り込みを有する平面が方形の焼土遺構であり、試料は藁灰？とみられる灰層（2 層）から採取した土壌（SX332–2 層：細礫混じり灰～灰白色シルト）である。SK399 は、曲物が出土した平面が方形の土坑であり、出土遺物の状況から墓やトイレなどの性格を想定している。試料は、上記した曲物中の埋積物より採取した土壌（SK399 曲物中・上層：粗粒砂～細礫混じり暗灰～灰色シルト）である。SX5 は、長軸 4.50m ×短軸 2.02m の範囲で確認された灰分布遺構（層厚 2 ～ 4cm 程度）であり、出土遺物の状況から灰等の廃棄跡と推定している。試料は、灰の分布範囲の東・西より採取された土壌 2 点（SX5 灰層東部、SX5 灰層西部：いずれも炭化材混じり灰～灰白色シルト）である。

B　分　析　方　法

各試料より秤量した土壌（SX332–2 層：150cc、SK399 曲物中上層・SX5 灰層西部：各 100cc、SX5 灰層東部：200cc）を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。多量確認したイネの穎の破片は、基部の果実序柄は全て、そのほかは径 2mm 以上を抽出する。現生標本および［石川 1994］、［中山ほか 2000］等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。試料中に確認した炭化材は、70℃ 48 時間乾燥後の重量（g）と最大径（mm）を表示する。分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れ、70％程度のエタノール溶液で液浸し、保管する。

C　結　　果

結果を第 5 表に示す。種実は、被子植物 13 分類群（木本のブナ、マタタビ属、草本のイネ、ヒエ近似種、イネ科、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ科、チドメグサ属、タカサブロウ、キク科）5424 個を検出した。種実以外では、木材や炭化材、昆虫、動物遺存体（骨片、魚類の鱗を含む）を検出した。

検出した種実遺体群のうち、栽培種は、イネの穎 5155 個、炭化したイネの穎 231 個・胚乳 9 個（SX332・SX5 西部）と、栽培種の可能性がある炭化したヒエ近似種の胚乳 3 個（SK399）が確認され、イネの穎が全体の 99%を占める。栽培種以外は、木本では炭化した落葉高木のブナ（SX332）、落葉籐本のマタタビ属（SK399）を各 1 個確認した。草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が確認され、湿生植物のタカサブロウを含む。以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

＜木本＞

・ブナ（*Fagus crenata* Blume）　ブナ科ブナ属

殻斗の破片を検出した。炭化しており黒色、殻斗は完形ならば卵状楕円体。破片は縦に 4 裂した 1 片で、長さ 1cm、幅 7.5mm、厚さ 2mm 程度の卵状楕円体。外面は刺状突起が密布するが、質が柔らかいため突起頂部を欠損する。内面はやや平滑で微細な縦筋がある。

・マタタビ属（*Actinidia*）　マタタビ科

種子の破片を検出した。灰褐色、完形ならば長さ 1.5–2.2mm、幅 0.5–1.7mm 程度の両凸レンズ状楕

分類群	部位	状態			SX332 7F16 グリッド 2 層	SK399 7E17 グリッド 曲物中上層	SX5 6E8 グリッド 灰層 西部	SX5 6E12 グリッド 灰層 東部	備考
木本									
ブナ	殻斗	破片		炭化	1	-	-	-	
マタタビ属	種子	破片			-	1	-	-	
草本									
イネ	穎	破片	基部		1812	65	606	1511	
		破片			893	39	113	116	主に径 2mm 以上
		破片	基部	炭化	51	40	5	21	
		破片		炭化	57	37	-	20	主に径 2mm 以上
	胚乳	完形		炭化	-	1	-	1	
		破片		炭化	-	7	-	-	
ヒエ近似種	穎・胚乳	完形		炭化	-	1	-	-	
	胚乳	完形		炭化	-	1	-	-	
		破片		炭化	-	1	-	-	
イネ科	果実	完形			1	-	-	-	
		破片			-	2	-	1	
カヤツリグサ属	果実	完形			-	1	-	-	
カヤツリグサ科	果実	完形			1	2	-	-	
ナデシコ科	種子	完形			-	1	1	1	
アカザ科	種子	完形			-	1	-	-	
ヒユ科	種子	破片			-	3	1	1	
チドメグサ属	果実	破片			-	2	-	-	
タカサブロウ	果実	完形			1	1	-	-	
		破片			-	2	-	-	
キク科	果実	完形			1	-	-	-	
木材					1	3	2	5	［個］
					41	10	6	9	［mm］最大径
炭化材					5.74	0.07	2.73	11.80	［g］乾燥重量
					20.8	8.7	13.6	23.8	［mm］最大径
昆虫					-	58	3	-	［個］
動物遺存体					-	-	-	11	［個］; 骨片 , 魚類の鱗確認
分析量					150	100	100	200	［cc］容量
					203.40	156.03	139.39	298.19	［g］重量

第 5 表　SK399・SX5・332 微細物分析結果

円体、基部は斜切形でやや突出する。破片は大きさ 1.3mm 程度。種皮は硬く、表面には円 – 楕円形の凹点が密布し網目模様をなす。

＜草本＞

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳と穎を検出した。特徴は前項と同様である。

・ヒエ近似種（*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno）

イネ科ヒエ属

胚乳と穎を検出した。炭化しており黒色、長さ 1.3mm、幅 1.2mm、厚さ 0.8mm 程度の半偏球体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、胚乳の長さの 2/3 以上を占める縦長で馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面またはやや平滑。胚乳表面に付着する穎（果）は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。

1 ブナ 殻斗（SX332・2層）
2 マタタビ属 種子（SK399曲物中・上層）
3 イネ 穎（SX332・2層）
4 イネ 胚乳（SK399 曲物中・上層）
5 ヒエ近似種 穎・胚乳（SK399曲物中・上層）
6 イネ科 果実（SX332・2層）
7 カヤツリグサ属 果実（SK399 曲物中・上層）
8 カヤツリグサ科 果実（SK399 曲物中・上層）
9 ナデシコ科 種子（SX5 灰層・西部）
10 アカザ科 種子（SK399 曲物中・上層）
11 ヒユ科 種子（SK399 曲物中・上層）
12 チドメグサ属 果実（SK399 曲物中・上層）
13 タカサブロウ 果実（SK399 曲物中・上層）
14 キク科 果実（SX332・2層）

第 20 図　SK399・SX5・332 種実遺体

・イネ科（Gramineae）

果実を検出した。淡灰褐色、長さ 3mm、径 1.7mm 程度の半狭卵体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。

・カヤツリグサ属（*Cyperus*）　カヤツリグサ科

果実を検出した。黒褐色、長さ 1.3mm、径 0.7mm 程度の三稜状狭倒卵体。頂部は尖り、基部は切形。

果皮表面には微小な疣状突起が密布する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実を検出した。黒褐色、長さ 2mm、幅 1.6mm 程度のやや偏平なレンズ状広倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面は平滑。

・ナデシコ科（Caryophyllaceae）

種子を検出した。灰褐色、径 1mm 程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く表面には瘤状突起が臍から同心円状に配列する。

・アカザ科（Chenopodiaceae）

種子を検出した。黒色、径 1.2mm 程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・ヒユ科（Amaranthaceae）

種子を検出した。黒色、径 1.3mm 程度の偏平な円盤状。縁は稜状で、基部は凹み臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が配列し、光沢がある。

・チドメグサ属（*Hydrocotyle*）　セリ科

果実を検出した。淡灰褐色、長さ 1mm、幅 0.8mm 程度のやや偏平な半月形。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には 1 本の明瞭な円弧状の稜がある。

・タカサブロウ（*Eclipta prostrata* L.）　キク科タカサブロウ属

果実を検出した。淡灰褐色、長さ 2.3mm、径 1.6mm 程度のやや偏平な三角状倒狭卵体。両端は切形、果皮は海綿状で、両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり、水に浮きやすい。

・キク科（Compositae）

果実を検出した。淡灰褐色、長さ 1.2mm、径 0.3mm 程度の線状長楕円体。頂部は切形で臍があり、白色、長さ 3.3mm 程度の冠毛が伸びる。果皮表面には微細な網目模様があり、伏毛が密生する。

D　考　　察

土坑（SK399）・焼土遺構（SX332）灰等の廃棄跡と推定される SX5 の微細物分析結果では、いずれも未炭化のイネの穎を主体とし、炭化した個体が僅かに混じるという特徴を示した。SK399 では、イネのほか栽培種の可能性があるヒエ（近似種）のほか、人里植物を含む種実を多く検出した。また昆虫遺体を多量検出したという異なる特徴も指摘できる。なお、焼土遺構とされる SX332 および灰分布遺構とされる SX5 から検出した炭化材について調査を行った結果では、いずれの試料からも落葉高木のブナ属とコナラ節を確認した。

以上の産状から、SX332 や SX5 では、イネの穎やブナ属やコナラ節の木材などが燃料材として利用したと考えられ、調査所見を支持する結果と言える。前項で実施した SR1（7F19 グリッド）の堆積層を対象とした調査においても、炭化個体を含むイネの穎を多量に検出したことから、SX5 だけではなく、流路などにも灰などの残渣が廃棄された状況が推定される。なお、イネの穎以外の部位（葉部や稈など）の利用の可能性については、前項では灰像の概査の結果、イネの葉部やヨシ属の葉部に由来する組織片を確認している。このことから、今回分析対象とされた遺構についても同様の分析を用いた詳細な検討が望まれる。一方、墓やトイレの可能性が想定される土坑（SK399）については、多量検出したイネの穎は非可食部位であること、可食部位の胚乳はいずれも炭化していたことを考慮すると、これらの種実遺体群は糞便

等に伴う資料と考えることは困難である。また、同遺構から出土した曲物については、後述する樹種同定の際に行った外観観察では、側板両側辺端が斜方向に切断加工され、「箕」のような形状であることを確認した。当遺構の性格については、「箕」様の木製品およびこのほかの出土遺物の考古学的所見や、土壌の化学性や寄生虫卵の産状などから、改めて評価・検討することが望まれる。

4　2009 年度植物珪酸体分析（第 18・21・22 図、第 6・7 表）

A　試　　料

試料は、水田跡（畦畔、水口など）を検出した南区 1 の東壁（4G13･5G19 グリッド）から採取した土壌 9 点と、水田跡は未検出であるが堆積物の擾乱を確認した北区のベルト（ベルト 1：9F20 グリッド、ベルト 3：8E20 グリッド）から採取した土壌 10 点である（第 18 図）。これらの試料は、南区 1 東壁 4G13 グリッド試料がⅧ層（灰色シルト）、Ⅹ層上部・2 枚目水田耕作土（灰（褐）色シルト）、Ⅹ層下部（灰色シルト）、XIV層（淡青灰色シルト～粘土）から、南区 1 東壁 5G19 グリッド試料がⅧ層（灰色シルト～粘土）、Ⅸ層（灰色シルト質極細粒砂）、Ⅹ層上部（灰褐色シルト～粘土）、Ⅹ層下部（灰色粘土～シルト）、XIV層（灰色シルト～粘土）から、それぞれ採取している。また、北区 1 ベルト 1（9F20 グリッド）試料はⅩ層（灰色シルト）、Ⅻ層（灰色シルト～粘土）、XIV層上部（灰色シルト～粘土）、XIV層下部（灰色シルト～粘土）、XVI層（淡青灰色シルト～粘土）から、北区 1 ベルト 3（8E18 グリッド）試料はⅩ層（灰色シルト）、Ⅻ層（灰色シルト）、XIV層上部（淡青灰色シルト）、XIV層下部（淡青灰色シルト～粘土）、XVI層（灰色粘土～シルト）から、それぞれ採取した。

B　分　析　方　法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、［近藤 2004］の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表と植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。各分類群の含量は 100 単位とし、100 個 /g 未満は「<100」と表示する。また、合計は各分類群の基数を合計した後に 100 単位として表示する。

C　結　　果

結果を第 6･7 表、第 21 図に示す。各試料からは植物珪酸体を検出したが、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるなど保存状態は不良である。以下に、各地点の産状を述べる。

1）南区 1 東壁 4G13 グリッド

4G13 グリッド試料の植物珪酸体含量は、XIV層～Ⅹ層上部が約 4,100 ～ 5,400 個 /g、Ⅷ層が約 1.6

（個 /g）

分類群	南区１東壁								
	4G13 グリッド				5G19 グリッド				
	Ⅷ層	Ⅹ層上位	Ⅹ層下位	ⅩⅣ層	Ⅷ層	Ⅸ層	Ⅹ層上位	Ⅹ層下位	ⅩⅣ層
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ族イネ属	600	200	<100	100	<100	<100	400	100	300
タケ亜科クマザサ属	400	200	300	300	200	<100	400	<100	<100
タケ亜科	200	400	200	200	300	-	500	300	<100
ヨシ属	600	500	400	500	1,200	-	800	700	800
ウシクサ族ススキ属	1,200	200	200	400	<100	-	100	-	100
イチゴツナギ亜科	100	100	200	-	<100	<100	100	<100	-
不明キビ型	7,500	2,000	900	1,100	1,600	-	1,500	800	1,000
不明ヒゲシバ型	500	200	<100	<100	300	-	400	200	<100
不明ダンチク型	600	100	<100	200	100	-	100	200	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ族イネ属	200	100	200	200	100	-	400	100	100
タケ亜科クマザサ属	200	<100	400	500	100	100	200	200	100
タケ亜科	400	600	300	400	300	-	600	300	300
ヨシ属	2,100	100	300	600	200	-	900	600	500
ウシクサ族	200	-	<100	-	-	-	<100	-	-
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	<100
不明	1,200	500	700	800	800	-	1,000	1,200	700
合　計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	11,600	3,900	2,300	2,800	4,000	100	4,300	2,500	2,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,300	1,400	1,800	2,600	1,500	100	3,100	2,400	1,700
総　計	15,900	5,300	4,100	5,400	5,500	300	7,400	4,900	4,200
珪化組織片									
イネ属穎珪酸体	-	-	-	＊	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	＊	＊	＊	-	-	＊	＊	＊	＊
イネ属機動細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-

［凡例］ -: 未検出 , ＊ : 検出 , ＊＊ : 多い , ＊＊＊ : 非常に多い

第６表　2009 年度 植物珪酸体含量（1）

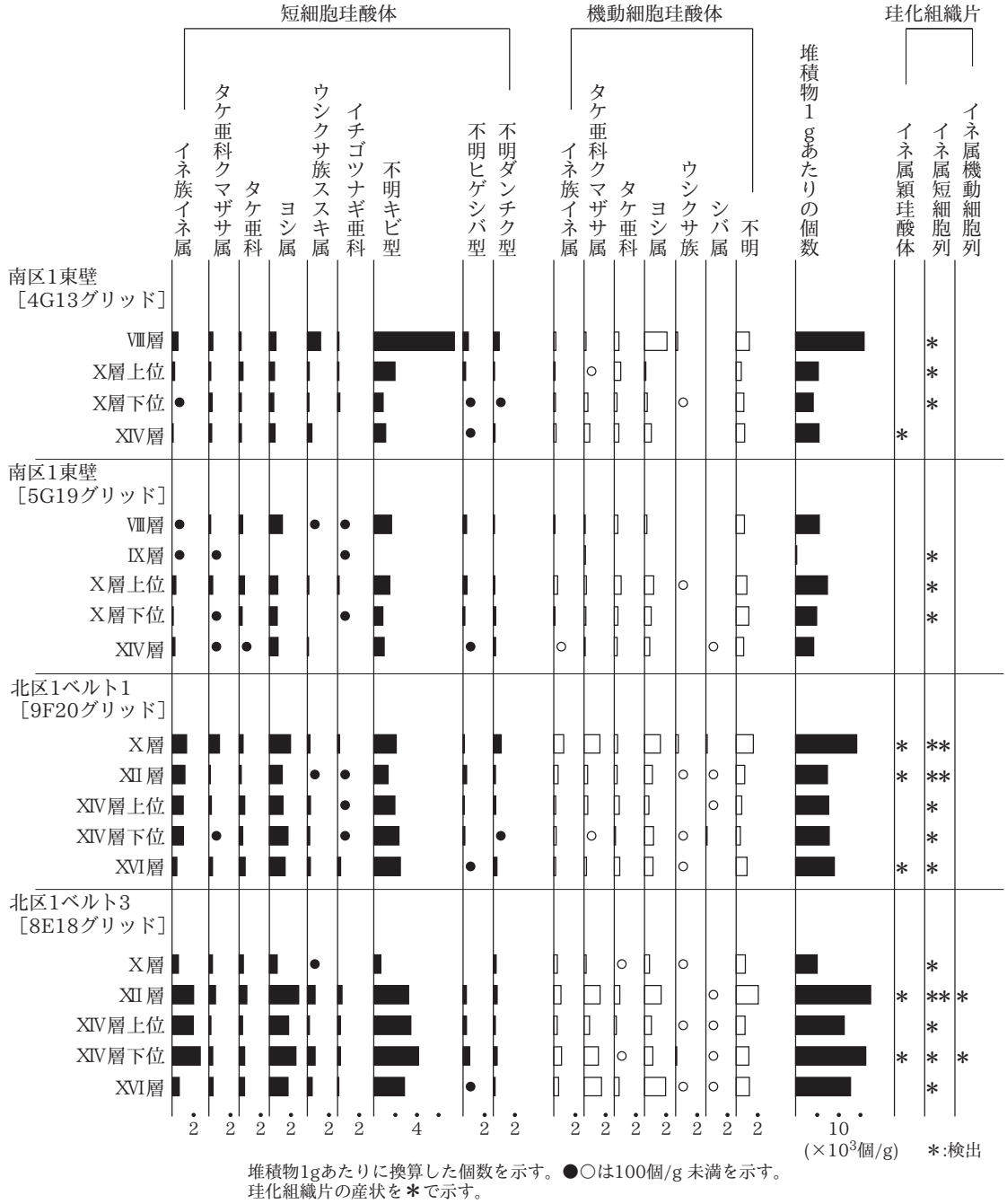
（個 /g）

分類群	北区１ベルト１					北区１ベルト３				
	9F20 グリッド					8E18 グリッド				
	Ⅹ層	Ⅻ層	ⅩⅣ層上位	ⅩⅣ層下位	ⅩⅥ層	Ⅹ層	Ⅻ層	ⅩⅣ層上位	ⅩⅣ層下位	ⅩⅥ層
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属	1,300	1,200	1,000	1,100	400	600	2,000	2,000	2,600	700
タケ亜科クマザサ属	1,000	100	200	<100	300	300	600	200	400	400
タケ亜科	400	200	500	300	600	400	700	300	500	500
ヨシ属	2,000	1,200	1,300	1,700	1,500	700	2,700	1,800	2,500	1,700
ウシクサ族ススキ属	200	<100	300	200	300	<100	700	200	700	400
イチゴツナギ亜科	200	<100	<100	<100	300	-	400	300	300	100
不明キビ型	2,100	1,300	2,000	2,300	2,500	700	3,200	3,400	4,100	2,800
不明ヒゲシバ型	100	300	100	200	<100	-	300	300	600	100
不明ダンチク型	700	200	200	<100	300	300	400	200	400	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	900	400	200	200	200	300	700	300	700	400
タケ亜科クマザサ属	1,500	300	300	100	200	200	1,500	500	1,300	1,600
タケ亜科	300	300	500	100	500	<100	500	200	<100	400
ヨシ属	1,500	700	400	800	800	500	1,500	600	800	2,000
ウシクサ族	200	<100	-	<100	<100	<100	-	<100	100	<100
シバ属	100	<100	<100	100	-	-	<100	<100	<100	<100
不明	1,600	800	500	400	1,000	900	2,100	800	1,200	1,200
合　計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	8,000	4,700	5,700	6,000	6,200	3,000	11,100	8,600	12,000	6,900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,100	2,700	2,000	1,800	2,700	2,000	6,300	2,600	4,200	5,800
総　計	14,100	7,400	7,700	7,800	9,000	5,000	17,400	11,300	16,200	12,700
珪化組織片										
イネ属穎珪酸体	＊	＊	-	-	＊	-	＊	-	＊	-
イネ属短細胞列	＊＊	＊＊	＊	＊	＊	＊	＊＊	＊	＊	＊
イネ属機動細胞列	-	-	-	-	-	-	＊	-	＊	-

［凡例］ -: 未検出 , ＊ : 検出 , ＊＊ : 多い , ＊＊＊ : 非常に多い

第７表　2009 年度 植物珪酸体含量（2）

万個 /g と、Ⅹ層・２枚目水田耕作土より上位試料で高い。検出した分類群のうち栽培種では、イネ属を各試料から検出した。その含量は、Ⅷ層で短細胞珪酸体が約 600 個 /g であったほかは、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに約 200 個 /g ～ 100 個 /g 未満であり、含量の高い試料は認めらない。また、イネ属では、籾に形成される穎珪酸体をⅩⅣ層から、葉部に形成される短細胞列をⅩ層下部、Ⅹ層上部、Ⅷ層



第 21 図　2009 年度 植物珪酸体含量

から検出した。

栽培種を除く分類群では、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などを検出した。これらの分類群の含量は全体的に低いが、Ⅷ層でススキ属やヨシ属が高くなる傾向が看取される。

2）南区 1 東壁 5G19 グリッド

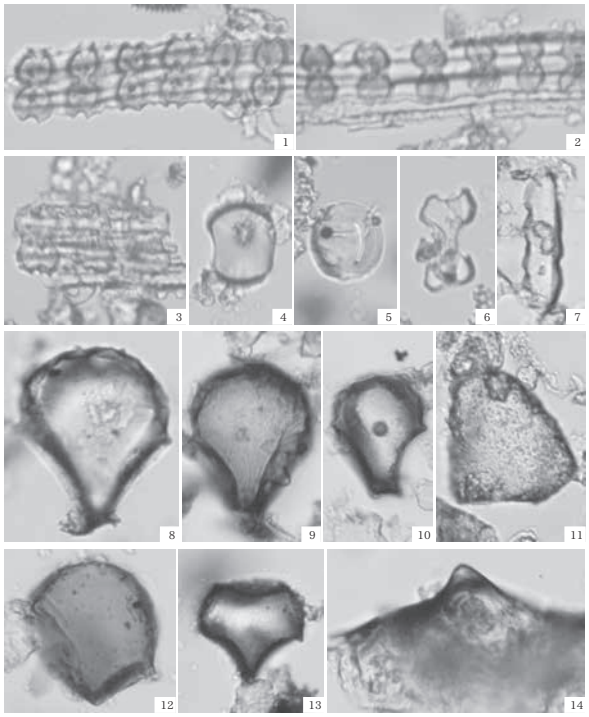
5G19 グリッド試料の植物珪酸体含量は、Ⅹ層下部・XIV層試料が約 4,200 ～ 4,900 個 /g、Ⅹ層上部が約 7,400 個 /g、Ⅸ層が約 300 個 /g、Ⅷ層が約 5,500 個 /g である。検出した分類群のうち栽培種では、

イネ属を各試料から検出した。その含量は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体はともに約 400 個 /g ～ 100 個 /g 未満であり、含量は全体的に低い。また、イネ属では、短細胞列がⅧ層を除く 4 試料から検出した。

栽培種を除く分類群では、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などを検出した。

3）北区 1 ベルト 1（9F20 グリッド）

北区 1 ベルト 1（9F20 グリッド）試料の植物珪酸体含量は、概して南区東壁と比べ高く、XVI 層～XII 層が約 9,000 ～ 7,400 個 /g 前後、X 層が約 1.4 万個 /g である。検出した分類群のうち栽培種は、イネ属を各試料から検出した。その含量は、XVI 層～XII 層の短細胞珪酸体が約 1,200 ～ 400 個 /g、機動細胞珪酸体が約 400 ～ 200 個 /g、X 層の短細胞珪酸体が約 1,300 個 /g、X 層の機動細胞珪酸体が約 900 個 /g である。また、イネ属では、穎珪酸体を XIV 層及び X 層下部から、短細胞列を各試料から検出し、概して XII 層・X 層で短細胞列を多く確認した。



1 イネ属短細胞列（北区1ベルト1 9F20;X）
2 イネ属短細胞列（北区1ベルト3 8E18;XIV下）
3 イネ属短細胞列（南区1東壁 5G19;X上）
4 クマザサ属短細胞珪酸体（北区1ベルト1 9F20;XVI）
5 ヨシ属短細胞珪酸体（南区1東壁 5G19;X上）
6 ススキ属短細胞珪酸体（南区1東壁 4G13;VIII）
7 イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（北区1ベルト1 9F20;X）
8 イネ属機動細胞珪酸体（北区1ベルト1 9F20;X）
9 イネ属機動細胞珪酸体（北区1ベルト3 8E18;XIV下）
10 イネ属機動細胞珪酸体（南区1東壁 5G19;X上）
11 クマザサ属機動細胞珪酸体（北区1ベルト1 9F20;XVI）
12 ヨシ属機動細胞珪酸体（南区東壁 5G19;X上）
13 シバ属機動細胞珪酸体（北区1ベルト1 9F20;X）
14 イネ属穎珪酸体（北区1ベルト1 9F20;XVI）

第 22 図　2009 年度 植物珪酸体

栽培種を除く分類群では、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属などを検出した。これらの分類群では、概してヨシ属の含量が高い。

4）北区 1 ベルト 3（8E18 グリッド）

北区 1 ベルト 3（8E18 グリッド）試料の植物珪酸体含量は、北区 1 ベルト 1（9F20 グリッド）と比べ概して高い試料が多く、層位的な変化も異なる。XVI 層が約 1.3 万個 /g、XIV 層下部が約 1.6 万個 /g、XIV 層上部が約 1.1 万個 /g、XII 層が約 1.7 万個 /g、X 層が約 5,000 個 /g であり、堆積層上位の X 層で含量が最も少なく、XIV 層下部と XII 層で高い。検出された分類群のうち栽培種では、イネ属を各試料から検出した。イネ属の植物珪酸体は、概して短細胞珪酸体の含量が高い。短細胞珪酸体が約 2,600 ～ 600 個 /g、機動細胞珪酸体が約 700 ～ 300 個 /g であり、XIV 層下部～XII 層で含量が高い。また、イネ属では、穎珪酸体を XII 層から、短細胞列を XVI ～ X 層から、機動細胞珪酸体列を XIV 層下部及び XII 層から検出した。

栽培種を除く分類群では、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属などを検出した。北区 1 ベルト 1（9F20 グリッド）試料と同様にヨシ属の含量が高い。

D　考　　察

1）稲 作 の 検 討

13 世紀後半～ 14 世紀と考えられる水田の畦畔と水口が検出された南区（4G13・5G19 グリッド）と、

堆積層の観察から水田の可能性が想定された北区Ｘ層（8E18･9F20 グリッド）の植物珪酸体分析結果では、各試料から栽培種のイネ属を検出した。

稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量（植物珪酸体密度）が高くなる。水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料 1g 当り 5,000 個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている［杉山 2000］。

北区および南区のイネ属の機動細胞珪酸体含量に着目すると、水田耕作土は約 400 ～ 100 個 /g と含量が極めて低い。なお、5G19 グリッドの水田耕作土を被覆する砂層（Ⅸ層）ではイネ属の機動細胞珪酸体は未検出である点を考慮すると、その上・下位の堆積層ではイネの植物体の蓄積があったことや、氾濫等によってイネの植物珪酸体が混じる堆積物が埋積したことなどが推定される。今回の分析結果では、稲作の可能性を想定することはできないが、イネ属の含量が低かった要因としては耕作期間や生産性、堆積速度等の関係から土壌中に取り込まれた植物珪酸体が少なかった可能性がある。本遺跡では、遺構覆土中の灰層や流路埋積物などからイネを資材（燃料材？）として利用する状況も確認されているため、イネの植物体（稲藁）が水田外に持ち出されたこと等も推定される。

一方、北区のＸ層試料では、イネ属の含量が南区よりも概して高く、穎や葉部に由来する組織片も比較的多く検出するという特徴を示した。ただし、機動細胞珪酸体含量は、いずれも約 1,000 個 /g 未満であり、稲作を想定することはできない。なお、北区Ｘ層（8E18・9F20 グリッド）では、イネ属の植物珪酸体含量が高いことや組織片の産状を考慮すると、中世および中世以前のイネの利用や、近傍で稲作が行われていたことなどが推定される。

2）古　植　生

植物珪酸体分析では、湿地等に生育するヨシ属や比較的乾いた場所に生育するススキおよび湿地などに生育するオギなどを含むススキ属、タケ亜科など検出した。また、微細物分析では、人里植物を含むイネ科、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ科、チドメグサ属、キク科や、湿生植物のタカサブロウの種実を検出した。本遺跡の立地などを考慮すると、遺跡周辺の低地～微高地には、これらのイネ科植物を含む人里植物が草地を形成していたと推定される。また、殻斗が確認されたブナは山地の落葉広葉樹林で極相林要素となる種類であり、種子が確認されたマタタビ属は林縁部等に生育する。ブナは近傍の山地・丘陵に生育していたと推定され、植物珪酸体分析で確認されたクマザサ属は、こうしたブナ林の林床などに由来する可能性がある。また、マタタビ属は、周辺の河畔林や二次林などの林縁に生育していた可能性がある。

5　2010 年度植物珪酸体分析（第 18・23・24 図、第 8 表）

A　堆積物及び採取試料

今回の分析調査では、後述する放射性炭素年代測定、植物珪酸体分析を実施するにあたり、現地で試料採取を実施した。試料採取地点は、発掘調査区南区 1 南壁（2C22 グリッド）および西壁（4B6 グリッド）の 2 か所である。ここでは、堆積物の累重が比較的良好であった南区 1 南壁の観察所見を記す。

南壁に確認された客土を除く堆積層（層厚約 190cm）は、泥（粘土・シルト）～細粒砂と比較的細粒な堆

積物から構成される。堆積層最下部は、シルトおよび極細粒砂からなる平行層理が発達し、植物遺体が混じる腐植質な堆積物も挟在する。この堆積物の上位は、みかけ塊状を為す灰色シルトであり、最上部には灰白色シルトの偽礫が混じる。灰色シルト上位は、不整合で葉理構造が認められる灰色極細粒砂が堆積する。灰色極細粒砂上位は、灰色シルトが堆積する。灰色シルトは、下部に黄灰色の風化礫（亜円礫状、最大径約 2cm）が多く混じり、上部では管状酸化鉄が発達する。灰色シルト上位は、不整合で（青）灰色極細粒砂～細粒砂が堆積する。この砂層の上位には、下位より擾乱が著しい褐灰～灰色の砂混じりシルト、灰色シルト～粘土が堆積する。これらの堆積物は、層界が明瞭であり、いずれも管状酸化鉄が発達する。灰色シルト～粘土上位は、不整合で（青）灰色極細粒砂が堆積する。この砂層上位には、植物遺体が混じる青灰～灰色粘土～シルトが堆積する。青灰～灰色粘土～シルト上部は植物遺体が混じり、腐植質（暗灰～暗灰褐色）である。また、最上部はガツボとされる植物遺体の集積である。なお、暗灰～暗灰褐色粘土～シルトとガツボの間には、黄灰～灰色細粒砂～極細粒砂がレンズ状に堆積する。この砂層は、側方への連続性がなく、局所的に観察され、発掘調査所見によれば墳砂の一部とされている。ガツボ上位は、下位より葉理構造を有する灰褐色シルト、炭化物が混じる灰色粘土、管状酸化鉄が発達する暗灰色シルトが堆積し、暗灰色シルト上位は客土（砂質土）である（第 18 図）。

土壌試料は、発掘調査成果および分析目的を考慮し、水田１～５枚目にそれぞれ相当する堆積物の上部および中部より採取した。また、比較対照として５面より下位の堆積物からも試料を採取している（第 18 図）。さらに、西壁（4B6 グリッド）では、水田５枚目畦畔の植物遺体層を試料として、採取している。

試料は、南壁（2C22 グリッド）の水田１枚目～５枚目に相当する堆積物より採取した土壌５点（試料番号 3・4・6・8・10）、および比較対照の５枚目水田下位の堆積層より採取した土壌（試料番号 12）の計６点である（第 18 図）。

B　分　析　方　法

分析方法は 2009 年度と同様である。

C　結　　果

結果を第８表、第 23 図に示す。南壁（2C22 グリッド）の植物珪酸体含量は、Ⅷ層・１枚目水田（試料番号３）が約 4,000 個 /g、Ⅹ層・２枚目水田（試料番号４）約 7,500 個 /g、Ⅻ層・３枚目水田（試料番号６）が約 3,300 個 /g、ⅩⅣ層・４枚目水田（試料番号８）が約 2,700 個 /g、ⅩⅥ層・５枚目水田（試料番号 10）が約 2,800 個 /g、比較対照の水田５枚目下位のⅩⅦ層・灰色シルト（試料番号 12）が約 3,700 個 /g である。

各試料からは、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属などが検出されるが、いずれも含量が低い。栽培植物は、水田面に相当す

（個 /g）

	南区１南壁（2C22 グリッド）					
	水田					比較対照
	Ⅷ層	Ⅹ層	Ⅻ層	ⅩⅣ層	ⅩⅥ層	ⅩⅦ層
分類群	3	4	6	8	10	12
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	300	200	100	300	<100	200
タケ亜科	200	700	<100	<100	200	200
ヨシ属	800	700	300	200	200	<100
不明キビ型	1,200	1,600	700	700	500	300
不明ヒゲシバ型	300	100	<100	200	300	-
不明ダンチク型	400	800	300	100	<100	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	200	400	200	<100	<100	<100
タケ亜科クマザサ属	200	100	-	-	-	<100
タケ亜科	<100	200	200	<100	200	200
ヨシ属	<100	400	<100	<100	-	200
不明	500	2,100	1,200	800	1,100	2,200
合　　計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	3,000	4,200	1,600	1,600	1,500	900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1,000	3,400	1,700	1,000	1,300	2,800
総　計	4,000	7,500	3,300	2,700	2,800	3,700
珪化組織片						
イネ属短細胞列	＊	＊	＊	＊	-	＊

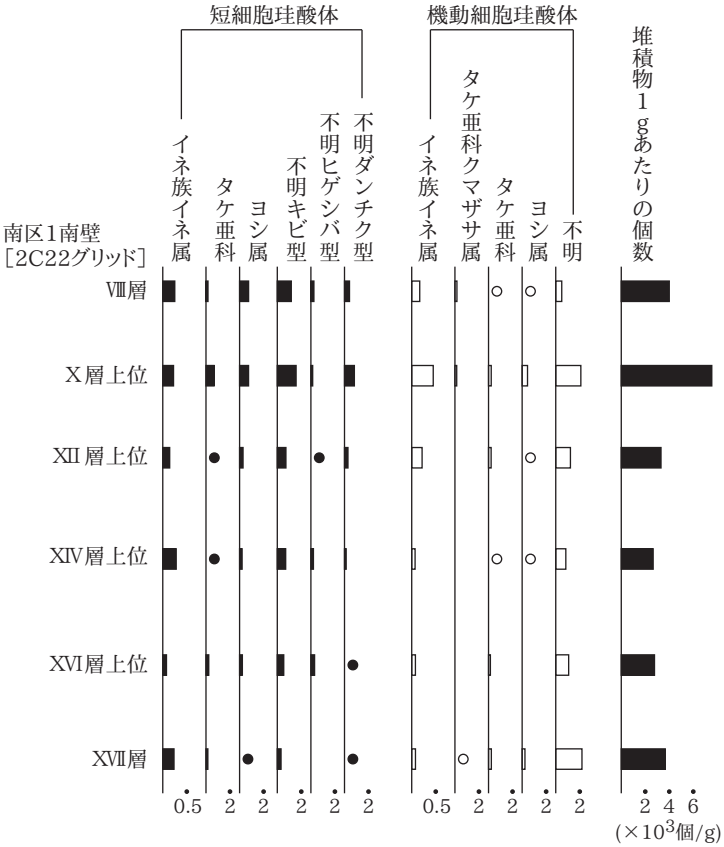
珪化組織片の産状　－：未検出、＊：検出

第８表　2010 年度 植物珪酸体含量

る試料および比較試料からイネ属を検出した。その含量は、短細胞珪酸体が約 300 個 /g ～ 100 個 /g 未満、機動細胞珪酸体が約 400 個 /g ～ 100 個 /g 未満である。また、XVI層・5 枚目水田耕作土（試料番号 10）を除く 5 試料からは、イネ属の葉部に形成される短細胞列も検出した。

D　考　　察

南区 1 南壁（2C22 グリッド）の各水田面試料および比較試料からは、栽培植物のイネ属を検出した。イネ属の含量は、短細胞珪酸体が約 300 個 /g ～ 100 個 /g 未満、機動細胞珪酸体が約 400 個 /g ～ 100 個 /g 未満と極めて含量が低いという傾向が示唆される。本遺跡では北側に隣接する 2009 年調査区で 4 地点を対象に同様の分析調査を実施している。この結果では、調査区東壁（4G13・5G19 グリッド）のⅧ層～XIV層のイネ属の植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体が約 600 個 /g ～ 100 個 /g 未満、機動細胞珪酸体が約 400 個～ 100 個 /g、調査区北側（8E18・9F20 グリッド）のⅩ～XVI層のイネ属の植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体が約 2,600 ～ 400 個 /g、機動細胞珪酸体が約 900 ～ 200 個 /g であった。

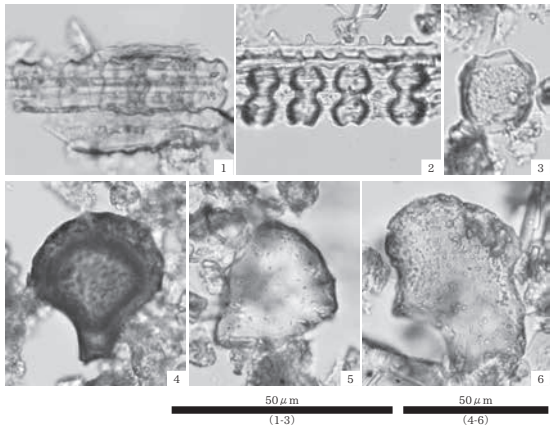


堆積物1ｇあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g 未満を示す。＊は珪化組織片の産状を示す。

第 23 図　2010 年度 植物珪酸体含量

今回の分析結果は、前述した判断基準と比較するとイネ属の機動細胞珪酸体含量が低いことから、稲作が行われていた可能性について言及することは難しい。

なお、本遺跡では、水田跡の存在を示す畦畔などが検出されていることから、稲作の可能性が高いと考えられる。また、堆積物の観察および放射性炭素年代測定結果などから、比較的短期間に複数回の河川の増水や氾濫などの影響を受けたことが推定される。これらの点から、堆積速度が早かった、各水田面で耕作期間が短かったことなどが想定され、土壌中に蓄積される植物珪酸体が少なく、総じてイネ属



1 イネ属短細胞列（2Cグリッド;3）　2 イネ属短細胞列（2Cグリッド;6）
3 ヨシ属短細胞珪酸体（2Cグリッド;4）　4 イネ属機動細胞珪酸体（2Cグリッド;4）
5 クマザサ属機動細胞珪酸体（2Cグリッド;12）　6 ヨシ属機動細胞珪酸体（2Cグリッド;4）

第 24 図　2010 年度 植物珪酸体

の含量が低くなった可能性がある。

このほか、栽培植物のイネ属を除く分類群では、タケ亜科（クマザサ属を含む）やヨシ属等を検出した。このことから、調査地周辺の湿潤な場所にはヨシ属が生育し、比較的乾燥した場所にはタケ亜科などが生育したと推定される。クマザサ属は、本地域の後背の山地や丘陵に分布する落葉広葉樹林の林床などに生育する分類群であることから、集水域に生育した個体に由来する可能性がある。また、ガツボ下部の暗灰～暗灰褐色シルト（試料番号２）やⅧ層・１枚目水田耕作土に相当する灰～灰色粘土～シルト（試料番号３）からはウキヤガラ近似種を含むカヤツリグサ科の種実を検出したことから、Ⅷ層・１枚目水田耕作土からⅦ層（下位）・ガツボ層形成時の調査地近辺は、明るく開けており、ヨシ属やウキヤガラ近似種が生育するような湿潤な環境であったことが推定される。

6　^{14}C 年代測定（第18図、第９表）

A　試　　料

試料は、南区１南壁（2C22グリッド）で途中に墳砂とされる砂層を挟むⅦ層・ガツボ（試料番号１）層上位、同下位の植物遺体が混じる暗灰～暗灰褐色シルト（試料番号２）、Ⅷ層・１枚目水田耕作土に相当する青灰～灰色粘土～シルト（試料番号３）、および南区１西壁（4B12グリッド）のXⅥ層・５枚目水田畦畔の植物遺体層の４点である（第18図）。

本分析では、測定試料の抽出のため、それぞれ土壌100ccについて水洗選別を実施した。水洗選別により検出された植物遺体の産状、および調査担当者の確認に基づき測定対象とした試料は、Ⅶ層上位のガツボ（試料番号１）がイネ科の稈、Ⅶ層下位の植物遺体が混じる暗灰～暗灰褐色シルト（試料番号２）がウキヤガラ近似種（種実）、Ⅷ層・１枚目水田耕作土に相当する灰～灰色粘土～シルト（試料番号３）がカヤツリグサ科（種実）、西壁（4Bグリッド）のXⅥ層・５枚目水田畦畔の植物遺体層がヤナギ属（芯持丸木、径約4mm）である。

B　分　析　方　法

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）により、不純物を取り除いた後、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正結果は、測定誤差σ・２σ（σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、２σは真の値が95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。表中の相対比（確率分布）とは、σ・２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

C　分析結果及び考察

結果を第 9 表に示す。各試料から抽出した植物遺体の同位体効果による補正を行った測定年代（補正年代）は、南壁（2C22 グリッド）のⅦ層上位のガツボ（試料番号 1）が 400 ± 20yrBP、Ⅶ層下位の植物遺体が混じる暗灰～暗灰褐色シルト（試料番号 2）が 625 ± 20yrBP、Ⅷ層・1 枚目水田耕作土に相当する青灰～灰色粘土～シルト（試料番号 3）が 870 ± 20yrBP、西壁（4B グリッド）のⅩⅥ層・5 枚目水田畦畔の植物遺体層が 595 ± 20yrBP である。

試料名	補正年代 (yrBP)	δ ^{13}C（‰）	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代（cal）			相対比	測定機関 Code No.
2C グリッド 試料番号 1 植物遺体（イネ科 稈）	400 ± 20	-25.09 ± 0.12	399 ± 19	σ	cal AD 1,448 - cal AD 1,478		1.000	PLD-16777
				2 σ	cal AD 1,442 - cal AD 1,502		0.913	
					cal AD 1,507 - cal AD 1,510		0.010	
					cal AD 1,602 - cal AD 1,615		0.076	
2C グリッド 試料番号 2 種実遺体（ウキヤガラ近似種）	625 ± 20	-24.07 ± 0.21	626 ± 19	σ	cal AD 1,298 - cal AD 1,318		0.429	PLD-16778
					cal AD 1,352 - cal AD 1,370		0.364	
					cal AD 1,379 - cal AD 1,390		0.207	
				2 σ	cal AD 1,292 - cal AD 1,327		0.396	
					cal AD 1,342 - cal AD 1,395		0.604	
2C グリッド 試料番号 3 種実遺体（カヤツリグサ科）	870 ± 20	-31.46 ± 0.18	870 ± 21	σ	cal AD 1,163 - cal AD 1,208		1.000	PLD-16779
				2 σ	cal AD 1,051 - cal AD 1,081		0.093	
					cal AD 1,127 - cal AD 1,134		0.015	
					cal AD 1,152 - cal AD 1,220		0.892	
4B グリッド 水田 5 枚目・ⅩⅥ層 畦畔 植物遺体層 木材（ヤナギ属）	595 ± 20	-27.10 ± 0.15	594 ± 21	σ	cal AD 1,315 - cal AD 1,356		0.798	PLD-16780
					cal AD 1,388 - cal AD 1,398		0.202	
				2 σ	cal BC 1,302 - cal AD 1,366		0.750	
					cal AD 1,383 - cal AD 1,408		0.250	

第 9 表　放射性炭素年代測定結果及び暦年較正結果

これらの補正年代に基づく暦年較正結果（σ）は、南壁のⅦ層上位のガツボ（試料番号 1）が calAD1,448-calAD1,478、Ⅶ層下位の植物遺体が混じる暗灰～暗灰褐色シルト（試料番号 2）が calAD1,298-calAD1,390、Ⅷ層・1 枚目水田耕作土に相当する青灰～灰色粘土～シルト（試料番号 3）が calAD1,163-calAD1,208、西壁（4B グリッド）のⅩⅥ層・5 枚目水田畦畔の植物遺体層が calAD1,315-calAD1,398 である。

以上の暦年較正結果から想定される年代は、南壁のⅦ層上位ガツボ（試料番号 1）が 15 世紀中葉～後半頃、Ⅶ層下位の暗灰～暗灰褐色シルト（試料番号 2）が 13 世紀末～ 14 世紀末頃、Ⅷ層・1 枚目水田耕作土に相当する灰～灰色粘土～シルト（試料番号 3）が 12 世紀中葉～ 13 世紀初頭頃、西壁のⅩⅥ層・5 枚目水田畦畔の植物遺体層（試料番号 4）が 14 世紀前葉～同末頃である。

南壁のⅦ層上位ガツボ（試料番号 1）Ⅷ層・1 枚目水田耕作土（試料番号 3）の暦年較正年代は、堆積物の累重関係と整合する。一方、ⅩⅥ層・5 枚目水田畦畔 501 の植物遺体層は、南壁のⅦ層下位の暗灰～暗灰褐色シルト（試料番号 2）に近い年代を示す。発掘調査所見［(財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2010］によれば、本調査区の水田 2 枚目および 3 枚目は、2009 年の調査で確認された屋敷地と同時期と想定されており、その年代は 13 世紀後半～ 14 世紀と考えられている。これを参考とすると、Ⅷ層・1 枚目水田耕作土（試料番号 3）の暦年較正年代は、やや古い年代を示している可能性がある。

7　2009 年度樹種同定・漆膜観察・X 線回折分析（第 25 図～ 29 図、第 10 ～ 15 表）

A　試　　料

試料は、本遺跡より出土した漆製品や建築部材を含む木製品と、樹根列より採取された木片である。木製品は、漆製品と漆製品を除く木製品（以下、木製品）に分類している。

分析試料は、木製品が 238 試料、漆製品が 38 試料、樹根列試料は乾燥・収縮によって分析不可能と判断した試料を除く 13 試料の計 289 試料である。木製品については、複数の部材で構成される資料や、接合しない別個体が認められる資料を適宜抽出し、分析試料を採取している。各試料の詳細や観察所見は、結果とともに第 11 ～ 15 表に示す。また、漆製品は容器 7 試料（79・129・131・135・137・206・265）と烏帽子？（302）と編組（21）については、漆塗膜構造および顔料の検討を目的として、塗膜薄片作製・観察及び X 線回折分析を行う。

B　分　析　方　法

1）樹　種　同　定

外観および木取りの観察を行った後、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。木材組織の名称と特徴は、［島地・伊東 1982］、［Wheeler ほか 1998］、［Richter ほか 2006］を参考にする。また、各分類群の組織配列は、［緒方 1985］、［林 1991］、［伊東 1995・1996・1997・1998・1999］を参考にする。

2）漆塗膜薄片作製・観察

塗膜片を合成樹脂で包埋し、樹脂を固化させる。塗膜断面が出るように切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドグラスに接着した後、反対側も切断して厚さ 0.03mm 程度まで研磨してプレパラートとする。プレパラートは、落射蛍光顕微鏡および反射顕微鏡を用いて、漆層の様子や混和物について観察する。

3）X 線回折分析

試料保持材として両面テープを用い、試料を無反射試料板に固定し、第 10 表の条件で測定を行う。検出した物質の同定解析は、Materials Data,Inc. の X 線回折パターン処理プログラム JADE を用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置	理学電気製 MultiFlex
Target	Cu（K α）
Monochrometer	Graphite 湾曲
Voltage	40KV
Current	40mA
Detector	SC
Calculation Mode	cps
Divergency Slit	1°
Scattering Slit	1°
Recieving Slit	0.3mm
Scanning Speed	2°/min
Scanning Mode	連続法
Sampling Range	0.02°
Scanning Range	5 ～ 45°

第 10 表　X 線回折測定条件

C　結　　果

1）樹　種　同　定

木製品の樹種同定結果を第 11 表、漆製品の樹種同定結果を第 12 表、

自然木の樹種同定結果を第 13 表に示す。木製品（漆製品を含む）や自然木は、針葉樹 4 分類群（マツ属複維管束亜属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ科）と、広葉樹 15 分類群（ヤナギ属・ハンノキ属ハンノキ亜属・クマシデ属イヌシデ節・ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケヤキ・カツラ・モクレン属・サクラ属・バラ科ナシ亜科・シタン類・ヌルデ・トチノキ・ウコギ属）に同定した。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認めた。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成する。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1–15 細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2–4 個。放射組織は単列、1–10 細胞高。

・コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata*（Thunb.）Sieb. et Zucc.）　コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となり、通常 1 分野に 1 個。放射組織は単列、1–5 細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1–10 細胞高。

・ヤナギ属（*Salix*）　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または 2–3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1–15 細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属（*Alnus* subgen. *Alnus*）　カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または 2–4 個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1–20 細胞高のものと集合放射組織とがある。

・クマシデ属イヌシデ節（*Carpinus* subgen. *Euarpinus*）　カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2–4 複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1–3 細胞幅、1–40 細胞高のものと集合放射組織とがある。

・ブナ属（*Fagus*）　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2–3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1–2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1–20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

報告番号	器種 / 種別		木取	樹種	備考
図版 65-1	柱根		分割角材	スギ	
図版 65-2	柱根		芯持丸木	ヤナギ属	
図版 65-3	柱根		芯持丸木	ヤナギ属	
図版 65-4	柱根		分割角材	スギ	
図版 65-5	柱根		芯持丸木	ヤナギ属	
図版 65-6	柱根		芯持丸木	スギ	
図版 65-7	柱根		板目	スギ	
図版 65-8	柱根		半裁木	ブナ属	
図版 65-9	柱根		分割角材	スギ	
図版 65-10	柱根		削出丸木	マツ属複維管束亜属	
図版 65-11	柱根		芯持丸木	サクラ属	
図版 65-12	柱根		芯持丸木	クマシデ属イヌシデ節	
図版 66-13	串		板目	スギ	
図版 66-14	串		板目	スギ	
図版 66-21	編組		（板目）	スギ	2 本越え，2 本潜り
図版 66-22	箱	側板？	柾目	スギ	
図版 66-23	箱	底板	板目	スギ	
図版 66-24	有孔円板		板目	スギ	
図版 66-25	鍋蓋		柾目	スギ	
図版 66-26	折敷	底板	柾目	スギ	
図版 67-27	曲物	底板	柾目	スギ	
図版 66-28	容器	把手？	分割材	スギ	
図版 66-29	曲物	把手？	板目	スギ	
図版 67-30	連歯下駄		追柾	スギ	
図版 67-31	連歯下駄		板目	スギ	
図版 67-32	連歯下駄		板目	スギ	
図版 67-33	連歯下駄		板目	スギ	
図版 67-34	連歯下駄		柾目	スギ	
図版 67-35	無歯下駄		板目	スギ	
図版 67-36	無歯下駄		柾目	スギ	
図版 67-37	差歯下駄（露卯）	台	柾目	モクレン属	
図版 68-38	差歯下駄（露卯）	台	板目	モクレン属	
図版 68-39	差歯下駄（露卯）	台	板目	モクレン属	
図版 68-40	杭？		分割材	スギ	
図版 68-41	杭？		柾目	スギ	
図版 68-42	枘付木製品		削出丸棒状	スギ	
図版 68-43	枘付木製品		削出丸棒状	スギ	
図版 68-44	不明木製品		柾目	スギ	
図版 68-45	脚？		削出棒状	スギ	
図版 68-46	刀子柄未成品		柾目	スギ	
図版 68-47	木錘		削出棒	スギ	
図版 68-48	鎌柄		削出丸棒	スギ	
図版 68-49	田下駄？		追柾	スギ	
図版 69-50	田下駄		柾目	クリ	
図版 68-51	火鑽臼		板目	スギ	
図版 69-52	用途不明品		柾目	スギ	
図版 69-56	箆		板目	スギ	
図版 69-57	扇		柾目	スギ	
図版 69-58	曲物枠木		板目	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
図版 69-59	人形		削出角棒	スギ	
図版 69-60	斎串		柾目	スギ	
図版 69-61	箱？		柾目	スギ	
図版 69-62	箱	側板	板目	スギ	
図版 69-63	箱	側板	板目	スギ	
図版 69-64	容器	蓋	柾目	スギ	
図版 69-65	連歯下駄		追柾	スギ	
図版 69-66	草履芯		板目	スギ	
図版 69-67	刀子鞘		板目	スギ	
図版 70-68	題箋状木製品		板目	スギ	
図版 70-69	草履芯		板目	スギ	
図版 70-70	脚未成品？		板目	スギ	
図版 70-71	方形板		柾目	スギ	
図版 70-72	刀子柄未成品		削出丸棒状	スギ	未成品
図版 70-74	舟形		柾目	スギ	
図版 70-75	連歯下駄		追柾	スギ	
図版 70-80	不明木製品		板目	スギ	
図版 70-81	連歯下駄		板目	スギ	

報告番号	器種 / 種別		木取	樹種	備考
図版 70-82	火鑽臼		柾目	スギ	
図版 71-83	曲物	底板	柾目	スギ	
図版 71-83	曲物	側板 1	柾目	スギ	
図版 71-83	曲物	側板 2	柾目	スギ	
図版 71-83	曲物	側板 3	柾目	スギ	
図版 71-84	蓋		柾目	スギ	
図版 71-85	人形		板目	スギ	
図版 71-86	不明木製品		柾目	スギ	
図版 71-87	刀子柄		柾目	スギ	
図版 71-88	曲物	底板	柾目	スギ	
図版 72-89	柱根		芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
図版 72-90	柱根		芯持丸木	サクラ属	
図版 72-91	柱根		芯持角材～丸木	クリ	
図版 72-92	柱根		芯持丸木	サクラ属	
図版 72-93	柱根		芯持丸木	モクレン属	
図版 72-94	柱根		芯持丸木	スギ	
図版 72-95	刀子柄未成品		板目	スギ	
図版 72-96	杭		芯持丸木	ヤナギ属	
図版 72-97	杭		芯持丸木	ヤナギ属	
図版 72-98	杭		板目	スギ	
図版 72-99	杭		芯持丸木	ヤナギ属	
図版 72-100	杭		芯持丸木	ヤナギ属	径約 2-3cm
図版 72-101	杓子		板目	スギ	
図版 72-102	枘付木製品		四方柾	スギ	
図版 72-103	杭		分割材	スギ	
図版 72-104	串		板目	スギ	
図版 72-105	栓？		板目	スギ	
図版 73-106	杭		芯持丸木	ハンノキ属ハンノキ亜属	径約 5cm［分析対象外］
図版 73-107	杭		芯持丸木	ハンノキ属ハンノキ亜属	
図版 73-108	杭		分割角材	スギ	
図版 73-109	杭		芯持丸木	ヤナギ属	
図版 73-110	茅針		板目	スギ	
図版 73-111	蓋		柾目	スギ	
図版 73-112	針状木製品		板目	スギ	
図版 73-113	不明木製品		柾目	スギ	
図版 73-114	題箋状木製品		柾目	スギ	
図版 73-115	鉤		芯持丸木	クリ	
図版 73-116	鳥形		柾目	スギ	
図版 73-117	連歯下駄		板目	モクレン属	
図版 73-118	差歯下駄（露卯）	歯	柾目	スギ	
図版 74-121	荷札状木製品		柾目	スギ	
図版 74-122	舟形		削出棒状	スギ	
図版 74-123	木鏃？		削出丸棒状	ウコギ属	
図版 74-124	陽物		削出角棒	スギ	
図版 74-138	杓子		柾目	スギ	
図版 74-139	菜箸		削出棒状	スギ	
図版 75-140	折敷	底板	柾目	スギ	
図版 75-141	折敷	底板	柾目	スギ	
図版 74-142	栓		削出丸棒状	スギ	
図版 75-143	曲物	蓋	柾目	スギ	
図版 74-144	把手？		柾目	スギ	
図版 74-145	把手未製品		柾目	スギ	
図版 75-146	台形箱	側板	板目	スギ	
図版 75-147	台形箱	側板	柾目	スギ	
図版 75-148・149	柄杓		柾目	スギ	
図版 75-150	小型円板		柾目	スギ	
図版 75-151	小型円板		板目	コウヤマキ	
図版 75-152	小型円板		柾目	スギ	
図版 75-153	有孔円板		柾目	スギ	
図版 75-154	曲物	蓋	柾目	スギ	
図版 75-155	蓋？	縦板	柾目	スギ	
図版 75-155	蓋	ツマミ1	半裁木	ヤナギ属	直径約 2cm
図版 75-155	蓋	ツマミ2	半裁木	ヤナギ属	直径約 2cm
図版 75-155	蓋	ツマミ3	半裁木	ヤナギ属	直径約 2cm
図版 76-156	容器	蓋	柾目	スギ	
図版 75-157	曲物	底板	柾目	スギ	

第 11 表　2009 年度 樹種同定結果（木製品）

報告番号	器種 / 種別		木取	樹種	備考
図版 76-158	曲物	底板	柾目	スギ	
図版 76-159	曲物	枠木？	板目	スギ	
図版 76-160	箱？		柾目	スギ	
図版 76-163	連歯下駄		板目	マツ属複維管束亜属	
図版 76-164	連歯下駄		板目	スギ	
図版 76-165	連歯下駄		板目	スギ	
図版 77-166	連歯下駄		板目	スギ	
図版 76-167	連歯下駄		板目	スギ	
図版 77-168	連歯下駄		板目	スギ	
図版 77-169	連歯下駄		板目	スギ	
図版 77-170	無歯下駄		柾目	スギ	
図版 77-171	差歯下駄（露卯）	台	柾目	モクレン属	
図版 77-172	差歯下駄（露卯）	台	板目	モクレン属	
図版 77-172	差歯下駄（露卯）	前歯	－	モクレン属	
図版 77-173	差歯下駄（露卯）	台	柾目	モクレン属	
図版 77-173	差歯下駄（露卯）	前歯	板目	モクレン属	
図版 77-173	差歯下駄（露卯）	後歯	板目	モクレン属	
図版 77-174	差歯下駄（露卯）	歯	柾目	スギ	
図版 78-175	差歯下駄（陰卯）	台	柾目	スギ	
図版 78-175	差歯下駄（陰卯）	前歯	板目	スギ	
図版 78-175	差歯下駄（陰卯）	後歯	板目	スギ	
図版 77-176	差歯下駄（陰卯）	歯	柾目	スギ	
図版 77-177	差歯下駄（形態不明）	歯	板目	スギ	
図版 78-178	板草履		板目	スギ	
図版 78-179	枘付木製品		削出丸棒状	スギ	
図版 78-180	枘付木製品		削出棒状	スギ	
図版 78-181	枘付木製品		削出棒状	スギ	
図版 78-182	有頭木製品		削出丸棒状	クリ	
図版 78-183	脚		板目	スギ	
図版 78-184	脚		板目	スギ	
図版 78-185	不明木製品		削出棒状	スギ	
図版 78-186	不明木製品		柾目	スギ	
図版 78-187	不明木製品		柾目	スギ	
図版 78-188	不明木製品		板目	スギ	
図版 78-189	不明木製品		板目	スギ	
図版 78-190・191	不明木製品		板目	スギ	
図版 78-192	刀子柄		柾目	スギ	
図版 78-193	刀子柄		柾目？	シタン類	
図版 78-194	錐柄		削出丸棒状	スギ	
図版 78-195	茅針		柾目	スギ	
図版 78-196	茅針		板目	スギ	
図版 78-197	篦		柾目	スギ	
図版 79-198	木錘？		板目	スギ	
図版 79-199	田下駄		追柾	スギ	
図版 79-200	俎		柾目	スギ	
図版 79-204	木簡		板目	スギ	第二号木簡
図版 79-207	草履芯		板目	スギ	
図版 79-208	曲物	底板	柾目	スギ	
図版 79-209	楔		柾目	スギ	
図版 79-210	障子？	a	分割角材	スギ	柾目面が広い
図版 79-211	障子？	b	分割角材	スギ	板目面が広い
図版 79-212	円形板		柾目	スギ	
図版 79-213	脚？		削出棒状	スギ	
図版 79-214	茅針		柾目	スギ	
図版 79-215	有孔円板		板目	スギ	
図版 79-216	刀形		板目	スギ	
図版 80-217	鳥形		柾目	スギ	
図版 80-218	鳥形		柾目	スギ	
図版 80-219	連歯下駄		板目	スギ	
図版 80-220	差歯下駄（露卯）	台	板目	モクレン属	
図版 80-220	差歯下駄（露卯）	前歯	柾目	スギ	
図版 80-220	差歯下駄（露卯）	後歯	柾目	スギ	

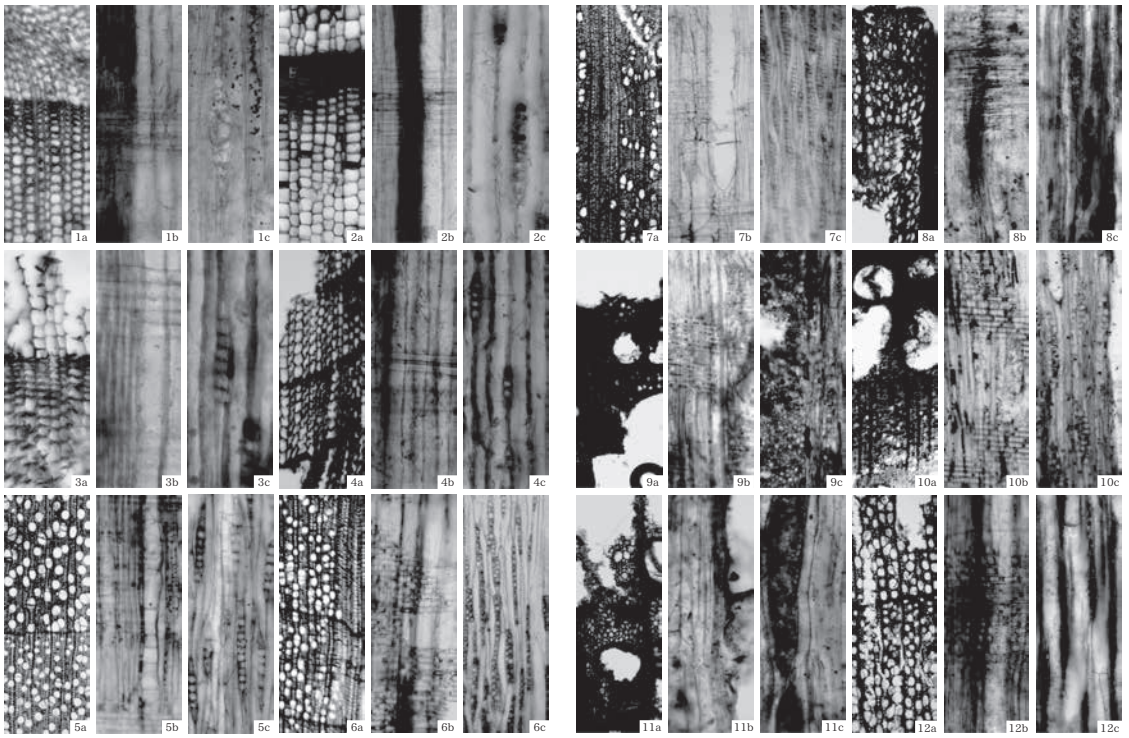
報告番号	器種 / 種別		木取	樹種	備考
図版 80-221	鎌柄		削出丸棒	スギ	
図版 80-222	曲物	蓋	柾目	スギ	No.183 と同一個体
図版 80-222	容器	蓋	柾目	スギ	
図版 80-223	折敷	底板	柾目	スギ	
図版 80-225	枘付木製品		削出棒状	スギ	
図版 80-226	不明木製品		板目	スギ	
図版 80-227	鑿柄		削出棒状	スギ	
図版 80-228	編組籤		板目	スギ	
図版 80-229	折敷	底板	柾目	スギ	
図版 81-231	箸状	No.4	削出角棒状	スギ	
図版 81-232	箸状	No.8	削出角棒状	スギ	
図版 81-234	箸状	No.6	削出角棒状	スギ	
図版 81-237	箸状	No.5	削出角棒状	スギ	
図版 81-238	木釘		削出棒状	スギ	
図版 81-244	柱根		分割角材	スギ	
図版 81-245	柱根		芯持丸木	モクレン属	
図版 81-246	茅針		削出角棒状	スギ	
図版 81-247	杭		分割角棒	スギ	
図版 81-248	杭		芯持丸木	ヤナギ属	
図版 82-249	曲物	底板	柾目	スギ	
図版 81-250	不明木製品		柾目	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
図版 81-251	小型円板		板目	スギ	
図版 81-252	差歯下駄（露卯）	歯	追柾	スギ	
図版 81-253	枘付木製品		削出丸棒状	スギ	
図版 81-254	枘付木製品		削出棒状	スギ	
図版 82-255-1	木簡	表狭み板	－	スギ	
図版 82-255-2	木簡	-2	板目	スギ	第一号木簡
図版 82-255-3	木簡	裏狭み板	－	スギ	
図版 82-256	羽子板形		柾目	スギ	
図版 82-257	刀形		柾目	スギ	
図版 82-258	串		板目	スギ	
図版 82-259	菜箸	a	削出角棒状	スギ	
図版 82-260	菜箸	b	削出角棒状	スギ	
図版 82-263	杓子		柾目	スギ	
図版 83-264	杓子		柾目	スギ	
図版 83-266	折敷	底板	柾目	スギ	
図版 83-267	刳物箱	箱	板目	スギ	
図版 83-268	箱	側板？	柾目	スギ	
図版 83-269	台形箱	側板	板目	スギ	木釘あり
図版 83-269	台形箱	木釘	柾目	クリ	目痩せ
図版 83-270	曲物	底板	柾目	スギ	
図版 83-271	曲物	底板	柾目	スギ	
図版 83-272	鍋蓋		柾目	スギ	
図版 83-273	把手		分割材	スギ	
図版 83-274	草履芯		板目	スギ	
図版 83-275	枘付木製品		削出棒状	スギ	
図版 83-276	側板		追柾	スギ	
図版 83-277	不明木製品	木釘	削出丸棒	スギ	
図版 83-277	不明木製品	本体	柾目	スギ	
図版 83-278	不明木製品		削出棒状	スギ	
図版 83-279	不明木製品	a	柾目	スギ	脚？
図版 83-280	不明木製品		削出丸棒	スギ	
図版 83-281	不明木製品		削出棒状	スギ	
図版 83-282	不明木製品		柾目	スギ	
図版 84-283	不明木製品	c	板目	スギ	
図版 84-284	不明木製品	b	板目	スギ	
図版 84-285	不明木製品	横桟 1	分割角棒	スギ	障子の桟？
図版 84-285	不明木製品	横桟 2	分割角棒	スギ	障子の桟？
図版 84-285	不明木製品	縦材	分割角棒	スギ	障子の桟？
図版 84-286	不明木製品		柾目	スギ	
図版 84-287	不明木製品		板目	スギ	
図版 84-288	不明木製品		板目	スギ	
図版 84-289	針状木製品		削出棒状	スギ	
図版 84-294	木錘		芯持丸木	ヤナギ属	
図版 84-295	有頭木製品		削出丸棒状	スギ	
図版 84-297	鋤形		柾目	スギ	
図版 84-298	柱根		分割角材	スギ	
－	板草履		柾目	スギ	
－	部材		分割角材	スギ	
－	柱根		芯持丸木	ヌルデ	

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3–4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1–15 細胞高。

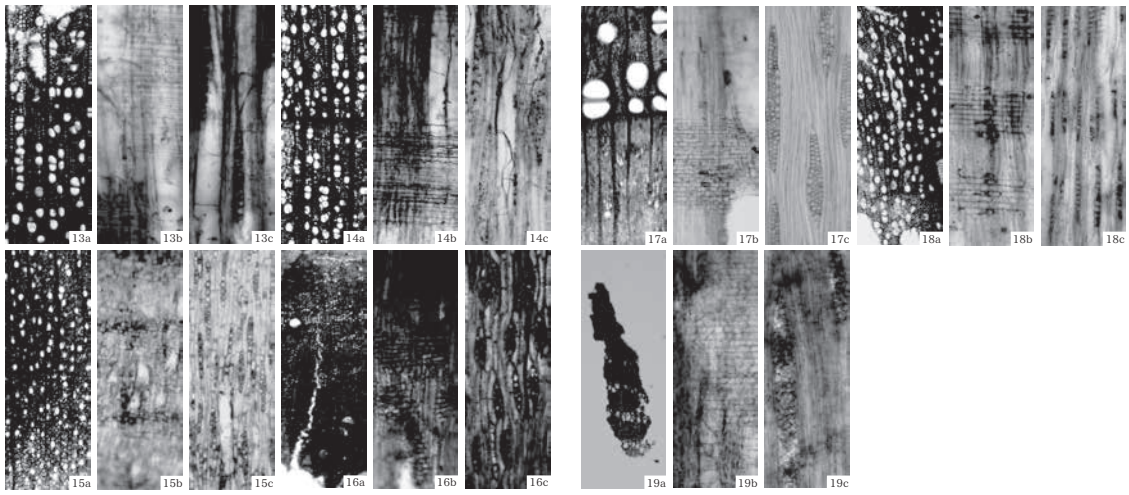
・ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は 1–2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1–6 細胞幅、1–50 細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。



1 マツ属複維管束亜属（木製品;163）　2 スギ（木製品;214）
3 コウヤマキ（木製品;151）　4 ヒノキ科（漆製品;20）
5 ヤナギ属（樹根列1-8）　6 ハンノキ属ハンノキ亜属（木製品;107）
a:木口,b:柾目,c:板目

7 クマシデ属イヌシデ節（木製品;12）　8 ブナ属（漆製品;134）
9 コナラ属コナラ亜属コナラ節（木製品;58）　10 クリ（漆製品;224）
11 ケヤキ（漆製品;77）　12 カツラ（漆製品;243）
a:木口,b:柾目,c:板目



13 モクレン属（木製品;173前歯）　14 サクラ属（木製品;90）
15 バラ科ナシ亜科（樹根列2-1）　16 シタン類（木製品;193）
a:木口,b:柾目,c:板目

17 ヌルデ（木製品;実測№212）　18 トチノキ（漆製品;261）
19 ウコギ属（木製品;123）
a:木口,b:柾目,c:板目

第 25 図　2009 年度 木材

・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）

カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1–2 細胞幅、1–30 細胞高。

・モクレン属（*Magnolia*）　モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および 2 ～ 4 個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1–2 細胞幅、1–40 細胞高。

・サクラ属（*Prunus*）　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または 2–6 個が複合、年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1–3 細胞幅、1–30 細胞高。

・バラ科ナシ亜科（Rosaceae subfam. Maloideae）

散孔材で、管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独および 2–5 個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1–2 細胞幅、1–20 細胞高。

・シタン類（*Dalbergia*）　マメ科

散孔材で、道管は単独または 2–3 個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1–2 細胞幅、1–20 細胞高で層階状に配列する。軸方向柔組織は、帯状あるいは周囲状～連合翼状となる。

・ヌルデ（*Rhus javanica* L.）ウルシ科ウルシ属

環孔材で孔圏部は 4–5 列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では 2–5 個が塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1–4 細胞幅、1–30 細胞高。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または 2–3 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1–15 細胞高で層階状に配列する。

報告番号	器種 / 種別	木取	樹種	備考
図版 66-15	椀	横木地柾目	ブナ属	内・外 : 黒
図版 66-16	椀	横木地柾目	ケヤキ	内・外 : 黒
図版 66-17	椀	横木地柾目	ケヤキ	内・外 : 黒
図版 66-18	椀	横木地柾目	ブナ属	内 : 黒 + 赤絵 , 外 : 黒 + 赤絵
図版 66-19	鉢？	横木地柾目	ケヤキ	内・外 : 黒？
図版 66-20	蓋	柾目	ヒノキ科	外 : 黒
図版 69-55	椀	横木地柾目	クリ	内・外 : 黒
図版 70-73	椀	横木地柾目	ケヤキ	内 : 黒 + 赤絵 , 外 : 黒
図版 70-76	皿	横木地柾目	ケヤキ	内・外 : 黒
図版 70-77	皿	横木地柾目	ケヤキ	内 : 赤 , 外 : 黒
図版 70-78	皿	横木地柾目	クリ	内 : 黒 , 外 :?
図版 70-79	皿	横木地板目	ケヤキ	内 : 赤 , 外 : 黒
図版 73-119	椀	横木地板目	カツラ	内 : 黒 + 赤絵 , 外 : 黒 + 赤絵
図版 73-120	椀	横木地柾目	ケヤキ	内・外 : 黒
図版 74-125	皿	横木地柾目	クリ	内・外 : 不明
図版 74-126	皿	横木地柾目	ケヤキ	内・外 : 黒
図版 74-127	皿	横木地柾目	モクレン属	内・外 : 黒
図版 74-128	椀	横木地	ケヤキ	内・外 : 黒
図版 174-129	椀？	横木地	クリ	内 : 赤 , 外 : 赤（赤絵）
図版 74-130	椀	横木地板目	カツラ	内・外 : 黒
図版 74-131	椀	横木地柾目	ケヤキ	内・外 : 黒
図版 74-132	椀	横木地柾目	クリ	内・外 : 黒
図版 74-133	椀	横木地柾目	ケヤキ	内・外 : 黒
図版 74-134	椀	横木地柾目	ブナ属	内・外 : 黒
図版 74-135	椀	横木地柾目	ブナ属	内 : 黒 + 赤絵 , 外 : 黒 + 赤絵
図版 74-136	椀	横木地柾目	モクレン属	内 : 黒 + 赤絵 , 外 : 黒
図版 74-137	椀	横木地板目	モクレン属	内 : 赤 , 外 : 黒 + 赤絵
図版 79-202	椀	横木地柾目	トチノキ	内・外 : 黒
図版 79-203	皿	横木地柾目	クリ	内 : 黒 ?, 外 :?
図版 79-205	椀	横木地柾目	ケヤキ	内・外 : 黒
図版 79-206	皿	横木地柾目	ブナ属	内 : 黒 , 外 : 赤
図版 80-224	椀	横木地柾目	クリ	内 : 赤 , 外 : 黒
図版 81-243	片口鉢	横木地板目	カツラ	内・外 : 黒
図版 82-261	椀	横木地板目	トチノキ	内 : 黒 + 赤絵 , 外 : 黒
図版 82-262	椀	横木地柾目	カツラ	内・外 : 黒
図版 175-265	椀？	横木地	ブナ属	内 : 黒 , 外 : 赤（赤絵）
図版 84-296	椀	横木地柾目	ケヤキ	内・外 : 黒

第 12 表　2009 年度 樹種同定結果（漆製品）

地区	グリッド	遺構名	樹種
北区 1	10G11	樹根列 1-2	ヤナギ属
北区 1	9G5	樹根列 1-3	ヤナギ属
北区 1	9F23	樹根列 1-5	ヤナギ属
北区 1	9F17	樹根列 1-7	ヤナギ属
北区 1	8F15	樹根列 1-8	ヤナギ属
北区 1	8F9	樹根列 1-9	ヤナギ属
南区 1	6D4	樹根列 1-18	ヤナギ属
南区 1	6C23	樹根列 1-20	ヤナギ属
南区 1	6C11	樹根列 1-22	ヤナギ属
北区 1	9G7	樹根列 2-1	バラ科ナシ亜科
北区 1	9G6	樹根列 2-2	ヤナギ属
北区 1	8G10	樹根列 2-3	ヤナギ属
北区 1	8G9	樹根列 2-4	ヤナギ属

第 13 表　2009 年度 樹種同定結果
（自然木）

・ウコギ属（*Acanthopanax*）　ウコギ科

試料は、加工の関係から木口面が小さい範囲しか観察でできない。散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、多数が集まって帯状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1–6 細胞幅、数細胞高のものから 100 細胞高以上の組織まである。

2）漆塗膜薄片作製・観察

a　容　　器（79・129・131・135・137・206・265）

観察結果を第 14 表に示す。下地には、炭粉と油煙が認められる。なお、微細な植物組織が観察できる試料を炭粉、炭粉よりも粒子が微細で均一な試料を油煙と判断した。下地は、炭粉を用いた試料が多く、油煙を用いた試料も 2 点（131・135）認められる。下地の上の漆層は、多くの試料が単層（1 層）であり、外観が黒色の試料は下地の上に混和物の無い漆が塗布され、外観が赤色の試料は赤色顔料を混和した漆が塗布される。一方、下地が油煙の試料 2 点は、漆層が複数観察される。比較的状態の良好な 131 は、内面試料では漆層が 12 層観察され、保存が悪い外面も 6 層確認される。また、漆層の状態が悪い 135 は、少なくとも 3 層の漆層が確認される。これらの 2 試料の漆層には、落射蛍光下で黄褐色～橙色の層と黒色の層が確認され、反射顕微鏡の観察から何らかの混和物の存在が示唆されたが、明瞭な結晶等は確認できなかったことから顕微鏡観察による由来の検討には至らない。

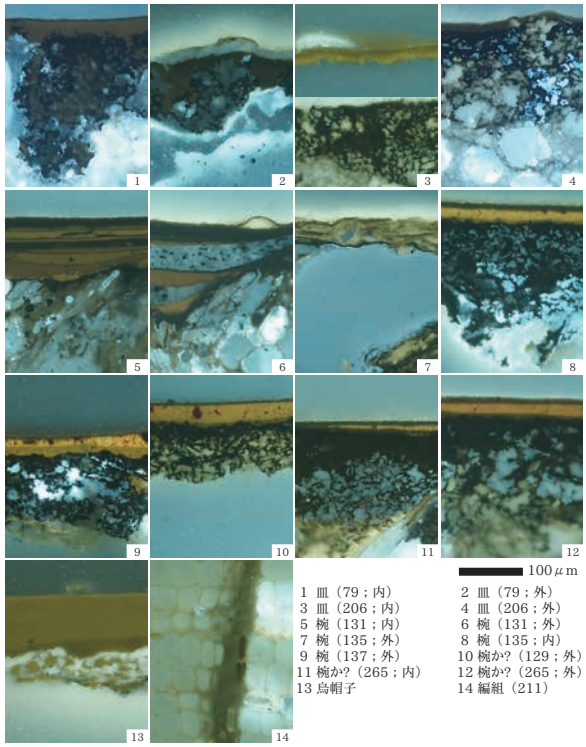
報告番号	種別	部位	外観	観察結果		顔料の種類
				下地	漆層＊	
図版 70-79	皿	内	赤	炭粉	赤	水銀朱
		外	黒	炭粉	透	－
図版 174-129	椀？	内	赤	－	－	－
		外	赤（赤絵）	炭粉	赤	水銀朱
図版 74-131	椀	内	黒	油煙	黄－橙－黄－黒－黄－黒－黄－黒－黄－黒－黄－黒	不明
		外	黒	油煙	黄－黒－黄－黒－黄－黒	－
図版 74-135	椀	内	黒（赤絵）	－	－	－
		外	黒（赤絵）	油煙	黄－黒－黄	－
図版 74-137	椀	内	赤	炭粉	赤	水銀朱
		外	黒（赤絵）	炭粉	透－赤（絵）	－
図版 79-206	皿	内	黒	炭粉	透	－
		外	赤	炭粉	赤	水銀朱
図版 175-265	椀？	内	黒	炭粉	透	－
		外	赤（赤絵）	炭粉	赤	水銀朱

＊［赤］：赤色顔料を混和した漆層，［黒］：黒色顔料を混和した漆層，［透］：混和物の無い漆層，黄：黄褐色を呈する漆層（混和物があるが詳細不明），［橙］：褐色～橙色を呈する漆層（混和物があるが詳細不明）。

第 14 表　漆塗膜断面観察結果

b　烏　帽　子　？（302）

試料は、可視光下では黒色である。塗膜の断面観察では、木地に相当する部分に束状の繊維が確認される。束状の繊維は、形状から木綿、絹、麻等の繊維で編まれている可能性があるが、保存状態が悪く繊維の同定には至らない。繊維の上には、薄い漆層と厚い漆層の 2 層が確認され、いずれも落射蛍光下で黄褐色～褐色である。反射顕微鏡でも微細な粒子が確認されることから、何らかの物質を混和していることが推定されるが、結晶構造は認められず詳細は不明である。また、明瞭な黒色の混和物は認められなかったが、いずれの漆層も透過光で不透明となることから、これらの混和物により可視光下では黒色となることが推定される。



第 26 図　漆塗膜断面

c　編　　組（21）

試料は、観察範囲では塗布物は認められない。肉眼観察では針葉樹の板目板と判断され、横断面の薄片観察からスギと同定した。

3）X 線回折分析

各試料の X 線回折図を第 27 ～ 29 図に示す。また、試料保持材として用いた両面テープの回折図も参考図として第 29 図に掲載している。試料保持材による反射は、22°,25°（2 θ）にショルダーピークを有する 20°（2 θ）付近を頂点とするブロードな回折として現れる。そのため、各試料の回折図にも試料保持材の反射が加わることに留意されたい。

a　容　　器（79・129・135・137・206・265）

黒褐色の 79・129・137・206・265 と、にぶい赤褐色の 135 の漆塗膜（紋様部分）の 6 点は、顔料鉱物である水銀朱（cinnabar）を検出した。

b　容器（131）・烏帽子？（302）

黒色の容器 131 と烏帽子？ 302 の漆塗膜 2 点には、試料保持材による反射が見られる以外には結晶性鉱物や化合物の存在を示す回折線は認められない。

c　編　　組（21）

黄褐色の編組では、試料保持材による反射以外に石英（quartz）と見られる回折線が認められるが、その回折強度は微弱である。この他の結晶性鉱物や化合物の存在を示す回折線は認められず、顔料鉱物は含まれていないと思われる。検出された石英は試料に付着した土壌由来の鉱物と見られる。

D　考　　察

1）木製品の樹種および木材利用

分析対象とされた木製品は、工具（火鑽臼・刀子柄・箆・茅針）、農耕具（鎌柄・田下駄）、紡織具（木錘）、容器（曲物・箱・刳物）、食事具（折敷）、調理具（俎板・杓子・柄杓）、祭祀具（斎串・箸状木製品・人形・鳥形、刀形・舟形・鋤形等）、服飾具（下駄・草履芯・扇）、文房具（木簡）、日用品（鉤・栓）、建築部材（柱根・障子の桟）、土木材（杭）と多岐にわたる。これらの木製品からは、針葉樹 3 分類群（マツ属複維管束亜属・スギ・コウヤマキ）と、広葉樹 11 分類群（ヤナギ属・ハンノキ亜属・イヌシデ節・ブナ属・コナラ節・クリ・モクレン属・サクラ属・シタン類・ヌルデ・ウコギ属）が確認された。

これらの分類群では、スギが多数を占めるという特徴を示した。スギは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。スギは、水分の多い土地を好み、周辺地域では弥彦山麓に自生することから、中世頃の本遺跡周辺にも生育していた可能性があり、スギの材質や入手が容易であったことなどが多くの木製品に利用された背景と考えられる。

一方、スギ以外の分類群が確認された木製品のうち、比較的分析点数が多い木製品では刀子柄や履物類、小型円板、柱材が挙げられる。刀子柄・鞘（46・67・72・87・95・192・193）は、7 点中 6 点がスギで

あったが、193 はシタン類であった。シタン類は、東南アジアからインドにかけて分布し、木材は比較的重硬で交錯木理を有するが、加工は比較的良好［須藤 1998］とされる。シタン類の木材は、国内では唐木の一つとして珍重され、正倉院にもシタン類を用いた木製品が多数収められており、その中には刀子もある［貴島ほか 1981］。遺跡からの出土事例では、天竜寺跡や行元寺跡（東京都新宿区）の近世の櫛や、明石城武家屋敷跡（兵庫県明石市）の近世の用途不明の木製品がある［三村 2004、能城・三村 2003、島地 1992］が、中世の資料は知られていない。シタン類の出土は、本遺跡の性格を検討する上で重要と考えられるほか、輸入木材あるいは木製品の利用状況を考える上で貴重な事例と言える。

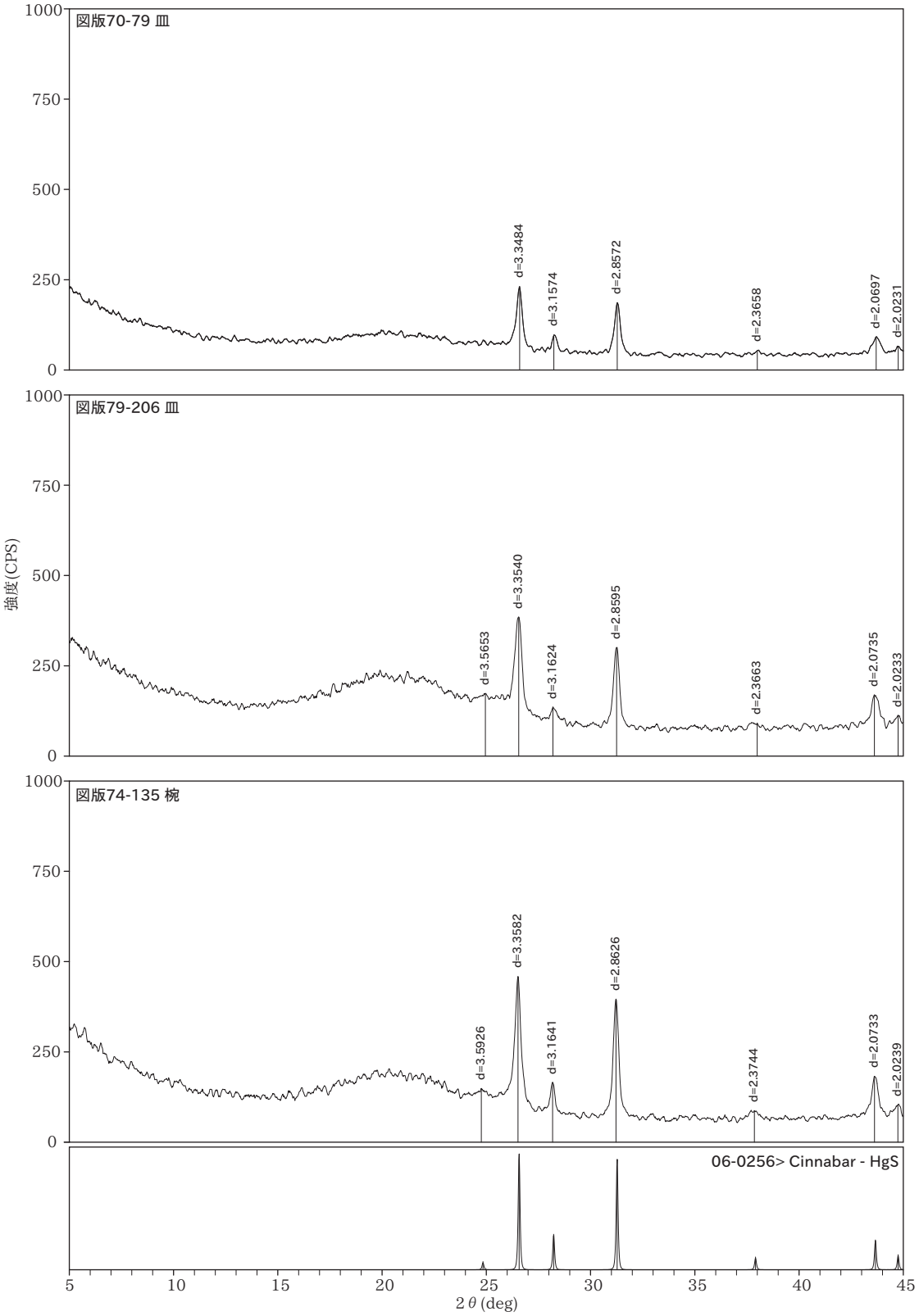
分類群＼形態	下駄							草履芯	合計
	連歯	差歯					無歯	―	
	―	陰卯		露卯		不明	―	―	
	―	歯	台	歯	台	歯	―	―	
針葉樹									
マツ属複維管束亜属	1								1
スギ	14	3	1	5		1	6	6	36
広葉樹									
モクレン属	1			3	7				11
合　計	16	3	1	8	7	1	6	6	48

第 15 表　履物の形態別分類群構成

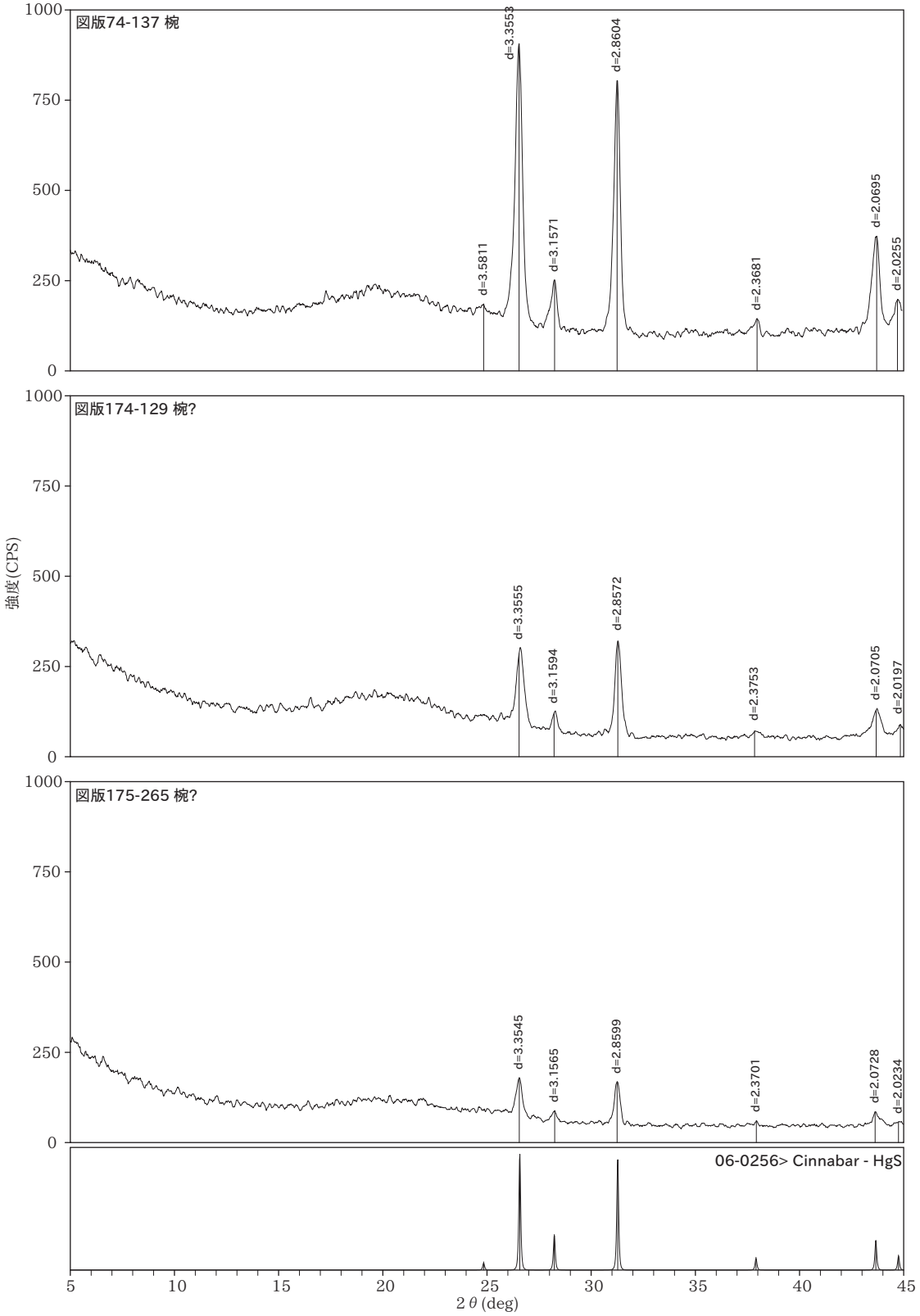
履物は、台と歯を一木で作る連歯下駄、台と歯を別材で作る差歯下駄、歯の無い無歯下駄、草履芯がある。さらに、差歯下駄は歯の組込方法により、露卯下駄と陰卯下駄に分類される。履物の形態別分類群構成（第 18 表）によれば、連歯下駄（30 ～ 34・65・75・81・117・163 ～ 169・219）16 点のうち 14 点がスギであり、このほかにマツ属複維管束亜属（163）とモクレン属（117）が 1 点ずつ認められた。差歯下駄もスギを主体とするが、露卯タイプではモクレン属の利用が目立つ。各タイプの組合せをみると、陰卯下駄は 175 が台と歯がいずれもスギであり、歯のみの試料（176）もスギであった。なお、175 は、前・後歯ともに広い面が板目で、側面が木口、接地面が柾目になる木取りであった。差歯下駄の歯は、接地面が木口になることが多く、本試料の木取りは珍しい事例である。一方、露卯下駄では、台と歯の組合せがわかる試料が 3 点あり、台・歯がモクレン属となる試料が 2 例（172・173）、台がモクレン属、歯がスギとなる試料を 1 例（220）確認した。このほかに、台のみの試料が 4 例、歯のみの試料が 3 例あり、台は 4 点ともモクレン属（37 ～ 39・171）、歯は 3 点ともスギ（118・174・252）であった。露卯下駄では、モクレン属が台と歯に認められたのに対しスギは歯のみであることや、陰卯下駄は台・歯ともにスギのみであることから、差歯下駄はタイプによって木材利用が異なっていた可能性がある。この他の履物類（無歯下駄・草履芯）はいずれもスギであり、この点からも差歯下駄の木材利用の特異性が示唆される。

当遺跡周辺における下駄の調査事例では、浦廻遺跡から出土した連歯下駄にスギ、差歯下駄の台にモクレン属、歯にスギ、草履芯にスギが確認されており［パリノ・サーヴェイ（株）2003］、本遺跡の下駄の樹種構成と類似する。一方、新潟県内の事例のうち、中世の下駄が多数出土した寺前遺跡（出雲崎町）では、連歯下駄にはスギ、モクレン属、クリ、ケヤキ、カツラ、ヒノキ科など様々な樹種が確認されている。差歯下駄は、露卯タイプが多く、陰卯タイプは少ない。明らかに陰卯タイプと分かるのは台 2 点のみで、モクレン属とスギが確認されている。露卯タイプは、スギが多く、モクレン属とヒノキ科が僅かに混じる組成であり、台と歯のいずれもスギとなる組合せが多く、台がモクレン属、歯がスギとなる組合せが 1 例確認されている。また、無歯下駄は 2 例あり、スギとモクレン属に同定されている［パリノ・サーヴェイ（株）2008］。この結果は、本遺跡や浦廻遺跡の木材利用と比較して、連歯下駄の樹種構成や差歯下駄の組合せが異なるという傾向が窺われる。

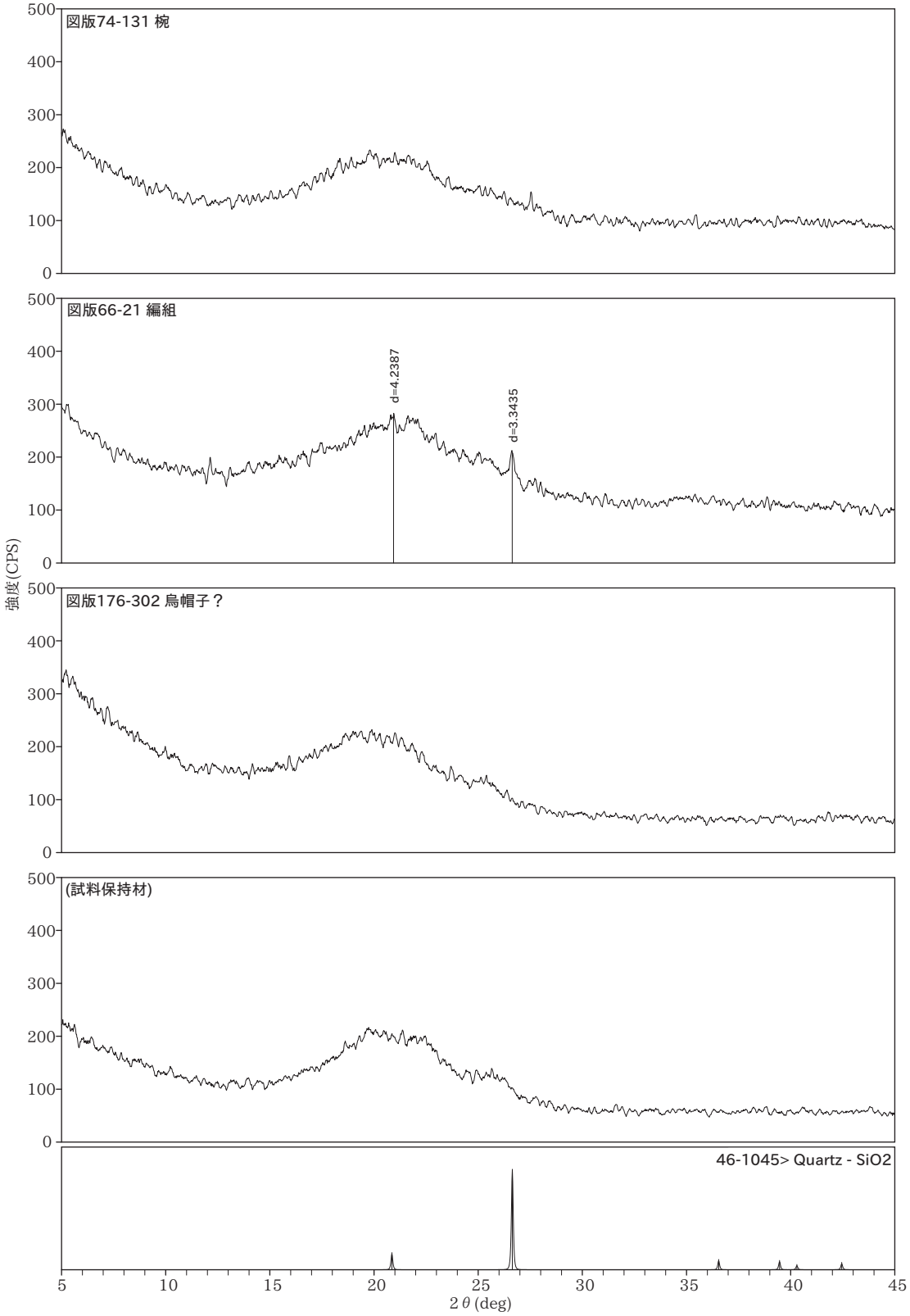
小型円板は、円形の板状を呈した木製品であり、柾目板状の試料と板目板状の試料が確認された。試料 7 点のうち 6 点がスギ（24・150・152・153・215・251）であったことから、スギ材を用いたこのほかの試料と同様に木材の材質（加工性）などによる木材利用が推定される。なお、151 は、コウヤマキと確認した。


図版70-79 皿
d=3.3484
d=3.1574
d=2.8572
d=2.3658
d=2.0697
d=2.0231
図版79-206 皿
d=3.5653
d=3.3540
d=3.1624
d=2.8595
d=2.3663
d=2.0735
d=2.0233
図版74-135 椀
d=3.5926
d=3.3582
d=3.1641
d=2.8626
d=2.3744
d=2.0733
d=2.0239
06-0256> Cinnabar - HgS
強度(CPS)
1000
750
500
250
0
5
10
15
20
25
30
35
40
45
2θ (deg)

第 27 図　X 線回折図（1）


図版74-137 椀
d=3.5811
d=3.3553
d=3.1571
d=2.8604
d=2.3681
d=2.0695
d=2.0255
図版174-129 椀?
d=3.3555
d=3.1594
d=2.8572
d=2.3753
d=2.0705
d=2.0197
図版175-265 椀?
d=3.3545
d=3.1565
d=2.8599
d=2.3701
d=2.0728
d=2.0234
06-0256> Cinnabar - HgS
強度(CPS)
1000
750
500
250
0
5
10
15
20
25
30
35
40
45
2θ (deg)

第 28 図　X 線回折図（2）


図版74-131 椀
図版66-21 編組
d=4.2387
d=3.3435
図版176-302 烏帽子？
(試料保持材)
46-1045> Quartz - SiO2
強度(CPS)
2θ(deg)
0
100
200
300
400
500
5
10
15
20
25
30
35
40
45

第 29 図　X 線回折図（3）

コウヤマキは、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、スギと同じく分割加工が容易である。現在のコウヤマキの生育地は、主に西日本を中心に分布しており、東日本では新潟県と福島県との県境付近に生育地が1か所知られているのみである。新潟県内では、これまでの分析調査でコウヤマキが確認された事例は知られておらず、コウヤマキの利用状況を考える上で注目される。

建築部材の柱は、針葉樹のマツ属複維管束亜属、スギ、広葉樹のヤナギ属、イヌシデ節、ブナ属、モクレン属、サクラ属、ヌルデを確認した。このほかの木製品と比較して、試料数に対して多くの分類群を確認した点や、強度が高いマツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ科、イヌシデ節、サクラ属等を利用する一方、強度・保存性の低いヤナギ属、強度の低いヌルデ、強度は高いが腐りやすいブナ属等を含むなど木材の材質に幅があるという特徴が指摘される。同様の特徴は、土木材の杭についても看取される。また、各試料の木取りをみると、スギは全て樹芯を外した分割材であり角材状の試料が多く、マツ属複維管束亜属は削出丸木であるなど、針葉樹材の柱材は比較的大径の木材から製作したと推定される一方、広葉樹材は芯持丸木が多かった。針葉樹と広葉樹の木取りの違いは、建物の規模や性格等を反映している可能性があり、これらの点を含めた検討が望まれる。新潟県内における調査事例では、今回の結果と似た樹種構成を示す事例としては、中世の柱材に針葉樹のスギ、広葉樹のクリ、キハダ、ケヤキ、ヌルデ、ブナ属が混在する組成［植田 2006］を確認した新発田市住吉遺跡（旧紫雲寺町）が挙げられる。

このほかの資料では、田下駄（50）や鉤（115）に、重硬で強度・耐朽性が高い材質を有する落葉広葉樹のクリを確認した。鉤は、その用途から強度の高いクリは適材といえる。一方、田下駄としては、比重が重いクリ材はあまり適材とはいえない。新潟県内の田下駄・大足等の調査事例では、新発田市青田遺跡（旧加治川村）や胎内市土居下遺跡（旧中条町）から出土した古墳時代および古代の資料は全てスギに同定されている［鈴木ほか 2004、パリノ・サーヴェイ（株）2006］。また、上越市新保遺跡（旧柿崎町）では古代の板型田下駄がスギとクリ、中世の足枠付田下駄がクリと同定されている［松葉 2001］。

2）漆製品の樹種および製作技法

a　容　　器

漆器容器は、椀・椀？、皿、蓋、片口鉢、鉢？がある。木取りは、椀（椀？を含む）と皿は全て横木地であり、柾目取が多く、板目取も一部の試料に確認した。これらの試料のうち、横木地柾目取の試料では、椀にブナ属、クリ、ケヤキ、モクレン属、カツラ、トチノキ、皿にブナ属、クリ、ケヤキ、モクレン属が認められた。また、横木地板目取の試料では、椀にモクレン属、カツラ、トチノキ、皿にケヤキを認めた。前述した浦廻遺跡では、漆器椀にケヤキを主体としてカツラ、クリ、ハリギリ、ブナ属、皿にサクラ属を認めており［パリノ・サーヴェイ（株）2003］、本分析結果と概ね同様の木材利用が示唆される。

また、漆器椀・皿類のうち、7試料（79・129・131・135・137・206・265）を対象に漆塗膜断面の観察と顔料のＸ線回折分析を行った。その結果、下地は、炭粉（79・129・137・206・265）と、油煙と考えられるもの（131・135）を確認した。炭粉や油煙は、漆あるいは柿渋に混和して下地に利用されたと考えられる。柿渋が利用された場合、断面に塗膜面に対して垂直方向にクラックが入る等の特徴が現れるが、今回の観察ではこのようなクラックが認められなかったため、漆を用いている可能性がある。漆層は、炭粉を下地とする試料は単層（1層）であり、外観の色に関わらず比較的簡単な作りであったのに対し、油煙を下地とする試料では131が12層、保存状態の悪い135が最低3層以上と、漆塗りがより丁寧であるという特徴を認めた。

なお、これらの漆層についても、クラック等は観察されなかった。漆塗膜断面の状況と使用樹種を比較すると、油煙と考えられる下地の試料がケヤキとブナ属、炭粉を下地とする試料のうち皿がケヤキとブナ属、椀がモクレン属、椀か？がクリとブナ属であり、下地による樹種の違い等は認められなかった。

また、紋様部を含めた赤色部分の調査では、全て水銀朱であった。新潟県内には水銀朱を大量に産出する鉱床は知られていないことから、これらの水銀朱の由来として水銀鉱床を有する西日本地域が推定される。ただし、木地はいずれも県内で入手可能な樹種であるため、顔料と木地の入手方法が異なっていた可能性もある。この点については、漆器椀・皿類の自然科学分析結果のほか、漆器容器類の考古学的所見などと合わせて評価する必要がある。

このほかの容器類では、片口鉢（横木地板目取）が広葉樹のカツラ、鉢？（横木地柾目取）がケヤキであった。いずれも上記した椀・皿類に確認した分類群であり、同様の木材を鉢にも利用したと推定される。蓋は、いずれも柾目材であり、針葉樹のスギとヒノキ科を認めた。ヒノキ科は、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、加工は容易である。スギについては、本遺跡の板状の木製品の多くに確認しており、特に曲物等の部材は全てスギであったことから、漆塗りの有無に関わらず同様の木材選択が推定される。

なお、容器（131）の漆層には何らかの混和物のある漆層が 12 層認められた。黒色部は、下地と似ることから油煙を用いた可能性があるが、黄褐色あるいは褐色～橙色を呈する部分の混和物については由来は不明である。今後、EPMA 分析などにより混和物の成分を明らかにする必要がある。

b　烏　帽　子　？

試料に供した漆塗膜片は、薄い板状で、表面は可視光下で黒色である。断面観察では、繊維の束が観察したが、保存が悪かったことから繊維の種類の特定には至らなかった。また、繊維の上には漆層が 3 層認められ、いずれの漆層にも粒子の細かい混和物を観察した。おそらく、この混和物によって外観上、黒色となると推定されるが、X 線回折分析では結晶性鉱物や化合物の存在を示す回折線は得られなかったことから、混和物の由来の特定については今後の課題である。

新潟県内では、村上市大木戸遺跡（旧神林村）から出土した烏帽子が外側と内側に二枚の布を重ねて作られており、表側が絹、内側がカラムシ（苧麻）で編まれていたことが確認されている［四柳 2006］。漆塗りは、表面が絹の上に油煙による黒色漆層と透明漆、裏面は透明漆 2 層が塗られている。本遺跡の烏帽子は、混和物の特定には至らなかったが 3 層の漆層が確認でき、大木戸遺跡の試料よりも漆塗りの回数が多い可能性がある。

c　編　　組

薄い板状の部材を 2 本越え、2 本潜りで隙間無く編んだ編組である。薄片観察結果からスギの薄い板目板の利用が推定される。肉眼では塗布物は認められず、薄片観察や X 線回折分析でも塗布層あるいは混和物に由来するような成分が確認・検出できないことから、白木を使用したと考えられる。

3）樹　根　列

植栽と想定される樹根列からはヤナギ属とバラ科ナシ亜科を確認し、13 点のうち 12 点がヤナギ属であった（第 13 表）。このうち主体を占めるヤナギ属は、属としては乾燥地から湿地まで様々な環境に生育する種類である。樹根列は、その検出状況や確認された分類群がほぼ一様であった点などを考慮すると、

植栽の可能性が高いと考えられる。

8　2010 年度樹種同定（第 30 図・第 16 表）

A　試　　料

試料は、木製品 5 点（4･9 ～ 11･13）である（第 16 表）。いずれも担当者により試料の採取が行われており、全て切片の状態である。

報告番号	出土位置			種別	樹種
	遺構名	グリッド	出土層位		
図版 85-4		2D20	XIV層・4 枚目水田耕作土中	鎌柄	スギ
図版 85-9		4B24	XVI層・5 枚目水田畦畔上	人形	スギ
図版 85-10		4C5	XVI層・5 枚目水田畦畔盛土中	部材	スギ
図版 85-11	SA716-2	4B12	XVI層・5 枚目水田畦畔盛土中	杭	ヤナギ属
図版 85-13		5C16	XVI層・5 枚目水田耕作土中	黒漆塗杓子	モクレン属

第 16 表　2010 年度樹種同定結果

B　分　析　方　法

2009 年度と同様である。

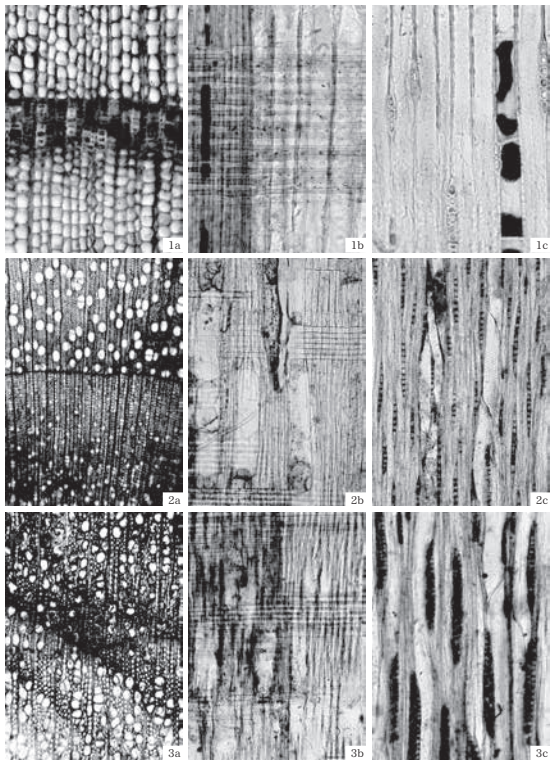
C　結　　果

結果を第 16 表に示す。木製品は、針葉樹 1 分類群（スギ）と広葉樹 2 分類群（ヤナギ属、モクレン属）に同定される。各分類群の解剖学的特徴等は前項参照。

D　考　　察

分析対象とされた木製品は、農耕具（鎌柄）、調理具（黒漆塗杓子）、祭祀具（人形）、土木材（杭）、その他（部材?）から構成される。これらの木製品の樹種は、鎌の柄と人形、部材？がスギ、黒漆塗杓子がモクレン属、杭がヤナギ属であった。スギは木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。モクレン属は広葉樹としては軽軟な部類に入り、加工は容易で、狂いが少ないとされる。ヤナギ属は軽軟で強度は低く、加工は容易であるが、保存性が低い。

鎌柄と人形については、2009 年度の調査試料 3 点（鎌柄 2 点、人形 1 点）がいずれもスギに同定されている。今回の試料も含め、分割加工が容易なスギ材が選択、利用されていたと考えられる。また、杓子についても、本遺跡では板状の杓子にスギ材が多く確認されているが、今回の黒漆塗杓子はモクレン属であった。板状の杓子と樹種が異なることから、木取りなどを確認する必要があるが、おそらく切削等の加工が容易な樹種が利用されたと考えられる。村上市大館跡出土の黒漆塗杓子もモクレン属［パリノ・サーヴェイ（株）2009］と同定されている。



1 スギ（9；人形）
2 ヤナギ属（11；杭）
3 モクレン属（13；黒漆塗杓子）
a:木口,b:柾目,c:板目

300μm:2-3a
200μm:1a,2-3b,c
100μm:1b,c

第 30 図　2010 年度 木材

杭に認められたヤナギ属は、2009 年度の発掘調査で検出された屋敷地に伴う樹根列のほか、建築材（柱）や土木材（杭）に確認されている。ヤナギ属には河畔に生育する種類が含まれていることから、本遺跡周辺にも生育したと考えられ、容易に入手できる木材を利用したと考えられる。

9　2011 年度樹種同定（第 17・18 表）

A　試　　料

分析に供された木質遺物は、木製品、建築材、樹根、粗朶など計 59 試料である。これらの試料のうち、柄杓（図版 88–16）は、側板と底板が認められたため、各部品を分析対象とした。粗朶は、一括試料として多量の芯持丸木状の小径木を主体とする破片が確認されたため、種類構成を明らかとするため径や形状を考慮し、3 試料から 10 点を選択した。

B　分　析　方　法

分析方法は 2009 年度と同様である。

C　結　　果

結果を第 17 表に示す。分析に供された試料は、針葉樹 3 分類群（マツ属複維管束亜属、スギ、アスナロ）と、広葉樹 5 分類群（ヤナギ属、クリ、ケヤキ、モクレン属、イスノキ）に同定された。2011 年度に初めて同定されたアスナロ、イスノキ以外の解剖学的特徴等は 2009 年度の結果を参照。

・アスナロ（*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.）　ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 1–4 個。放射組織は単列、1–10 細胞高。

・イスノキ（*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.）　マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1–3 細胞幅、1–20 細胞高。柔組織は、独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。道管や放射組織の多くに黒色～茶褐色の着色物質が認められる。

D　考　　察

木製品、建築材、樹根、粗朶などの木質遺物の樹種同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属、スギ、アスナロと、広葉樹のヤナギ属、クリ、ケヤキ、モクレン属、イスノキなど、計 8 分類群が確認された。これらの分類群の材質についてみると、針葉樹のマツ属複維管束亜属は、軽軟であるが強度や保存性が比較的高い。スギとアスナロは、木理が通直で割裂性が高く、とくにアスナロは耐水性も比較的高い。広葉樹のヤナギ属とモクレン属は、軽軟で強度や保存性は低い一方、クリとケヤキは重硬で強度や耐朽性が高く、イスノキは重硬かつ緻密で、強度が高いとされる。

今回の分析に供された木質遺物は、農具、漆器、曲物、食事具、装身具、文房具、祭祀具、建築材、施設材、そのほかに大きく分類される（第 17 表）。全体では、試料の約半数がスギであり、次いでヤナギ属が多い。スギは、農具や曲物、食事具、装身具の下駄、草履芯、文房具、祭祀具、部材などに認められ、板状および削出加工により製作される資料に多い。スギ材が多用されるという傾向は、2009 年度・2010 年度の樹種同定結果とも類似する。

器種毎の樹種構成（第 18 表）についてみると、農具では、鎌柄と木錘？がある。鎌柄は、削出棒状あ

るいは分割角棒状を呈し、図版 89–38 では握り部分に段を作っている。木錘？は、削出あるいは削出丸木で、2 試料の外観は大きく異なる。鎌柄や木錘？は、いずれもスギであったことから、加工性の高い木材の利用が考えられる。

漆器は、全体形状が不明な板状試料がマツ属複維管束亜属、皿および椀にクリ、ケヤキ、モクレン属などの広葉樹材が認められた。このうち、椀は 3 点がすべてケヤキ、皿 2 点にはクリとモクレン属が確認された。2009 年度の分析では、椀にクリ、ケヤキ、モクレン属、カツラ、ブナ属、皿にケヤキ、クリ、

報告番号	遺構	グリッド	層位	所属層位	器種分類	器種	木取り	樹種	備考
図版 79-201	SK177	6D23		SR1-3	装身具	横櫛	背が木口	イスノキ	2009
図版 76-162	SR1	6E7	2	SR1-2	装身具	横櫛	背が木口	イスノキ	2009
図版 76-161	SR1	6E14	2	SR1-2	装身具	横櫛	背が木口	イスノキ	2009
図版 87-1	P830	8h2		SR1-1･2	建築材	柱根	芯持丸木	ヤナギ属	
図版 87-2	P804	8H21		SR1-1･2	建築材	柱根	芯持丸木	クリ	
図版 87-3	SD112	8I22	2	SR1-1･2	食事具	折敷	柾目	スギ	
図版 87-5	SA825-7	8H22		SR1-2	祭祀具	串	柾目	スギ	
図版 87-6	SA825-8	8H22		SR1-2	祭祀具	串	板目	スギ	
図版 87-7		8I22		SR1-2	不明木製品		板目	スギ	
図版 87-8		7H13		SR1-3	文房具	呪符木簡	柾目	スギ	
図版 87-9		7H19		SR1-3	祭祀具	舟形？	板目	スギ	
図版 87-10		8H21		SR1-3	祭祀具	刀形？	追柾	スギ	
図版 87-11		8I6		SR1-3	祭祀具	刀形？	柾目	スギ	
図版 87-12		7I4		SR1-3	祭祀具	串	板目	スギ	
図版 87-14		8I7		SR1-3	漆器	皿	横木地柾目	モクレン属	
図版 88-15		8H21		SR1-3	漆器	椀（内外赤絵）	横木地柾目	ケヤキ	
図版 88-16		7I14		SR1-3	曲物	柄杓？（側板）	板目	アスナロ	
						柄杓？（底板）	板目	アスナロ	
図版 88-17		7I15		SR1-3	曲物	容器（側板）	柾目	アスナロ	
図版 88-18		7H24		SR1-3	曲物？	不明	柾目	スギ	側板転用？
図版 88-19		7H24		SR1-3	装身具	連歯下駄	柾目	モクレン属	
図版 88-20		8I1		SR1-3	装身具	無歯下駄	板目	スギ	
図版 88-21		7H3		SR1-3	装身具	差歯下駄歯（露卯）	柾目	スギ	
図版 88-22		7H25		SR1-3	装身具	草履芯	板目	スギ	
図版 88-23		8I7		SR1-3	装身具	草履芯	板目	スギ	
図版 88-24		7I10		SR1-3	建築材	杭？	板目	スギ	
図版 88-25		8H16		SR1-3	部材	柄付木製品	削出丸木	スギ	
図版 89-26		7H18		SR1-3	部材	柄	削出棒	スギ	
図版 89-27		8I1		SR1-3	部材	柄？	柾目	スギ	
図版 89-28		8H21		SR1-3	部材	棒状木製品	削出棒	スギ	
図版 89-29		7I4		SR1-3	部材		板目	スギ	
図版 89-30		7I4		SR1-3	部材	（把手？）	分割材	スギ	
図版 89-31		7I9		SR1-3	部材		削出棒	スギ	
図版 89-32		7I9		SR1-3	部材		削出棒	スギ	
図版 89-34		8I22		SR1-3	農具	鎌柄	分割角棒	スギ	
図版 89-35		7I10		SR1-3	農具	木錘？	削出	スギ	
図版 89-36		8H22		SR1-3	農具	木錘？	削出丸木	スギ	
図版 89-37		7H		SR1-1 ～ 3	漆器	皿	横木地柾目	クリ	
図版 89-38		7I3		SR1-1 ～ 3	農具	鎌柄	削出棒	スギ	
図版 89-39		8I7		SR2-1	文房具	茅札木簡	柾目	スギ	
図版 90-41	SA871-9	18D1	X	SD870 中	建築材	杭	芯持丸木	ヤナギ属	
図版 90-42	SA871-15	17C25	X	SD870 中	建築材	杭	芯持丸木	ヤナギ属	
図版 90-43	SA872-2	18C22	X	SD870 中	建築材	杭	芯持丸木	ヤナギ属	
図版 90-44	SA872-6	18C21	X	SD870 中	建築材	杭	芯持丸木	ヤナギ属	
図版 90-45	P916	20D20	Ⅻ		建築材	柱根	芯持丸木	ヤナギ属	
図版 90-46	P917	20D14	Ⅻ		建築材	柱根	芯持丸木	ヤナギ属	
図版 90-48		12F9	XIV	水田	祭祀具	陽物形	芯持丸木	モクレン属	
図版 90-49		10D25	XV	XV	漆器	椀	横木地柾目	ケヤキ	
未報告		8I11		SR1-3	食事具	折敷	柾目	スギ	
未報告		8H2		SR1-3	漆器	椀？（内：赤）	横木地柾目	ケヤキ	
未報告		11C	XIII		漆器		横木地	マツ属複維管束亜属	
未報告	SR1	7H18	3	SR1-3	装身具	横櫛	背が木口	イスノキ	
未報告	SR1	7H13	3	SR1-3	装身具	横櫛	背が木口	イスノキ	
未報告	SR1	8I12	3	SR1-3	装身具	横櫛	背が木口	イスノキ	
未報告	SA910-12	21D17	Ⅻ		建築材	杭	芯持丸木	ヤナギ属	
未報告	SA910-2	21D6	Ⅻ		建築材	杭	芯持丸木	ヤナギ属	
未報告		21C24	X	SD870 端	自然木	樹根	－	ヤナギ属	
未報告	畦畔 402	5C21･5D1	XIV			粗朶		ヤナギ属（2）	
未報告	畦畔 402	5C21･5D1	XIV			粗朶		ヤナギ属（4）	
未報告	畦畔 402	5C21･5D1	XIV			粗朶		ヤナギ属（4）	

第 17 表　2011 年度樹種同定結果

分類群	農具		漆器			曲物			食事	装身具			文具	祭祀具		建築材		施設	その他			合計
	鎌柄	木錘	皿	椀	不明	柄杓	容器	曲物？	折敷	横櫛	下駄	草履	木簡	串	形代	柱根	杭	粗朶	部材	不明	樹根	
針葉樹																						
マツ属複維管束亜属	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
スギ	2	2	−	−	−	−	−	1	2	−	2	2	2	3	3	−	1	−	8	1	−	29
アスナロ	−	−	−	−	−	2	1	−	−	−	−	−	−		−	−	−	−	−	−	−	3
広葉樹																						
ヤナギ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	6	10	−	−	1	20
クリ	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	2
ケヤキ	−	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3
モクレン属	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	3
イスノキ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	6
合　計	2	2	2	3	1	2	1	1	2	6	3	2	2	3	4	4	7	10	8	1	1	67

1）「?」が付いている木製品は、？を外して該当する項目に含めた。　2）部材に含まれる木製品は、部材として一括した。
3）祭祀具のうち、舟形？、刀形？、陽物は、形代として一括した。　4）装身具の連歯下駄、差歯下駄の歯、無歯下駄は、下駄として一括した。

第 18 表　2011 年度 器種別種類構成

ブナ属、モクレン属が確認され、器種による木材の選択性の傾向は捉えるには至っていない。今回の漆器に確認された分類群は、2009 年度に確認された構成樹種に含まれるため、木材選択を反映したものと断定することは難しい。

曲物は柄杓？、容器・曲物？がある。柄杓？に底板が認められた他は、全て側板状を呈する。このうち、図版 88–17 は、側板の外面の 2 か所に繊維状のものを巻いた上から黒漆が塗られる。図版 88–18 は、台形状を呈することから、側板を別の用途に転用した可能性がある。これらの曲物は、転用された可能性のある曲物？がスギ、ほかの 2 点はアスナロであり、いずれも板状加工が容易な木材の利用が考えられる。柄杓？は、側板と底板がともにアスナロであり、側板と同様の木材利用が窺える。また、食事具の折敷は、いずれも底板であり、板状加工が容易なスギが確認された。

装身具は、横櫛、下駄、草履芯がある。横櫛は、背が平坦になる資料（図版 79–201）、背が山状になる資料（図版 76–162）、櫛歯の間隔が広い資料（図版 76–161）とがある。これらの形態の異なる横櫛は、いずれもイスノキであり、緻密で細かな加工に適した木材の利用が考えられる。なお、イスノキは、暖温帯常緑広葉樹林に生育する常緑高木であり、現在の新潟県には分布していないため、製品あるいは木材（原材）の移入が想定される。下駄は、連歯下駄、差歯下駄（露卯）の歯、無歯下駄があり、連歯下駄にモクレン属、差歯下駄の歯と無歯下駄にスギが認められた。差歯下駄の歯と無歯下駄は板状であることから、上述した試料と同様に板状加工が容易な木材の利用が推定され、スギが確認された草履芯も同様の木材利用が考えられる。一方、モクレン属は軽軟で加工が容易であるという材質が利用された背景と推定される。

文房具は、木簡 2 点があり、いずれもスギであった。祭祀具についても、板状加工を施す串、刀形？、舟形についてはスギが認められた。一方、立体的・写実的な形状の陽物形は、モクレン属の芯持丸木を加工しており、加工が容易な木材の利用が考えられる。

建築材は、柱と杭がある。杭は、板状を呈する杭？にスギ、芯持丸木は全てヤナギ属であった。柱根は、全て芯持丸木で、強度や耐朽性に優れたクリと軽軟で強度や保存性の低いヤナギ属が認められた。クリとヤナギ属は、材質が大きく異なるため、用途が異なっていた可能性がある。また、水田畦畔の粗朶として利用された木材や樹根にもヤナギ属が認められた。2009・2010 年度に分析した柱や杭、自然木や水田畦畔の粗朶の多くにヤナギ属が認められている。ヤナギ属は、生育範囲が広く様々な種類を含むが、本遺跡の立地を考慮すると、河畔や低地などに生育したヤナギ属の主幹を柱材、枝を粗朶などとして利用したことが推定される。

10　漆塗膜および顔料分析（第 31 ～ 34 図）

A　試　　料

漆塗膜分析試料は、樹種同定対象とした漆器 6 点から選択した 4 点（図版 88–15、図版 90–49、未報告 8H2・SR1–3 層、未報告 11C・Ⅻ層）である。なお、図版 88–15 については、内面の赤色の紋様部分、外面は黒地に赤色の細い線が描かれている部分の 2 か所について薄片を作製した。また、図版 90–49 を除く 3 点の赤色部分について X 線回折分析、図版 88–15 の黒漆と図版 90–49 の下地について赤外分光分析を実施した。

B　分　析　方　法

2009 年と同様である。

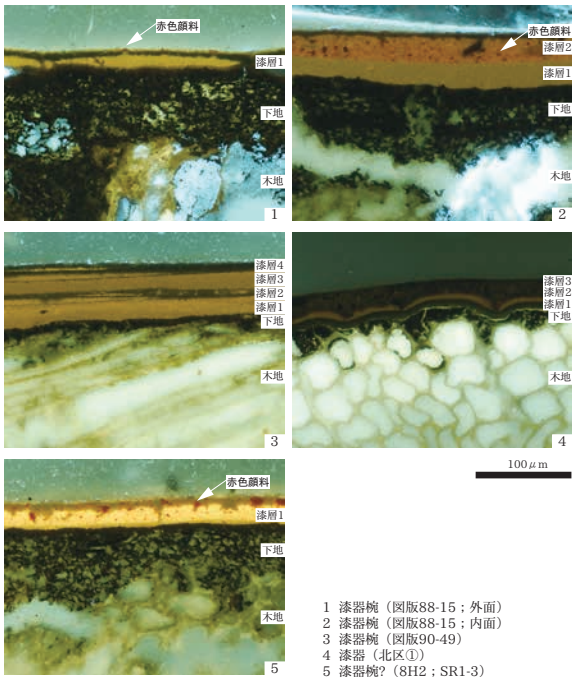
C　結　　果

1）薄片作製鑑定（第 31 図）

・図版 88–15

外面は、木地の上の下地は、厚い部分では 100μm 以上となる。下地には黒色粒子が認められるが、組織構造が認められないことから、炭粉ではなく、油煙の類と考えられる。木地の上には、混和物の無い漆層（漆層 1）が約 20μm の厚さで認められる。漆層の表面が黒色となるが、明瞭な層界は認められない。表面の所々に赤色顔料が認められ、赤色の紋様部分に由来すると考えられる。

一方、内面も木地の上の下地は外面と同様で、約 100μm の厚さがある。木地の上には混和物の無い漆（漆層 1）が約 20μm の厚さで認められる。その上に赤色顔料を混ぜた赤漆（漆層 2）が 20 ～ 30μm の厚さで認められる。赤漆は紋様に由来しており、赤色顔料は X 線回折結果から水銀朱と判断される。



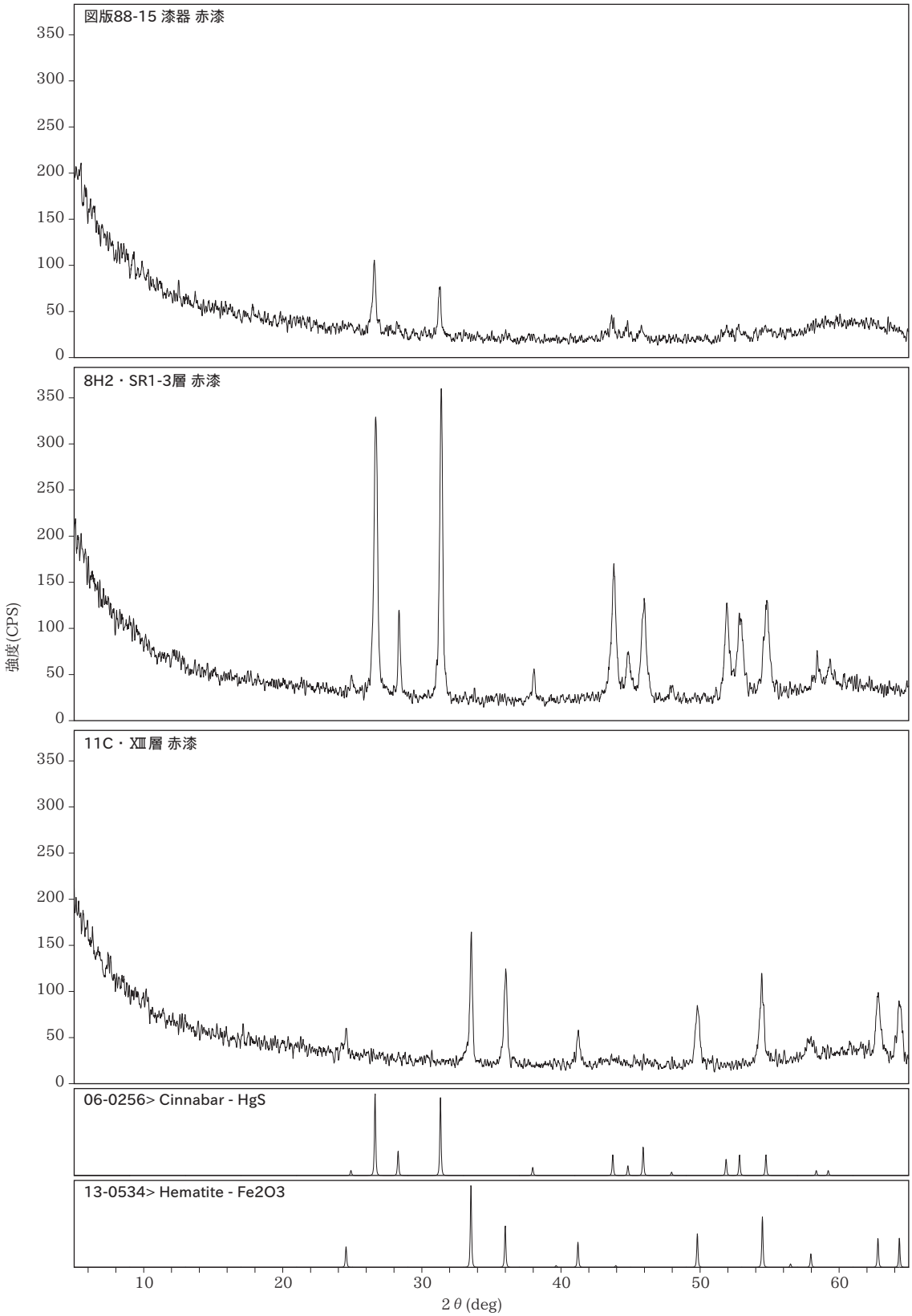
第 31 図　漆塗膜断面

・図版 90–49

木地の上の下地は厚い部分でも 20μm 以下であり、全体的に薄い。下地には黒色の微細な粒子が認められ、油煙の類を混ぜた下地と考えられる。下地の上には 4 ～ 5 層の漆層が認められる。各層の厚さは 10 ～ 20μm であり、合計で 60 ～ 70μm の厚さがある。各層には明瞭な混和物は認められず、層界部分が黒色となる。

・11C グリッド・Ⅻ層

下地は約 10μm で、木地の組織に入り込み、薄片では凹凸が目立つ。木地の上には黒色の漆層（漆層 1）


図版88-15 漆器 赤漆
8H2・SR1-3層 赤漆
11C・XIII層 赤漆
06-0256> Cinnabar - HgS
13-0534> Hematite - Fe2O3
強度(CPS)
2θ (deg)
0
50
100
150
200
250
300
350
10
20
30
40
50
60

第 32 図　X 線回折図

が約 10μm の厚さで認められる。その上には混和物の無い漆層（漆層 2）が約 10μm の厚さで認められる。漆層 1 と漆層 2 は、下地の凹凸を反映して、塗布面にも凹凸が認められる。最上面の漆層（漆層 3）は、全体的に暗褐色を呈し、厚さは 15 ～ 20μm である。また、漆層 2 の凹凸を覆うように、凹部で厚く、凸部で薄くなり、表面は平滑となる。なお、漆層 3 には所々に赤色粒子が認められ、X 線回折結果からベンガラが混和されていると考えられる。

・8H2 グリッド・SR1–3 層

下地は 50 ～ 80μm で、黒色粒子の様子から油煙の類と考えられる。下地の上には赤色顔料を混ぜた漆層（漆層 1）が 20 ～ 30μm の厚さで認められる。赤色顔料は、X 線回折結果から水銀朱と判断される。漆層 1 の下部、下地と接する部分に赤色顔料の認められない部分が 5μm 以下の幅で認められるため、下地と漆層 1 の間に混和物の無い漆が薄く塗られている可能性がある。

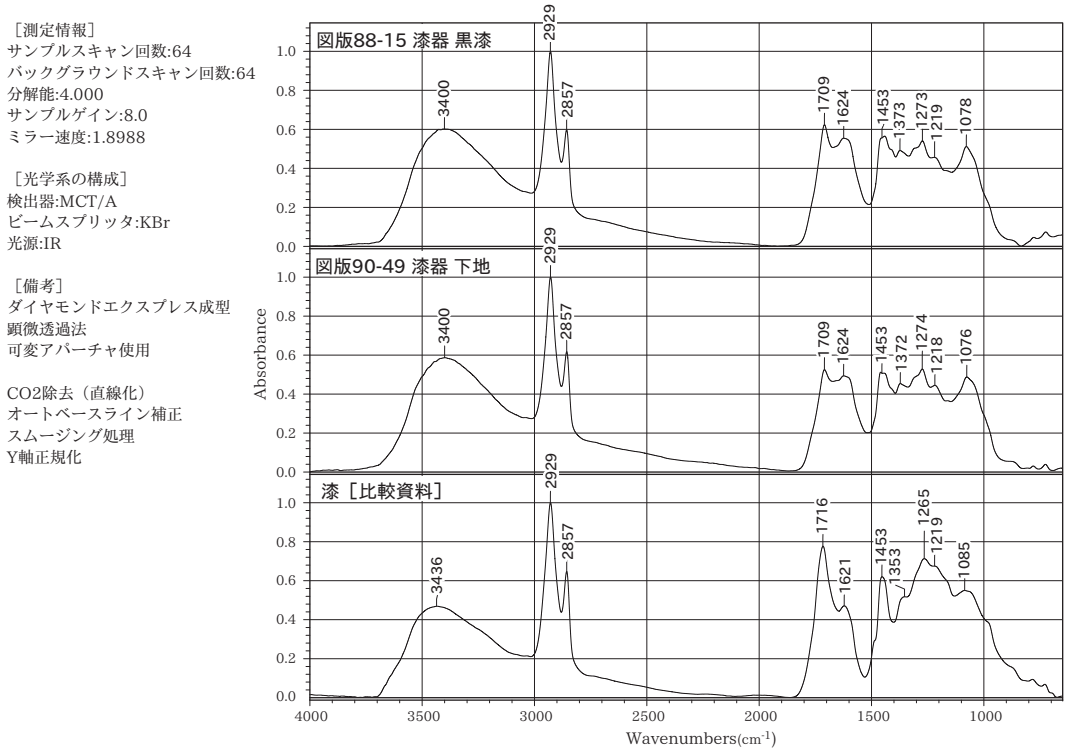
2）X 線回折分析

X 線回折図を第 32 図に示す。図中上段に試料の X 線回折図、下段に検出された鉱物の回折パターンを掲げている。測定の結果、図版 88–15 および 8H2 グリッド・SR1–3 層の赤漆では水銀朱（cinnabar）、11C グリッド・XIII層の赤漆については赤鉄鉱（hematite）が検出された。

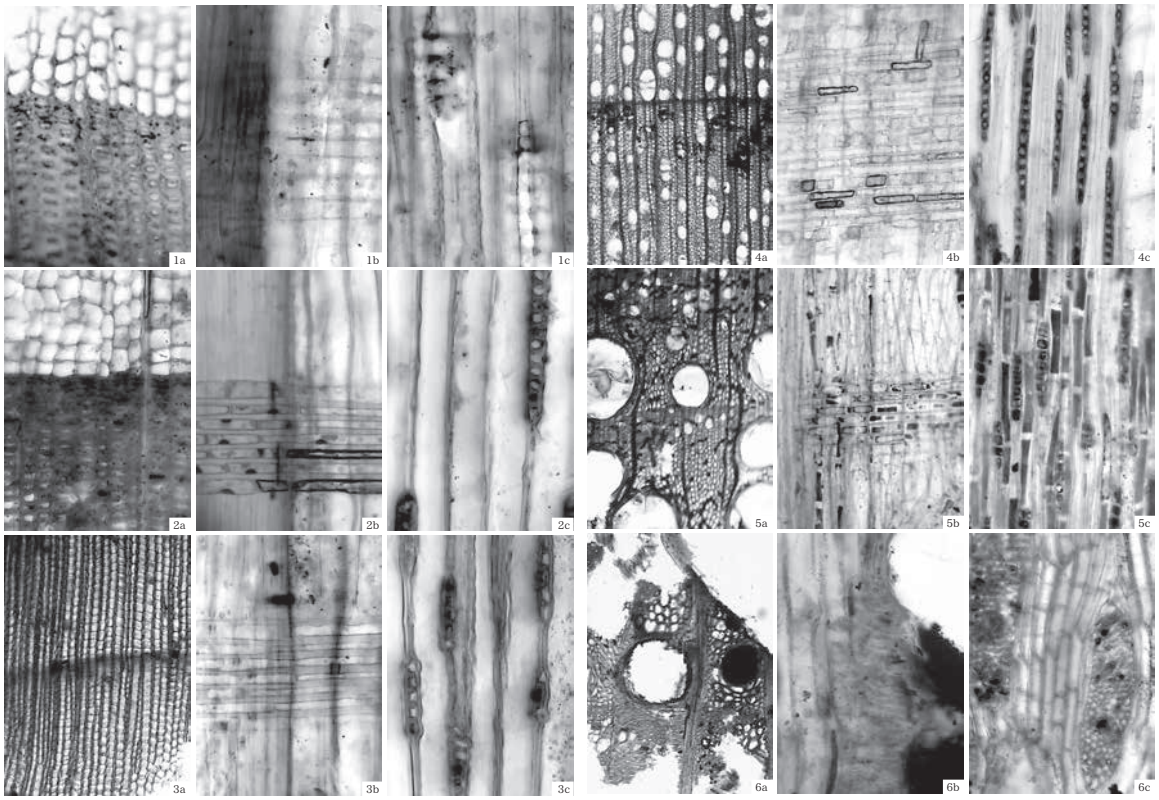
3）赤外分光分析

FT–IR スペクトルを第 33 図に示す。なお、図中には比較試料として供した漆の実測スペクトルを併記した。

図版 88–15 の黒漆および図版 90–49 の下地の塗膜物質は同様の赤外線吸収特性を示し、3400cm^{-1} 付近の幅広い吸収帯のほか、2930cm^{-1}、2860cm^{-1}、1710cm^{-1}、1620cm^{-1}、1450cm^{-1}、1270cm^{-1} 付

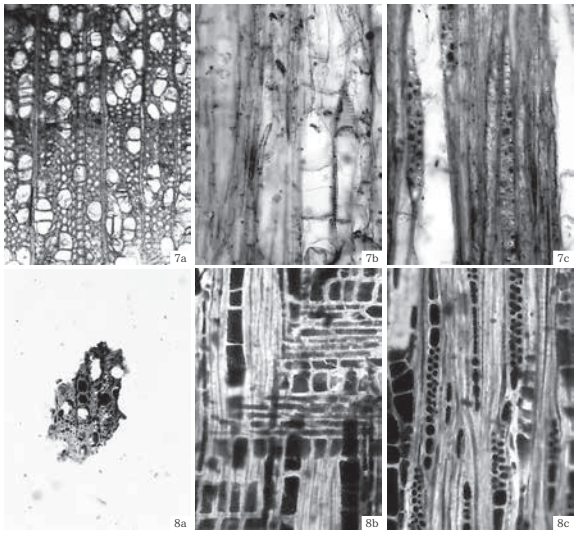


第 33 図　FT-IR スペクトル



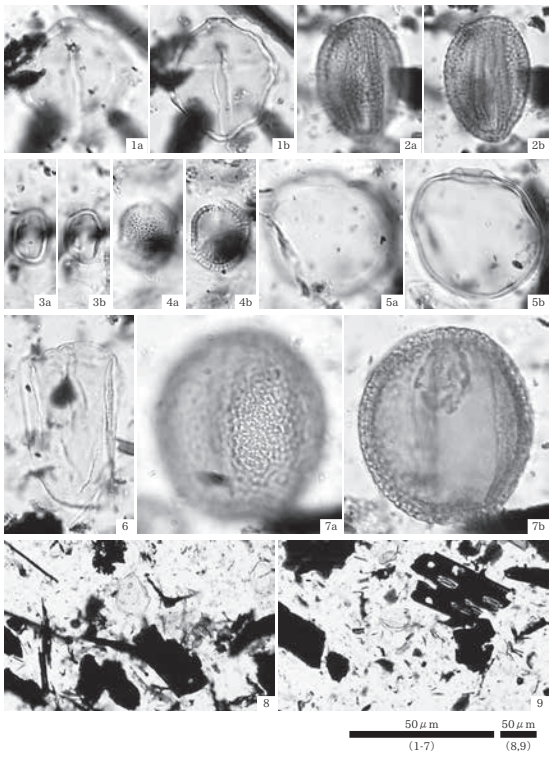
1 マツ属複維管束亜属（11c・XIII層）
2 スギ（図版88-18）
3 アスナロ（図版85-16；側板）　a:木口,b:柾目,c:板目

4 ヤナギ属（図版90-42）
5 クリ（図版89-37）
6 ケヤキ（図版90-49）　a:木口,b:柾目,c:板目



7 モクレン属（図版87-14）
8 イスノキ（図版79-201）　a:木口,b:柾目,c:板目

第 34 図　2011 年度 木材



1 サワグルミ属（SK853；最下層）　2 ソバ属（SK853；最下層）
3 クリ属（SK853；最下層）　4 アブラナ科（SK853；最下層）
5 イネ科（SK853；最下層）　6 カヤツリグサ科（SK853；最下層）
7 ハス属（SK853；最下層）　8 プレパラート内の状況（SK853；最下層）
9 プレパラート内の状況（SK853；最下層）

第 35 図　花粉化石

近の強い吸収帯および 1370cm^{-1}、1220cm^{-1}、1080cm^{-1} 付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、3400cm^{-1} 付近の吸収帯は O–H 基の伸縮振動、2930cm^{-1}、2860cm^{-1} 付近の吸収帯はメチル基およびメチレン基の C–H 伸縮振動、1710cm^{-1} 付近は C=O 伸縮振動、1620cm^{-1} 付近は C=O 伸縮振動または C=C 伸縮振動、1450cm^{-1}、1270cm^{-1} 付近はメチル基の対称変角振動や C–O 伸縮振動あるいは O–H 変角振動と予想される。

D　考　　察

88–15 は、内・外面ともに黒色を呈し、赤漆で紋様が描かれている。図版 90–49 も内・外面とも黒色で、外面にのみ赤漆の紋様が認められる。木地はいずれもケヤキであり、下地に油煙の類が利用されている点が共通する。一方、下地は、図版 88–15 が厚い部分で 100μm 以上となる一方、図版 90–49 は厚い部分でも 20μm 以下であり、2 試料間で厚さが異なる。なお、図版 90–49 の下地の赤外分光分析では、漆と考えられるスペクトルが得られたことから、油煙の類を混和した漆を下地としたと考えられる。

次に、図版 85–15・図版 90–49 の黒色部分の漆塗りをみると、図版 85–15 が混和物の無い漆が 1 層塗布される一方、図版 90–49 では 4～5 層の漆層が確認でき、塗りの回数が異なる。なお、図版 90–49 の漆塗りは、2009 年度の図版 74–131 の漆器椀に類似しており、木地の樹種がケヤキである点も共通する。8H2 グリッド・SR1–3 層の漆器も木地にケヤキが確認されたが、内面が赤色を呈する。なお、2009 年度は内面が赤色を呈する椀や皿が認められたが、ケヤキは全て皿であり、椀にはクリやモクレン属が確認されている。2011 年度の試料をみると、下地の上に赤漆が塗られており、比較的簡単な塗りである。

また、図版 85–15 と 8H2 グリッド・SR1–3 層の赤色顔料について X 線回折分析を実施した結果、いずれも水銀朱であった。水銀朱は、2009 年度分析の容器の赤漆にも確認されているが、新潟県内に水銀朱を大量に産出する鉱床は知られていないため、その産出地として西日本地域が推定された。顔料として水銀朱のみが入手されたのか、漆器として入手されたものであるかは、漆器の考古学的な所見も含めた検討が必要である。

11C グリッド・Ⅻ層は、全体形状が不明の破片である。上記した試料と樹種（マツ属複維管束亜属）が異なることや材質的特徴、さらに 2009 年度の分析では柾目板状の蓋（図版 66–20）に針葉樹のスギやヒノキ科が確認されていることなどから、容器以外の器種である可能性もある。本試料は、下地の上に 3 層の漆層が認められ、比較的丁寧な塗りが確認された。また、表面の赤漆は、X 線回折結果からベンガラと判断され、上記した漆器の顔料（水銀朱）と異なるという特徴も指摘できる。

11　花　粉　分　析（第 35 図、第 19 表）

A　試　　料

試料は、屋敷地内で検出された土坑（8H17 グリッド SK853・最下層）から採取された土壌 1 点である。SK853 からは、次の 12 項で分析に供した炭化米が多量出土しているほか、蓮の花芯などが確認されている。試料の観察では、植物遺体が多く混じる黒色の砂混じりシルトからなる。

B　分　析　方　法

試料約 10g について、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mm の篩

による篩別、重液（臭化亜鉛, 比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9: 濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、［Erdman 1952・1957、Faegri and Iversen 1989］などの花粉形態に関する文献や、［島倉 1973、中村 1980、藤木・小澤 2007］などの邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表に示す。

C　結　　果

結果を第 19 表、第 35 図に示す。第 35 図に示したように、分析残渣の多くが微粒炭であり、花粉化石の産出は少ない。また、産出した花粉化石は、保存状態の良いものと良いものが混在するが、概して悪い。

花粉化石の検出状況は、総花粉・胞子数の 95%以上が草本花粉であり、その中でもイネ科が大部分を占める。また、イネ科花粉の中には、イネ属の形態を有するものも多く含まれ、イネ属と判断できた花粉の割合はイネ科全体の 50.3%であった。なお、花粉外膜が溶解するなど保存状態が悪くイネ科とした個体の中にもイネ属と同程度の粒径を持つものがあり、これらを含めると 8 割近くがイネ属の可能性がある。

この他の種類は、木本花粉ではサワグルミ属、ハンノキ属、クリ属、草本花粉ではカヤツリグサ科、サナエタデ節 – ウナギツカミ節、ソバ属、ハス属、カラマツソウ属、アブラナ科、ヨモギ属などが、わずかに検出される。

分　類　群	8H17 SK853 最下層
木本花粉	
サワグルミ属	1
ハンノキ属	1
クリ属	1
草本花粉	
イネ科	431
カヤツリグサ科	4
サナエタデ節－ウナギツカミ節	1
ソバ属	1
ハス属	1
カラマツソウ属	1
アブラナ科	1
ヨモギ属	1
不明花粉	
不明花粉	1
シダ類胞子	
シダ類胞子	12
合　計	
木本花粉	3
草本花粉	441
不明花粉	1
シダ類胞子	12
合計 (不明を除く)	456

第 19 表　SK853 花粉分析結果

D　考　　察

SK853 最下層の花粉分析の結果、花粉化石の産出は悪かったが、栽培種のイネ属を含むイネ科が多産するという特徴が認められた。このような状況から、分析に供された土壌の一部を水洗した結果、細かな粗朶に混じって多量の稲籾の破片が検出された。イネは、花の構造上、稲籾内に多くの花が残留することから、検出されたイネ科（イネ属）花粉は遺構内に埋積した稲籾の中に残留していたものに由来する可能性が高い。

イネ科以外では、サワグルミ属、ハンノキ属、クリ属などの木本類や、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ソバ属、ハス属、カラマツソウ属、アブラナ科、ヨモギ属などの草本類の花粉がわずかに検出された。サワグルミ属やハンノキ属は、河道沿いや河畔、湿地に生育する種類であり、後述する水田畦畔の粗朶に確認されたヤナギ属と共に周辺の低地部に生育していた可能性がある。また、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節には湿地に生育する種類が含まれる。ヨモギ属は、路傍などの明るい場所に生育することから周囲の草地環境に由来すると考えられる。ソバ属は栽培植物であることから、周辺域での栽培が想定される。ハス属は、インド原産で日本には中国経由で渡来したと考えられているが、地質時代の地層中からの種実の発見によりかつては生育していたことが知られており、自生の有無については意見が分かれている［伊藤 1996］。ハス属は、仏教と関係が深く、花を観賞用、実を食用として栽培される水生植物であり、遺構の時期を考慮すると自生よりも栽培に由来する可能性がある。

12　炭化したイネ種子のDNA鑑定（第36～40図、第20～27表）

A　は　じ　め　に

本遺跡の屋敷地から炭化した種子と蓮の花芯がまとまって出土した。遺跡は信濃川が形成した沖積地に立地しており、鎌倉時代から室町時代（13世紀後半～14世紀）を主体とする遺跡である。なお、この屋敷地から「しろわせ さとう三郎」と書かれた種子札（第二号木簡）が出土した。これまで「わせ」の記載が見られる出土木簡は8世紀の福岡県高畑廃寺、9～10世紀の山形県上高田遺跡、12世紀の大阪府上清滝遺跡から出土している［平川1999・2003］。「しろわせ」の記載のある木簡は福島県矢玉遺跡から出土した木簡に「白和世」の記載がみとめられた（第20表）。また、書物における「わせ」については8世紀の万葉集10巻に「早稲」の表記があり、これが初出である。第21表に示すとおり東北から九州地方まで各地の農書や覚書など20を越える書物に「わせ」「白わせ」「赤わせ」の記載が認められた［古島1954、星1973、嵐1974、長尾1981、安田1986、川崎1990］。さらに、「越後、佐渡、水稲品種考」［風間、2000］によると、現在の新潟県の江戸時代以降の水稲品種の記載では天和元年（1681年）魚沼地域で「白わせ」の記載が見とめられ、明治期まで「白わせ」「白早稲」「しろわせ」の表記が魚沼、柏崎、頸城、蒲原、佐渡まで広範囲に渡って見られ、継続的に栽培されていた代表的な品種である。したがって、「わせ」はもっとも古い呼称であり、今日までその呼称が継続している貴重なイネ系統である。このため、DNA分析によって出土した種子の遺伝的特性および木簡に記

記載品種名	時　期	遺跡名	出土場所
和早	9世紀～10世紀	上高田遺跡	山形県遊佐町
和佐	8世紀前半～10世紀	高畑廃寺	福岡県福岡市
はせ	12世紀（1187年）	上清滝遺跡	大阪府四条畷市
白和世	8世紀後半～9世紀半ば	矢玉遺跡	福島県会津若松市
女和早	9世紀半ば	荒田目条里遺跡	福島県いわき市

第20表　出土木簡の時期と遺跡名

試料名	時期	表記品種名	農書・覚書名	栽培地域	現在の県名
Wase	739年	早稲	万葉集　巻10	―	―
	1564年	早稲，はせ	清良記－親民鑑月集	伊予国宇和郡	愛媛
	1722年	早稲	農譚藪	関東～東海道	―
	1761年	早稲	東北凶作に関する史的調査	米沢	山形
	1871年	早稲	農業自得附録	下野国	栃木
Shiro-wase	1716－35年	白わせ	享保書上	陸中	岩手
	1716－35年	白ワセ	御領内産物留	常陸国	茨城
	1735年	白はせ	八戸弾正知行所産物有物改帳	閉伊郡横田村	岩手
	1735－37年	白ワセ，白早稲	両国本草全	周防	山口
	1716－41年	白わせ	伊豆国産物帳	伊豆国田方郡	静岡
	1764－80年	白わせ	下伊沢大肝煎雑記	伊達藩下伊沢郡	岩手
	1748年	白早稲	駿河国駿東郡茶畑村柏木家文書・籾種帳	駿河国駿東郡茶畑村	静岡
	1755年	白早稲	地方名目	岩代・磐城	福島・宮城南部
	1866年	白早稲	福島県各村明細帳	会津藩	福島
Aka-wase	1707年	赤早稲	耕稼春秋	石川郡	石川
	1708年	あか早稲	宝永5年3月　遠州豊田郡前野村差出帳	遠江国豊田郡前野村	静岡
	1716－35年	赤わせ	享保書上	陸中	岩手
	1735年	赤わせ	八戸弾正知行所産物有物改帳	閉伊郡横田村	岩手
	1735年	赤ワセ	加賀国産物志	加賀国	石川
	1756年	赤わせ	宝暦6年3月　豊田郡地田村御差出帳	遠江国豊田郡池田村	静岡
	1785年	赤わせ	天明5年3月　明細書上帳	遠江国豊田郡池田村	静岡
	1716－41年	赤わせ	伊豆国産物帳	伊豆国田方郡	静岡
	1844年	赤早稲	老蟻動銭柱	秋田藩	秋田
	1840－1854年	赤わせ	佐賀県の稲作坪刈帳	松浦郡厳木村	佐賀

※古島（1954）、星（1973）、嵐（1974）、長尾（1981）、安田（1986）、川崎（1990）より作成

第21表　試料名の記載された農書と年代、栽培地域

載された系統と遺物との遺伝的関係性を検討した。

B　試料・分析方法

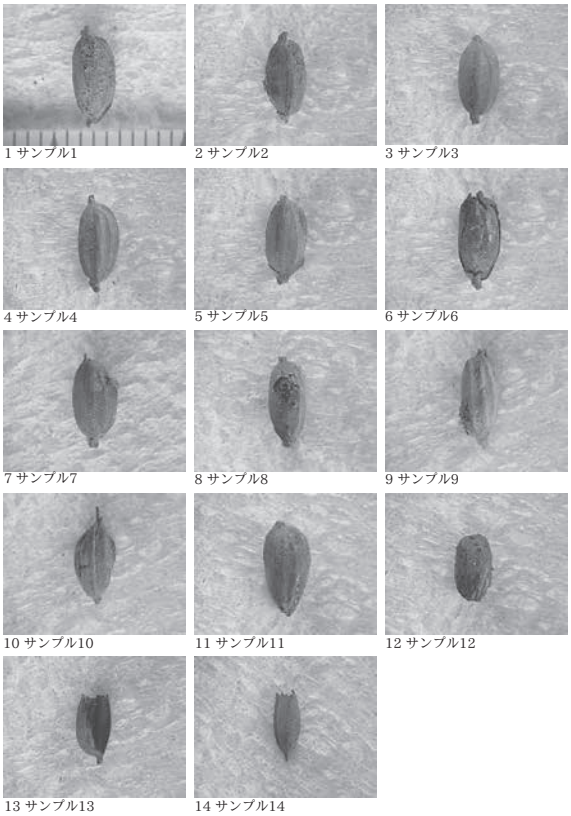
試料は、中世の屋敷地で検出した土坑（SK853）から出土した炭化米 14 点である。分析では、個々を試料として扱うため、便宜的にサンプル 1 ～ 14 として名称を付し、分析に供する炭化米について、顕微鏡観察を行った（第 36 図）。出土遺物の場合、表面に土壌菌が付着しているため、サンプル 1 ～ 8 に 70%エタノールを噴霧し、表面を洗浄した。これまでの例から、出土状況や出土後の経過期間、年代などにより抽出量が違うため、2 通りの抽出を試みた。サンプル 1 ～ 4 を下記の①の方法により、サンプル 5 ～ 8 を②の方法により全 DNA を抽出した。2 通りの DNA の抽出方法は下記の方法によった。なお、いずれの場合もコンタミネーションの可能性を確認するため、滅菌蒸留水をネガティブ・コントロールとした。

① NaOH を用いたアルカリ抽出法［青木ほか 1999］を一部改変したアルカリ抽出法によって抽出。

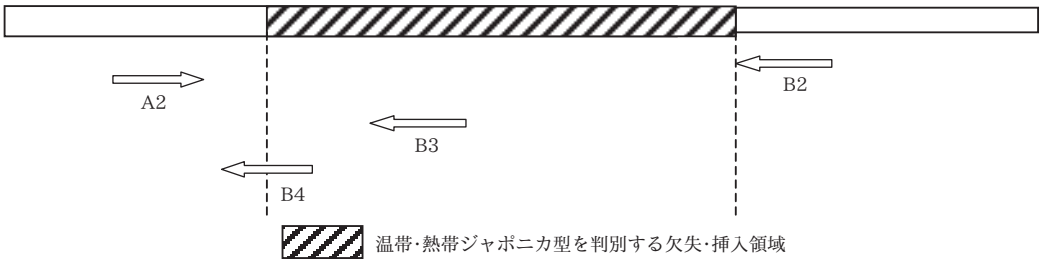
② DNeasy Plant Mini（キアゲン）キットを用いてプロトコルにしたがって抽出。

抽出した DNA をテンプレートとして、遺物用に開発した DJ6 プライマーセット・A2/B2、A2/B3、A2/B4 の 3 セット（第 23 表、第 37 図）により PCR 増幅を行なった。

この 3 プライマーは温帯ジャポニカ型と熱帯



第 36 図　分析試料の外観写真



第 37 図　第Ⅵ染色体上のプライマーの位置（第 22 表参照）

プライマー名	塩基配列	長さ (bp)
DJ6・A2	GTAGCAGTGG ACGAGTCAGA ACGA	24
DJ6・B2	TGTTTTCTCA TTGCCAAAGC TATATAG	27
DJ6・B3	TGTGATTTTC CGTTTTCCGT G	21
DJ6・B4	AGGTTCCTAC GGAGTACAAT AC	22

G：熱帯ジャポニカの場合、配列は G（グアニン）, 温帯ジャポニカの場合 A（アデニン）

第 22 表　温帯ジャポニカ型と熱帯ジャポニカ型を判別するプライマーリスト

プライマーセット	温帯ジャポニカ型	熱帯ジャポニカ型	アニーリング温度（℃）
A2/B2	+	+	56
A2/B3	−	+	56
A2/B4	−	+	61

+：DNA バンドが増幅された場合，−：DNA バンドが増幅されない場合

第 23 表　プライマーの温帯・熱帯ジャポニカ型の増幅とアニーリング温度

ジャポニカ型を判別するために第 6 染色体に座乗している 216 塩基対の欠失領域を用いて、DNA が断片化した遺物用に開発されたものである［花森 2011］。これまではランダムプライマーを用いたため、PCR 増幅後、さらにサザンブロッティング分析を必要としたが、この開発によってこの分析は不要となった。したがって、土壌菌や浮遊菌などのコンタミネーションを排除し、少量の DNA を用いて明確に増幅可能となった。したがって、プライマーセット A2/B2 の場合、温帯ジャポニカ型と熱帯ジャポニカ型の両方の DNA 断片が増幅される（第 23 表）。

しかし、この場合、熱帯ジャポニカ型の DNA 断片は 300 塩基対を超えるため、遺物のような DNA が断片化しているサンプルでは熱帯ジャポニカ型の断片は増幅されにくい。そこで、DJ6 プライマーの B3 と B4 は温帯ジャポニカ型の欠失領域にプライマーを作成し、熱帯ジャポニカ型の DNA 断片のみ増幅するものとした。この作出プライマーを用いたプライマーセット A2/B3 と A2/B4 の場合、熱帯ジャポニカ型のみ増幅される。これら 2 セットの DNA 断片は温帯ジャポニカ型を増幅するプライマーセット A2/B2 の DNA 断片とほぼ同じ長さとしたため、DNA が断片化した遺物の場合でも温帯ジャポニカ型と熱帯ジャポニカ型の検出が同等となり、当時の比率がより正確に推定可能となった。

また、同屋敷地より出土した木簡に記載の「しろわせ」より在来系統に「わせ」を含む系統を調査したところ、対象系統として、呼称が「わせ」の千葉に由来する 1 系統と奈良の 2 系統、「しろわせ」の石川と和歌山に由来する各 1 系統、「あかわせ」の富山と和歌山に由来する各 1 系統、あわせ 7 系統（第 24 表）を用い、PCR 増幅を試みた。

試料番号	系統番号 *	品種名	採種地
Wase1	J477	早稲	千葉
Wase2	J482	わせ	奈良
Wase3	J483	早生	奈良
Shiro-wase1	J496	白早生	石川
Shiro-wase2	J401	白早生	和歌山
Aka-wase1	J494	赤早生	富山
Aka-wase2	J498	赤早生	和歌山

*（独）総合地球環境学研究所の Oryza Data Base の系統番号

第 24 表　在来系統の DNA 解析の結果

プライマーは SSR プライマー・RM1，RM224，RM253、OSR19、OSR22 の 5 プライマー（第 25 表）、SNP プライマー・6P1、17P1、26P1 の 3 プライマー、STS プライマー・29P1、33P1、34P1 の 3 プライマー、計 11 プライマーを用いた（第 26 表）。

いずれの PCR 増幅の場合も Takara EX taq（タカラ社製）を用い、DJ6 のプライマーセットの反応条件は 94℃・30 秒、55℃・30 秒、72℃・1 分を 1 サイクルとして、35 サイクル行なった。SNP・STS・

プライマー	Forward Primer	Reverse Primer	反復配列
RM1	GCGAAAACACAATGCAAAAA	GCGTTGGTGGACCTGAC	(GA) n
RM224	ATCGATCGATCTTCACGAGG	TGCTATAAAAGGCGTTCGGG	(CT) n
RM253	TCCTTCAAGAGTGCAAAACC	GCATTGTCATGTCGAAGCC	(CT) n
OSR19	CTTTGTCTATCTCAAGACAC	TTGCAGATGTTCTTCCTGATG	(CT) n
OSR22	CTGAGTCTCCTGTCCTCA TC	CTTGAATCTCTGCACTGCAC	(CT) n

第 25 表　SSR プライマーの配列

	プライマー名	染色体上の位置 *	DNA 断片長	対立遺伝子数	アニーリング温度
SNP **	6P1	11	131	2	60
	17P1	8	254	0	60
	26P1	1	201	2	60
STS **	29P1	−	148	2	60
	33P1	−	260	2	60
	34P1	6	438	2	60
SSR	RM1	1	82-93	5	55
	RM224	11	95-98	2	55
	RM253	6	85-112	6	55
	OSR19	6	152-160	4	55
	OSR22	7	112-130	4	55

*：日本晴の場合の染色体上の位置　**：特許第 4344818 号の SNP および STS プライマー　−：日本晴では増幅しない DNA 断片

第 26 表　各プライマーで増幅される領域・長さ・対立遺伝子数

SSR プライマーの反応条件は 94℃・30 秒、それぞれのアニーリング温度・50 秒、72℃・1 分を 1 サイクルとして、30 サイクル行なった。

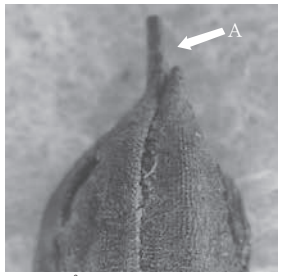
なお、遺物では DNA が断片化しているため、1 回の PCR では可視化が可能なほどの断片が増幅されず、1 回目の反応液をテンプレートとして同様のプライマーセットを用いて 2 回目の PCR 増幅を行なった。この PCR 産物を 8%ポリアクリルアミドゲルで 200V、50 分間電気泳動した。その後、このゲルをエチジウムブロマイドで染色し、DNA 断片の位置を確認した。PCR 増幅した DNA 断片長の確認には、サイズマーカーとして Takara 20bp Ladder を用いた。

C　結　　果

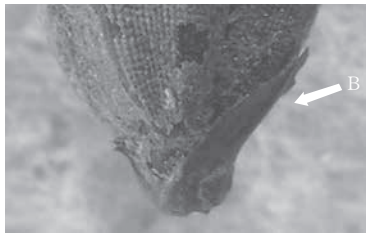
各サンプルの顕微鏡観察の結果、サンプル 1 ～ 11 は籾殻を有しており、サンプル 12 は玄米の炭化した状態であり、サンプル 13 と 14 は籾殻のみであった（第 38 図）。サンプルそれぞれよりイネに特徴的な溝や籾の先端にのびる芒（ノゲ、ノギ）（第 38 図の矢印 A）、幹側についていた頴（第 38 図の矢印 B）が確認され、いずれもイネ種子と判断された。

2 つの方法により抽出を行い、①と②の方法で抽出した DNA を用いて、温帯ジャポニカ型と熱帯ジャポニカ型を判別するプライマーセットによってネスチド PCR を行なった結果、一部に DNA 断片の増幅が認められた。3 反復実験を行なった一部の結果を第 41 図に示す。図中の約 310 塩基対付近の矢印 A は熱帯ジャポニカ型の DNA 断片、約 100 塩基対付近の矢印 B が温帯ジャポニカ型の DNA 断片を示す。なお、断片長の推定には図中 M の Takara 20bp Ladder を用いた。

①の抽出方法では 3 回の実験の結果、サンプル 4 の DJ プライマーセット A2/B2 で行なった PCR2 回目に温帯ジャポニカ型を示すかすかなバンドが認められた（第 27 表）。②の方法では 4 サンプルすべてに温帯ジャポニカ型を示す DNA 断片が検出された。DJ6 プラ

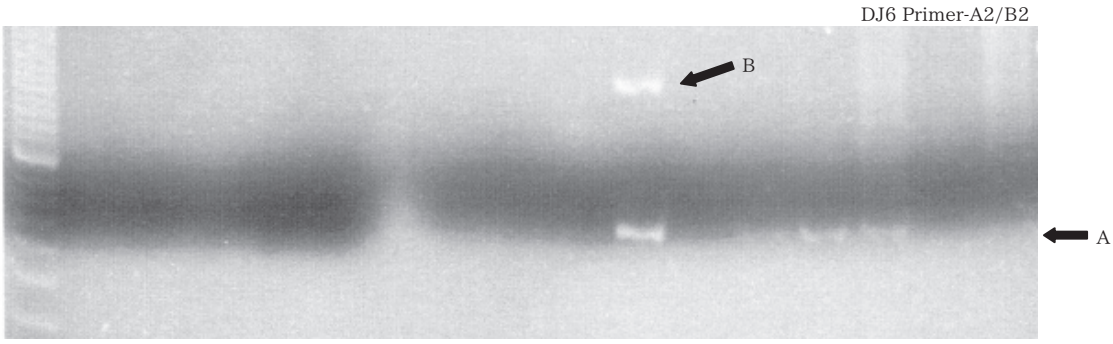


1 サンプル10



2 サンプル8

第 38 図　サンプル表面画像



M：100bp DNA Ladder
1 ：Sample 1 by the first PCR
1'：Sample 1 by the second PCR
2 ：Sample 2 by the first PCR
2'：Sample 2 by the second PCR
3 ：Sample 3 by the first PCR
3'：Sample 3 by the second PCR
4 ：Sample 4 by the first PCR
4'：Sample 4 by the second PCR
5 ：Sample 5 by the first PCR
5'：Sample 5 by the first PCR
6 ：Sample 6 by the first PCR
6'：Sample 6 by the second PCR
7 ：Sample 7 by the first PCR
7'：Sample 7 by the second PCR
8 ：Sample 8 by the first PCR
8'：Sample 8 by the second PCR

第 39 図　温帯ジャポニカ型と熱帯ジャポニカ型の DNA 増幅断片の泳動写真

イマーセット A2/B3 と A2/B4 を用いた PCR 増幅の結果、サンプル５と８に熱帯ジャポニカ型を示す断片が検出された。したがって、サンプル５と８は温帯ジャポニカ型と熱帯ジャポニカ型の交雑種であった。これらの結果から、８サンプルのうち温帯ジャポニカ型は３サンプル、交雑種は２サンプル、不明が３サンプルであった（第 27 表）。

出土遺物と「しろわせ」との関係性については、系統を判別する 11 領域の増幅が揃わず、現段階では判別に到っていない。

サンプル番号	Primer set			Tm/Tr *
	A2/B2	A2/B3	A2/B4	
1	−	−	−	−
2	−	−	−	−
3	−	−	−	−
4	Tm	−	−	Tm
5	Tm/Tr	Tr	Tr	Tm/Tr
6	Tm	−	−	Tm
7	Tm	−	−	Tm
8	Tm	Tr	Tr	Tm/Tr

−；DNA バンドの増幅が検出されないもの
*；Tr： 熱帯ジャポニカ型，Tm： 温帯ジャポニカ型

第 27 表　サンプルの DNA 断片の増幅結果

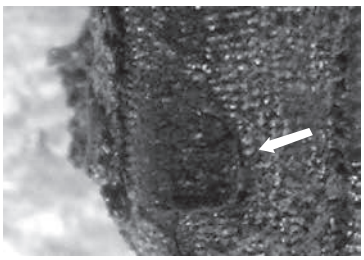
D　考　　察

SK853 から出土した炭化米のうち、分析に供したサンプル１～８では①の抽出方法による検出はサンプル４のみ、②の抽出方法では４サンプルすべてに増幅が認められたことから、②の抽出方法が有効であったと考えられる。また、PCR1 回目ではサンプル７（第 39 図のレーン７）のみ DNA の増幅断片が確認されたが、PCR2 回目では３回の実験の結果、そのほかのプライマーセットでも②すべてに増幅断片が検出された。

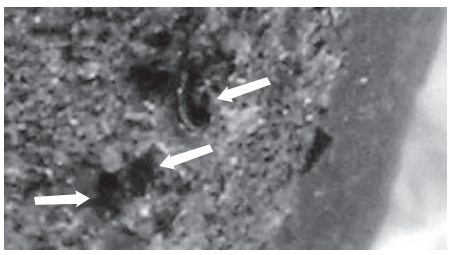
第６染色体上の DNA 領域の PCR 増幅の結果、温帯ジャポニカ型と熱帯ジャポニカ型の交雑種の存在が明確となった。これまで、新潟県では弥生時代の出土遺物の分析が行なわれている[佐藤・花森 2009]が、今回の中世における分析ができたことは近代や現代につながる貴重な資料となった。今後は分析数や遺跡数を増やして、当時の温帯ジャポニカ型と交雑種の比率や熱帯ジャポニカ型の存在の有無が確認されれば、中世の新潟におけるイネの変遷を追うことが可能と考えられる。

なお、出土遺物と現在まで残っている「しろわせ」の在来系統の関係性については、現段階では増幅結果が揃っていないため言及できない。出土遺物は 200 塩基対を超える DNA 断片は増幅しにくく、今回のサンプルの一部には第 40 図のとおり熱を受けた形跡の穴が認められた。

増幅されなかったサンプルは抽出方法以外に経年変化と被熱で DNA が断片化して増幅されなかった可能性がある。江戸時代初期の「清良記 – 親民鑑月集 –」［入交 1970］に記載されている 96 系統のうち早稲は 12 系統ある。また、「会津農書」［飯沼 1976］でも早稲、中稲、晩稲と区別して栽培していたと表記がある。これまで、木簡と今回のような良好な状態のイネ種子が同時に出土した例はなく、これらの木簡や農書に記載されている「わせ」との関係性が明らかとなれば、古代から現代への変遷を推定する極めて貴重な分析となる。今後は差異のある PCR 増幅の領域を短くすることで、断片化された DNA の特定領域の増幅を試みたい。



1 サンプル2



2 サンプル12

第 40 図　熱を受けて穴の開いた表面

引用・参考文献

青木千佳・西村隆雄・安井修二ほか　1999 「マルチビーズ ショッカーによるイネ生葉からの DNA および RNA 抽出法の改良」『育種学研究』第 1 巻　別冊 2 号　18p

嵐　嘉一　1974　『文献・出土品などによる考察 . 日本赤米考』雄山閣　11–88p

石川茂雄　1994　『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会 328p

伊東隆夫　1995　『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ木材研究・資料 31』 京都大学木質科学研究所　81-181p

伊東隆夫　1996　『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ木材研究・資料 32』 京都大学木質科学研究所　66-176p

伊東隆夫　1997　『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ木材研究・資料 33』 京都大学木質科学研究所　83-201p

伊東隆夫　1998　『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ木材研究・資料 34』 京都大学木質科学研究所 30-166p

伊東隆夫　1999　『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ木材研究・資料 35』 京都大学木質科学研究所 47-216p

飯沼二郎　1976　『近世農書に学ぶ』 日本放送協会　65–68p

伊藤元己　1996　『ハス』週刊朝日百科　植物の世界 97　朝日新聞社　18–21p

入交好脩　1970　『清良記　－親民鑑月集－』 近藤出版社　26–29p

植田弥生　2006　「出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 157 集 住吉遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　75-82p

緒方　健　1985　『南洋材の識別』 社団法人日本木材加工技術協会　206p

風間謙治　2000　『越後・佐渡　水稲品種考』

川崎文昭　1990　「近世駿遠豆の稲の品種について」『静岡県史研究』第六号　静岡県　67–90p

貴島恒夫・嶋倉巳三郎・林　昭三　1981 「正倉院宝物の木材材質調査報告」『正倉院年報 3』 1-17p

近藤錬三　2004　『植物ケイ酸体研究』ペドロジスト 48・46-64p

（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　2009 「新潟市小坂居付遺跡現地説明会」資料　4p

（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　2010 「新潟市小坂居付遺跡現地説明会」資料　2p

佐藤洋一郎・花森功仁子　2009 「出土した炭化米」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 200 集 西郷遺跡・大蔵遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　163–167p

島倉巳三郎　1973　「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第 5 集　60p

島地　謙　1992　「明石城武家屋敷跡出土木製品の樹種」『明石市　明石城武家屋敷跡　山陽電鉄連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第 109 冊　兵庫県教育委員会　103-119p

島地　謙・伊東隆夫　1982 『図説木材組織』 地球社　176p

須藤彰司　1998　『新訂増補 南洋材』 地球社　543p

杉山真二　2000　「植物珪酸体（プラント・オパール）」 辻　誠一郎（編著）『考古学と自然科学 3　考古学と植物学』 同成社　189-213p

鈴木三男・小川とみ・能城修一　2004 「青田遺跡出土木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 133 集 青田遺跡 関連諸科学・写真図版編』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　53-70p

長尾重喬　1981　「農稼録」『日本農業全集』第 23 巻　農山漁村文化協会　46–47p

中村　純　1980　「日本産花粉の標徴 Ⅰ Ⅱ（図版）」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第 12、13 集　91p

中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会　642p

能城修一・三村昌史　2003 「新宿区行元寺跡より出土した木製品の樹種」『東京都新宿区　行元寺跡（仮称） 藤和神楽坂五丁目プロジェクト計画用地に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館　262-270p

花森功仁子・石川智士・齋藤　寛・岡田善裕・田淵宏朗・望月峰子　2011 「古代から近世におけるイネの品種名称と遺伝解析の比較研究」『DNA 多型』Vol.19　298–307p

林　昭三　1991　『日本産木材　顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所

パリノ・サーヴェイ（株） 2003 「木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第126集 浦廻遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 45-51p
パリノ・サーヴェイ（株） 2006 「第Ⅵ章自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第166集 土居下遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ（株） 2008 「出土木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第189集 寺前遺跡 本文編』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 142-160p
パリノ・サーヴェイ（株） 2009 「樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第192集 大館跡Ⅱ・東興屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 30-36p
平川　南　1999 「新発見の「種子札」と古代の稲作」『国史学』第169号 国史学会 1–56p
平川　南　2003 「種子札と古代の稲作　木簡と農業」『古代地方木簡の研究』 吉川弘文館 433–475p
藤木利之・小澤智生 2007 『琉球列島産植物花粉図鑑』 アクアコーラル企画 155p
古島敏雄　1954 『稲の品種　日本農業技術史』 時潮社 631–645p
星吉右衛門 1973 「星家所蔵種子帳稲刈帳」『日本常民生活資料叢書』第5巻 395–465p
松葉礼子　2001 「新保遺跡出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集 新保遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 78-82p
三村昌史　2004 「天龍寺跡出土木製品の樹種同定」『東京都新宿区　天龍寺跡』新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館 70-80p
安田　健　1986 「享保・元文諸国産物帳集成」 科学書院 875–1255p
山田富貴子 1986 「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき』第1集 化学同人 1–18p
四柳嘉章　2006 『漆Ⅰ』ものと人間の文化史 131-I 法政大学出版局 252p
Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms （An introduction to palynology. I）.Almqvist&Wiksells,539p.
Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta（Illustrations）（An Introduction to Palynology. II），147p.
Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press，328p.
Nakamura, I.,1990,New DNA Fingerprinting Procedure. Amplified Fragment Length Polymorphism of Hazy Association （ALPHA）. Annu. Rep. Natl. Inst. Genet. 41.105–106.
Nakamura, I. and Y.I.Sato,1991,Amplification of DNA fragments Isolated from a Single Seed of Ancient Rice（AD800） by Polymerase Chain Reaction. Chinese J.Rice Sci.5.175–179
Nakamura, I., N.kameya, Y.Kato, S.Yamanaka, H.Jomori and Y.I.Sato,1997,A proposal for identifying the short ID sequence which addresses the plastid subtype of higher plants. Breed.Sci.47.385–388
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編） 2006 『針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）海青社 70p［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編） 1998 『広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修） 海青社 122p ［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］

第Ⅶ章　ま　と　め

1　遺　　構

本遺跡は、多様な遺構が構築された「屋敷地」と水田耕作が営まれた「水田域」で構成されている。以下、それぞれの様相についてまとめ、そこで得られた課題についても明らかにしておきたい。

A　屋敷地について

ここでは「屋敷地」で調査した３面を古いものから順に辿り、その様相と変遷過程を整理する。その上で、「屋敷地」の性格についても若干の検討を試みる。その後、項を改めて「水田域」との相関関係についてもまとめてみたい。

1）遺構の様相と変遷

『SR2・XⅦ層遺構』は、自然流路と考えられる SR2 の底面及び地山であるXⅦ層上面で検出したもので、もっとも古い段階の遺構群である。

遺構は検出した種別・数ともに少なく、土地利用状況は低調であったと言える。しかし、遺構数の少なさに加え、本遺跡では唯一となる骨の出土（SX676）もあり、そもそもの土地利用目的が上位２面とは異なっていた可能性がある。

また、間隔を密に打ち込んだ杭列である SX280 は、「水田域」の各面で検出した畦畔 206、302、402、501 の延長線上に同じ軸方向で構築されていることから、相互の高い関連性がうかがえる。これらの畦畔のいずれかと SA280 が同時に存在していたと仮定すると、少なくともこの段階ですでに「屋敷地」の周囲は水田であったと言える。さらに推察を進めると、XⅥ層水田面の畦畔 501 の上には杭列 SA716 が構築されている。これと SA280 の間には規模や杭の間隔などに差異が認められ、単純な比較はできない。しかし、同じ畦畔の同一線上に構築された２つの杭列の間に相互関係を認め得るならば、「屋敷地」の『SR2・XⅦ層遺構』は「水田域」の『XⅥ層水田面』と時期を同じくする可能性が高いと言える。

続く『SR1-3 層遺構』は、人為的な盛土である SR1 の３層中に構築される遺構群である。遺構はこの盛土の掘削過程で随時検出したもので、いわゆる「検出面」を設定して検出したものではない。この要因としては、盛土がイネを主体とする炭化物やシルトのブロックの混在した「人為的な混合土」を用いていたために、発掘調査作業上、人為的に埋め戻された遺構覆土との識別が困難であった点が挙げられる。また SR1 の３層は、この「人為的な混合土」がさまざまな濃淡でモザイク状に累重した状態で堆積していた。これに遺構の検出状況を考え合わせると、SR1 の３層は一度にではなく小規模な盛土を継続的に行って形成されたもので、遺構もこの作業の合間に複数回に渡って構築されたものと考えられる。このような状況下では、当然複数の生活面が形成されたはずである。しかし、盛土に「人為的な混合土」を用いていたこと、各回の盛土の範囲がまちまちで面としての広がりが捉えられなかったことが生活面の把握を困難なものとした。その結果、調査時においては単一層と理解していた SR1 の３層の掘削と並行して、遺構が突然顔を出すという難解な状況が生じたと考えられる。

遺構数は下位面と比較し、多い。柱･柱穴も径の大きなものがあることから建物の存在もうかがわれるが、検出には至らなかった。しかし、これには上位面の遺構構築に伴って失われた柱穴の存在も考慮されなければならない。また、柱穴に対する柱根の残存率が16%と低い点については、建物の遺棄・建て替え時、若しくは遅くとも更なる盛土（SR1-1・2層）の段階において、柱根の抜き取りが一般的に行われていたことを示すものと考えられる。

溝はSD113を除いて、比較的規模の小さいものが多い。長軸は北西－東南方向を指すものが多く、6Eグリッドではこれらが並列、密集した状態で検出されたほか、6E・F、7E・Fグリッドほかでもやや間隔を広くするものの並列する様子が認められる。これらは、一般にいわゆる「畑作溝」もしくは「耕作溝」として報告されるものとの類似性を指摘できる。

続く『SR1-1・2層遺構』は、人為的な盛土であるSR1の1層及び2層を掘削中に検出したもので、最も新しい段階の遺構群である。下位面から始まった盛土は、この段階でも活発に行われた。そのため遺構も下位面と同様に、盛土の掘削過程で随時検出したものである。また溝により、屋敷地内は3区画に分けられる。（第41図）

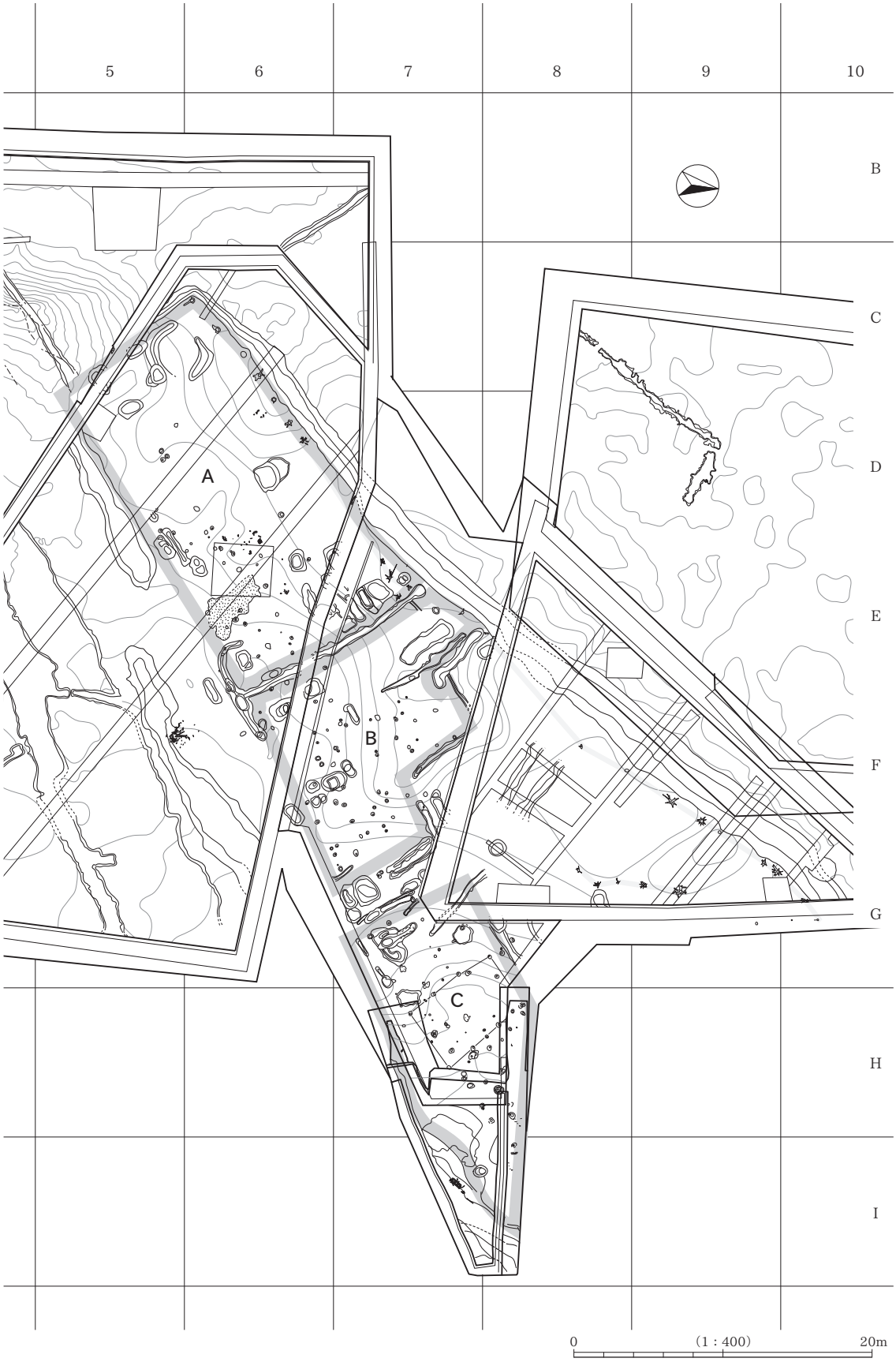
この盛土の進展により、下位面の並列する溝や窪地は完全に埋められて平坦面を広げる。その内部を区画するように、新たに溝が配置された。また溝により、屋敷地内は3区画に分けられる（第41図）。区画溝の内側では多くの柱や柱穴が検出されたことから、それぞれに建物が配置されたものと考えられる。そのため、認識し得たのは区画Cの1棟のみであるが、柱・柱穴の分布状況から区画A・Bにも同様の建物が存在した可能性が高い。

遺構は種別・数ともに最も多い。特に焼土遺構、杭集中遺構、集石、樹根列といった、ほかの遺構検出面では見られないものが存在する。その中でも、屋敷地の性格を考える上で重要な遺構として2列の樹根列が挙げられる。樹根列は文字通り、根が並んで見つかったもので、樹根列1の全長はSD111に沿って63.8mにも及ぶ。樹種同定の結果から、ここに植栽された樹種はヤナギ属が過半を占めていた可能性が高く、その意図は敷地の区画にあると考えられる。

このように、この段階では盛土の進展に伴って内部を区画する溝が構築され、区画溝の内部には建物が配置された。さらには区画を意図したと考えられるヤナギが植栽されたこともあり、景観は下位面から一変した。文字通りの『屋敷地』としての性格が明瞭になる段階といえるだろう。

ここまで「屋敷地」の3時期を概観した。そこでは時期ごとに異なる性格が垣間見られ、最終的には溝により区画された中に建物や土坑が配置され、水田域との境には植栽されたヤナギが立ち並ぶ景観へと変化していく過程が読み取れた。また、盛土の開始と前後する段階では、畑作溝の存在から食物生産が行われていた可能性も指摘される。そして、このような性格の変化は「水田域」の変遷とも関連していると考えられる。これについては、次項で詳述する。

最後に、この「屋敷地」において日常的な居住は行われていたのであろうか。本遺跡を同時期の集落と比較すると、井戸の欠落を指摘できる。掘削の可否を伴う遺跡の立地や水資源の獲得方法の違いもあるが、本遺跡と同時期とされる建物の多くが隣接して井戸を有する状況とは異なっている。また、多量の木製品の良好な遺存状態が示すように、「屋敷地」は当時から湿潤な環境にあったことが予想される。これは周囲を水田に囲まれる状況からも推測され、さらには度重なる洪水の脅威にも晒される場所である。果たして、ここが生活の適地として選ばれたのだろうか。このような状況をふまえた上で、祭祀遺物、特に串に着目して「祭祀の場」としての側面を指摘しておきたい。



第 41 図　溝による区画模式図（SR1-1・2 層）

その性格が最も強まるのは、串が最も多く出土する『SR1-1・2 層遺構』段階と考えられる。特に掘立柱建物を取り囲むように、7F ～ H、8H グリッドでの集中が著しい。水田に隣接している状況からは、祭祀が水田との関係が深いものであった可能性もうかがわせる。これらの串の多くは地面に突き刺された状態で検出したものである。それらは不規則に立ち並び、その配置からは特定の形状に並べる意図は看取できなかった[1)]。また、この串が集中出土する範囲内では焼土遺構が 6 基位置している。中世前期の祭祀と「火を用いる、あるいは火を灯す行為」の関連については、すでに論じられており［畑 2006］[2)]、この 6 基についても祭祀との関連が考慮されなければならない。加えて、出土木製品に見る人形・舟形・鳥形・刀形・鋤形・陽物などの存在からも、何らかの祭祀が行われていたことは確実であろう。

このように、今回の調査を通して祭祀が行われた「状況」は色濃く認められた。しかし一方で、その「実態」については多くが不明のままで、その解明については今後の課題としたい。その足がかりとして、中世前期の串を用いた祭祀について多角的な検討を行った畑大介氏の言を借りると、本遺跡の様相も各種形代類の出土と合わせて「古代的な祭祀」が「かたちを変えながら残存し」たものという大枠の中で理解できる。さらに氏の言う中世前期の祭祀とは「古代と中世が共存する時期」のものであり、「古代からの伝統がある地域で中世まで継続したもの」という指摘［畑 2006］も受容するものであれば、さらなる検討は当地における古代からの系統・系譜をふまえたうえで行われるべきであろう。今後の検討の方向性のひとつとして明示しておきたい。

なお、こうした祭祀が人々の日常生活と完全に切り離されて行われたとは考えられず、ここでの指摘も遺跡の性格を限定してしまうものではない[3)]。ひとまず、本遺跡を構成する多くの要素のひとつとして理解しておきたい。

2）水田域との相関関係について

屋敷地は SR2、SR1-3、SR1-2、SR1-1 の 4 面と、水田域はⅩⅥ、ⅩⅣ、ⅩⅡ、Ⅹの 4 面[4)] としているが、単純に面が対応するわけではない。その対応関係は、屋敷地の北西側と水田域を区画する重層した溝群の切り合い関係を根拠に基づいている。対応関係は、SD150（『SR2・ⅩⅦ層遺構』段階）はⅩⅥ層水田、SD113（『SR1-3 層遺構』段階）はⅩⅡ・ⅩⅣ層水田、SD111（『SR1-1・2 層遺構』段階）はⅩ層水田、というような想定がされる。しかし SR1 の覆土は複雑に切り合っており、必ずしも対応水田域と同時期であったとは断定できるものではない。また図版 19 の SD150・113・111 個別図では、標高が屋敷地より水田域が高くなっている。これは屋敷地北西側の水田面が局所的に高まっているものであり、本来は水田域よりも屋敷地の方が標高は高い。ここでは下層から順に屋敷地と水田域との相関関係について整理していきたい（第 42 図）。

SR2・ⅩⅦ層屋敷地 -SD150- ⅩⅥ層水田

SD150 の覆土が、SR2 層・ⅩⅥ層水田を切っていることが相関関係の根拠となっている。前項で述べ

1） これは、複数回の祭祀の痕跡が重複したため、特定の形状を抜き出せない可能性を残す。なお、同種の性格を持つと考えられる馬場屋敷遺跡の「特殊遺構」では、木串が長方形・方形に並んで打ち込まれている［川上・遠藤 1984］。

2） この論稿では祭祀に伴って「串状（の）木製品」を「実際に焼いた跡」の例として馬場屋敷遺跡の「特殊遺構」をあげ、串を長方形・方形に打ち込むことに対しては、「祭祀遺構を木串で方形に囲む手法は、外部の悪気を遮断し結界する古代の斎串に通じる用法」と評価している。

3） 時代を違える論稿だが、［向井 2008］が述べているように「調査範囲が「祓所」」を対象にしているかの検討がまずは必要と考えたためでもある。

4） 調査では 5 枚の水田面が認められたものの、最も新しいⅧ層水田面の耕作土となるⅧ層は屋敷地を含む遺跡全体を覆っている。そのため、屋敷地と関連する水田面は 4 面となる。

たように畦畔 501 と SA280 の関係からもうかがうことができる。限定的な水田域であり、屋敷地の造成はまだ行っておらず、低調な土地利用が想定される。

SR1–3 層屋敷地 –SD113– XIV・XII層水田

SD113 の屋敷地側に盛土が構築され、SD113 の覆土が、盛土とXIV・XII層水田を切っていることが相関関係の根拠となっている。しかしXIV層はSD113 がXII層を掘削した時に、掘り込まれた可能性もある。SD113 東側際に西盛土を構築して屋敷地へ水の流入を防いでおり、そのうえで盛土による屋敷地の造成を行っている。遺構は畑作溝が主体となっている。

SR1–1・2 層屋敷地 –SD111– X層水田

SD111 の覆土が、SR1–1 層・X層水田を切っていることが相関関係の根拠となっている。しかしSR1–2 層は直接 SD111 と切り合っていない為、必ずしもX層時に存続していた遺構とは断定はできない。しかし SR1–1 層と SR1–2 層の遺構は、複雑に切り合い、分離は困難な為、層を統一している。

屋敷地造成の為、畑作溝などの遺構は埋め立てられ、建物や柱群、樹木列など本格的な屋敷地となる。また新たに屋敷地と東側水田域の間に、SD112 と 114 が構築される。SD112 と 114 は下位面ではここに溝は無く、屋敷地を高く南東側の水田域を低くする段差が両者を隔てていた。しかし、洪水に見舞われたことにより、屋敷地と水田域の標高差がなくなってきたことにより、2 本の溝が新設されたと考えられる。これは、屋敷地に水田域の水の流入を防ぐためや、水田の排水路として使用されていたと考えられる。

B　水田域について

1）水 田 の 変 遷

本遺跡では屋敷地の周辺に、VIII層、X層、XII層、XIV層、XVI層を水田耕作土とする 5 面の水田を検出した。各水田の大半は自然堆積層で覆われていたことから、比較的良好な遺存状況で検出することができた。本報告では、時期が最も古いXVI層から順に各水田の特徴を整理し、水田の変遷を示すこととする。第 43 図は、水田面の変遷を示した図である。

XVI層水田（5 枚目水田面）

水田開発最初期の面である。畦畔土や耕作土は砂質を多く含む。砂質を多く含む理由として短期間の水田利用が想定される。畦畔 501 では木製品や粗朶を敷き、土を盛り、その上に樹皮を敷いて、固定の為の杭列を打ち込んでいる。畦畔 503 でも同様に木製品や粗朶を敷いている。これは砂質を多く含む耕作土を用いたことにより、畦畔の崩壊を防ぐための工夫と考えられる。畦畔 501 は、ほかの畦畔の最大上端幅が 0.34mなのに対し、0.94mと大きいことから、道としての利用が考えられる。

水田区画の面積や水回りは、検出した区画が少なく、噴砂の影響もあり不明である。しかし SD150 が水田域の排水と関連すると推測される。SD150 は北東に向けて、標高が下がっていることから南西から北東に向けて水が流れていたと推測される。屋敷地から南側では畦畔 501・504 が構築され、以降この北東 – 南西方向の畦畔はXIV・XII・X層と、上層でもほぼ同位置に構築される。この畦畔 501・504 は、洪水で水田域が砂で覆われる度、畦畔を復元する上での基軸となっていた可能性がある。畦畔 503 の位置ではXIV層以降構築されない。屋敷地から北側では畦畔は見られず、遺構は杭が 5 基のみである。屋敷地から南側では標高 –1.3m ～ –1.5m なのに対して北側では標高が 12E グリッドを中心に –2m と低く、XVI層の遺存状態も悪くなっている。

以上からXVI層では、砂質を多く含む土地でも畦畔を補強しながら、比較的地形の高い、道（畦畔 501）

屋敷地					水田域				周辺の植生と自然環境
出土遺物の年代		様相	時期		時期	様相	イネ属機動細胞由来の植物珪酸体個数	放射性炭素年代	
《輸入陶磁器》 青磁椀・杯で、13世紀の初めから前半、13世紀の中ごろから14世紀の初め。 《国内産陶磁器》 ・珠洲焼の片口鉢を主体に、13世紀末から14世紀後半、14世紀末から15世紀前半。 ・合子若しくは水滴（瀬戸・美濃焼）と考えられる1点のみの出土で、14世紀の初め。 《土師質土器》 手づくね成形のものとロクロ成形で底部切り離しが回転ヘラ切りのものがある。いずれも14世紀前半。	第四号木簡・茅札 ※元亨五年（一三二五年）	**〈屋敷地の始まり〉** ・遺構数少なく、低調な土地利用。XVI層水田との関連をうかがわせる杭列がある。 ・区画溝（SD150）。	SR2・XVII層遺構	⇔	XVI層水田面	**〈水田開発の始まり〉** ・畦畔は水田耕作土で構築。粗朶、樹皮を用いる畦畔（畦畔501・503）もある。 ・畦畔501から人形出土。（水田祭祀か？）	1,300（個／試料1g）	試料　畦畔501内粗朶（ヤナギ） CalAD1, 315-1,398	・粗朶にはヤナギ属が用いられる。 ・湿潤な場所にはヨシ属が生育し、比較的乾燥した場所にはタケ亜科（クマザサ属を含む）が生育した。クマザサ属は集水域に生育した個体に由来する可能性がある。 ・クルミ・クリ・ハス種子出土。
	第一号木簡・茅札 元亨三年（一三二三年）	**（盛土の開始）** 遺構数が増加し、並列する溝群が構築される。これを畑作溝と考えると、食物生産が行われていた可能性がある。栽培種の花粉はソバ属、ハス属を検出。ムギ類・イネ科・マメ類・メロン類・ヒエ近似種の種子出土。 ↓ 盛土が進展し、土地利用に変化の兆し。並列する溝群が埋められた後には土坑が構築される。 ・区画溝（SD113）。	SR1-3層遺構	⇔	XV層（自然堆積層）				
					XIV層水田面	・畦畔は水田耕作土で構築。粗朶を用いる畦畔（畦畔402）もある。	1,000（個／試料1g）		
					XIII層（自然堆積層）				
					XII層水田面	・畦畔は水田耕作土で構築。 ・北区3は、簡易な作業域か。	1,700（個／試料1g）		
					XI層（自然堆積層）				
		（盛土の継続） 畑作溝や窪地を埋めて平坦地を広げ、遺構数も最大となる。溝とヤナギの樹木列により区画が設けられ、前時期とは景観が大きく変わる。建物の周囲では、串を用いた祭祀が行われる。 ・区画溝（SD111・112・114）。	SR1-1・2層遺構	⇔	X層水田面	・畦畔は水田耕作土で構築。 ・水路（SD848）の設置。 ・護岸施設（SA871）の設置。杭にはヤナギ属を使用。	3,400（個／試料1g）		

〈屋敷地の終り〉

（IX層）

VIII層水田面 水田面の遺存状態不良のため平面的な調査は一部（北区2）のみ。	1,000（個／試料1g）	（資料番号3） CalAD1,163-1,208 ※2	・ヨシ属やウキヤガラ近似種が生育する湿潤な環境。

〈水田域の終り〉

VII層 遺跡全体を含む広域が滞水域となりガツボに覆われる。	（資料番号2） CalAD1,298-1,390 （資料番号1） CalAD1,448-1,478	

備考：※1 珪酸体の中でも、機動細胞由来の値である。　※2 多くの遺物の年代より古い。

第42図　屋敷地と水田域との相関関係図

から南側で、限定的な水田耕作が行われていたと考えられる。また畦畔 501 から人形（図版 85–9）が、水田面を覆うXV層から陽物形（図版 90–48）が出土していることからXVI層でのみ水田に関連した祭祀が行われていた可能性がある。

XIV層水田（4 枚目水田面）

XVI層と同様に屋敷地と水田域をつなぐ畦畔 402 では基盤に粗朶を敷き、土を盛り畦畔としている。しかし畦畔に伴う樹皮や杭列などは検出されなかった。屋敷地から南側では畦畔 501・504 の畦畔軸を復元し構築している。屋敷地から北側では畦畔 412 ～ 415 が構築され、以降この北東 – 南西方向の畦畔はXII・X層と、上層でもほぼ同位置に構築される。この畦畔 412 ～ 415 は、洪水で水田域が砂で覆われる度、畦畔を復元する上での基軸となっていた可能性がある。また畦畔 414 から方向は一致しないが木製品や雑木が出土していることから、基軸となる畦畔の補強を行っていた可能性があるが、部分的であり断定はできない。

水田区画は方形で、面積は 340m^2 程が 1 区画と、160m^2 が 1 区画の大小 2 パターンの区画が見られる。水回りは標高から考えると、屋敷地から南側では調査区南西隅の畦畔 409 から屋敷地南西に向かって排水している。屋敷地から北側では畦畔 412 ～ 415 の基軸となる畦畔を境に、北西と南東の 2 方向に水回りが分かれる。北西に向かう水回りの排水路は未検出だが、南東に向かう水回りは、屋敷地の SD113 へ田伝いに用水を行っていたと考えられる。以上の傾向はXII層でも同様である。

以上からXIV層では、基軸となる畦畔 402 に限り畦畔の補強を続行し、屋敷地から北側にも畦畔を構築しながら水田域を広げていったと考えられる。

XII 層水田（3 枚目水田面）

下層でみられた畦畔に粗朶・木製品などを敷く技法が見られなくなり、全て耕作土を台形状に盛土する畦畔である。屋敷地から南側では下層の畦畔軸を復元し構築している。屋敷地から北側では基軸となる畦畔 312・316・317 に対して並行する畦畔 318・319 が見られる。

水田区画は方形で、面積は 330m^2 程が 4 区画と、160m^2 が 1 区画の大小 2 パターンの区画が見られる。水回りは標高から考えると、下層と同様であったと考えられる。

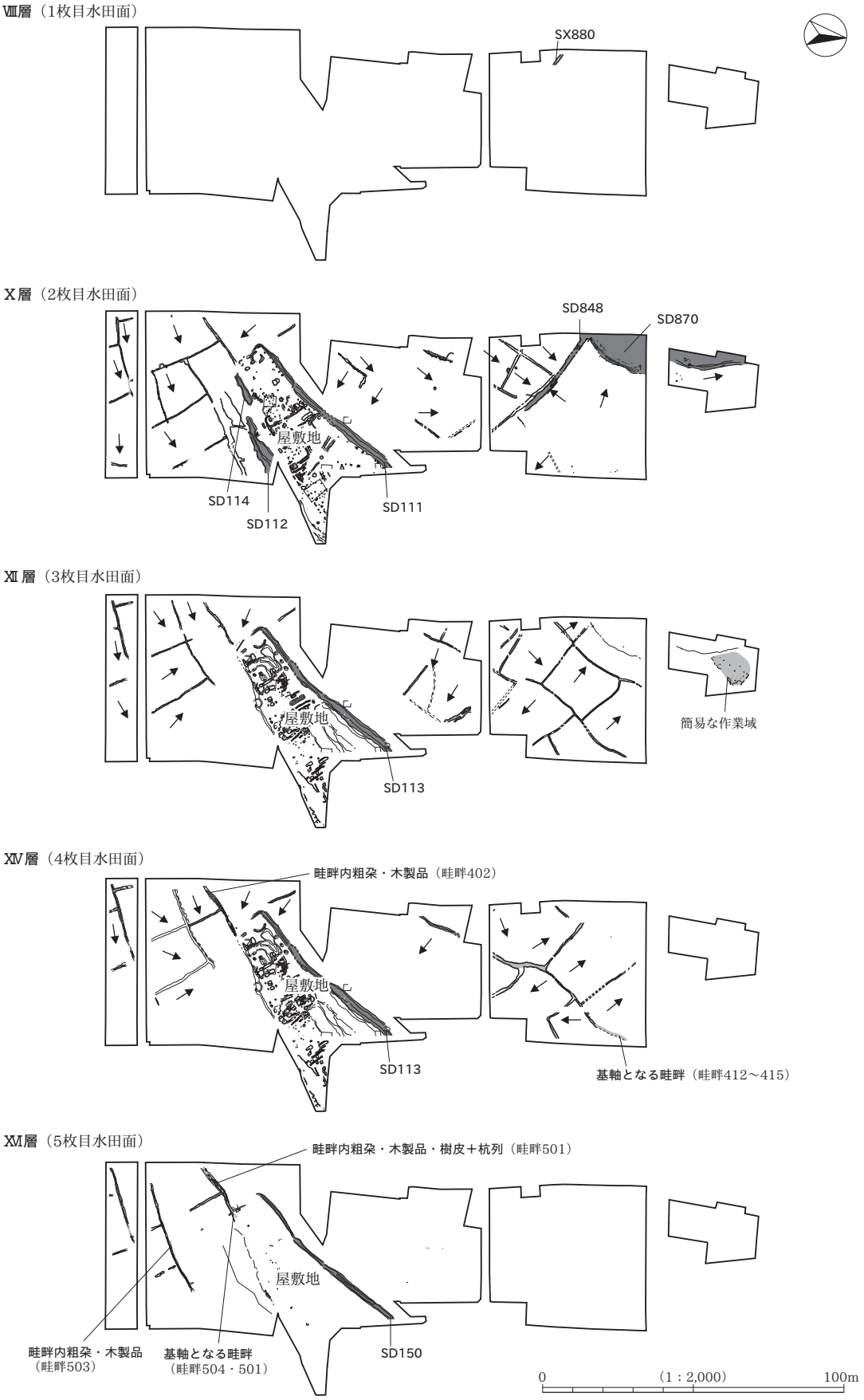
以上からXII層では、盛土のみの畦畔を構築しながら、下層の畦畔を基軸として水田耕作が行われていたと推測される。また 21D グリッド周辺では柱根や杭列がまとまって検出され、珠洲焼や砥石、下駄などの木製品が出土しており、水田域中の簡易な作業域であったと推測される。

X 層水田面（2 枚目水田面）

屋敷地に伴う水田域の最終面である。引き続き下層の畦畔軸を復元し構築している。屋敷地南東側でも明瞭に畦畔を検出しており、畦畔 202・203・215 は N–1 ～ 14° –E と下層では見られない畦畔方向である。

SD848 以北からは畦畔を検出できなかったが、畦畔脇の小溝が検出されていることや、X層が途切れず堆積していることから水田域であったが、畦畔の遺存は不良であったと考えられる。

水田区画はXIV・XII層と同様に方形だが、面積は 340m^2 程が 2 区画と、144m^2 程が 2 区画、60m^2 程が 1 区画の 3 パターンに増える。また排水施設の拡充が著しく、屋敷地では下層 SD113 と同位置に SD111 が構築され、南東側に SD112・114 を構築する。SD112 と SD114 の間は土橋と推測され、水田域と屋敷地の出入り口と考えられる。屋敷地から北側では自然流路の SD870 に直交するように SD848 を構築する。水回りは標高から考えると、屋敷地から南側からでは、田伝いに SD111・112・114 へ排水を行っていたと推測される。また SD111 は北東に向けて標高が下がっていることから、南西


Ⅷ層（1枚目水田面）
SX880
Ⅹ層（2枚目水田面）
SD848
SD870
屋敷地
SD114
SD112
SD111
Ⅻ層（3枚目水田面）
屋敷地
SD113
簡易な作業域
ⅩⅣ層（4枚目水田面）
畦畔内粗朶・木製品（畦畔402）
屋敷地
SD113
基軸となる畦畔（畦畔412～415）
ⅩⅥ層（5枚目水田面）
畦畔内粗朶・木製品・樹皮＋杭列（畦畔501）
屋敷地
畦畔内粗朶・木製品
（畦畔503）
基軸となる畦畔
（畦畔504・501）
SD150
0
（1：2,000）
100m

第 43 図　水田面の変遷

から北東に向かって水が流れていたと推測される。屋敷地から北側では、SD111 に排水を行うものと、畦畔 223 に隣接する SD848 を経由して自然の流路である SD870 へ排水を行っていたと推測される。また SD870 は護岸の為、杭や腐植土を落ち際に構築している。SD870 は対岸が検出できず、幅の広い流路と想定される。今回の調査範囲では排水機能が検出されたのみであるが、更に上流では用水としても利用されていたと考えられる。

以上からⅩ層では、盛土のみの畦畔を構築しながら、下層の畦畔を基軸として水田耕作が行われていたと推測される。また排水溝が多く、自然流路の護岸も見られ入念な排水管理がなされていたことを思わせる。21D グリッドでは、標高が低くなり SD870 の影響を受ける為、作業域を放棄したと推測される。

Ⅷ層水田面（1 枚目水田面）

遺存状態が悪い為平面的な調査は行っていない。検出した畦畔は、北区 2 西側の 1 条 SX880 のみである。Ⅷ層は屋敷地の上にも広がっている。以上からⅧ層では、Ⅸ層による屋敷地埋没後も水田耕作を行っていたと考えられる。

2）県内の中世水田跡との比較

ここでは水田の形態に着目し、県内の水田と比較する。第 28 表は、新潟県内の中世水田跡を検出した遺跡の一覧表である。県内では中世の時期幅に収まる水田跡は 16 遺跡である。表に示した水田の形態は、平面図や断面図、土層説明などから検討したものである。水田の形態は 2 種類があり、掘上げ田と掘込み田に分類される。掘上げ田は過水地帯の一部を溝状などに掘り下げ、その排土を掘り残した部分に盛り上げ、水面上の水田耕地を作る。一方掘込み田は乏水地帯を 50 ～ 70cm 程プール状に掘り窪め、底面付近を耕作面とする。用水は天水または溝で導入する［鈴木 2011a］。

本遺跡では 5 面全てが掘上げ田である。県内での類例と比較すると、新津丘陵側の微高地周辺で細池遺跡、寺道上遺跡［小池ほか 1994］、沖ノ羽遺跡Ⅲ［春日 2003］、また阿賀野川右岸の微高地で鴨深甲遺跡［高橋ほか 2006］と集中して見られ、また沖積地上で上道下西遺跡［鈴木ほか 2012］、用言寺遺跡［加藤ほか 2006］、山裾の後背湿地で岩倉遺跡［高橋ほか 2003］が挙げられる。それに対し掘上げ田は、県内では鵜川右岸の自然堤防上に位置する下沖北遺跡が挙げられる。区画は方形で約 340m² と 100m² の大小 2 パターンであり、水田域に排水溝が隣接している［山崎ほか 2005］。また、島崎川右岸の丘陵裾に位置する大武遺跡［春日ほか 2000］、寺前遺跡［高橋ほか 2008］、番場遺跡［坂井ほか 1987］はいずれも掘上げ田の可能性

遺跡名	立　地	水田の種類	水田の時期
鴨深甲遺跡	阿賀野川右岸の自然堤防・微高地	掘込み田	14 ～ 15 世紀前半
細池遺跡	阿賀野川左岸の微高地またはその縁辺	掘込み田	中世
寺道上遺跡	阿賀野川左岸の微高地またはその縁辺	掘込み田	中世
沖ノ羽遺跡	能代川・阿賀野川・小阿賀野川に囲まれた沖積平野	掘込み田	12 世紀後半～13 世紀後半
小坂居付遺跡	中ノ口川右岸の沖積地	掘上げ田	13 世紀後半～14 世紀
大武遺跡	丘陵裾近くの沖積地	掘上げ田？	14 ～ 15 世紀
寺前遺跡	島崎川右岸の丘陵先端部及び谷筋	掘上げ田？	12 世紀後半
上道下西遺跡	信濃川右岸の微高地	掘込み田	14 世紀後半
池田遺跡	正善寺川西岸の沖積地	掘上げ田	13 中葉～ 15 世紀
東原町遺跡	鯖石川左岸の自然堤防上とその後背湿地	掘上げ田	13 世紀後半～14 世紀
下沖北遺跡	鵜川右岸の自然堤防上とその後背低地	掘上げ田	13 ～ 14 世紀
用言寺遺跡	矢代川左岸の沖積段丘	掘込み田	13 世紀～ 14 世紀前半
馬場遺跡	関川左岸の河岸段丘上	掘上げ田	中世
須沢角地遺跡	姫川左岸の扇状地西端	掘上げ田	14 世紀第 3 四半期
岩倉遺跡	早川河口左岸山裾の後背湿地	掘込み田	15 世紀代
番場遺跡	島崎川右岸の丘陵裾の緩斜面上	掘上げ田？	14 世紀代

第 28 表　新潟県内中世水田跡検出遺跡一覧

がある。しかし３遺跡とも他の掘上げ田の遺跡と比較して、大武遺跡、番場遺跡では丘陵裾の傾斜に沿った細長い区画で、寺前遺跡では区画の１辺が6mと小さい区画であるといった特徴が見られる。

以上の事から中世の県内水田遺跡の傾向として、利水が困難な丘陵裾の微高地に位置する乏水域では、掘込み田や、一部では丘陵傾斜に沿った区画の掘上げ田による水田耕作を行い、逆に本遺跡のような河川に近い過水域では方形区画の掘上げ田による水田耕作を行っていたと考えられる。また中世の時期幅で、水田形態に差異が見られなかったことから、遺跡の立地状況に見合った水田形態を選択していたと考えられる。

本遺跡は中ノ口川に近く、過水域であったと想定され、県内の水田傾向とも合致する。水田の初期では畦畔の補強や、水田に関連した祭祀を行っており、県内の類例として岩倉遺跡で15世紀代の水田区画の上層から、人形や鳥形が出土した例が挙げられる。水田区画はおおむね方形で、約330m^2、150m^2、60m^{2}の３パターンがあり、下沖北遺跡Ⅱでは60m^{2}は無いが、上位２パターンが同様の傾向にある。また基軸となる畦畔は、洪水で砂に覆われるたびに復元しながら水田域を広げていった。屋敷地に伴う水田域の最終期では排水溝の拡充、杭列や腐植土による自然流路の管理を行っていたと考えられる。５面に及ぶ水田や、腐植土と杭列による自然流路護岸施設は県内で類例が無いが、山梨県宮沢中村遺跡で、鎌倉時代の水田に隣接する流路の落ち際に、杭列を打ち込み、網代を垂直に固定する護岸施設が検出されている［新津ほか2000］。この護岸施設について畑氏は「中世の護岸は、杭列に柵を施すのが主流で、宮沢中村遺跡の網代はその多様性を示すものであろうが、特殊な例といわなくてはならない。」［畑1997］とある。このことから本遺跡は宮沢中村遺跡と同様に、中世護岸工法の多様性の一つと位置付けたい。

２　遺　　物

Ａ　土師質土器について

本遺跡では前述のように青磁・珠洲焼・土師質土器・瀬戸美濃焼が出土している。本項では土師質土器について考察する。

まず本遺跡出土の土師質土器の特徴について整理しておく。成形技法には、ロクロ成形と手づくね成形が認められる。またロクロからの底部切り離しは、回転ヘラ切り（以下ヘラ切り）のみであり、回転糸切り（以下糸切り）のものは認められない。各技法の出土点数は、手づくねが９点、ヘラ切りが８点、そのほかにロクロ成形だが底部切り離し不明が１点、小片のため成形不明が４点の計22点である。土師質土器の時期は、珠洲焼の様相や器形、SR1出土第一号木簡･茅札の元亨３（1323）年、SR2出土第四号木簡･茅札の元亨５（1325）年の紀年銘などから14世紀の前半とした。ヘラ切りの皿は、底部は無段の平底で、底部と体部で角度が明確に変わる。小皿は底部が厚く、底部外面の縁を撫で付けている。また他の小皿と比較して口径指数（器高 / 口径× 100）が35を越え、口径に対し器高に深みがあるのが特徴である。手づくねの皿は、内・外面に指頭痕などは見られず、ヨコナデで成形している。

県内土師質土器の研究史を簡単に説明すると、品田高志氏は成形技法から県内の土師質土器を４類８型式に分類・編年を行った。本遺跡周辺の馬場屋敷遺跡出土の一群をＡ類「（仮）阿賀南型」、新潟市上中沢遺跡出土の一群をＤ類と設定した。また、第Ⅲ期（13～14世紀代）を在地化が顕著となる、越後在地化諸型式の時期とした［品田1999］。春日真実氏は西蒲原地域（旧吉田町を中心とした燕市･旧分水町･旧巻町･旧中之口村・旧岩室村・旧西川町）における古代・中世の土器編年を行い、中世Ⅱ期（13世紀代）を手づくね

の定着期とし、中世Ⅲ期（14 世紀代）はロクロ成形の土器がほとんど確認できなくなり、手づくねの土器が大半を占める時期とした［春日 2000］。鶴巻康志氏は、土師質土器の成形技法のひとつであるヘラ切りが 13 世紀中ごろ～ 15 世紀前半の、阿賀北南部地域（新発田市・新潟市・阿賀野市）を中心に分布していた成形法であることを明らかにした［鶴巻 2004］。

このように阿賀北地域や西蒲原地域等では、遺跡間での比較・分析が行われ、地域性や土器様相が明らかとなっている。しかし本遺跡周辺の地域ではそれが行われていないのが現状である。

本項では本遺跡周辺の成形技法の地域性や、土師質土器流通の様相を明らかにすることによって、本遺跡の土師質土器の位置付けを明確にしていく。本遺跡周辺を品田氏の論考［品田 1999］をもとに阿賀北地域に対応する阿賀南地域と呼称し、範囲は阿賀野川以南の地域である新潟市、五泉市、三条市、燕市周辺を設定した。

本遺跡がどのような土器様相の地域に属していたかを明確にするため、土師質土器の成形技法ごとの編年案（第 44 図）・分布図を作成した（第 45 図）。編年案は遺構から共伴した紀年銘木簡や、土器・陶磁器類編年をもとにしている。また時期区分は吉岡氏の珠洲焼編年［吉岡 1994］をもとにしている。分布図は鶴巻氏の「底部回転ヘラ切り土師器の分布（13 ～ 15 世紀）」［鶴巻 2006］を参考に、13 世紀～ 15 世紀の阿賀南地域、そして阿賀北地域で新たに土師器質土器が出土した遺跡を集めたものである。それに加え、他地域との様相を比較するため、中越北部の出雲崎町、見附市の遺跡についても抽出している。今回燕市の北小脇遺跡・天神堂城跡・館屋敷遺跡の出土遺物に関しては土器を実見し、成形技法を確認した上で分布図・編年案に用いている。

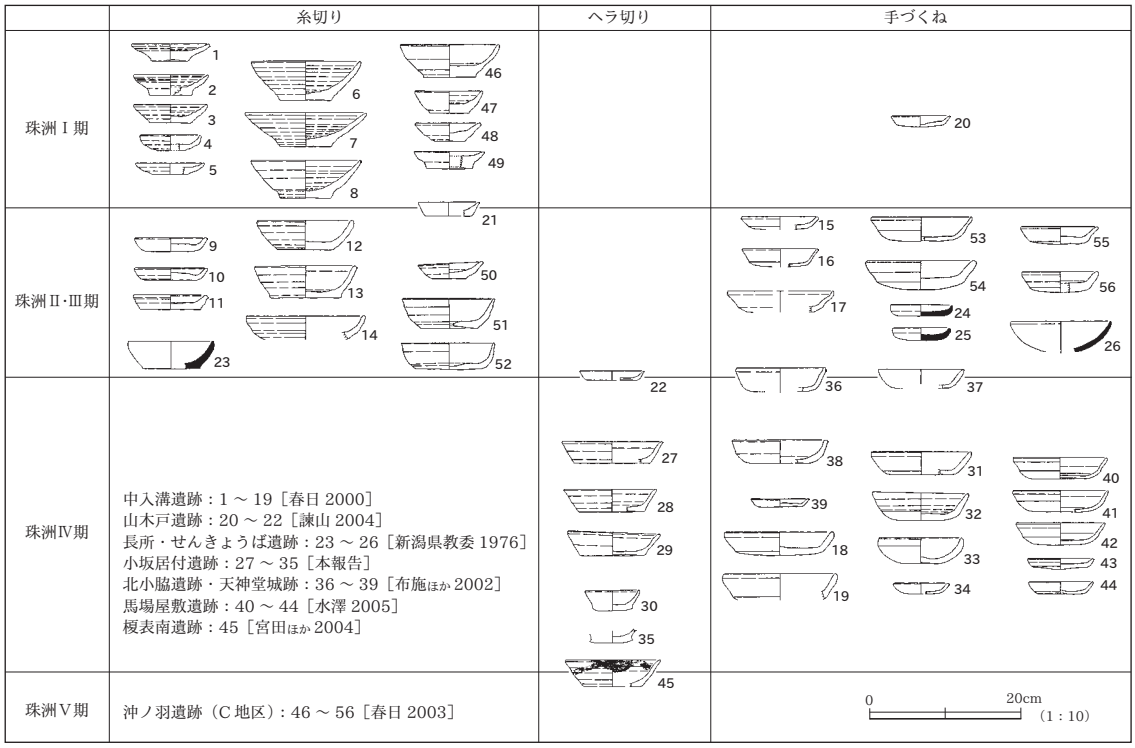
分布図を見ると、阿賀北地域ではヘラ切り主体の遺跡が、村上市から新潟市・阿賀野市まで広い地域で見られる。また胎内市・新発田市周辺は糸切り主体の地域となるが、ヘラ切りも一定量見られる。

一方、阿賀南地域ではヘラ切り主体の遺跡が、新潟市東部、五泉市新津丘陵部などの阿賀南北部地域に集中している。一方で信濃川上流・中ノ口川周辺では手づくねが主体となっている。しかし本遺跡ではてづくねとヘラ切りの出土量がほぼ半数となる。また、周辺の遺跡と比較すると本遺跡では糸切りが出土しておらず、ヘラ切りが定量出土している。また周辺の手づくね主体の遺跡では、阿賀北地域の様にヘラ切りが一定量出土することはなく、ほぼ手づくねで占められ、ロクロ成形のものは糸切りがほとんどである。そのほか長岡市の堂ヶ峯遺跡でヘラ切りが報告されているが時期不明の表採で、1 点のみの出土である。

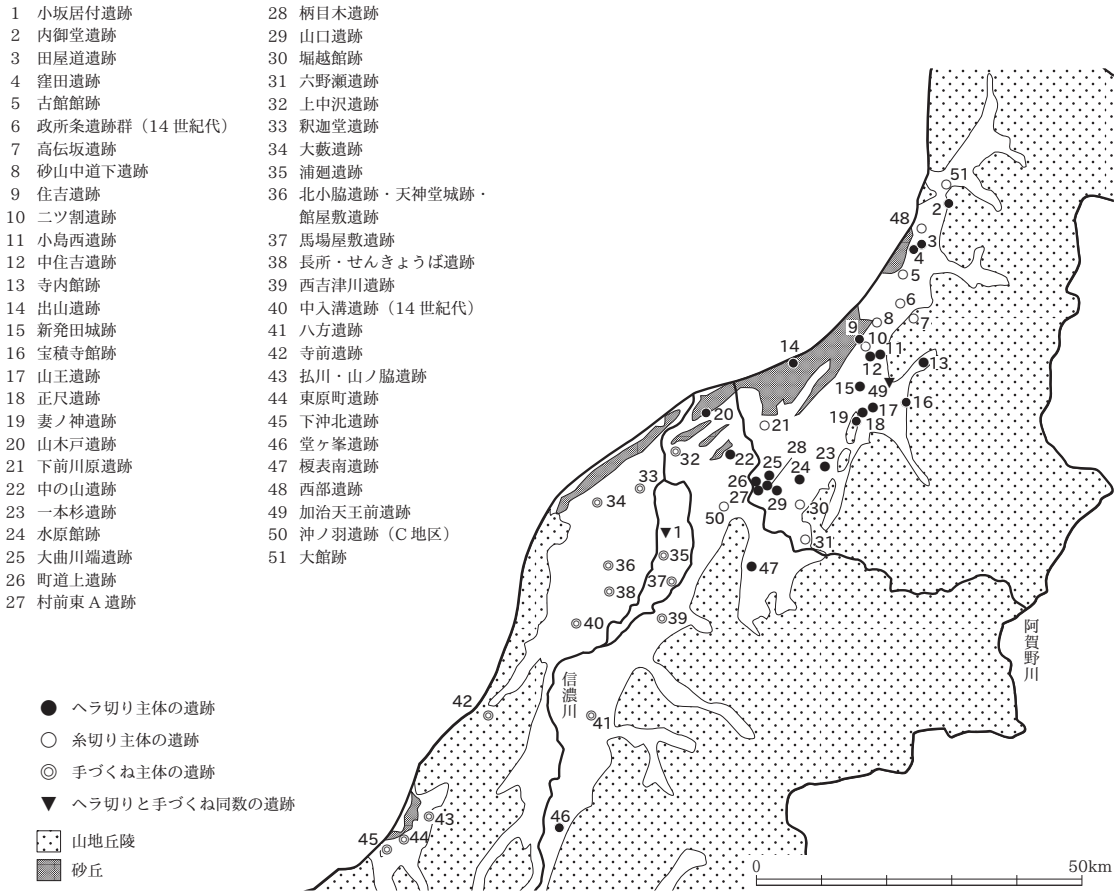
次に編年案を見ると、珠洲Ⅰ期では糸切りが多く、一部手づくねの小皿（20）が見られる。珠洲Ⅱ～Ⅲ期では糸切りと同時に手づくねが多く見られ、器種も皿と小皿が出現する。Ⅳ期に入ると糸切りがほとんど見られず、手づくねが主体となり、同時にヘラ切りが阿賀南地域に出現する時期である。Ⅳ～Ⅴ期では五泉市でヘラ切りが見られる。編年案からは省略したが、Ⅴ期以降は器高の低い糸切りと、京都系第 2 波の影響を受けた手づくねが主体となっていく。

ここで土師質土器の器形についても若干触れておく。阿賀南地域のヘラ切りは同時期の阿賀北地域と似ており、特徴として底部は平底で、底部と体部の境で明確に変わる器形［鶴巻 2004］である。また本遺跡出土の小皿（図版 60-9、86-4）は、阿賀北地域でも類例が見られなかった。

手づくねのものは品田氏が提唱する「刈羽・三島型」（手づくね成形で、口縁部を強くヨコナデし、手づくね成形の体部と、稜線もしくは沈線等によって区別されるもの）［品田 1997］が阿賀南地域ではほとんど見られず、見附市の八方遺跡や、出雲崎町の寺前遺跡で似た器形のものが一部見られた。そのほか器形は遺跡ごとで差異がある。



第 44 図　阿賀南地域の土師質土器編年案



第 45 図　阿賀北・阿賀南地域の土師質土器の分布（13 ～ 15 世紀）（［鶴巻 2006］を一部加筆）

結果として阿賀南地域は手づくねを主体としており、器形は品田氏が提唱する「刈羽・三島型」がほとんど見られなかった。また品田氏は馬場屋敷遺跡の土器群を「(仮) 阿賀南型」と設定しているが、器形は遺跡ごとに差異があり、類型は遺跡内にとどまると推測される。阿賀南地域の手づくねに関して「刈羽・三島型」や「頸城型」など地域単位での類型化ができないほど、他の地域より複雑な在地化が進んでいたと推測される。一方阿賀南北部地域ではヘラ切り主体の遺跡が多く、器形においても同時期の阿賀北南部地域のものと類似する。このことから阿賀南北部地域では、阿賀北南部地域のヘラ切りが流通していたと考えられる。時期差で見ると、阿賀南地域では12世紀代では糸切りを主体としており、13世紀後半から14世紀代にかけ、在地化した手づくねや、ヘラ切りが多く見られる。

本遺跡は阿賀南地域で13世紀後半から14世紀代の特徴である、在地化された手づくね主体の様相を基盤としながらも、阿賀北南部から阿賀南北部地域通有のヘラ切りを使用していた。これは本遺跡が白河荘から半径約20km内と鶴巻康志氏が推測したヘラ切り流通範囲［鶴巻 2004］に収まることや、器形においても同時期の阿賀北南部～阿賀南北部地域のものと共通性が見られることから、信濃川・阿賀野川・中ノ口川などの内水面交通を利用してもたらされたことが理由として推測される。また本遺跡以南は手づくね主体となることから、ヘラ切りの流通限界域であったと推測される。

B 木　製　品

1) 漆器について

第46図は馬場屋敷遺跡、浦廻遺跡と本遺跡出土の漆器である。3遺跡は近接し、共に紀年銘資料が伴い越後の13世紀末～14世紀代の基準資料となることから合わせて提示した。馬場屋敷は正応4～6(1291～1293) 年、延慶3 (1310) 年銘、浦廻遺跡は元應2 (1320) 年銘である。本遺跡は元亨3 (1323) 年、元亨5 (1325) 年銘である。以下、3遺跡の様相を確認する。

馬場屋敷遺跡　椀1点[1]が図化されている。皆朱で黒と赤の緻密な漆絵が描かれており搬入品か。ほかにも写真が掲載されていることから、漆器はあるようだが全体の様相は不明である。

浦廻遺跡　漆器はほとんどが包含層からの出土である。漆器の樹種同定は行われているが、塗膜分析は行われていない。樹種は19個中ケヤキが6点、クリ2点、ブナ属2点、カツラ1点、サクラ属1点、トチノキ5点、ハリギリ1点であった。

第29表は浦廻遺跡の漆器の内外面の上塗色と赤絵の装飾の有無の内訳である。実測個体19個中、総黒色系椀が8個体で42%を占める。総黒色系で外面に赤絵のあるものが1個体 (16)、内外面に赤絵のあるものが3個体 (13～15) で17%である。内面赤色系のものは2個体 (11・12) で11%である。皿は総黒色系のものが1点 (2) である。鉢は総黒色系で内外面に赤絵のあるものが1個体 (17)、内面に赤絵があるものが1個体 (18) である。膳は外面黒色系内面赤色系が1個体 (19)、外面黒色系内面地色のものが1個体 (20) である (本文と観察表で齟齬が生じているので実測図から判断した)。

器種	上塗色	赤絵	報告番号	個数	%
椀	外黒・内黒	―	3～10	8	42
		外	16	1	5
		外内	13・14・15	3	17
	外黒・内赤	―	11・12	2	11
皿	外黒・内黒	―	2	1	5
鉢	外黒・内黒	外内	17	1	5
		内	18	1	5
膳	外黒・内赤	―	19	1	5
	外黒・内地	―	20	1	5
			小　計	19	100

第29表　浦廻遺跡漆器内訳

1) 下層からの出土である。最近、水澤幸一氏が技法から近世以降の所産として下層遺物から除外するとしている［水澤 2012］。しかし、上層との間層は少なくとも70cmはあり、この1点のみが混入とは考えにくい。再検証が必要である。

次に器形を見ると浦廻遺跡の皿は口径 9.4cm、高さ 1.0cm の扁平なもので本遺跡のものとよく似ている。椀は口径指数（高さ / 口径× 100）3 未満の身の浅いもの（3・9）、口径指数 3 以上の身が深いものが（4・10・15）ある。高台の形は低く細い輪高台と碁笥底（5・6）がある。椀の口径は 12.6 ～ 15.3cm である。9 の総黒色系椀は輸入陶磁器の盤の模倣ではないかと言われるもので口径 19.1cm と大きい。類例は村上市窪田遺跡［前川ほか 2007］SE113 出土品などに見られる。

器種	上塗色	赤絵	報告番号	個数	%
椀	外黒・内黒	―	15・16・17・55・120・128・130 131・132・134・202・205・262・48	14	35
		外	137	1	2
		内	18・73・119・136・261・296	6	16
		外内	135・47	2	5
	外黒・内赤	外	224	1	2
	外赤・内黒	外	265（写真のみ）	1	2
	外赤・内赤	内	129（写真のみ）	1	2
皿	外黒・内黒	―	76・126・127・14	4	11
	外黒・内赤	―	77・79	2	5
	外赤・内黒	―	206	1	2
	不明	―	78・125・203	3	8
鉢	外黒・内黒	―	243	1	2
	外不明・内黒	―	133	1	2
	不明	―	19	1	2
蓋	外黒・内黒	外象嵌	20	1	2
容器	外黒・内黒	―	17	1	2
			合　計	41	100

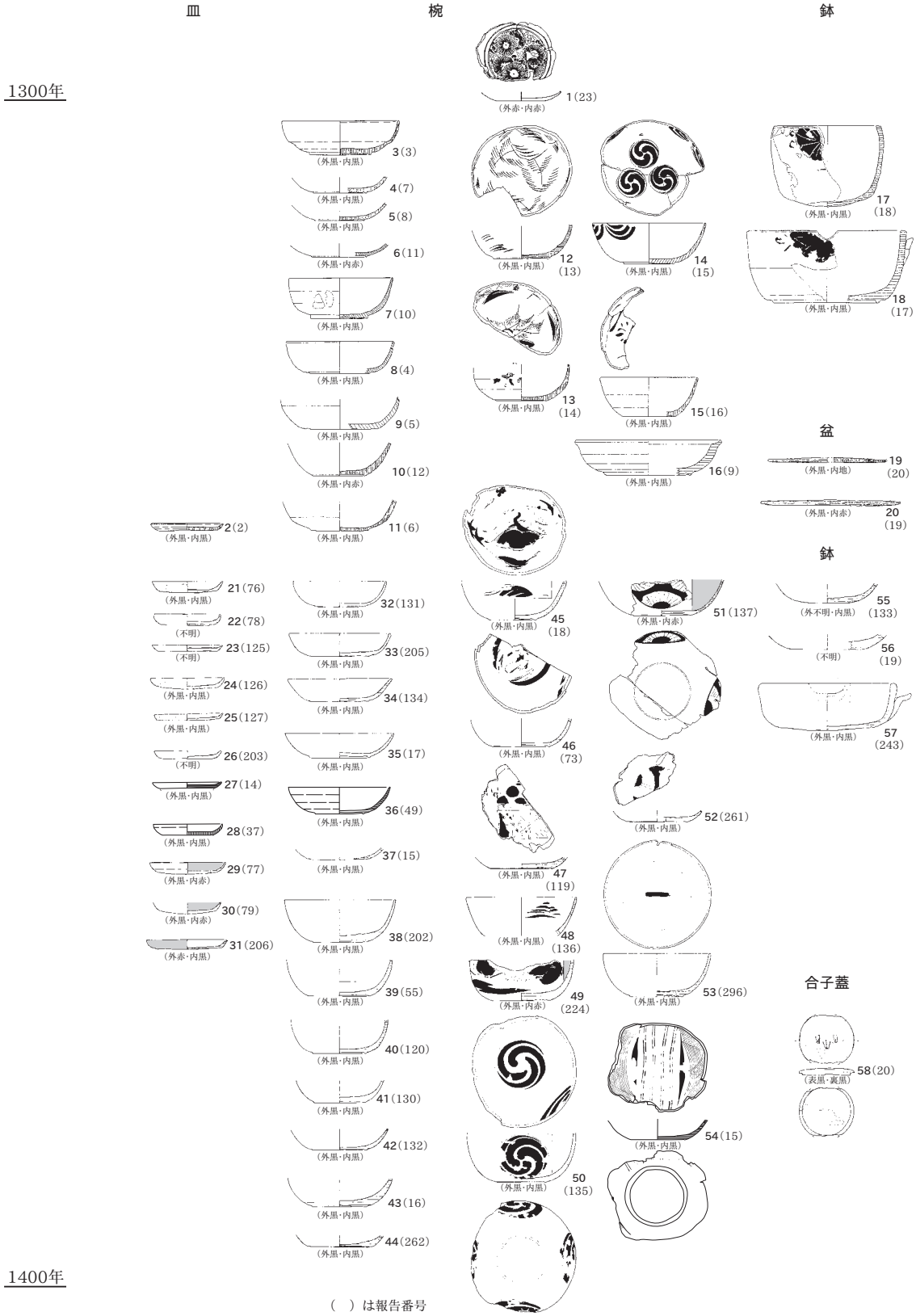
第 30 表　小坂居付遺跡漆器内訳

小坂居付遺跡　　漆器は椀･皿が主体で片口鉢･鉢、蓋･曲物の容器がわずかに見られる程度である。7 点のみ塗膜分析を行った。206 の皿は外面が朱漆、79 の皿は内面が朱漆、137 の椀は内面が朱漆、129・265 の椀は外面が朱漆であった。この時期に一般的に普及している安価なベンガラではなく、高価な水銀朱であったことは特筆される。131 の総黒色椀は上質品で漆膜は 13 層に及び、樹種もケヤキである。135 の漆膜は 3 層で良品であるが、樹種は普及品のブナ属である。また、赤絵の装飾の一部に型押し（いわゆるスタンプ文）を使用したもの（135・261）も見られる。20 は合子等の蓋と考えられ、木の象嵌があることや樹種がヒノキであることを考えると西日本から搬入された上質品であろう。17 は小型の曲物の内外に黒色漆を塗ったものである。底板は欠損している。

第 30 表は漆器の内外面の上漆の色と赤絵の装飾の有無の内訳である。掲載した 41 個体中、総黒色系椀が 14 個体で 35%を占める。総黒色系椀で内面に赤絵のあるものが 6 個体で 16%、外面に赤絵のあるもの（137）が 1 個体、内外面に赤絵のあるもの（135・47）が 2 個体である。外面が黒、内面を赤で外面に赤絵があるもの（224）が 1 個体、外赤・内黒で外面に赤絵のあるもの（写真のみ 265）1 個体である。外赤・内黒の椀は石川県の遺跡で数遺跡に出土例があるが極めて少ない。内・外面ともに赤色（いわゆる皆朱漆器）で更に内面に赤絵が描かれるものが 1 個体（写真のみ 129）ある。皆朱漆器では県内の最古級か。皿は総黒色が 4 個体（76・126・127・14）で 11%、内面赤色が 2 個体（77・79）、不明が 3 個体である。鉢は総黒色の片口鉢（243）が 1 個体とほか 2 個体である。

器形は、椀は口径 12 ～ 14cm 未満で高さ 3cm 前後、器高指数 3 未満の身の浅い器形のものと、口径 14cm 以上で高さ 5cm 以上、器高指数 3 以上の身の深い 2 つの器形がある。赤絵のあるものは身の深いものがほとんどである。高台は低く細い輪高台がほとんどである。皿は口径 8 ～ 9cm 前後、高さ 1 ～ 1.5cm 前後のものが中心で、内外面に赤漆を塗ったものがある。ほとんどが総高台である。206 の外面赤色系のものは口径 10.3cm と大きめである。

15 世紀に入ると扁平な皿がほとんど見られなくなり、皿の数自体が減少する［水澤 2009］ことから、本遺跡の漆器類は扁平な皿が 10 個と一定量あることから 14 世紀代である土器・陶磁器の年代観と矛盾しない。本遺跡と浦廻遺跡の椀は身の浅いものと深い物があり、輪高台が多いという共通性がある。浦廻遺跡より本遺跡のほうが、赤色系漆器が多いのは遺跡の存続期間が長いことや遺跡の性格が異なることと関係すると考えられる。



1：『馬場屋敷遺跡』［川上・遠藤1983］
2～20：『浦廻遺跡』［本間ほか2003］
21～58：『小坂居付遺跡』［本報告］

第46図　13世紀末～14世紀の漆器（白根地区）

2）シタン類製刀子柄について

図版 78–193 の刀子柄について樹種同定を行ったところシタン類という結果が得られた。シタンは主に東南アジアからインドに自生し、日本には自生していない貴重な材である。シタンは第Ⅵ章 7 でもあるように東大寺正倉院御物の五弦琵琶などの楽器等に使用され、現在も家具等に使用されている銘木である。本遺跡では刀子の柄の生産を行っていることから、製品が搬入されたのではなく素材が搬入されたものと考えられる。

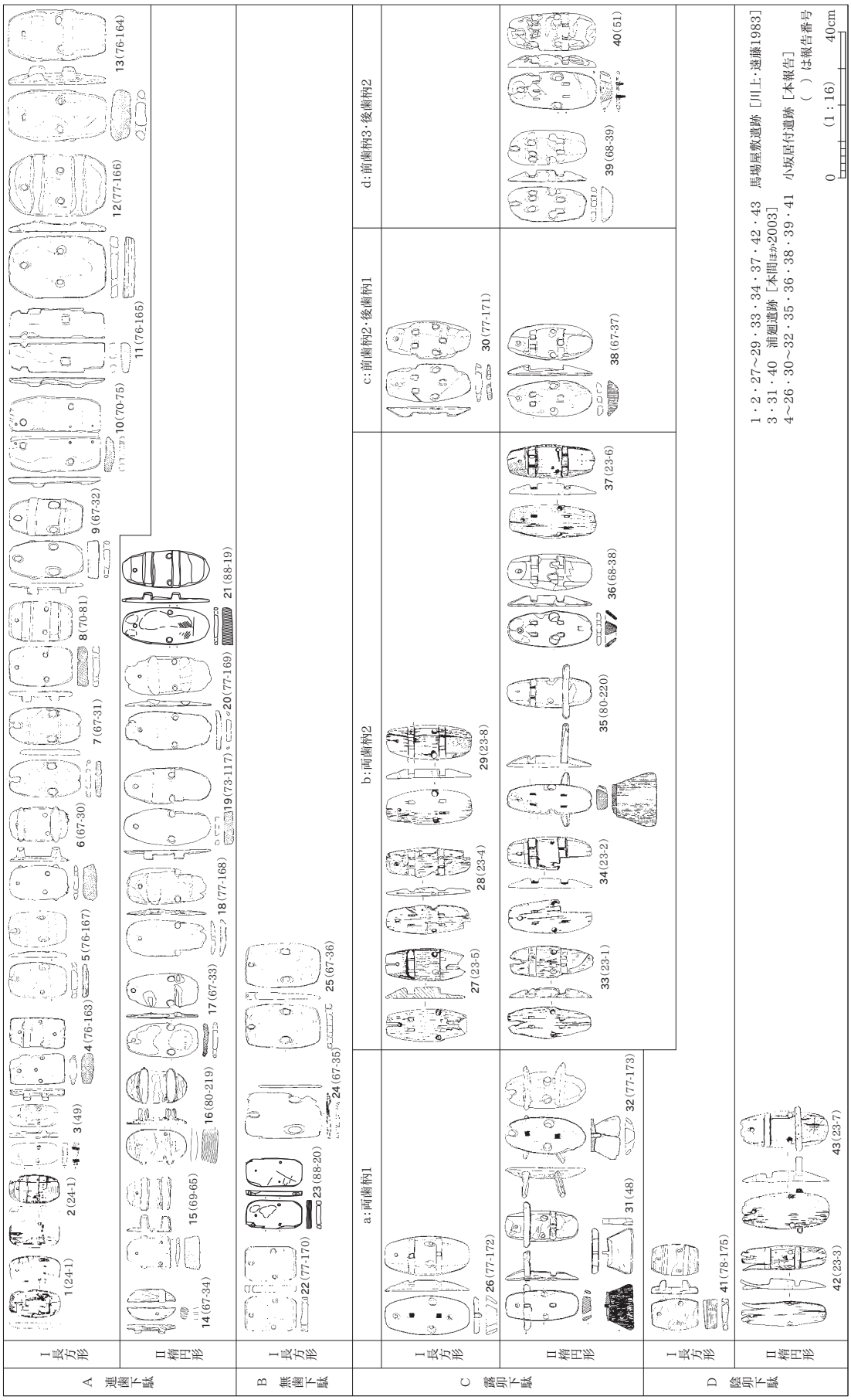
シタンの交易品としての考古学的調査としては、朝鮮半島西南部の道徳島沖で発見された新安沈船（鎌倉時代末･元亨 3（1323）年（本遺跡第一号木簡の年号と同じ）以降に京都の東福寺や筥崎宮･博多の商人らが荷主となった船）の積荷にシタンの丸太が約 1000 本あり、日元貿易の商品のひとつであったことが明らかになっている［関 2006］。このように日元貿易で日本に入ってきた「唐物」は宴や儀式･法要の室礼、法会の捧物･贈答品等に利用されていた［関 2002］。全国の発掘調査で出土した木製品の中でシタンと同定されたものは、近世の寺院・武家屋敷から出土した櫛や城郭から出土した小物入れなどわずかで、中世のものは知られていないようである。しかし、樹種同定が行われているものは、出土した木製品の中でも少数であると考えられることから、新安沈船のように相当数の輸入が想定され、地方に搬入されたと考えられる。一旦博多に入った舟が荷を積み替え、日本海を通り蒲原津に入り信濃川水系を上り、本遺跡にもたらされたのであろう。

3）下駄について

第 47 図は同時期で近接する本遺跡と馬場屋敷遺跡・浦廻遺跡出土の下駄を本遺跡の分類（器種：連歯・無歯・差歯、台部平面形：長方形・楕円形）に従い大きさ順に並べたものである。歯が欠損しているものもあるので歯の分類については、差歯下駄の枘穴の数の分類までとしている。本遺跡出土の連歯・長方形のものは小型品から大型品まであるが、楕円形のものは小型品から中型品に限られる。無歯下駄も小型品と中型品に限られる。差歯下駄は楕円形が多いが枘穴の数はａ～ｄ類まで１～２個で分散している。ただし、馬場屋敷遺跡のものを入れると圧倒的に長方形・楕円形共にｂ類の枘穴が前後共に２個のものが優位となる。馬場屋敷遺跡出土のものは法量・枘穴の数共に均一性があることが特徴である。

これまで馬場屋敷遺跡については､集落内での下駄生産説が複数見られる［四柳 1996］［田村 1996］［飯村 2001］が、未成品の有無が不明である。単独で出土した歯について未成品とする意見もあるが、本遺跡でも台部から外れてしまった歯は一定量存在することから疑問がある。馬場屋敷出土の下駄の歯の底面には砂粒がめり込んでいるものが定量ある（渡邊朋和氏ご教示）ことから、使用したものであることは明らかであろう。馬場屋敷遺跡での下駄生産については､出土遺物の詳細な観察からの再検証が必要であろう。

本遺跡と浦廻遺跡出土の下駄で特徴的なものが、差歯下駄で歯の枘穴が前３・後２のｄ類としたもので各１個の出土である。県内最多の 37 点の下駄を報告している出雲崎町寺前遺跡［高橋ほか 2008］でもこのタイプは報告されておらず、地域的な特徴であろうか、県内・北陸でも類例を知らない。露卯下駄は下駄の中では製作技術的に大変難しいとされる。枘穴は少ない方が作りやすいであろうが、台板との安定的な接合を考えれば１個より２個の枘穴のほうが、強度が保てると考えられ、全体に前２・後２のｂタイプが多い。３個の枘穴は製作技術も更に精巧さを求められ量産には向かないと考えられる。



第47図　13世紀末～14世紀の下駄（白根地区）

4）木簡について

a　第 一 号 木 簡

第一号木簡（図版 67-255）は茅札である。釈文は以下のようで「／」は改行を示す。

・「○＜吉ゑのかや／七月中／元亨三年／（花押）＜」

・「○＜　　（花押）＜」　　92 × 41 × 3　011 型式

出土状況と形態

第一号木簡は 2 枚の板に挟まれた状態で屋敷地である 8G1 グリッド SR1-3 層の腐植土から出土した。上の挟み板が上を向いた状態で、上の板を外したところ表の文字が見え木簡と判明した。3 枚の板は下端がそろった状態であった。

木簡を挟んでいた板については、これまで適当な言葉が見つからず、蓋板などとして古代の封緘木簡との類似性を考えていた。しかし、中世の興福寺所蔵典籍文書にある紙の文書を挟んでいる板を「挟み板」と称している［吉川 2008］ことから、本遺跡のものは木簡を挟んだものであるが、同じく「挟み板」と称することとする。

文字のある茅札本体は長方形の板で上部中央に文字を避けて穿孔し、この部分から縦に 2 枚に割れており、下部にも 2 か所小さな穿孔がある。また、左側面の上下に浅い切り込みがある。下部の穿孔は表の文字を避けて開けられた補修孔と考えられる。孔には、撚りのかかっていない繊維の束を 2 回通して表で本結びし、左の繊維端を上の束の下にくぐらせている痕跡が残る。割れた板を補修したものの、孔の位置が不安定なことから更に茅札より一回り大きな挟み板を作成したのだろう。挟み板の 2 枚は重ねて上部中央に穿孔している。木簡を挟んだ後、3 枚の板が離れないように挟み板の両側面の上下に切り込みを入れている。紐等で結束したときの痕跡が板の外側に残る。茅札の左側面の切り込みはこの時にできたもので、発行時にはなかったと考えられる。

茅札の類例は、新潟市南区の馬場屋敷遺跡［川上・遠藤 1983、相澤 2010、相沢 2010］、大阪府枚方市津田トッパナ遺跡［宇治田 1987］、富山県道場Ⅰ遺跡［森 2004］があり、いずれも 13 ～ 14 世紀代の遺跡である。静岡県焼津市道場田遺跡［原川ほか 1983］のものは 16 世紀代である。形態には共通性が見られる。津田トッパナ遺跡の山札（入会山への入山証）は上端が山形で上下に文字を避けて穿孔がある。道場Ⅰ遺跡の山札・茅札は長方形で貫通する穿孔が 4 か所、裏には貫通していない穿孔が 2 か所あり、両側面には上下に切り込みがある。穿孔は文字を切っていることから発行後のものである。道場田遺跡のものも長方形の板に上部中央に文字を避けて穿孔がある。馬場屋敷遺跡の第 1 ～ 4・7 号木簡・茅札は長方形の板で 1 ～ 2 か所の穿孔がある。文字を避けて穿孔しているため第 3 号木簡は下部中央に開けている。

このように茅札には穿孔が共通してみられる。発行後に穿孔し紐を通し茅刈りに常に携行することが考えられる。代官等の求めに応じ、すぐに提示しなければならなかったのであろう。作業中に破損した茅札には挟み板が作られ補強されたのである。

本遺跡第一号木簡の意義は茅札の類例が増加したというだけでなく、茅札の発行から使用状況、補修方法、保管方法などを考える上で一連の動きが見えることである。

釈文について

第一号木簡の表の文字は三行書きで花押は下部中央に大きく書かれる。元亨 3 年は 1323 年、鎌倉時代末である。裏面は花押のみが下部中央に書かれるが、表の花押とは別で書き手が異なると考えられる。

茅札は、前述の馬場屋敷遺跡出土木簡に複数の資料があり全国的に注目された[1)]。「よしえのかや」と地名まで本遺跡と共通するものがある。県内での茅札の出土は、本遺跡が2例目である。馬場屋敷遺跡の茅札にある花押と焼印は、茅札を発行できる山野の支配者が花押を書き、後に山野の現地を管理する代官などが焼印を加えたのではないか。花押と焼印はともに支配者側の加えたものではあるが、その主体は異なるとされる［石井 1988］。馬場屋敷遺跡の茅札は正応2（1289）年から正応6（1293）年のものがあり、本遺跡とは30年以上の隔たりがあり、当然代官の交代が考えられ、13世紀末の代官は焼印を使用し、14世紀前半の代官は花押を使用したと推測できる。

茅札は領主が与える茅場の茅を刈る許可書である。茅場は乾元2（1303）年の越後国佐味庄の地頭「大見頼資所領配分目録」［新潟県史資料編2中世二 1983］では、次女に譲与した同庄河井の所領が田在家と「かやば」であった。地頭が茅の採取地を囲い込んでいた［石井前掲］とし、本遺跡や馬場屋敷遺跡出土の茅札を発行したのもこうした領主であったと思われる。「よしえ（ゑ）」の地名については、現在も本遺跡から1.2km離れた中ノ口川対岸に「吉江」の地名が残る。「吉江」の茅の伐採許可札が小坂居付遺跡と馬場屋敷遺跡（庄瀬地区）に残るということは、現在に残る吉江・小坂・庄瀬の範囲は中世においては同一の生活圏と考えられる。これまで永正年間（1504～1521年）に作られた「蒲原郡白河庄等反銭帳」の記載から白根郷のほぼ中央にある蓑口までが青海荘とされていた。白根の北部は永正12～14（1515～1517）年に書かれた「越後國諸村御布施等の日記抜書」［天理出版部 1986］に「ゑちこの国とミ田の庄」「富田ノ庄しろね」とあり、蓑口から北側にある「しろね」が「富田庄」であった可能性が指摘されている［井上 1990］。吉江・小坂・庄瀬の範囲は16世紀前半の段階では、「青海荘」「富田庄」に分かれるが、14世紀前半の段階では同一の生活圏であったということである。

一般に茅は茅葺屋根などに代表される屋根材を指す。屋根材としては、地域ごとに使用される植物が「ススキ」や「アシ（ヨシ）」等のイネ科の多年草や、稲わら等の身近な材料が使われている。

屋根用の茅は青いうちに刈ると葺き材としての耐久性に乏しいものになるので、十分に枯れてから刈る必要があり、北日本では雪の降る直前の10月から11月が一般的である。新潟県出雲崎町では、秋末にまだ葉のある時に刈り干すものを「ハガヤ」、春になって刈るものを「ハネス」と呼んでいるが、屋根用としては、ほとんど春刈りである［出雲崎町史編さん委員会 1987］。馬場屋敷遺跡の茅札で月が記載されるものは第3号木簡の10月、第2号木簡の正月、第1号木簡の2月と秋から冬季の時期のものである。これまで、第1・2号木簡が正月とされていたので新年を期して新旧の茅札の切りかえが行われたのではないかとされていた。しかし、釈文の訂正により10月はいわゆる「ハガヤ」、正月・2月は「ハネス」を刈る許可証ではないかと考えられ、茅刈りの許可証の有効期限は1年ではなく月単位の可能性が出てきた。本遺跡の茅札は7月中とその時期に大きな差がある。7月中に茅を刈れという内容であれば、青い茅を刈ることになり、家畜の飼料・敷草か緑肥用であろう。あるいは、屋敷地造成時に排水効果を期待して入れた茅かもしれない。近世の嘉永7（1854）年に書かれた岩船郡神林村板垣家の「農業方日記」によると「刈敷入」「刈敷刈」「肥草刈」「干草刈」「馬草刈」の作業は稲刈り前の6・7月に限られることが知られる［新潟県 1980］。

1）馬場屋敷遺跡出土の木簡については、近年資料の追加と釈文の訂正［相澤 2010、相沢 2010］が行われたのでそれに従う。

b　第 二 号 木 簡

第二号木簡は、屋敷地 6E11 グリッド SR1–3 層検出土坑 SK179 の底部から文字面を下にした状態で出土した。下部の先端が細く加工されている。釈文は以下のようである。「し」は変体仮名の「志」を使用している。

「しろわせ　さとう / 三郎」　　164 × 27 × 3　051 型式

しろわせについて

「しろわせ」は米の品種であることから第二号木簡は種子札（たねふだ）である。「しろわせ」は、古代から栽培されていた品種であることがわかっている。福島県会津若松市の矢玉遺跡（奈良時代後半～平安時代前半の陸奥国会津郡家関連遺跡）八号溝出土 13 号木簡に「< 白和世種一石」、三八号土坑出土 2 号木簡に「< 白和世種一石」と書かれた付札が出土している。「白和世」＝「白早稲」の意である。近世の各地の農書類に「しろわせ」という品種が見えるとして、福島県、青森県、山口県、静岡県の資料があげられる［平川 2003］。新潟県でも天和元（1681）年には魚沼で「しろわせ」の栽培が行われている［風間 2000］。本遺跡の付近では寛保 2（1742）年の「越後国蒲原郡小口村明細村鑑」[1]（旧新津市）に早稲品種として「白早稲」の記載がある。また、新発田藩が文政 13（1830）年に作成した『北越新発田領農業年中行事』［土田ほか 1980］に「しろわせ」の品種が見え、新発田藩の三組（領内北蒲原郡の総称で新発田組･五十公野組･川北組）、新津郷（領内中蒲原郡の総称で新津組・小須戸組・中之口組・横越組など）で栽培されていた。本遺跡の所在する小坂は、近世は新発田藩で新津組に隣接する。地元の農家からの聞き取りでは大正時代まで栽培が続けられていたという。この木簡の出土から「しろわせ」の栽培は、越後中蒲原郡では中世前期から大正時代まで継続していたことが証明された。また、石川県では 1965 年ころまで栽培されたという［平川前掲］。

この第二号「しろわせ」木簡は種子札として県内初の出土と考えられたが、馬場屋敷遺跡第 30 号木簡（報告書第 7 図 2、［相沢 2010］、［相澤 2010］に釈文の追加・訂正あり）にもあることが判明し、白根では広く栽培されていたことが判明した[2]。

馬場屋敷出土木簡は本遺跡と形状は同じであるが、表に「し（志）ろわせ」、裏に花押が書かれる。古代の種子札は「品種 + 数量」のみが書かれることがほとんどであり、馬場屋敷出土木簡や本遺跡の二号木簡は「品種 + 人名（花押）」が書かれることが最大の特徴である。この種子札は古代では播種の時に俵から外され、苗代に放置されるものではなく、それを管理する機関・施設に一定期間保管され、その後、ほかの文書木簡などとともに溝などに一括廃棄されたと想定されている「平川前掲」。

米の DNA 鑑定結果について

第Ⅵ章 12 で SK853 から採取した米の DNA 分析結果がある。残念ながら系統を判別する領域が揃わず、現段階では、種子札にある「しろわせ」との関係性は判別に至っていない。今後の試料の増加を期待したい。また、今回の分析は「わせ」との比較を重点としたため、モチかウルチかの判別に必要な領域の DNA の増幅は行っておらず、別途分析が必要である。

さとう三郎について

「さとう三郎」は人名と考えられるが、現時点ではどのような人物かは特定できていない。文献に越後

1）享和 3（1803）年『新発田藩越後国蒲原郡村仮名附帳』から
2）糸魚川市山岸遺跡［春日 2012］でも 13 世紀末～ 14 世紀初めと見られる「［　　］わせ」と書かれた木簡があり、種子札と見られる。

の「佐藤」姓をもつ人物が現れる資料がいくつか存在する。元弘 3（1333）年 5 月 22 日に鎌倉幕府が滅亡するが、この日、鎌倉葛西谷の合戦の時、「越州池七郎・佐藤兵衛太郎入道阿見」が、陸奥・大河戸隆行らとともに、討伐軍として参陣している（『鎌倉遺文』32647）。また、五泉市史には菅名荘の地頭かとされる菅名氏が陸奥国信夫（福島市）の庄司の佐藤氏から出た佐藤義忠が、源頼朝に仕え越後の寺泊の城に入った。その 5 男が、「越後菅名の領」を賜って菅名薩摩守忠栄と名乗ったという［五泉市史編さん委員会 2002］。元弘の資料は同時代のものであるが、五泉市史の資料は江戸時代に書かれたもので、鎌倉時代についての記事をそのまま史実とみることは難しい。いずれにしても第二号木簡は越後･白根の「佐藤」姓の新資料となる。

種子札で「品種 + 人名」が書かれる類例は、古代の福島県いわき市荒田目条理遺跡出土木簡に 1 点確認できる。古代以来、稲作は領主の強い管理統制下にあることが想定され［平川前掲］、中世においても同様と考えられる。本遺跡周辺は 14 世紀にどの荘園･国衙領に含まれるかは不明であるが、「さとう三郎」という有力者が管理していたことが判明した。この木簡が屋敷地の遺構から出土したことから屋敷の居住者が「さとう三郎」と考えられる。

c　第 三 号 木 簡

第三号木簡は呪符である。屋敷地 7H13 グリッド SR1–3 層から出土した。頭部を圭頭に切り、呪いの記号である符籙を書く。1 字目は「出」のようにも見える。最後の五芒星は墨痕が良く残る。浦廻遺跡の 52 号呪符木簡の最後に「出所」の文字が記されているが、具体的な意味は不明である。馬場屋敷遺跡出土木簡にも呪符があるが、先頭に五芒星を書くものが多い。

「（符籙）」　　278 × 48 × 4　051 型式

d　第 四 号 木 簡

第四号木簡は茅札である。8I7 グリッドの旧流路 SR2–1 層上面から出土した。形状は第一号木簡の挟み板と同じで長方形の板の両側面に上下に切り込みを入れたものである。穿孔がないことが特徴である。釈文は以下の通りである。

・「＜よしゑのかやふ / たの事 / 元亨五年□月五日＜」

・「＜　　（花押）＜」　　100 × 45 × 3　031 型式

第一号木簡と同じく「よしえ」の茅刈りを許可している。年号の元亨 5（1325）年は元亨 4 年 12 月 9 日に「正中」に改元されていることから実在しない。傍証ではあるが、「正中二年閏正月十八日」の日付を持つ「尼誓仏譲状」（新潟県史資料編 4–1965）［新潟県 1983］があることから、この時点では越後にも改元の知らせは届いている。このことから釈文の□は「正」と読める可能性が高い。また、茅札に共通してみられる穿孔がないことから使用前の茅札が廃棄されたものと考えられる。第一号木簡のところでも触れたが、石井の説に従えば、馬場屋敷遺跡では花押が上にあり、下に焼印が押されるパターンで、上の花押を書いたのが茅札の発行者､下の焼印が現地の代官などと推測される。本遺跡の第一号木簡の場合では、表に花押を書いたのが発行者、裏面の花押を書いたのが現地の代官等と考えられる。第四号木簡の場合、花押が 1 つであることから、発行者が書いたものであると考えられる。新年に発行する茅札を書いて用意していたが、改元されたため廃棄したのであろう。両側面の切り込みは各集落に発行する複数の茅札を紐などで結束する為のものと推測される。

3　総　　括

ここまで屋敷地と水田との関わりや水田の変遷、個別の遺物について述べてきたが、簡単に総括したい。

A　屋敷地と水田について

屋敷地が造成されているところは、自然堤防の裾から沖積地との境のようなところである。決して条件の良い立地ではない。屋敷地の選定は在地領主の指示によると考えられ、水田開発の為に作られた屋敷であろう。屋敷地の造成は盛土を行って整地している。調査できた屋敷の範囲は 1,100m^2 ほどであるが、複数回の盛土と自然堆積で厚さは 60cm に及び、660㎥以上の土砂が必要であり、大規模工事と考えられる。盛土の一部には炭化物や灰・樹皮・茅を入れ、排水の効果を得ようとしたものと考えられ、当時の土木技術の一端を見る。その後、周囲に溝を掘りヤナギやナシの木を植え屋敷の景観を徐々に整えていったと考えられる。ヤナギを植栽した部分については、一旦灰や炭化物が多い柔らかい埋め土を取り除き、砂交じりのしまりのあるシルトで高く盛ってから植栽を行っている。溝については、屋敷内と比べ出土遺物が極端に少ないことから、水田との関係（水路として使用）もあることから、江浚いなどを行い管理が行き届いていたことをうかがわせる。

屋敷地の幅は南西側が約 12m、北東側が約 30m と広く、長さは 67m 以上で変形している。水田区画との関わりや地形の制約があってこのような形となったと考えられる。水田開発したものの、その後の耕作は順調ではなく、収穫量も少なく度重なる水害にも襲われる。どの耕作土もプラントオパールの産出状況が極端に少ないのはこれが原因であろう。13 世紀後半～ 14 世紀前半に造成が始められた屋敷地も 14 世紀後半には廃絶し、全面が水田（Ⅷ層水田）化している。Ⅷ層の水田も長くは耕作されず、周囲は 14 世紀末～ 15 世紀後半の間は潟端のような滞水域となり、途中に大規模な地震災害にも見舞われている。屋敷は自然堤防上に移転し集村的な集落を形成したと考えられ、この集落が 16 世紀前半には「しろね」の地域に含まれ「富田庄」と呼ばれたのであろう。再び小坂の地に人々の活動痕跡が現れるのは、近世（Ⅵ層）に入ってからである。慶長 3 年（1598 年）に新発田藩領となってからは、また新田開発がすすめられている。江戸時代の享保年間から明治 14（1881）年までの約 105 年間で、信濃川の長岡市付近から下流での破堤回数は 98 回に上り［農業発達史調査会 1959］、水害の被害はほぼ毎年のことであった。河川改修や土地改良が進んでもこのような状態である。本遺跡の 4 層に累積する洪水砂に埋まった水田は、方法は明らかでないがほぼ元の区画に復元して耕作を継続しており、新田開発にかける農民たちの苦闘の跡である。

B　屋 敷 内 の 生 業

検出された遺構と出土した豊富な木製品をはじめとする遺物から、屋敷内で行われていた生活の一旦が見える。まず、建物は 1 棟しか認められなかったが、多くの柱根が検出されたことから屋敷内には複数の建物があったと考えられる。建物の屋根は茅葺であったと考えられる。これは茅葺に必要な茅針が複数出土していること、1 月に発行予定だったと見られる第四号木簡・茅札の出土からである。茅針はこれまで器種名が不明であったが、完形品（図版 78-196）が出土したことから、現在に残る民具と比較し特定できたものである。中世には『職人尽絵』等に木羽葺き職人は載るが、茅葺き屋根は専業の職人が行うのではなく、集落全体で協力して屋根葺き作業を行ったためか職人としては掲載されていない。

木工品では未成品があることから、確実なのは刀子の柄・鞘、鎌の柄の製作と把手の製作である。刀子本体は鍛冶関連遺構が検出されていないことから、製作せず搬入していた可能性もある。編組製品ではスギの籤を使用した網代組みの製品の一部と籤を束ねたものが出土している。また、土坑内に刀子柄と薄く細長く削られた材が大量に入っていたSK534もあり、周辺での作業が考えられる。また、筵や俵編み等に使用する木錘も出土していることからこれらの製作も考えられる。米の収納には必需品である。また、土錘と鉄製の鉤が出土していることから近隣の川（信濃川水系）や潟等で漁業もおこなっている。近世には信濃川で獲れた鮭が将軍家に献上され、新発田藩にも納められている。ほかに水田耕作に必要な鎌と砥石も出土している。水田は湿田と考えられ田下駄が出土している。また、畑と見られる畝状小溝が検出されており、作物の生産が行われている。自然科学分析では、ムギ、豆、メロン類、ヒエ近似種などの種子が出土していることからこれらの作物を生産していた可能性がある。これらの収穫物・生産物は屋敷内での消費とともに税の一種である公事の可能性も考えたい。

形代を使用する祭祀についてはすでに述べたが、ほかに仏具である鉄椀と鉄皿が各１点出土しており、遺構としては検出できていないが仏間のようなものがあったか、僧侶の往来が考えられる。県内では中世に入ると宗教関連の金属製品は多数出土しているが、金属製の椀・皿が出土している遺跡は胎内市下町・坊城遺跡［水澤 2001］の鉄椀と新発田市宝積寺館跡［田中ほか 1990］の銅椀など少数である。

本遺跡の調査から鎌倉時代末～室町時代の白根郷の１つの屋敷地の様相が明らかになったが、馬場屋敷遺跡との関係も含めさらなる検討が必要である。

要　　約

1　小坂居付遺跡は新潟県新潟市南区小坂字居付 177 番地ほかに所在する。

2　遺跡は越後平野の沖積地、信濃川の支流である中ノ口川右岸の自然堤防の縁辺に位置する。標高は約 0.3m ～ 0.8m で現況は畑地、水田、神社跡地である。

3　発掘調査は、一般国道 8 号白根バイパス建設事業に伴い、2009 年～ 2011 年までの 3 か年で延べ 22,100m^2 調査した。

4　中世前期の鎌倉時代末から室町時代（13 世紀末～ 14 世紀代）を中心とする屋敷地と最大 5 面に累積する水田を検出した。

5　屋敷地の周囲には区画溝が廻っており、掘立柱建物 1 棟をはじめ多数の柱根・土坑・溝・ピット・杭列等を検出した。屋敷地の西辺に約 2 ～ 3m 間隔で 24 本ヤナギが植栽されていた。屋敷地からは少量の土器･陶磁器をはじめ大量の木製品が出土した。屋敷地の周囲では水田が広がり､度々の洪水に遭っていた。また、屋敷地が消滅した後も水田に改変されていた。

6　遺物は土器・陶磁器類では青磁・珠洲焼・瀬戸焼・美濃焼・土師質土器が少量出土している。金属製品は鉄椀・鉄鍋・鋏・刀子・鉄鏃・錐・鑿・装飾金具・刀の拵の一部である返角等が出土している。石製品は硯・砥石が出土している。最も大量に出土しているのは木製品で、木簡・漆器椀皿・下駄・田下駄・櫛・曲物・鎌・茅針・箸状木製品・斎串・人形・鳥形・舟形・陽物形等が出土している。烏帽子の可能性がある漆膜も出土している。

7　木簡が 4 点出土している。第一号木簡は「吉ゑのかや」「元亨 3（1323）年」の年号が書かれ、茅札と考えられる。第二号木簡は「しろわせ　さとう三郎」とあり米の品種と人名が書かれ、種子札と考えられる。第三号木簡は呪符で符籙が書かれる。第四号木簡も茅札で「よしゑのかや」「元亨 5（1325）年」の年号が書かれる。

引用・参考文献

相澤　央　2010　「馬場屋敷遺跡出土木簡について」『平成 21 年度新潟市文化財調査概要』 新潟市教育委員会

相沢　央　2010　「釈文の訂正と追加 新潟・馬場屋敷遺跡（第七号）」『木簡研究』第 32 号　木簡学会

青木　学ほか 2009　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 192 集 大館跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

味方村　2000　『味方村誌通史編』 新潟県味方村誌編纂委員会　新潟県西蒲原郡味方村

新井市教育委員会　2000 「高柳遺跡群」『新井市発掘 10 年の歩み』 新潟県新井市教育委員会

荒川隆史・加藤　学　1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 93 集 和泉 A 遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史ほか 2004　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 133 集 青田遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史ほか 2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 153 集 大坪遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒谷伸郎ほか 2010　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 215 集 山口遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

安藤邦廣　1983　『茅葺きの民俗学』（株）はる書房

諫山えりか 2004　『新潟市山木戸遺跡 マンション等建設予定地内発掘調査報告書』 新潟市教育委員会

飯村　均　2001　「Ⅳ生産と技術 3 生産の用具」『図解・日本の中世遺跡』 東京大学出版会

石井　進　1988　「中世木簡の一形態 ― 山札・茅札についての覚書 ―」『木簡研究』第 10 号　木簡学会

石川智紀ほか 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 103 集 新保遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀ほか 2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 181 集 田屋道遺跡Ⅰ・宮の越遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

石村真一　1997　『桶・樽Ⅲ』ものと人間の文化史 82-Ⅲ　法政大学出版局

出雲崎町史編さん委員会　1987 『出雲崎町史 民俗・文化財編』 新潟県三島郡出雲崎町

五十川伸矢 1992　「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告第 46 集』 国立歴史民俗博物館

板垣家　1980　「農業方日記」『新潟県史資料編 8 近世三 下越編』 新潟県

伊藤啓雄　2006　「新潟県における中世土師器皿と輸入陶磁器・瀬戸美濃製品―中世後半～近世初頭の様相―」『第 19 回北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』 北陸中世考古学研究会

井上慶隆　1990　「庚午随筆」『かみくひむし』第 76 号　かみくひむしの会

岩本正二ほか 1996　「金属製品」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』 広島考古学研究会

宇治田和生 1987　「大阪・津田トッパナ遺跡」『木簡研究』第 9 号　木簡学会

潮田鉄雄　1973　『はきもの』ものと人間の文化史 8　法政大学出版局

遠藤恭雄　2004　『新潟県豊栄市下前川原遺跡発掘調査報告書 下前川原遺跡』 新潟県豊栄市教育委員会

大平明夫　1992　「完新世における新潟平野北東部の地形発達史」『地理学評論』65A　日本地理学会

岡本郁栄　1986　「序章」『新潟県史通史編 1 原始・古代』 新潟県

岡本誠之　1979　『鋏』ものと人間の文化史 33　法政大学出版局

小熊博史　1990　「長岡市乙吉町龍穏院所蔵の古代・中世遺物」『長岡市史研究第 1 号』 新潟県長岡市

小田由美子ほか 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 99 集 堀越館跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小山田宏一 2008　「敷葉工法の再検討」季刊考古学第 102 号 『特集土木考古学の現状と課題』（株）雄山閣

春日真実　2000　「西蒲原地域における古代・中世の土器編年」『吉田町史資料編 1 考古・古代・中世』 新潟県吉田町

春日真実　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 123 集 沖ノ羽遺跡Ⅲ C 地区』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2008　「越後における古墳時代～中世の柱材について」『新潟考古』第 19 号　新潟県考古学会

春日真実ほか 2000　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第97集 大武遺跡Ⅰ（中世編）』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
春日真実ほか 2012　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第228集 山岸遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
風間謙治　2000　『越後．佐渡．水稲品種考』
加藤　学ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 仲田遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
加藤　学ほか 2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第159集 用言寺遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
加藤　学ほか 2010　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第223集 村前東Ａ遺跡 村前東Ｂ遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
加藤　学ほか 2011　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第225集 須沢角地遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
川上貞雄・遠藤孝司　1983 「馬場屋敷下層遺跡」『白根市文化財調査報告（2）馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』 新潟県白根市教育委員会
河野眞知郎　2001　「Ⅶ祭祀と葬送 1 様々な祭祀・呪術」『図解・日本の中世遺跡』 東京大学出版会
黒崎　直　1994　「生活の中の構造物」『季刊考古学』第47号　雄山閣出版
黒埼町町史編さん原始古代中世史部　1998 『黒埼町史資料編1 原始・古代・中世』 新潟県黒埼町
小池義人ほか 1994　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第59集 細池遺跡・寺道上遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
小山正忠・竹原秀雄　1995 『新版標準土色帖』 日本色研事業（株）・富士平工業（株）
五泉市史編さん委員会　2002 『五泉市史通史編』 新潟県五泉市
五泉市史編集委員会　1994 『五泉市史資料編1 原始・古代・中世』 新潟県五泉市
斎藤　亨　1998　『刈羽村埋蔵文化財調査報告書 第3集 払川・山ノ脇遺跡』 新潟県刈羽村教育委員会
坂井秀称ほか 1987　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第48集 国道116号埋蔵文化財調査報告書 三島郡出雲崎町番場遺跡』 新潟県教育委員会
佐藤友子ほか 2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第164集 野中土手付遺跡 砂山中道下遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
佐藤友子ほか 2010　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第216集 柄目木遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
斎野裕彦ほか 1987　『仙台市文化財調査報告書 第98集 富沢　－富沢遺跡第15次発掘調査報告書』 宮城県仙台市教育委員会
品田高志　1997　「第2節 越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸 ―考古学が語る社会史―』 北陸中世土器研究会
品田高志　1999　「越後における中世後期の土師器皿」『中近世土器の基礎研究XⅣ』 日本中世土器研究会
白根市　1989　『白根市史巻7 通史』 新潟県白根市
上越市教育委員会　1993 『子安遺跡現地説明会資料』
鈴木公雄　1999　「出土備蓄銭銭種構成の考古学的分析」『出土銭貨の研究』 東京大学出版会
鈴木俊成　2011a　『埋蔵文化財講座①発掘調査が語る新潟の米作り』 新潟県教育委員会
鈴木俊成　2011b　『上道下西遺跡報告会資料』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木俊成ほか 2012　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第231集 上道下西遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
関　周一　2002　「唐物の流通と消費」『国立歴史民俗博物館研究報告第92集』 国立歴史民俗博物館
関　周一　2006　「香料の道 再考」『前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義』平成14年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（2））研究成果報告書
高橋　保ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第114集 岩倉遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋　保ほか 2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第157集 住吉遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋　保ほか 2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第189集 寺前遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋保雄ほか 2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第172集 鴨深甲遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
田中恵津子ほか 2006 『三条市文化財調査報告書 第15号 西吉津川遺跡・白山Ｂ遺跡・府敬遺跡』 新潟県三条市教育委員会
田中耕作ほか 1990　『新発田市埋蔵文化財調査報告 第13 三光館跡・宝積寺館跡』 新潟県新発田市教育委員会
立木宏明ほか 2002　『新津市埋蔵文化財調査報告書 内野遺跡』 新潟県新津市教育委員会
土田隆夫ほか 1980　「北越新発田領農業年中行事」『日本農業全集第25巻』 社団法人農山漁村文化協会
鶴巻康志　2004　「土師器からみた中世の小地域圏 ―新潟市北部阿賀北地方を中心に―」『中近世土器の基礎研究XⅧ 中世土器研究の今日的課題 ―土器編年と中世史研究―』 日本中世土器研究会
鶴巻康志　2005　「新潟県北部の中世陶器窯」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』
鶴巻康志　2006　「新発田城跡」『第19回北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』 北陸中世考古学研究会
鶴巻康志・水澤幸一ほか 1990 「越後国阿賀北地方の中・近世土師器編年」『東北地方の在地土器・陶磁器Ⅱ東北中世考古学会
天理図書館善本叢書和書之部編集委員会 1986 「橋村家文書32 越後國諸村御布施等の日記抜書」『天理図書館善本叢書和書之部68巻 古文書集』 天理大学出版部・八木書店
戸根与八郎 2003　「子安遺跡」「池田遺跡」『上越市史叢書８ 考古 ―中・近世資料』 新潟県上越市
戸根与八郎 2004　「書評 一般国道白根バイパス関係発掘調査報告書（浦廻遺跡）」『新潟考古』第15号 新潟県考古学会
永井久美男 2002　『新版中世出土銭の分類図版』 高志書院
奈良国立文化財研究所 1984 『木器集成図録 近畿 古代編』
奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿 原始編』
新潟県　1980　『新潟県史資料編８ 近世三』
新潟県　1983　『新潟県史資料編４ 中世二』
新潟県　1987　『新潟県史通史編２ 中世』 新潟県
新潟県教育委員会 1976 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第６集 長所遺跡・蛇山遺跡・地蔵塚』 新潟県教育委員会
新潟古砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡 ―新潟砂丘の形成史Ⅰ―」『第四紀研究』13-2 第四紀研究会
新潟市史編さん原始古代中世史部会 1994 『新潟市史資料編１ 原始 古代 中世』 新潟市
新津　健ほか 2000　『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第181集 宮沢中村遺跡』 山梨県教育委員会 山梨県埋蔵文化財センター
農業発達史調査会編 1959 「蒲原平野における稲作生産力の発展過程」『日本農業発達史別巻下』 中央公論社
橋本久和　2000　「紀年銘資料を中心とした貿易陶磁器の年代観」『貿易陶磁の研究』 No.20
畑　大介　1997　「中世の治水と利水をめぐる考古学的課題」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第８集』 帝京大学山梨文化財研究所
畑　大介　2006　「中世前期の村落祭祀と串状の木製品」『鎌倉時代の考古学』 高志書院
原川　宏ほか 1983　「静岡・道場田遺跡」『木簡研究第５号』 木簡学会
平川　南　2003　「種子札と古代の稲作」『古代地方木簡の研究』 吉川弘文館
平田天秋　2006　『珠洲焼窯跡群 ―珠洲古陶関係遺跡発掘調査等事業―』 石川県珠洲市教育委員会
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』
藤澤良祐　2005　「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』
藤澤良祐　2008　『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
藤島亥治郎監修 1985 『平泉 中尊寺・毛越寺の全容』 中尊寺・毛越寺』
布施智也ほか 2002　『吉田町文化財調査報告書 第９集 北小脇遺跡、天神堂城跡、館屋敷遺跡、大橋遺跡』 新潟県吉田町教育委員会 日本芸術文化文化財総合研究所
布施智也ほか 2008　『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書 第３集 北小脇遺跡 天神堂城跡 館屋敷遺跡 小諏訪前Ｂ遺跡 大橋遺跡』 新潟県燕市教育委員会 加藤建設株式会社
府中家具　2000　「図解「指物の継手と仕口」」『府中家具用語辞典』
古澤妥史　2002　『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書 第１集 町道上遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会

北陸中世考古学研究会　1998 『北陸中世の金属器 ―生産と流通―』 北陸中世考古学研究会
北陸中世土器研究会　1996 『飾る・遊ぶ・祈るの木製用具』第 9 回北陸中世土器研究会
北陸中世土器研究会　1997 『北陸の漆器考古学　―中世とその前後―』第 10 回北陸中世土器研究会記念特集号
本間克成ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 126 集 浦廻遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
前川雅夫ほか 2007　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 176 集 窪田遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
前嶋　敏　2005　「第 2 部　文献資料と中世考古学 3　出土卒塔婆文字　浦廻遺跡」『中世の城館と集散地』 高志書院
増田一実　2006　『見附市文化財調査報告 第 28 集 八方遺跡』 新潟県見附市教育委員会
増山　仁ほか 1995　『本町一丁目遺跡』 石川県金沢市教育委員会
宮内信雄ほか 2004　『紫雲寺町埋蔵文化財調査報告書　第 3 集　二ッ割遺跡、中住吉遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 新潟県紫雲寺町教育委員会
宮田　眞ほか 2004　『五泉市文化財報告（16） 榎表南遺跡』 新潟県五泉市教育委員会
水澤幸一　1994　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第 4 集　高伝坂遺跡・中ノ沢遺跡』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　1995　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第 7 集 古館館跡Ⅱ』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　1996　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第 10 集 江上館跡Ⅳ』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　1999　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第 18 集 下町・坊城遺跡Ⅲ ～ A 地点の調査～』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　2001　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第 21 集 下町・坊城遺跡Ⅴ』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　2005a　「鎌倉後期における土器の変遷」『中条町埋蔵文化財調査報告書 第 33 集 下町・坊城遺跡Ⅵ』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　2005b　「越後の中世土器」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会
水澤幸一　2007　「第 1 部 遺棄死体の諸問題」『墓と葬送の中世』 高志書院
水澤幸一　2009　「越後の中世土器」「越後の中世漆器」『日本海流通の考古学 ―中世武士団の消費生活―』 高志書院
水澤幸一　2012　『新潟県胎内市 市内遺跡Ⅴ 下町・坊城遺跡 16 次、下町・坊城遺跡 17 次、駒込遺跡確認調査』 新潟県胎内市埋蔵文化財調査報告第 23 集　新潟県胎内市教育委員会
南　憲一　2002　『新潟市域災害年表』新潟大学災害研資料 8　新潟大学積雪地域災害研究センター
向井裕知　2008　「加賀における古代祭祀　―木製祭祀具を中心として―」『石川県埋蔵文化財情報 第19号』（財）石川県埋蔵文化財センター
村田道博ほか 2009　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 194 集 西部遺跡Ⅳ』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
森　　隆　2004　『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 22 集 道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所
山崎忠良ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 120 集 下割遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
山崎忠良ほか 2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 140 集 東原町･下沖北遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
山崎忠良ほか 2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 201 集 延命寺遺跡』 新潟県教育委員会 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
山本隆志　2010　「湿地における荘園・村落と「生業」」 国立歴史民俗博物館研究報告第 157 集　井原今朝男編『［共同研究］中・近世における生業と技術・呪術信仰』 国立歴史民俗博物館
山本信夫　2000　『大宰府条坊跡XV ―陶磁器分類編―』 大宰府市の文化財第 49 集　福岡県大宰府市教育委員会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉川　聡　2008　「文書の挟み板」『奈良文化財研究所紀要 2008』（独）国立文化財機構　奈良文化財研究所
四柳嘉章　2006a　『漆Ⅰ』ものと人間の文化史 131-Ⅰ　法政大学出版局
四柳嘉章　2006b　『漆Ⅱ』ものと人間の文化史 131-Ⅱ　法政大学出版局
四柳嘉章　2009　『漆の文化史』岩波新書（新赤版）1223　岩波書店

遺構観察表

SR1-1・2 層の遺構

掘立柱建物

種別	番号	グリッド	所属層位	桁行（m）	梁行（m）	長軸方向
SB	336	7G･H、8G･H	SR1-1 層	6.55	4.45	N-43°-W

種別	番号	グリッド	設置方法	掘形規模（cm）			柱径 / 残存長（cm）	樹種	備考	柱穴間隔（m）	
				長径	短径	深さ					
SB336	P1	8G16	掘形柱	30	22	不明	20/100	スギ	柱根図化（65-1）撹乱により掘形深さ不明。	P1-P2	2.28
SB336	P2	7G25	掘形柱	30	26	44	16/56			P2-P3	2.12
SB336	P3	7H4	掘形柱	28	24	32	18/62	ヤナギ属	柱根図化（65-2）	P3-P4	1.96
SB336	P4	7H3	掘形柱	28	24	60	16/66	ヤナギ属	柱根図化（65-3）	P4-P5	4.45
SB336	P5	7H3	掘形柱	28	24	60	16/66	ヤナギ属		P5-P6	2.15
SB336	P6	7H15	掘形柱	32	25	65	20/52		1 層から連歯下駄が出土。	P6-P7	2.24
SB336	P7	8H6	掘形柱	36	26	66	19/76			P7-P8	2.15
SB336	P8	8H2	掘形柱	52	（28）	60	13/62	ヤナギ属	柱根図化（87-1）1 層から木製品が出土。	P8-P1	4.10

土坑

※（　）は、形態については推定される形態を、数値については残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	平面形	断面形	規模（cm）			主軸方向	出土遺物	切り合い関係
						長径	短径	深さ			
SK	3	8G9･10･14･15	SR1-2	（楕円形）	（台形状）	（110）	120	30	―		
SK	4	8G1	SR1-2	円形	台形状	110	106	20	―	箸状木製品、砥石（62-11）	
SK	29	6E17･18･22･23	SR1-1	長方形	台形状	134	90	63	N-64°-E	斎串、箸状木製品、部材、串	
SK	65	5D25、5E5、6E1	SR1-2	長方形	漏斗状	188	49	46	N-48°-E	土師質土器、舟形（70-74）、連歯下駄、箸状木製品	SK164 より新しく、SK69･P64･159 より古い。
SK	69	5D25、5E4･5	SR1-2	長方形	台形状	164	94	40	N-42°-E	箸状木製品	SK65 より新しい。
SK	70	6F3・4・9	SR1-2	―	台形状	（150）	116	82	N-29°-W	串、棒状木製品	
SK	72	6D13･14･18･19	SR1-2	不整形	台形状	248	186	38	N-56°-W	烏帽子、漆器皿（70-76）、曲物側板、箸状木製品、板材、柱根	
SK	75	5C19	SR1-2	―	（台形状）	（158）	（80）	44	N-38°-W	漆器椀、漆器皿（70-77･78）、箸状木製品、杭	SD172 より新しい。
SK	85	5C24･25	SR1-2	不整形	半円状	144	134	38	N-60°-E	箸状木製品、部材、杭	SD172 より新しい。
SK	86	5D3･4	SR1-2	楕円形	弧状	172	112	26	N-28°-W	珠洲焼片口鉢、珠洲焼壺、漆器皿（70-79）	
SK	94	6E21･22、6F1･2	SR1-2	長方形	台形状	189	74	36	N-47°-E	箸状木製品、部材、不明木製品（70-80）	
SK	167	6E4･5･9	SR1-2	方形	台形状	146	106	46	（N-76°-E）	箱、箸状木製品、部材、板材	
SK	169	6E5･10、7E1	SR1-2	―	（台形状）	（154）	（120）	44	―	箸状木製品	
SK	267	5C22･23、5D3	SR1-2	（不整形）	台形状	197	（140）	42	（N-53°-E）	珠洲焼片口鉢（60-21）、箸状木製品、部材、杭	
SK	334	6F20	SR1-2	円形	孤状	92	82	20	―	土師質土器（60-22）、箸状木製品	
SK	335	6E25、6F5	SR1-2	不整形	台形状	150	（138）	83	―	火鑽臼（70-82）、下駄歯、折敷、箱、箸状木製品	
SK	381	6F19･24	SR1-2	長方形	台形状	160	90	18	N-44°-E	珠洲焼片口鉢（61-23）、箸状木製品	
SK	399	7E6･7･11･12	SR1-2	長方形	台形状	212	180	38	N-46°-E	珠洲焼片口鉢（61-26）、土師質土器（61-24･25）、曲物（71-83）、曲物蓋（71-84）、折敷底板、箸状木製品、部材	SK400 より古い。
SK	400	7E6･7･11･12	SR1-2	長方形	半円状	152	64	22	N-49°-E	部材	SK399 より新しい。
SK	410	7F11	SR1-2	楕円形	孤状	120	67	28	N-36°-E	曲物側板、串	
SK	473	6F15･20、7F11･16	SR1-2	楕円形	孤状	180	131	24	N-26°-W	箸状木製品、部材	SX332･489 より古い。
SK	488	7E20、8E16	SR1-2	（楕円形）	孤状	（145）	（90）	28	―		
SK	527	7G15･19･20	SR1-2	円形	孤状	138	132	30	―	箸状木製品	P792･SX793 より古い。
SK	529	7G12･13･17･18･22･23	SR1-2	不整形	孤状	290	185	32	N-49°-E	漆器椀、人形（71-85）、折敷、箸状木製品、部材、不明木製品（71-86）、鎹	SK621･SD445 より古い。
SK	534	7G6･7･11･12	SR1-2	方形	台形状	190	165	44	N-54°-E	珠洲焼甕（61-28）、漆器椀、刀子柄（71-87）、草履芯、曲物側板、曲物底板（71-88）、折敷、箸状木製品、杭	SK547 より新しく、SX375-8 より古い。
SK	547	7G6･11	SR1-2	楕円形	台形状	158	（88）	40	―	箸状木製品、部材	SK562 より新しく、SK534･SX365 より古い。
SK	562	7G11	SR1-2	円形	台形状	116	106	35	―	折敷、箸状木製品、部材	SK547 より古い。
SK	802	7I10、8I6	SR1-2	円形	台形状	92	82	34	―	杭、板材、角材	

柱・柱穴（1）

※（　）は、形態については推定される形態を、数値については残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	設置方法	掘形規模（cm）			柱径 / 残存長（cm）	出土遺物	切り合い関係	樹種
					長径	短径	深さ				
P	22	6F8	SR1-2	半打ち込み柱	29	18	44	20/101			柱根図化(72-89)、コナラ属コナラ亜属コナラ節
P	28	6E18	SR1-2	半打ち込み柱	46	34	44	20/95			柱根図化（72-90）、サクラ属
P	39	6E2･7	SR1-2	半打ち込み柱	35	32	52	14/90	箸状木製品		柱根図化（72-91）、クリ
P	43	6E11	SR1-1	掘形柱	32	28	28	10/31		SX5 より古い。	柱根図化（65-10）マツ属複維管束亜属
P	56	6D21	SR1-2	半打ち込み柱	24	21	34	4/45			
P	63	6D21	SR1-2	（柱穴）	26	23	52				
P	76A	6E17	SR1-2	打ち込み柱	―	―	―	10/124		SX5 より古い。	
P	76B	6E17	SR1-2	打ち込み柱	―	―	―	8/57		SX5 より古い。	柱根図化（72-92）、サクラ属
P	80	6E12	SR1-2	（柱穴）	30	24	52			SX5 より古い。	
P	81	5D15	SR1-1	（柱穴）	30	29	58		土師質土器（60-1）		
P	84	6E2	SR1-1	（柱穴）	30	22	7				
P	88	6E1･2	SR1-1	半打ち込み柱	24	―	42	14/53	箸状木製品		柱根図化（65-11）、サクラ属
P	159	5D25	SR1-2	（柱穴）	28	20	40		珠洲焼	SK65 より新しい。	
P	386	6F9	SR1-2	打ち込み柱	―	―	―	16/87			柱根図化（72-93）、モクレン属
P	414	6F15	SR1-2	（柱穴）	36	28	56		珠洲焼片口鉢（61-27）		

柱・柱穴（2）

※（　）は、形態については推定される形態を、数値については残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	設置方法	掘形規模（cm）			柱径 / 残存長（cm）	出土遺物	切り合い関係	樹種
					長径	短径	深さ				
P	447	6F15	SR1-2	掘形柱	32	30	68	15/59			柱根図化（72-94）、スギ
P	449	7F16	SR1-1	半打ち込み柱	33	26	30	12/77			柱根図化(65-12)、クマシデ属イヌシデ節
P	611	7G12	SR1-2	（柱穴）	36	30	30		砥石（62-12）		
P	620	7G7	SR1-2	（柱穴）	50	23	55		珠洲焼片口鉢（61-29）、箸状木製品	P364 より古い。	
P	750	7H9	SR1-1･2	半打ち込み柱	20	19	10	10/96		P756 より新しい。	柱根図化（65-4）、スギ
P	751	7H4	SR1-1･2	掘形柱？	—	—	—	10/40		P760 より古い。	
P	752	7G22	SR1-1･2	掘形柱	(30)	26	60	15/88		SK546 より古い。	柱根図化（65-5）、ヤナギ属
P	753	7H9	SR1-1･2	掘形柱	36	27	67	18/44			
P	754	7H15	SR1-1･2	掘形柱	32	31	60	12/100			柱根図化（65-6）、スギ
P	755	7H20	SR1-1･2	打ち込み柱？	—	—	—	4/43			柱根図化（65-7）、スギ
P	756	7H9	SR1-1･2	（柱穴）	24	20	62				
P	757	7G25	SR1-1･2	打ち込み柱	—	—	—	16/86			柱根図化（65-8）、ブナ属
P	758	7G24	SR1-1･2	半打ち込み柱	15	14	28	9/76			柱根図化（65-9）、スギ
P	759	7G19	SR1-1･2	半打ち込み柱	18	18	14	8/39			
P	760	7H4	SR1-1･2	（柱穴）	28	12	16			P751 より新しい。	
P	804	8H21	SR1-1･2	半打ち込み	35	(34)	60	14/92			柱根図化（87-2）、クリ
P	805	7H20、8H16	SR1-1･2	掘形柱	20	(15)	46	10/32			
P	807	7H20、8H16	SR1-12	半打ち込み	30	22	11				
P	818	8I2	SR1-1	掘形柱	29	(28)	34	8/43			
P	832	8H7	SR1-2	打ち込み	—	—	—	7/58			

杭列（1）

種別	番号	グリッド	所属層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	12	8F、9F・G	SR1-2	17/N-24° -E	14.8	SD111 の壁面で検出

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	12-8	9G5	4/20	ヤナギ属	(72-96)	8-1	4.2	SA	12-4	9F11	4/30			4-7	1.5
SA	12-1	9F24	4/16			1-5	0.7	SA	12-7	9F6	2/36			7-13	0.4
SA	12-5	9F23	5/43			5-9	1.2	SA	12-13	9F6	4/31			13-14	0.3
SA	12-9	9F18	4/63			9-10	0.8	SA	12-14	9F6	5/14			14-15	0.4
SA	12-10	9F17	4/54			10-11	0.6	SA	12-15	9F6	6/20			15-16	0.8
SA	12-11	9F17	3/31			11-12	0.6	SA	12-16	8F10	3/17			16-6	1.5
SA	12-12	9F17	5/46			12-2	0.5	SA	12-6	8F5	5/33			6-17	0.2
SA	12-2	9F12	11/66			2-3	0.5	SA	12-17	8F5	5/55				
SA	12-3	9F12	4/7			3-4	0.6								

種別	番号	グリッド	所属層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	13	8E・F、9F・G、10G	SR1-2	24/N-29° -E	26.5	

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	13-13	10G11	2/30			13-12	0.4	SA	13-9	9F16	8/34			9-10	0.8
SA	13-12	10G11	3/41			12-26	0.7	SA	13-10	9F16	6/31	ヤナギ属	(72-97)	10-11	0.1
SA	13-26	10G6	10/39			26-1	0.2	SA	13-11	9F16	3/27			11-15	2.1
SA	13-1	10G6	3/32			1-2	1.2	SA	13-15	8F15	4/32			15-16	0.9
SA	13-2	10G6	3/37			2-3	1.2	SA	13-16	8F15	3/12			16-17	0.7
SA	13-3	9G5	4/22			3-4	0.1	SA	13-17	8F10	4/23			17-18	0.8
SA	13-4	9G5	3/11			4-5	1.9	SA	13-18	8F9	4/38			18-19	1.3
SA	13-5	9G4	4/35			5-14	0.8	SA	13-19	8F9	5/19			19-20	1.5
SA	13-14	9G4	5/32			14-6	0.7	SA	13-20	8F3	4/37			20-23	2.8
SA	13-6	9F24	5/26			6-7	1.4	SA	13-23	8E22	6/70	スギ	建築材（72-98）	23-24	1.2
SA	13-7	9F23	4/5			7-8	3.4	SA	13-24	8E22	2/8			24-25	1.1
SA	13-8	9F17	5/2			8-9	1.2	SA	13-25	8E21	4/28				

種別	番号	グリッド	所属層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	14	8E・F、9F・G	SR1-2	20/N-32° -E	22.8	

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	14-10	9G10	2/13			10-1	0.2	SA	14-8	8F20	2/22			8-9	0.2
SA	14-1	9G10	3/29			1-2	0.6	SA	14-9	8F20	3/28			9-13	1.7
SA	14-2	9G9	4/39			2-3	0.8	SA	14-13	8F15	5/28			13-14	1.4
SA	14-3	9G4	3/28			3-4	1.1	SA	14-14	8F14	6/47			14-20	0.7
SA	14-4	9G4	2/22			4-5	0.4	SA	14-20	8F14	5/42	ヤナギ属	(72-99)	20-15	2.6
SA	14-5	9G3	4/31			5-11	2.6	SA	14-15	8F8	7/46			15-16	1.3
SA	14-11	9F22	3/33			11-12	1.3	SA	14-16	8F3	6/33			16-17	0.7
SA	14-12	9F22	7/26			12-6	2.6	SA	14-17	8F3	6/24			17-18	2.4
SA	14-6	9F16	5/39			6-7	0.7	SA	14-18	8F2	3/21			18-19	1.0
SA	14-7	9F16	5/18			7-8	0.5	SA	14-19	8E21	5/53				

杭列（2）

種別	番号	グリッド		所属層位		杭本数 / 方向		全長（m）		備考					
SA	145	9・10G		SR1-2		7/N-37° -E		4.2		SD111 の壁面で検出					
種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	145-1	10G6	3/29			1-2	1.1	SA	145-5	9G5	2/13			5-6	0.2
SA	145-2	10G6	2/26	ヤナギ属	（72-100）	2-3	0.6	SA	145-6	9G5	2/17			6-7	1.4
SA	145-3	10G6	18/11			3-4	0.2	SA	145-7	9G5	3/31				
SA	145-4	10G6	2/24			4-5	0.7								

杭・串

種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存長（cm）	備考	種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存長（cm）	備考
SX	30	6E22	SR1-2	3	63	図化（72-103）、樹種スギ。	SX	825-5	8H22	SR1-2	2	41	
SX	55	6D22	SR1-2	3	40	図化（72-104）、樹種スギ。	SX	825-6	8H22	SR1-2	2	15	
SX	97	6E19	SR1-2	2	23		SX	825-7	8H22	SR1-2	2.7	37.6	図化（87-5）樹種スギ。
SX	98	6E19	SR1-2	1	17		SX	825-8	8H22	SR1-2	1	26.5	図化（87-6）樹種スギ。
SX	151	6E18	SR1-2	3	26		SX	826	8H22	SR1-2			
SX	152	6E18	SR1-2	2	20		SX	827	8H22	SR1-2			
SX	153	6E18	SR1-2	2	17		SX	828	8H22	SR1-2			
SX	154	6E18	SR1-2	2	17		SX	829	8H22	SR1-2			
SX	439	7E21	SR1-2	10	71	図化（73-108）、樹種スギ。	SX	831	8H6	SR1-2	2.5	29	
SX	566	7G7	SR1-2	7	35	図化（73-109）ヤナギ属。P364 より古い。	SX	839	8I12	SR1-1・2			
SX	824	8H22	SR1-2	2	23		SX	840	8I17	SR1-1・2	6	66	
SX	825-1	8H22	SR1-2	2	11		SX	843	8I9	SR1-2	5	28	
SX	825-2	8H22	SR1-2	1.5	20		SX	844	8I4	SR1-1・2	2	23	
SX	825-3	8H22	SR1-2	3	44		SX	845	8I1	SR1-1・2	2	20	
SX	825-4	8H22	SR1-2	3	28		SX	846	8I6	SR1-1・2	1.5	19	

灰分布範囲

種別	番号	グリッド	層位	平面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い関係
					長径	短径	深さ		
SX	5	6E6 ～ 8・11 ～ 13・17	SR1-2	不整形	450	202	2 ～ 4	箸状木製品、杓子（72-101）、柄付木製品（72-102）、鍋（63-32・33）、釘（63-29）、鎹（63-30・31）	P43・76・77・79・80、SX78 を覆っている。SX6 ～ 9 は新旧不明。

焼土遺構

※（　）は、残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	平面形	断面形	規模（cm）				出土遺物	切り合い関係	備考
						長径	短径	深さ	赤変深度			
SX	332	6F15・20、7F11・16	SR1-2	方形	孤状	81	71	8	―	箸状木製品、部材	SK473 より新しい。	
SX	345	7H5・10	SR1-1	楕円形	―	52	32	―	4		SB336 内に位置する。	
SX	346	7G23・24、7H3・4	SR1-1	不整形	―	56	27	―	3			
SX	347	7G23	SR1-1	不整形	―	50	45	―	6			
SX	485	6F20、7F16	SR1-2	楕円形	―	39	30	―	8	箸状木製品、串	SX451 より古い。	SX451　杭径 7cm/ 残存長 16cm
SX	487	6F15、7F11	SR1-2	楕円形	―	38	26	―	3			
SX	645	7E6	SR1-2	不整形	―	（20）	（14）	―	―			個別図なし。

杭集中部

種別	番号	グリッド	層位	杭数	規模（cm）		杭径 / 残存長（cm）	備考
					長径	短径		
SX	209	5F10、6F6	SR1-2	42	198	140	1 ～ 8/4 ～ 102	SX209-4（73-107）の樹種はハンノキ属ハンノキ亜属。SX209-1（73-106）。

集石

種別	番号	グリッド	層位	礫数	礫底標高（m）	備考
					最高 / 最低	
SX	91	6D3	SR1-2	12	-0.617/-0.646	
SX	92	6D22・23、6E2・3	SR1-2	25	-0.760/-0.919	個別図なし。
SX	178	6E9	SR1-2	7	-0.898/-0.955	中心部に径 3 cm の串が斜めに打ち込まれる。個別図なし。
SX	204	6D23、6E3	SR1-2	27	-0.910/-1.104	個別図なし。

溝（1）

※（　）は、確認長・残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	断面形	規模			主軸方向	出土遺物	切り合い関係	備考
					長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）				
SD	111	5・6C、6・7D、7・8E、8 ～ 10F、9・10G	SR1-1・2	孤状	（63.8）	60 ～ 330	35 ～ 40	N-36° -E	漆器椀（69-55）、下駄歯、曲物側板、箸状木製品、部材、串、杭、錐（63-16）、銭貨（64-52）、砥石（62-2）	壁・底面で SA12・145・479、SX149・190・192・389・442・478・480・481 検出。	
SD	112	5E ～ G、6F・G	SR1-1・2	孤状	（16.6）	105 ～ 360	65 ～ 70	N-51° -E	扇（69-57）、斎串、篦（69-56）、草履芯、曲物側板、箸状木製品、板材、有孔円板、刀子（63-17）、折敷（87-3）	SR165 より新しい。	
SD	114	5D・5E	SR1-1・2	孤状	（11.4）	130 ～ 240	35 ～ 40	N-58° -E	曲物側板、箸状木製品、部材	SR165 より新しい。	
SD	129	8F12・13・17・18・22	SR1-1	半円状	（3.9）	70 ～ 98	34	N-62° -W	曲物側板		
SD	130	8F7・11・12・16・17	SR1-1	孤状	（4.5）	84 ～ 90	24	N-75° -W	箸状木製品、杭		
SD	166	6E17・22 ～ 24、6F2・3・8	SR1-2	V字状または U字状	（4.9/8.3）	35 ～ 104	18 ～ 36	N-45° -W	漆器椀、斎串、蓋、曲物側板、桶底板（73-111）、折敷底板、箱、箸状木製品、部材、串、杭、茅針（73-110）、不明鉄製品（63-34）	SK208 より新しく P24・44・49、SX25・51・95 より古い。	SD339 と同一溝か。
SD	172	5C15・19・20・24・25、6C16・21	SR1-2	孤状	（4.8/3.5）	70 ～ 100	10 ～ 26	―		SK75・85 より古い。	
SD	330	7E14・18・19・23	SR1-2	台形状	4.2	115	35	N-42° -W	曲物側板、箸状木製品、鏃（63-36・37）		

溝（2）

※（　）は、確認長・残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	断面形	規模			主軸方向	出土遺物	切り合い関係	備考
					長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）				
SD	331	7F9･10･13･14	SR1-2	孤状	4.3	44	12	N-45°-W	箸状木製品		
SD	339	7E8･9･11 ～ 13･16･17	SR1-2	U字状	(8.9)	35 ～ 100	23	N-44°-W	鄙状木製品、題箋状木製品（73-113）、針状木製品（73-112）、曲物側板、箸状木製品、部材、不明木製品（73-114）、錐	SX415、SD175 より新しい。	SD166 と同一溝か。
SD	436	7G8･11 ～ 13	SR1-2	箱状	3.6	60	35	N-37°-W	連歯下駄（73-117）、箸状木製品、部材	P600、SX574、SD593 より新しい。	
SD	445	7G13･17･18	SR1-2	―	3.1	92	30	N-40°-W	斎串、曲物底板、箸状木製品	SK529 より新しい。	
SD	448	7F18･19･23･24、7G4	SR1-2	孤状	(2.8)	50	16	N-54°-E	箱、箸状木製品	P344 より古い。	SD597 と同一溝か。
SD	461	7F19･24	SR1-2	U字状	(1.7)	50	20	N-52°-E	曲物側板、箸状木製品、部材	P471 より古い。	
SD	540	8G11･16･17･21･22	SR1-2	孤状	(3)	71	14	(N-48°-E)	箸状木製品、部材	SK539、SX794 ～ 796 より古い。	
SD	593	7G8･11 ～ 13	SR1-2	台形状	4.5	20	5 ～ 20	N-42°-W		SD436 より古い。	
SD	597	7G3･4･7･8	SR1-2	孤状	(4.1)	20 ～ 36	9	N-45°-W	漆器椀（73-119･120）、露卵下駄歯（73-118）、箸状木製品		SD448 と同一溝か。
SD	598	7F23･24、7G2 ～ 4･7･8	SR1-2	孤状	3.8	30 ～ 50	19	N-43°-W	連歯下駄、箸状木製品、部材		

樹根列

種別	番号	グリッド	所属層位	樹根本数	全長（m）	備考	
樹根列	1	5･6C、6･7D、7･8E、8･9F、9･10G	SR1-1	24	63.8	SD111 に沿って検出	
種別	番号	グリッド	長径（cm）	樹根間隔（m）		樹種	備考
樹根列	1-1	10G12	14	樹根列 1-1-2	1.6		
樹根列	1-2	10G11	16	樹根列 1-2-3	2.6	ヤナギ属	
樹根列	1-3	9G5･10、10G6	20	樹根列 1-3-4	1.2	ヤナギ属	
樹根列	1-4	9G5	20	樹根列 1-4-5	3.6		
樹根列	1-5	9F23･24	22	樹根列 1-5-6	1.6	ヤナギ属	
樹根列	1-6	9F23	24	樹根列 1-6-7	2.4		
樹根列	1-7	9F17	16	樹根列 1-7-8	3.5	ヤナギ属	
樹根列	1-8	8F15	31	樹根列 1-8-9	3.6	ヤナギ属	
樹根列	1-9	8F9	10	樹根列 1-9-10	10.0	ヤナギ属	
樹根列	1-10	8E16	9	樹根列 1-10-11	2.1		
樹根列	1-11	7E15	21	樹根列 1-11-12	4.0		
樹根列	1-12	7E8	11	樹根列 1-12-13	0.9		
樹根列	1-13	7E8	10	樹根列 1-13-14	1.5		
樹根列	1-14	7E3･7	20	樹根列 1-14-15	1.2		
樹根列	1-15	7E2	11	樹根列 1-15-16	9.8		
樹根列	1-16	7D16	12	樹根列 1-16-17	5.4		
樹根列	1-17	6D9･10	18	樹根列 1-17-18	1.6		
樹根列	1-18	6D4･9	21	樹根列 1-18-19	1.9	ヤナギ属	
樹根列	1-19	6D3･4	24	樹根列 1-19-20	2.0		
樹根列	1-20	6C23	19	樹根列 1-20-21	1.7	ヤナギ属	
樹根列	1-21	6C17･18	34	樹根列 1-21-22	2.5		
樹根列	1-22	6C11･12･17	26	樹根列 1-22-23	2.7	ヤナギ属	
樹根列	1-23	6C6･11	25	樹根列 1-23-24	6.2		
樹根列	1-24	5C18	20				

種別	番号	グリッド	層位	樹根本数	全長（m）	備考	
樹根列	2	8･9G	SR1-1	5	7.2		
種別	番号	グリッド	長径（cm）	樹根間隔（m）		樹種	備考
樹根列	2-1	9G7	16	樹木列 2-1-2	2.6	バラ科ナシ亜属	
樹根列	2-2	9G6	12	樹木列 2-2-3	1.8	ヤナギ属	
樹根列	2-3	8G10	6	樹木列 2-3-4	1.4	ヤナギ属	
樹根列	2-4	8G9	10	樹木列 2-4-5	1.7	ヤナギ属	
樹根列	2-5	8G4･9	6				

SR1-3 層の遺構

土坑（1）

※（　）は、残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	平面形	断面形	遺構（cm）			主軸方向	出土遺物	切り合い関係
						長径	短径	深さ			
SK	174	6D16･21	SR1-3	方形	台形状	112	110	65	―	下駄歯、箸状木製品	SK210 より新しく、 P74 より古い。
SK	177	6D23	SR1-3	長方形	台形状	142	(86)	43	N-61°-E	俎（79-200）、横櫛（79-201）、草履芯、折敷、箸状木製品	SK176･742 より新しく、SK678 より古い。
SK	179	6E11	SR1-3	円形	台形状	116	96	56	N-61°-W	種子札（79-204）、烏帽子、漆器椀（79- 202 ･205）、漆器皿（79-203）、箆、箸状木製品	SD268 より新しい。
SK	201	6D22･23、6E1 ～ 3･6･7	SR1-3	長方形	台形状	504	95	26 ～ 50	N-41°-W	漆器椀、漆器皿（79-206）、斎串、楔（79-209）、草履芯、曲物側板・底板（79-208）、箸状木製品、部材、串	SX205･231 より古い。
SK	206	6E18･23	SR1-3	楕円形	台形状	145	107	33	N-41°-W	曲物底板、円形板（79-212）、箸状木製品、部材、障子？（79-210･211）、串	SK29 より古い。
SK	207	6E12･13･17･18	SR1-3	方形	台形状	160	142	38	N-67°-E	漆器椀、斎串、曲物側板、曲物底板、箸状木製品、部材、脚？（79-213）	P222 より古い。
SK	211	6E7･8	SR1-3	長方形	台形状	230	132	41	N-21°-W	茅針（79-214）、曲物側板、折敷、小型蓋、有孔円板（79-215）、箸状木製品、部材、串、杭、楔状鉄製品（64-43）	SK227 より新しい。

土坑 (2)

※（　）は、確認長・残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	平面形	断面形	遺構（cm）			主軸方向	出土遺物	切り合い関係
						長径	短径	深さ			
SK	227	6E7･12	SR1-3	方形	（孤状）	（178）	157	32	N-56° -W	草履芯、箸状木製品	SK211 より古い。
SK	260	5E20･25、6E16･21	SR1-3	楕円形	弧状	320	（235）	60	―	漆器椀、鳥形（90-217･218）、刀形（79-216）、斎串、連歯下駄（80-219）、露卯下駄（80-222）、下駄歯、曲物側板、折敷、蓋（80-220）、箸状木製品、柄付木製品、角材、杭、鋏（64-44）、鎌柄（80-221）	SX277 より古い。
SK	476	7E12･13･16 ～ 18･21･22	SR1-3	長方形	台形状	558	150	38	N-40° -W	漆器椀（80-224）、茅針（80-226）、曲物側板、曲物底板、箸状木製品、柄付木製品（80-225）、部材、角材、杭、不明木製品、網組	P668、SX670 より新しい。
SK	490	7F18･19･23･24	SR1-3	楕円形	台形状	210	84	62	N-51° -W	曲物底板、箸状木製品、杭、釘	SK512、P661 より新しい。
SK	491	7F2･7･8･12	SR1-3	不整形	孤状	294	189	20	N-61° -E	茅針、曲物側板、箸状木製品、部材、銭貨（64-72 ～ 81）	
SK	492	6F10･15、7F6･11	SR1-3	不整形	孤状	270	172	48	N-74° -W	漆器椀、刀子柄、鑿柄（80-227）、曲物側板、折敷、箸状木製品、部材	SX626 より新しい。
SK	502	7F11･12	SR1-3	円形	孤状	144	120	30	N-22° -W	木製円板、箸状木製品、部材、網組籤（80-228）	
SK	503	6F15･20、7F11･16	SR1-3	楕円形	孤状	230	146	29	N-37° -W	茅針、曲物側板、曲物底板、箸状木製品、部材、杭	SK514 より新しい。
SK	504	7E3･8･9	SR1-3	―	（台形状）	（280）	（89）	28	（N-31° -E）	珠洲焼片口鉢（61-41）、箸状木製品	SD113 より古い。
SK	508	7F11	SR1-3	円形	箱状	61	52	36	N-74° -E	銭貨（64-82）	
SK	512	7F18･19	SR1-3	不整形	孤状	（180）	146	26	―	漆器椀、箸状木製品、部材	SK490 より古い。
SK	514	6F20	SR1-3	楕円形	孤状	（94）	68	20	N-16° -W		SK544 より古い。
SK	520	6F19･20･24･25、6G5	SR1-3	不整形	（孤状）	306	（150）	22	N-34° -E	漆器椀、斎串、下駄歯、曲物側板、杓子、箸状木製品、部材	P605、SX653 より新しい。
SK	528	6F20･25、7F16･21	SR1-3	不整形	（孤状）	170	118	20	N-55° -W		SD595 より新しく、SX518 より古い。
SK	530	7H5、8H1	SR1-3	不整形	台形状	122	85	18	N-85° -W		SD531 より新しい。
SK	542	7H10、8H6	SR1-3	方形	台形状	（96）	78	29	N-39° -E	漆器椀、連歯下駄、箸状木製品、部材	SD541 より古い。
SK	543	7H9･10	SR1-3	楕円形	台形状	150	90	14	N-42° -W	箸状木製品、部材	
SK	554	7G19･20･23･24	SR1-3	不整形	台形状	232	110	17	N-50° -W	下駄歯、箸状木製品、部材	
SK	589	8G11･12･16･17	SR1-3	不整形	孤状	356	120	11	N-36° -W	折敷底板（80-229）、箸状木製品、部材、杭	
SK	619	7G3	SR1-3	方形	（台形状）	84	70	24	N-52° -W		
SK	641	7E11･12･16･17	SR1-3	長方形	弧状	180	75	9	N-42° -W	箸状木製品、部材	SD495 より古い。
SK	660	6E15、7E11	SR1-3	―	弧状	（191）	（115）	9	N-34° -W	箱、箸状木製品（81-230 ～ 237）、板材、木釘（81-238 ～ 242）	
SK	678	6D18･23･24	SR1-3	長方形	台形状	138	108	29	N-60° -E		SK176･177 より新しい。
SK	837	8H11･12	SR1-3	円形	台形状	125	110	36	-	箸状木製品、部材、板材、角材	SK853 より新しい。
SK	853	8H11･12･16･17	SR1-3	楕円形	台形状	214	66	56	N-57° -W	珠洲焼片口鉢（86-2）、箸状木製品、部材	SK837 より古い。

柱・柱穴

種別	番号	グリッド	所属層位	設置方法	掘形規模（cm）			柱径 / 残存長（cm）	出土遺物	切り合い関係	樹種
					長径	短径	深さ				
P	551	7F11	SR1-3	打ち込み柱	―	―	―	9/49			図化（81-244）。スギ。
P	669	7F1	SR1-3	打ち込み柱	―	―	―	12/77			図化（81-245）。モクレン属。

杭列

種別	番号	グリッド		所属層位		杭本数 / 方向		全長（m）		備考					
SA	215	6E		SR1-3		5/N-63° -E		2.2							
種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	215-1	6E19	1/6			1-2	0.4	SA	215-4	6E13	4/35			4-5	0.5
SA	215-2	6E18	5/18			2-3	0.8	SA	215-5	6E13	4/16				
SA	215-3	6E13	3/18			3-4	0.5								

種別	番号	グリッド		層位		杭本数 / 方向		全長（m）		備考					
SA	812	7I		SR1-3		4/N-29° -W		0.5							
種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	812-1	7I9	3/11			1-2	0.2	SA	812-3	7I9	3/8			3-4	0.2
SA	812-2	7I9	3/15			2-3	0.1	SA	812-4	7I9	3/10				

種別	番号	グリッド		層位		杭本数 / 方向		全長（m）		備考					
SA	823	7･8I		SR1-3		14 /N-58° -E		1.27							
種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	823-1	8I16	2.5/31			―	―	SA	823-5	8I16	3/46			5-13	0.2
SA	823-8	8I16	3/9			8-7	0.1	SA	823-13	8I16	1/11			―	―
SA	823-7	8I16	2/13			7-6	0.24	SA	823-12	7I20	1/9			―	―
SA	823-6	8I16	1/6			6-2	0.2	SA	823-11	7I20	2/8			―	―
SA	823-2	8I16	2/7			2-3	0.1	SA	823-9	7I20	1.5/42			―	―
SA	823-3	8I16	2/11			3-14	0.23	SA	823-10	7I20	1/8			―	―
SA	823-14	8I16	―			14-4	0.1	SA	823-15	8I16	1.5/11				
SA	823-4	8I16	2/18			4-5	0.1								

種別	番号	グリッド		層位		杭本数 / 方向		全長（m）		備考					
SA	841	8I		SR1-3		3/N-86° -W		1.2							
種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	841-2	8I21	3/19			2-1	0.6	SA	841-3	8I21	4/42				
SA	841-1	8I21	4/23			1-3	0.6								

杭・串

種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存長（cm）	備考	種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存長（cm）	備考
SX	116	8F5	SR1-3	2	4	SD113 の底面で検出。	SX	537-2	7F21	SR1-3	1	22	
SX	117	8F5	SR1-3	4	9	SD113 の底面で検出。	SX	797	7I20	SR1-3	9	74	
SX	118	8F5	SR1-3	4	22	SD113 の底面で検出。	SX	798	7I20	SR1-3	7	29	
SX	119	8F5	SR1-3	3	6	SD113 の底面で検出。	SX	799	7I14	SR1-3	5	23	
SX	120	8F4	SR1-3	3	10	SD113 の底面で検出。	SX	800	7I9･14	SR1-3	5	10	
SX	121	8F10	SR1-3	4	36	SD113 の底面で検出。	SX	801	7I9	SR1-3	6	18	
SX	122	8F15	SR1-3	5	34	SX501 の壁面で検出。	SX	803	7H20	SR1-3	3	24	
SX	123	8F15	SR1-3	4	34	SX501 の壁面で検出。	SX	811	7H19	SR1-3	3	30	
SX	124	8F15	SR1-3	2	27	SX501 の壁面で検出。	SX	822	7I10	SR1-3			
SX	248	6F12	SR1-3	3	49	図化（81-247）。樹種スギ。	SX	834	8H6	SR1-3	1.5	22	
SX	277-1	5E25	SR1-3	8	13	SK260 より新しいか。	SX	835	8H11	SR1-3	2	26	
SX	277-2	5E25	SR1-3	4	44	図化（81-248）。ヤナギ属。SK260 より新しいか。	SX	842	8I21	SR1-3			
SX	277-3	5E25	SR1-3	3	35	SK260 より新しいか。	SX	855	8H21	SR1-3	2	20	
SX	277-4	5E25	SR1-3	6	16	SK260 より新しいか。	SX	858	8I2	SR1-3	3	27	
SX	507-2	7E12･13	SR1-3	2	17		SX	859	8I2	SR1-3	2	12	
SX	507-3	7E12･13	SR1-3	3	17		SX	860	8I7	SR1-3			
SX	518	7F16	SR1-3	8	35	図化（81-250）。コナラ属コナラ亜属コナラ節。	SX	862	7H15	SR1-3	6	14	

溝

※（　）は、確認長･残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	断面形	規模			主軸方向	出土遺物	切り合い関係
					長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）			
SD	113	5･6C、6･7D、7･8E、8F ～ 10F、9･10G	SR1-3	台形状	（63.8）	90 ～ 320	24 ～ 40	N-34-E	露卵下駄歯（81-252）、曲物側板・底板、小型円板（81-251）、箸状木製品、部材、柄付木製品（81-253）、柱根、杭	SK504 より新しい。壁・底面で SX116 ～ 121、125 ～ 128、434 検出。
SD	259	5C25、6C16･17･21･22	SR1-3	V 字状	4.7	58 ～ 86	28	―	土師質土器（61-40）、箸状木製品、部材、柄付木製品（81-254）	
SD	499	7E22 ～ 24、7F2･3	SR1-3	台形状	4.5	54 ～ 64	16	N-37° -W	部材	SK498 より古い。
SD	531	7G25、7H4･5、8G21、8H1	SR1-3	台形状	（4.9）	30 ～ 66	30	N-45° -W		SK530 より古く、SD590 より新しい。
SD	590	7G25、7H5、8G21	SR1-3	台形状	（2.2）	34 ～ 42	16	N-35° -W	箸状木製品、部材	SD531 より古い。
SD	606	7F21	SR1-3	孤状	2.0	64	12	N-36° -W		SX537 より古い。
SD	635	8G16･17･21	SR1-3	半円状	2.4	10 ～ 29	7	N-35° -W		
SD	857	8H・I	SR1-3	弧状	（2.5）	55 ～ 65	14	N-60° -E	珠洲焼片口鉢（86-3）、箸状木製品、板材、角材	P856 より○。

窪地

※（　）は、確認長･残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	断面形	規模			主軸方向	出土遺物	切り合い関係
					長径（m）	短径（m）	深さ（cm）			
SX	501	7E･F、8E ～ G、9F･G、10G	SR1-3	弧状	（26.8）	5.5	28	N-33° -E	折敷、箸状木製品、部材	壁・底面で P115、SX103 ～ 105･108 ～ 110･122 ～ 124 を検出。
SX	536	7･8F･G	SR1-3	―	（14.5）	（4.9）	23	N-45° -E		壁・底面で SX106･570 ～ 572･581･665 を検出。
SX	556	7H	SR1-3	弧状	（9.2）	（2.6）	14	N-38° -E	曲物側板、箸状木製品、部材、杭	
SX	813	7I9･10･14･15	SR1-3	台形状	（1.2）	（0.5）	32	―	箸状木製品、杭	
SX	816	7H23、7I3･4	SR1-3	台形状	（2.7）	（0.4）	50	―		
SX	820	7H12･13･17･18	SR1-3	弧状	（2.0）	（0.72）	14	―	箸状木製品、側版	
SX	821	7I5･20	SR1-3	弧状	（2.65）	（0.96）	14	―	箸状木製品、部材、板材	

SR-2 層の遺構

土坑

※（　）は、残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	平面形	断面形	規模（cm）			主軸方向	出土遺物	切り合い関係	備考
						長径	短径	深さ				
SK	679	7G14･19	SR2	―	―	（44）	73	12	―			

杭列（1）

種別	番号	グリッド	所属層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	16	8F、8・9G	SR2-1	14/N-38° -E	17.9	

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	16-1	9G7	4/33			1-2	1.4	SA	16-14	8F23	2/23			14-10	4.2
SA	16-2	9G6	5/22			2-3	0.4	SA	16-10	8F12	6/37			10-11	2.3
SA	16-3	9G6	5/57			3-4	0.8	SA	16-11	8F7	4/25			11-12	1.2
SA	16-4	9G1	6/37			4-5	0.5	SA	16-12	8F7	5/26			12-13	0.8
SA	16-5	8G5	2/13			5-6	0.5	SA	16-13	8F1	5/32			13-8	0.1
SA	16-6	8G5	3/39			6-7	0.3	SA	16-8	8F1	3/25			8-9	0.7
SA	16-7	8G5	2/26			7-14	4.7	SA	16-9	8F1	4/18				

種別	番号	グリッド	所属層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	17	8F、8・9G	SR2-1	4/N-50° -E	4.7	

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	17-4	8G5・9G1	4/17			4-1	2.4	SA	17-3	8F20	6/17			3-2	0.8
SA	17-1	8F25	10/46			1-3	1.5	SA	17-2	8F19	6/66				

杭列（2）

種別	番号	グリッド	所属層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	18	8F・G	SR2-1	3/N-36°-E	4.9	

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	18-1	8G9	7/34			1-2	3.1	SA	18-3	8F22	5/43				
SA	18-2	8F23	2/15			2-3	1.8								

種別	番号	グリッド	所属層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	280	5D、5・6E	SR2-1	153/N-50°-E	12.8	

灰分布範囲

種別	番号	グリッド	所属層位	平面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い関係	備考
					長径	短径	深さ			
SX	676	7G1	SR2	不整形	71	40	―	骨		

溝

※（　）は、残存長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	断面形	規模			主軸方向	出土遺物	切り合い関係	備考
					長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）				
SD	150	5·6C、6·7D、7·8E、8 ～ 10F、9·10G	SR2-1	台形状	(63.8)	100 ～ 260	15 ～ 55	N-35°-E	漆器椀（84-296）、箸状木製品、部材、杭		
SD	279	6F12·17·18	SR2-1	―	(3.2)	4.5	33	N-46°-E			

X層水田面

畦畔

※長さはいずれも確認長である。下面幅・上面幅は最小値と最大値を記載した。

番号	地区	グリッド	断面形	方向	長さ（m）	下面幅（m）	上面幅（m）	高さ（cm）	備考
畦畔 201	南区 1	3C、3·4D、4E	台形	N-40°-E	17.04	0.36 ～ 2.72	0.12 ～ 2.48	11	2010 年度調査検出。
畦畔 201	南区 1	4·5E·F、5G	台形	N-61°-E	25.56	1.12 ～ 3.70	0.84 ～ 3.52	3	2009 年度調査検出。
畦畔 202	南区 1	6·7B、6C	台形	N-5°-E	3.92	0.44 ～ 0.88	0.24 ～ 0.68	3	
畦畔 203	南区 1	5E·F	台形	N-14°-E	1.80	0.78 ～ 1.26	0.56 ～ 0.92	2	
畦畔 204	南区 1	3G、4F	台形	N-37°-W	20.12	0.32 ～ 0.84	0.14 ～ 0.64	6	長さは推定最大値である。
畦畔 205	南区 1	6·7B、6C	台形	N-41°-W	6.96	0.56 ～ 0.68	0.16 ～ 0.32	4	
畦畔 206	南区 1	4B、4·5C	台形	N-48°-E	18.40	0.48 ～ 0.88	0.26 ～ 0.64	6	
畦畔 207	南区 2	1B ～ D	台形	N-72°-E	20.08	0.26 ～ 0.92	0.04 ～ 0.52	15	
畦畔 208	南区 2	1D·E	台形	N-52°-E	1.24	0.32 ～ 0.56	0.08 ～ 0.20	10	
畦畔 209	南区 1	2·3C·D、4C	台形	N-33°-W	25.16	0.32 ～ 1.44	0.09 ～ 1.04	15	
畦畔 210	南区 1	2E·F、3E、4D·E	台形	N-39°-W	21.42	0.26 ～ 0.49	0.08 ～ 0.32	6	
畦畔 211	南区 2	1B	台形	N-21°-W	5.36	0.32 ～ 0.64	0.09 ～ 0.29	22	
畦畔 212	南区 2	1C	台形	N-20°-W	3.20	0.40 ～ 0.52	0.05 ～ 0.24	10	
畦畔 213	南区 2	1D	台形	N-30°-W	0.56	0.32 ～ 0.46	0.12 ～ 0.19	18	
畦畔 214	南区 2	1D·E	台形	N-34°-W	6.85	0.44 ～ 0.68	0.05 ～ 0.30	10	
畦畔 215	南区 2	1G	台形	N-1°-W	5.36	0.56 ～ 0.73	0.28 ～ 0.49	11	
畦畔 216	南区 1	3B	台形	不明	不明	0.30	0.16	4	調査区壁断面でのみ確認。
畦畔 217	北区 1	11·12C	台形	N-14°-E	9.80	0.60 ～ 2.95	0.37 ～ 2.80	7 ～ 16	
畦畔 218	北区 1	11E·F、12F	台形	N-28°-E	9.84	0.42 ～ 0.60	0.21 ～ 0.45	2 ～ 5	
畦畔 219	北区 2	14D·E	台形	N-20°-E	6.44	0.77 ～ 1.06	0.43 ～ 0.49	5 ～ 10	
畦畔 220	北区 2	14C	台形	N-26°-E	7.10	0.62 ～ 0.88	0.32 ～ 0.54	3 ～ 6	水口 1 か所。
畦畔 221	北区 2	14C,15C·D	台形	N-27°-E	10.40	0.61 ～ 0.88	0.29 ～ 0.61	2 ～ 8	水口 1 か所。
畦畔 222	北区 2	14C·D	台形	N-70°-W	12.30	0.57 ～ 1.06	0.27 ～ 0.75	3 ～ 6	
畦畔 223	北区 2	14E·F	台形	N-49°-W	24.60	0.59 ～ 1.32	0.27 ～ 0.86	2 ～ 6	
畦畔 224	北区 2	14E·F	台形	N-42°-E	5.00	―	0.09 ～ 0.24	―	擬似畦畔 B。
畦畔 225	北区 2	14·15D·E	台形	N-7°-E	2.60	―	0.20 ～ 0.42	―	擬似畦畔 B。
畦畔 226	北区 2	15D	台形	N-55°-W	6.10	―	0.14 ～ 0.26	―	擬似畦畔 B。

土坑

種別	番号	グリッド	所属層位	平面形	断面形	規模（cm）			主軸方向	出土遺物	切り合い関係	備考
						長径	短径	深さ				
SK	808	11D20·25	X	円形	弧状	90	80	20	―			
SK	847	15D19	Ⅶ層以前	円形	弧状	95	91	27	―		SD848 より新しい。	
SK	849	14D2·7	X	楕円形	半円形	175	105	50	N-80°-E	植物遺体（栗）	畦畔 222 より新しい。	
SK	850	14D3	X	楕円形	U字状	81	66	56	N-65°-W	植物遺体（栗）		

杭列

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	871	16 ～ 18C、17・18D	X	50/N-28° -E	23.15	SA871-27･29･31 は欠番。

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	871-30	18C24、18D4	5/79			30-32	0.4	SA	871-26	17C19	4/83			26-22	0.5
SA	871-32	18D4	4/77			32-1	1.4	SA	871-22	17C18･19	4/114			22-23	0.5
SA	871-1	18D3	7/109		32-1 間に暗渠。	1-2	0.6	SA	871-23	17C18	4/63		23-24 間に暗渠。	23-24	2.1
SA	871-2	18D3	7/109			2-3	0.65	SA	871-24	17C13	3/31			24-35	0.6
SA	871-3	18D3	4/53		(90-40)	3-4	0.45	SA	871-35	17C12	4/22			35-34	0.5
SA	871-4	18D2	5/72			4-5	0.65	SA	871-34	17C12	4/79			34-33	0.47
SA	871-5	18D2	6/110			5-6	0.4	SA	871-33	17C12	5/86			33-36	0.5
SA	871-6	18D2	3/76			6-7	0.6	SA	871-36	17C12	7/89			36-37	0.55
SA	871-7	18D2	5/82			7-8	0.35	SA	871-37	17C12	5/88			37-38	0.4
SA	871-8	18D1	4.5/76			8-9	0.6	SA	871-38	17C7･11･12	4/126			38-39	0.35
SA	871-9	18D1	8/100	ヤナギ属	(90-41)	9-10	0.3	SA	871-39	17C6･7	5/72			39-40	0.35
SA	871-10	18C21、18D1	5/107			10-11	0.45	SA	871-40	17C6･7	4/88			40-41	0.45
SA	871-11	18C21、18D1	5/104			11-12	0.6	SA	871-41	17C6	6/80			41-42	0.25
SA	871-12	17C2518C21	6/121			12-13	0.5	SA	871-42	17C6	4/14			42-43	0.15
SA	871-13	17C25、17D5	5/130			13-25	0.3	SA	871-43	17C6	3/72			43-44	0.73
SA	871-25	17C25	5/164			25-14	0.5	SA	871-44	17C6	4/94			44-45	0.52
SA	871-14	17C25	7/150			14-16	0.62	SA	871-45	17C1	7/95			45-46	0.25
SA	871-15	17C25	9/78	ヤナギ属	(90-42)	14-15	0.1	SA	871-46	17C1	4.5/73			46-47	0.05
SA	871-16	17C25	5.5/122			16-17	0.7	SA	871-47	17C1	5/74			47-48	0.2
SA	871-17	17C25	8/53			17-18	0.9	SA	871-48	17C1	4.5/88			48-49	0.13
SA	871-28	17C25	8/91			28-18	0.3	SA	871-49	17C1	5.5/101			49-50	0.1
SA	871-18	17C25	5/120			18-19	0.5	SA	871-50	17C1	5/78			50-51	0.15
SA	871-19	17C25	7/145			19-20	0.4	SA	871-51	17C1	6/94			51-52	0.15
SA	871-20	17C19･25	5/125			20-21	0.25	SA	871-52	17C1	6/105			52-53	0.1
SA	871-21	17C19･25	9/38			21-26	0.6	SA	871-53	17C1	4/55				

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	875	17C	X	3/N-25° -E	2.8	

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	875-1	17C23	4/68			1-2	0.9	SA	875-3	17C17	4.5/12		上部欠損		
SA	875-2	17C18	4/67			2-3	1.9								

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	889	17G	X	3/N-6° -E	2.2	

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	889-1	17G15	－			1-2	0.7	SA	889-3	17G14	－				
SA	889-2	17G15	5/37			2-3	1.5								

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	897	20・21D	X	20/N-13° -W	8.6	

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	897-9	20D4	3.5/79			9-8	0.4	SA	897-10	21D1	4/56			10-19	0.6
SA	897-8	20D4	5/54			8-7	0.5	SA	897-19	21D2	4/42			19-11	0.6
SA	897-7	20D5	3/57			7-6	0.5	SA	897-11	21D2	2.8/58			11-12	0.6
SA	897-6	20D5	3/46			6-5	0.5	SA	897-12	21D2	3.5/65			12-13	0.5
SA	897-5	20D5	3.5/73			5-4	0.4	SA	897-13	21D2	3/62			13-20	0.5
SA	897-4	20D5	3/38			4-3	0.4	SA	897-20	21D3	3.2/34			20-17	0.4
SA	897-3	20D5	3/41			3-2	0.4	SA	897-17	21D3	3.5/61			17-14	0.2
SA	897-2	21D1	3.8/50			2-1	0.4	SA	897-14	21D3	2/50			14-15	0.3
SA	897-1	21D1	3/62			1-18	0.5	SA	897-15	21D3	4/46			15-16	0.4
SA	897-18	21D1	3/40			18-10	0.4								

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	899	19・20D	X	10/N-42° -E	3.5	SA899-1 ～ 10

杭

種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存長（cm）	備考	種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存長（cm）	備考
SX	877	18D4	X層	3	23		SX	884	16C5	X層	8	112	
SX	882	16G13	X層	6	49		SX	885	16C5･10	X層	6	64	
SX	883	16G8	X層	6	47								

溝

※（　）は、確認長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	断面形	規模			主軸方向	出土遺物	切り合い関係	備考
					長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）				
SD	700	2D・E、3E	X層	弧状、台形状	18.2	0.56	4 ～ 9	N-66° -E		畦畔 209・210 を切っているが、新旧は不明。	畦畔との交点は水口として機能か。
SD	701	8D	X層	台形状	4.0	1.08	2	N-71° -W			
SD	702	7C、8C・D	X層	弧状	(12.2)	0.92	12	N-29° -E	部材		
SD	806	12F	X層	弧状	(3.0)	0.05 ～ 0.15	5	N-40° -W			畦畔脇の小溝。
SD	848	14E、15D・E、16C・D	X層	弧状	(31.5)	1.43 ～ 2.20	2 ～ 29	N-52° -W			
SD	870	17 ～ 21C・D、22D	X層	弧状	(57)	(11)	(54)	―			SD870 内で杭列・杭を検出。
SD	914	11・12C	X層	弧状	(8.0)	30	7	N-14° -E			畦畔脇の小溝。

杭列（SD870 内検出）

種別	番号	グリッド		層位		杭本数 / 方向		全長（m）		備考					
SA	872	17・18C、18D		SD870-3		33/N-30°-E		−							
種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	872-1	18C23	3.5/34			1-2	0.2	SA	872-18	17C13	1.5/37				
SA	872-2	18C22	4.6/30.5	ヤナギ属	(90-43)	2-3	1.0	SA	872-19	17C13	1.5/40				
SA	872-3	18C22	1.5/17			3-4	0.7	SA	872-20	17C13	2/7				
SA	872-4	18C22	2/28			4-5	0.5	SA	872-21	17C13	3/39			21-22	0.6
SA	872-5	18C21	2/31			5-6	0.3	SA	872-22	17C8	2/24			22-23	0.7
SA	872-6	18C21	3.8/35	ヤナギ属	(90-44)	6-14	0.4	SA	872-23	17C7	2/16				
SA	872-14	18C21	6/28			14-7	0.4	SA	872-24	17C8					
SA	872-7	18C21	3.5/74			7-8	0.2	SA	872-25	17C7	2/10			25-26	0.4
SA	872-8	18C21	2/28			8-9	1.1	SA	872-26	17C7	2/30			26-27	0.1
SA	872-9	18C21	2/15			9-10	0.4	SA	872-27	17C7				27-28	1.5
SA	872-10	17C25	2.5/22			10-11	0.5	SA	872-28	17C7	2/27			28-29	0.1
SA	872-11	17C25	2.5/41			11-12	0.5	SA	872-29	17C2	2.5/22			29-30	0.1
SA	872-12	17C25	1.5/30			12-13	1.2	SA	872-30	17C2	2.5/35				
SA	872-13	17C20	3/23					SA	872-31	17C13	2/19				
SA	872-15	17C13	2/10			15-16	0.3	SA	872-32	17C13	2/12				
SA	872-16	17C13	4/19			16-17	0.3	SA	872-33	17C13	2/17				
SA	872-17	17C13	3/46												

種別	番号	グリッド		層位		杭本数 / 方向		全長（m）		備考					
SA	893	20C		SD870-5a		3/N-61°-E		0.4							
種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	893-1	20C22	3/18			1-2	0.2	SA	893-3	20C22	4/29				
SA	893-2	20C22	3/16			2-3	0.2								

種別	番号	グリッド		層位		杭本数 / 方向		全長（m）		備考					
SA	898	20C		SD870-5a		5/N-11°-E		0.6							
種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	898-1	20C16	0.9/15			1-2	0.1	SA	898-4	20C16	2.5/90			4-5	0.2
SA	898-2	20C16	2/13			2-3	0.2	SA	898-5	20C16	2/68				
SA	898-3	20C16	3/108			3-4	0.1								

杭（SD870 内検出）

種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存（cm）	備考	種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存（cm）	備考
SX	891-1	20D2	SD870-5b	3	44		SX	891-12	20D2	SD870-5b	4	76	
SX	891-2	20C22	SD870-5b	4	34		SX	891-13	20D2	SD870-5b	9	66	
SX	891-3	20C22	SD870-5b	3	20		SX	891-14	20C22	SD870-5b	3.5	54	
SX	891-4	20C22	SD870-5b	5	50		SX	891-15	20C22	SD870-5b	2.5	56	
SX	891-5	20C22	SD870-5b	7	37		SX	892-1	20C21	SD870-5a	3	51	
SX	891-6	20C22	SD870-5b	6	53		SX	892-2	20C21	SD870-5a	4	66	
SX	891-7	20C22	SD870-5b	4.5	53		SX	892-3	20C21･22	SD870-5a	2	34	
SX	891-8	20C22	SD870-5b	5.5	53		SX	892-4	20C22	SD870-5a	4	69	
SX	891-9	20C22	SD870-5b	4	51		SX	892-5	20C21･22	SD870-5a	3	148	
SX	891-10	20C22	SD870-5b	3.5	73		SX	895	20C21	SD870-5b	4	95	
SX	891-11	20C22	SD870-5b	2.5	37		SX	896	20D4	SD870-5b	3	71	

Ⅻ層水田面

畦畔(1)

※長さはいずれも確認長である。下面幅･上面幅は最小値と最大値を記載した。

番号	地区	グリッド	断面形	方向	長さ（m）	下面幅（m）	上面幅（m）	高さ（cm）	備考
畦畔 301	南区 1	6･7B、6C	台形	N-44°-W	6.89	0.32 ～ 0.69	0.17 ～ 0.48	7	
畦畔 302	南区 1	4B、4･5C	台形	N-48°-E	16.88	0.31 ～ 0.88	0.09 ～ 0.72	5	
畦畔 303	南区 1	3B･C	台形	N-66°-E	9.44	0.28 ～ 0.56	0.16 ～ 0.48	10	
畦畔 304	南区 1	3C･D、4D・E	台形	N-51°-E	19.04	0.25 ～ 0.48	0.16 ～ 0.28	12	
畦畔 305	南区 2	1B ～ D	台形	N-67°-E	19.28	0.56 ～ 0.80	0.08 ～ 0.32	6	
畦畔 306	南区 1	4C	台形	N-34°-W	0.48	0.32 ～ 0.48	0.17 ～ 0.32	6	
畦畔 307	南区 1	2D、3C･D	台形	N-30°-W	14.16	0.32 ～ 0.62	0.13 ～ 0.33	17	
畦畔 308	南区 1	2E･F、3E、4E	台形	N-40°-W	21.76	0.31 ～ 0.72	0.17 ～ 0.40	13	
畦畔 309	南区 2	1B	台形	N-24°-W	6.25	0.45 ～ 0.80	0.14 ～ 0.25	8	
畦畔 310	南区 2	1C	台形	N-1°-E	1.28	0.18 ～ 0.23	0.48 ～ 0.56	8	
畦畔 311	南区 2	1E	台形	N-31°-W	5.60	0.48 ～ 0.88	0.02 ～ 0.40	14	
畦畔 312	北区 1	11･12C	台形	N-14°-E	10.05	0.46 ～ 0.66	0.20 ～ 0.50	5 ～ 10	
畦畔 313	北区 1	12C	台形	N-72°-W	2.40	0.46 ～ 0.64	0.26 ～ 0.52	5	
畦畔 314	北区 1	12･13E･F	台形	N-44°-W	7.87	0.53 ～ 0.88	0.24 ～ 0.68	3 ～ 6	水口 1 か所。
畦畔 315	北区 2	13D、14D･E	台形	N-22°-E	6.50	0.77 ～ 0.84	0.33 ～ 0.52	2 ～ 9	
畦畔 316	北区 2	14D･E,15E	台形	N-29°-E	24.18	0.32 ～ 0.55	0.12 ～ 0.36	2 ～ 10	水口 1 か所。
畦畔 317	北区 2	16F、17F･G	台形	N-25°-E	14.90	0.46 ～ 0.77	0.16 ～ 0.48	3 ～ 14	
畦畔 318	北区 2	15･16C	台形	N-40°-E	8.74	0.50 ～ 0.95	0.43 ～ 0.58	4 ～ 9	水口 1 か所。
畦畔 319	北区 2	16C･D、17･18D･E	台形	N-23°-E	24.64	0.44 ～ 0.58	0.26 ～ 0.40	5 ～ 8	水口 3 か所。
畦畔 320	北区 2	13D,14C･D	台形	N-67°-W	12.30	0.50 ～ 0.84	0.14 ～ 0.39	5 ～ 9	
畦畔 321	北区 2	15D･E、16C･D	台形	N-60°-W	23.00	0.32 ～ 0.72	0.08 ～ 0.32	5 ～ 15	
畦畔 322	北区 2	16F、17E･F	台形	N-54°-W	19.00	0.40 ～ 0.55	0.14 ～ 0.39	3 ～ 8	

畦畔(2)

※長さはいずれも確認長である。下面幅・上面幅は最小値と最大値を記載した。

番号	地区	グリッド	断面形	方向	長さ（m）	下面幅（m）	上面幅（m）	高さ（cm）	備考
畦畔 323	北区 2	14E	台形	N-69°-W	0.90	0.56	0.37	2	
畦畔 324	北区 2	16F	台形	N-50°-W	3.55	0.40 ～ 0.50	0.12 ～ 0.20	10 ～ 17	
畦畔 325	北区 2	15F･G	台形	N-39°-W	9.90	0.37 ～ 0.56	0.13 ～ 0.25	9 ～ 14	水口 2 か所。
畦畔 326	北区 2	15F･G	台形	N-55°-E	7.15	0.52 ～ 0.82	0.10 ～ 0.42	5 ～ 12	
畦畔 327	北区 1	10D ～ F	台形	―	17.80	―	0.25 ～ 0.50	―	擬似畦畔 B。
畦畔 328	北区 1	11E・F	台形	N-28°-E	10.02	―	0.27 ～ 0.68	―	擬似畦畔 B。

柱・柱穴

種別	番号	グリッド	所属層位	設置方法	規模（cm）			柱径 / 残存長（cm）	底面標高（m）	切り合い関係	樹種
					長径	短径	深さ				
P	904	21D8	Ⅻ	打ち込み	―	―	―	12/20	-1.42		
P	905	21D8	Ⅻ	打ち込み	―	―	―	11/43	-1.54		
P	915	21E5	Ⅻ	打ち込み	―	―	―	13/42	-1.46		
P	916	21D20	Ⅻ	打ち込み	―	―	―	18/86	-1.96		図化（90-45）、ヤナギ属。
P	917	21D14	Ⅻ	打ち込み	―	―	―	14/90	-2.03		図化（90-46）、ヤナギ属。
P	918	22D16	Ⅻ	打ち込み	―	―	―	10/64	-1.73		
P	919	21D15	Ⅻ	打ち込み	―	―	―	13/45	-1.74		

杭列

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	894	20C･D	Ⅻ	4/N-42°-W	0.4	

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	894-1	20D1	―			1-2	0.1	SA	894-3	20C21	2.5/18			3-4	0.2
SA	894-2	20C21	1.8/14			2-3	0.1	SA	894-4	20C21	3/36				

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	910	21D	Ⅻ	13/ 備考欄	4.8	A-A' の方向 N-47°-E、B-B' の方向 N-1°-W。

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	910-1	21D6	2/19			1-2	0.2	SA	910-8	21D12	3/27			8-9	0.5
SA	910-2	21D6	2/23	ヤナギ属		2-3	0.3	SA	910-9	21D12	2/32	ヤナギ属		9-10	0.3
SA	910-3	21D6	2/20			3-4	0.4	SA	910-10	21D17	3/35			10-11	0.4
SA	910-4	21D6	2/28			4-5	1.2	SA	910-11	21D17	3/24		角材	11-12	0.3
SA	910-5	21D11	2/10			5-6	0.1	SA	910-12	21D17	3/38			12-13	0.3
SA	910-6	21D11	2/11			6-7	0.1	SA	910-13	21D17	2/20				
SA	910-7	21D11	2/11			7-8	0.6								

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	911	22D･E	Ⅻ	16/N-58°-W	4.0	

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	911-1	22E1	3/35			1-2	0.7	SA	911-9	22D22	2/28			9-10	0.2
SA	911-2	22E1	4/44			2-3	0.4	SA	911-10	22D22	2/31			10-11	0.1
SA	911-3	22E1	3/40			3-4	0.2	SA	911-11	22D22	2/21			11-12	0.3
SA	911-4	22E1	2/17			4-5	0.1	SA	911-12	22D22	2/30			12-13	0.3
SA	911-5	22E1	-			5-6	0.2	SA	911-13	22D22	3/42			13-14	0.2
SA	911-6	22E1	2/20			6-7	0.8	SA	911-14	22D22	3/32			14-15	0.2
SA	911-7	22D21	3/31			7-8	0.2	SA	911-15	22D22	2/47			15-16	0.1
SA	911-8	22D21	3/26			8-9	0.2	SA	911-16	22D22	3/40				

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	912	21D	Ⅻ	4/N-4°-W	0.7	SA912-1 ～ 4。

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	913	21D	Ⅻ	5/N-5°-E	0.3	SA913-1 ～ 3。

杭

種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存（cm）	備考	種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存（cm）	備考
SX	703	5C22	Ⅻ層	4	32		SX	887	16C10	Ⅻ層	8	42	
SX	704	5C17	Ⅻ層	3	16		SX	888	16C10	Ⅻ層	4	9	
SX	705	5C17	Ⅻ層	2	15		SX	901	21D12	Ⅻ層	4	37	
SX	706	5C22	Ⅻ層	5	25		SX	902	22D21	Ⅻ層	4	29	
SX	707	5C18	Ⅻ層	8	34		SX	903	21D11	Ⅻ層			
SX	708	5C18	Ⅻ層	8	28		SX	906	21E5	Ⅻ層	6	29	
SX	720	5C22	Ⅻ層	2	8		SX	907	21D7	Ⅻ層			
SX	876	18C21	Ⅻ層	7	49		SX	908	21D24	Ⅻ層			
SX	886-1	17C1	Ⅻ層	6	110		SX	909	22D21	Ⅻ層	7	33	
SX	886-2	17C6	Ⅻ層	5	47								

溝

※（　）は、確認長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	断面形	規模			主軸方向	出土遺物	切り合い関係	備考
					長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）				
SD	810	10E、11D	Ⅻ層	弧状	(12.5)	0.40 ～ 0.60	3 ～ 10	N-60°-W			
SD	851	14D	Ⅻ層	弧状	(8.0)	0.49 ～ 0.67	12 ～ 26	N-65°-W			
SD	852	14D	Ⅻ層	弧状	(3.3)	0.26 ～ 0.72	4	N-26°-E			
SD	861	14E	Ⅻ層	弧状	(4.75)	0.15 ～ 0.38	3 ～ 5	N-35°-E			畦畔脇の小溝。

XIV層水田面

畦畔

※長さはいずれも確認長である。下面幅・上面幅は最小値と最大値を記載した。

番号	地区	グリッド	断面形	方向	長さ（m）	下面幅（m）	上面幅（m）	高さ（cm）	備考
畦畔 401	南区 1	6･7B、6C	台形	N-31°-W	9.54	0.47 ～ 0.77	0.20 ～ 0.56	5	
畦畔 402	南区 1	4B、4･5C、5D	台形	N-50°-E	19.39	0.56 ～ 1.44	0.24 ～ 0.76	25	
畦畔 403	南区 1	3B ～ D、4D･E	台形	N-55°-E	29.60	0.38 ～ 0.77	―	14 ～ 16	
畦畔 404	南区 2	1B ～ D	台形	N-66°-E	19.32	0.50 ～ 1.03	0.10 ～ 0.43	6	
畦畔 405	南区 2	1D	台形	N-62°-E	1.98	0.56 ～ 0.60	0.16 ～ 0.18	8	
畦畔 406	南区 1	3･4C	台形	N-35°-W	12.21	0.48 ～ 0.80	0.31 ～ 0.35	7	
畦畔 407	南区 1	2C･D、3C･D	台形	N-31°-W	12.56	0.62 ～ 0.86	―	8 ～ 12	
畦畔 408	南区 1	2E･F、3E、4D･E	台形	N-40°-W	20.64	0.40 ～ 1.04	―	10	
畦畔 409	南区 2	1B	台形	N-23°-W	6.53	0.88 ～ 0.96	0.16 ～ 0.58	6	
畦畔 410	南区 2	1C	台形	N-31°-W	3.04	0.48 ～ 0.96	0.24 ～ 0.50	21	
畦畔 411	南区 2	1E	台形	N-32°-W	4.24	0.46 ～ 1.28	0.16 ～ 0.40	18	
畦畔 412	北区 1	11･12C	台形	N-19°-E	12.00	0.66 ～ 1.22	0.22 ～ 0.48	3 ～ 12	
畦畔 413	北区 2	13D、14･15E･F	台形	N-9°-E	4.13	0.75 ～ 1.93	0.29 ～ 1.65	2 ～ 6	
畦畔 414	北区 2	15E、16E･F	台形	N-36°-E	8.50	0.15 ～ 0.78	0.48 ～ 1.00	3 ～ 20	水口 1 か所。
畦畔 415	北区 2	16･17F･G	台形	N-60°-W	5.60	0.32 ～ 0.64	0.44 ～ 0.72	2 ～ 4	
畦畔 416	北区 2	15･16C	台形	N-36°-E	5.88	0.50 ～ 0.78	0.12 ～ 0.30	10 ～ 17	
畦畔 417	北区 2	13C	台形	N-55°-W	0.76	0.36	0.23	7	
畦畔 418	北区 2	15D･E、16C･D	台形	N-58°-W	19.20	0.50 ～ 1.17	0.18 ～ 0.70	4 ～ 10	
畦畔 419	北区 2	16F	台形	N-44°-W	0.72	0.50 ～ 0.60	0.36 ～ 0.42	1 ～ 2	
畦畔 420	北区 2	17･18E	台形	N-39°-W	5.80	0.42 ～ 0.54	0.15 ～ 0.30	1 ～ 8	
畦畔 421	北区 2	13･14E･F	台形	N-52°-W	11.80	0.75 ～ 1.23	0.29 ～ 0.85	2 ～ 5	
畦畔 422	北区 2	16F	台形	N-53°-W	4.20	0.58 ～ 0.96	0.32 ～ 0.76	6 ～ 14	
畦畔 423	北区 2	15F	台形	N-44°-W	4.30	0.44 ～ 0.61	0.22 ～ 0.38	8 ～ 13	
畦畔 424	北区 2	15F･G	台形	N-52°-E	7.54	0.48 ～ 1.00	0.18 ～ 0.50	6 ～ 13	
畦畔 425	北区 2	18D・E	台形	N-39°-W	6.00	―	0.30 ～ 0.37	―	擬似畦畔 B。

杭

種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存（cm）	備考	種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存（cm）	備考
SX	710	5D2	XIV層	4	28		SX	713	5D2	XIV層	2	10	
SX	711	5D2	XIV層	2	10		SX	878	17D4	XIV層	5	27	
SX	712	5D2	XIV層	2	12								

XVI層水田面

畦畔

※長さはいずれも確認長である。下面幅・上面幅は最小値と最大値を記載した。

番号	地区	グリッド	断面形	方向	長さ（m）	下面幅（m）	上面幅（m）	高さ（cm）	備考
畦畔 501	南区 1	4B･C、5C	台形	N-48°-E	17.53	0.80 ～ 1.62	0.42 ～ 0.94	12	
畦畔 502	南区 1	3B ～ D、4D	台形	N-55°-E	27.12	0.38 ～ 0.59	0.10 ～ 0.53	15	XIV層畦畔に伴う擬似畦畔 B。
畦畔 503	南区 1	2B ～ D、3D ～ F	台形	N-61°-E	37.12	0.44 ～ 0.80	0.08 ～ 0.49	18	
畦畔 504	南区 2	1B ～ D	台形	N-65°-E	18.80	0.38 ～ 0.96	0.05 ～ 0.50	10	
畦畔 505	南区 2	1D	台形	N-52°-E	1.32	0.32 ～ 0.37	0.11 ～ 0.16	8	
畦畔 506	南区 1	3･4C	台形	N-36°-W	12.24	0.48 ～ 0.95	0.24 ～ 0.50	6	
畦畔 507	南区 1	5C	台形	N-40°-W	0.94	0.37 ～ 0.53	0.04 ～ 0.12	20	
畦畔 508	南区 1	4D	台形	N-33°-W	0.36	0.36 ～ 0.46	0.21 ～ 0.32	5	
畦畔 509	南区 1	3F	台形	N-30°-W	0.68	0.28 ～ 0.32	―	12	
畦畔 510	南区 1	2D	台形	N-30°-W	3.34	0.40 ～ 0.72	0.24 ～ 0.60	9	
畦畔 511	南区 1	3E	台形	N-34°-W	2.64	0.24 ～ 0.61	0.10 ～ 0.34	9	
畦畔 512	南区 1	3E･F	台形	N-39°-W	3.35	0.46 ～ 0.76	0.22 ～ 0.48	4	
畦畔 513	南区 2	1C	台形	N-13°-W	0.67	0.40 ～ 0.43	0.16 ～ 0.18	17	
畦畔 514	南区 2	1D	台形	不明	不明	0.27	0.08	10	調査区壁断面でのみ確認。
畦畔 515	南区 2	1E	台形	N-28°-W	4.48	0.48 ～ 0.50	0.08 ～ 0.14	7	

杭列（1）

種別	番号	グリッド	層位	杭本数 / 方向	全長（m）	備考
SA	716	4B・C	XVI層水田面	32/N-39°-E	12.9	畦畔 501 上で確認した。杭径が未入力のものは径 2cm 未満のもの。

種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（m）	
SA	716-1	4B11	- /45			1-31	0.3	SA	716-13	4B23	- /4			13-14	0.1
SA	716-31	4B11	4/32			31-32	0.1	SA	716-14	4B23	- /15			14-15	0.1
SA	716-32	4B12	2/33			32-2	0.4	SA	716-15	4B23	- /5			15-16	0.3
SA	716-2	4B12	4/46		(85-11)	2-3	0.2	SA	716-16	4B23	- /17			16-17	0.1
SA	716-3	4B12	- /6			3-4	0.1	SA	716-17	4B23	- /12			17-18	0.3
SA	716-4	4B12	- /29			4-5	0.2	SA	716-18	4B24	2/1			18-19	0.2
SA	716-5	4B12	- /41		5-6 間に暗渠。	5-6	1.3	SA	716-19	4B24	- /8			19-20	0.8
SA	716-6	4B12	- /3			6-7	0.2	SA	716-20	4B24	- /7			20-21	0.2
SA	716-7	4B17	- /17			7-8	0.1	SA	716-21	4B24	- /7			21-22	1.4
SA	716-8	4B17	- /33			8-28	0.1	SA	716-22	4C4	- /24			22-30	0.3
SA	716-28	4B17	- /16			28-9	0.1	SA	716-30	4C4	- /3			30-23	1.8
SA	716-9	4B17	- /25			9-29	0.1	SA	716-23	4C10	- /8			23-24	0.7
SA	716-29	4B17	- /21			29-10	0.1	SA	716-24	4C10	- /6			24-25	0.2
SA	716-10	4B17	3/24			10-11	2.0	SA	716-25	4C10	- /4			25-26	0.2
SA	716-11	4B18	- /11			11-12	0.3	SA	716-26	4C10	- /9			26-27	0.2
SA	716-12	4B23	- /1			12-13	0.4	SA	716-27	4C10	- /16				

杭列（2）

種別	番号	グリッド		層位		杭本数 / 方向		全長（m）		備考					
SA	717	5C		XVI層水田面		3/N-49°-W		4.0		延長線上に杭（SX718）あり。					
種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（cm）		種別	番号	グリッド	杭径 / 残存長（cm）	樹種	備考	杭間隔（cm）	
SA	717-1	5C8	8/58			1-2	2.1	SA	717-3	5C5	9/57				
SA	717-2	5C4	4/54		（85-12）	2-3	1.9								

杭

種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存（cm）	備考	種別	番号	グリッド	所属層位	径（cm）	残存（cm）	備考
SX	718	5C11	XVI層	4	37		SX	866	11E4	XVI層	2	21	
SX	719	5C10	XVI層	8	51		SX	867	11E4	XVI層	2	16	
SX	864	10F5	XVI層	4	18		SX	868	11E3	XVI層	3	27	
SX	865	12F1	XVI層	2	17								

溝

※（　）は、確認長、若しくは推定値を記載した。

種別	番号	グリッド	所属層位	断面形	規模			主軸方向	出土遺物	切り合い関係	備考
					長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）				
SD	709	2F	XIV層	弧状	（2.7）	0.32	5	N-57°-E			

性格不明遺構

種別	番号	グリッド	所属層位	平面形	断面形	規模（cm）			主軸方向	出土遺物	切り合い関係	備考
						長径	短径	深さ				
SX	714	5C17･18･22	XVI層	不整形	弧状	167	58	14	N-63°-W			

遺物観察表

2009 年度　土器・陶磁器観察表（1）

※〈複数の遺構から出土して接合したものの所属層位は、残存割合の高いものとし、太字で示してある。〉
〈胎土の項目中の（　）には混入物を記した。石：石英　長：長石　雲：雲母　海：海綿骨針〉

図版 No.	報告 No.	分類		出土地点				法量（cm）			胎土	調整・文様	時期	残存部位	備考
		種別	器種	グリッド	遺構	層位	所属層位	口径	器高	底径				口残率（X/36）	
60	1	土師質土器	皿 A	5D15	P81	1	SR1-1 層	10.8	3.3	6	粗（雲）	ヨコナデ	14 世紀前半	底～口縁部	
60	2	龍泉窯系青磁	椀Ⅱ-b	5D23	SR165	1	SR1-1・2 層			4.8	灰白色	外体：鎬連弁文	E 期	底～体部	破損面漆継ぎ痕　高台周辺一部露胎
60	3	珠洲焼	片口鉢	**6F17**	**SR165**	2	SR1-1・2 層	28.9	11.7	11.8	密	ロクロナデ 内：卸目　入り組み技法　1 条 2.5cm に 7 目 17 条以上 外底：静止糸切り痕	V 期	底～口縁部	焼き歪み著しい
				7E	SK399	2									
				7G6・7、8F21	SR1	1									
				7G12、7H14	SR1	2									
60	4	珠洲焼	片口鉢	6F18	**SR165**	3	SR1-1・2 層	30.3			密	ロクロナデ　内：卸目 1 条 3cm に 9 目　2 条以上	Ⅳ期終わりころ	7/36	
				7E20	SR1	1									
60	5	珠洲焼	片口鉢	**6F7**	**SR165**	3	SR1-1・2 層	32			密（海）	ロクロナデ 内：卸目　1 条 2.7cm に 15 目　4 条以上	Ⅳ期初めころ	6/36	
				6E4・17	SR1	2									
60	6	龍泉窯系青磁	椀Ⅱ-b	7G6	SR1-1 層			15			灰白色	外体：鎬連弁文	E 期	口縁部	
60	7	龍泉窯系青磁	椀Ⅱ-b	7G13	SR1-1 層			17			灰白色	外体：鎬連弁文	E 期	体～口縁部	
60	8	龍泉窯系青磁	椀Ⅲ-1	5D15	SR1-1 層					4.3	灰白色	高台端部釉なし	F 期	底部	破損面漆継ぎ痕
60	9	土師質土器	小皿 C	6E17	SR1-1 層			7	2.5	5.2	密	ロクロナデ　外底：板目状圧痕	14 世紀前半	12/36	
60	10	土師質土器	皿 A	**9G7**	SR1-1 層			13			やや密（雲）	ヨコナデ	14 世紀前半	15/36	
				21-6tr（試掘（SX04））	SR1-1 層										
60	11	土師質土器	皿 C	8F12	SR1-1 層			13.2	2.9	10	やや粗	ロクロナデ	14 世紀前半	7/36	
60	12	近世陶磁器	小皿？	7G6	SR1-1 層			10.6	2.1	4.2	密	櫛目　外面釉なし	近世	6/36	
60	13	珠洲焼	片口鉢	8F20	SR1-1 層			(21.4)			密（海）	ロクロナデ　内：卸目 1 条 2.6cm に 11 目　2 条以上	Ⅳ期後半	7/36	
60	14	珠洲焼	片口鉢	7G2・5・6・7・8・12・13、8I2	SR1-1 層			37.2	13	14.5	密（海）	ロクロナデ　外底：静止糸切り痕 内：卸目　1 条 3.5cm に 10 目　12 条以上 体部から底部にかけて施した後、隙間を埋める。	Ⅳ期後半	25/36	内・外面にスス付着
				7G18	SR1-2 層										
60	15	珠洲焼	片口鉢	5D19	SR1-1 層			31			密（長）	ロクロナデ 内：卸目　1 条 2.5cm に 11 目　2 条以上	Ⅳ期中ごろ	7/36	外面に指頭圧痕
				6E5											
60	16	珠洲焼	片口鉢	8G5、8H12	SR1-1 層			34.6			密（石）	ロクロナデ　内：卸目 条 1.8cm に 7 目　3 条以上	Ⅳ期終わりころ	4/36	内・外断面にスス付着　卸目摩滅
60	17	珠洲焼	片口鉢	7F7	SR1-1 層					12.8	密	ロクロナデ　底外：静止糸切り痕 内：入り組み技法　卸目　1 条 3.4cm に 15 目 8 条以上	V 期	底部	卸目残存良
60	18	珠洲焼	壺	10G2	SR1-1 層			20			密	ロクロナデ	Ⅳ期	口縁部	
60	19	珠洲焼	T 種壺	7H9・8H1	SR1	1・2	SR1-1 層			10.8	密	ロクロナデ　外底：板目状圧痕	Ⅳ期	底～体部	内・外面にスス付着
60	20	須恵器	甕	10G11	SR1・1 層						密（長）	内：平行あて具　外：格子状タタキ		体部	研磨具として転用 佐渡小泊産
60	21	珠洲焼	片口鉢	**5D3**	**SK267**	2	SR1-2 層	26			粗い（石）	ロクロナデ 内：卸目　1 条 2.3cm に 8 目　4 条以上	Ⅳ期中ごろ	口縁部	
				6D18	SR1	2									

2009 年度　土器・陶磁器観察表（2）

※〈複数の遺構から出土して接合したものの所属層位は、残存割合の高いものとし、太字で示してある。〉
〈胎土の項目中の（　）には混入物を記した。石：石英　長：長石　雲：雲母　海：海綿骨針〉

図版No.	報告No.	分類		出土地点				法量（cm）			胎土	調整・文様	時期	残存部位	備考
		種別	器種	グリッド	遺構	層位	所属層位	口径	器高	底径				口残率（X/36）	
60	22	土師質土器	小皿 A	6F20	SK334	2	SR1-2 層	7.2	1.4	5	やや密		14 世紀前半	7/36	
61	23	珠洲焼	片口鉢	**6F23**	**SK381**	1	SR1-2 層	30			密（海）	ロクロナデ 内：卸目　1 条 3.1cm に 12 目	Ⅳ期中ごろ	7/36	
				7F17・21	SR1	2									
61	24	土師質土器	皿 C	6C17、6D13、7E2・6・7	SR1	1	SR1-2 層	12.1	2.9	8.6	やや粗	ロクロナデ 底部ヘラ切り	14 世紀前半	体～口縁部	阿賀北系 a2 類
				7E	**SK399**	2									
				5D25	SK65	2									
61	25	土師質土器	皿 A	**7E**	**SK399**	2	SR1-2 層	12.6	3.6	8.1	やや密	ヨコナデ　外底：板目状圧根	14 世紀前半		内・外面にスス付着
				6D13・14・16、6E22	SR1	1・2									
61	26	珠洲焼	片口鉢	**7E**	**SK399**	2	SR1-2 層	(32.6)			密	ロクロナデ 内：卸目　1 条 2.5cm に 8 目	Ⅳ期中ごろ	底～体部	内・外面口縁にスス付着　卸目摩滅
				6D16	SR1	1									
61	27	珠洲焼	片口鉢	**6F15**	**P414**	1	SR1-2 層	37.2			密	ロクロナデ 内：卸目　1 条 3.3cm に 14 目　9 条以上	Ⅴ期	体～口縁部	内・外面にスス付着
				7F14	SD331										
				6F10・15、7E17・18	SR1	1・2									
61	28	珠洲焼	甕	7G6	SK534	1	SR1-2 層				密（長）	ロクロナデ　内：無文あて具　外：平行タタキ	Ⅳ期	体部	破損面に黒色の付着物
61	29	珠洲焼	片口鉢	**7G7**	**P620**		SR1-2 層	32.3	11.9	13.5	粗い（雲）	ロクロナデ 外底：静止糸切り痕 内：卸目　1 条 2cm に 9 目　16 条以上	Ⅳ期後半	底～口縁部	内・外面口縁にスス付着　卸目摩滅
				7F6	SK492	4	SR1-3 層								
				6F25	SK520										
				6F25、7F12・17、7G7、8H6・11	SR1	2	SR1-2 層								
61	30	龍泉窯系青磁	椀Ⅱ-b	8G21	SR1-2 層			16			灰白色	外体：鎬連弁文	E 期	口縁部	外面に黒色の付着物
61	31	龍泉窯系青磁	椀Ⅱ-b	7G18	SR1-2 層						灰白色	外体：鎬連弁文	E 期	体部	広弁
61	32	土師質土器	皿 A	6E5	SR1-2 層			13	2.9	8.2	やや粗	ヨコナデ	14 世紀前半	5/36	
61	33	瀬戸美濃焼	合子・水滴	7H7	SR1-2 層			3.6			やや粗	内・外灰釉	中期様式 1 期	口縁部	
61	34	珠洲焼	片口鉢	9G6	SR1-2 層			36			密（長）	ロクロナデ　内：卸目 2cm 当り 11 目	Ⅳ期前半	7/36	口縁部にスス付着
61	35	珠洲焼	片口鉢	7H19	SR1-2 層						密	ロクロナデ　内：卸目 2cm 当り 8 目	Ⅳ期後半	口縁部	卸目残存良
61	36	珠洲焼	片口鉢	5D9・6E8	SR1-2 層						密	ロクロナデ　内：卸目 3cm 当り 15 目	Ⅳ期後半	口縁部	内面黒斑？
61	37	珠洲焼	片口鉢	7E15・7G5	SR1-2 層					11	密	ロクロナデ　外底：静止糸切り痕 内：卸目は内底と体部を区分し施す　1 条 1.6cm に 7 目	Ⅴ期	底～体部	卸目残存良
61	38	珠洲焼	片口鉢	7G24、8H1・6	SR1-2 層					13.8	粗い	ロクロナデ　外底：静止糸切り痕 内：卸目　13 条以上 8 目	Ⅳ期	底部	内・外面にスス付着　卸目摩耗
61	39	須恵器	杯	7H19	SR1-2 層			12.8			密	ロクロナデ	9 世紀前半	口縁部	重ね焼痕有　佐渡小泊産
61	40	土師質土器	皿 C	5D10・15、6D17・18	SR1	1・2	SR1-2 層	12	3.2	8.6	やや密	ロクロナデ 底部ヘラ切り	14 世紀前半		阿賀北系 a2 類
				6C17	**SD259**		SR1-3 層								
61	41	珠洲焼	片口鉢	**7E8**	**SK504**	3	SR1-3 層			14	粗い	ロクロナデ 外底：静止糸切り痕 内：卸目　1 条 2.2cm に 10 目　18 条以上	Ⅳ期初めころ	底～体部	外面に指頭圧痕割れた後、被熱
				9G4・8・9	SR1	3									
				21-6tr（試掘（SX04））			SR1-1 層								
61	42	珠洲焼	片口鉢	9G6	SR1-3 層			29.8			密	ロクロナデ　内：卸目 1 条 2cm に 9 目　3 条以上	Ⅳ期前半	4/36	
61	43	近世陶磁器	染付皿	7G14	不明			15			密	見込み露胎	近世	3/36	

2009 年度　土製品観察表

図版No.	報告No.	種別	出土地点				法量（cm）				重量	成形・調整	胎土	色調	備考
			グリッド	遺構	層位	所属層位	長	幅	厚	孔径	（g）				
61	44	土錘	6F10	遺構外	Ⅷ	Ⅷ	6.8	5.8	5.9	1.9	221.7	指頭圧痕・繊維圧痕	粗（長）	2.5Y7/3　浅黄色	
61	45	土玉	6D14	SR1-2 層			1.7	1.8	1.7	―	6.4		やや密	N5/　灰色	

2009 年度　石製品観察表

図版 No.	報告 No.	種別	出土地点				法量（cm）			重量（g）	石材	備考
			グリッド	遺構	層位	所属層位	長	幅	厚			
62	1	砥石	6E13			Ⅷ	6.4	4.2	1.1	42.2	凝灰岩	砥面：4
62	2	砥石	9F12	SD111	1	SR1-1・2 層	14.8	7.1	3.9	645.6	凝灰岩	砥面：3 出羽産？　スス付着
62	3	軽石を加工したもの	6F15	SR1-1 層			4.9	4.0	3.1	15.6	軽石	両側から穿孔している　孔径 6mm
62	4	硯	6D23	SR1-1 層			8.0	3.7	1.0	48.2	頁岩	携帯用長方硯　鳴滝産？
62	5	砥石	7H2	SR1-1 層			20.4	7.0	4.4	719.5	砂岩	砥面：2　不明石製品転用
62	6	砥石	7E20	SR1-1 層			7.0	2.8	1.5	42.5	粘板岩	砥面：2　仕上げ砥　鳴滝産？
62	7	砥石	6E23	SR1-1 層			9.3	6.6	3.0	299.8	砂岩	砥面：5　　スス付着
62	8	砥石	6E11	SR1-1 層			11.3	3.7	1.7	90.9	凝灰岩	砥面：3　出羽産？
62	9	砥石	7G11	SR1-1 層			15.9	5.4	4.1	403.6	凝灰岩	砥面：4
62	10	砥石	20-13tr（試掘）	SR1-1 層			16.6	10.3	4.9	932.8	砂岩	砥面：3
62	11	砥石	8G1	SK4	1	SR1-2 層	4.9	3.7	1.2	39.7	凝灰岩	砥面：5
62	12	砥石	7G17	P611		SR1-2 層	13.9	6.6	3.2	439.5	流紋岩	砥面：4
62	13	砥石	6E19	SR1-2 層			6.6	3.1	2.1	45.8	凝灰岩	砥面：4
63	14	砥石	6E12	SR1-2 層			9.3	6.7	3.3	204.3	凝灰岩	砥面：4
63	15	砥石	5D5	SR1-3 層			4.6	3.6	1.6	38.8	凝灰岩	砥面：4

2009 年度　金属製品観察表

図版 No.	報告 No.	種別	出土地点				法量（cm）			重量	素材	備考
			グリッド	遺構	層位	所属層位	長(口径)	幅(底径)	厚(器高)	（g）		
63	16	錐	8F4	SD111		SR1-1・2 層	6.1	1.1	1	9.3	鉄	
63	17	刀子	5E25	SD112	3	SR1-1・2 層	21.7	1.3	0.4	55.3	鉄	
63	18	鎹	6E12	SR165	2	SR1-1・2 層	(13.6)	0.9	0.2	15.0	鉄	
63	19	鉤	6F1	SR165	2	SR1-1・2 層	17.7	0.7	0.7	34.2	鉄	
63	20-1	装飾金具	6E2	SR1-1 層			3.3	4.5	0.9	1.7	銅	
63	20-2	装飾金具	6E2	SR1-1 層			1.0	1.1	0.1	0.2	銅	
63	20-3	装飾金具	6E2	SR1-1 層			1.6	1.6	0.3	0.7	銅	
63	20-4	装飾金具	6E2	SR1-1 層			2.2	2.2	0.4	2.0	銅	
63	21	装飾金具	6E2	SR1-1 層			2.2	2.1	0.5	2.8	銅	
63	22	返角	6E1	SR1-1 層			2.3	0.8	1.4	3.7	銅	
63	23	椀	6E18	SR1-1 層			13.2	7.5	4	689.3	鉄	
63	24	皿	5D8	SR1-1 層			12.3	9	2	237.6	鉄	
63	25	鎹	6E16	SR1-1 層			6.1	2.1	0.35	10.9	鉄	
63	26	刀子	8F21	SR1-1 層			(17)	1.7	0.4	41.9	鉄	
63	27	刀子	7H10	SR1-1 層			(19.5)	1.5	0.4	18.3	鉄	
63	28	刀子	6E18	SR1-1 層			23.8	1.7	0.4	54.7	鉄	
63	29	釘	6E17	SX05	1	SR1-2 層	(4.3)	1.1	1	6.7	鉄	
63	30	鎹	6E12	SX05	1	SR1-2 層	7.7	1.7	0.4	11.3	鉄	
63	31	鎹	6E12	SX05	1	SR1-2 層	(13.6)	1.1	0.8	56.7	鉄	
63	32	鍋 B	6E12 7D16	SX05	1	SR1-2 層	26.2	17.5	(12.8)	125.7	鉄	獣脚高 2.8cm　一文字湯口
63	33	鍋 C	6E8・11・12・13	SX05	1	SR1-2 層	34.2	24.4	16	789.6	鉄	
63	34	不明	6E17	SD166	2	SR1-2 層	16.4	0.6	0.3	6.6	鉄	
63	35	鎹	6E10	SK168		SR1-2 層	7.1	2.2	0.4	8.1	鉄	
63	36	鏃	7E	SD330	4	SR1-2 層	16.2	1.1	1	26.8	鉄	
63	37	鏃	7E	SD330	4	SR1-2 層	16.5	1.1	1.1	26.4	鉄	
64	38	環状鉄製品	6D8	SR1-2 層			3.7	1.8	0.4	4.7	鉄	
64	39	鎹	6D13	SR1-2 層			8.8	2.7	0.5	27.2	鉄	
64	40	刀子	6E14	SR1-2 層			(14.5)	2.1	0.25	25.4	鉄	柄付きのまま出土
64	41	刀子	7H10	SR1-2 層			(21.9)	2.4	0.2	29.0	鉄	
64	42	刀子	5D5	SR1-2 層			28.8	2.1	0.4	53.1	鉄	完形
64	43	楔状鉄製品	6E8	SK211		SR1-3 層	9	1.8	0.8	38.2	鉄	
64	44	鋏	5E25	SK260		SR1-3 層	12.8	1.5	0.15	12.3	鉄	
64	45	錐もしくは針	9G9	SR1-3 層			5.2	0.3	0.3	1.1	鉄	
64	46	釘	6E25	SR1-3 層			(7.25)	2.3	0.9	10.4	鉄	
64	47	火箸	6E25	SR1-3 層			(11.02)	0.6	0.6	22.0	鉄	上端をねじり、螺旋状になる。
64	48	釘	9G4	SR1-3 層			(13.1)	1.4	1.3	20.0	鉄	
64	49	刀子	6F11	SR1-3 層			22.1	1.8	0.5	60.5	鉄	
64	50	刀子	7G7	SR1-3 層			28.4	2.2	0.4	71.2	鉄	完形

2009 年度　銭貨観察表（1）

図版 No.	報告 No.	出土地点				出土銭種類	初鋳年	王朝	書体	法量（cm）			重量	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位					外径	内径	厚	（g）	
64	51	6F12	水田	覆砂	Ⅸ層	元符通寶	1,098	北宋	行書	2.32	0.60	0.08	3.2	
64	52	7E3	SD111	1	SR1-1・2 層	元祐通寶	1,086	北宋	篆書	2.38	0.71	0.10	3.7	
64	53	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	祥符通寶	1,008	北宋	真書	2.43	0.60	0.07	3.6	8 枚が重なって出土 上
64	54	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	治平元寶	1,064	北宋	真書	2.37	0.63	0.08	3.2	8 枚が重なって出土
64	55	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	至和元寶	1,054	北宋	篆書	2.38	0.67	0.08	3.7	8 枚が重なって出土
64	56	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	元祐通寶	1,086	北宋	篆書	2.34	0.62	0.08	3.6	8 枚が重なって出土
64	57	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	景徳元寶	1,004	北宋	真書	2.39	0.54	0.10	3.6	8 枚が重なって出土
64	58	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	元豊通寶	1,078	北宋	行書	2.41	0.67	0.06	3.2	8 枚が重なって出土
64	59	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	元豊通寶	1,078	北宋	行書	2.44	0.61	0.06	2.9	8 枚が重なって出土

2009 年度 銭貨観察表（2）

図版No.	報告No.	出土地点				出土銭種類	初鋳年	王朝	書体	法量（cm）			重量	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位					外径	内径	厚	（g）	
64	60	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	熙寧元寶	1,068	北宋	真書	2.41	0.65	0.09	4.1	8 枚が重なって出土　下
64	61	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	政和通寶	1,111	北宋	真書	2.37	0.60	0.09	3.2	7 枚が重なって出土　上
64	62	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	天聖元寶	1,023	北宋	真書	2.45	0.60	0.09	3.5	7 枚が重なって出土
64	63	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	紹聖元寶	1,094	北宋	篆書	2.41	0.62	0.09	3.8	7 枚が重なって出土
64	64	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	皇宋通寶	1,038	北宋	篆書	2.49	0.63	0.07	3.7	7 枚が重なって出土
64	65	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	至道元寶	995	北宋	草書	2.40	0.58	0.08	3.7	7 枚が重なって出土
64	66	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	開元通寶	621	唐		2.45	0.64	0.09	3.4	7 枚が重なって出土 背に「上月」
64	67	6F12	SR165	2	SR1-1・2 層	皇宋通寶	1,038	北宋	篆書	2.39	0.72	0.09	3.9	7 枚が重なって出土　下
64	68	6F13	SR1-1 層			開元通寶	845（補鋳）	唐		2.38	0.61	0.06	3.1	背に「興」
64	69	7F18	SR1-1 層			乾元重寶	758	唐	真書	2.28	6.50	0.07	2.4	
64	70	6E5	SR1-1 層			大観通寶	1,107	北宋	真書	2.50	0.72	0.07	2.9	
64	71	7G7	SR1-1 層			淳熙元寶	1,174	南宋	真書	2.38	0.63	0.08	3.1	背に「十三」
64	72	7F7	SK491	1	SR1-3 層	熙寧元寶	1,068	北宋	篆書	2.42	0.70	0.01	3.8	10 枚重なって出土　上
64	73	7F7	SK491	1	SR1-3 層	元豊通寶	1,078	北宋	篆書	2.20	0.71	0.09	3.0	10 枚重なって出土
64	74	7F7	SK491	1	SR1-3 層	聖宋元寶	1,101	北宋	行書	2.40	0.73	0.06	2.4	10 枚重なって出土
64	75	7F7	SK491	1	SR1-3 層	景徳元寶	1,004	北宋	真書	2.42	0.63	0.12	3.6	10 枚重なって出土
64	76	7F7	SK491	1	SR1-3 層	嘉祐通寶	1,056	北宋	篆書	2.43	0.79	0.10	3.4	10 枚重なって出土
64	77	7F7	SK491	1	SR1-3 層	聖宋元寶	1,101	北宋	篆書	2.41	0.80	0.10	3.4	10 枚重なって出土
64	78	7F7	SK491	1	SR1-3 層	紹熙元寶	1,190	南宋	真書	2.38	0.65	0.13	3.5	10 枚重なって出土　背に「元」
64	79	7F7	SK491	1	SR1-3 層	政和通寶	1,111	北宋	篆書	2.47	0.70	0.10	3.1	10 枚重なって出土
64	80	7F7	SK491	1	SR1-3 層	皇宋通寶	1,038	北宋	篆書	2.31	0.70	0.08	3.5	10 枚重なって出土
64	81	7F7	SK491	1	SR1-3 層	開元通寶	621	唐		2.42	0.71	0.12	3.6	10 枚重なって出土　背に「上月」 下
64	82	7F11	SK508		SR1-3 層	政和通寶	1,111	北宋	篆書	2.43	0.62	0.09	3.3	

2009 年度 木製品観察表（1）

図版No.	報告No.	出土地点				種類	器種	下駄分類		法量			調整・装飾		樹種	木取	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位			台平・側	歯	長・高	幅・口径	厚・底径	表面・外面	裏面・内面			
65	1	8G16	SB336-P1	―	SR1-1	建築材	柱根			(100.8)	20.0	11.2			スギ	芯去りミカン割	
65	2	7H4	SB336-P3	1	SR1-1	建築材	柱根			(62.2)	18.0	16.6			ヤナギ属	丸木取り	
65	3	7H3	SB336-P4	1	SR1-1	建築材	柱根			(66.4)	16.0	13.4			ヤナギ属	丸木取り	
65	4	7H9	P750	―	SR1-1	建築材	柱根			(96.4)	10.6	5.6			スギ	削り出し	
65	5	7G22	P752	―	SR1-1	建築材	柱根			(88.0)	15.6	14.6			ヤナギ属	丸木取り	
65	6	7H15	P754	1	SR1-1	建築材	柱根			(100.6)	12.0	9.0	溝、		スギ	偏半割？	
65	7	7H20	P755	―	SR1-1	建築材	柱根			(43.0)	4.2	2.2	先端 4 面加工		スギ	板目	
65	8	7G25	P757	―	SR1-1	建築材	柱根			(86.4)	16.2	8.0			ブナ属	半割	
65	9	7G24	P758	―	SR1-1	建築材	柱根			(76.6)	9.2	7.2	角材		スギ	柾目	
65	10	6E11	P43	1	SR1-1	建築材	柱根			(31.2)	12.3	10.6			マツ属複維管束亜属	削り出し	
65	11	6E1	P88	―	SR1-1	建築材	柱根			(53.0)	15.8	15.4			サクラ属	丸木取り	
65	12	7F16	P449	―	SR1-1	建築材	柱根			(76.6)	15.4	13.2			クマシデ属イヌシデ節	丸木取り	
66	13	7E2	SR1	1	SR1-1	祭祀具	串			30.4	2.3	1.4	先端 3 面加工		スギ	板目	
66	14	6E5	SR1	1	SR1-1	祭祀具	串			31.5	2.2	1.2	先端 5 面加工		スギ	柾目	
66	15	8F25	SR1	1	SR1-1	食膳具	漆器椀			(1.5)	(11.4)	7.3	黒漆	黒漆	ブナ属	横木地柾目	
66	16	9G4	SR1	1	SR1-1	食膳具	漆器椀			(3.7)	(13.6)	7.1	黒漆	黒漆	ケヤキ	横木地柾目	
66	17	6D18	SR1	1	SR1-1	食膳具	漆器椀			3.1	14.2	7.8	黒漆	黒漆	ケヤキ	横木地柾目	No.1
66	18	6D14	SR1	1	SR1-1	食膳具	漆器椀			(5.0)	14.4	6.2	黒漆・赤漆絵	黒漆・赤漆絵（松か）	ブナ属	横木地柾目	
66	19	6E4	SR1	1	SR1-1	食膳具	漆器鉢？			(2.0)	(15.4)	10.0	不明	不明	ケヤキ	横木地柾目	
66	20	7G6	SR1	1	SR1-1	容器	漆器蓋			0.9	7.2	6.2	黒漆・象嵌三又とV字状の文様	黒漆	ヒノキ科	横木	
66	21	5F4	SR1	1	SR1-1	容器	編組			(5.0)	(15.9)	1.0	2 本飛ばし 2 本潜り、籤の幅 0.8cm 厚さ 0.1cm	下部に折曲がり見える	スギ	―	
66	22	6D24	SR1	1	SR1-1	容器	箱側板			10.1	17.7	0.9	左釘穴 5、右釘穴 4		スギ	柾目	
66	23	6E17	SR1	1	SR1-1	容器	箱底板			10.2	10.5	1.2	ケズリ、木釘穴 12	ケズリ	スギ	板目	
66	24	7E2	SR1	1	SR1-1	容器	有孔円板			14.0	(6.6)	1.5	孔 3 か所		スギ	板目	
66	25	6F11	SR1	1	SR1-1	容器	鍋蓋？			24.1	(12.6)	1.0	全面ケズリ、丸孔上下 2、ツマミ用方形孔中央 1、炭化	全面ケズリ	スギ	柾目	
66	26	9G8	SR1	1	SR1-1	容器	折敷底板			28.1	(19.2)	0.5	側板を綴じる孔 2 個 1 単位 4 か所、中央に孔 4 か所		スギ	柾目	
67	27	6E21	SR1	1	SR1-1	容器	曲物底板			38.9	(19.3)	1.1	樺皮 3 か所残る		スギ	柾目	
66	28	6F2	SR1	1	SR1-1	容器	把手？			40.8	3.2	2.5	ケズリ、両端紐掛け部作り出し	中央部凹	スギ	柾目	
66	29	6E	SR1	1	SR1-1	容器	曲物把手？			41.9	3.8	1.6	ケズリ、両端細く加工、抉り		スギ	板目	

2009 年度 木製品観察表（2）

図版No.	報告No.	出土地点				種類	器種	下駄分類		法量			調整・装飾		樹種	木取	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位			台平・側	歯	長・高	幅・口径	厚・底径	表面・外面	裏面・内面			
67	30	8F21	SR1	1	SR1-1	服飾具	連歯下駄	A Ⅰ b1	Ⅰ	15.7	9.6	3.9			スギ	柾目	
67	31	5E5	SR1	1	SR1-1	服飾具	連歯下駄	A Ⅰ b1	不明	19.6	10.0	1.7	足指痕、前緒部欠損	歯わずかに残る	スギ	板目	
67	32	6E25	SR1	1	SR1-1	服飾具	連歯下駄	A Ⅰ b1	Ⅰ	20.0	10.4	3.0	ケズリ	歯一部のみ残存。鋸痕、ケズリ	スギ	板目	
67	33	6E11	SR1	1	SR1-1	服飾具	連歯下駄	A Ⅱ a1	不明	19.3	9.4	1.3	足指痕、小凹炭化3か所、	歯摩耗	スギ	柾目	
67	34	7E15	SR1	1	SR1-1	服飾具	連歯下駄	A Ⅱ 1	Ⅰ	13.1	(3.6)	2．1	面取り	ケズリ	スギ	柾目	
67	35	6E23	SR1	1	SR1-1	服飾具	無歯下駄	B Ⅰ b1	—	20.7	12.3	1.1			スギ	板目	
67	36	7F15	SR1	1	SR1-1	服飾具	無歯下駄	B Ⅰ b1	—	20.4	12.0	2.0			スギ	柾目	
67	37	6D17	SR1	1	SR1-1	服飾具	露卯下駄	C Ⅱ a2	c	23.0	9.8	2.8	舟底形、枘2-1、歯欠損、刃物痕		モクレン属	柾目	
68	38	9G7	SR1	1	SR1-1	服飾具	露卯下駄	C Ⅱ a2	b	23.0	10.0	3.1	ケズリ、足指痕、枘2-2	歯欠損	モクレン属	柾目	
68	39	6E9	SR1	1	SR1-1	服飾具	露卯下駄	C Ⅱ a2	d	21.5	9.6	3.3	舟底形、枘3-2、歯欠損		モクレン属	柾目	
68	40	6F8	SR1	1	SR1-1	建築材	杭？			107.0	3.0	2.2	上部切り欠き、先端尖る		スギ	削り出し	
68	41	7E21	SR1	1	SR1-1	建築材？	杭？			137.8	5.6	3.8	先端尖る		スギ	柾目	
68	42	6E12	SR1	1	SR1-1	部材	枘付木製品			8.5	2.6	1.6	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
68	43	7E6	SR1	1	SR1-1	部材	枘付木製品			9.5	2.3	1.5	ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
68	44	7E21	SR1	1	SR1-1	部材	不明木製品			26.9	11.5	2.8	溝4本切る、一部炭化、	一部炭化	スギ	柾目	
68	45	6E25	SR1	1	SR1-1	部材	脚？			36.3	2.0	1.5	ケズリ	ケズリ、木釘孔3、枘孔	スギ	板目	
68	46	6F11	SR1	1	SR1-1	工具	刀子柄未成品			13.4	2.7	0.6	ケズリ		スギ	柾目	
68	47	6E4	SR1	1	SR1-1	農具	木錘			15.8	4.3	3.7	4隅面取り後、中央にノミで溝掘り、縄痕跡あり		スギ	板目	
68	48	8F6	SR1	1	SR1-1	農具	鎌柄			(31.6)	(3.3)	1.7	目釘孔1、刃部わずかに残る。下部滑りどめで、細く加工する。		スギ	板目	刃の錆びが瘤状に腐食
68	49	7E2	SR1	1	SR1-1	農具	田下駄？	B Ⅰ b	—	27.0	15.7	2.2	右足跡痕		スギ	柾目	
69	50	7G17	SR1	1	SR1-1	農具	田下駄			48.5	21.1	8.0	高さ5.1cmの踵を留める立ち上がりあり。左右2か所づつの孔に縄を通し足首を固定する。	高さ1.5～2.1cmの4cm前後の方形の脚を持つ。	クリ	柾目	
68	51	8F16	SR1	1	SR1-1	雑具	火鑽臼			15.7	1.6	2.9			スギ	柾目	
69	52	6E17	SR1	1	SR1-1	雑具	木片			5.5	2.7	1.0	ケズリ		—	柾目	
69	53	6E17	SR1	1	SR1-1	雑具	木片			6.4	2.8	0.9	角柱状の板を斜めに切り、4枚の板に切っている		スギ	柾目	
69	54	6E17	SR1	1	SR1-1	雑具	木片			6.5	2.7	4.1	2回に分け6枚の板を切っている		スギ	柾目	
69	55	8E24	SD111	1	SR1-1～2	食事具	漆器椀			(4.7)	(13.8)	8.2	黒漆	黒漆	クリ	横木地柾目	
69	56	5E24	SD112	4	SR1-1～2	工具	篦			12.6	6.2	0.6	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
69	57	6F17	SD112	8	SR1-1～2	服飾具	扇			22.2	2．2	0.3	要φ0.3cm		スギ	柾目	
69	58	5E19	SR165	1	SR1-1～2	容器	曲物枠木			18.3	3.3	1.3	ケズリ	ケズリ	コナラ属コナラ亜属コナラ節	板目	
69	59	5F20	SR165	2	SR1-1～2	祭祀具	人形			14.9	1.9	2.4	折烏帽子、下部切断		スギ	柾目	
69	60	5E13	SR165	2	SR1-1～2	祭祀具	斎串			27.4	2.9	0.5	圭頭、左右に切り欠き2、先端尖る		スギ	柾目	033型式、文字無
69	61	6F6	SR165	2	SR1-1～2	容器	不明木製品			3.0	22.2	0.6	中央に方形孔、表面漆？右に丸孔2、左に方形孔2		スギ	柾目	
69	62	6F6	SR165	2	SR1-1～2	容器	箱側板			14.9	18.2	1.0	刃物痕、木釘1辺2個づつ		スギ	板目	
69	63	6F6	SR165	2	SR1-1～2	容器	箱側板			19.8	8.7	0.7	木釘側板2、底板3づつ	側板の圧痕2か所残る	スギ	板目	
69	64	6F17	SR165	2	SR1-1～2	容器	蓋			(22.8)	(6.7)	0.7	ケズリ、釘穴8		スギ	柾目	
69	65	5F10	SR165	2	SR1-1～2	服飾具	連歯下駄	A Ⅱ 1	Ⅱ a	(12.0)	9.0	4．5			スギ	柾目	
69	66	6F1	SR165	2	SR1-1～2	服飾具	草履芯			17.4	3.1	0.3	上部方形孔、右側面切り欠き		スギ	板目	
69	67	6F1	SR165	2	SR1-1～2	工具	刀子鞘			20.3	2.4	0.6	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
70	68	6F6	SR165	2	SR1-1～2	雑具	題箋状木製品			11.3	4.6	0.3	転用品か、木釘1		スギ	板目	
70	69	6E21	SR165	3	SR1-1～2	服飾具	草履芯			24.5	5.1	0.7	孔0.5φ、切り欠き、縄目痕		スギ	板目	
70	70	6F7	SR165	3	SR1-1～2	部材	脚未成品？			3.6	28.5	1.6	中央に溝		スギ	板目	

2009 年度 木製品観察表（3）

図版 No.	報告 No.	出土地点				種類	器種	下駄分類		法量			調整・装飾		樹種	木取	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位			台平・側	歯	長・高	幅・口径	厚・底径	表面・外面	裏面・内面			
70	71	6G3	SR165	3	SR1-1 ～ 2	部材	方形板			13.6	5.1	0.9	面取り、孔大 1.3 × 1.2、小 0.9 × 0.9		スギ	柾目	
70	72	6F12	SR165	3	SR1-1 ～ 2	工具	刀子柄未成品			9.6	2.2	1.5	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
70	73	5E15	SR165	―	SR1-1 ～ 2	食事具	漆器椀			(3.7)	13.1	7.5	黒漆	黒漆・赤漆絵（不明）	ケヤキ	横木地柾目	
70	74	6E1	SK65	1	SR1-2	祭祀具	舟形			(25.5)	(6.6)	2.1	中央凹に孔貫通		スギ	柾目	腐食著しい。
70	75	6E1	SK66	1	SR1-2	服飾具	連歯下駄	A Ⅰ 1	Ⅱ	25.0	(9.7)	2.5	小孔 3		スギ	柾目	
70	76	6D13	SK72	底面直上	SR1-2	食事具	漆器皿			1.5	9.2	8.1	黒漆・面取り・底面刻書「＊」	黒漆	ケヤキ	横木地柾目	漆 No.2
70	77	5C19	SK75	2	SR1-2	食事具	漆器皿			1.5	9.8	8.2	黒漆	赤漆	ケヤキ	横木地柾目	No.1
70	78	5C19	SK75	3	SR1-2	食事具	漆器皿			1.5	8.6	5.6	不明	不明	クリ	横木地柾目	No.2
70	79	5D4	SK86	4 床直	SR1-2	食事具	漆器皿			(1.5)	(8.1)	3．2	黒漆	赤漆	ケヤキ	横木地板目	
70	80	6E21	SK94	―	SR1-2	部材	不明木製品			15.9	5.1	1.4	切り欠き 2、孔 1、刃物痕	木釘孔 1	スギ	板目	
70	81	6E15	SK168	3	SR1-2	装飾具	連歯下駄	A Ⅰ b1	Ⅱ	17.2	11.0	3.0			スギ	板目	足指痕、炭化
70	82	6F5	SK335	―	SR1-2	雑具	火鑽臼			22.1	4.5	1.7	ケズリ、	ケズリ、	スギ	柾目	
71	83	7E12	SK399	上層	SR1-2	容器	曲物			44.8	30.3	13.8	楕円形曲物、側板切断		スギ	底：柾目 側板：柾目	土圧で変形。長方形の蓋が付く
71	84-1	7E12	SK399	上層	SR1-2	容器	曲物蓋			16.3	32.5	0.9	下左右に切り欠き、木釘穴 2		スギ	板目	
71	84-2	7E12	SK399	上層	SR1-2	容器	曲物蓋			16.1	31.6	0.7		曲物の縁の圧痕残る	スギ	板目	
71	85	7G17	SK529	1	SR1-2	祭祀具	人形			13.6	2.3	0.6	ケズリ、頭部欠損		スギ	板目	
71	86	7G23	SK529	3	SR1-2	部材	不明木製品			12.5	3.4	1.5	ケズリ、刃物痕、孔φ 0.5mm	ケズリ	スギ	柾目	
71	87	7G11	SK534	2	SR1-2	工具	刀子柄			11.8	1.8	0.6	ケズリ		スギ	柾目	
71	88	7G6・7	SK534	―	SR1-2	容器	曲物底板			11.7	(7.5)	0.4	木釘穴 2 個 1 組 3		スギ	柾目	
72	89	6F8	P22	―	SR1-2	建築材	柱根			(101.0)	14.0	14.2			コナラ属 コナラ亜属 コナラ節	丸木取り	
72	90	6F8	P28	―	SR1-2	建築材	柱根			(95.2)	18.6	13.6			サクラ属	丸木取り	
72	91	6E2	P39	―	SR1-2	建築材	柱根			(90.2)	12.8	12.2			クリ	丸木取り	
72	92	6E17	P76-b	柱 (B-1)	SR1-2	建築材	柱根			(57.0)	12.8	10.4			サクラ属	丸木取り	
72	93	6F9	P386	―	SR1-2	建築材	柱根			(87.4)	14.2	13.4	先端尖る		モクレン属	丸木取り	
72	94	6F15	P447	SR 1・2	SR1-2	建築材	柱根			(58.5)	12.9	12.2			スギ	丸木取り	
72	95	7G8	P521	―	SR1-2	工具	刀子柄未成品			17.1	2.4	1.1	ケズリ	柄削る部分炭化	スギ	板目	
72	96	9G5	SA12-8		SR1-2	建築材	杭			26.1	4.4	4.1			ヤナギ属	丸木取り	
72	97	9F16	SA13-10	―	SR1-2	建築材	杭			31.4	5.8	4.2	先端 4 面加工		ヤナギ属	丸木取り	
72	98	8E22	SA13-23		SR1-2	建築材	杭			69.2	6.2	1.2	台形状に抉り		スギ	板目	
72	99	8F14	SA14-20	―	SR1-2	建築材	杭			41.7	5.0	4.3	樹皮残る。		ヤナギ属	丸木取り	
72	100	10G6	SA145-2	西盛土 1	SR1-2	建築材	杭			26.0	2.2	2.3	樹皮残る。		ヤナギ属	丸木取り	
72	101	6E12	SX005	1	SR1-2	食膳具	杓子			18.7	4.9	0.8	ケズリ、柄部両端面取り、		スギ	柾目	
72	102	6E12	SX005	―	SR1-2	部材	柄付木製品			11.1	2.2	1.8			スギ	板目	
72	103	6E22	SX030	―	SR1-2	建築材	杭			63.0	2.9	2.7	先端 3 面加工。		スギ	板目	
72	104	6D22	SX055	―	SR1-2	祭祀具	串			39.5	3.2	1.5	先端 2 面加工		スギ	板目	
72	105	6E2	SX062		SR1-2	容器	栓？			6.1	2.5	2.3	上部面取り、ケズリ、貫通孔 2		スギ	板目	
73	106	5F10	SX209-1	―	SR1-2	建築材	杭			37.6	5.5	5.5	樹皮残る。枝切り払う。		―	丸木取り	
73	107	5F10	SX209-4	―	SR1-2	建築材	杭			56.6	3.2	2.7	樹皮残る。片面加工		ハンノキ属 ハンノキ亜属	丸木取り	
73	108	7E21	SX439	―	SR1-2	建築材	杭			(71.2)	8.6	9.6			スギ	芯去りミカン割	
73	109	7G7	SX566	―	SR1-2	建築材	杭			(35.1)	7.3	6.2	樹皮残る。		ヤナギ属	丸木取り	
73	110	6E24	SD166	3	SR1-2	工具	茅針			(17.7)	(2.5)	1.2	ケズリ、縄掛け孔 1 か所		スギ	柾目	
73	111	6F8	SD166	―	SR1-2	容器	蓋			23.8	(16.1)	3.0	方形ツマミ		スギ	柾目	
73	112	7E16	SD339	1	SR1-2	工具	針状木製品			8.0	1.2	0.4	面取り、孔逆台形 0.7cm	面取り	スギ	板目	
73	113	7E12	SD339	1	SR1-2	雑具	不明木製品			(10.1)	1.4	0.8	両側面鋸歯状に切り欠き		スギ	柾目	
73	114	7E16	SD339	―	SR1-2	雑具	題箋状木製品			10.1	4.1	0.4	ケズリ		スギ	柾目	
73	115	7E23	SD371	1	SR1-2	雑具	鉤			22.3	20.5	2.5	方形孔 2		クリ	丸木	
73	116	7E11	SD405	1	SR1-2	祭祀具	烏形			12.1	1.8	0.8	ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	

2009 年度 木製品観察表（4）

図版No.	報告No.	出土地点				種類	器種	下駄分類		法量			調整・装飾		樹種	木取	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位			台平・側	歯	長・高	幅・口径	厚・底径	表面・外面	裏面・内面			
73	117	7G12	SD436	3	SR1-2	服飾具	連歯下駄	A II a1	II	23.5	9.9	2.5			モクレン属	柾目	
73	118	7G8	SD597	1	SR1-2	服飾具	露卯下駄歯	C	I	(10.7)	15.8	1.9		接地面に砂利めり込む	スギ	柾目	
73	119	7G7	SD597	3	SR1-2	食事具	漆器椀			(1.5)	(12.2)	8.2	黒漆	黒漆・赤漆絵手描き	―	横木	
73	120	7G7	SD597	3	SR1-2	食事具	漆器椀			(4.3)	(12.6)	7.0	黒漆	黒漆	ケヤキ	横木地柾目	
74	121	6E9	SR1	2	SR1-2	文房具	荷札状木製品			11.0	5.6	0.4	刃物痕		スギ	柾目	
74	122	7F7	SR1	2	SR1-2	祭祀具	舟形			15.6	3.0	2.2	孔 1	ケズリ	スギ	柾目	
74	123	7F12	SR1	2	SR1-2	祭祀具	木鏃？			9.0	0.9	0.7			ウコギ属	板目	
74	124	7G11	SR1	2	SR1-2	祭祀具	陽物形			13.7	2.7	2.0	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
74	125	6E25	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器皿			0.8	9.2	7.7	不明	不明	クリ	横木地柾目	
74	126	6F8	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器皿			1.5	9.7	7.8	黒漆	黒漆	ケヤキ	横木地柾目	
74	127	7G18	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器皿			1.9	8.9	8.0	黒漆・面取り	黒漆	モクレン属	横木地柾目	
74	128	7H15	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器椀			―	―	―	黒漆口縁部布着せ	黒漆	ケヤキ	横木	
174	129	6E8	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器椀？			―	―	―	赤漆	赤漆・赤漆絵手描き	クリ	横木	皆朱漆器赤絵
74	130	6D8	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器椀			(2.9)	(11.4)	6.7	黒漆	黒漆	カツラ	横木地板目	
74	131	6F8	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器椀			3.4	12.2	5.8	黒漆・底内刻線「大」	黒漆	ケヤキ	横木地柾目	
74	132	6E9	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器椀			(2.6)	(12.8)	7．1	黒漆	黒漆	クリ	横木地柾目	
74	133	7H19	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器鉢？			(2.5)	(13.2)	7.1	不明、底部ロクロ針痕２か所	黒漆	ケヤキ	横木地柾目	
74	134	6F8	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器椀			3.0	13.6	7.7	黒漆	黒漆	ブナ属	横木地柾目	
74	135	7E17	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器椀			(6.4)	(14.2)	6.5	黒漆・赤絵（巴文４単位）	黒漆・赤漆絵最外周の円型押し、内部巴文２単位は手描き	ブナ属	横木地柾目	
74	136	6D13	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器椀			―	(14.3)	―	黒漆	黒漆、赤漆絵手描き	モクレン属	横木地柾目	
74	137	7G23	SR1	2	SR1-2	食事具	漆器椀			(4.5)	(16.4)	7.4	黒漆・赤漆絵手描き（3 単位）	赤漆	モクレン属	横木地板目	
74	138	8H1	SR1	2	SR1-2	食事具	杓子			25.5	5.5	0.6	面取り、ケズリ		スギ	柾目	
74	139	7E12	SR1	2	SR1-2	食事具	菜箸			43.6	1.1	9.6	ケズリ、刃物痕、上部平坦、下半丸		スギ	板目	
75	140	7H10	SR1	2	SR1-2	容器	折敷底板			23.4	25.7	0.6	釘穴２個１組３か所残る。刃物痕	上部切断刃物痕、	スギ	柾目	
75	141	7G2	SR1	2	SR1-2	容器	折敷底板			29.0	(20.9)	0.6	桟綴じ孔４か所残る		スギ	柾目	
74	142	6D18	SR1	2	SR1-2	容器	栓			6.3	2.9	2.9	面取り		スギ	柾目	
75	143	7H5	SR1	2	SR1-2	容器	長方形曲物蓋			28.6	(15.3)	1.0	刃物痕、把手付ける溝２条		スギ	柾目	
74	144	7G20	SR1	2	SR1-2	容器	把手？			5.9	1.7	0.9	刃物痕		スギ	柾目	
74	145	7G18	SR1	2	SR1-2	容器	把手未成品			13.3	3.8	3.4			スギ	柾目	
75	146	6E3	SR1	2	SR1-2	容器	箱側板			9.5	28.9	1.5	底面木釘７か所、右側面６か所、左５か所		スギ	板目	
75	147	8F12	SR1	2	SR1-2	容器	箱側板			(7.6)	19.9	0.9		上部に一部炭化	スギ	柾目	
75	148	6D13	SR1	2	SR1-2	容器	柄杓			12.0	3.4	0.5	ケズリ、左右柄、木釘孔３		スギ	柾目	
75	149	6D13	SR1	2	SR1-2	容器	柄杓			12.3	3.0	0.5	ケズリ、木釘孔７		スギ	柾目	
75	150	6E12	SR1	2	SR1-2	容器	小型円板			4.1	3.4	0.6	面取り、木釘孔１		スギ	柾目	
75	151	7G16	SR1	2	SR1-2	容器	小型円板			5.8	5.7	1.3	面取り		コウヤマキ	板目	
75	152	7G22	SR1	2	SR1-2	容器	小型円板			8.0	10.2	0.8	ケズリ、刃物痕		スギ	柾目	
75	153	6E11	SR1	2	SR1-2	容器	有孔円板			5.3	2.9	0.4	刃物痕、中央に孔φ3mm		スギ	柾目	
75	154	7G6	SR1	2	SR1-2	容器	蓋			22.8	(11.5)	1.2	ケズリ、中央にツマミ取り付け用の方形の孔、釘穴２	ケズリ、刃物痕、円形の圧痕	スギ	柾目	
75	155	6E12	SR1	2	SR1-2	容器	蓋			27.8	(26.0)	1.4	ケズリ、刃物痕、ツマミ？樹皮残る		板：スギ、ツマミ：ヤナギ属	板：柾目ツマミ：半割	
76	156	6E6	SR1	2	SR1-2	容器	蓋			33.9	(13.8)	1.1	把手用溝に釘穴１か所、刃物痕	面取り、刃物痕、刺突痕	スギ	柾目	
75	157	8G1	SR1	2	SR1-2	容器	曲物底板			8.9	8.9	0.6			スギ	柾目	
76	158	8H1	SR1	2	SR1-2	容器	曲物底板			22.8	22.3	1.0	樺皮綴じ４か所		スギ	柾目	
76	159	5D4	SR1	2	SR1-2	容器	曲物枠木？			17.3	3.4	1.2	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	

2009 年度 木製品観察表（5）

図版No.	報告No.	出土地点				種類	器種	下駄分類		法量			調整・装飾		樹種	木取	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位			台平・側	歯	長・高	幅・口径	厚・底径	表面・外面	裏面・内面			
76	160	7G20	SR1	2	SR1-2	容器？	箱？			20.0	2.9	1.2	面取り、上部黒漆？、木釘孔 8、枘孔 1	右側面未貫通孔 1	スギ	柾目	
76	161	6E14	SR1	2	SR1-2	服飾具	横櫛			4.7	11.2	1.4	全体に黒漆、棟に銀？蒔絵？。解き櫛、歯 3cm 当たり 8 本		イスノキ	棟が木口	
76	162	6E7	SR1	2	SR1-2	服飾具	横櫛			(3.4)	(5.1)	1.0	歯 3cm 当たり 26 本。全体に黒漆、。		イスノキ	棟が木口	中世後期
76	163	7E16	SR1	2	SR1-2	服飾具	連歯下駄	A Ⅰ b1	Ⅱ	15.0	8.1	3.3	ロクロ針痕？中央に 1 か所	ロクロ針痕？下部に 1 か所	マツ属複維管束亜属	芯持板目	
76	164	6F6	SR1	2	SR1-2	服飾具	連歯下駄	A Ⅰ b1	Ⅰ	26.7	13.9	5.0	刃物痕、面取り、緒孔方形	方形歯	スギ	板目	
76	165	7H15	SR1	2	SR1-2	服飾具	連歯下駄	A Ⅰ 1	Ⅱ	26.1	(8.1)	2.5	上下左に切り欠き、足指痕（右）		スギ	柾目	
77	166	6E14	SR1	2	SR1-2	服飾具	連歯下駄	A Ⅰ b1	Ⅱ	26.5	16.8	3.0	足指痕（左）	左側の歯が摩耗著しい	スギ	板目	
76	167	6E23	SR1	2	SR1-2	服飾具	連歯下駄	A Ⅰ b1	不明	15.9	9.8	1.8	足指痕、	歯の痕跡の刃物痕残る	スギ	板目	
77	168	6E16	SR1	2	SR1-2	服飾具	連歯下駄	A Ⅱ a1	Ⅱ	21.7	10.0	1.5	刃物痕、足指痕	歯摩耗	スギ	板目	
77	169	6D25	SR1	2	SR1-2	服飾具	連歯下駄	A Ⅱ a1	Ⅱ	23.7	10.6	1.3	足跡（右）	鋸痕、楕円形の歯	スギ	板目	
77	170	6E13	SR1	2	SR1-2	服飾具	無歯下駄	B Ⅰ b1	—	14.0	9.5	2.0	面取り、刃物痕多数、足跡痕	刃物痕	スギ	柾目	子供用
77	171	7F16	SR1	2	SR1-2	服飾具	露卯下駄	C Ⅰ a2	c	23.1	10.4	2.6	刃物痕、足指痕、枘 2-1		モクレン属	柾目	
77	172	7H10	SR1	2	SR1-2	服飾具	露卯下駄	C Ⅰ a2	a	23.0	10.6	(2.8)	台板に「＊」の刻書有り。舟底形、枘 1-1、右足指痕	歯欠損	台：モクレン属 歯：モクレン属	台：板目	
77	173	6D16	SR1	2	SR1-2	服飾具	露卯下駄	C Ⅱ b2	Ⅰ a	21.8	12.1	8.0	枘 1-1		台：モクレン属 歯：モクレン属	台：板目 歯：柾目	
77	174	7H3	SR1	2	SR1-2	服飾具	露卯下駄歯	C	Ⅰ	9.6	13.2	1.6	ケズリ、面取り、	ケズリ、	スギ	柾目	
78	175	6E12	SR1	2	SR1-2	服飾具	陰卯下駄	D Ⅰ b1	Ⅱ	12.8	8.6	3.8	足指痕	鋸痕、ケズリ	スギ	台：柾目 歯：板目	
77	176	6F25	SR1	2	SR1-2	服飾具	陰卯下駄歯	D	Ⅰ	8.2	12.6	2.0	枘なし。		スギ	柾目	
77	177	7F16	SR1	2	SR1-2	服飾具	下駄歯	不明	Ⅰ	10.5	(6.4)	1.8	ケズリ。左側面		スギ	板目	
78	178	8H11	SR1	2	SR1-2	服飾具	草履芯			23.8	9.6	0.4	孔 2、切り欠き左右 2 か所		スギ	板目	
78	179	5D5	SR1	2	SR1-2	部材	枘付木製品			8.2	1.9	1.5	鋸痕、面取り		スギ	板目	
78	180	6D7	SR1	2	SR1-2	部材	枘付木製品			8.5	2.3	2.3	ケズリ、枘	ケズリ	スギ	柾目	
78	181	6D12	SR1	2	SR1-2	部材	枘付木製品			10.3	1.9	1.7	ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
78	182	8G2	SR1	2	SR1-2	部材	有頭木製品			20.5	4.9	3.8	頭部炭化、柄は丸棒状、頭部平坦		クリ	板目	
78	183	7H13	SR1	2	SR1-2	部材	脚			18.6	4.0	1.0	釘穴 4 か所、上部丸味を持つ		スギ	板目	
78	184	6E21	SR1	2	SR1-2	部材	脚			28.1	3.5	1.6	透かし左右両側からケズリ		スギ	板目	
78	185	7H15	SR1	2	SR1-2	部材	不明木製品			(4.5)	1.0	0.7	ケズリ		スギ	柾目	
78	186	6D13	SR1	2	SR1-2	部材	不明木製品			9.5	4.1	0.5	上下はノミ、左右は錐で明けたような貫通孔		スギ	柾目	
78	187	6F2	SR1	2	SR1-2	部材	不明木製品			14.2	2.4	0.5	ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
78	188	6E8	SR1	2	SR1-2	部材	不明木製品			18.0	4.3	1．5	右側面に 4 か所の切り欠き		—	板目	
78	189	6D21	SR1	2	SR1-2	部材	不明木製品			19.5	2.8	1.3	ケズリ、切り欠き		スギ	板目	右側面鋸歯状に加工
78	190	6E8	SR1	2	SR1-2	部材	不明木製品			23.7	4.4	0.5	木釘孔 8、中央に山形の孔		スギ	柾目	
78	191	6E8	SR1	2	SR1-2	部材	不明木製品			56.4	8.0	1.7	枘 2、枘孔 1、木釘孔 2、木釘 14、上に幅 7．8mm の角材を乗せ木釘で留める		スギ	板目	
78	192	6E14	SR1	2	SR1-2	工具	刀子柄			2.2	11.6	1．1	目釘孔 1		スギ	柾目	
78	193	5D5	SR1	2	SR1-2	工具	刀子柄			3.0	13.1	1.3	目釘孔φ 4mm	刀子柄一部残存	シタン類		
78	194	7G3	SR1	2	SR1-2	工具	錐柄			27.2	1.5	1.4	全面ケズリ､中心にφ5mmの孔有り		スギ	柾目	
78	195	7H13	SR1	2	SR1-2	工具	茅針			(14.8)	3.3	1.7	ケズリ		スギ	柾目	
78	196	6E17	SR1	2	SR1-2	工具	茅針			103.4	2.8	1.6	先端ケズリ、孔φ 1.8 × 1.0cm	先端ケズリ	スギ	板目	
78	197	7F12	SR1	2	SR1-2	工具	篦			15.2	3.6	1.4	ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
79	198	5E20	SR1	2	SR1-2	農具	木錘？			14.5	2.1	1.7	面取り、切り欠き		スギ	板目	
79	199	7F3	SR1	2	SR1-2	農具	田下駄	B Ⅰ b1	—	26.0	17.7	2.2	面取り、下部中央に凹あり		スギ	板目	

2009 年度 木製品観察表（6）

図版No.	報告No.	出土地点				種類	器種	下駄分類		法量			調整・装飾		樹種	木取	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位			台平・側	歯	長・高	幅・口径	厚・底径	表面・外面	裏面・内面			
79	200	6D23	SK177	―	SR1-3	調理具	俎			26.2	29.3	3.5	上下左面取り、刃物痕多数		スギ	柾目	
79	201	6D23	SK177		SR1-3	服飾具	横櫛	A Ⅱ		4.3	(4.4)	0.9	黒漆塗り。両端破損、歯 3cm 当たり 35 本、切り通し線曲線、梳櫛		イスノキ	棟が木口	
79	202	6E11	SK179	3	SR1-3	食事具	漆器椀			5.4	14.4	7.0	黒漆	黒漆	―	横木	No.3
79	203	6E11	SK179	3	SR1-3	食事具	漆器皿			1.5	8.7	6.3	不明	不明	クリ	横木地柾目	No.4
79	204	6E11	SK179	4	SR1-3	文房具	種子札木簡			16.5	2.8	0.3	「しろわせ　さとう三郎」		スギ	板目	No.5、第二号木簡
79	205	6E11	SK179	4	SR1-3	食事具	漆器椀			3.0	13.1	7.2	黒漆	黒漆	ケヤキ	横木地柾目	No.2
79	206	6E3	SK201	1	SR1-3	食事具	漆器皿			1．2	7.4	8.3	赤漆	黒漆	ブナ属	横木地柾目	
79	207	6E1	SK201	11	SR1-3	服飾具	草履芯			24.7	9.7	0.5	ケズリ、両側面切り欠き		スギ	板目	
79	208	6E6	SK201		SR1-3	容器	曲物底板			(17.8)	(3.5)	0.9	木釘孔 1		スギ	柾目	
79	209	6E2	SK201	―	SR1-3	工具	楔			10.2	2.8	1.9	ケズリ		スギ	柾目	
79	210	6E23	SK206	―	SR1-3	部材	障子？			19.0	1.6	1．2	ケズリ、柄上下 2、木釘		スギ	柾目	
79	211	6E23	SK206	―	SR1-3	部材	障子？			17.3	1.7	1.5	ケズリ、面取り	柄が切ってある継ぎ手	スギ	板目	
79	212	6E23 6D14	SK206 SR1	― 2	SR1-3	容器	円形板			18.5	7.6	0.6			スギ	柾目	
79	213	6E18	SK207	―	SR1-3	部材	脚？			20.3	2.4	2.3	ケズリ、面取り、釘穴	ケズリ、	スギ	板目	
79	214	6E7	SK211	―	SR1-3	工具	茅針			(9.5)	2.7	1.0	ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
79	215	6E8	SK211	―	SR1-3	容器	有孔円板			3.0	1.3	0.2	ケズリ		スギ	板目	
79	216	5E20	SK260	1	SR1-3	祭祀具	刀形			19.5	1.8	0.4	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	刃 12.5 cm、柄 6.8cm
80	217	6E21	SK260	1	SR1-3	祭祀具	鳥形			10.2	7.5	1.1	ケズリ、目 φ 3mm、尾孔△ 2mm	ケズリ	スギ	柾目	
80	218	6E21	SK260	1	SR1-3	祭祀具	鳥形			13.5	1.7	0.7	面取り、方形孔 5 × 3mm	面取り	スギ	柾目	
80	219	6E21	SK260	1	SR1-3	服飾具	連歯下駄	A Ⅱ b1	Ⅰ	16.4	8.8	4.4	足指痕、刃物痕、小孔 3	全体に丁寧な細かいケズリ	スギ	板目	歯は外側がやや外に広がり、内側は垂直
80	220	5E25	SK260	1	SR1-3	服飾具	露卯下駄	C Ⅱ b2	Ⅰ b	23.0	14.7	12.2	足指痕（右足か）、枘 2·2、	台形歯、接地面に砂利めり込み。	台：モクレン属、歯：スギ	台:板目、歯：柾目	高下駄。歯の接地面に砂利埋め
80	221	5E20	SK260	1	SR1-3	農具	鎌柄			(30.4)	(3.1)	1.4	目釘孔 2、刃部わずかに残る。柄下部に4 か所の滑り留めの抉り4 か所		スギ	柾目	刃の錆びが瘤状に腐食
80	222	5E25 6E13	SK260 SR1	― 2	SR1-3	容器	蓋			35.5	36.2	1.0	面取り、ケズリ、刃物痕多数、把手用溝 2 条、	ケズリで玉縁状に仕上げる。刃物痕多数。	スギ	柾目	鍋·釜用か、一部炭化する
80	223	7E12	SK399 SD495	2 2	SR1-3	容器	折敷底板			(21.5)	(12.0)	0.7	漆？タール？と多量の繊維とが固まって盛上って付着		スギ	柾目	漆容器に転用か
80	224	7E17	SK476	2	SR1-3	食事具	漆器椀			(5.3)	(13.6)	7.4	黒漆・赤漆絵手描き	赤漆	クリ	横木地柾目	
80	225	7E16	SK476	―	SR1-3	部材	枘付木製品			8.9	1.7	1.7	ケズリ、木釘		スギ	柾目	
80	226	7E17	SK476	―	SR1-3	部材	不明木製品			12.7	1.4	0.3	ケズリ		スギ	柾目	
80	227	7F6	SK492	6	SR1-3	工具	鑿柄			23.4	1.9	1.1	ケズリ、	ケズリ、	スギ	板目	頂部孔 8mm、
80	228	7F11	SK502	―	SR1-3	容器	網組籤			7.0	1．1	0.1	10 枚重ね		スギ	板目	
80	229	8G16	SK589	1	SR1-3	容器	折敷底板			(1.6)	(9.6)	0.2	ケズリ、綴じ紐幅 1mm、		スギ	柾目	
81	230	7E11	SK660	―	SR1-3	祭祀具	箸状木製品			17.1	0.6	0.5	ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
81	231	7E11	SK660	―	SR1-3	祭祀具	箸状木製品			18.7	0.5	0.4	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
81	232	7E11	SK660	―	SR1-3	祭祀具	箸状木製品			18.7	0.5	0.4	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
81	233	7E11	SK660	―	SR1-3	祭祀具	箸状木製品			19.0	0.6	0.5	ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
81	234	7E11	SK660	―	SR1-3	祭祀具	箸状木製品			19.0	0.7	0.5	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
81	235	7E11	SK660	―	SR1-3	祭祀具	箸状木製品			19.0	0.8	0.4	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
81	236	7E11	SK660	―	SR1-3	祭祀具	箸状木製品			19.0	0.8	0.5	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
81	237	7E11	SK660	―	SR1-3	祭祀具	箸状木製品			19.2	0.5	0.4	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
81	238	7E11	SK660	―	SR1-3	工具	木釘			5.9	0.3	0.2	断面 4 角形		スギ	柾目	ほかに 31 本出土

2009 年度 木製品観察表（7）

図版No.	報告No.	出土地点				種類	器種	下駄分類		法量			調整・装飾		樹種	木取	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位			台平・側	歯	長・高	幅・口径	厚・底径	表面・外面	裏面・内面			
81	239	7E11	SK660	－	SR1-3	工具	木釘			6.0	0.2	0.2	断面４角形		スギ	柾目	ほかに 31 本出土
81	240	7E11	SK660	－	SR1-3	工具	木釘			6.0	0.2	0.3	断面４角形		スギ	柾目	ほかに 31 本出土
81	241	7E11	SK660	－	SR1-3	工具	木釘			6.0	0.2	0.4	断面４角形		スギ	柾目	ほかに 31 本出土
81	242	7E11	SK660	－	SR1-3	工具	木釘			6.0	0.5	0.4	断面４角形		スギ	柾目	ほかに 31 本出土
81	243	6F8	P275	2	SR1-3	食事具	漆器片口鉢			6.1	19.9	12.9	黒漆	黒漆	カツラ	横木地板目	
81	244	7F11	P551	－	SR1-3	建築材	柱根			(49.4)	7.2	5.6			スギ	削り出し	
81	245	7F1	P669	－	SR1-3	建築材	柱根			(77.0)	11.8	11.6			モクレン属	丸木取り	
81	246	7G10	SX131	－	SR1-3	工具	茅針			(14.7)	3.0	2.0	ケズリ、孔幅 1.1cm	ケズリ	スギ	板目	
81	247	6F12	SX248	1	SR1-3	建築材	杭			48.8	2.3	2.7			スギ		
81	248	5E25	SX277-2	－	SR1-3	建築材	杭			43.7	4.0	4.0	樹皮残る。先端３面加工		ヤナギ属	丸木取り	
82	249	5E25	SX277-5	－	SR1-3	容器	曲物底板			58.8	(19.7)	1.5	刃物痕多数。樺皮一部残る	刃物痕多数。	スギ	柾目	
81	250	7F16	SX518	－	SR1-3	部材	不明			52.6	5.4	3．1	上部枘、中央凹み、表面うろこ状加工痕		コナラ属コナラ亜属・コナラ節	板目	
81	251	9F13	SD113	1	SR1-3	容器	小型円板			6.5	6.9	0.8	ケズリ、C 字状圧痕		スギ	板目	
81	252	7E15	SD113	2	SR1-3	服飾具	露卯下駄歯	C		11.5	(9.6)	1.7	ケズリ、枘２	ケズリ	スギ	柾目	
81	253	8F10	SD113		SR1-3	部材	枘付木製品			8.1	1.8	1.7	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
81	254	6C17	SD259	－	SR1-3	部材	枘付木製品			14.6	2.0	1.6	ケズリ、枘		スギ	削り出し棒状	
82	255-1	8G1	SR1	3	SR1-3	文房具	上挟み板			10.7	4.9	0.4	上中央に孔 φ 4mm、切り込み上下に１対紐痕跡有り、ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
82	255-2	8G1	SR1	3	SR1-3	文房具	茅札木簡			9.4	4.2	0.3	下部小孔２か所紐痕跡、左側面抉り２か所	上中央に小孔１か所	スギ	柾目	第一号木簡「吉ゑのかや／七月中／元亨三年花押」「花押」
82	255-3	8G1	SR1	3	SR1-3	文房具	下挟み板			10.6	4.8	0.4	上部中央小孔、上下切り込みに紐掛け痕跡、ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
82	256	9F21	SR1	3	SR1-3	祭祀具	羽子板形			9.8	1.7	0.5			スギ	柾目	
82	257	7F23	SR1	3	SR1-3	祭祀具	刀形			14.5	1.8	0.7	柄の中央溝を作る。刃部作り出し。刃帳 7.9cm、柄 6.6cm		スギ	柾目	
82	258	6E24	SR1	3	SR1-3	祭祀具	串			29.3	3.5	1.4	刃物痕、先端３面加工		スギ	板目	
82	259	9G9	SR1	3	SR1-3	食事具	菜箸			29.0	1.7	0.7	ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
82	260	9G9	SR1	3	SR1-3	食事具	菜箸			31.3	1.2	0.6	ケズリ、刃物痕、	ケズリ	スギ	柾目	
82	261	6F14	SR1	3	SR1-3	食事具	漆器椀			(1.5)	(11.6)	8.0	黒漆・赤漆絵一部型押しか	黒漆	トチノキ	横木地板目	
82	262	6E18	SR1	3	SR1-3	食事具	漆器椀			(1.5)	(11.4)	7.7	黒漆	黒漆	カツラ	横木地柾目	
82	263	9G7	SR1	3	SR1-3	食事具	杓子			19.3	5.0	0.4	ケズリ	ケズリ	スギ	柾目	
83	264	9G10	SR1	3	SR1-3	食事具	杓子			26.7	6.9	0.5	ケズリ、刃物傷		スギ	柾目	
175	265	5E25	SR1	3	SR1-3	食事具	漆器椀か			－	－	－	赤漆・赤漆絵手描き	黒漆	ブナ属	横木	写真のみ掲載
83	266	8F16	SR1	3	SR1-3	容器	折敷底板			19.5	(6.9)	0.4	刃物痕		スギ	柾目	
83	267	6E19	SR1	3	SR1-3	容器	刳物箱			13.2	7.7	5.4		ケズリ	スギ	板目	升か
83	268	8F16	SR1	3	SR1-3	容器	箱？側板？			18.6	(3.9)	0.6	彫り込み文様？		スギ	柾目	
83	269	8F25	SR1	3	SR1-3	容器	箱側板			6.6	18.1	1.3	木釘２か所残る	刃物痕多数	側板：スギ 木釘：クリ	板目	
83	270	8F16	SR1	3	SR1-3	容器	曲物底板			17.0	3.9	0.8	木釘５か所、刃物傷		スギ	柾目	
83	271	6F10	SR1	3	SR1-3	容器	曲物底板			(15.2)	(7.5)	1.1	木釘 13		スギ	柾目	
83	272	9G1	SR1	3	SR1-3	容器	鍋蓋			(11.0)	20.0	(1.1)	を付ける釘穴４か所。全面炭化	斑に炭化	―	柾目	鉄鍋の蓋か
83	273	9G7	SR1	3	SR1-3	容器	把手			13.8	2.3	2.2	ケズリ		スギ	柾目	
83	274	8G8	SR1	3	SR1-3	服飾具	草履芯			24.7	9.8	0.5	ケズリ、左右切り欠き、孔２		スギ	板目	
83	275	8F16	SR1	3	SR1-3	部材	枘付木製品			7.9	3.3	1.9	ケズリ、枘	ケズリ	スギ	板目	
83	276	8F18	SR1	3	SR1-3	部材	側板			7.2	49.2	1.0	左右に枘、木釘孔３個づつ、中央に釘孔４、仕切りか		スギ	板目	
83	277	6E17	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			12.2	2.1	1.4	木釘１、枘		スギ	本体：柾目、釘：削り出し丸棒	

2009 年度　木製品観察表（8）

図版 No.	報告 No.	出土地点				種類	器種	下駄分類		法量			調整・装飾		樹種	木取	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位			台平・側	歯	長・高	幅・口径	厚・底径	表面・外面	裏面・内面			
83	278	6D23	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			13.9	0.9	1.2	ケズリ	ケズリ	スギ	板目	
83	279	5D15	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			16.8	3.6	1	木釘孔 3、ケズリ		スギ	柾目	脚の未成品か
83	280	5D19	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			19.2	2.2	1.6	溝 2		スギ	板目	
83	281	6E8	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			20.3	2.7	1.9	ケズリ、枘、切り欠き		スギ	板目	
83	282	6F5	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			20.5	2.3	0.4	一部黒変、小孔 6：0.4 ～ 0.9、大 1：2.5 × 1.2		スギ	柾目	
84	283	5D15	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			24.2	2.5	1.1	ケズリ		スギ	板目	織機の杼か
84	284	5D15	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			24.3	2.7	1.3	左右に切り欠き、中央に溝		スギ	板目	
84	285	9G11	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			(26.3)	(43.6)	1.1	枘付材の組み合わせ		スギ	柾目	障子の桟か
84	286	7E11	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			38.5	2.0	1.9	ケズリ、枘左右 2、凹 2 か所	ケズリ	スギ	柾目	
84	287	8F25	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			71.7	9.5	0.9	方形孔、下部に枘		スギ	板目	
84	288	9F21	SR1	3	SR1-3	部材	不明木製品			72.6	4.0	0.7	刃物で刻線。右側面切り欠き 22 か所。		スギ	板目	
84	289	6E5	SR1	3	SR1-3	工具	針状木製品			6.2	0.2	0.2	上下端尖る		スギ	削り出し棒状	
84	290	6E5	SR1	3	SR1-3	工具	針状木製品			5.9	0.2	0.2	上下端尖る		スギ	削り出し棒状	
84	291	6E5	SR1	3	SR1-3	工具	針状木製品			6.1	0.2	0.3	上下端尖る		スギ	削り出し棒状	
84	292	6E5	SR1	3	SR1-3	工具	針状木製品			6.0	0.2	0.3	上下端尖る		スギ	削り出し棒状	
84	293	6E5	SR1	3	SR1-3	工具	針状木製品			6.2	0.3	0.3	上下端尖る		スギ	削り出し棒状	
84	294	8G1	SR1	3	SR1-3	農具	木錘			6.8	1.3	1.5	切り欠き		ヤナギ属	丸木	
84	295	8G8	SR1	3	SR1-3	雑具	有頭木製品			18.3	1.8	1.3	ケズリ、面取り、切り欠き		スギ	板目	
84	296	9F6	SD150	1	SR2-1	食事具	漆器椀			5.6	14.1	16.9	黒漆	黒漆、赤漆絵手描き「一」	ケヤキ	横木地柾目	
84	297	確認 21 A4T		Ⅻ		祭祀具	鋤形			24.3	11.9	0.5	孔 2、ケズリ	刃物痕	スギ	柾目	折敷底板転用か
84	298	試掘 20-13T		SR1		建築材	柱根			(141.8)	14.6	10.0			スギ	芯去りミカン割	一部炭化
176	299	7G5	SR1	1	SR1-1	装飾具	烏帽子？						布圧痕付漆膜片				腐食著しい。
176	300	6D13	SK72	底面直上		装飾具	烏帽子？						布圧痕付漆膜片				腐食著しい。
176	301	6E9	SR1	2	SR1-2	装飾具	烏帽子？						布圧痕付漆膜片				腐食著しい。
176	302	6E5	SR1	2	SR1-2	装飾具	烏帽子？						布圧痕付漆膜片				腐食著しい。
176	303	8H1	SR1	2	SR1-2	装飾具	烏帽子？						布圧痕付漆膜片				腐食著しい。
176	304	7E9	SR1	―	SR1	装飾具	烏帽子？						布圧痕付漆膜片				腐食著しい。
176	305	5F4	SR165	3		容器	編組			(17.3)	(21.7)		籤幅 0.8cm		―		袋状
176	306	7E16	SK476	底面	SR1-3	容器	編組			(21.3)	(21.5)		籤幅 0.8 ～ 1.3cm		―		2 重

2010 年度　遺物観察表

図版 No.	報告 No.	出土地点	層位	種類	種別	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	木取	樹種	備考
85	1	2C3	Ⅵ	近世磁器	肥前系磁器	染付湯飲椀	口径 8.0	―	―			草花文。
85	2	1F15	Ⅴ	金属製品	銭貨	寛永通寶	外径 2.40	内径 0.56	0.13	重 2.7g		江戸時代初鋳 1626 年、1 期古寛永
85	3	2F4　B-7T	埋土	金属製品	銭貨	元祐通寶	外径 2.48	内径 0.60	0.11	重 3.4g	書体：篆書	北宋初鋳 1086 年
85	4	2D20	Ⅻ	木製品	農具	鎌柄	24.6	2.1	1.6	板目	スギ	刃部わずかに残る。装着方法上：木釘、中：釘孔、下：鉄釘
85	5	5C4	Ⅻ	木製品	部材	不明木製品	(18.1)	(3.5)	0.5	柾目	―	蓋等を転用したものである。鋸歯状の加工をしている。刃物痕あり
85	6	5D2	Ⅻ	木製品	部材	不明木製品	15.0	(3.8)	0.4	柾目	―	折敷底板転用。両側面に抉り。刃物痕あり。
85	7	4C4	Ⅻ	木製品	部材	不明木製品	(19.2)	2.8	0.5	板目	―	左：切り欠き、中央：切り欠き、右：欠損
85	8	5C22	Ⅻ	木製品	部材	部材	14.9	3.5	2.2	柾目	―	
85	9	4B24	Ⅻ 畦畔上	木製品	祭祀具	人形	20.5	1.2	1.7	板目	スギ	折烏帽子、顔表現
85	10	4C5	Ⅻ 畦畔中	木製品	部材	不明木製品	(28.3)	1.5	2.3	板目	スギ	脚か。木釘あり。
85	11	SA716-2 4B12	Ⅻ 畦畔中	木製品	建築材	杭	(45.2)	2.7	2.7	丸木	ヤナギ属	
85	12	SA717-1 5C8	Ⅻ	木製品	建築材	杭	(59.0)	8.2	6.5	丸木	―	樹皮残る。
85	13	5C16	Ⅻ	木製品	食事具	漆塗杓子	19.9	6.1	1.8	板目	モクレン属	黒漆塗り。
85	14	南区 1	暗渠	木製品	工具	刀子鞘未成品	23.2	2.9	0.7	板目	―	呑口式刀子の鞘

2011 年度　土器・陶磁器観察表

※〈複数の遺構から出土して接合したものの所属層位は、残存割合の高いものとし、太字で示してある。〉
〈胎土の項目中の（　）には混入物を記した。石：石英　長：長石　雲：雲母　海：海綿骨針〉

図版No.	報告No.	分類		出土地点				法量（cm）			胎土	調整・文様	時期	残存部位	備考
		種別	器種	グリッド	遺構	層位	所属層位	口径	器高	底径				口残率（X/36）	
86	1	龍泉窯系青磁	杯Ⅲ -4b	7I20	SR165	2	SR1-1・2 層			6.0	灰白色	高台端部釉なし　外体：鎬連弁文　内底：双魚貼付文	F 期	底～体部	破損面漆継ぎ痕　内・外面にスス付着
86	2	珠洲焼	片口鉢	8H16	**SK853**		SR1-3 層	31.6			密（雲）	ロクロナデ　内：卸目 2cm 当り 9 目　2 条以上	Ⅳ期	3/36	口縁端部摩耗
86	3	珠洲焼	片口鉢	8H22	**SD857**	1	SR1-3 層				密	ロクロナデ　内：卸目 2cm 当り 10 目　2 条以上	Ⅳ期	1/36	
86	4	土師質土器	小皿 C	8I6	SR1-3 層					5.5	密	ロクロナデ　外底：板目状圧痕	14 世紀前半	底部	
86	5	珠洲焼	片口鉢	8H7	SR1-3 層					11.8	密	ロクロナデ　内：卸目 1 条 2.6cm に 12 目　3 条以上 外底：静止糸切り	Ⅳ期	底部	外底摩耗
86	6	珠洲焼	片口鉢	8I7	SR1-3 層						やや粗	ロクロナデ　内：卸目 1 条 2.2cm に 10 目　2 条以上	Ⅳ期中ころ	1/36	
86	7	珠洲焼	甕	8I6・7H23	SR1-3 層						密	内：無文あて具　外：平行タタキ	Ⅳ期初めころ	体～頸部	
86	8	珠洲焼	壺	7H18	SR1-1 ～ 3 層						密	ロクロナデ		体～頸部	
86	9	珠洲焼	片口鉢	8I6	SR1-1 ～ 3 層			33.2			密（海）	ロクロナデ　内：卸目 2cm 当り 11 目　2 条以上	Ⅳ期	3/36	口縁端部摩耗

2011 年度　石製品観察表

図版No.	報告No.	種別	出土地点				法量（cm）			重量（g）	石材	備考
			グリッド	遺構	層位	所属層位	長	幅	厚			
86	10	砥石	7I20	SR165	2	SR1-1・2 層	17.1	5.1	5.1	606.2	凝灰岩	砥面：4
86	11	磨石	7I10	SR1-2 層			5.9	5.7	2.9	36.6	軽石	
86	12	砥石	8H17	SR1-2 層			17.9	6.4	6.0	876.9	凝灰岩	砥面：5
86	13	砥石	7I3	SR1-1 ～ 3 層			8.1	4.0	3.1	91.4	凝灰岩	砥面：5
86	14	砥石	7I25	SR2-1 層			18.7	9.9	5.2	1419.2	凝灰岩	砥面：4

2011 年度　金属製品観察表

図版No.	報告No.	種別	出土地点				法量（cm）			重量（g）	素材	備考
			グリッド	遺構	層位	所属層位	長(口径)	幅(底径)	厚(器高)			
87	15	装飾金具	8H17	SR1-3 層			2.1	2.0	0.5	1.0	銅	
87	16	鎹	7I4	SR1-3 層			7.9	2.7	0.8	17.6	鉄	
87	17	鎹	8I11	SR1-3 層			7.6	2.4	0.8	11.2	鉄	
87	18	鎹	8I1	SR1-1 ～ 3 層			7.5	3.2	0.8	16.1	鉄	開渠

2011 年度　木製品観察表（1）

図版No.	報告No.	出土地点				種類	器種	下駄分類		法量（cm）			調整・装飾		樹種	木取	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位			台平・側	歯	長・高	幅・口径	厚・底径	表面・外面	裏面・内面			
87	1	8H2	SB336-P8	―	SR1-1 層	建築材	柱根			(63.4)	12.5	12.2	底部伐採面のまま、上部腐植		ヤナギ属	丸木取り	
87	2	8H21	P804	―	SR1-1 層	建築材	柱根			(91.5)	13.0	13.2	先端尖る、上部切断か		クリ	丸木取り	
87	3	8I22	SD112	2	SR1-1・2 層	容器	折敷			18.1	6.7	0.6	釘孔 8		スギ	柾目	転用品
87	4	8I17	SR165	2	SR1-1・2 層	部材	不明木製品			37.4	3.3	0.8	孔 3		―	板目	
87	5	8H22	SA825-7	―	SR1-2 層	祭祀具	串			37.6	2.7	1.8	先端尖る		スギ	柾目	
87	6	8H22	SA825-8	―	SR1-2 層	祭祀具	串			26.5	1.7	0.7	先端尖る		スギ	板目	
87	7	8I2	SR1-2 層			祭祀具？	不明			4.6	1.8	0.9	ケズリ、円 2、刺突	ケズリ、円 2、刺突	スギ	板目	
87	8	7H13	SR1-3 層			文房具	呪符木簡			27.9	5.0	0.4	主頭、先端尖る	ケズリ	スギ	柾目	第三号木簡「符籙」
87	9	7H19	SR1-3 層			祭祀具	舟形？			6.1	2.3	1.4	丁寧なケズリ		スギ	板目	
87	10	8H21	SR1-3 層			祭祀具	刀形？			9.0	1.9	0.7	刃部作り出し		スギ	板目	
87	11	8I6	SR1-3 層			祭祀具	刀形？			1.8	13.7	0.6	刃部作り出し		スギ	柾目	
87	12	7I4	SR1-3 層			祭祀具	串			29.1	1.9	0.5	先端鋭く尖る		スギ	板目	
87	13	7H18	SR1-3 層			祭祀具	串			37.3	2.1	1.2	先端尖る		―	板目	
87	14	8I7	SR1-3 層			食事具	漆器皿			(0.8)	9.0	底(7.1)	黒漆	黒漆	モクレン属	横木地	底部欠損
88	15	8H21	SR1-3 層			食事具	漆器椀			(2.7)	(13.0)	7.1	黒漆・赤絵	黒漆・赤絵	ケヤキ	横木地	
88	16	7I14	SR1-3 層			容器	柄杓？			(2.0)	8.4	―	樺皮ではなく側板と同じ材で結束、木釘、孔		底板：アスナロ 側板：アスナロ	底板：板目 側板：板目	
88	17	7I15	SR1-3 層			容器	曲物			(2.8)	6.2 ～ 7.4	―	黒漆塗り	黒漆塗り、樺皮	アスナロ	柾目	変形して歪む
88	18	7H24	SR1-3 層			容器	曲物側板			5.3	19.0	0.4	樺皮、ケビキ、孔 2		スギ	柾目	転用？
88	19	7H24	SR1-3 層			服飾具	連歯下駄	A Ⅱ a1	2	23.8	10．1	2.8	刃物痕		モクレン属	柾目	使用痕あり
88	20	8I1	SR1-3 層			服飾具	無歯下駄	B Ⅰ b	―	15.4	7.8	1.3			スギ	板目	子供用。一部炭化
88	21	7H3	SR1-3 層			服飾具	露卯下駄歯	C	a	10.7	16.4	2.0	枘 1、面取丁寧		スギ	柾目	

2011 年度 木製品観察表（2）

図版No.	報告No.	出土地点				種類	器種	下駄分類		法量（cm）			調整・装飾		樹種	木取	備考
		グリッド	遺構	層位	所属層位			台平・側	歯	長・高	幅・口径	厚・底径	表面・外面	裏面・内面			
88	22	7H25	SR1-3 層			服飾具	草履芯			24.9	10.4	0.3	孔 2、切欠き		スギ	板目	ワラ良好に残存
88	23	8I7	SR1-3 層			服飾具	草履芯			25.1	10．1	0.5	孔、切欠き		スギ	板目	ワラ残存
88	24	7I10	SR1-3 層			建築材	杭？			25.2	5.4	2.0			スギ	板目	
88	25	8H16	SR1-3 層			部材	枘付木製品			8.8	1.8	1.5	ケズリ、枘	ケズリ	スギ	柾目	
89	26	7H18	SR1-3 層			部材	柄			22.5	2.3	1.4	先端浅い十字状切り込み		スギ	板目	柄か
89	27	8I1	SR1-3 層			部材	柄？			(13.1)	2.2	0.7	ケズリ、木釘 2		スギ	柾目	刀子柄か
89	28	8H21	SR1-3 層			部材	棒状木製品			26.4	1.3	1.2	先端細くする		スギ	板目	
89	29	7I4	SR1-3 層			部材	不明木製品			11.9	1.8	0.8	孔 3		スギ	板目	柄か
89	30	7I4	SR1-3 層			部材	不明木製品			4.4	14.7	3.7	ケズリ		スギ	柾目	把手未製品か
89	31	7I9	SR1-3 層			部材	不明木製品			13.5	1.2	0.9	枘、孔		スギ	板目	
89	32	7I9	SR1-3 層			部材	不明木製品			22.3	1.1	1.0	先端尖る、溝 2		スギ	柾目	
89	33	8I6	SR1-3 層			部材	不明木製品			3.4	18.5	2.7	上部に切欠き		―	柾目	
89	34	8I2	SR1-3 層			農具	鎌柄			32.4	2.4	1.7	面取り、孔、		スギ	板目	刃部残る
89	35	7I10	SR1-3 層			農具	木錘？			(7.1)	3．3	2.0	面取		スギ	柾目	
89	36	8H22	SR1-3 層			農具	木錘			11.9	1.3	1.4	面取、切欠き		スギ	柾目	
89	37	7H	SR1-1 ～ 3 層			食事具	漆器皿			1.5	9.0	6.5	黒漆	黒漆	クリ	横木地	ロクロ目顕著
89	38	7I3	SR1-1 ～ 3 層			農具	鎌柄			21.5	1.7	(1.1)	5 か所の滑り留め		スギ	柾目	刃を入れた中央から割ける
89	39	8I7	SR2-1 層上面			文房具	茅札木簡			10.0	4.6	0.4	両側面上下に切欠き		スギ	柾目	第四号木簡「よしゑのかやふ／たの事／元亨五年□月五日」「花押」
90	40	18D3	SA871-3	SD870 中	X	建築材	杭			53.3	3.8	3.9	先端尖る		―	丸木取り	
90	41	18D1	SA871-9	SD870 中	X	建築材	杭			100.8	8.0	7.9	先端尖る		ヤナギ属	丸木取り	
90	42	17C25	SA871-15	SD870 中	X	建築材	杭			78.0	9.1	8.5	先端丁寧に加工して尖る。括れあり		ヤナギ属	丸木取り	土圧で折れ曲がる
90	43	18C22	SA872-2	SD870 中	X	建築材	杭			30.5	4.6	4.5	先端 6 回以上加工		ヤナギ属	丸木取り	
90	44	18C21	SA872-6	SD870 中	X	建築材	杭			35.0	3.8	3.1	先端尖る		ヤナギ属	丸木取り	
90	45	21D20	P916		XII	建築材	柱根			(90.8)	18.3	17.3	樹皮残る。		ヤナギ属	丸木取り	
90	46	21D14	P917		XII	建築材	柱根			(96.0)	15.9	13.3	樹皮残る。		ヤナギ属	丸木取り	
90	47	21E9	XII			部材	不明木製品			19.9	8.3	0.6	丸孔 2、方形孔 1、釘孔 1		―	板目	折敷転用か
90	48	12F9	XV			祭祀具	陽物			19.1	4.5	(4.4)	ケズリ	ケズリ	モクレン属	丸木	
90	49	10D25	XV			食事具	漆器椀			3.5	13.3	6.3	黒漆	黒漆	ケヤキ	横木地	

2009 ～ 2011 年度 漆器計測表（1）

図版No.	報告No.	グリッド	遺構番号	層位	器種	上塗色		計測値（単位：cm（A ～ F）、°（H））〈 〉内は推定値								木取	樹種	備考
						内面	外面	A	B	C	D	E	F	E＋F	H			
66	15	8F25	SR1	1	椀	黒	黒	7.4	7.5	10.1	―	―	0.1		―	横	ブナ属	
66	16	9G4	SR1	1	椀	黒	黒	7.1	7.5	12.5	―	―	―		―	横	ケヤキ	
66	17	6D18	SR1	1	椀	黒	黒	7.8	8.2	12.9	14.2	2.9	0.2	3.1	63	横	ケヤキ	
66	18	6D14	SR1	1	椀	黒（赤漆絵）	黒（赤漆絵）	6.2	6.4	12.0	―	―	0.1		66	横	ブナ属	漆絵は手書き。
66	19	6E4	SR1	1	鉢か？	不明	不明	―	10.0	14.3	―	―	―		―	横	ケヤキ	
66	20	7G6	SR1	1	蓋	黒	黒				7.2			0.9		横	ヒノキ科	表面に三つ又とＶ字様の装飾。柾目。
69	55	8E24	SD111	覆土	椀	黒	黒	8.2	8.3	12.7	―	―	0.1	4.7	72	横	クリ	
70	73	5E15	SR165	―	椀	黒（赤漆絵）	黒	7.5	7.7	12.5	―	―	0.1		―	横	ケヤキ	漆絵は手書き。
70	76	6D13	SK72	底面直上	皿	黒	黒	―	8.0	8.3	9.1	1.5	―		62	横	ケヤキ	
70	77	5C19	SK75	2	皿	赤	黒	―	8.0	9.1	9.8	1.5	―		62	横	ケヤキ	
70	78	5C19	SK75	3	皿	不明	不明	5.6	6.8	8.5	8.5	0.8	0.1	0.9	78	横	クリ	
70	79	5D4	SK86	4・床直	皿	赤	黒	―	7.2	8.4	―	―	―		63	横	ケヤキ	
73	119	7G7	SD597	3	椀	黒（赤漆絵）	黒	8.2	8.3	11.5	―	―	0.1		―	横	カツラ	漆絵は手書き。
73	120	7G7	SD597	3	椀	黒	黒	7.0	7.1	12.3	―	―	0.1		―	横	ケヤキ	
74	125	6E25	SR1	1	皿	不明	不明	―	7.8	9.0	9.2	0.8	―		47	横	クリ	
74	126	6F8	SR1	2	皿	黒	黒	―	7.8	9.0	9.6	1.4	―		71	横	ケヤキ	
74	127	7G18	SR1	2	皿	黒	黒	―	8.0	8.6	0.9	―			59	横	モクレン属	
74	128	7H15	SR1	2	椀	黒	黒	―	―	―	―	―	―		―	横	ケヤキ	口縁部内外面に布をかぶせる。
174	129	6E8	SR1	2	椀か？	赤	赤（赤漆絵）									横	クリ	写真のみ掲載。皆朱漆器はこの 1 点のみ。漆絵は手書き。
74	130	6D8	SR1	2	椀	黒	黒	6.7	6.9	10.1	―	―	0.1		―	横	カツラ	
74	131	6F8	SR1	2	椀	黒	黒	5.8	6.1	11.3	12.2	3.3	0.1	3.4	78	横	ケヤキ	

2009 ～ 2011 年度　漆器計測表（2）

図版No.	報告No.	グリッド	遺構番号	層位	器種	上塗色		計測値（単位：cm（A ～ F）、゜（H））〈　〉内は推定値								木取	樹種	備考
						内面	外面	A	B	C	D	E	F	E＋F	H			
74	132	6E9	SR1	2	椀	黒	黒	7.1	7.3	11.5	—	—	0.1		—	横	クリ	
74	133	7H19	SR1	2	鉢か？	黒	不明	—	7.1	12.0	—	—	—		—	横	ケヤキ	
74	134	6F8	SR1	2	椀	黒	黒	7.7	7.9	11.4	13.6	2.8	0.2	3.0	56	横	ブナ属	
74	135	7E17	SR1	2	椀	黒（赤漆絵）	黒（赤漆絵）	6.5	6.7	13.9	—	—	0.1		—	横	ブナ属	漆絵は最外周の円が型押し、内部の巴文は手書き。
74	136	6D13	SR1	2	椀	黒（赤漆絵）	黒	—	—	—	〈14.3〉	—	—		—	横	モクレン属	漆絵は手書き。
74	137	7G23	SR1	2	椀	赤	黒（赤漆絵）	7.4	7.7	14.3	—	—	0.1		—	横	モクレン属	漆絵は手書き。
79	202	6E11	SK179	3	椀	黒	黒	7.0	7.1	13.2	14.4	5.3	0.1	5.4	76	横	トチノキ	
79	203	6E11	SK179	3	皿	不明	不明	—	6.2	8.0	8.7	1.0	—		55	横	クリ	
79	205	6E11	SK179	4	椀	黒	黒	7.2	7.6	11.9	13.0	2.9	0.1	3.0	63	横	ケヤキ	
79	206	6E3	SK201	—	皿	黒	赤	—	8.4	10.0	10.3	1.2	—		68	横	ブナ属	
80	224	7E17	SK476	2	椀	赤	黒（赤漆絵）	—	7.4	13.1	—	—	—		—	横	クリ	漆絵は手書き。
81	243	6F8	P275	2	片口鉢	黒	黒	—	13.2	17.1	18.1	6.1	—		80	横	カツラ	
82	261	6E18	SR1	3	椀	黒	黒	7.7	8.2	10.8	—	—	0.1		—	横	カツラ	
82	262	6F14	SR1	3	椀	黒（赤漆絵）	黒	8.0	8.2	11.1	—	—	0.1		—	横	トチノキ	漆絵は一部型押しか。
175	265	5E25	SR1	3	椀か？	黒	赤（赤漆絵）									横	ブナ属	写真のみの掲載。漆絵は手書き。
84	296	9F6	SD150	1	椀	黒（赤漆絵）	黒	6.8	7.3	13.2	14.1	5.4	0.2	5.6	77	横	ケヤキ	漆絵は手書き。
87	14	8I7	SR1	3	皿	黒	黒	6.5	6.6	9.0	9.0	1.4	0.1	1.5	90	横		
88	15	8H21	SR1	3	椀	黒（赤漆絵）	黒（赤漆絵）	7.0	—	—	—	—	—	—	—	横		
90	49	10D25		XV	椀	黒	黒	6.3	6.5	12.5	13.3	3.3	0.2	3.5	75	横		

2009 ～ 2011 年度　下駄計測表

※（　）は残存値　単位：cm、角度：゜

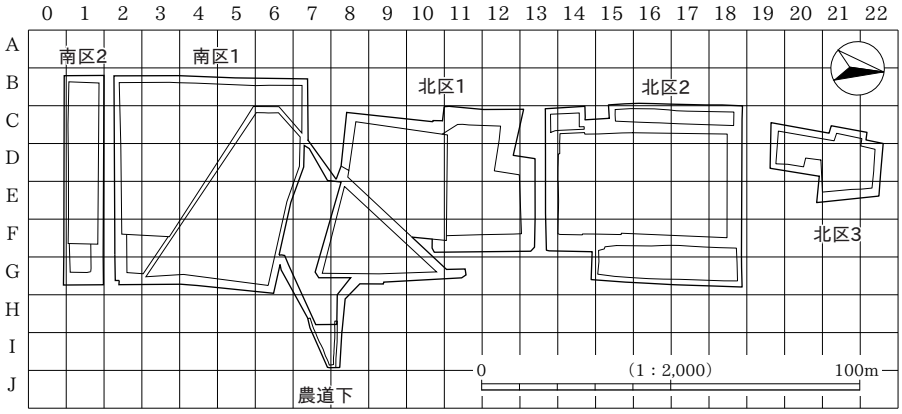
図版No.	報告No.	台部											歯部											全高N	鼻緒角度P
		長さ				幅			厚さ	緒穴			前歯					後歯					歯間距離		
		A	A1	A2	A3	B	C	D	H	前	後		厚さ	幅		高さ		厚さ	幅		高さ				
										E	F	G	K1	L1	M1	I1	J1	K2	L2	M2	I2	J2	Q		
67	30	15.9	2.3	7.5	6.1	8.1	9.3	9.1	1.3	0.8	1.2	1.1	1.8	8.4	9.2	2.5	—	1.9	8.8	9.7	2.5	—	6.8	3.8	36.0
67	31	19.6	2.1	(9.3)	8.2	7.7	10.1	10.1	1.4	1.7	1.8	2.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.8	(1.5)	—
67	32	20.1	2.4	9.6	8.1	8.0	10.0	9.9	1.7	1.8	1.9	2.3	2.6	10.0	10.5	1.9	—	1.5	9.4	—	1.9	—	5.9	3.0	39.0
67	33	19.5	1.7	10.3	7.5	6.0	9.2	(9.4)	1.3	1.0	(1.5)	1.6	2.4	—	—	—	—	1.5	—	—	—	—	4.8	(1.5)	31.0
67	34	13.3	2.7	5.5	5.1	(3.2)	(3.5)	(3.2)	1.6	—	—	0.7	1.8	—	—	0.7	—	1.5	—	—	1.0	—	4.6	2.2	—
67	35	20.7	2.5	8.7	9.5	(11.6)	12.3	(9.7)	1.1	1.6	(1.8)	2.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	40.0
67	36	20.4	1.5	9.4	9.5	10.5	12.0	12.0	1.9	1.4	2.0	2.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	45.0
67	37	23.0	3.1	9.5	10.4	7.0	9.7	9.5	2.8	1.5	2.0	2.0	—	—	—	—	1.2	—	—	—	—	1.3	—	—	41.0
68	38	22.9	3.3	9.4	10.2	7.5	(9.2)	10.0	(3.0)	1.4	2.6	2.8	—	—	—	—	1.5	2.0	8.5	—	—	1.8	—	—	37.0
68	39	21.5	2.2	12.3	7.0	7.2	9.6	(9.2)	3.3	1.4	(1.3)	2.3	—	—	—	—	1.5	—	—	—	—	1.9	—	—	—
68	49	26.3	4.1	9.0	13.2	15.5	13.0	15.7	2.2	1.6	1.9	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	41.0
69	65	(12.0)	2.7	6.6	(2.7)	7.1	7.9	7.9	1.3	0.7	1.0	0.9	1.5	7.9	8.7	3.7	—	1.8	8.2	9.0	3.6	—	3.8	4.5	47.0
70	75	25.1	3.7	13.3	8.1	(9.0)	(8.9)	(9.4)	1.7	2.1	—	1.9	2.5	(9.5)	(9.6)	1.1	—	2.3	(9.0)	(9.0)	0.9	—	10.4	2.7	—
70	81	17.3	2.1	8.3	6.9	9.7	10.9	11.0	1.7	1.0	1.4	1.5	2.3	9.8	11.0	1.5	—	2.2	11.0	(9.2)	1.2	—	5.2	3.0	46.0
73	117	23.5	3.3	9.7	10.5	7.2	9.9	(9.6)	1.3	1.3	(2.1)	2.0	2.5	9.6	8.5	1.3	—	2.5	(9.8)	8.6	1.6	—	5.6	2.5	40.0
76	163	15.0	2.5	5.8	6.7	(7.2)	7.9	(7.8)	1.8	1.2	1.0	1.0	1.9	7.6	8.0	1.3	—	1.6	7.9	8.1	1.3	—	3.2	3.1	54.0
76	164	26.7	4.2	10.0	12.5	12.5	13.8	13.6	3.1	2.1	2.6	2.6	4.1	13.4	11.5	2.6	—	3.0	13.7	12.0	2.3	—	5.6	5.2	43.0
76	165	26.2	4.0	11.3	10.9	(5.7)	(7.9)	(8.1)	1.9	—	—	2.5	(2.6)	—	(4.2)	(0.5)	—	(3.0)	—	(6.9)	(0.5)	—	8.8	(2.6)	—
77	166	26.4	4.2	9.8	12.4	15.4	17.0	17.0	2.4	2.0	2.4	2.1	2.1	15.9	14.0	—	—	2.3	16.0	15.0	—	—	7.6	3.0	50.0
76	167	15.8	1.5	7.7	6.7	8.1	9.8	9.8	1.6	1.6	1.7	1.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	41.0
76	168	21.7	3.7	10.3	7.7	9.1	9.7	(7.8)	1.1	1.1	1.8	—	3.5	—	—	—	—	4.1	—	—	—	—	4.8	(1.5)	41.0
76	169	23.8	4.1	9.7	10.0	(8.6)	10.3	10.0	1.4	1.0	1.8	1.8	3.1	—	10.5	—	—	3.3	—	(9.6)	—	—	5.8	(1.7)	44.0
76	170	14.0	1.7	6.1	6.2	9.3	9.4	9.3	1.7	1.2	1.4	1.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	60.0
76	171	23.1	3.4	10.0	9.7	7.7	10.3	10.2	2.1	1.1	1.7	1.8	—	—	—	—	0.9	1.7	—	—	—	—	—	—	40.0
76	172	23.0	3.1	9.9	10.0	8.0	10.6	10.6	3.0	1.5	2.0	2.2	—	—	—	—	1.5	—	—	—	—	1.6	—	—	43.0
76	173	21.8	(2.1)	9.4	10.3	6.8	9.7	10.0	3.0	1.8	2.7	2.8	1.4	7.1	11.7	5.5	1.3	1.7	—	12.0	4.9	2.1	9.2	8.2	38.0
78	175	12.8	2.0	5.6	5.2	7.1	8.5	8.6	2.0	1.0	1.2	1.2	1.4	7.5	8.1	2.1	0.8	1.3	7.8	8.0	1.9	1.0	4.6	3.9	52.0
79	199	26.0	4.0	11.0	(11.0)	13.3	17.5	17.8	2.2	3.0	3.3	2.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	55.0
80	219	16.5	3.1	7.4	5.9	8.0	8.7	8.5	1.9	0.8	0.9	0.9	2.6	8.7	9.6	2.5	—	2.7	8.4	9.2	3.2	—	4.8	4.4	47.0
80	220	23.1	3.3	9.0	10.8	6.3	8.0	(7.1)	3.2	1.0	1.4	—	—	—	—	—	2.1	1.7	8.9	14.7	9.3	1.9	—	12.2	—
88	19	23.8	3.5	9.6	10.7	7.4	9.8	7.5	0.9	1.0	1.2	1.4	2.2	8.1	9.6	1.2	—	2.6	10.1	9.5	1.2	—	5.4	2.8	43.0
88	20	15.4	2.8	6.6	6.0	(7.2)	7.6	5.3	1.0	0.7	0.6	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	45.0

図　　版

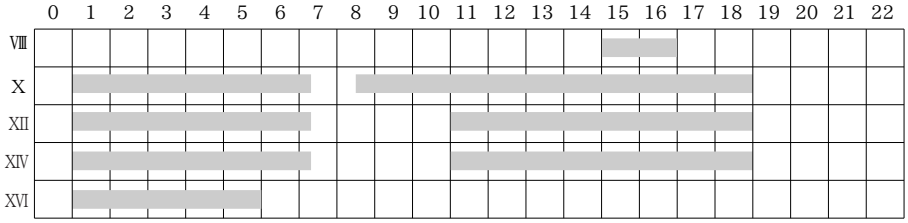
凡　例

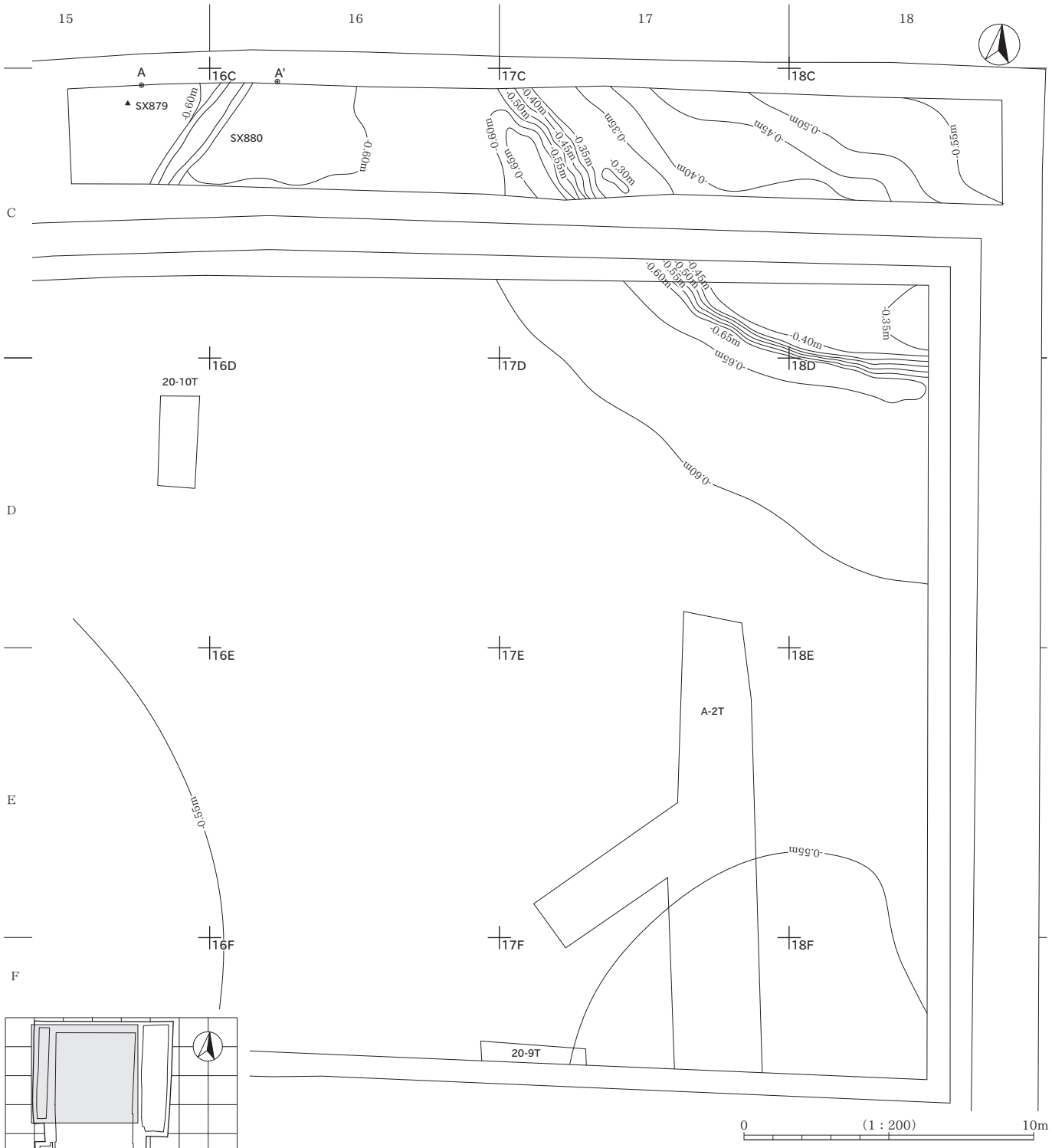
- 柱根（柱根のなかでも、径がより大きなもの。）
- ■ 柱根（径が9cm以上のもの。）
- ▲ 杭・串
- ● 中世の遺物
- 灰分布範囲
- 焼土
- 腐植土層の範囲
- 炭化物範囲
- 噴砂の筋

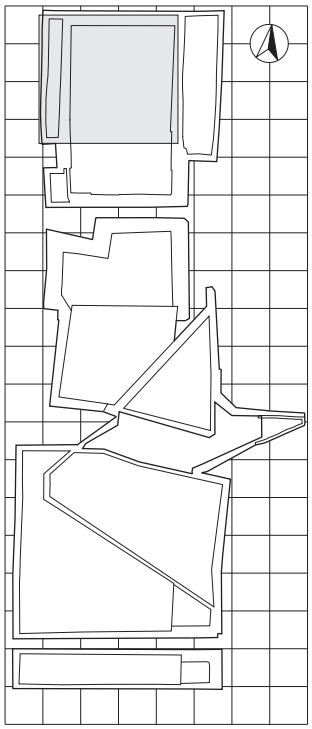
調査範囲図



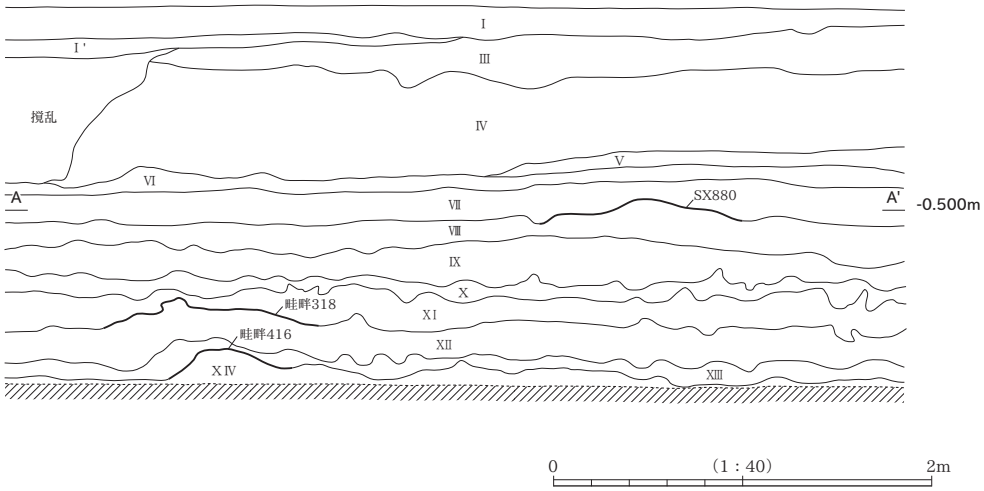
層位別水田検出模式図

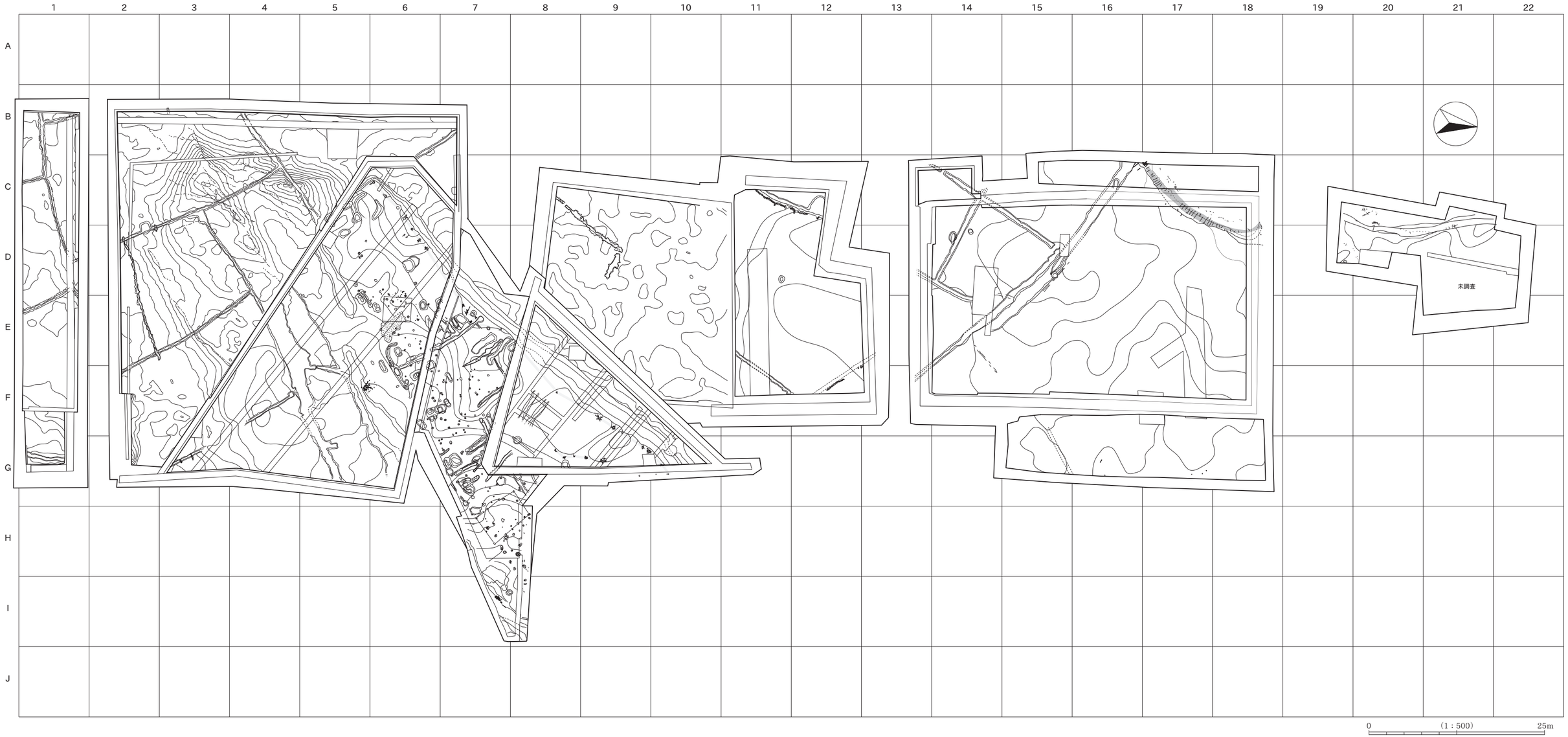


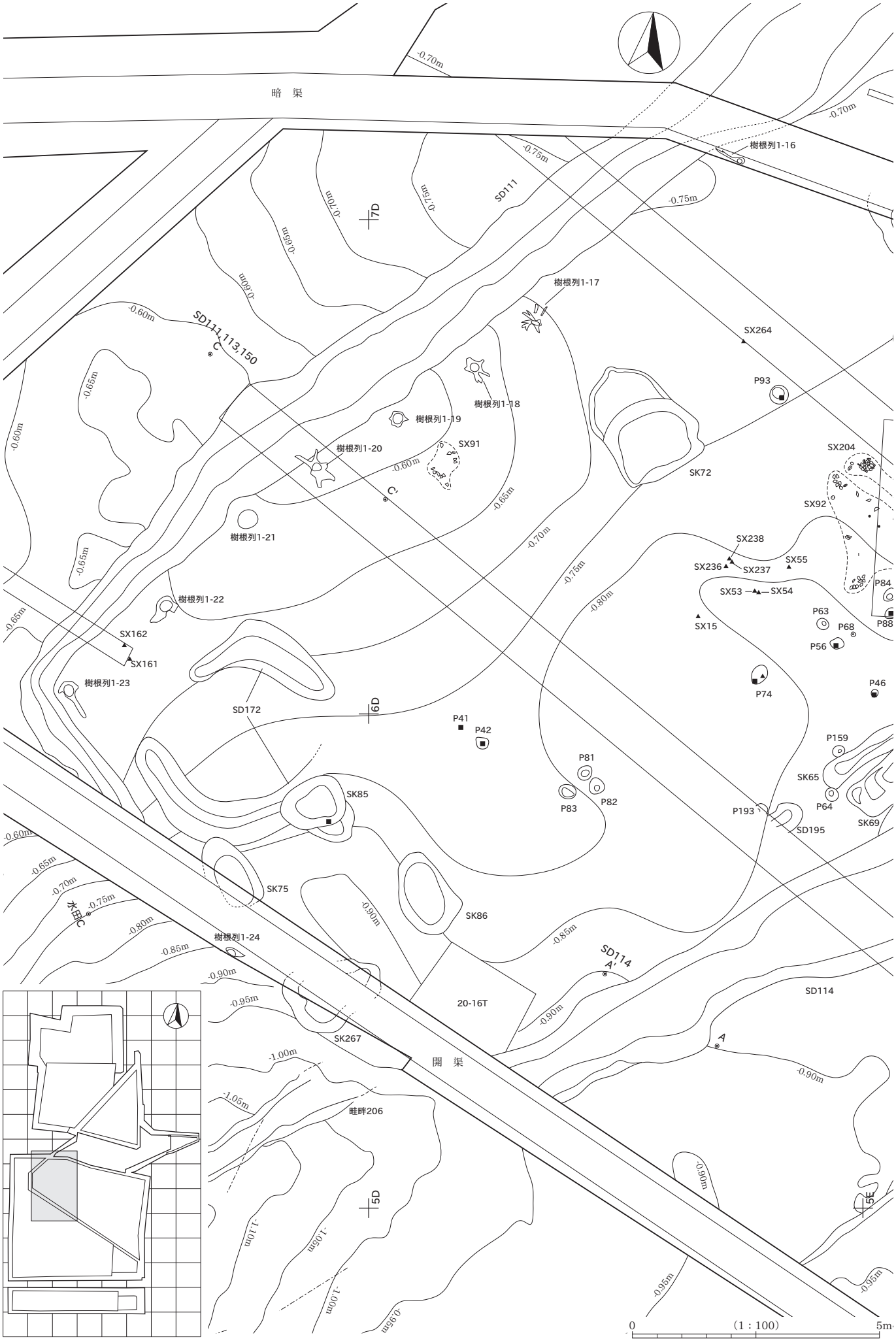

15
16
17
18
A
A'
16C
17C
18C
SX879
SX880
-0.60m
-0.50m
-0.40m
-0.45m
-0.35m
-0.30m
-0.33m
-0.55m
C
16D
17D
18D
20-10T
-0.65m
D
16E
17E
18E
A-2T
E
16F
17F
18F
F
20-9T
0
(1：200)
10m



北区2　調査区西壁断面


Ⅰ
Ⅰ'
Ⅲ
撹乱
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
A
Ⅶ
SX880
A'
-0.500m
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
畦畔318
ⅩⅠ
畦畔416
ⅩⅡ
ⅩⅣ
ⅩⅢ
0
(1：40)
2m

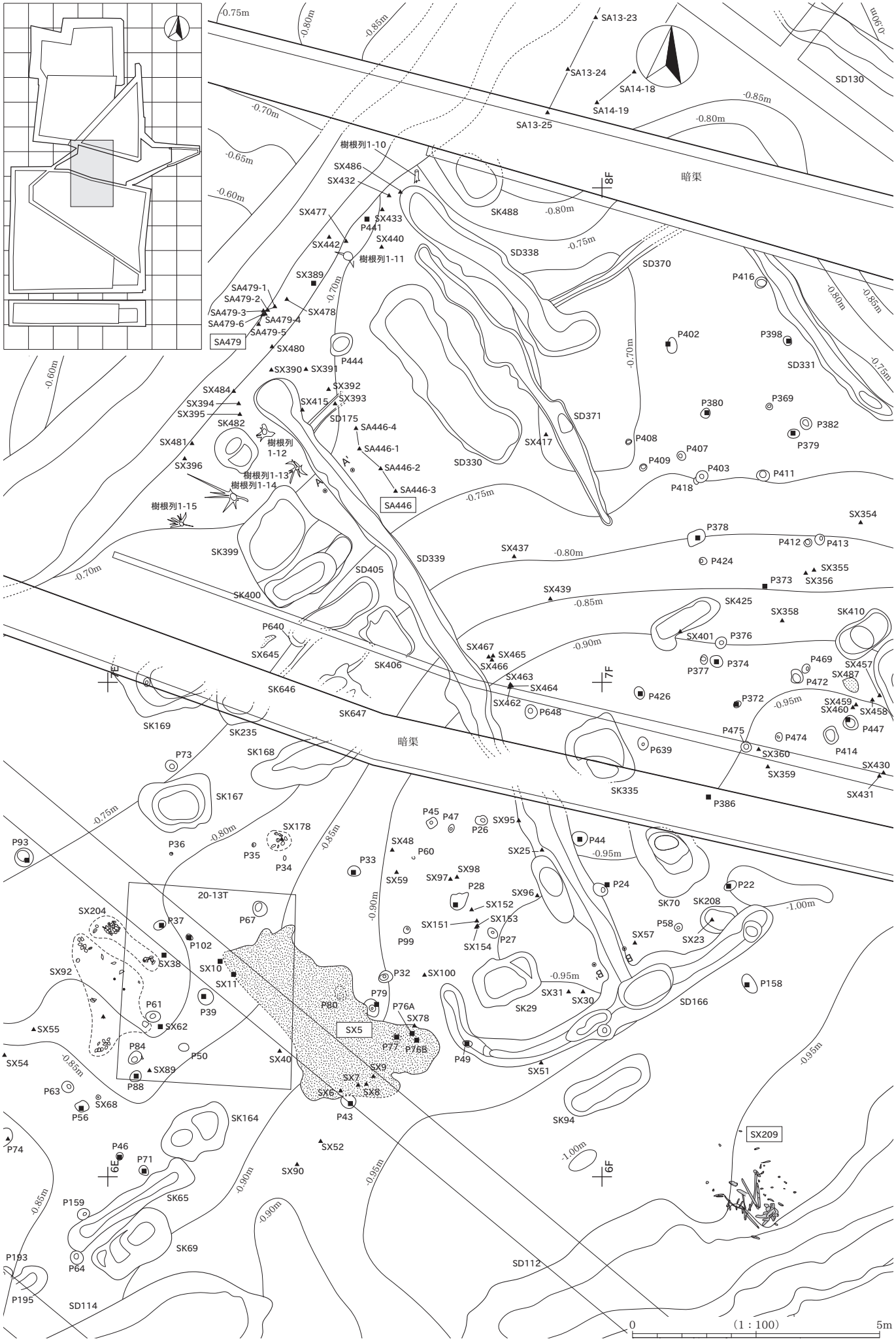

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
未調査
0
(1：500)
25m

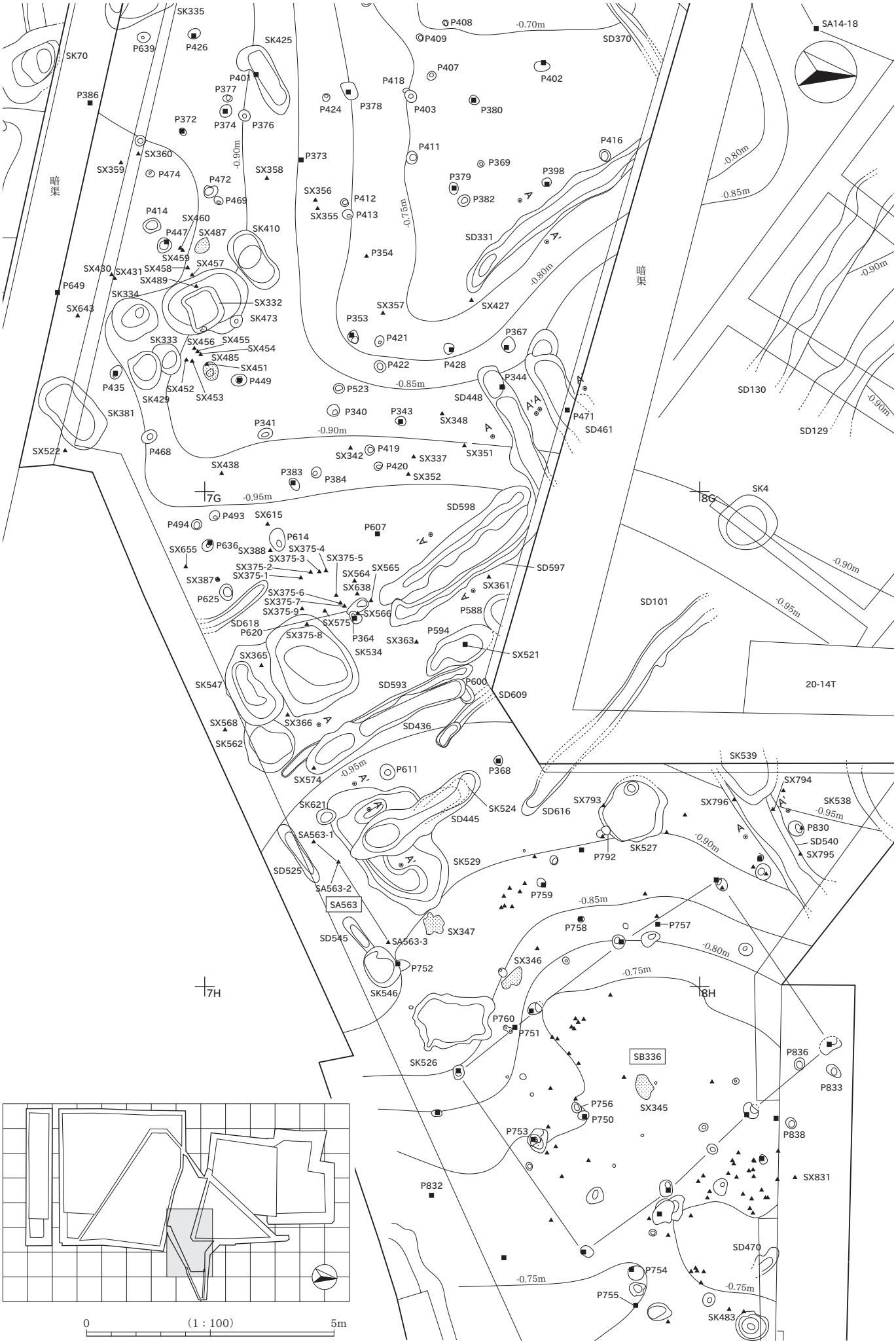

暗　渠
開　渠
SD111
SD111,113,150
SD114
SD172
樹根列1-16
樹根列1-17
樹根列1-18
樹根列1-19
樹根列1-20
樹根列1-21
樹根列1-22
樹根列1-23
樹根列1-24
SX264
P93
SX91
SX204
SK72
SX92
SX238
SX236
SX237
SX55
SX53
SX54
SX15
P84
P88
P63
P68
P56
P74
P46
P159
SK65
P64
SK69
P193
SD195
P41
P42
P81
P82
P83
SK85
SK75
SK86
SK267
20-16T
畦畔206
水田C
7D
6D
5D
5E
0
(1：100)
5m

X層、SR1-1・2層遺構分割図（2）

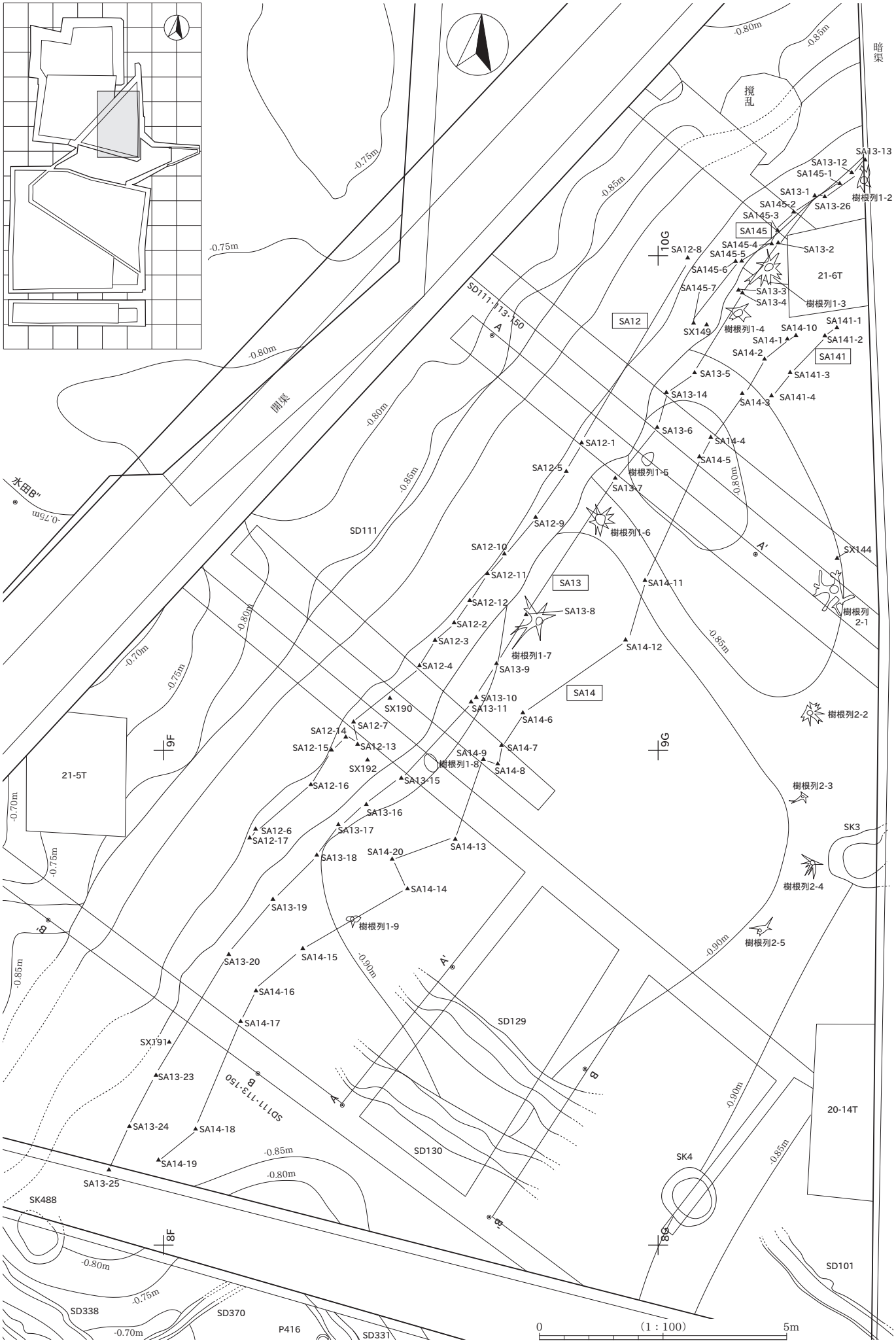
5E
5F
5G
6F
6G
SK69
SD114
SR165
SX5
SX52
SX6
SX7
SX8
SX9
P80
P43
P79
P32
P77
P76A
P76B
SX78
P99
SX100
SX152
P28
SX153
SX154
SX151
P27
P49
SK29
SX51
SK94
SX31
SX30
SX57
P58
SD166
SK208
P158
SX23
SX209
SD112
畦畔201
畦畔202
畦畔203
畦畔204
水口C
水口D
水田
暗渠
-0.90m
-0.95m
-1.00m
0
(1：100)
5m

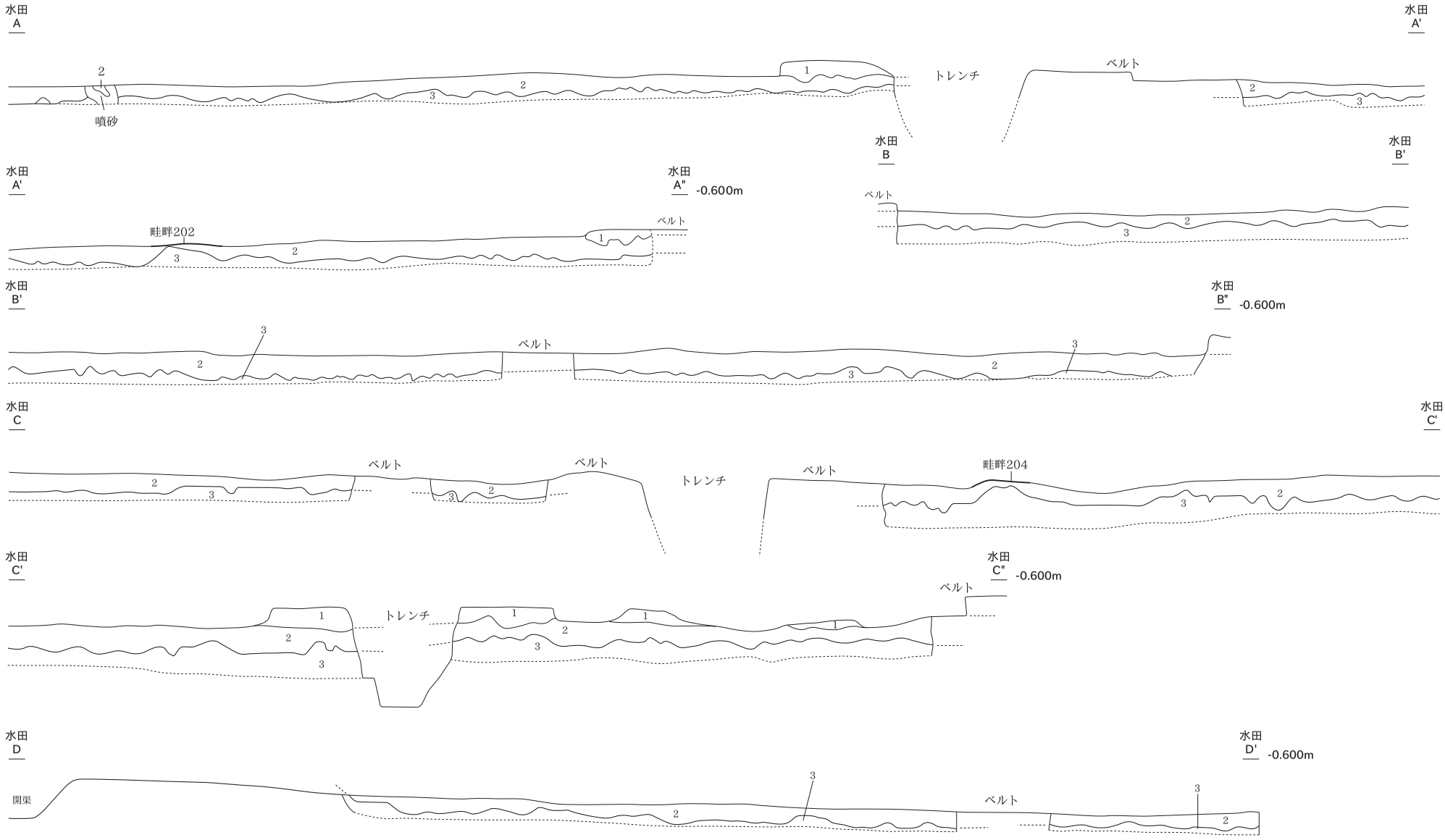
X層、SR1-1・2層遺構分割図（4）




SK335
SK70
P639
P426
SK425
P408
P409
-0.70m
SD370
SA14-18
P401
P377
P386
P418
P407
P402
P424
P378
P403
P380
P372
P374
P376
P416
P411
SX360
SX359
P474
P373
P369
P398
P379
P382
暗渠
P472
SX358
P469
SX356
P412
SX355
P413
-0.75m
-0.90m
-0.80m
-0.85m
P414
SX460
SK410
SD331
P447
SX487
SX459
SX458
SX457
SX480
SX431
SX489
P354
P649
SK334
SX332
SX643
SK473
SX357
SX427
P353
P421
P367
SK333
SX456
SX455
SX454
SX485
SX451
P422
P428
P435
P449
SX452
SX453
SK429
P523
P344
SD448
SD130
SD129
SK381
P340
P343
SX348
P471
SD461
P341
SX522
P468
SX342
P419
SX337
SX351
SX438
P420
SX352
P383
P384
7G
8G
SK4
SD598
P493
SX615
P494
P607
P614
SX655
P636
SX388
SX375-4
SX375-3
SX375-5
SX375-2
SX375-1
SX564
SX565
SD597
SX387
SX638
SX361
P625
SX375-6
SX375-7
SX375-9
SX566
P588
SD101
SD618
SX575
P620
SX375-8
P364
SX363
P594
SX534
SX521
SX365
SK547
SD593
P600
SD609
20-14T
SX568
SX366
SD436
SK562
SK539
P611
P368
SX574
SX794
SX793
SX796
SK538
SK621
SK524
SD616
P830
SD445
SD540
SA563-1
P792
SK527
SX795
SD525
SK529
SA563-2
P759
SA563
SX347
P758
P757
SD545
SA563-3
SX346
P752
SK546
7H
8H
P760
P751
SK526
SB336
P836
P833
P756
SX345
P750
P753
P838
SX831
P832
SD470
P754
P755
SK483
0
(1：100)
5m

X層、SR1-1・2層遺構分割図（6）


暗渠
撹乱
開渠
水田B"
SD111·113·150
SD111
SD129
SD130
SD101
SD338
SD370
SK3
SK4
SK488
P416
SD331
SX144
SX149
SX190
SX191
SX192
SA12
SA13
SA14
SA141
SA145
21-6T
21-5T
20-14T
10G
9F
9G
8F
8G
樹根列1-2
樹根列1-3
樹根列1-4
樹根列1-5
樹根列1-6
樹根列1-7
樹根列1-8
樹根列1-9
樹根列2-1
樹根列2-2
樹根列2-3
樹根列2-4
樹根列2-5
-0.75m
-0.80m
-0.85m
-0.90m
-0.70m
0
(1：100)
5m



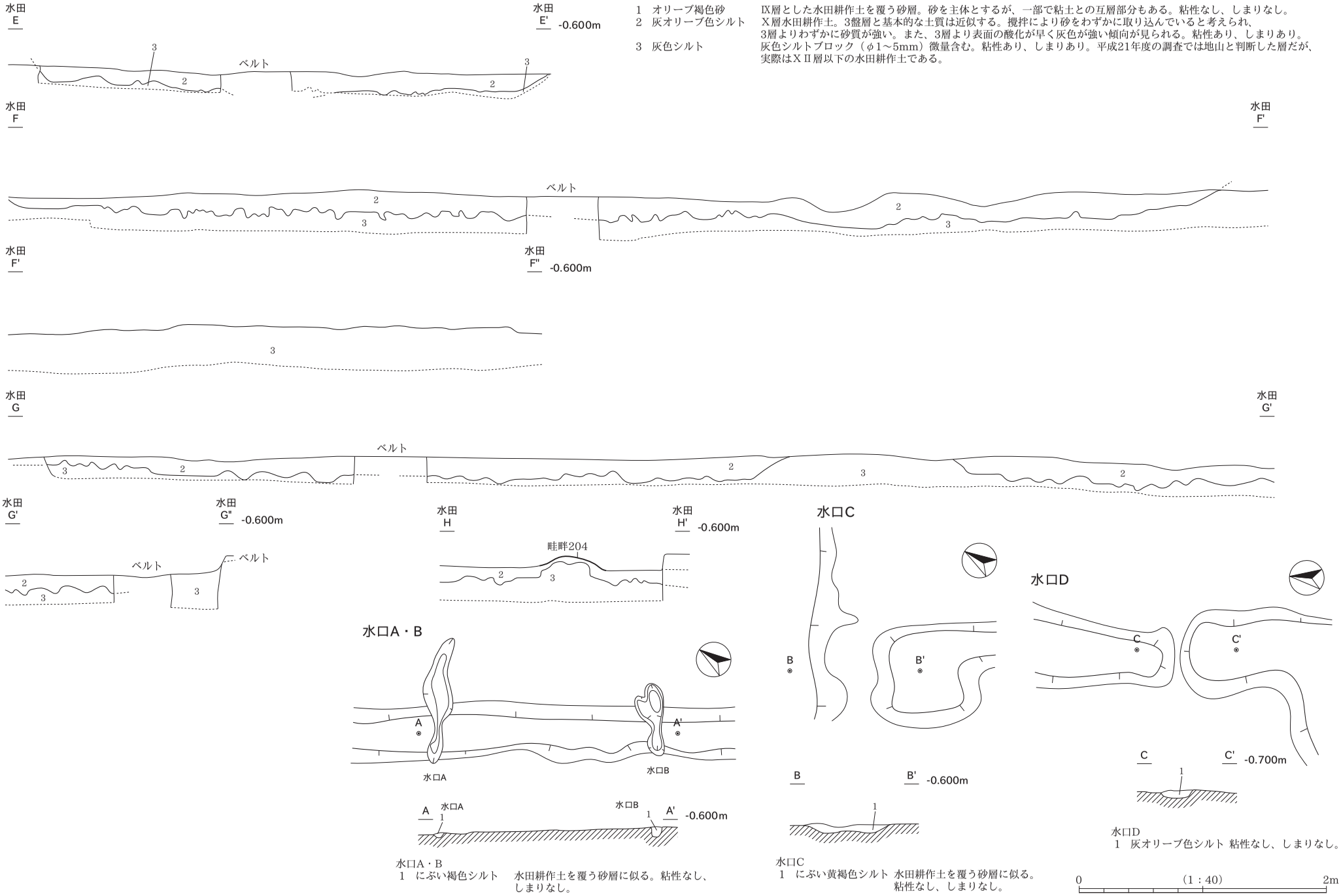
1　オリーブ褐色砂　　Ⅸ層とした水田耕作土を覆う砂層。砂を主体とするが、一部で粘土との互層部分もある。粘性なし、しまりなし。
2　灰オリーブ色シルト　　Ⅹ層水田耕作土。3層と基本的な土質は近似する。攪拌により砂をわずかに取り込んでいると考えられ、3層よりわずかに砂質が強い。
また、3層より表面の酸化が早く灰色が強い傾向が見られる。粘性あり、しまりあり。
3　灰色シルト　　灰色シルトブロック（φ1～5mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。平成21年度の調査では地山と判断した層だが、実際はⅩⅡ層以下の水田耕作土である。

0　（1：40）　2m

X層、SR1-1・2層遺構個別図（2）水田、水口

1　オリーブ褐色砂
2　灰オリーブ色シルト
3　灰色シルト

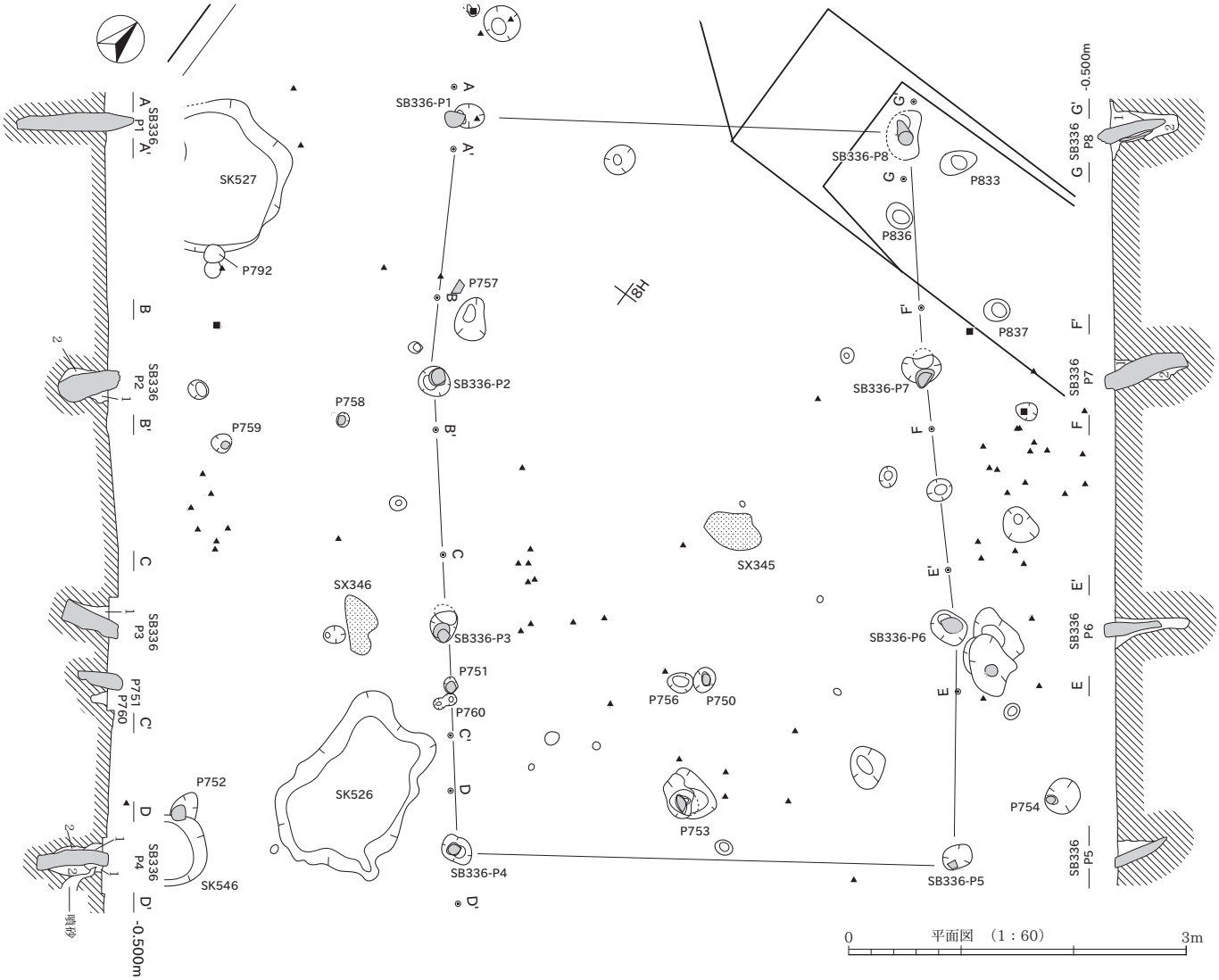
Ⅸ層とした水田耕作土を覆う砂層。砂を主体とするが、一部で粘土との互層部分もある。粘性なし、しまりなし。
X層水田耕作土。3盤層と基本的な土質は近似する。攪拌により砂をわずかに取り込んでいると考えられ、3層よりわずかに砂質が強い。また、3層より表面の酸化が早く灰色が強い傾向が見られる。粘性あり、しまりあり。灰色シルトブロック（φ1～5mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。平成21年度の調査では地山と判断した層だが、実際はXⅡ層以下の水田耕作土である。

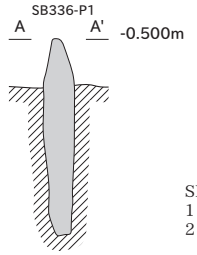


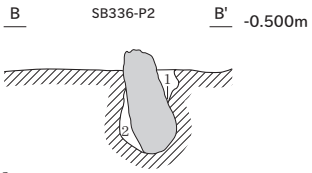
水口A・B
1　にぶい褐色シルト　水田耕作土を覆う砂層に似る。粘性なし、しまりなし。

水口C
1　にぶい黄褐色シルト　水田耕作土を覆う砂層に似る。粘性なし、しまりなし。

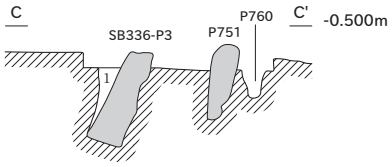
水口D
1　灰オリーブ色シルト　粘性なし、しまりなし。



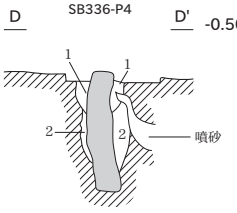




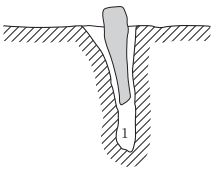
SB336-P2
1　黒褐色シルト　粘性なし、しまりなし。
2　黒色シルト　灰色シルトブロック（φ1～5mm）少量含む。粘性なし、しまりなし。



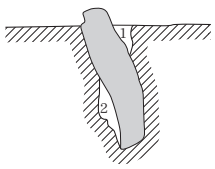
SB336-P3
1　黒色シルト　暗灰黄シルトブロック（φ1～20mm）微量含む。粘性なし、しまりなし。



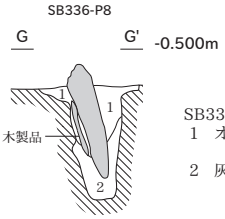
SB336-P4
1　オリーブ黒色シルト　灰色シルトブロック（φ1～3mm）微量含む。粘性なし、しまりなし。
2　黒褐色シルト　黒色土がブロック状に極わずかに、砂がブロック状に少量含む。粘性なし、しまりなし。



SB336-P6
1　黒褐色シルト　粘性なし、しまりなし。



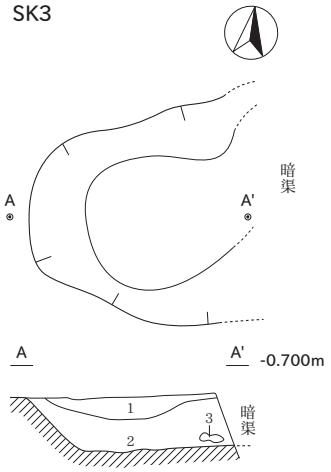
SB336-P7
1　黒褐色シルト　灰黄色シルトブロック（φ1mm）微量含む。粘性あり、しまりなし。
2　黒褐色シルト　灰黄色シルトブロック（φ1～3mm）微量含む。粘性あり、しまりなし。



SB336-P8
1　オリーブ黒色シルト　灰色シルト・炭化物ブロック状に混入。粘性あり、しまりあり。
2　灰色シルト　砂少量混入。粘性あり、しまりあり。

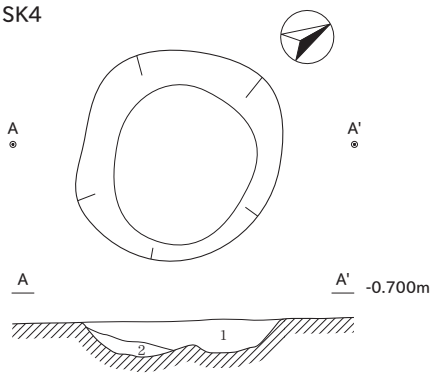
0　土層断面図 （1：40）　2m

SK3



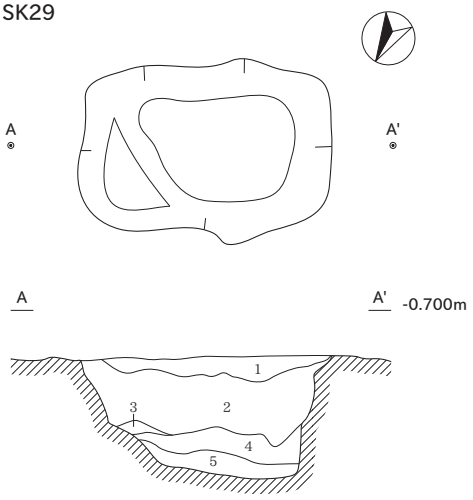
SK3
1　褐灰色シルト　粘性あり、しまりあり。
2　黒色腐植土　褐灰色シルトブロック含む。粘性なし、しまりなし。
3　褐灰色シルト　褐灰色シルトブロック。

SK4



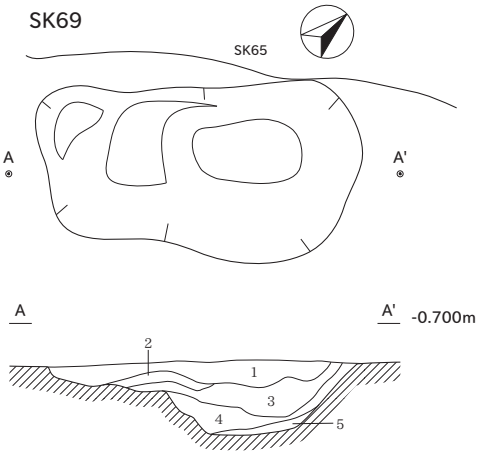
SK4
1　黒色腐植土　灰白色砂と植物遺存体がラミナ状に混入。粘性あり、しまりあり。
2　灰色シルト　1層に灰色シルトブロックが多量に混入した層。底部にうすく植物遺存体あり。

SK29



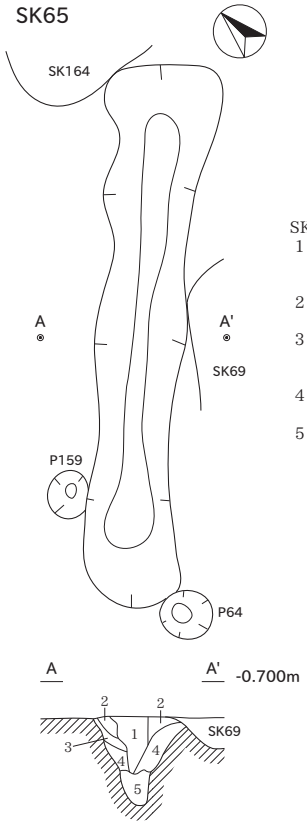
SK29
1　オリーブ黒色土　砂、砂塊（φ5～30mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒色土　灰オリーブ砂質シルト塊（φ10～30mm）多量含む。砂やや多く、腐植物多量含む。粘性あり、しまりあり。
3　黒褐色土　腐植物やや多く、砂少量含む。粘性あり、しまりあり。
4　黒色土　植物遺存体多量含む。粘性なし、しまりあり。
5　黒色土　植物遺存体（φ1～30mm）多量含む。粘性なし、しまりあり。

SK69



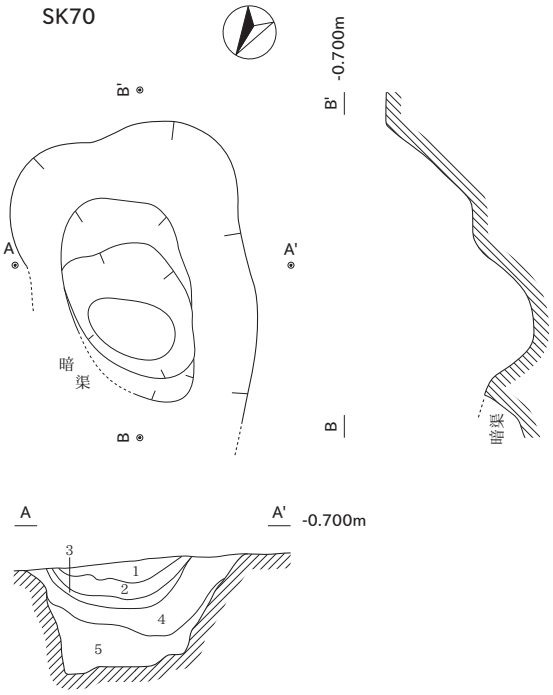
SK69
1　灰オリーブ色シルト　黒色土（厚さ10～50mm）と、暗灰黄色層（厚さ2～3mm）がラミナ状に多量混入。粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色シルト　黒色土ブロック（φ5～20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　暗灰黄色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～30mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
4　灰オリーブ色シルト　暗灰黄色シルト（厚さ5～10mm）でラミナ状に少量混入。粘性あり、しまりあり。
5　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ2～3mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

SK65



SK65
1　灰色シルト　灰色粘質シルトブロック（φ10mm）多量、黒色土ブロック（φ5～30mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰色シルト　灰色粘質シルトブロック（φ20～50mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
3　オリーブ黒色シルト　灰色シルト粒微量含む。粘性あり、しまりあり。
4　灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック（φ5～20mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
5　黒色土　腐植土混入。粘性あり。しまりなし。

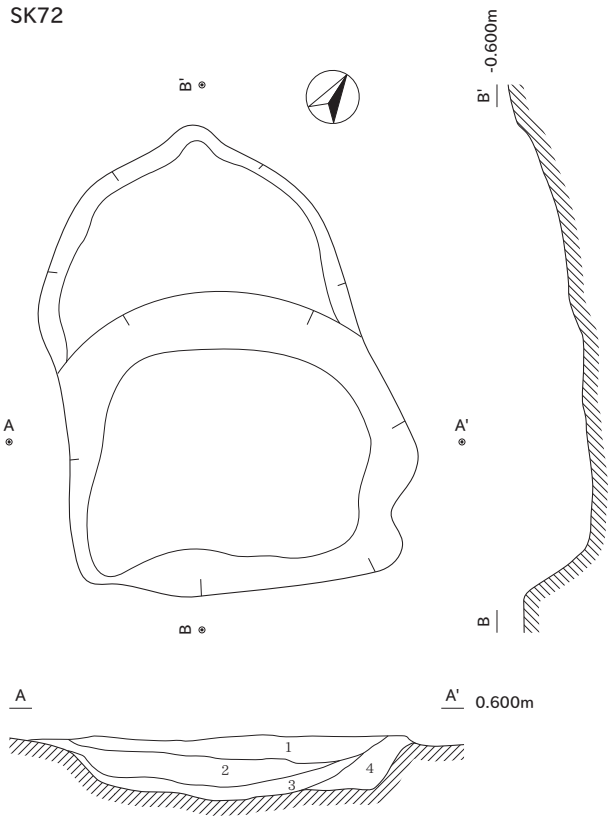
SK70



SK70
1　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～10mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～10mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　灰オリーブ色シルト　黒色土ブロック（φ5mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
4　灰オリーブ色シルト　砂多量含む。粘性あり、しまりあり。
5　黒褐色土　植物遺存体小片多量含む。粘性なし、しまりあり。

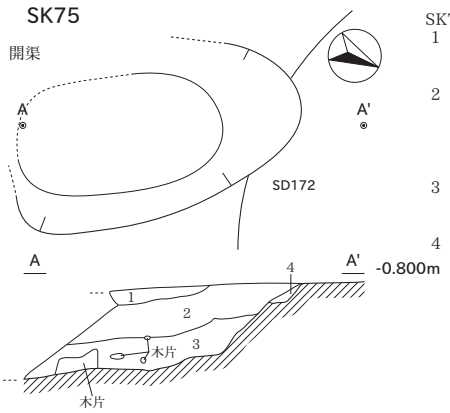
0　（1：40）　2m

SK72



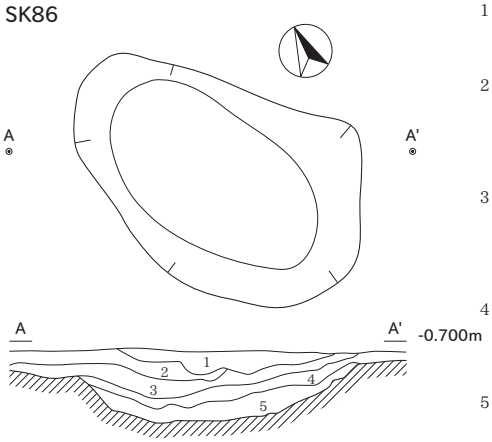
SK72
1　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ20～30mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　オリーブ黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ10mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
3　黄褐色土　植物遺存体細片多量含む。粘性あり、しまりなし。
4　黒褐色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～20mm）多量含む。

SK75



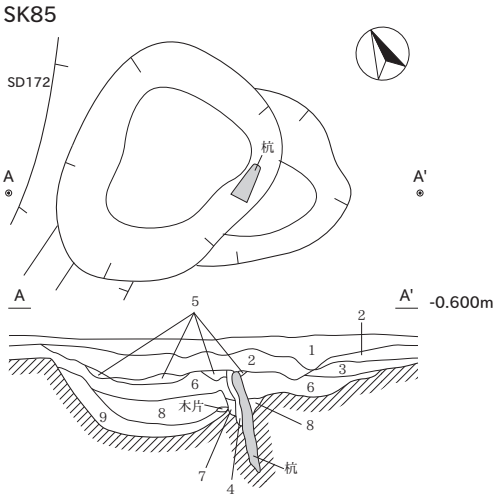
SK75
1　灰オリーブ色シルト　黒色土（φ2～10mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒色土　灰オリーブ色シルト層。腐植土と灰オリーブ色シルトブロック（φ5～100mm）の互層。粘性あり、しまりあり。
3　黒色土　植物遺存体細片多量含む。粘性あり、しまりなし。
4　灰オリーブ色シルト　黒色土粒（φ2mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

SK86



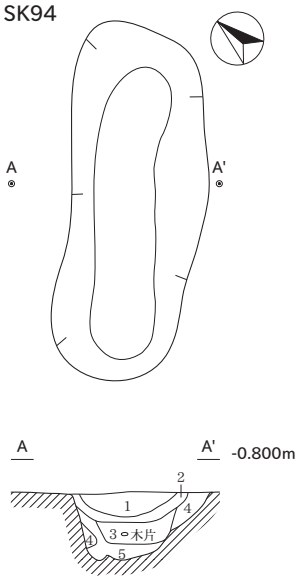
SK86
1　灰オリーブ色シルト　浅黄色細砂少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-1層。
2　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ2～5mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-1層。
3　黒色土　灰オリーブ色シルト（厚さ2～5mm）と灰色シルト（厚さ2～5mm）の互層。SR1-1層。
4　灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック（φ5mm）少量含む。SR1-1層。粘性あり、しまりあり。
5　灰色シルト　腐植土（厚さ1～10mm）多量混入。黒色土（厚さ10mm）、灰オリーブ色ブロック（φ50mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

SK85



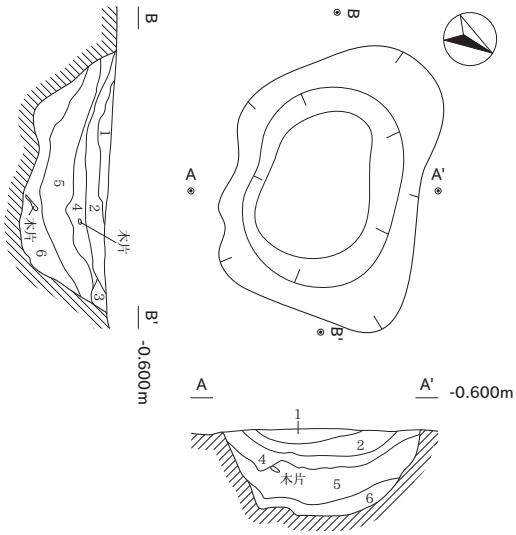
SK85
1　灰オリーブ色シルト　細砂微量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-1層。
2　灰オリーブ色シルト　黒色土（厚さ1～10mm）と灰オリーブ色シルト（厚さ5～20mm）の互層。粘性あり、しまりあり。SR1-1層。
3　灰オリーブ色シルト　黒色土ブロック（φ10mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-1層。
4　黒褐色土　粘性あり、しまりなし。
5　黒色土　植物遺存体、灰黄色シルトブロック含む。粘性あり、しまりあり。SR1-1層。
6　灰黄色土　黄色粗砂少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-1層。
7　灰色シルト　粘性あり、しまりあり。
8　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～50mm）多量含む。腐植土混入。粘性あり、しまりあり。
9　腐植土層

SK94



SK94
1　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ0.5～10mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　腐植土層
3　黒色土　植物遺存体多量含む。粘性あり、しまりなし。
4　灰オリーブ色シルト　黒色土粒少量含む。
5　黒褐色土　植物遺存体多量含む。粘性あり、しまりなし。

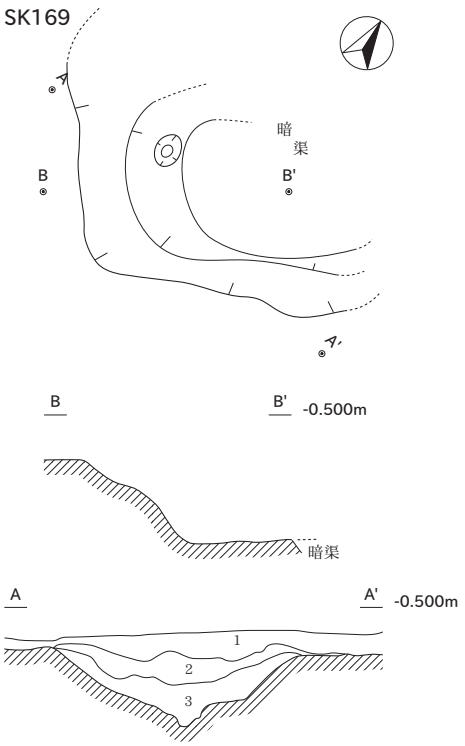
SK167



SK167
1　黒色土　植物遺存体細片多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　オリーブ黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック（φ10mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
4　灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック（φ10mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
5　オリーブ黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
6　黒色土　植物遺存体細片多量含む。粘性あり、しまりあり。

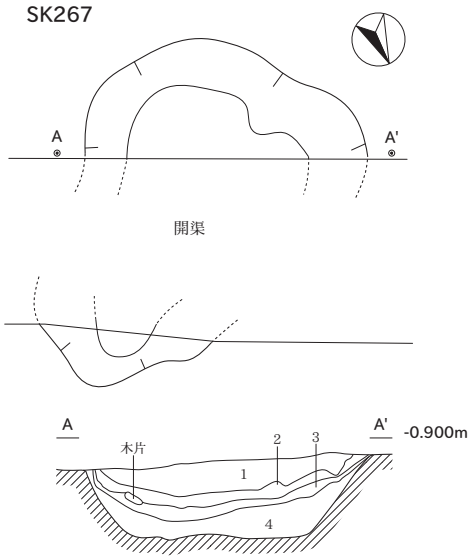
0　（1：40）　2m

SK169



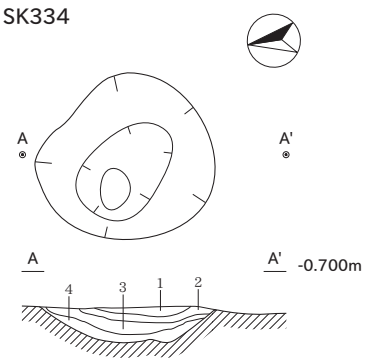
SK169
1　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～30mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-1層。
2　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
3　暗赤褐色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～50mm）少量含む。植物遺存体多量含む。粘性なし、しまりなし。

SK267



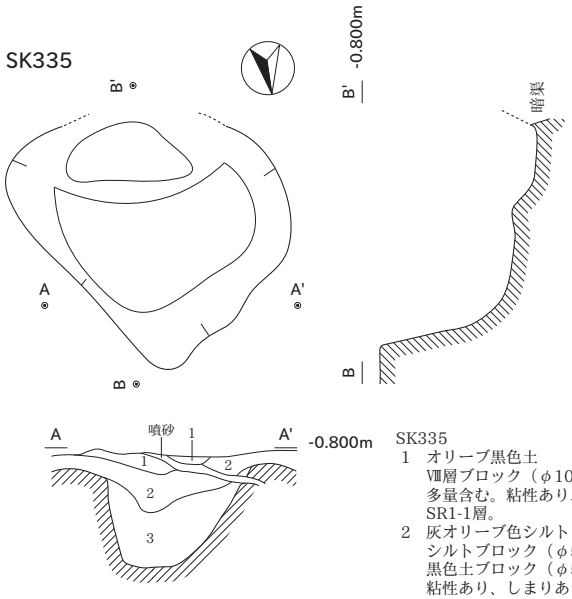
SK267
1　青灰色シルト　黒色腐植土がラミナ状に混入。大炭化物（φ1～5mm）少量含む。粘性あり、しまりなし。
2　黒色腐植土　遺物多量含む。粘性なし、しまりなし。
3　茶褐色腐植土　粘性なし、しまりなし。
4　黒色腐植土　シルトブロック含む。粘性なし、しまりなし。

SK334



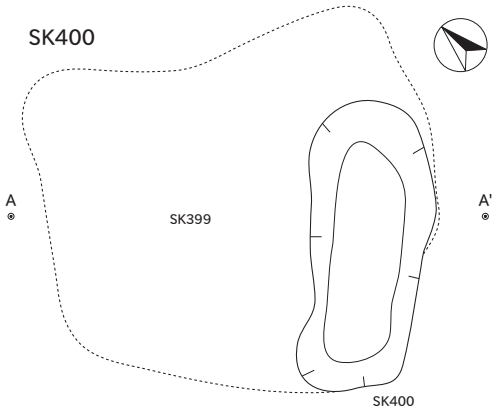
SK334
1　灰オリーブ色シルト　粘性あり、しまりあり。
2　黒色土　白色灰少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　腐植土層
4　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ1～5mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。

SK335

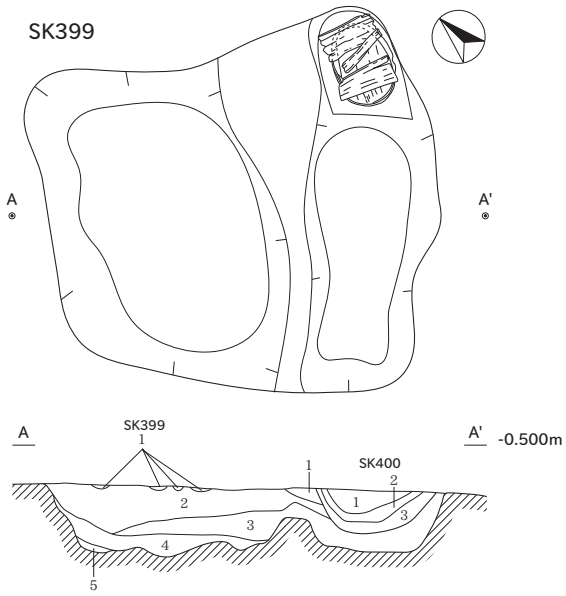


SK335
1　オリーブ黒色土　Ⅶ層ブロック（φ10～50mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-1層。
2　灰オリーブ色シルト　シルトブロック（φ50～100mm）、黒色土ブロック（φ50mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-1層。
3　灰色シルト　植物遺存体を多量含む。粘性なし、しまりあり。

SK400



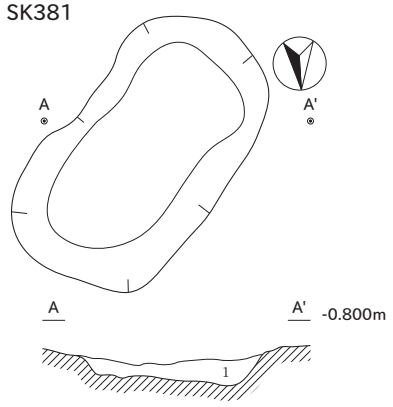
SK399



SK399
1　白色シルト　粘性あり、しまりあり。
2　黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。
3　青灰色シルト　茶褐色土がラミナ状に混入。
4　黒褐色腐植土
5　青灰色シルト　茶褐色土少量含む。粘性あり、しまりあり。

SK400
1　青灰色シルト　黒色腐植土がブロック状に混入。粘性あり、しまりあり。
2　黒色腐植土　茶褐色腐植土少量混入。粘性なし、しまりなし。
3　青灰色シルト　黒色腐植土が1層より多くブロック状に混入。粘性あり、しまりあり。

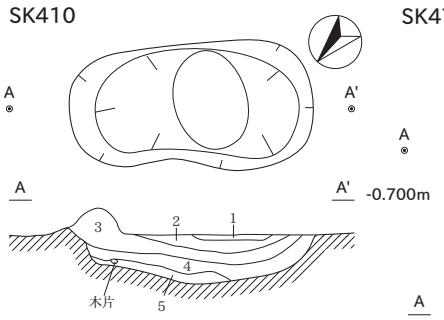
SK381



SK381
1　黒褐色腐植土　粘性なし、しまりなし。

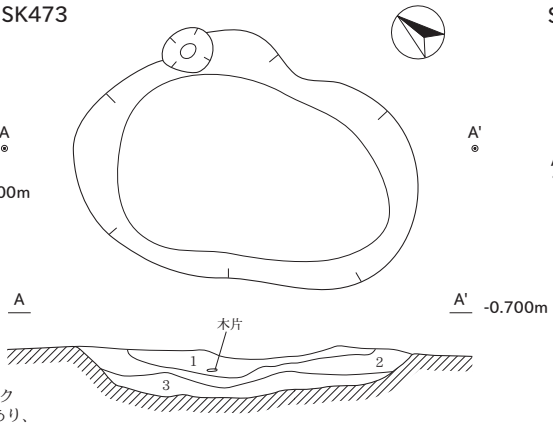
0　(1：40)　2m

SK410



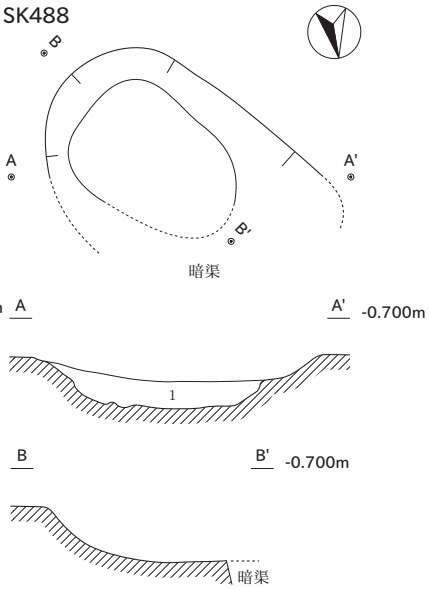
SK410
1　灰オリーブ色シルト　灰色砂多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色シルト　オリーブ黒色土シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　灰オリーブ色シルト　シルトブロック（φ5～10mm）、オリーブ黒色土ブロック（φ5～10mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
4　黒褐色土　植物遺存体細粒多量含む。粘性あり、しまりあり。
5　灰オリーブ色シルト　灰オリーブ色細砂多量含む。粘性あり、しまりあり。

SK473



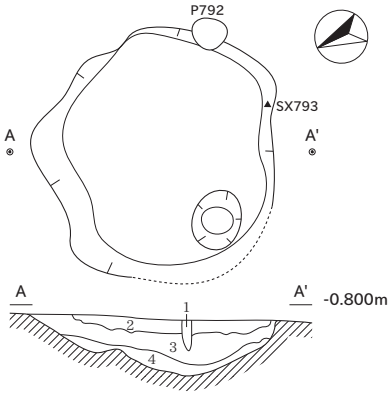
SK473
1　灰オリーブ色シルト　シルトブロック（φ20～30mm）、黒色土ブロック（φ50mm）、灰色シルト少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色シルト　シルトブロック（φ30～50mm）、黒色土ブロック（φ30～50mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　腐植土層　黒色土粒少量含む。粘性なし、しまりあり。

SK488



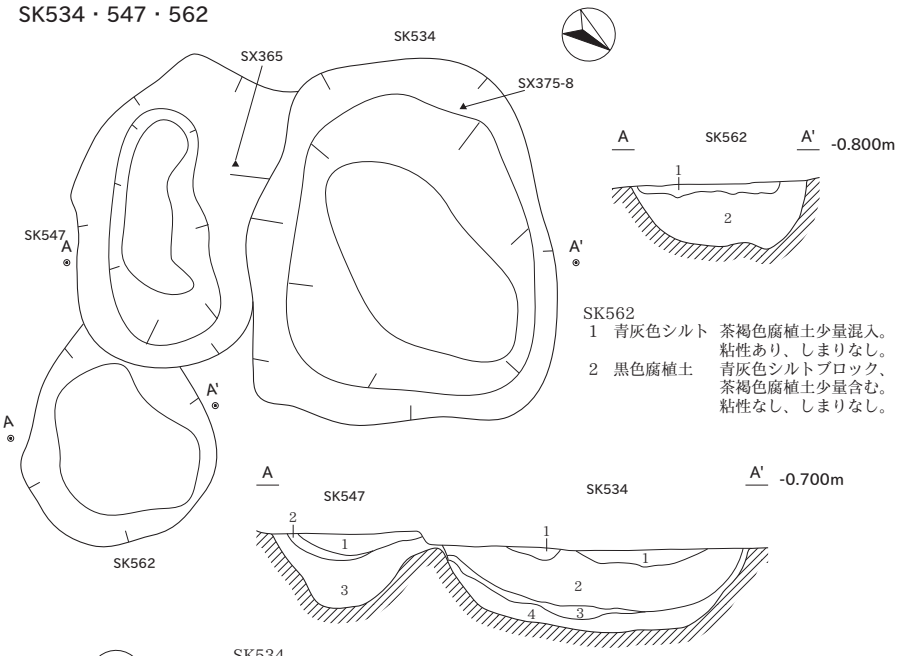
SK488
1　黒色腐植土　青灰色シルトブロック少量含む。粘性なし、しまりなし。

SK527



SK527
1　黒色シルト　杭痕。粘性なし、しまりなし。
2　黒褐色シルト　暗オリーブ灰色シルトブロック（φ1～20mm）多量含む。粘性なし、しまりなし。
3　黄灰シルト　暗オリーブ灰色シルトブロック（φ1～30mm）少量含む。粘性なし、しまりなし。
4　黒褐色腐植土　腐植土主体層。粘性なし、しまりなし。

SK534・547・562

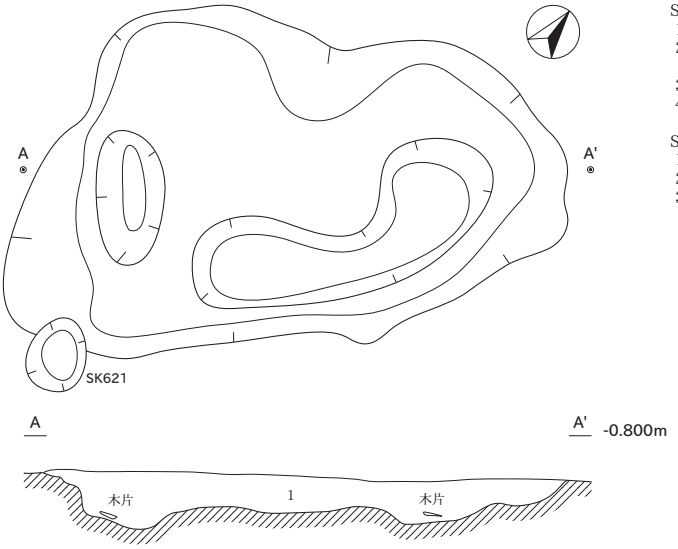


SK562
1　青灰色シルト　茶褐色腐植土少量混入。粘性あり、しまりなし。
2　黒色腐植土　青灰色シルトブロック、茶褐色腐植土少量含む。粘性なし、しまりなし。

SK534
1　青灰色シルト　黒色腐植土少量含む。粘性あり、しまりなし。
2　黒色土　黒色腐植土と茶褐色腐植土がラミナ状に混入。遺物多く出土。粘性なし、しまりなし。
3　青灰色シルト　粘性あり、しまりなし。
4　黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。

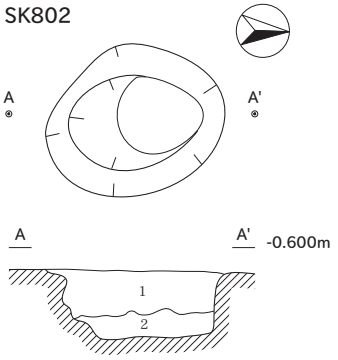
SK547
1　黒色腐植土　茶褐色腐植土がラミナ状に混入。粘性なし、しまりなし。
2　青灰色シルト　粘性あり、しまりなし。
3　茶褐色腐植土　黒色腐植土がラミナ状に混入。粘性なし、しまりなし。

SK529



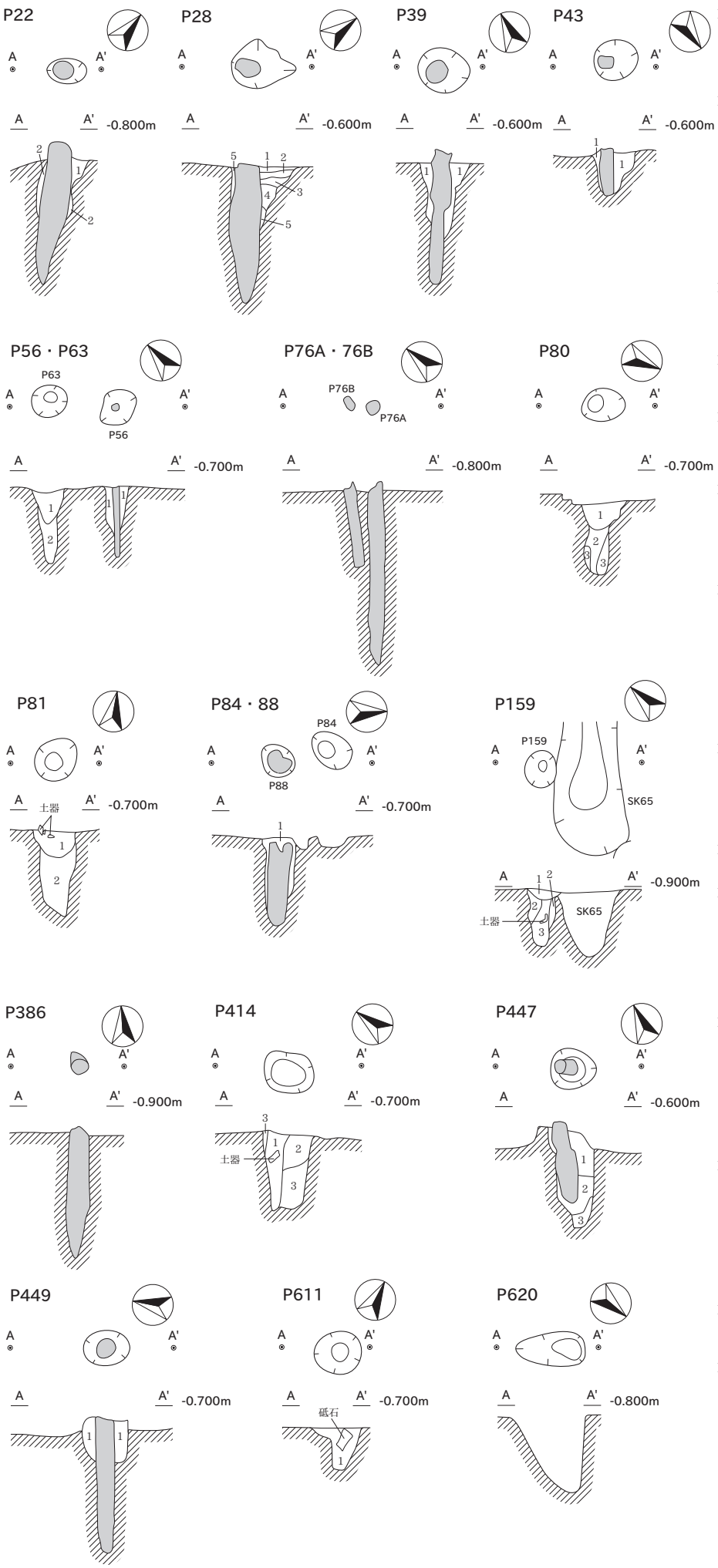
SK529
1　黒色腐植土　青灰色シルトブロック含む。籾殻混入。粘性なし、しまりなし。

SK802



SK802
1　暗オリーブ灰色シルト　黒色腐植土が斑に多量混入。下部に褐色腐植物有。粘性あり、しまりあり。
2　暗オリーブ灰色シルト　黒色腐植土わずかに混入。粘性あり、しまりあり。

0　（1：40）　2m



P22
1 オリーブ黒色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ3～5mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2 灰オリーブ色シルト　粘性あり、しまりなし。

P28
1 灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～10mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2 灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～11mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
3 灰オリーブ色シルト　黒色土ブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
4 灰色シルト　黒色土ブロック（φ5～31mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
5 灰色シルト　粘性あり、しまりあり。

P39
1 オリーブ黒色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～10mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。

P43
1 オリーブ黒色シルト　灰オリーブ色シルトブロック少量含む。粘性あり、しまりあり。

P56
1 灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ10mm）多量、シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

P63
1 灰色シルト　黒色土ブロック（φ10～20mm）やや多く、灰オリーブ色シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2 灰オリーブ色シルト　粘性あり、しまりあり。

P80
1 オリーブ黒色シルト　オリーブ灰色砂質シルトブロック（φ20mm）多量、黒色土ブロック（φ5～10mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2 灰色シルト　砂粒やや多く含む。粘性あり、しまりあり。
3 灰色シルト　砂質シルトブロック（φ10mm）主体層。オリーブ黒色シルト少量含む。粘性あり、しまりあり。

P81
1 黄灰色土　黄色粗砂多量含む。粘性あり、しまりあり。
2 黒褐色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～10mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。

P88
1 オリーブ黒色シルト　粘性あり、しまりなし。

P159
1 灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ5mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2 灰オリーブ色シルト　粘性あり、しまりなし。
3 灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック（φ20～50mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。

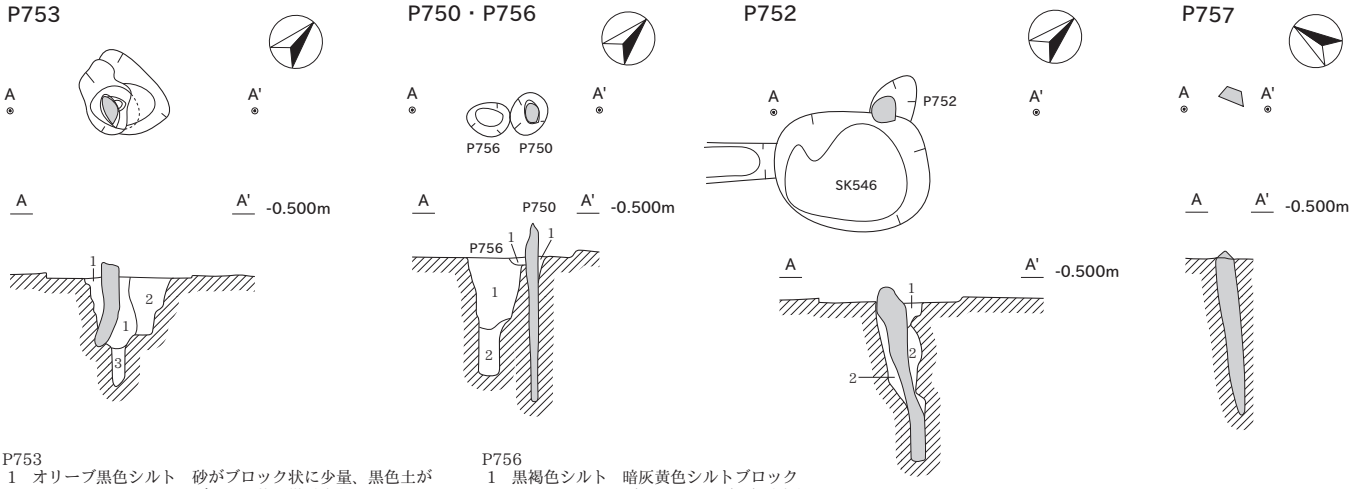
P414
1 黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ2～5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2 灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ5mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
3 灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

P447
1 灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ1～10mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2 黄色砂質土　1層に黄色砂が多量に混入した層。
3 灰オリーブ色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～20mm）と灰色シルトブロック（φ10～20mm）の混合土。

P449
1 灰オリーブ色シルト　黒色土ブロック（φ10～20mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。

P611
1 褐灰色土　粘性あり、しまりあり。

0　（1：40）　2m

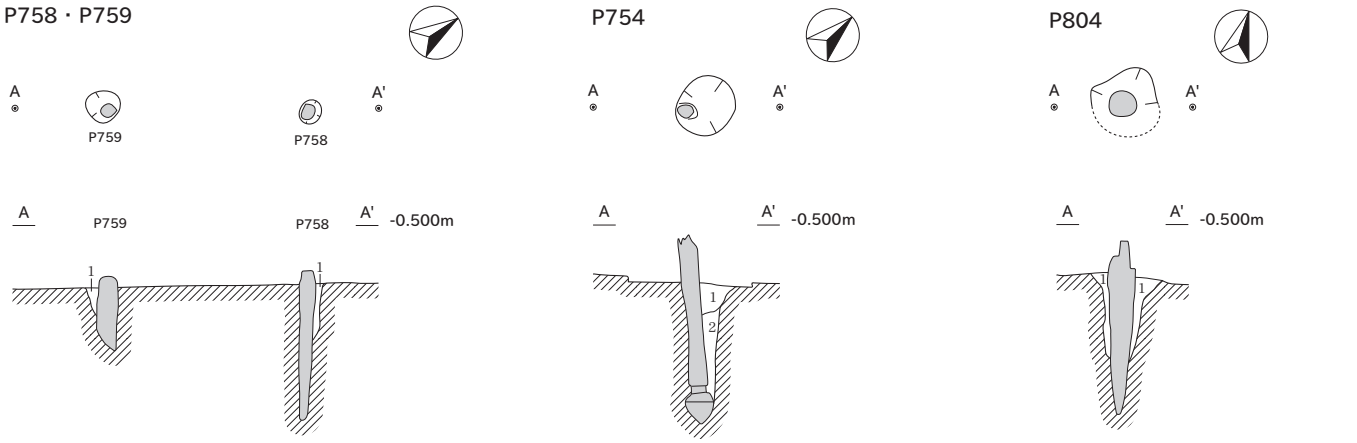


P753
1　オリーブ黒色シルト　砂がブロック状に少量、黒色土がブロック状に微量含む。粘性なし、しまりなし。
2　黒色シルト　黒色シルトブロック（φ1～20mm）多量含む。3層に土質近似。3層杭抜き取り時の抜き取り痕か。粘性なし、しまりなし。
3　黒褐色シルト　オリーブ黒色シルトブロック（φ1～20mm）少量含む。2層に土質近似。旧段階の柱痕か。粘性なし、しまりなし。

P756
1　黒褐色シルト　暗灰黄色シルトブロック（φ1～30mm）多量含む。粘性なし、しまりなし。
2　黒褐色シルト　暗灰黄色シルトブロック（φ1～5mm）微量含む。柱痕と考えられる。粘性あり、しまりなし。

P750
1　黒色シルト　粘性なし、しまりなし。

P752
1　黒褐色シルト　灰色シルトブロック（φ1～5mm）、炭化物（φ1～3mm）微量含む。粘性なし、しまりなし。
2　黒褐色シルト　灰色シルトブロック（φ1～10mm）、炭化物（φ1～3mm）微量含む。打ち込み時に生じた隙間と考えられる。粘性なし、しまりなし。

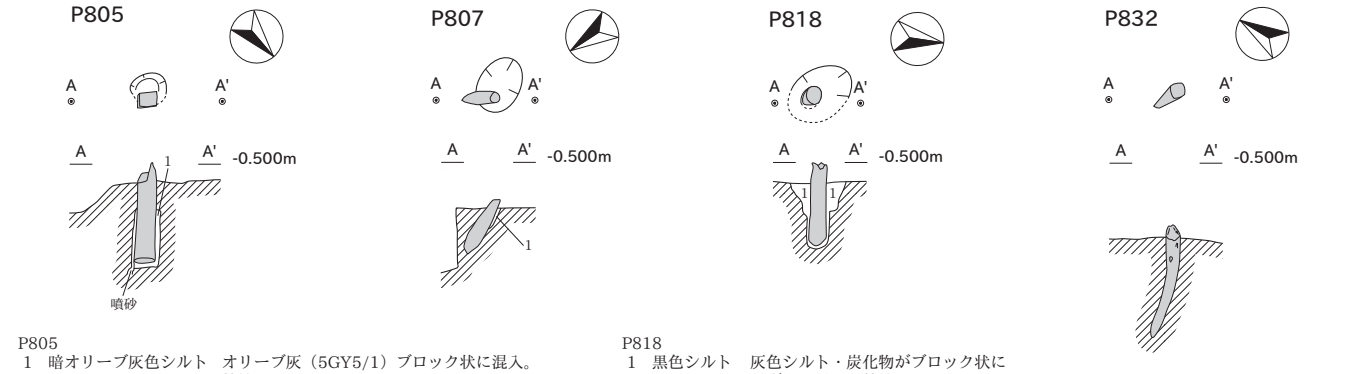


P759
1　黒褐色腐植土　腐植土主体層。粘性なし、しまりなし。

P758
1　黒褐色シルト　粘性あり、しまりあり。

P754
1　黒色シルト　灰白色シルトブロック多量に、炭化物粒（φ1～5mm）極わずかに含む。
2　灰色砂　打ち込み時に動いた砂層と考えられる。粘性なし、しまりなし。

P804
1　暗オリーブ灰色シルト　黒色腐植土ブロック状に混入。粘性あり、しまりあり。

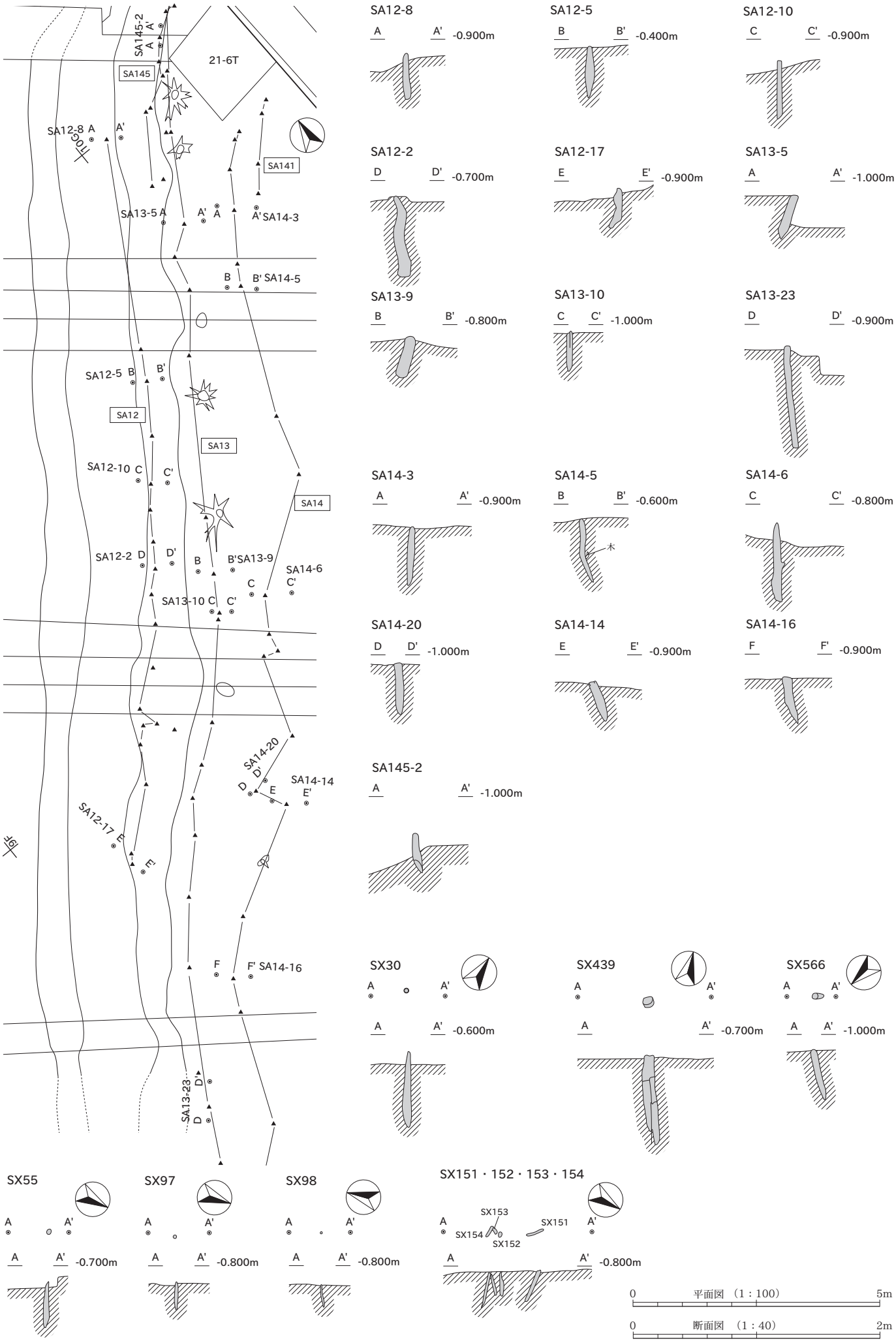


P805
1　暗オリーブ灰色シルト　オリーブ灰（5GY5/1）ブロック状に混入。粘性あり、しまりあり。

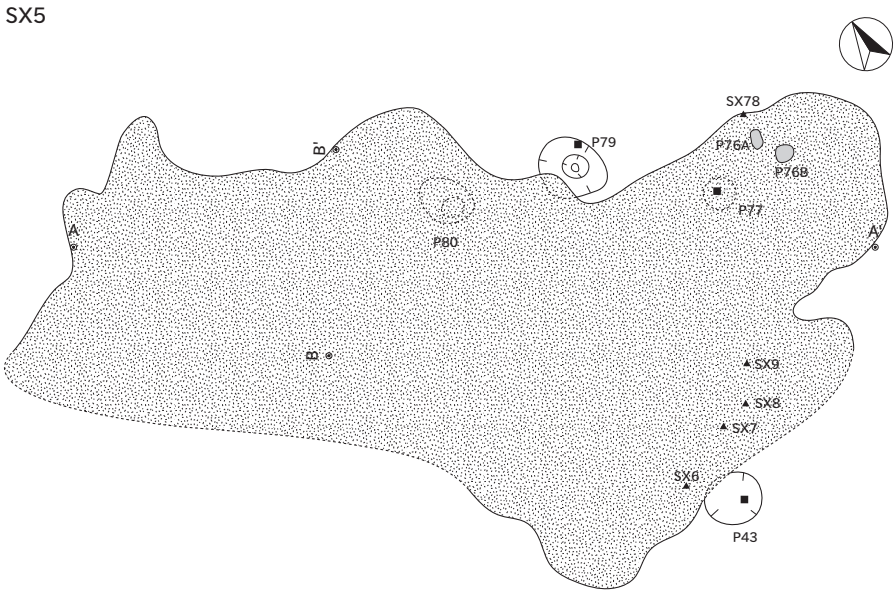
P807
1　暗オリーブ灰色シルト　粘性あり、しまりあり。

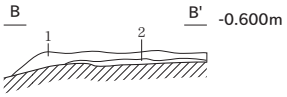
P818
1　黒色シルト　灰色シルト・炭化物がブロック状にわずかに混入。粘性あり、しまりあり。

0　（1：40）　2m


SA145-2
SA145
21-6T
SA12-8
SA141
SA13-5
SA14-3
SA14-5
SA12-5
SA12
SA13
SA12-10
SA14
SA12-2
SA13-9
SA14-6
SA13-10
SA14-20
SA14-14
SA12-17
SA14-16
SA13-23
SA12-8
-0.900m
SA12-5
-0.400m
SA12-10
-0.900m
SA12-2
-0.700m
SA12-17
-0.900m
SA13-5
-1.000m
SA13-9
-0.800m
SA13-10
-1.000m
SA13-23
-0.900m
SA14-3
-0.900m
SA14-5
-0.600m
木
SA14-6
-0.800m
SA14-20
-1.000m
SA14-14
-0.900m
SA14-16
-0.900m
SA145-2
-1.000m
SX30
-0.600m
SX439
-0.700m
SX566
-1.000m
SX55
-0.700m
SX97
-0.800m
SX98
-0.800m
SX151・152・153・154
SX153
SX154
SX152
SX151
-0.800m
0　平面図（1：100）　5m
0　断面図（1：40）　2m

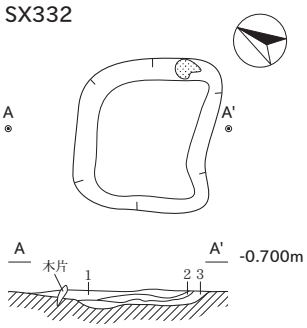
SX5





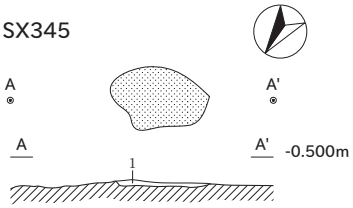
SX5　A-A'　B-B'
1　灰オリーブ色シルト　炭化物（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒褐色土　炭化物（φ5mm）少量、灰微量含む。粘性あり、しまりあり。
3　浅黄橙色土　灰層。炭化物（φ5～10mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
4　黒色土

SX332



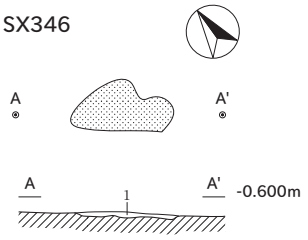
SX332
1　黒色土
白色灰多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色灰層
赤色焼土粒（φ5mm）少量含む。粘性なし、しまりなし。
3　黒色土
白色灰多量含む。粘性あり、しまりあり。

SX345



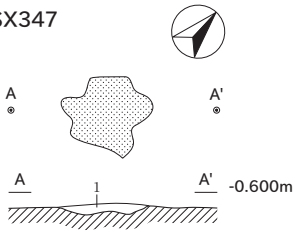
SX345
1　暗赤褐色シルト（焼土主体層）
シルトブロック（φ1～5mm）微量含む。被熱による変質層。

SX346



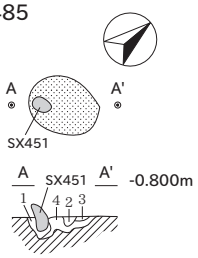
SX346
1　暗赤褐色土（焼土主体層）
被熱による変質層。

SX347



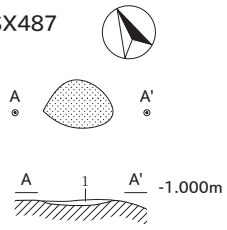
SX347
1　黒褐色シルト（焼土主体層）
焼土ブロック（φ1～5mm）微量含む。被熱による変質層。

SX485



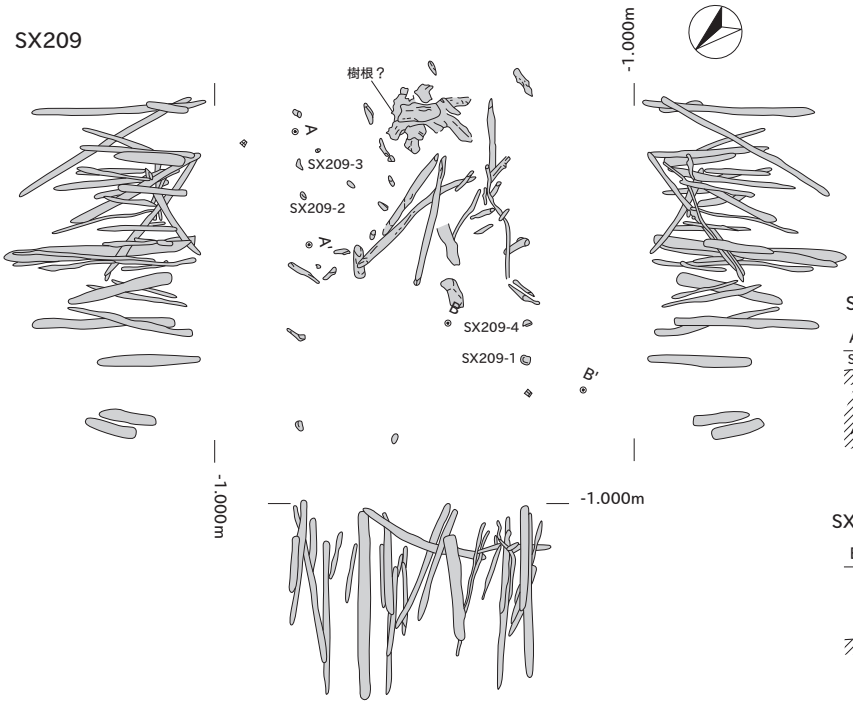
SX485
1　灰オリーブ色シルト
焼土粒（φ1～2mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。被熱による変質層。
2　にぶい赤褐色シルト
焼土層。粘性あり、しまりあり。被熱による変質層。
3　暗赤灰色シルト
焼土層。粘性あり、しまりあり。被熱による変質層。
4　明赤灰色シルト
焼土層。粘性あり、しまりあり。被熱による変質層。

SX487

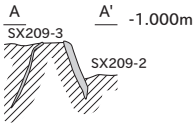


SX487
1　暗赤灰色土
焼土。被熱による変質層。

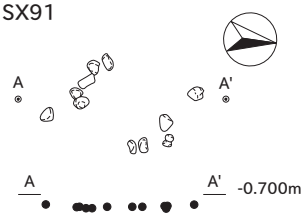
SX209



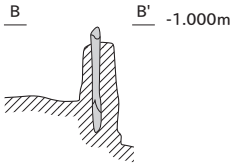
SX209-2・3



SX91

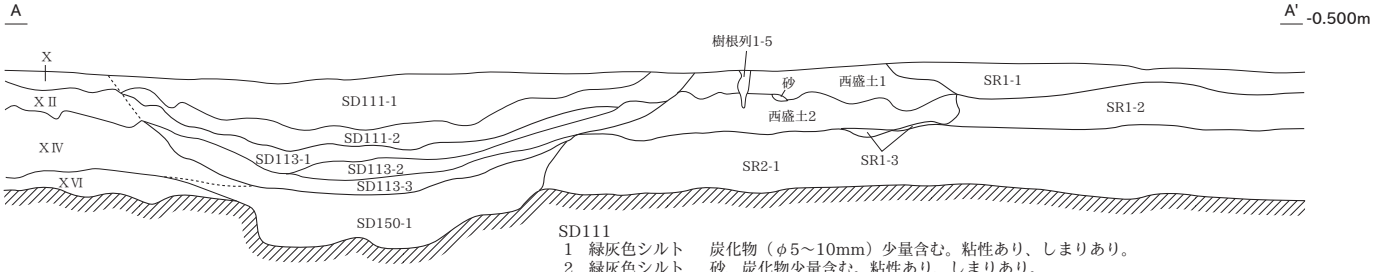


SX209-1



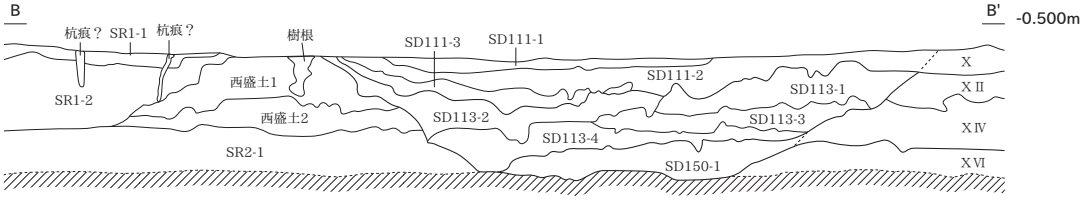
0　（1：40）　2m

SD111・113・150

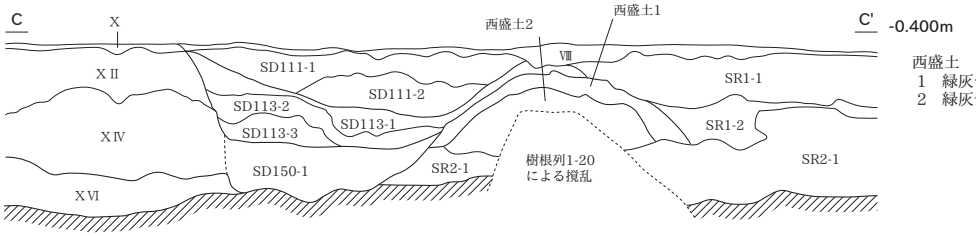


SD111
1　緑灰色シルト　炭化物（φ5～10mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　緑灰色シルト　砂、炭化物少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　緑灰色シルト　砂、炭化物少量含む。粘性あり、しまりあり。

SD150
1　緑灰色シルト　固い白色物多量含む。粘性あり、しまりあり。

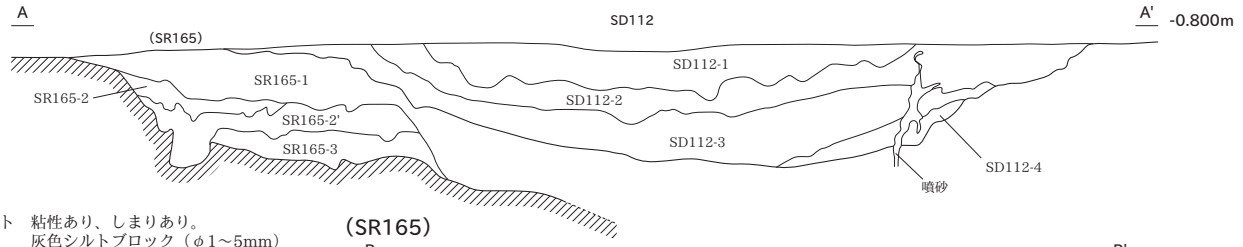


SD113
1　緑灰色シルト
炭化物少量含む。
粘性あり、しまりあり。
2　緑灰色シルト
砂、炭化物少量含む。
粘性あり、しまりあり。
3　緑灰色シルト
砂、白い粒子少量含む。
粘性あり、しまりあり。
4　緑灰色シルト
3層よりやや暗い。
白い固い粒子多量含む。
粘性あり、しまりあり。



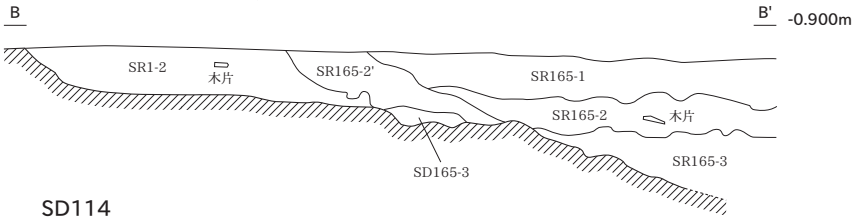
西盛土
1　緑灰色シルト　砂多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　緑灰色シルト　砂少量含む。粘性あり、しまりあり。

SD112・（SR165）



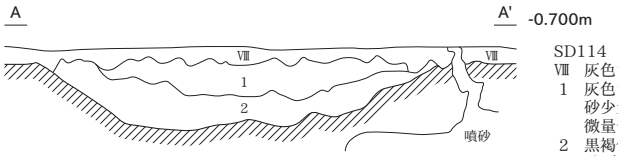
（SR165）
1　暗灰黄色シルト　粘性あり、しまりあり。
2　黄灰色シルト　灰色シルトブロック（φ1～5mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
2'　灰黄褐色シルト　SR165-2層を主体とし、これと1層との漸移的な土質を示す。灰黄褐色シルト主体。炭化物（φ1～3mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
3　黄灰色シルト　灰色シルトブロック（φ1～5mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。

（SR165）



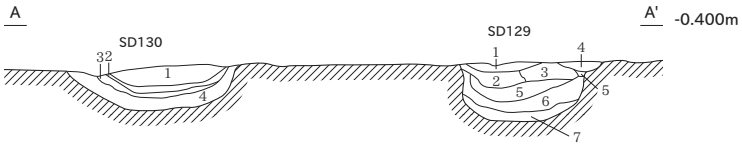
SD112
1　灰色シルト　灰白色シルトブロック（φ1～3mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰色シルト　粘性あり、しまりあり。
3　灰オリーブ色シルト　砂とシルトがラミナ状に混入。粘性なし、しまりなし。
4　暗オリーブ色シルト　粘性あり、しまりあり。

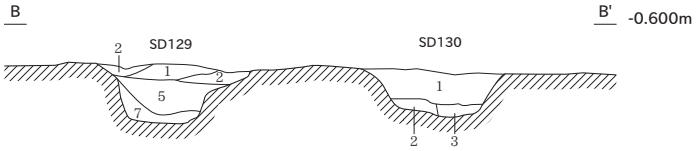
SD114



SD114
Ⅷ　灰色シルト
1　灰色シルト
砂少量、炭化物粒（φ1mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒褐色シルト
砂ブロック（φ1～30mm）、炭化物粒（φ1mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。

SD130・129

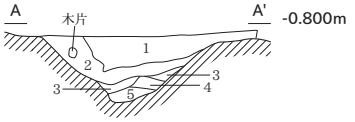




SD129
1　緑灰色シルト・黒色腐植土・黒褐色腐植土
粘性あり、しまりあり。
2　黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。
3　緑灰色シルト　粘性あり、しまりあり。
4　黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。
5　緑灰色シルト・黒色腐植土・黒褐色腐植土
粘性あり、しまりあり。
6　黒褐色腐植土　粘性なし、しまりなし。
7　緑灰色シルト・黒色腐植土・黒褐色腐植土
粘性あり、しまりあり。

SD130
1　緑灰色シルト・黒色腐植土・黒褐色腐植土
植物の根多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。
3　緑灰色シルト・黒色腐植土・黒褐色腐植土
粘性あり、しまりなし。
4　黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。

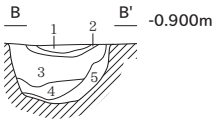
SD166



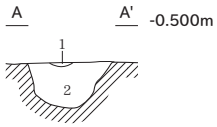
SD166
1　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～30mm）多量、黒色土ブロック（φ10～20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒褐色土　植物遺存体細片多量含む。粘性あり、しまりなし。
3　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～20mm）多量含む。粘性あり、しまりなし。
4　黒色土　植物遺存体細片多量含む。粘性あり、しまりあり。
5　灰オリーブ色土　植物遺存体細片多量含む。粘性あり、しまりなし。

0　（1：40）　2m

SD166



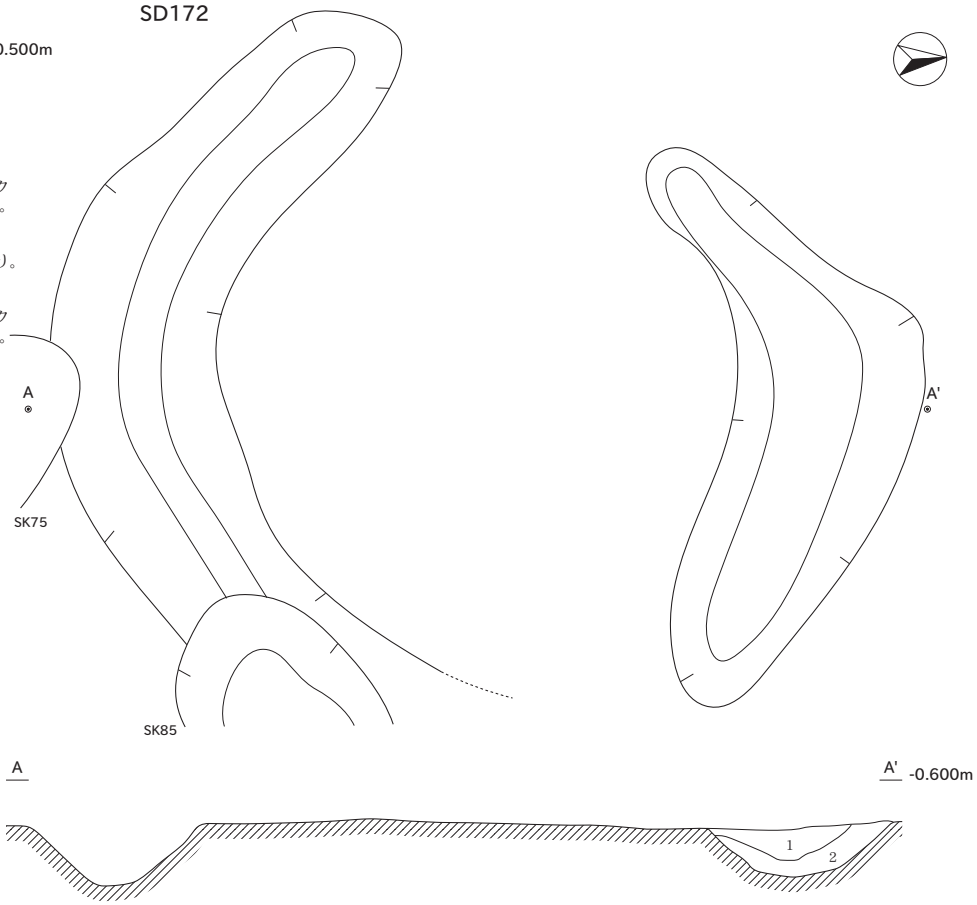
SD339



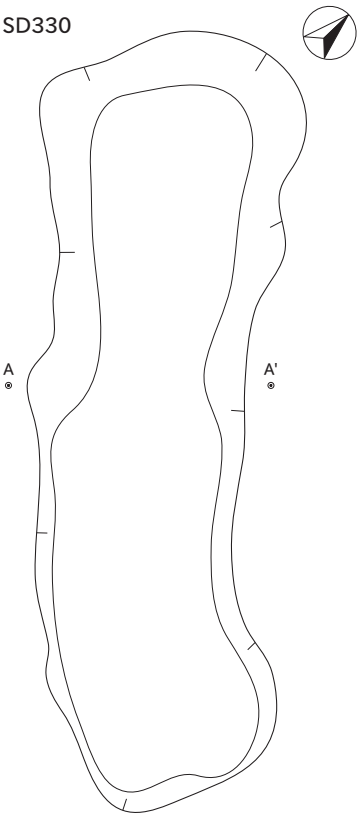
SD166
1　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ20～30mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰色シルト　灰オリーブ色シルト粒微量含む。粘性あり、しまりあり。
3　灰オリーブ色シルト　灰色シルト少量含む。粘性あり、しまりあり。
4　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～20mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
5　灰オリーブ色シルト　灰色シルト粒少量含む。粘性あり、しまりあり。

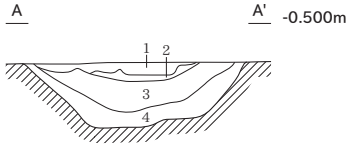
SD339
1　茶褐色腐植土　粘性なし、しまりなし。
2　黒色腐植土　青灰色シルトブロック少量含む。粘性なし、しまりなし。

SD172



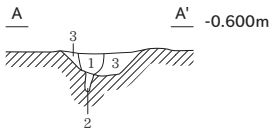
SD330



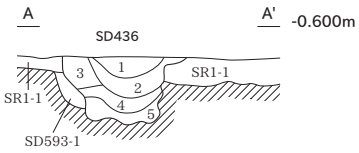


SD330
1　青灰色シルト　粘性あり、しまりあり。
2　黒色腐植土　ブロック状の1層を少量含む。粘性なし、しまりあり。
3　茶褐色腐植土　ラミナ状に堆積。粘性なし、しまりなし。
4　黒色土　黒色腐植土と茶褐色腐植土がラミナ状に混入。粘性なし、しまりなし。

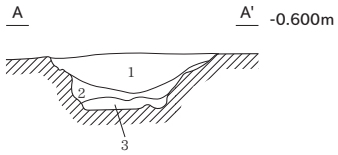
SD331



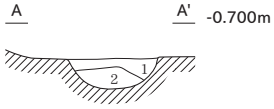
SD436・593



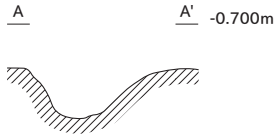
SD445



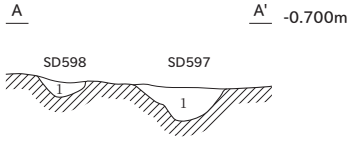
SD448



SD461



SD597・598



SD540

SD540
1　黒色シルト
灰色シルトブロック（φ1～30mm）少量含む。

SD172
1　灰オリーブ色シルト　砂少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

SD331
1　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ3mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰色シルト　粘性あり、しまりあり。
3　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

SD436
1　黒褐色シルト　シルトブロック（φ10mm）微量含む。粘性あり、しまりなし。
2　黒色シルト　シルトブロック（φ10mm）微量含む。腐植土主体層。粘性あり、しまりなし。
3　暗灰黄色シルト　粘性あり、しまりなし。
4　黒褐色シルト　シルトブロック（φ3mm）微量含む。粘性あり、しまりなし。
5　黒褐色シルト　少量のシルトブロック（φ20mm）と砂の混合土。粘性なし。

SD593
1　灰色シルト　粘性あり、しまりあり。

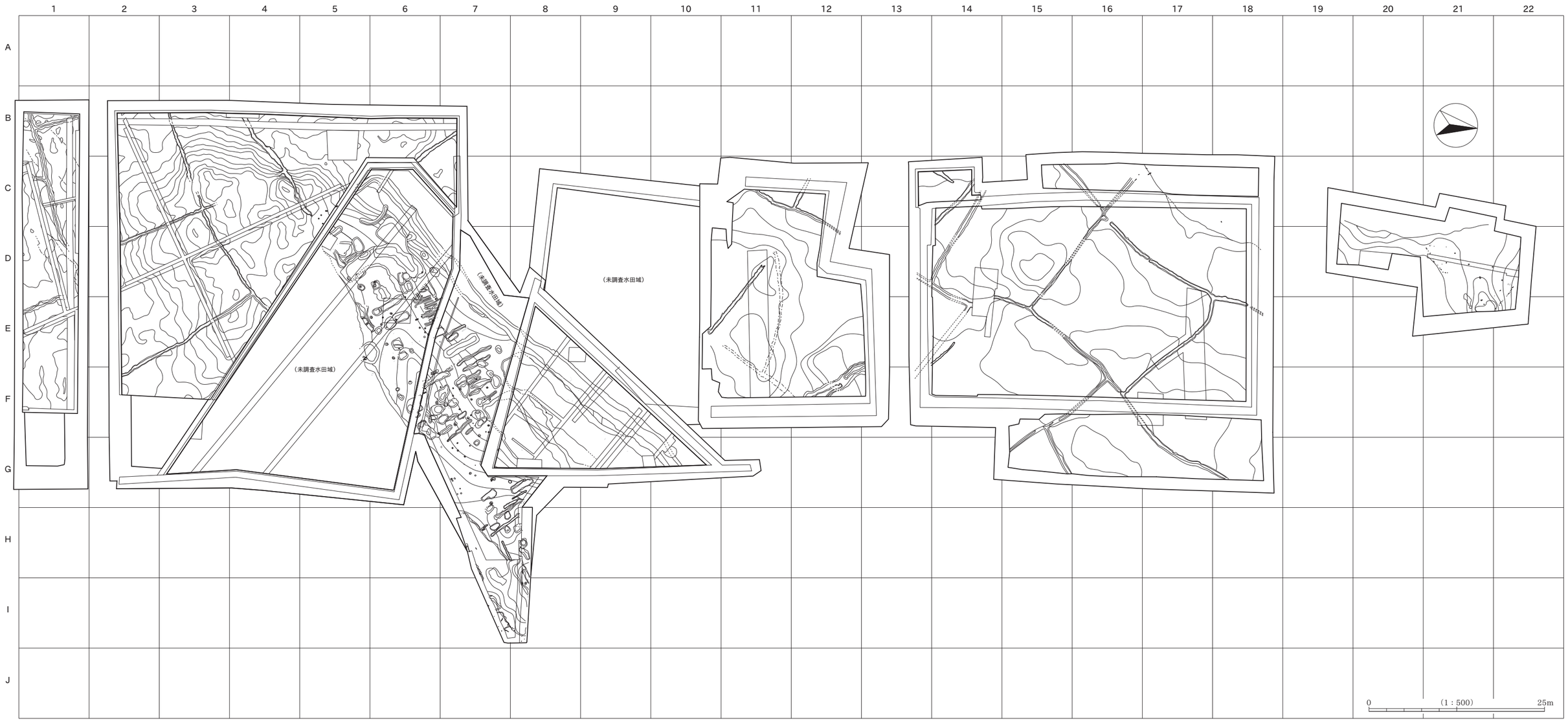
SD445
1　黒褐色シルト　多量のシルトブロック（φ30mm）と黒色土の混合土。粘性なし、しまりなし。
2　黒色シルト　シルトブロック（φ3mm）微量含む。上下層に比べ、シルトブロック少ない。粘性なし、しまりなし。
3　黒色シルト　少量のシルトブロック（φ30mm）と黒色土の混合土。粘性なし、しまりなし。

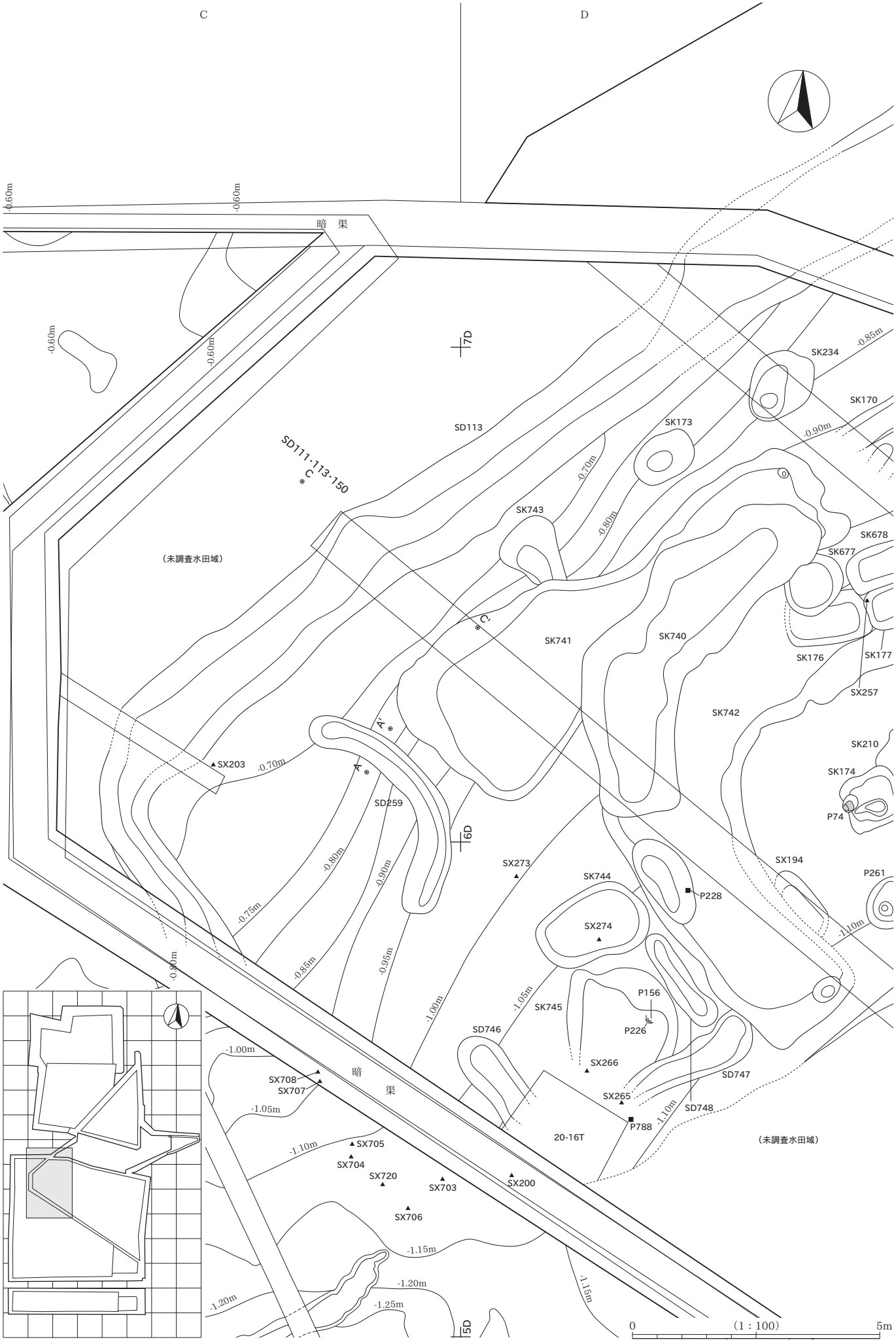
SD448
1　黒色土
2　灰オリーブ色シルト　灰白色粘質土ブロック（φ5～10mm）、黒色土少量混入。粘性あり、しまりあり。

SD597
1　青灰色シルト　茶褐色腐植土少量混入。粘性あり、しまりあり。

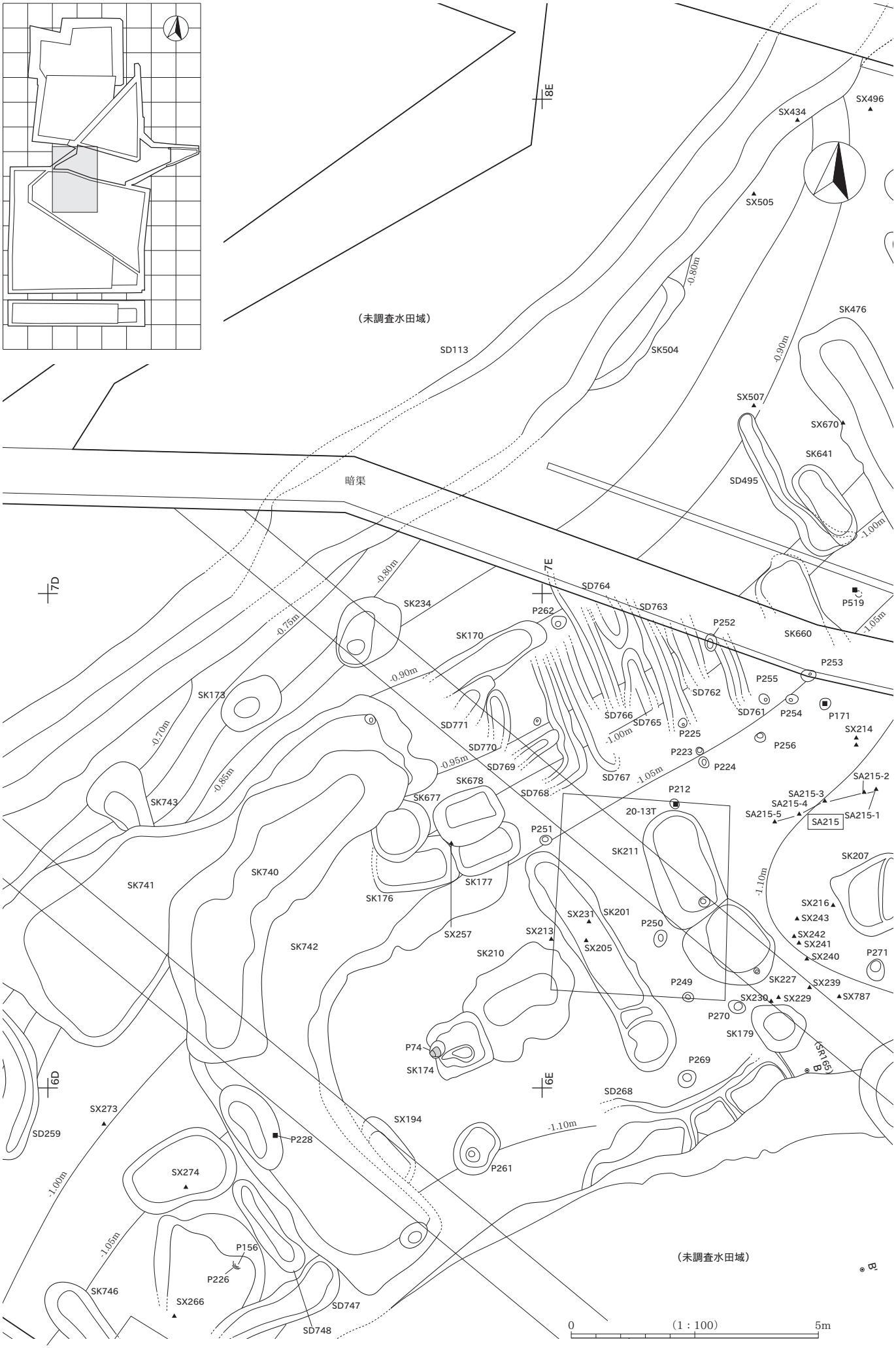
SD598
1　青灰色シルト　茶褐色腐植土少量混入。粘性あり、しまりあり。

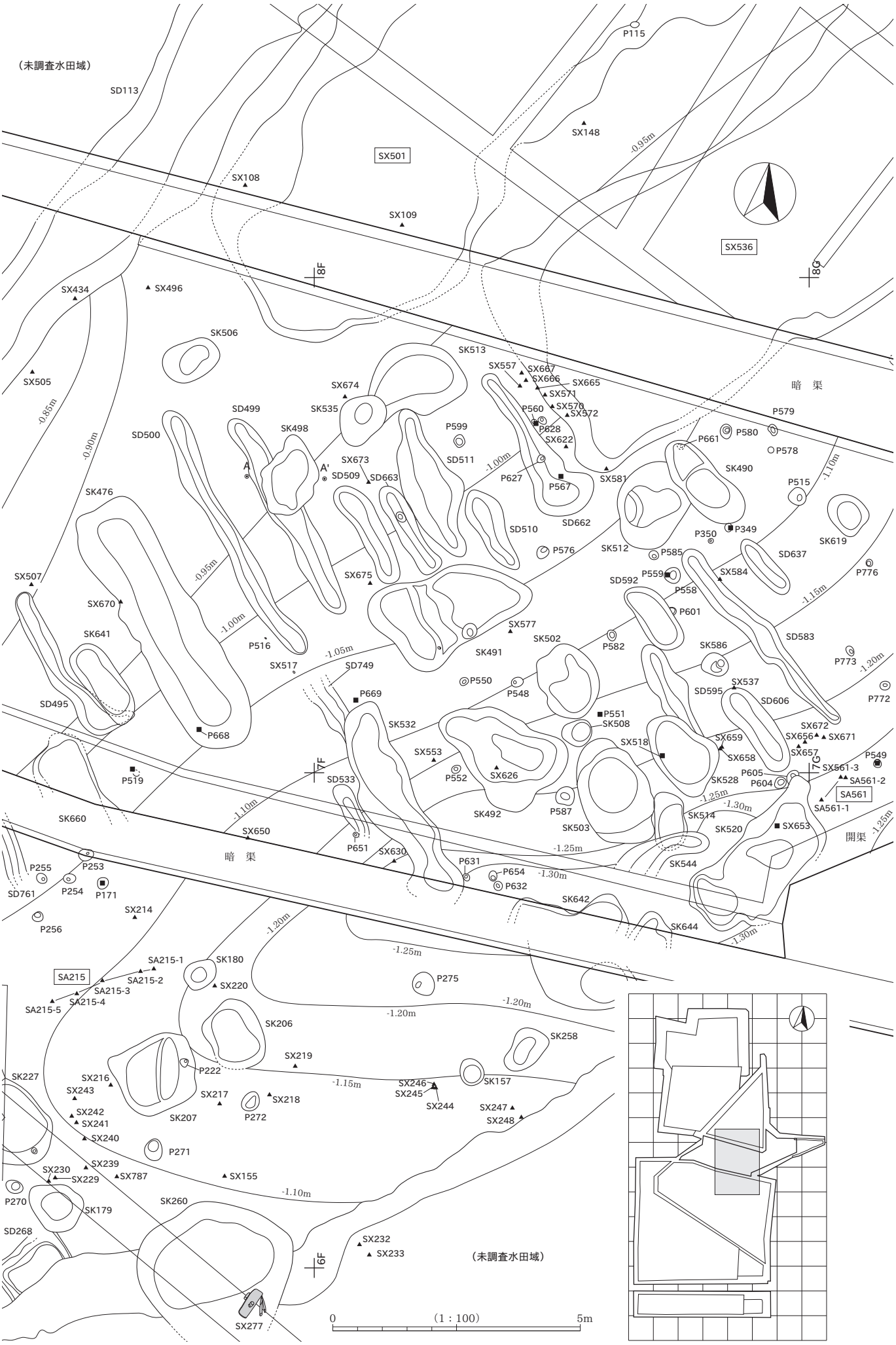
0　（1：40）　2m

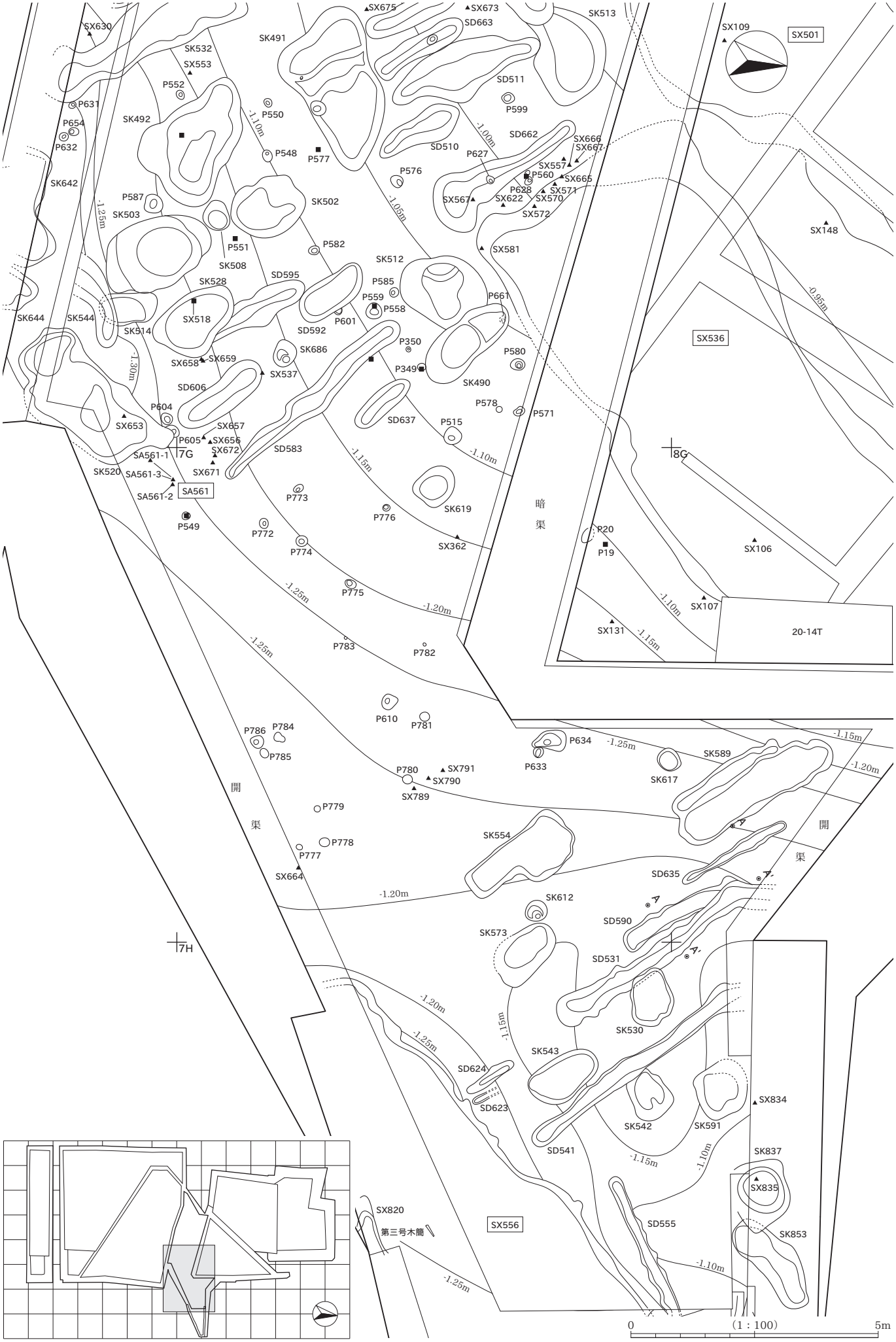

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
（未調査水田域）
（未調査水田域）
（未調査水田域）
0
（1：500）
25m


C
D
暗　渠
-0.60m
-0.60m
-0.60m
-0.60m
7D
SD113
SD111・113・150
C
C'
SK234
-0.85m
SK170
SK173
-0.90m
-0.70m
-0.80m
SK743
SK678
SK677
（未調査水田域）
SK741
SK740
SK176
SK177
SX257
SK742
A'
A
SX203
-0.70m
SD259
SK210
SK174
P74
6D
-0.80m
-0.90m
SX273
SX194
P261
SK744
P228
-0.75m
SX274
-1.10m
-0.85m
-0.95m
-0.90m
-1.05m
SK745
P156
-1.00m
SD746
P226
-1.00m
暗
渠
SX266
SD747
SX708
SX707
SX265
-1.05m
SD748
-1.10m
P788
20-16T
（未調査水田域）
-1.10m
SX705
SX704
SX720
SX703
SX200
SX706
-1.15m
-1.20m
-1.20m
-1.25m
-1.15m
5D
0
（1：100）
5m

Ⅻ層、SR1-3 層遺構分割図（2）

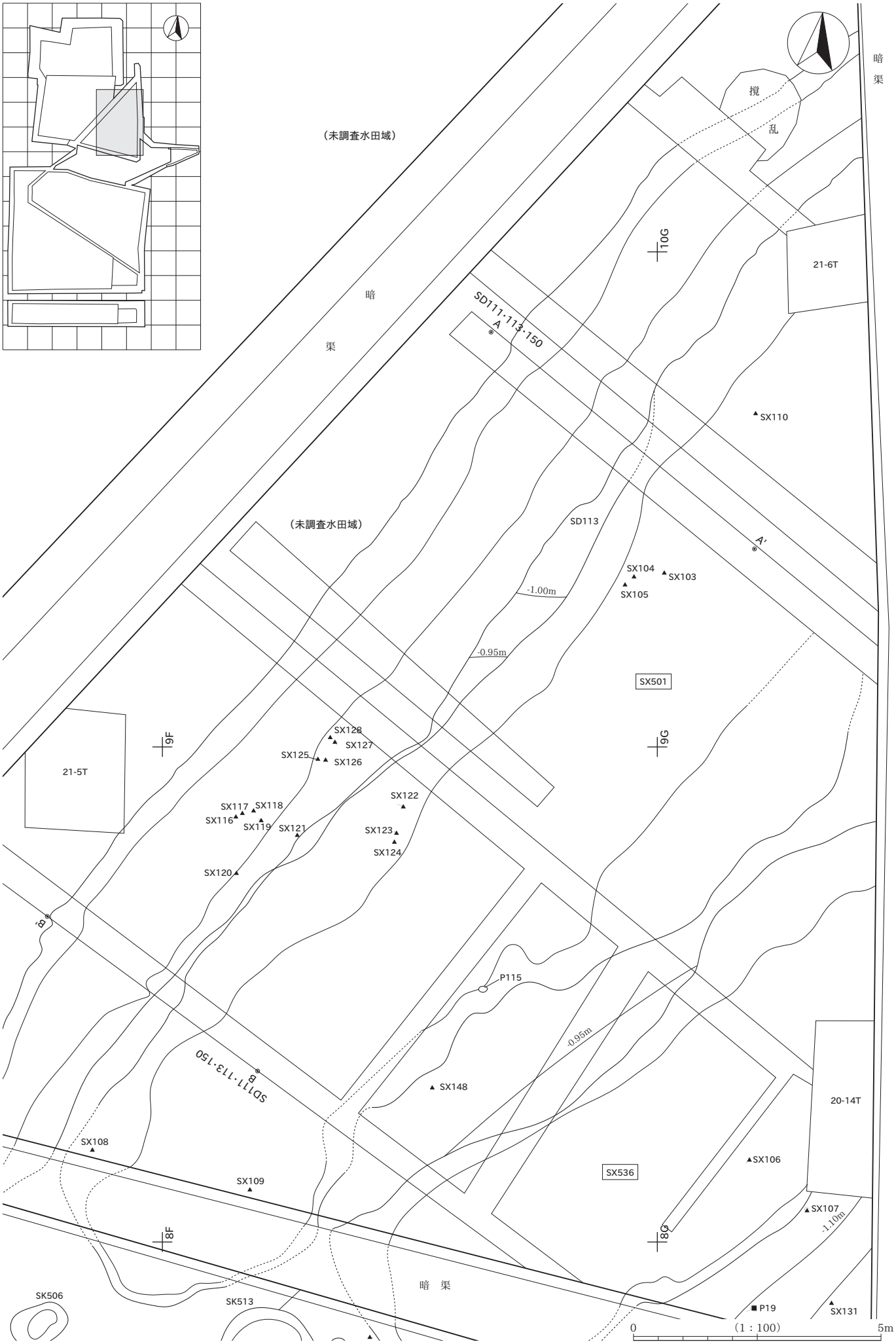



（未調査水田域）
SD113
SX501
SX108
SX109
SX148
P115
SX536
8F
8G
SX434
SX496
SK506
SX505
SK513
SX557
SX667
SX666
SX665
SX571
SX570
SX572
SX674
SK535
暗　渠
P579
P580
P578
P661
SD499
SK498
SD500
P599
SD511
SX673
SD509
SD663
P560
P628
SX622
P627
P567
SX581
SK490
P515
SK476
SD510
SD662
P350
P349
SK619
P576
SK512
P585
SD637
SX507
SX675
SD592
P559
SX584
P776
SX670
P558
P601
SK641
P516
SX577
SK502
P582
SD583
SX517
SD749
SK491
SK586
P773
P550
P548
SD595
SX537
P772
SD495
P669
SD606
P551
SK508
SX672
SK532
SX518
SX659
SX656
SX671
P668
SX553
SX658
SX657
P549
P519
SD533
P552
SX626
P605
SX561-3
P604
SX561-2
SK528
SA561
SK492
P587
SK514
SA561-1
SK660
SX650
SK503
SK520
SX653
開渠
P651
SX630
暗　渠
P631
SK544
P255
P253
P654
P632
SD761
P254
P171
SK642
SX214
P256
SK644
SA215-1
SK180
SA215
SA215-2
SX220
SA215-3
P275
SA215-4
SA215-5
SK206
SK258
SX219
SK227
SX216
P222
SX243
SX217
SX218
SX246
SK157
SX245
SX244
SX242
SK207
P272
SX247
SX241
SX248
SX240
P271
SX239
SX230
SX229
SX787
SX155
P270
SK179
SK260
SD268
SX232
SX233
6F
（未調査水田域）
SX277
0
（1：100）
5m
-0.85m
-0.90m
-0.95m
-1.00m
-1.05m
-1.10m
-1.15m
-1.20m
-1.25m
-1.30m

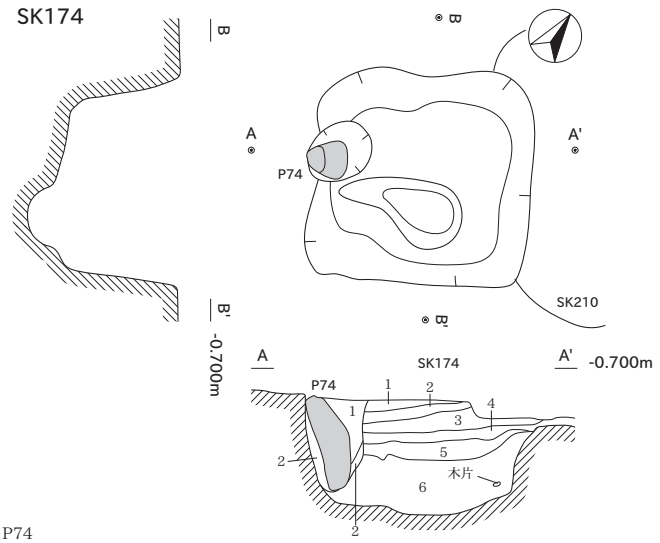

SX675
SX673
SD663
SK513
SX630
SK491
SX109
SX501
SK532
SX553
SD511
P552
P599
P631
P550
SK492
P654
P632
SD662
SX666
SX667
SD510
P627
P548
P577
SX557
P576
P560
SX665
SK642
P628
SX571
SX567
SX622
SX570
P587
SK502
SX572
SK503
SX148
P551
P582
SX581
SK508
SK512
SD595
P585
SK528
P559
P661
SK644
SK544
SX518
P558
SX536
SD592
P601
SK514
P350
P580
SK686
SX658
SX659
P349
SX537
SK490
SD606
P578
P604
P571
SX653
SD637
SX657
P515
P605
SX656
SD583
SA561-1
7G
SX672
8G
SK520
SA561-3
SX671
SA561
SK619
P773
暗
渠
P776
P549
P20
P772
SX362
P19
SX106
P774
P775
SX107
SX131
20-14T
P783
P782
P610
P781
P786
P784
P634
P785
P633
SK589
P780
SX791
SK617
SX790
SX789
開
渠
P779
SK554
P778
P777
SD635
SX664
SK612
SD590
SK573
SD531
7H
SK530
SK543
SD624
SX834
SD623
SK542
SK591
SD541
SK837
SX835
SX820
第三号木簡
SX556
SD555
SK853
0
(1：100)
5m

20-14T
SX131
-1.15m
-1.25m
P783
P782
P610
P781
P786
P784
P785
P634
P633
SK589
SK617
-1.20m
P780
SX791
SX790
SX789
開
渠
P779
P778
P777
SX664
SK554
SD635
SK612
SD590
SK573
SD531
SK530
SD624
SD623
SK543
SX834
SK542
SK591
SD541
SK837
SX835
SX820
SX556
第三号木簡
SD555
SK613
SK853
SX855
SD857
P856
SX816
P814
撹乱
SX859
P920
P854
SX858
-0.95m
SA812
SA812-3
SA812-2
SA812-1
SA812-4
SX860
SX813
SX822
SX801
SX800
SX821
SX799
SA823
SX862
SA823-13
SA823-5
SA823-4
SA823-14
SA823-3
SA823-2
SA823-6
SX798
SA823-10
SA823-7
SA823-1
SA823-8
SX797
SA823-9
SA823-12
SA823-11
SA841
SA841-2
SA841-1
SX842
SA841-3
H
I
7
8
0
(1 : 100)
5m

Ⅻ層、SR1-3 層遺構分割図（6）



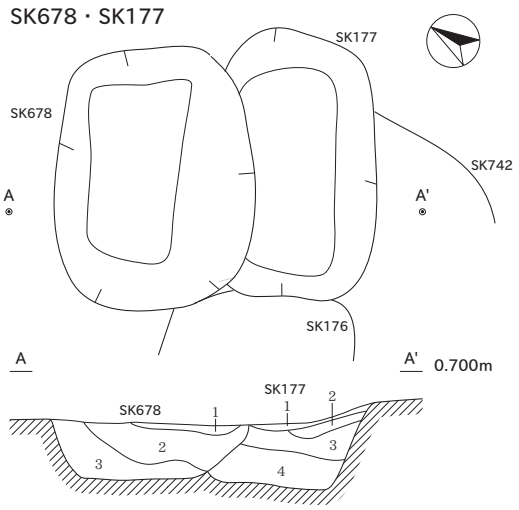
SK174



P74
1　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～30mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック（φ0.5mm）、黒色土ブロック微量含む。粘性あり、しまりあり。

SK174
1　灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
2　灰オリーブ色シルト　植物遺存体層と灰オリーブ色シルトブロック（φ5～10mm）の互層。SR1-2層。
3　灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック微量含む。粘性あり、しまりなし。SR1-2層。
4　腐植土層　SR1-2層。
5　黒色土
6　灰オリーブ色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ1～5mm）多量、黒色土ブロック（φ10～20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

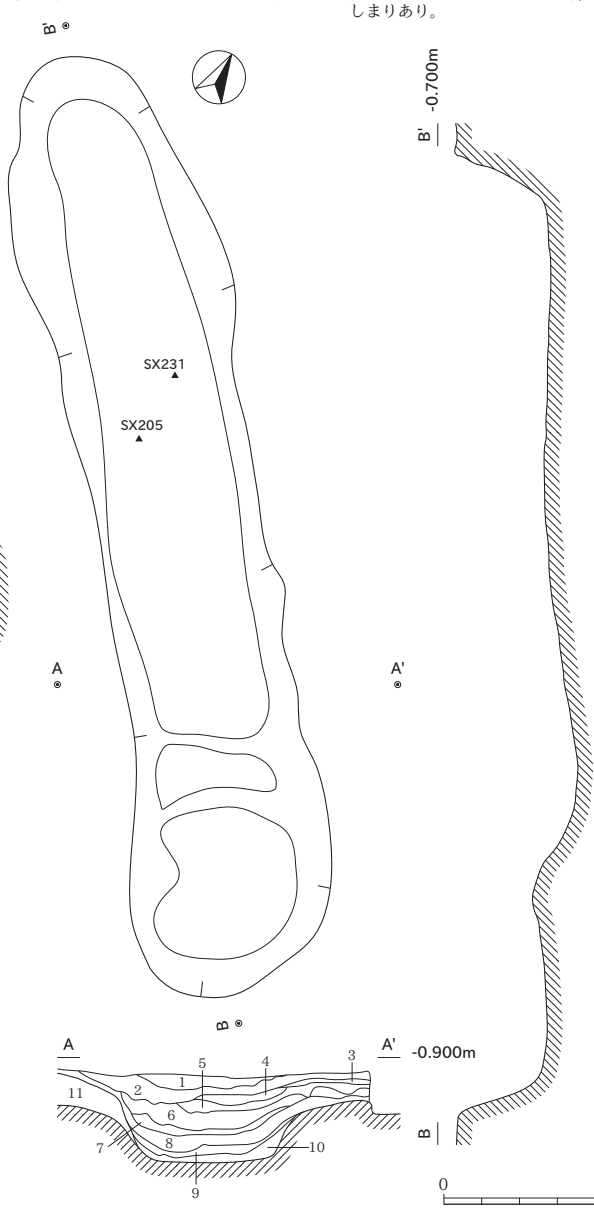
SK678・SK177



SK177
1　灰オリーブ色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ50～80mm）多量、灰色シルト少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ50mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
3　黒色土　植物遺存体多量含む。粘性あり、しまりあり。
4　黒色土　植物遺存体、灰オリーブ色シルトブロック（φ5～10mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

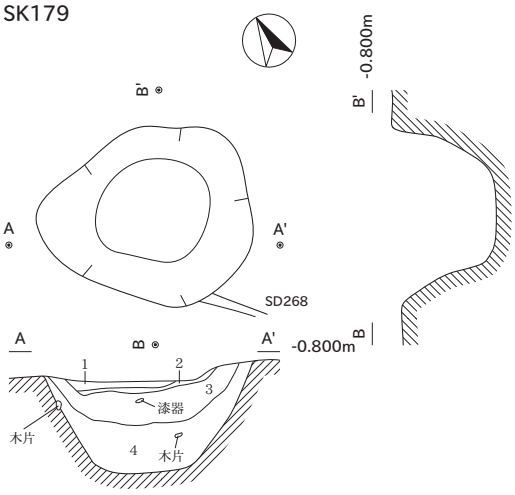
SK678
1　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ2～3mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～20mm）多量含む。植物遺存体（厚さ3mm）がラミナ状に多量混入。粘性あり、しまりあり。
3　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

SK201



SK201
1　灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
2　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～20mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
3　黒色土　灰オリーブ色シルト粒（φ3～6mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
4　灰オリーブ色シルト　黒色土粒少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
5　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
6　灰オリーブ色シルト　黒色土粒少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
7　黒褐色腐植土層　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～20mm）微量含む。粘性なし、しまりなし。SR1-2層。
8　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～30mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
9　黒褐色腐植土層　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～20mm）微量含む。粘性なし、しまりなし。
10　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～30mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
11　灰オリーブ色シルト　灰色シルトブロック（φ20mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-3層。

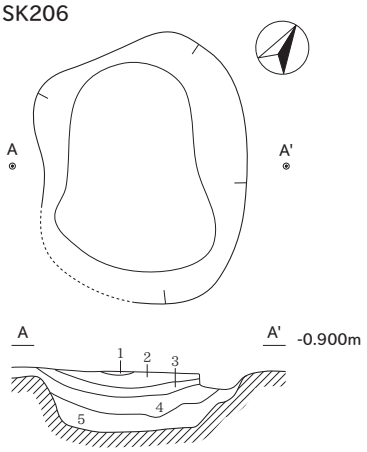
SK179



SK179
1　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ3～5mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒色土　灰オリーブ色シルト粒（φ3～6mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　灰色シルト　灰オリーブ色シルト（φ2～10mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
4　黒色土　植物遺存体多量含む。粘性あり、しまりあり。

0　（1：40）　2m

SK206

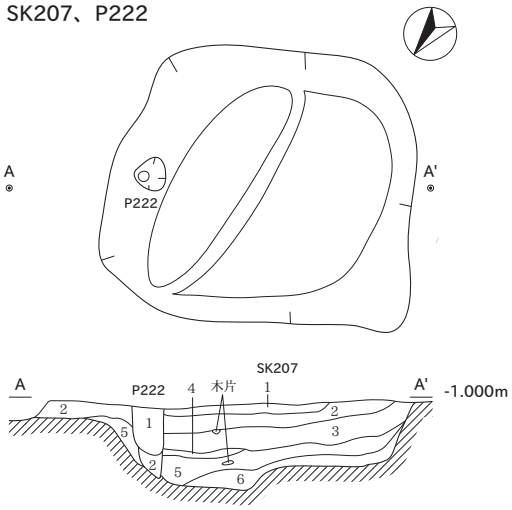


SK206
1　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
2　灰オリーブ色シルト　厚さ5～10mmの植物遺存体挟む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
3　黒色土　厚さ4mmの植物遺存体を少量挟む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
4　灰オリーブ色シルト　黒色土（厚さ2～3mm）がラミナ状に混入。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
5　腐植土層　植物遺存体（厚さ5mm）と灰オリーブ色シルト（厚さ5mm）がラミナ状に混入。粘性あり、しまりあり。

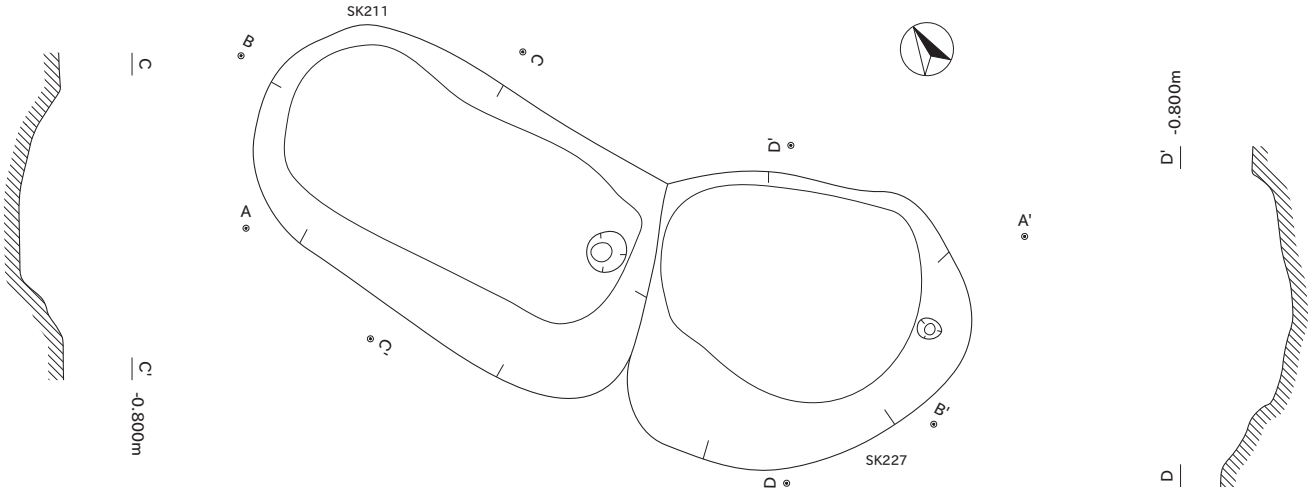
P222
1　灰色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～30mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰色シルト　植物遺存体少量含む。粘性なし、しまりなし。

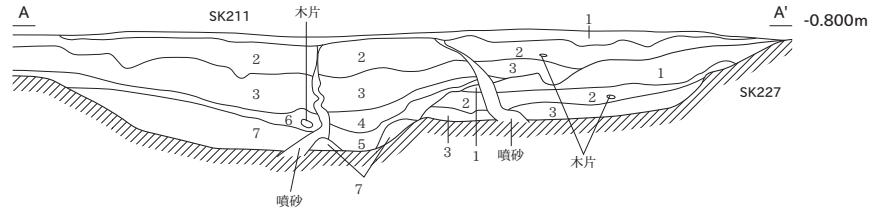
SK207
1　灰オリーブ色シルト　砂微量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
2　灰オリーブ色シルト　植物遺存体層。黒色土がラミナ状に混入。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
3　灰オリーブ色シルト　黒色土ブロック（φ5mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
4　黒色土　植物遺存体少量含む。粘性あり、しまりあり。
5　腐植土層
6　灰オリーブ色シルト　黒色土粒少量含む。粘性あり、しまりあり。

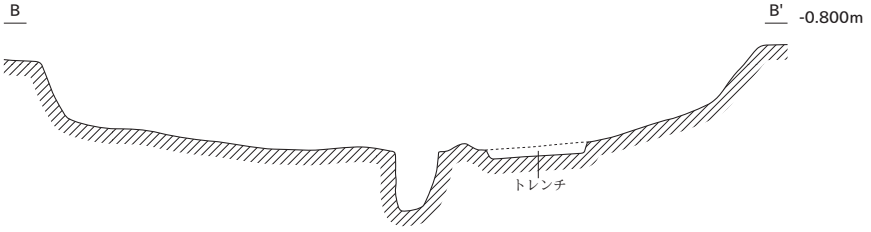
SK207、P222



SK211・227





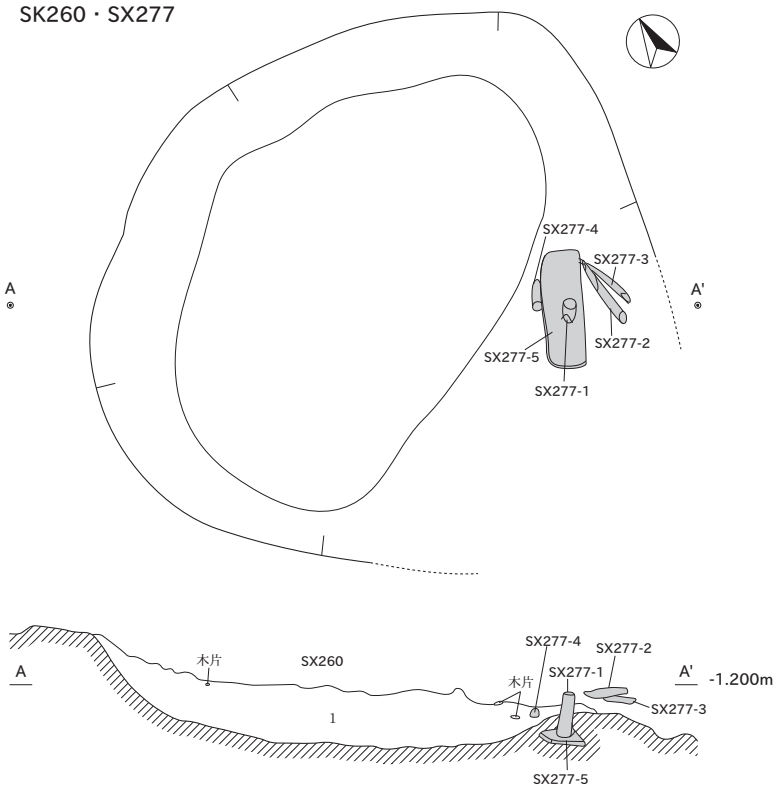


SK211
1　灰オリーブ色シルト　灰オリーブ色シルトブロック（φ10～20mm）多量、黒色土（φ5～10mm）少量、黒褐色シルト少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
2　黒色土　腐植土と灰オリーブ色シルトの互層。SR1-2層。
3　灰色シルト　植物遺存体、黒褐色土粒少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
4　黒色土　灰色粘質シルトがラミナ状に少量混入。粘性あり、しまりあり。
5　灰色シルト　黒褐色土粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
6　腐植土層
7　黒色土　灰色粘質シルトブロック（φ20～100mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。

SK227
1　灰色シルト　厚さ2～3mmの植物遺存体少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　黒色土　植物遺存体多量含む。粘性あり、しまりあり。
3　灰色シルト　厚さ5mmの植物遺存体多量含む。粘性あり、しまりあり。

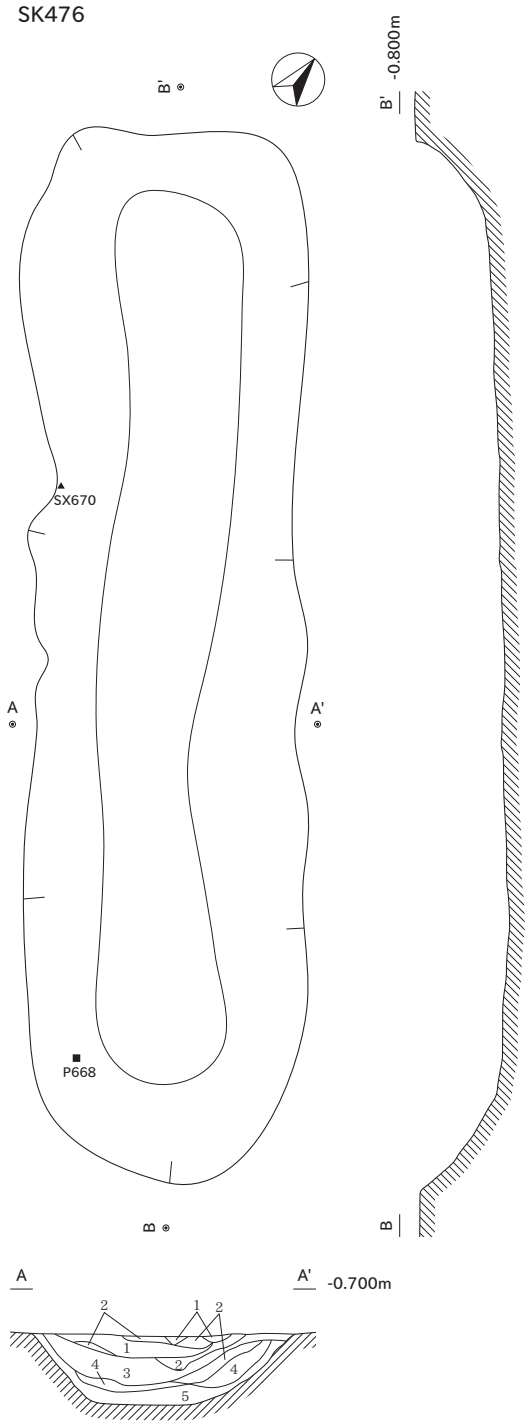
0　（1：40）　2m

SK260・SX277



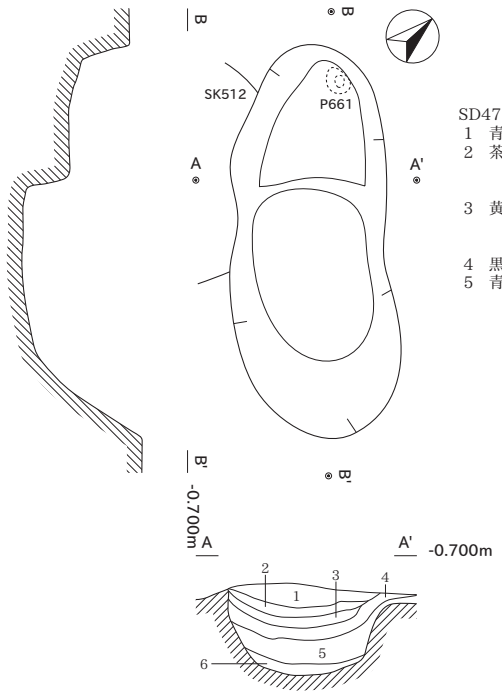
SK260
1　黒色腐植土　間に植物遺存体の薄層（厚さ3～10mm）を複数挟む。シルトブロック（φ1～10mm）微量含む。粘性なし、しまりなし。

SK476



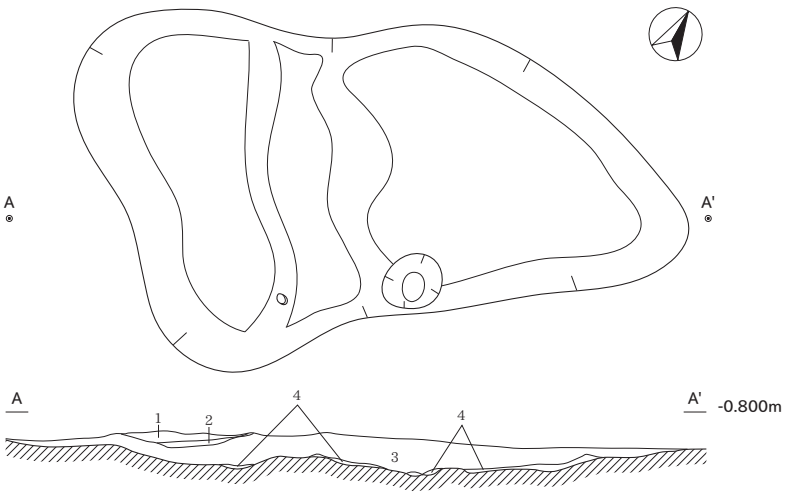
SD476
1　青灰色シルトブロック
2　茶褐色腐植土　ラミナ状に堆積。青灰色シルトブロック含む。粘性なし、しまりなし。
3　黄褐色腐植土　黄褐色腐植土と茶褐色腐植土がラミナ状に混入。青灰シルト混入。
4　黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。
5　青灰色シルト　粘性あり、しまりあり。

SK490



SK490
1　黒褐色シルト　粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
2　灰色土　黒色土ブロック（φ10～30mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
3　黒色シルト　粘性なし、しまりなし。SR1-2層。
4　腐植土層　線状に灰色土混入。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
5腐植土層　粘性あり。SR1-2層。
6　灰オリーブ色シルト　粘性あり、しまりあり。

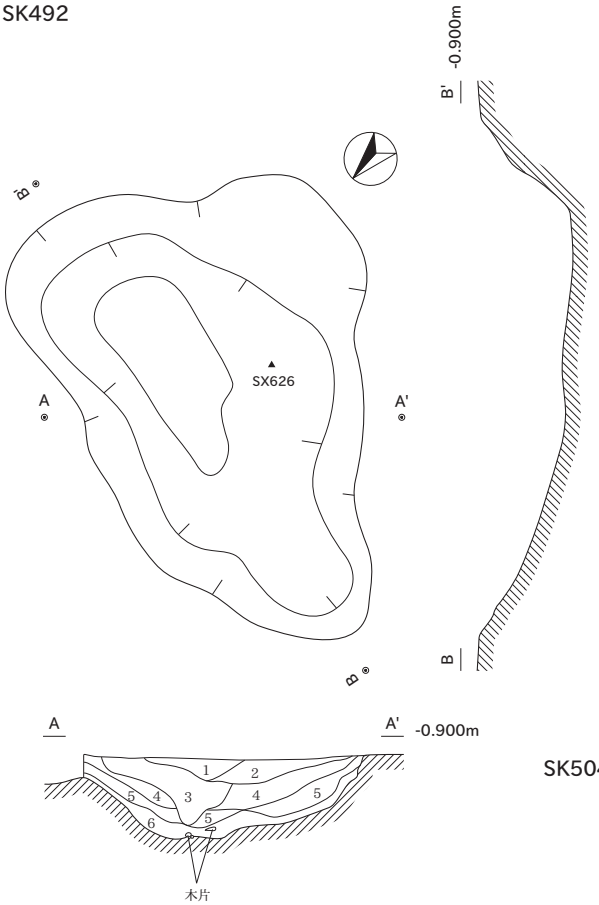
SK491



SK491
1　灰オリーブ色シルト　粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
2　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
3　灰オリーブ色シルト　植物遺存体（厚さ5～20mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
4　黒色土　粘性あり、しまりあり。

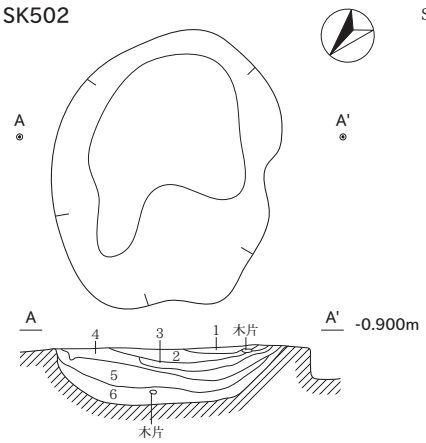
0　（1：40）　2m

SK492



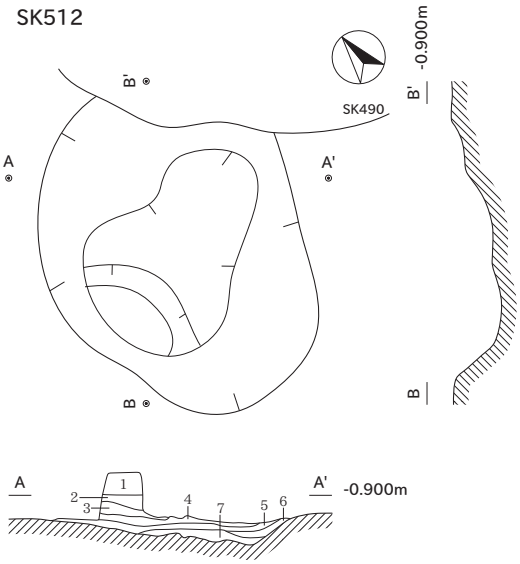
SK492
1　灰オリーブ色シルト
　灰色シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色シルト
　1層と同質だが薄い植物遺存体により分離される。
3　灰オリーブ色シルト
　灰オリーブ色シルトブロック（φ2～5mm）多量含む。網目状に植物遺存体層が入る。粘性あり、しまりなし。
4　腐植土層
　灰オリーブ色シルトブロック少量含む。粘性なし、しまりあり。
5　灰オリーブ色シルト
　灰色シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
6　腐植土層
　全体に緑色味が強い。しまりあり。

SK502



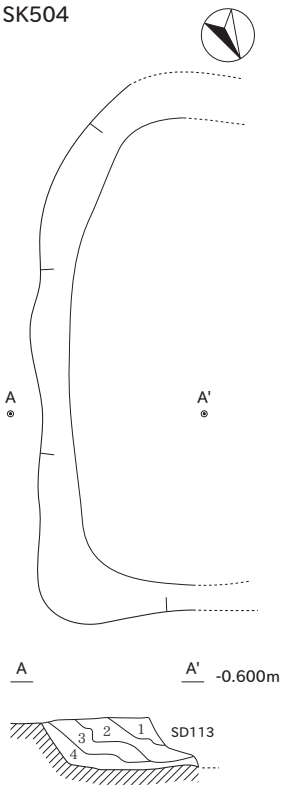
SK502
1　黒色土
　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色シルト
　黒色土ブロック（φ2～3mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　黒色土
　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
4　灰オリーブ色シルト
　厚さ2mmの植物遺存体多量含む。粘性あり、しまりあり。
5　黒色土
　灰オリーブ色シルトブロック（φ5～20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
6　腐植土層
　灰オリーブ色シルトがラミナ状に混入。粘性あり、しまりあり。

SK512



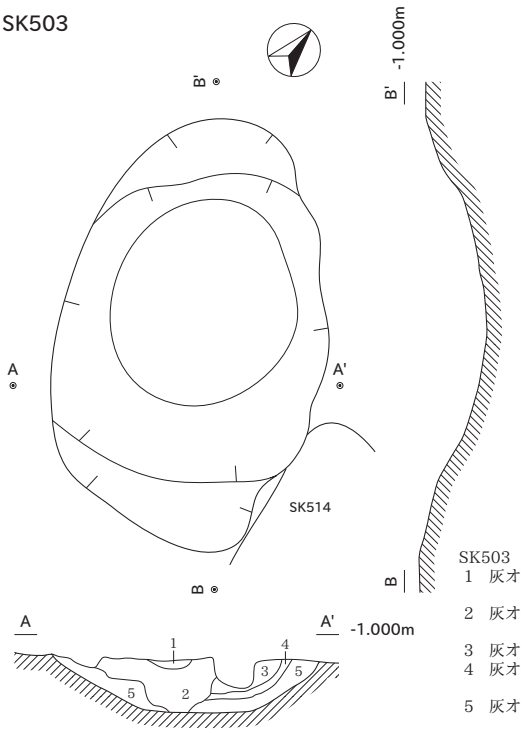
SK512
1　オリーブ黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ10mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色シルト　オリーブ黒色土（φ10～20mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　黒色土　灰多量含む。粘性なし、しまりあり。
4　灰オリーブ色シルト　黒色土粒（φ1mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
5　腐植土層
6　灰オリーブ色シルト　黒色土粒（φ1mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
7　黒色土　灰多量含む。粘性なし、しまりなし。

SK504



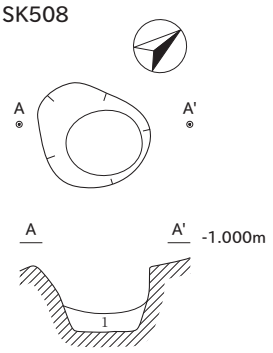
SK504
1　灰色土　粘性あり、しまりあり。
2　灰白色土　植物遺存体混入。粘性あり、しまりあり。
3　黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。
4　灰色土　黒色腐植土少量混入。粘性あり、しまりあり。

SK503



SK503
1　灰オリーブ色シルト　黒色土ブロック（φ5～10mm）多量含む。粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色シルト　黒色土ブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
3　灰オリーブ色シルト　植物遺存体と灰オリーブ色シルトの互層。
4　灰オリーブ色シルト　黒色土ブロック（φ5mm）微量含む。粘性あり、しまりあり。
5　灰オリーブ色シルト　植物遺存体と灰オリーブ色シルトの互層。

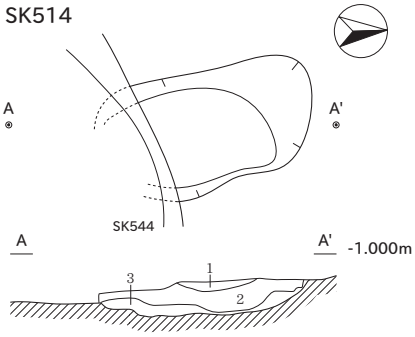
SK508



SK508
1　腐植土層　粘性なし、しまりなし。

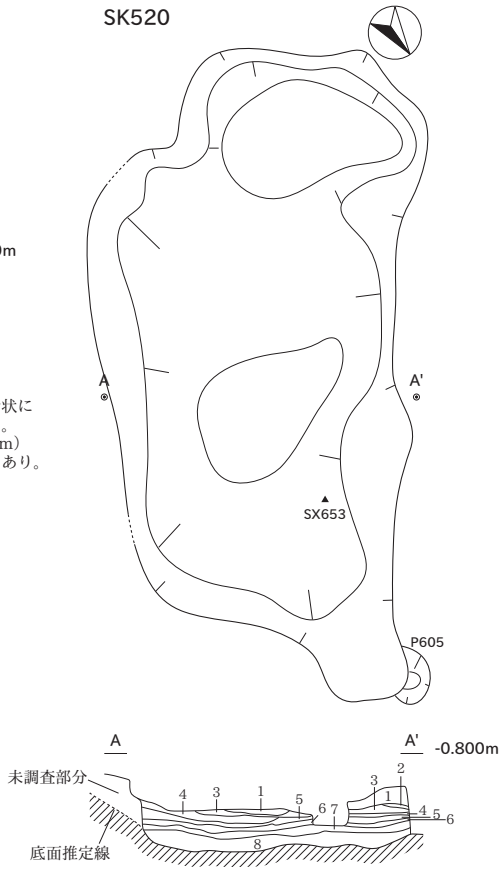
0　（1：40）　2m

SK514



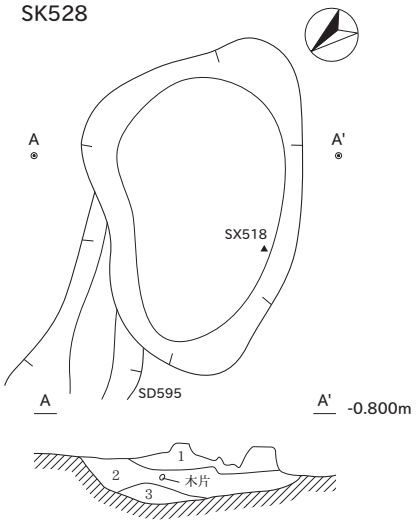
SK514
1　灰オリーブ色シルト　粘性あり、しまりあり。
2　腐植土層　灰オリーブ色シルトがラミナ状に混入。粘性なし、しまりなし。
3　灰オリーブ色シルト　黒色土ブロック（φ5～30mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

SK520



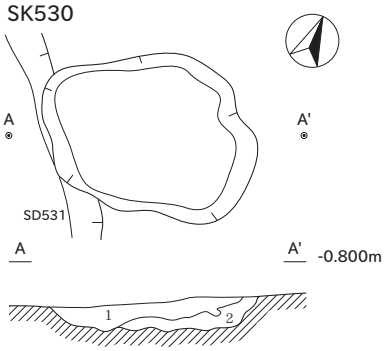
SK520
1　灰オリーブ色シルト　粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
2　黒色土　粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
3　灰白色土　植物遺存体少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
4　黒色土　灰白色シルトブロック（φ5～30mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
5　腐植土層　SR1-2層。
6　黒色土　灰オリーブ色シルトブロック（φ5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。SR1-2層。
7　腐植土層　SR1-2層。
8　黒色土　黒色土と腐植土（厚さ5mm）の互層。

SK528



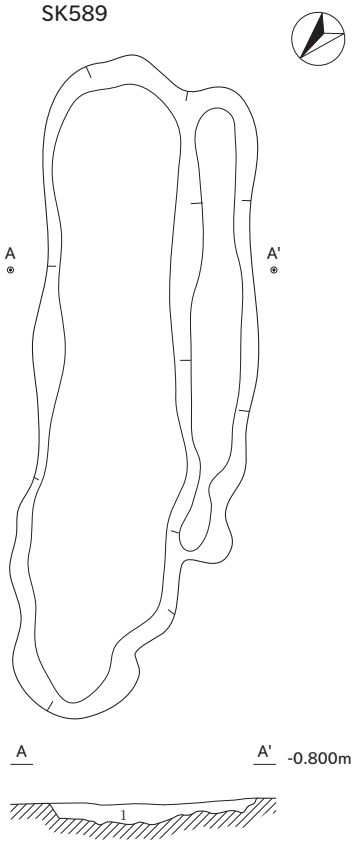
SK528
1　灰オリーブ色シルト
粘性あり、しまりあり。
2　灰オリーブ色シルト
植物遺存体、シルトブロック（φ3～10cm）少量含む。粘性なし、しまりあり。
3　灰オリーブ色シルト
黒色土ブロック（φ5～20cm）少量含む。粘性あり、しまりあり。

SK530



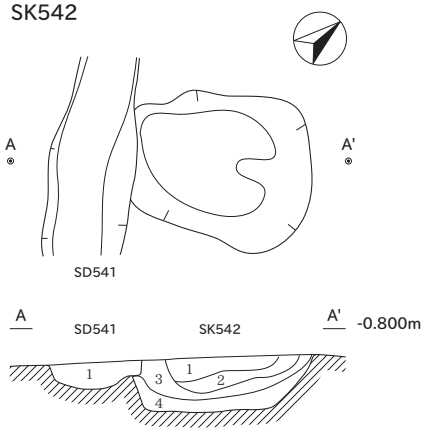
SK530
1　黒色腐植土　黄灰シルトブロック（φ1～5mm）微量含む。粘性なし、しまりなし。
2　黄灰色砂　黒色土微量含む。粘性なし、しまりなし。

SK589



SK589
1　黒褐色シルト　間にシルト質土の薄層挟む。粘性あり、しまりなし。

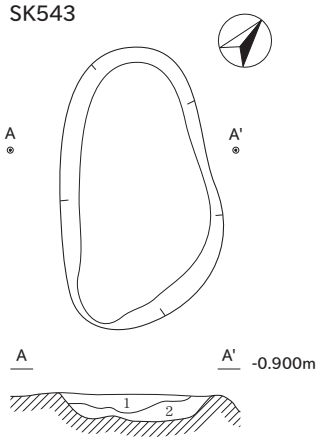
SK542



SD541
1　黒色腐植土　腐植土主体層。粘性なし、しまりなし。

SK542
1　黒褐色シルト　粘性あり、しまりなし。
2　オリーブ黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。
3　黒色シルト　オリーブ黒色シルトブロック（φ1～5mm）少量含む。粘性あり、しまりあり。
4　オリーブ黒色腐植土　腐植土主体層。シルトブロック（φ1～5mm）微量含む。粘性なし、しまりなし。

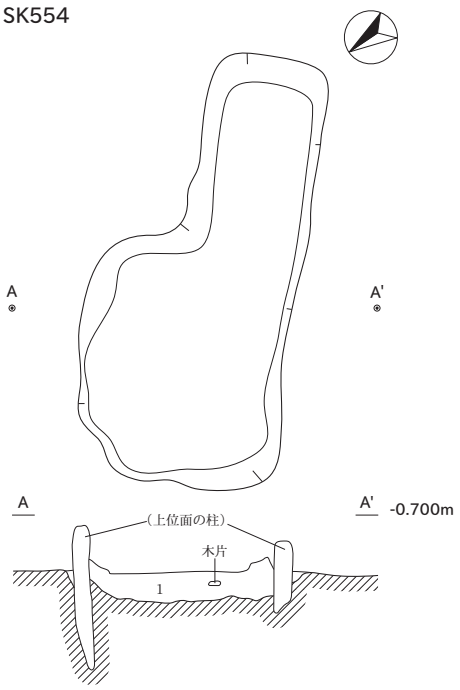
SK543



SK543
1　黒褐色シルト
オリーブ黒色シルトブロック（φ1～10mm）少量含む。粘性あり、しまりなし。
2　黒色腐植土
オリーブ黒色シルトブロック（φ1～10mm）微量含む。粘性なし、しまりなし。

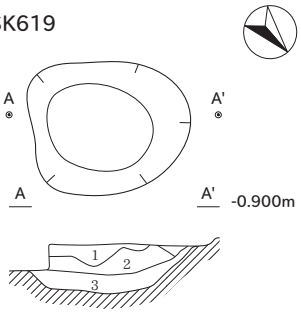
0　（1：40）　2m

SK554



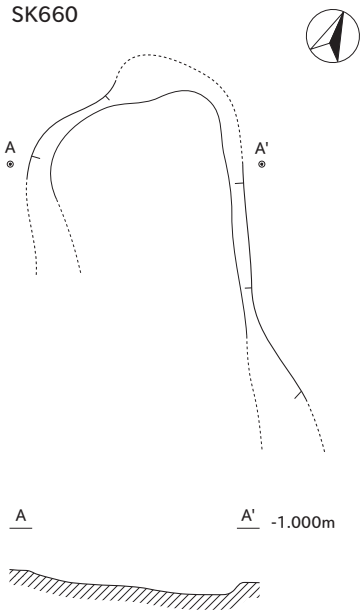
SK554
1　黒色腐植土　腐植土主体層。オリーブ黒色シルトブロック（φ1～10mm）微量含む。粘性なし、しまりなし。

SK619

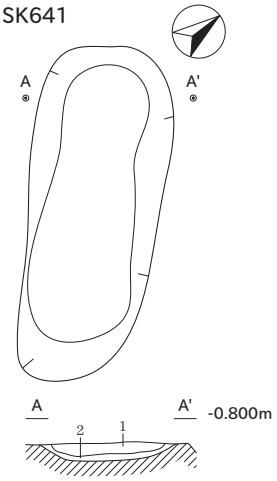


SK619
1　青灰色シルト　粘性あり、しまりあり。
2　黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。
3　褐灰色シルト　植物遺存体含む。粘性あり、しまりあり。

SK660

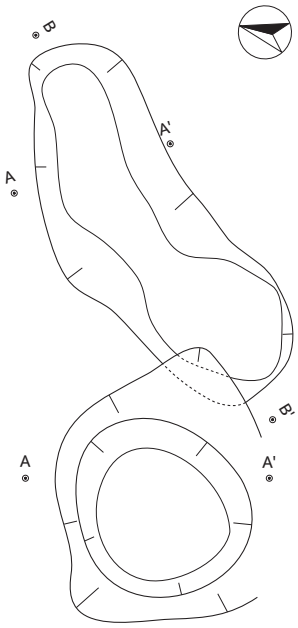


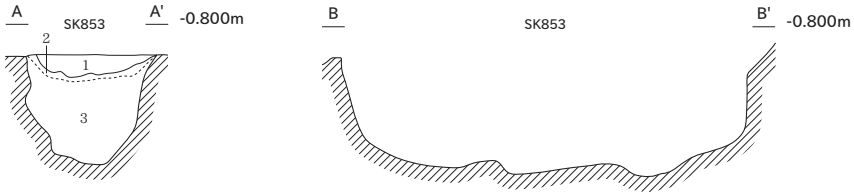
SK641



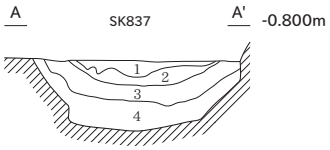
SK641
1　青灰色シルト　粘性あり、しまりあり。
2　茶褐色腐植土　粘性なし、しまりなし。

SK837・SK853





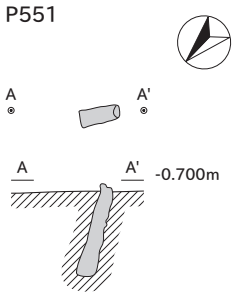
SK853
1　黒褐色腐植土　灰色シルト・砂少量混入。粘性なし、しまりなし。
2　オリーブ黒色シルト　砂・褐色腐植土少量混入。粘性なし、しまりあり。
3　黒褐色腐植土　蓮花芯・炭化米・虫多量に含む。粘性なし、しまりなし。



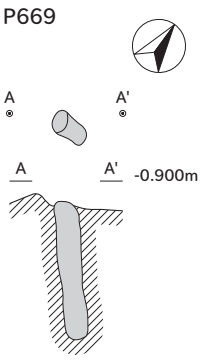
SK837
1　灰色シルト　黒色腐植土・灰（7.5Y4/1）シルトがブロック状に混入。粘性あり、しまりあり。
2　オリーブ黒色腐植土　褐色植物ラミナ状に含む。粘性なし、しまりなし。
3　灰色シルト　黒色腐植土中量、灰（7.5Y4/1）シルト少量、ブロック状に混入。粘性あり、しまりあり。
4　灰オリーブ色植物腐植土　樹皮状のものラミナ状に重なる。黒色腐植土・灰がブロック状に入る。粘性なし、しまりあり。

0　（1：40）　2m

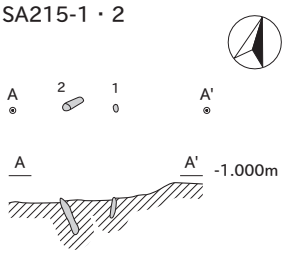
P551



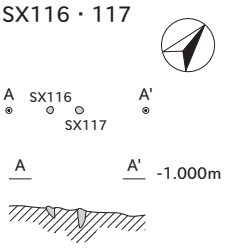
P669



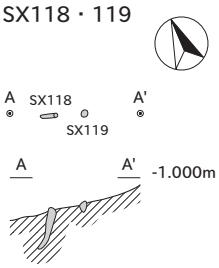
SA215-1・2



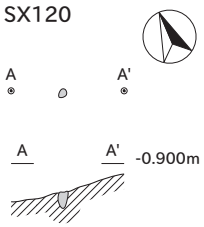
SX116・117



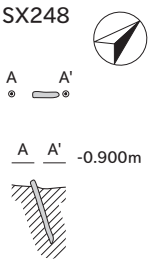
SX118・119



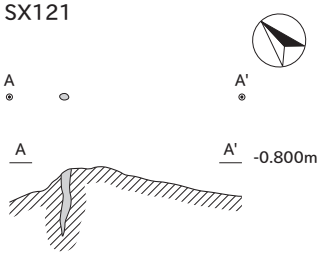
SX120



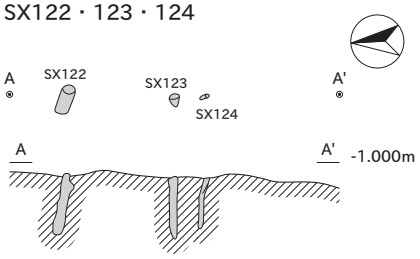
SX248



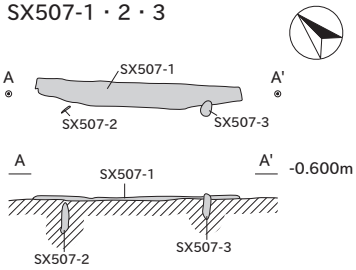
SX121



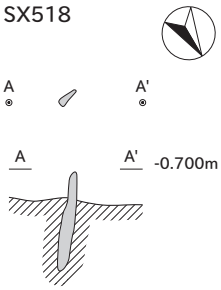
SX122・123・124



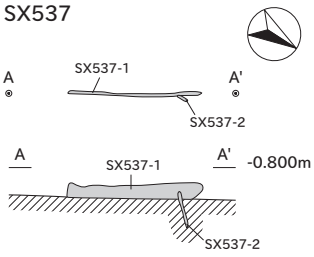
SX507-1・2・3



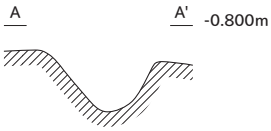
SX518



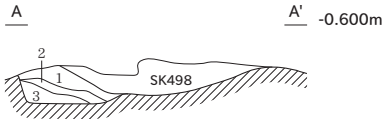
SX537



SD259

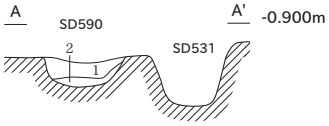


SD499



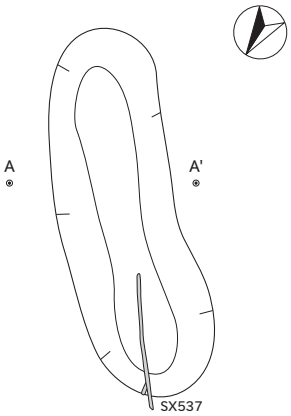
SD499
1　青灰色シルト　粘性あり、しまりあり。
2　黒色腐植土　　青灰色シルトブロック少量含む。
　　粘性なし、しまりなし。
3　青灰色シルト　粘性あり、しまりあり。

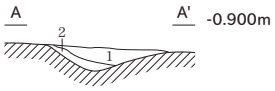
SD531・590



SD590
1　黒褐色シルト　一部はラミナ状に堆積。
　　粘性あり、しまりなし。
2　黒褐色シルト　オリーブ黒シルトブロック
　　（φ1～5mm）少量含む。
　　粘性あり、しまりなし。

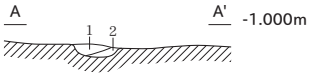
SD606





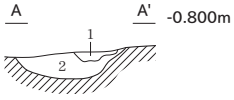
SD606
1　灰オリーブ色シルト　2層との間に厚さ2mmの
　　植物遺存体挟む。
2　灰オリーブ色シルト　植物遺存体やや多い。

SD635



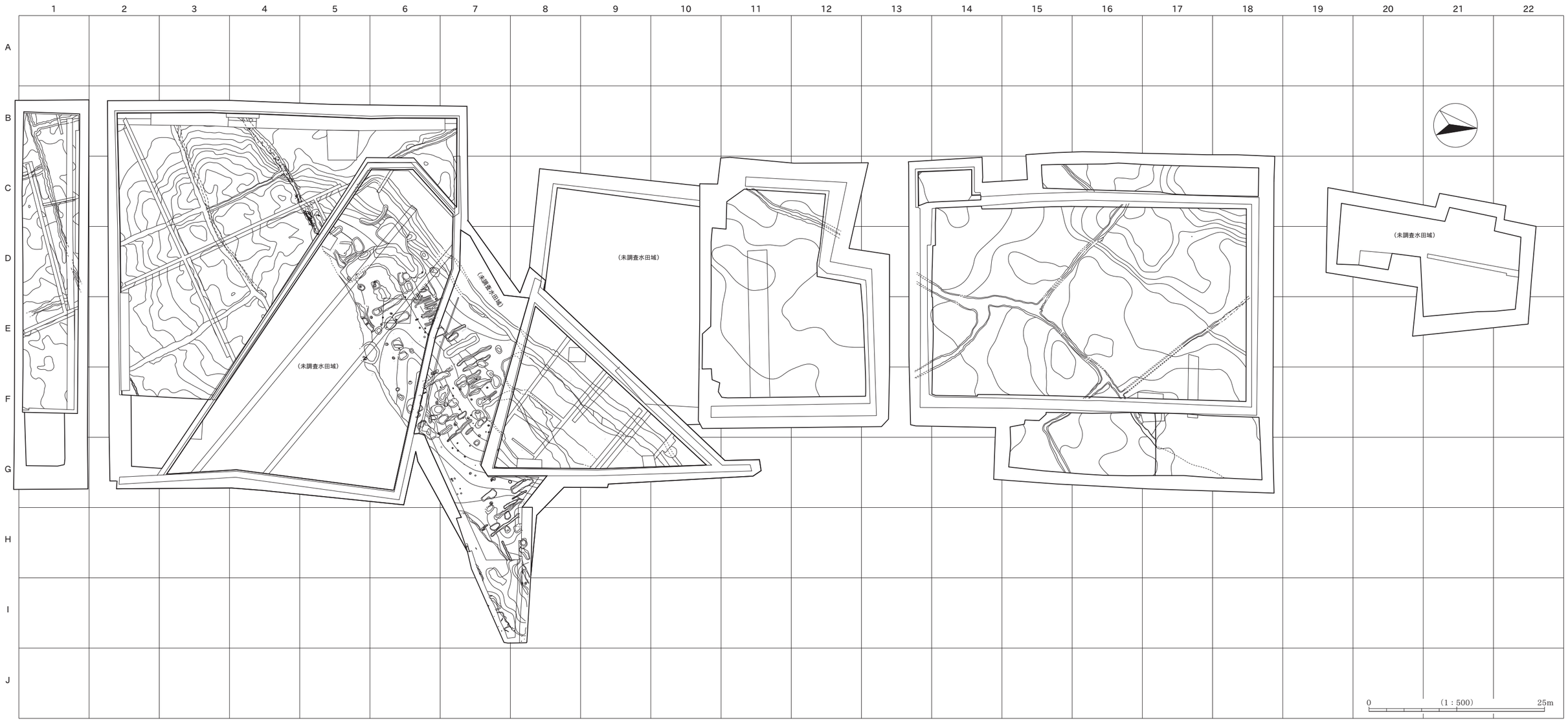
SD635
1　黄灰色シルト　粘性あり、しまりなし。
2　黒色シルト　　粘性あり、しまりなし。

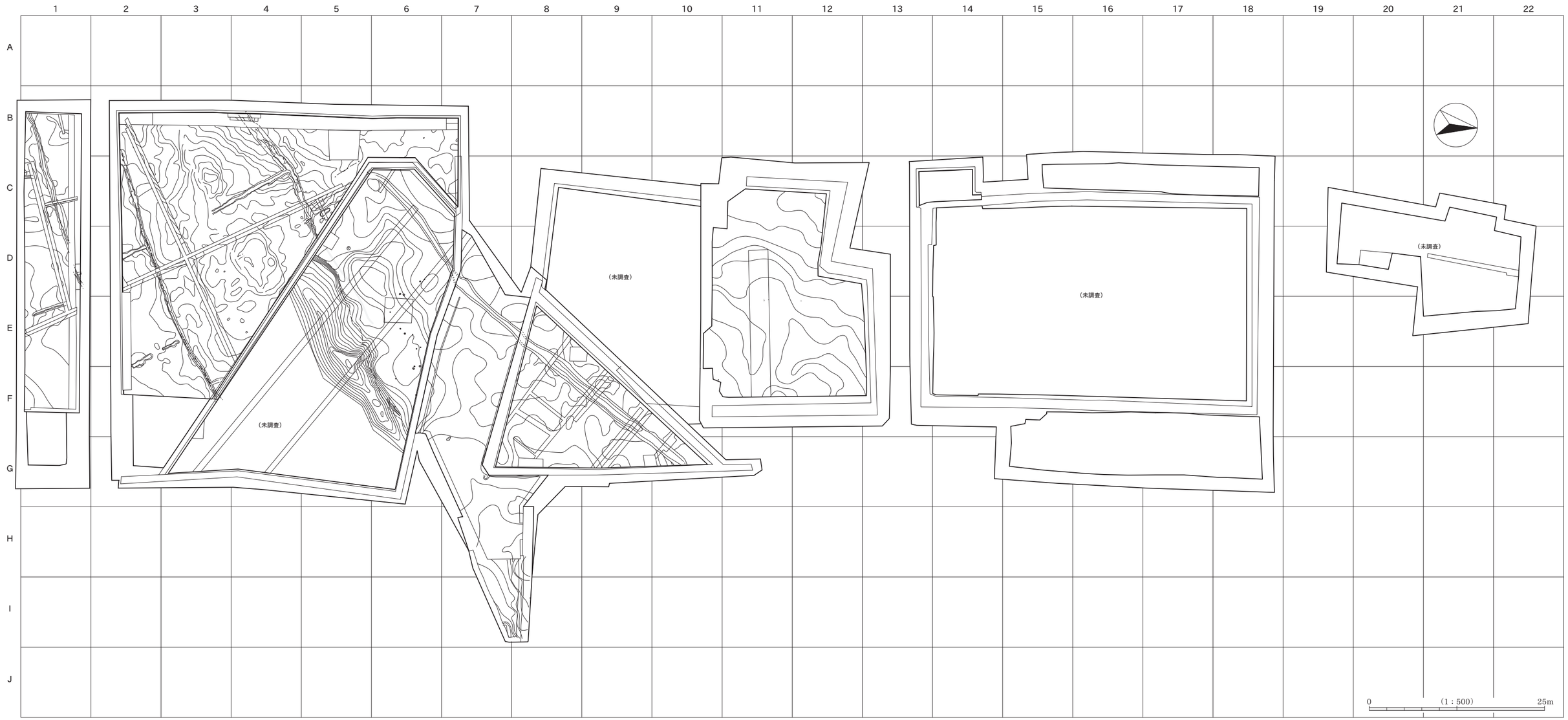
SD857



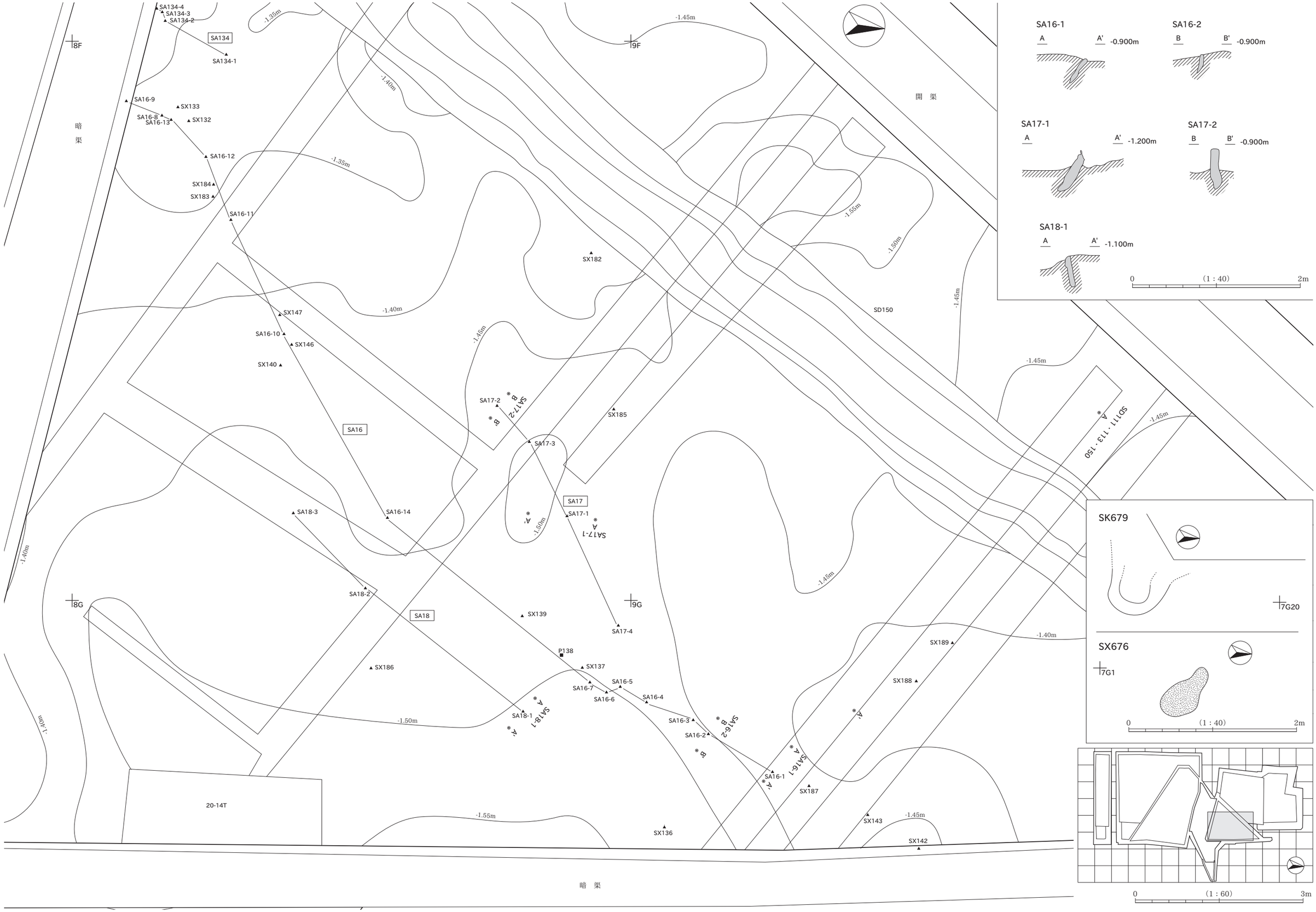
SD857
1　灰色シルト　黒色腐植土多く混入。粘性あり、しまりなし。
2　黒色腐植土　粘性なし、しまりなし。

0　（1：40）　2m


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
（未調査水田域）
（未調査水田域）
（未調査水田域）
（未調査水田域）
（未調査水田域）
0
（1：500）
25m

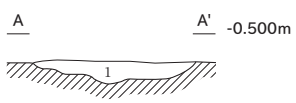

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
（未調査）
（未調査）
（未調査）
（未調査）
0
（1：500）
25m

SX320
SX321
P282
P281
P316
P283
P303
SX311
P302
P308
P310
P314
20-13T
P319
P318
P285
P317
SX298
SX299
SX300
SX304
SX313
P284
SX296
P306
SX295
SX297
SD279
SX312
SX290
SX305
SX291
SX309
SX287
SX289
SX294
SX293-A
SX293-B
SX292
SX315
6E
6F
SX328
SX329
SX326
SX327
SA280
SX278
SX288
P286
P21
-1.35m
-1.30m
-1.40m
-1.45m
-1.50m
-1.55m
-1.60m
-1.70m
-1.80m
-1.90m
-1.95m
-2.00m
-2.10m
-2.15m
0
(1 : 60)
3m


SA134-4
SA134-3
SA134-2
SA134
SA134-1
8F
9F
暗 渠
SA16-9
SX133
SA16-8
SA16-13
SX132
SA16-12
SX184
SX183
SA16-11
SX182
SX147
SA16-10
SX146
SX140
SA16
SA17-2
SX185
SA17-3
SA17
SA17-1
SA18-3
SA16-14
SA18-2
SA18
SX139
SA17-4
8G
9G
P138
SX137
SX186
SA16-7
SA16-6
SA16-5
SA16-4
SA18-1
SA16-3
SA16-2
SA16-1
SX187
SX136
20-14T
SX143
SX142
SX189
SX188
SD150
SD111・113・150
開 渠
暗 渠
-1.35m
-1.40m
-1.45m
-1.50m
-1.55m
SA16-1
A
A'
-0.900m
SA16-2
B
B'
-0.900m
SA17-1
A
A'
-1.200m
SA17-2
B
B'
-0.900m
SA18-1
A
A'
-1.100m
0
(1 : 40)
2m
SK679
7G20
SX676
7G1
0
(1 : 40)
2m
0
(1 : 60)
3m

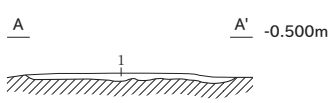
畦畔216
畦畔206
畦畔205
畦畔207
畦畔211
畦畔212
畦畔213
畦畔214
畦畔215
畦畔208
畦畔209
畦畔210
畦畔201
畦畔202
畦畔203
畦畔204
水田D
水田E
水田G
水田C
水田F
水口
SD700
SD172
SD111
SD114
SD195
SD112
SD166
SD598
SD618
SD339
SD330
SD371
SD403
SK75
SK85
SK86
SK72
SK167
SK168
SK169
SK164
SK65
SK69
SK235
SK236
SK400
SK399
SK406
SK647
SK335
SK425
SK410
SK473
SK333
SK334
SK429
SK381
SK534
SK547
SK94
SK29
SK70
SK208
SK209
SK5
SK267
20-16T
20-15T
樹根列1-24
樹根列1-23
樹根列1-22
樹根列1-21
樹根列1-20
樹根列1-19
樹根列1-18
樹根列1-17
樹根列1-16
樹根列1-15
1-14
1-13
P83
P81
P82
P74
P193
P64
P159
開渠
SD700
C C' -0.400m
B B' -0.400m
A A' -0.400m
SD700
1 褐色砂 2枚目の水田を覆う砂（Ⅸ層）と同質。粘性なし。しまりなし。
0 (1：40) 2m
0 (1：200) 10m
水口
A A' -0.400m
水口
1 褐色砂 2枚目の水田を覆う砂（Ⅸ層）と同質。粘性なし。しまりなし。
0 (1：40) 2m

SD702



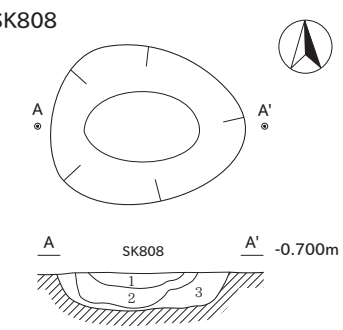
SD702
1　明黄褐色シルト　雲母少量含む。底面では青灰色シルトが帯状に堆積する。
粘性なし。しまりなし。

SD701



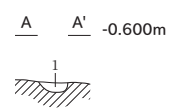
SD701
1　明黄褐色シルト　雲母少量含む。粘性なし。しまりなし。

SK808



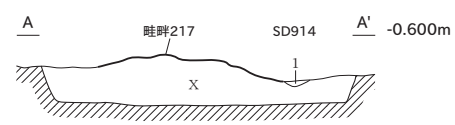
SK808
1　黄色砂質シルト　粘性弱い、しまりあり。
2　青灰色砂質シルト　1層より砂質の割合が多くなり、
砂粒粗い。粘性弱い、しまりあり。
3　灰色シルト　X層より黄色砂多く含む。
粘性あり、しまりあり。

SD806



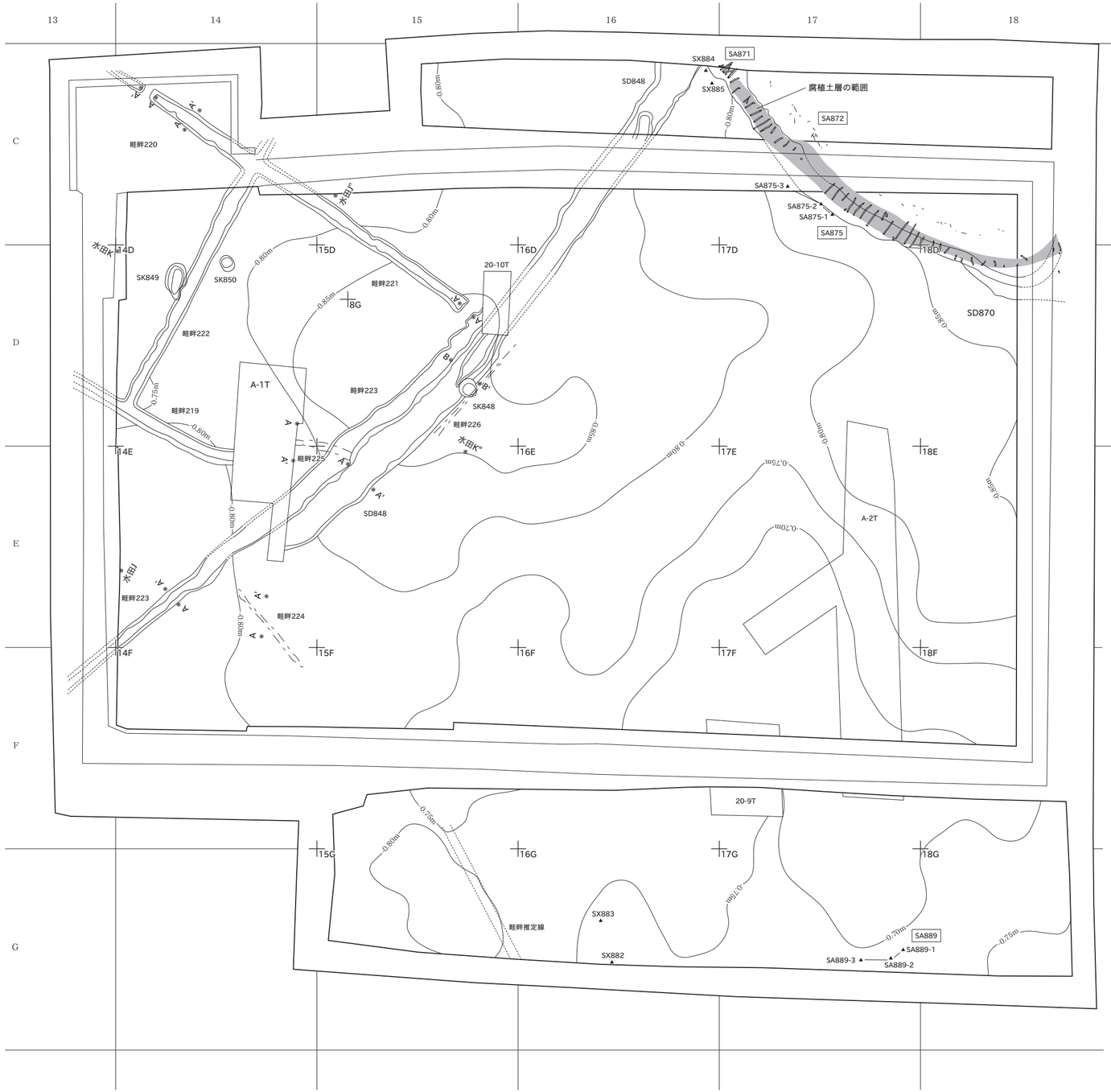
SD806
1　灰白色砂　IX層ベース。上位に灰白色砂、
下位に青灰色シルトが堆積。
砂質は粗く、金雲母が目立つ。

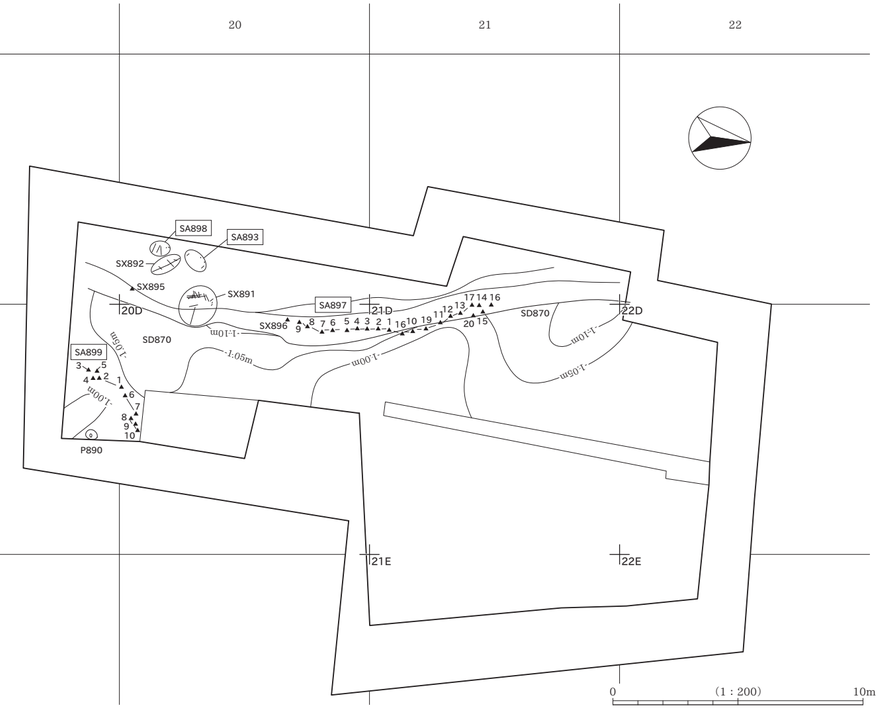
SD914



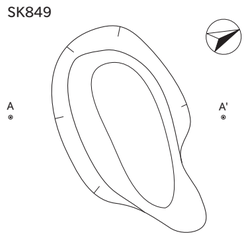
SD914
1　明黄褐色砂　IX層土。クルミ・細かな流木が混入。

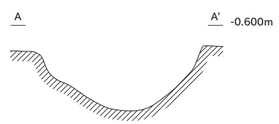
0　（1：40）　2m



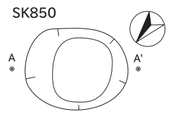


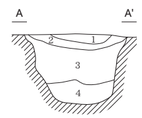
SK849





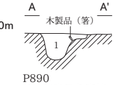
SK850





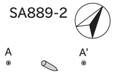
SK850
1　黄灰色シルト　粘性・しまり強い。
　　灰色（N4/）シルトブロックをまばらに含む。
2　黄灰色シルト　1層土と近似するが、1層より色調が暗い。
　　1層同様に、粘性・しまり強い。
3　灰色シルト　2層土より砂質がやや強い。2層よりしまりが弱い。
4　灰色シルト　3層土と近似するが、3層より色調が暗い。
　　3層同様にしまり弱い。
　　直径20～30mmの炭化物、栗を含む。

P890



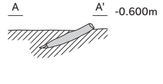
P890
1　暗青灰色腐植土　青灰色砂・青灰色シルトがブロック状に混入。粘性あり、しまりあり。箸出土。

SA889-2

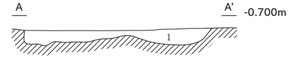


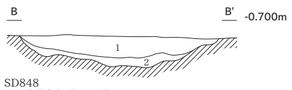
SX882

SX883



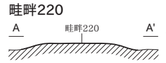
SD848



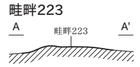


SD848
1　浅黄色粗砂　IX層土。
2　浅黄色粗砂　1層土と近似するが、直径20～50mmの灰色粘土ブロックをまばらに含む。

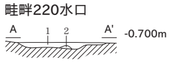
畦畔220



畦畔223

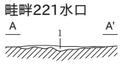


畦畔220水口



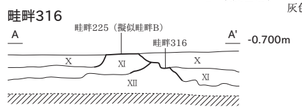
畦畔220水口
1　浅黄色粗砂　IX層土。粘性・しまりなし。
2　浅黄色粗砂　IX層土が主体。部分的にシルト層が互層をなす。

畦畔221水口

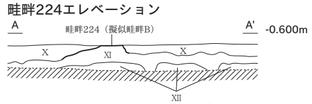


畦畔221水口
1　浅黄色粗砂　IX層土。粘性・しまりなし。

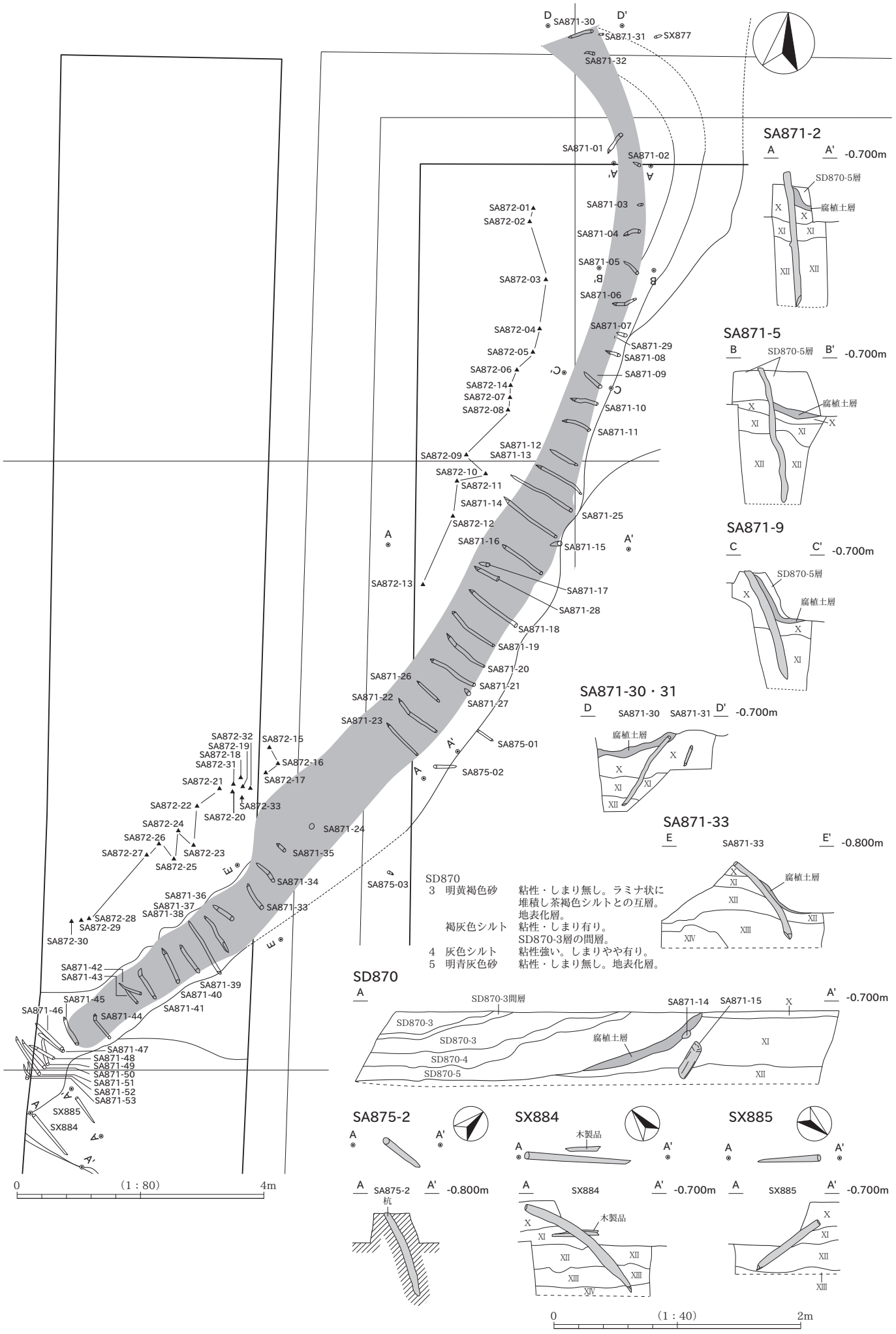
畦畔316



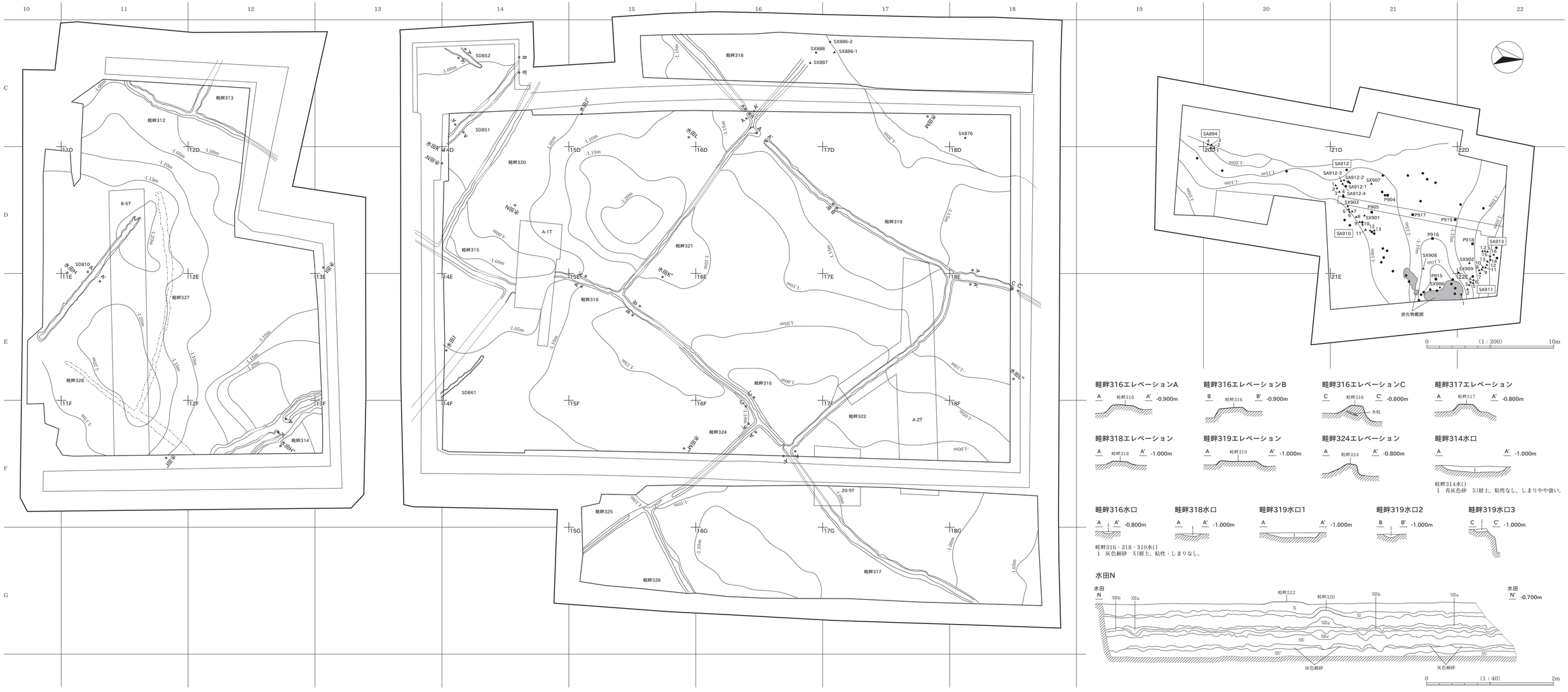
畦畔224エレベーション

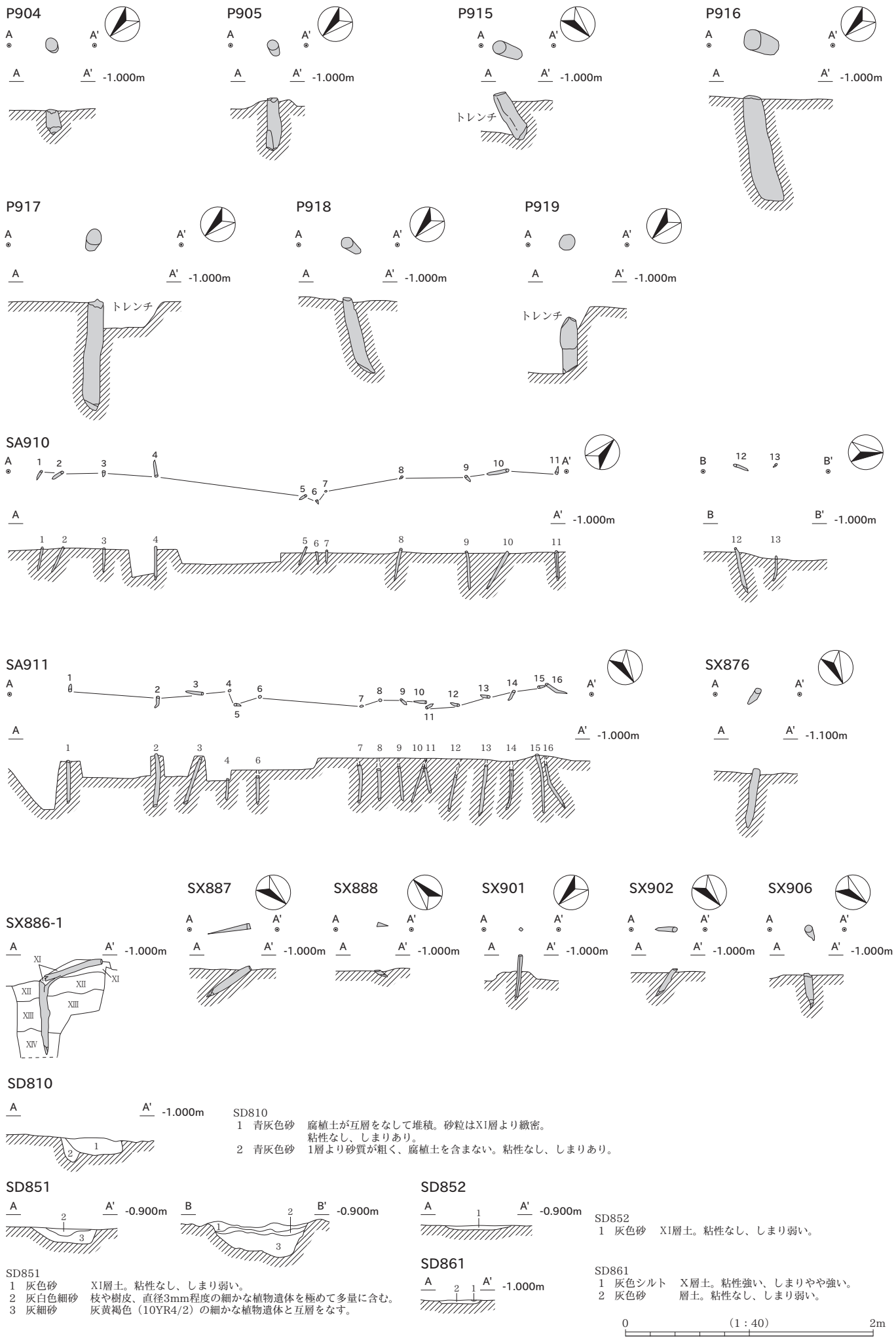


0　(1：40)　2m


SA871-2
A A' -0.700m
SD870-5層
腐植土層
SA871-5
B SD870-5層 B' -0.700m
腐植土層
SA871-9
C C' -0.700m
SD870-5層
腐植土層
SA871-30・31
D SA871-30 SA871-31 D' -0.700m
腐植土層
SA871-33
E SA871-33 E' -0.800m
腐植土層
SD870
3 明黄褐色砂 粘性・しまり無し。ラミナ状に堆積し茶褐色シルトとの互層。地表化層。
褐灰色シルト 粘性・しまり有り。SD870-3層の間層。
4 灰色シルト 粘性強い。しまりやや有り。
5 明青灰色砂 粘性・しまり無し。地表化層。
SD870
A A' -0.700m
SD870-3間層
SD870-3
SD870-4
SD870-5
腐植土層
SA871-14
SA871-15
SA875-2
A A' -0.800m
杭
SX884
A A' -0.700m
木製品
SX885
A A' -0.700m
0 (1：80) 4m
0 (1：40) 2m

SX703
A
A'
A
A'
-0.900m
SX707・708
A
A'
A
A'
-0.900m
SX707
SX708
0
(1：40)
2m
0
(1：200)
10m
畦畔309
畦畔305
畦畔310
畦畔303
畦畔302
畦畔301
畦畔306
畦畔307
畦畔304
畦畔311
畦畔308
水田G
水田E
水田F
水田C
水田D
20-16T
SX708
SX707
SX704
SX705
SX720
SX706
SX703
SX501
SD113
SX536
(未調査水田域)


畦畔313
畦畔312
畦畔327
畦畔328
畦畔314
B-5T
SD810
畦畔318
SX886-2
SX888
SX886-1
SX887
SX876
SD852
SD851
畦畔320
A-1T
畦畔315
畦畔321
畦畔316
畦畔319
SD861
畦畔324
畦畔322
A-2T
20-9T
畦畔325
畦畔326
畦畔317
水田K'
水田K
水田N'
水田N
水田L
水田L'
水田H
水田H'
SA894
SA912
SA912-1
SA912-2
SA912-3
SA912-4
SX907
P904
SX903
P905
SX901
P917
P919
SA910
P916
P918
SA913
SX908
SX902
SX909
P915
SX906
SA911
炭化物範囲
(1：200)
10m
畦畔316エレベーションA
A 畦畔316 A' -0.900m
畦畔316エレベーションB
B 畦畔316 B' -0.900m
畦畔316エレベーションC
C 畦畔316 C' -0.800m
木杭
畦畔317エレベーション
A 畦畔317 A' -0.800m
畦畔318エレベーション
A 畦畔318 A' -1.000m
畦畔319エレベーション
A 畦畔319 A' -1.000m
畦畔324エレベーション
A 畦畔324 A' -0.800m
畦畔314水口
A A' -1.000m
畦畔314水口
1 青灰色砂 XI層土。粘性なし。しまりやや強い。
畦畔316水口
A A' -0.800m
畦畔318水口
A A' -1.000m
畦畔319水口1
A A' -1.000m
畦畔319水口2
B B' -1.000m
畦畔319水口3
C C' -1.000m
畦畔316・318・319水口
1 灰色細砂 XI層土。粘性・しまりなし。
水田N
水田 N
水田 N' -0.700m
XIIIb
XIIIa
畦畔222
畦畔320
X
XI
XIIIa
XIIIc
XIV
XV
灰色細砂
(1：40)
2m



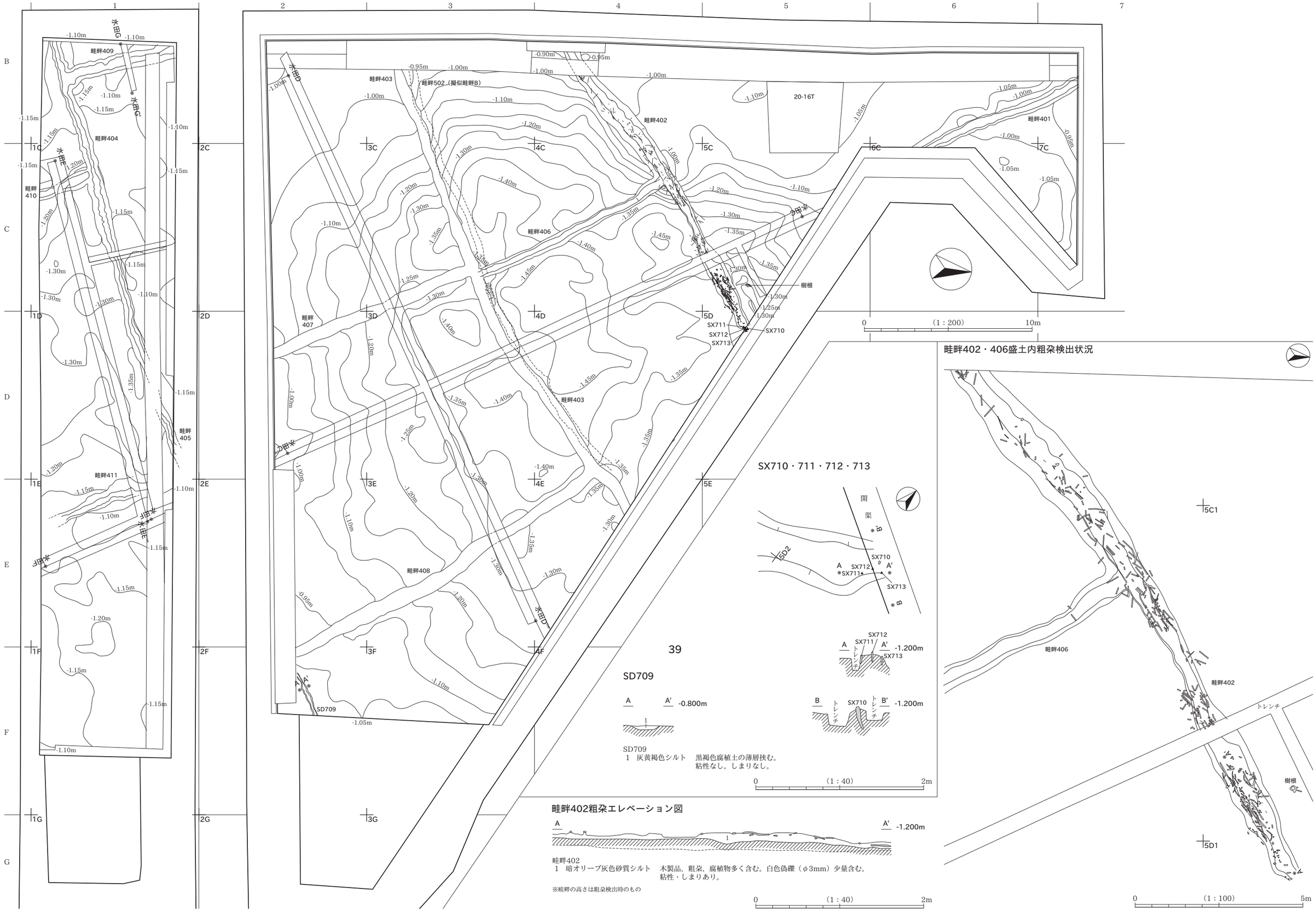
SD810
1　青灰色砂　腐植土が互層をなして堆積。砂粒はXI層より緻密。
　　粘性なし、しまりあり。
2　青灰色砂　1層より砂質が粗く、腐植土を含まない。粘性なし、しまりあり。

SD851
1　灰色砂　　XI層土。粘性なし、しまり弱い。
2　灰白色細砂　枝や樹皮、直径3mm程度の細かな植物遺体を極めて多量に含む。
3　灰細砂　　灰黄褐色（10YR4/2）の細かな植物遺体と互層をなす。

SD852
1　灰色砂　XI層土。粘性なし、しまり弱い。

SD861
1　灰色シルト　X層土。粘性強い、しまりやや強い。
2　灰色砂　　層土。粘性なし、しまり弱い。

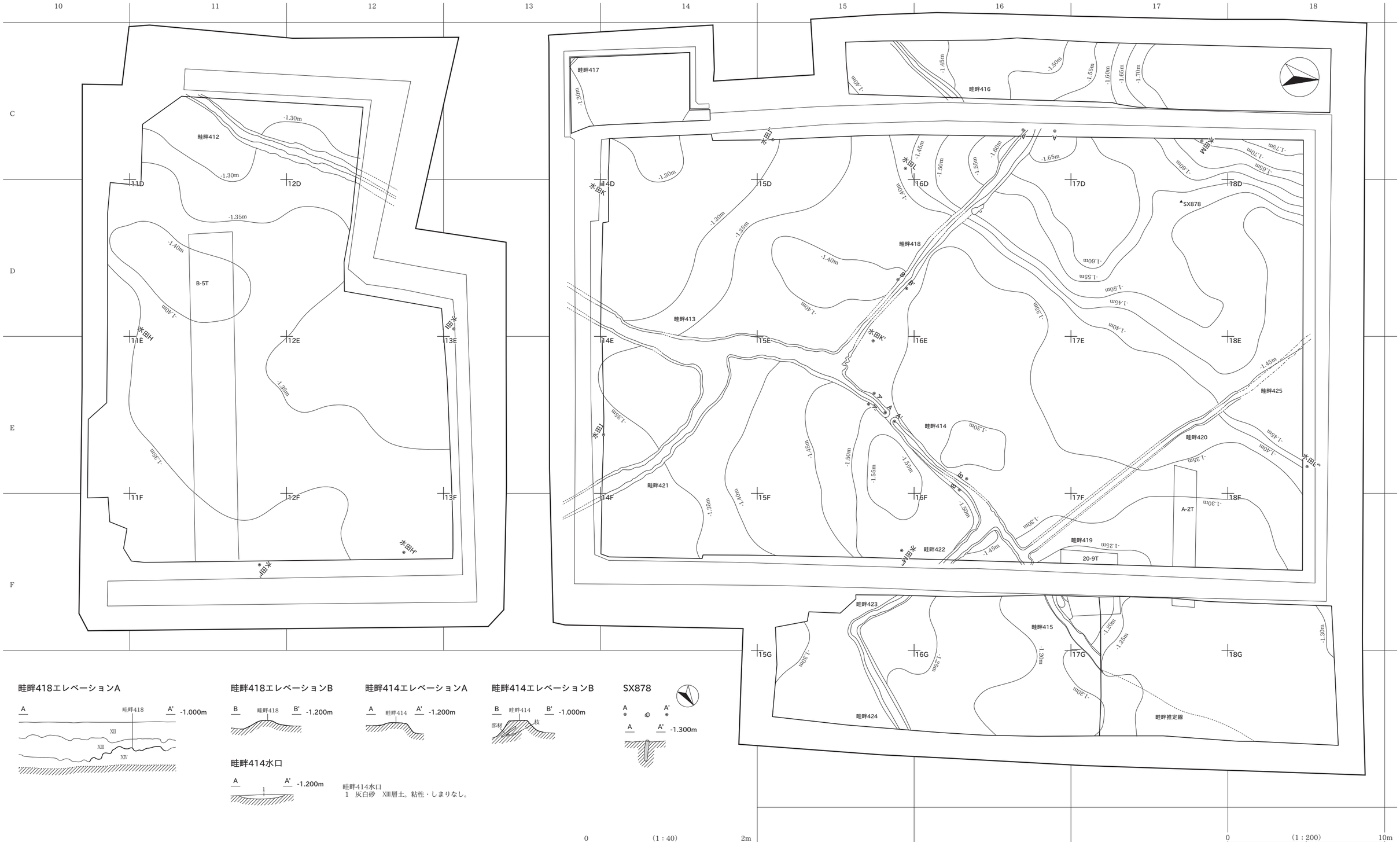
XⅣ層遺構全体図（南区１・２）水田・遺構個別図 SX710 ～ 713、SD709、畦畔 402・406 粗朶

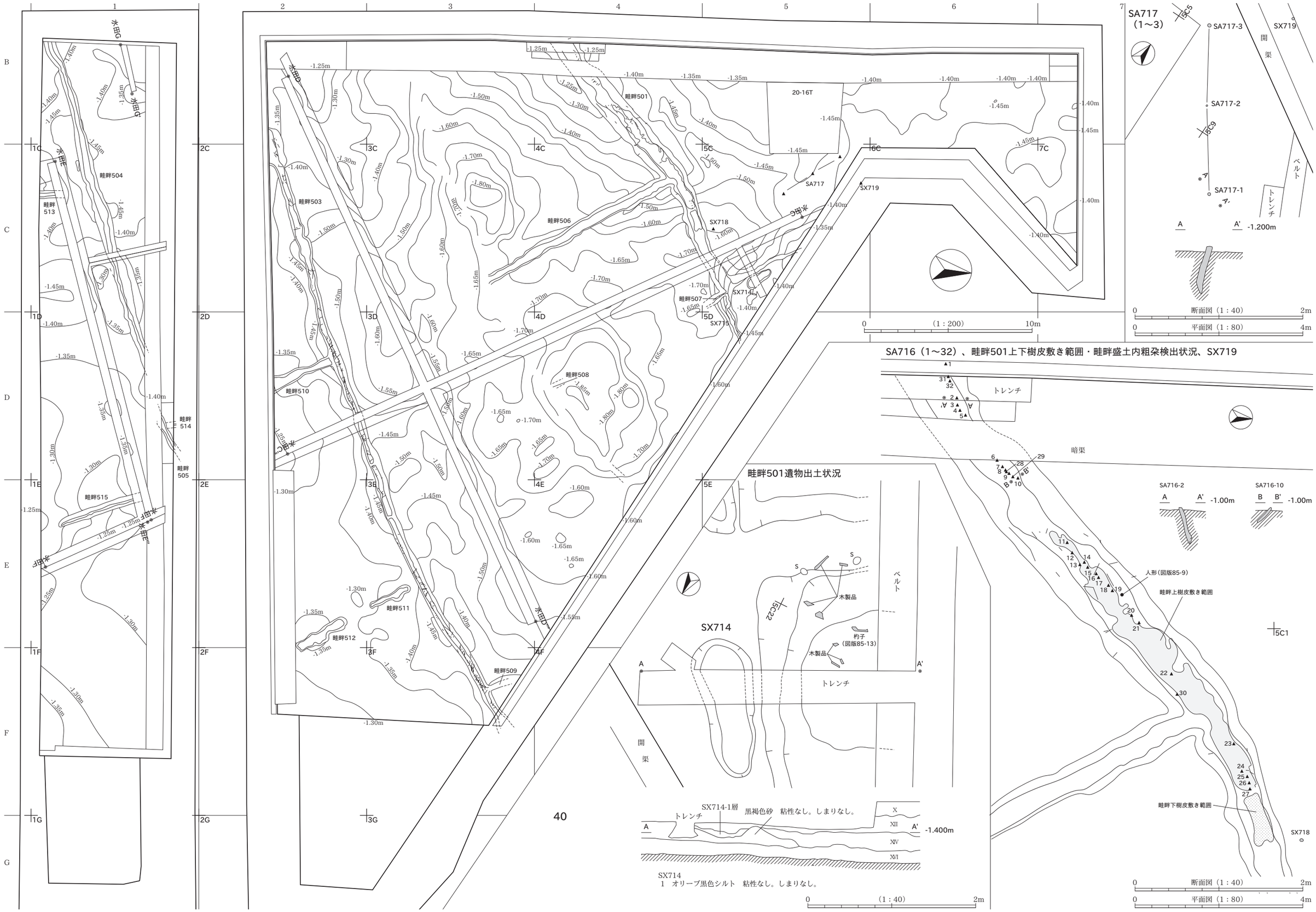


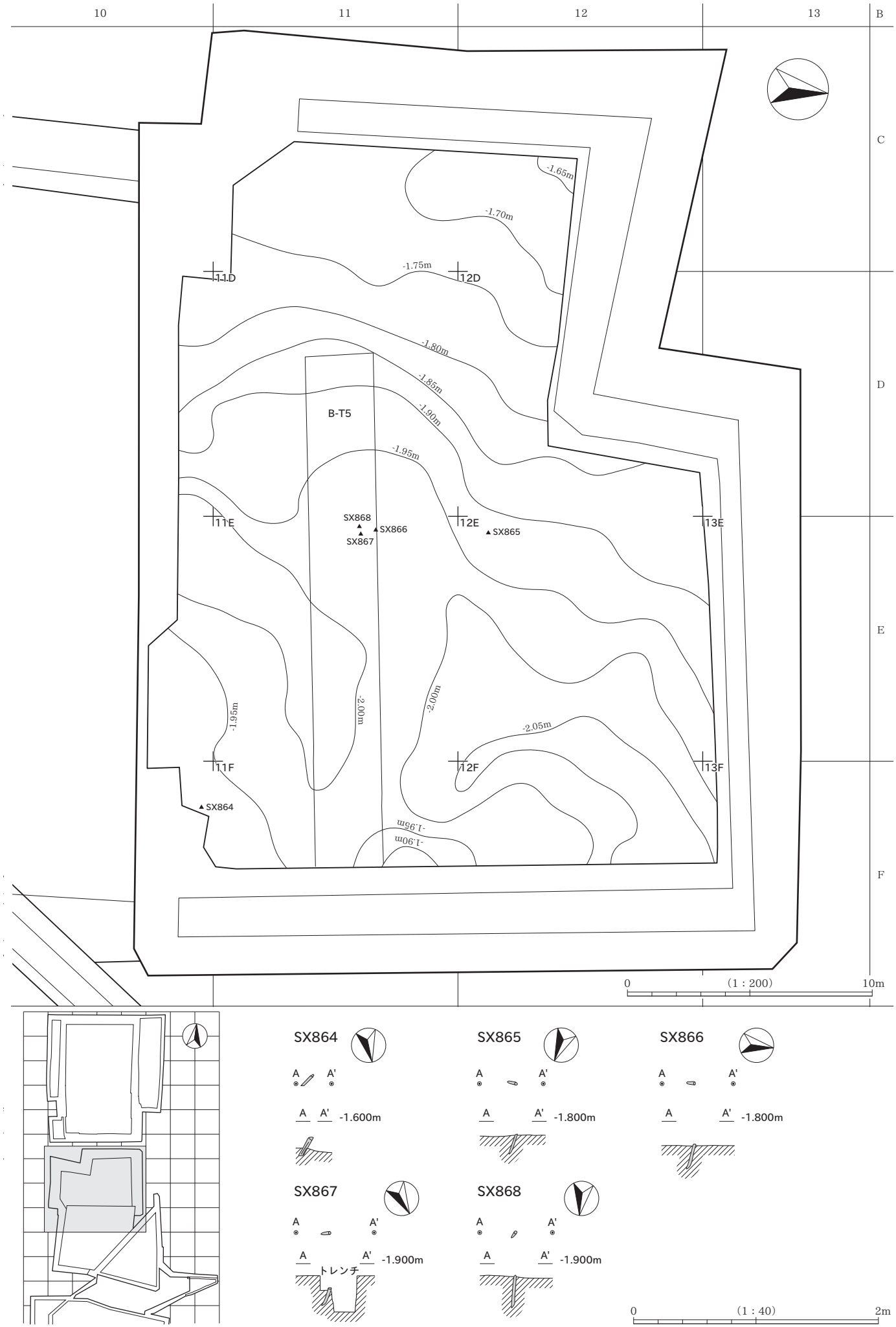
SD709
1　灰黄褐色シルト　黒褐色腐植土の薄層挟む。
粘性なし。しまりなし。

畦畔402
1　暗オリーブ灰色砂質シルト　木製品、粗朶、腐植物多く含む。白色偽礫（φ3mm）少量含む。
粘性・しまりあり。

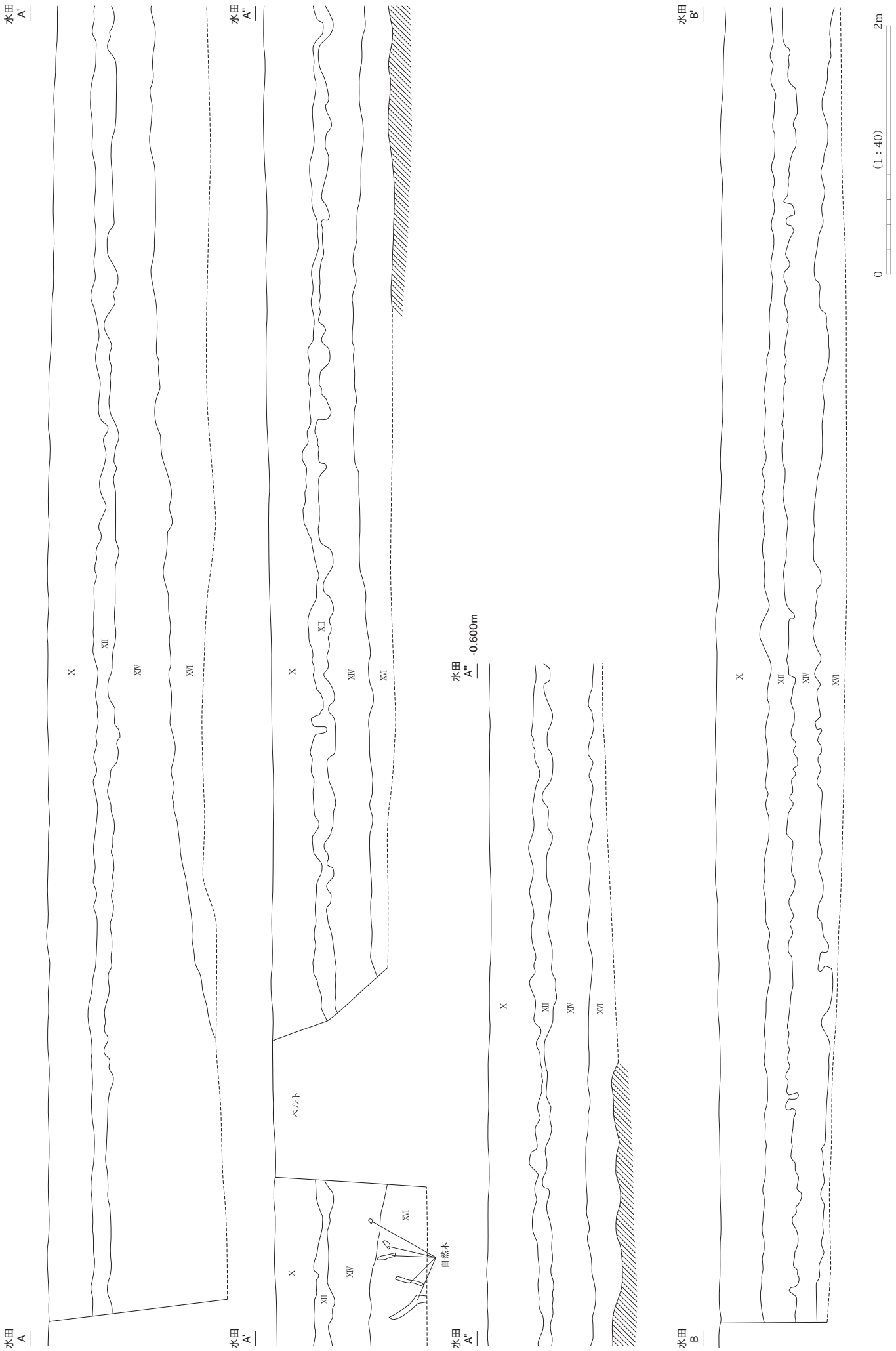
※畦畔の高さは粗朶検出時のもの

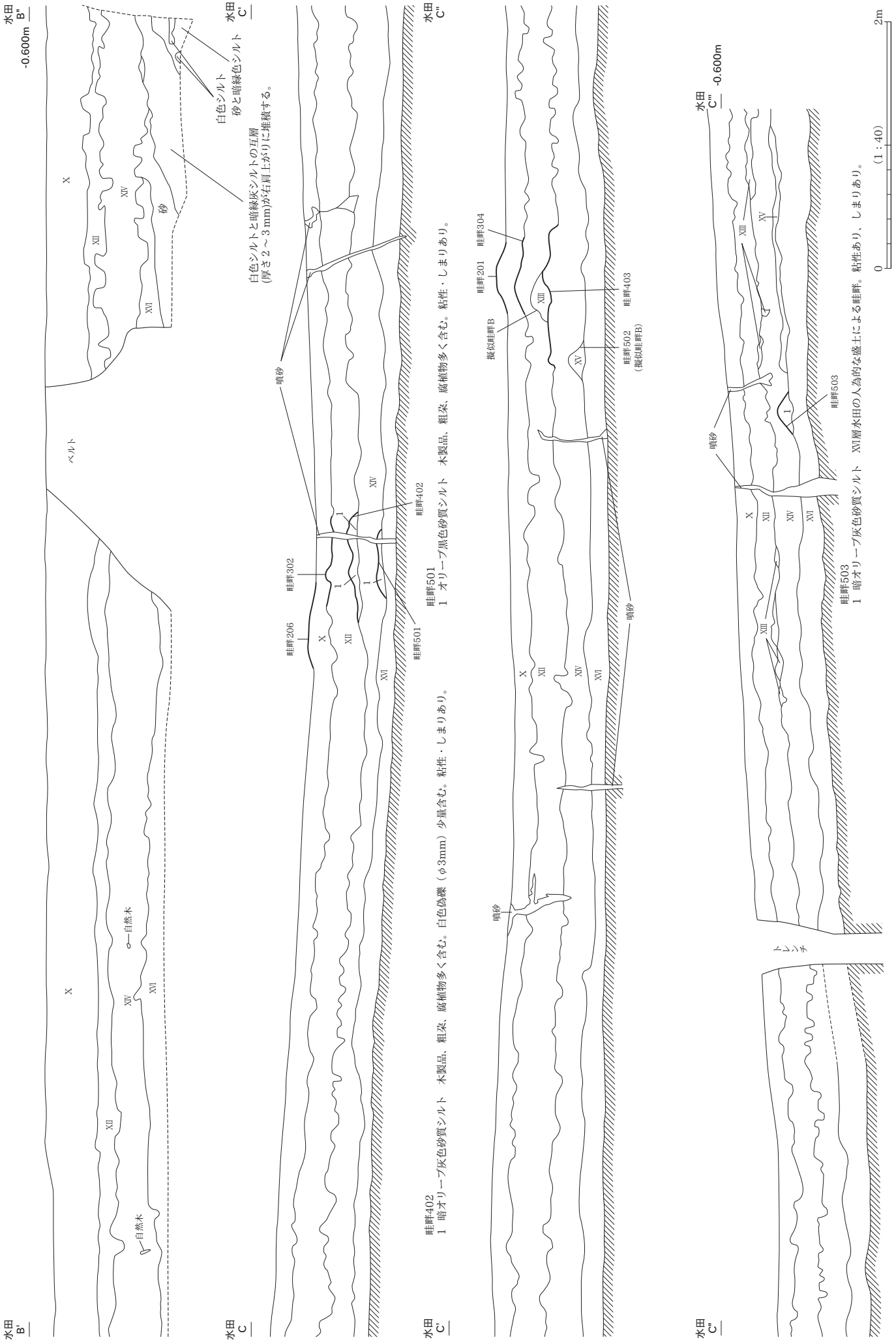

畦畔412
畦畔413
畦畔414
畦畔415
畦畔416
畦畔417
畦畔418
畦畔419
畦畔420
畦畔421
畦畔422
畦畔423
畦畔424
畦畔425
畦畔推定線
SX878
B-5T
A-2T
20-9T
水田H
水田H'
水田K
水田K'
水田L
水田L'
水田M
水田M'
水田
畦畔418エレベーションA
畦畔418エレベーションB
畦畔414エレベーションA
畦畔414エレベーションB
SX878
畦畔414水口
畦畔414水口
1　灰白砂　XIII層土。粘性・しまりなし。
0　(1：40)　2m
0　(1：200)　10m


SA717（1～3）
SA717-3
SA717-2
SA717-1
SX719
開渠
ベルト
トレンチ
A
A'
-1.200m
断面図（1：40）
平面図（1：80）
SA716（1～32）、畦畔501上下樹皮敷き範囲・畦畔盛土内粗朶検出状況、SX719
暗渠
SA716-2
SA716-10
-1.00m
人形（図版85-9）
畦畔上樹皮敷き範囲
畦畔下樹皮敷き範囲
畦畔501遺物出土状況
SX714
木製品
杭子（図版85-13）
SX714-1層　黒褐色砂　粘性なし。しまりなし。
-1.400m
SX714
1　オリーブ黒色シルト　粘性なし。しまりなし。
畦畔501
畦畔502
畦畔503
畦畔504
畦畔505
畦畔506
畦畔507
畦畔508
畦畔509
畦畔510
畦畔511
畦畔512
畦畔513
畦畔514
畦畔515
20-16T
SX718
SX717
水田C
水田D
水田E
水田F
水田G
40

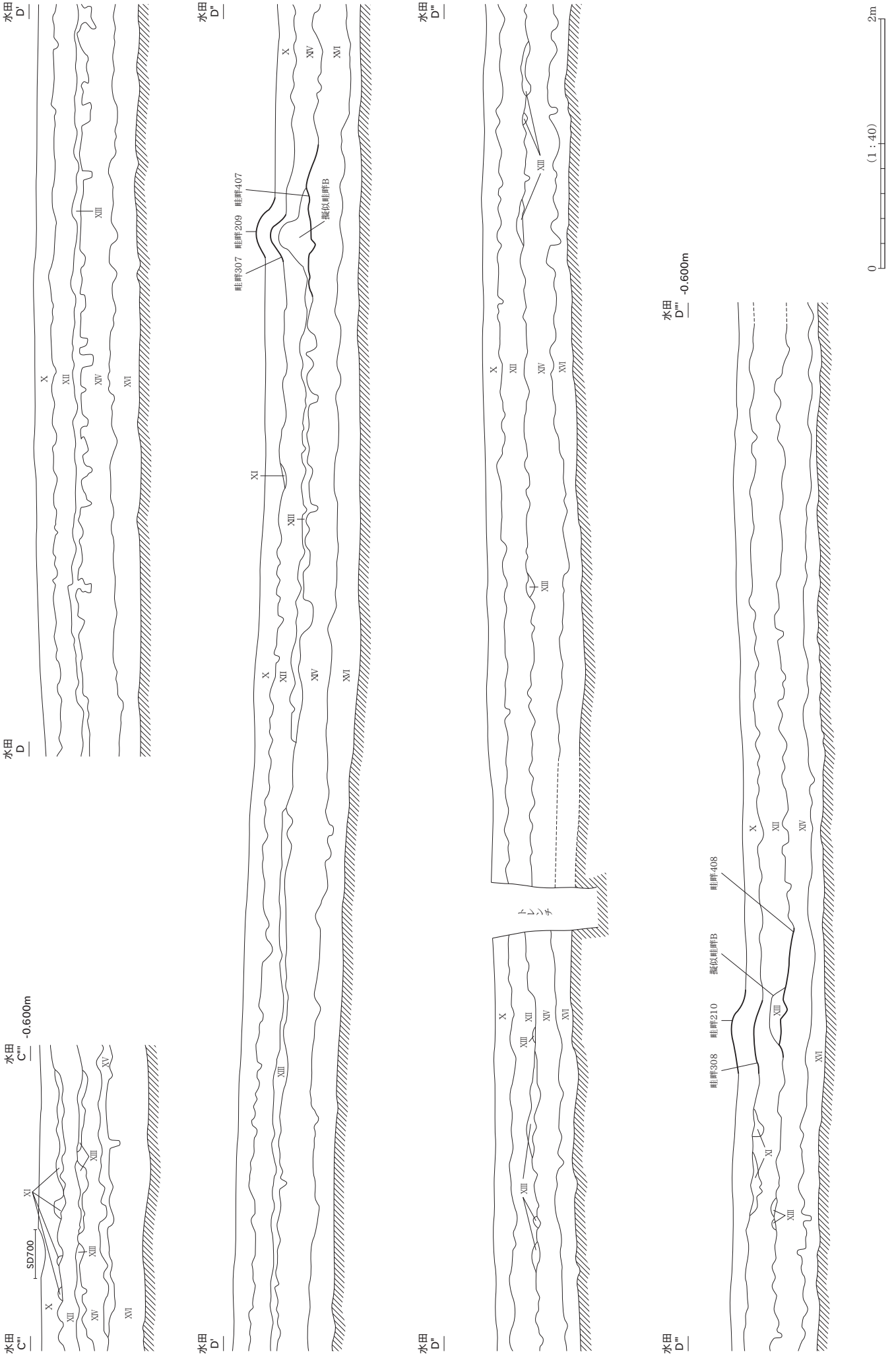

10
11
12
13
B
C
D
E
F
-1.65m
-1.70m
-1.75m
-1.80m
-1.85m
-1.90m
-1.95m
-2.00m
-2.05m
11D
12D
11E
12E
13E
11F
12F
13F
B-T5
SX868
SX867
SX866
SX865
SX864
0
(1：200)
10m
SX864
A
A'
-1.600m
SX865
-1.800m
SX866
-1.800m
SX867
-1.900m
トレンチ
SX868
-1.900m
0
(1：40)
2m

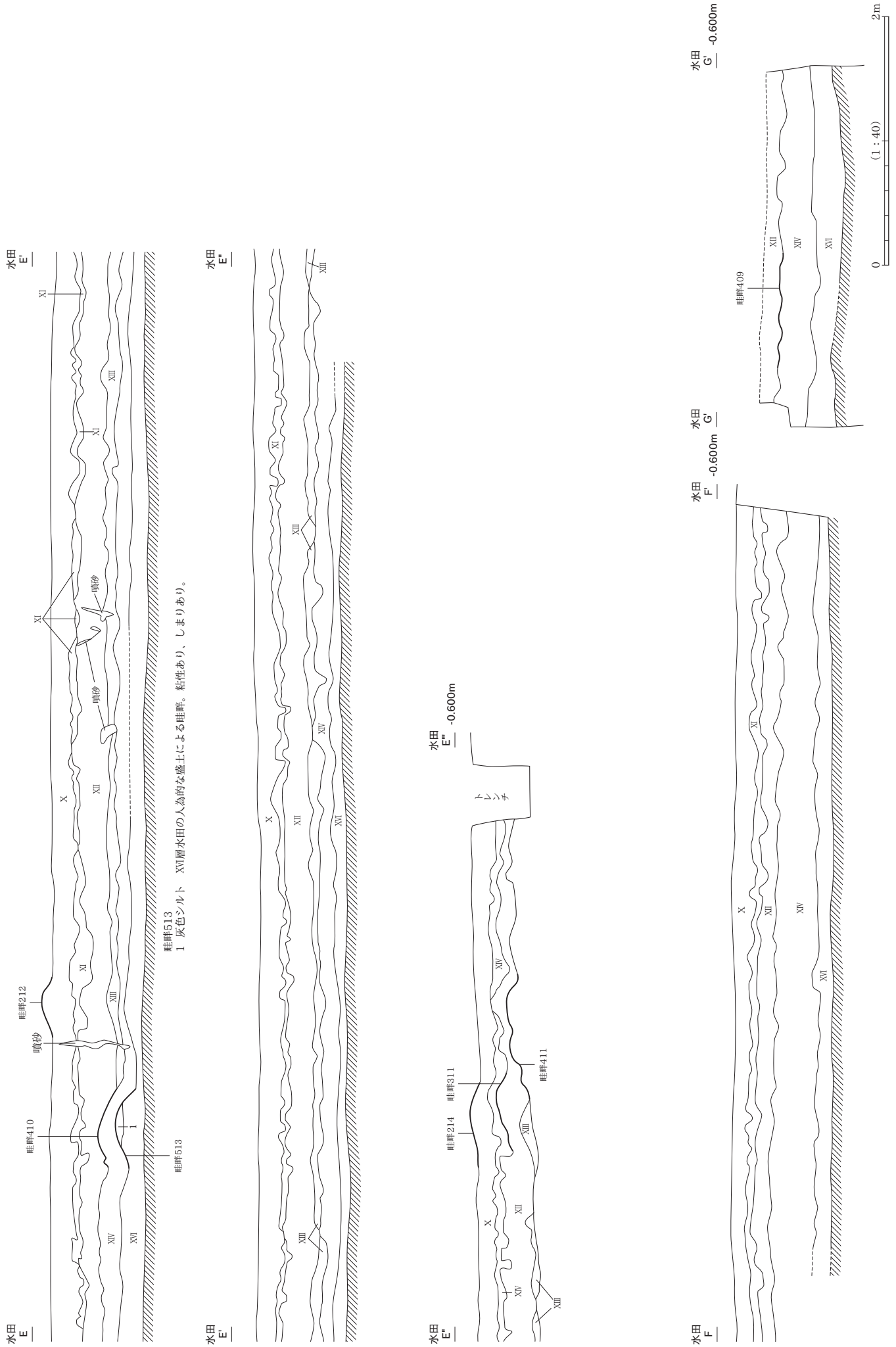
水田土層断面（1） 北区 1（南側）



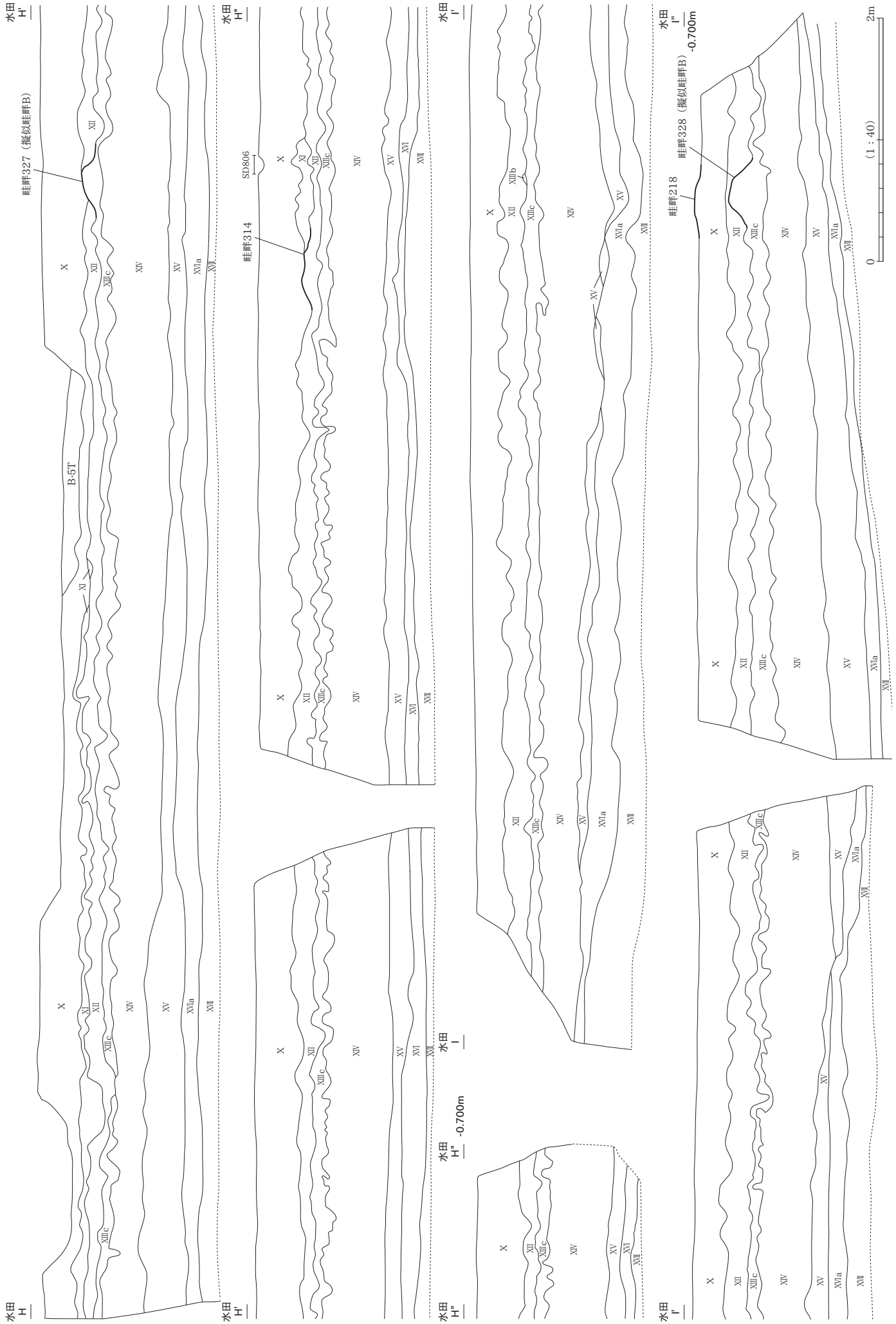

水田 B'
水田 B"
-0.600m
水田 C
水田 C'
水田 C"
水田 C'"
-0.600m
2m
0
(1：40)
X
XII
XIV
XVI
XIII
XV
ベルト
自然木
砂
白色シルト
砂と暗緑色シルト
白色シルトと暗緑灰シルトの互層
(厚さ２～３mm)が右肩上がりに推積する。
噴砂
畦畔206
畦畔302
畦畔402
畦畔501
畦畔201
畦畔304
擬似畦畔B
畦畔403
畦畔502
（擬似畦畔B）
畦畔503
トレンチ
畦畔402
1 暗オリーブ灰色砂質シルト 木製品、粗朶、腐植物多く含む。白色偽礫（φ3mm）少量含む。粘性・しまりあり。
畦畔501
1 オリーブ黒色砂質シルト 木製品、粗朶、腐植物多く含む。粘性・しまりあり。
畦畔503
1 暗オリーブ灰色砂質シルト XVI層水田の人為的な盛土による畦畔。粘性あり、しまりあり。

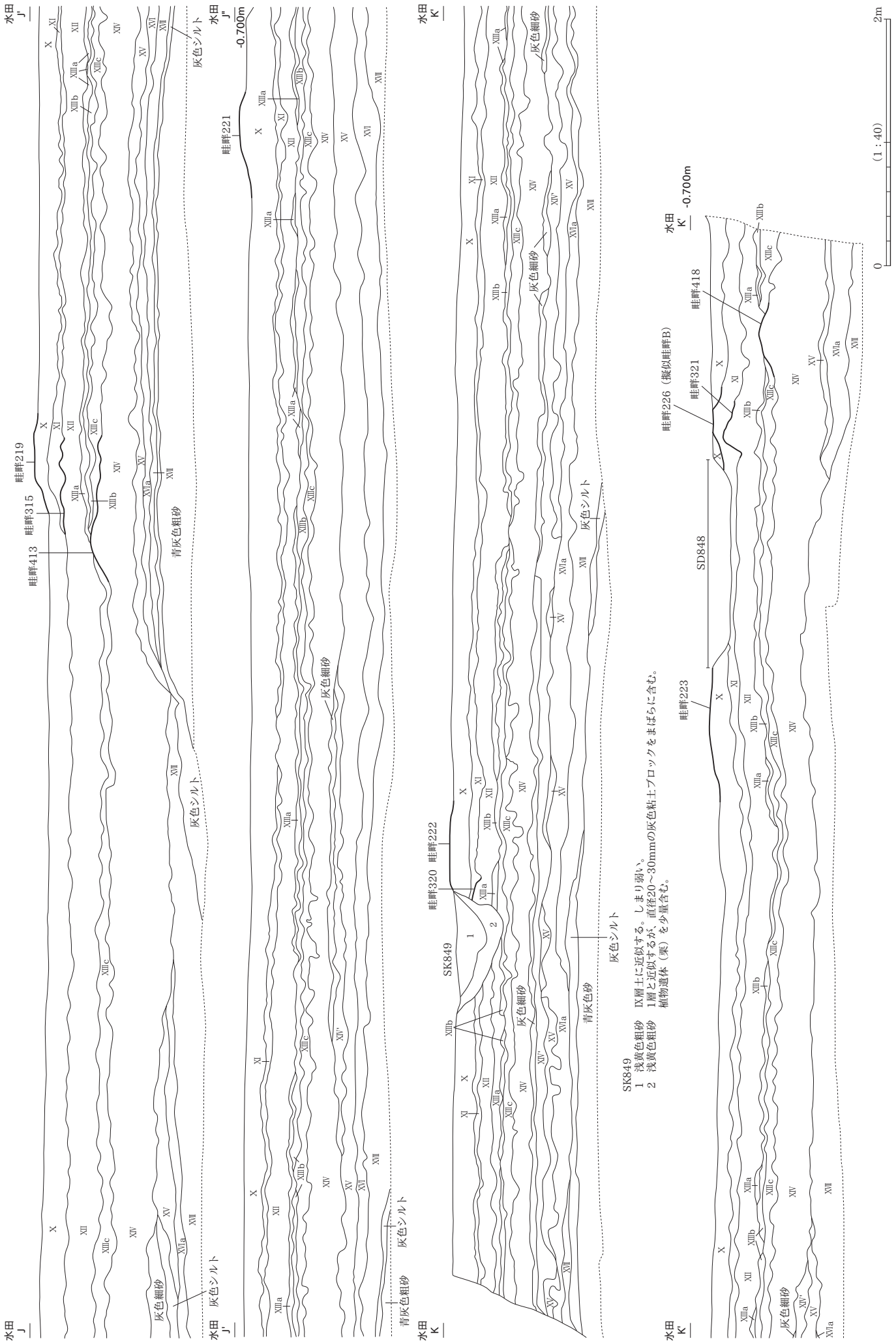
水田土層断面（3） 南区 1

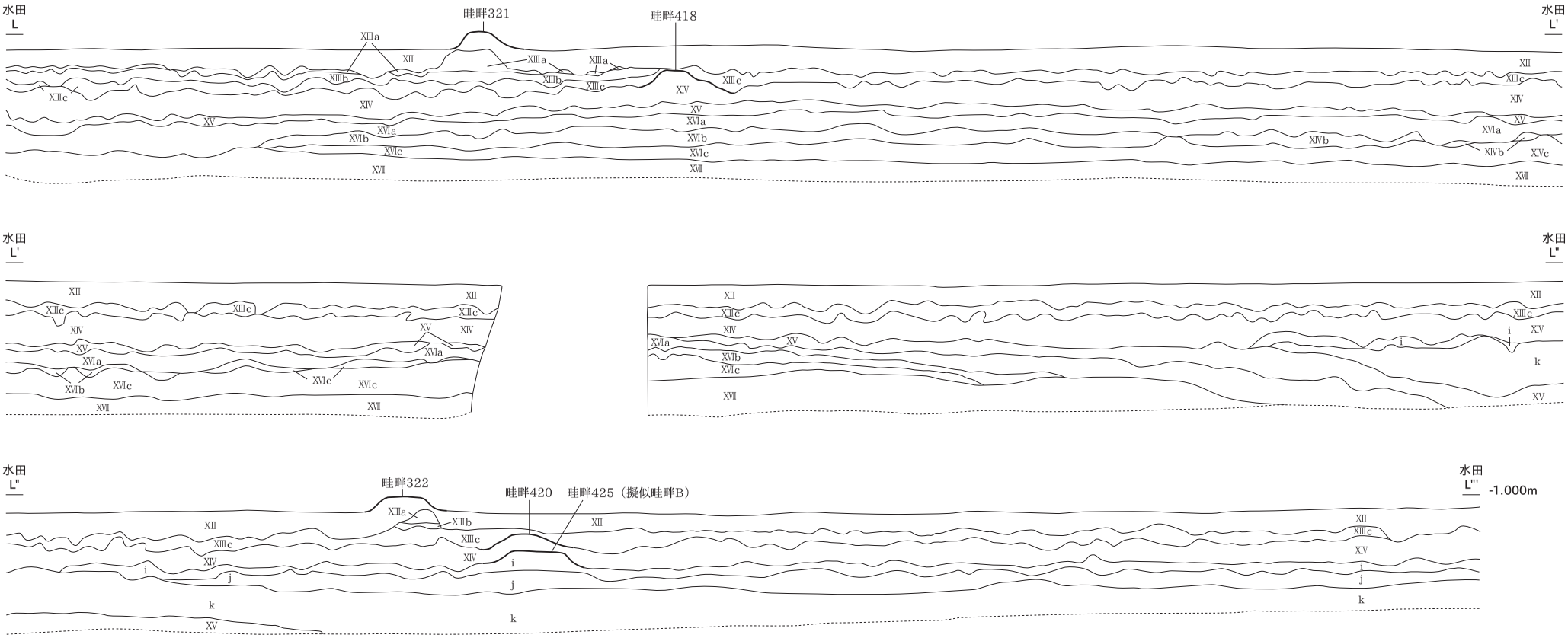

水田 C'''
-0.600m
SD700
XI
X
XII
XIII
XIV
XV
XVI
水田 D
水田 D'
水田 D''
水田 D'''
-0.600m
畦畔307
畦畔209
畦畔407
擬似畦畔B
畦畔308
畦畔210
畦畔408
トレンチ
0
(1:40)
2m


水田 E
水田 E'
水田 E''
水田 E'''
水田 F
水田 F'
水田 G
水田 G'
-0.600m
-0.600m
畦畔212
畦畔410
畦畔513
畦畔311
畦畔214
畦畔411
畦畔409
噴砂
トレンチ
XI
X
XII
XIII
XIV
XVI
1
畦畔513
1 灰色シルト XVI層水田の人為的な盛土による畦畔。粘性あり、しまりあり。
0
(1：40)
2m

水田土層断面（5） 北区１（北側）

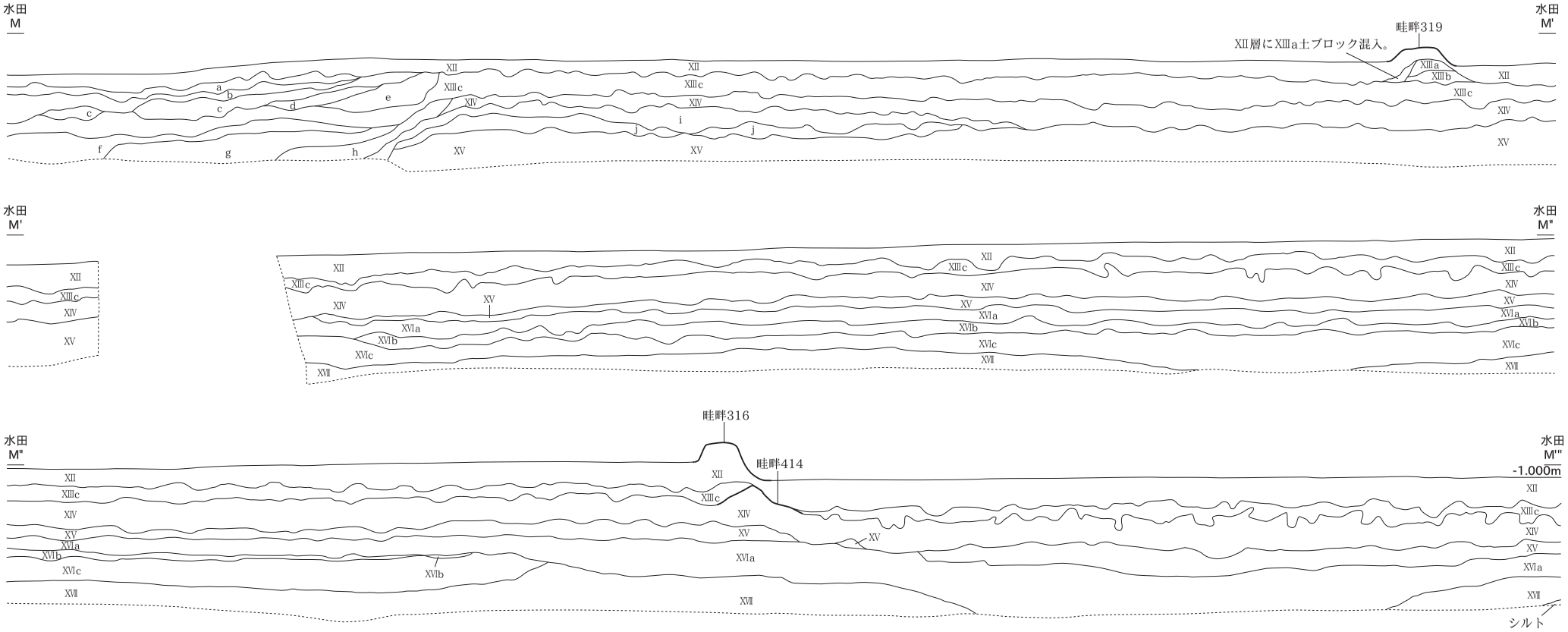



水田 J
水田 J'
水田 K
水田 K'
-0.700m
畦畔219
畦畔315
畦畔413
畦畔221
畦畔320
畦畔222
畦畔418
畦畔226（擬似畦畔B）
畦畔321
畦畔223
SD848
SK849
灰色シルト
灰色細砂
青灰色粗砂
青灰色砂
SK849
1 浅黄色粗砂
2 浅黄色粗砂
XIIIb層土に近似する。しまり弱い。
1層と近似するが、直径20～30mmの灰色粘土ブロックをまばらに含む。
植物遺体（栗）を少量含む。
0
2m
（1：40）



XIIIa層	明青灰色砂	灰色シルト層と互層。粘性・しまりなし。
XIIIb層	灰白色シルト	直径10～15mmの偽礫を多く含む。粘性・しまり強い。
XIIIc層	明青灰色砂	粘性・しまりなし。
XIV層	灰色シルト	粘性やや強い。しまり強い。
i層	灰白色砂	腐植土層と互層。粘性・しまりなし。
j層	灰色シルト	直径10～20mmの偽礫を少量含む。粘性・しまり強い。
k層	青灰色砂	砂粒がやや粗い。粘性・しまりなし。
XVIa層	灰色シルト	直径6～10mmの偽礫を多く含む。粘性・しまり強い。
XVIb層	青灰色砂	自然堆積層。腐植土層と互層。
XVIc層	灰色シルト	直径10～20mmの偽礫を少量含む。粘性・しまり強い。

0 (1：40) 2m



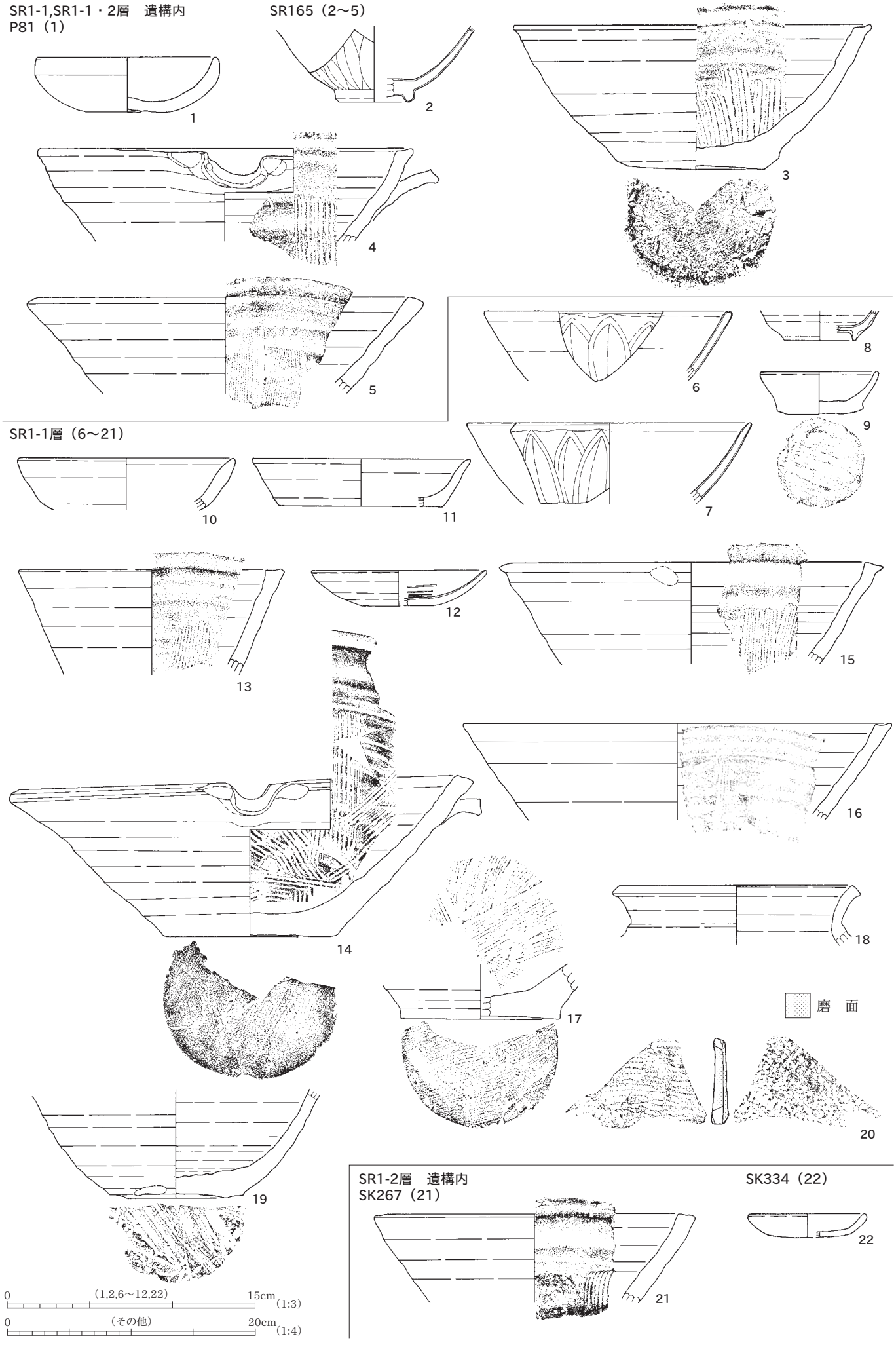
a～h層は、すべて自然堆積層。

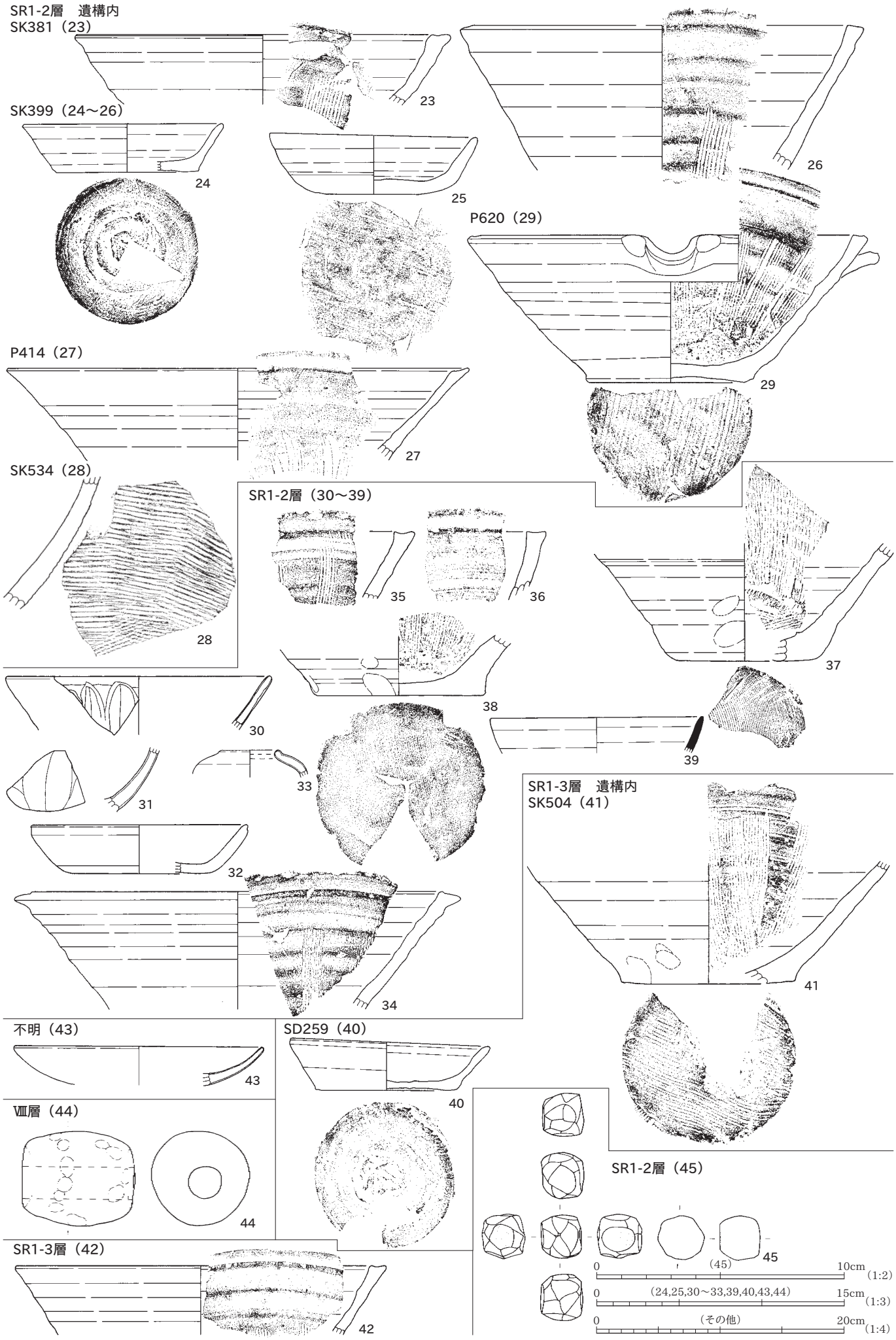
a層	灰色細砂	灰色シルト層と腐植土層と互層。
b層	灰色細砂	灰色シルト層と互層。a層よりシルト層が厚く堆積する。
c層	灰色シルト	粘性・しまり強い。部分的に細砂層と互層。
d層	灰色シルト	c層より色調暗い。粘性・しまり強い。c層より植物遺体の混入が目立つ。
e層	灰色シルト	XIII上層と近似する。d層同様に植物遺体が目立つ。
f層	灰色シルト	細砂層が薄く堆積し、互層をなす。
g層	灰色シルト	f層より砂層が厚く堆積し、互層をなす。
h層	灰色粗砂	湧水量が多く、崩れやすい。
i層	灰白色砂	腐植土層と互層。粘性・しまりなし。
j層	灰色シルト	直径10～20mmの偽礫を少量含む。粘性・しまり強い。
XVIa層	灰色シルト	直径6～10mmの偽礫を多く含む。粘性・しまり強い。
XVIb層	青灰色砂	自然堆積層。腐植土層と互層。
XVIc層	灰色シルト	直径10～20mmの偽礫を少量含む。粘性・しまり強い。

0　（1：40）　2m

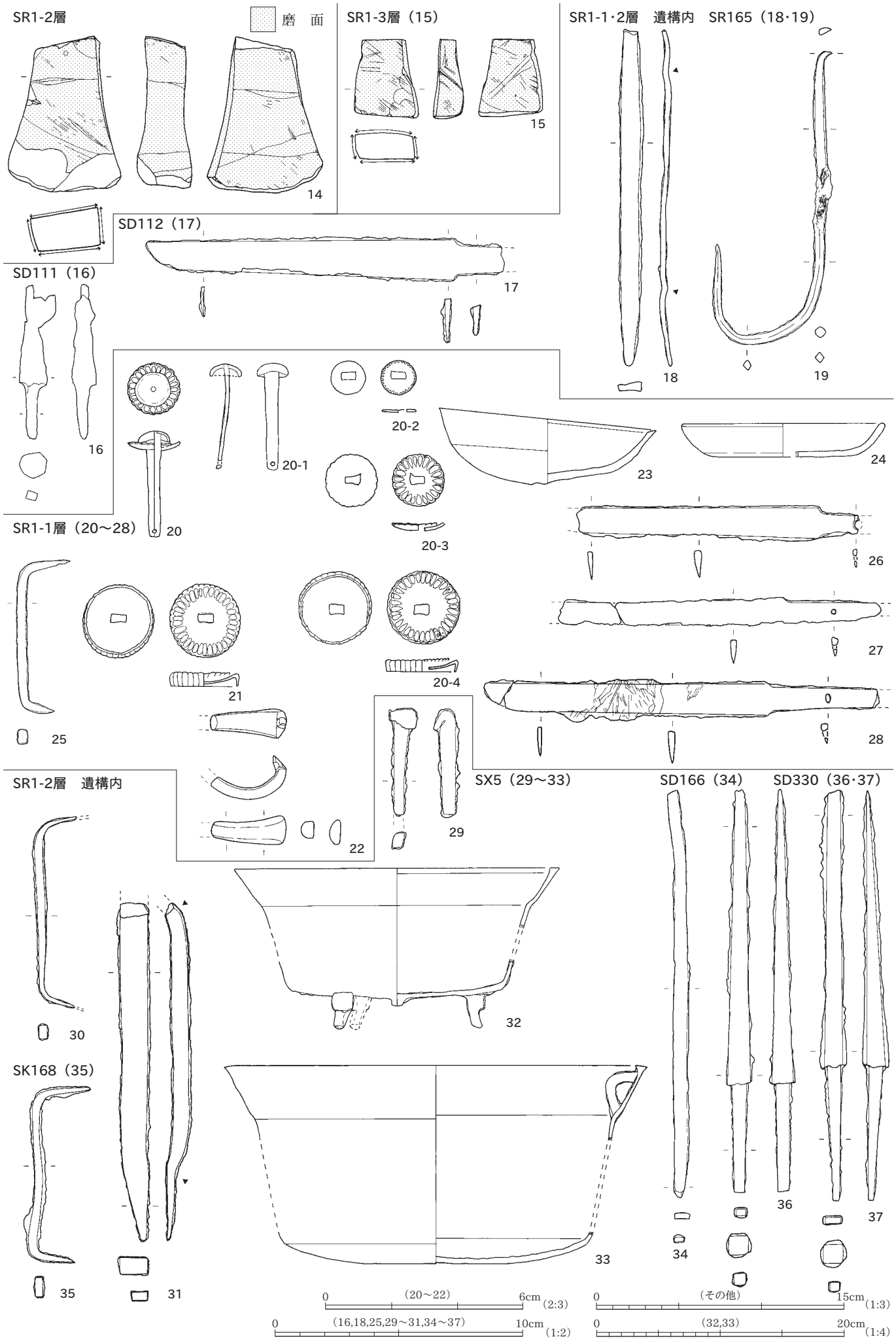
SR1-1,SR1-1・2層　遺構内
P81（1）

SR165（2～5）

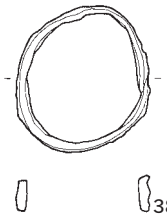


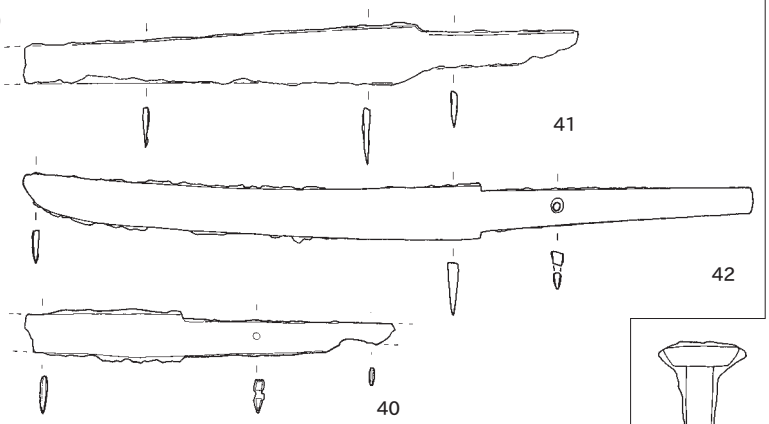

SR1-2層　遺構内
SK381（23）
23
SK399（24～26）
24
25
26
P620（29）
29
P414（27）
27
SK534（28）
28
SR1-2層（30～39）
35
36
37
38
39
30
31
32
33
34
SR1-3層　遺構内
SK504（41）
41
不明（43）
43
SD259（40）
40
Ⅷ層（44）
44
SR1-3層（42）
42
SR1-2層（45）
45
0
(45)
10cm
(1:2)
0
(24,25,30～33,39,40,43,44)
15cm
(1:3)
0
(その他)
20cm
(1:4)

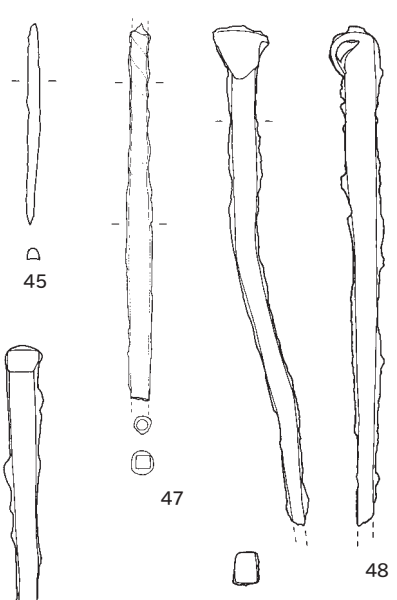
Ⅷ層（1）
1
SR1-1・2層　遺構内　SD111（2）
2
4
SR-1層（3～10）
3
6
8
5
9
SR1-2層　遺構内
SK4（11）
11
7
P611（12）
12
10
SR1-2層（13・14）
13
ス　ス
磨　面
赤　変
0
(4)
10cm
(1:2)
0
(その他)
15cm
(1:3)
0
(5)
20cm
(1:4)

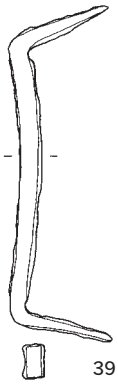

SR1-2層
磨　面
14
SR1-3層（15）
15
SR1-1・2層　遺構内　SR165（18・19）
18
19
SD112（17）
17
SD111（16）
16
20-1
20-2
20-3
20-4
20
21
22
23
24
SR1-1層（20～28）
25
26
27
28
SR1-2層　遺構内
30
31
SK168（35）
35
SX5（29～33）
29
32
33
SD166（34）
34
SD330（36・37）
36
37
0　（20～22）　6cm（2:3）
0　（その他）　15cm（1:3）
0　（16,18,25,29～31,34～37）　10cm（1:2）
0　（32,33）　20cm（1:4）

SR1-2層（38～42）

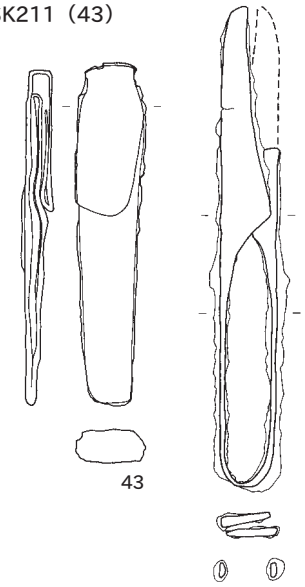




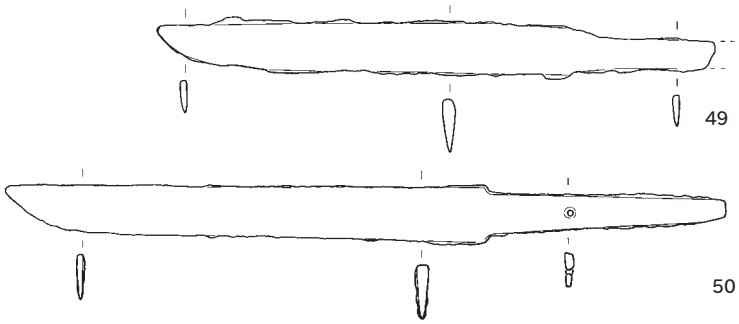


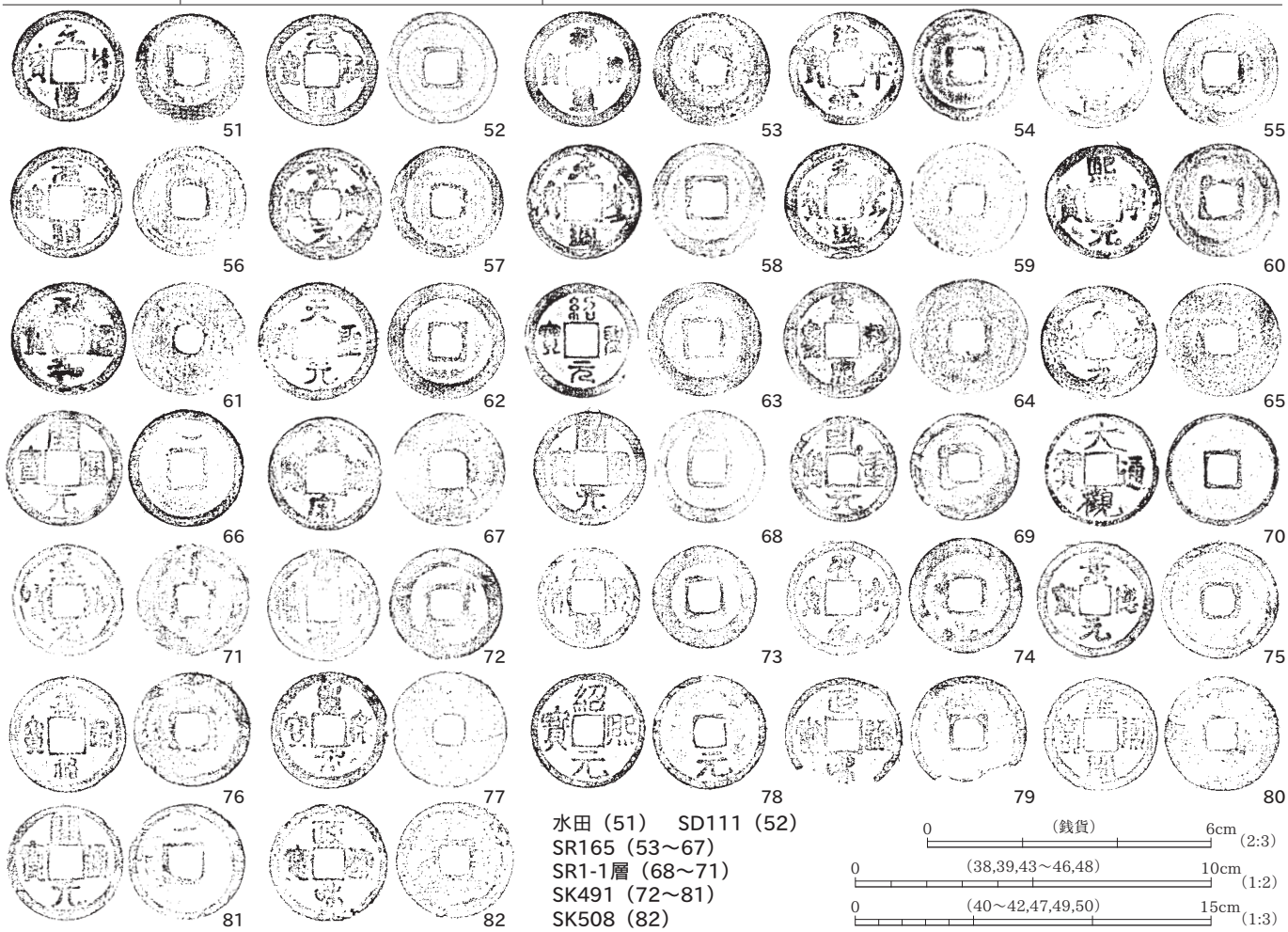


SR1-3層　遺構内　SK260（44）
SK211（43）



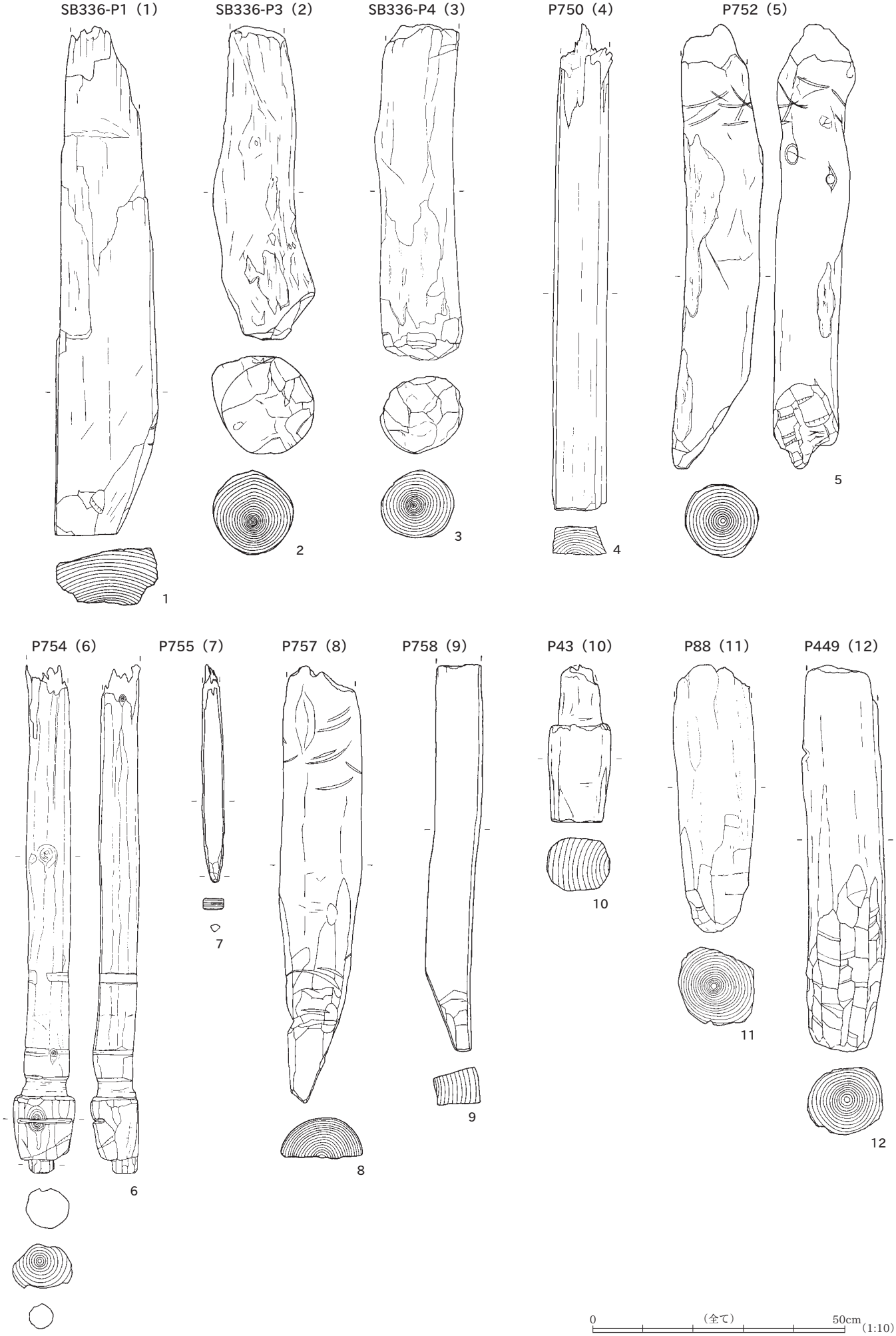
SR1-3層（45～50）



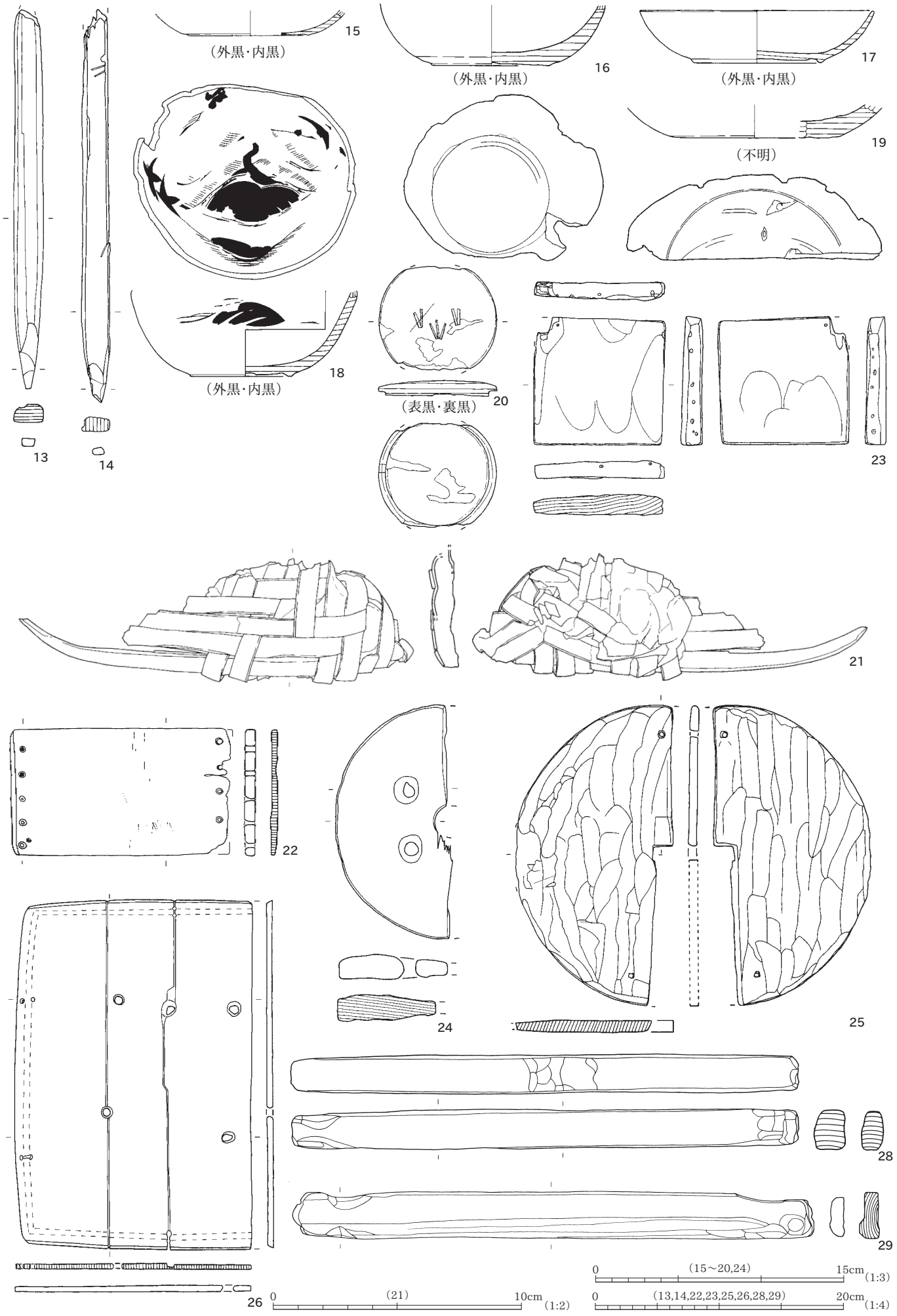


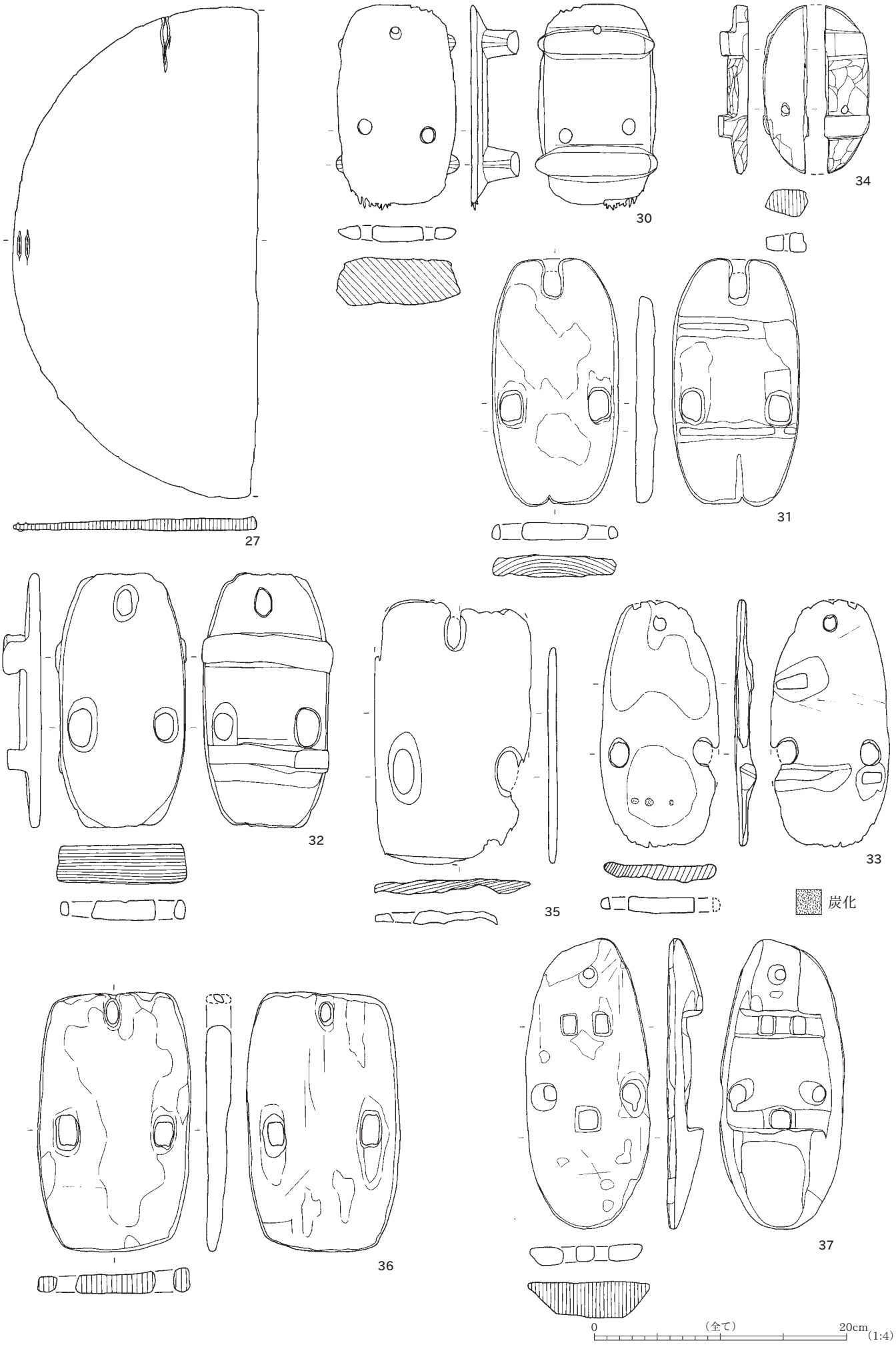
水田（51）　SD111（52）
SR165（53～67）
SR1-1層（68～71）
SK491（72～81）
SK508（82）

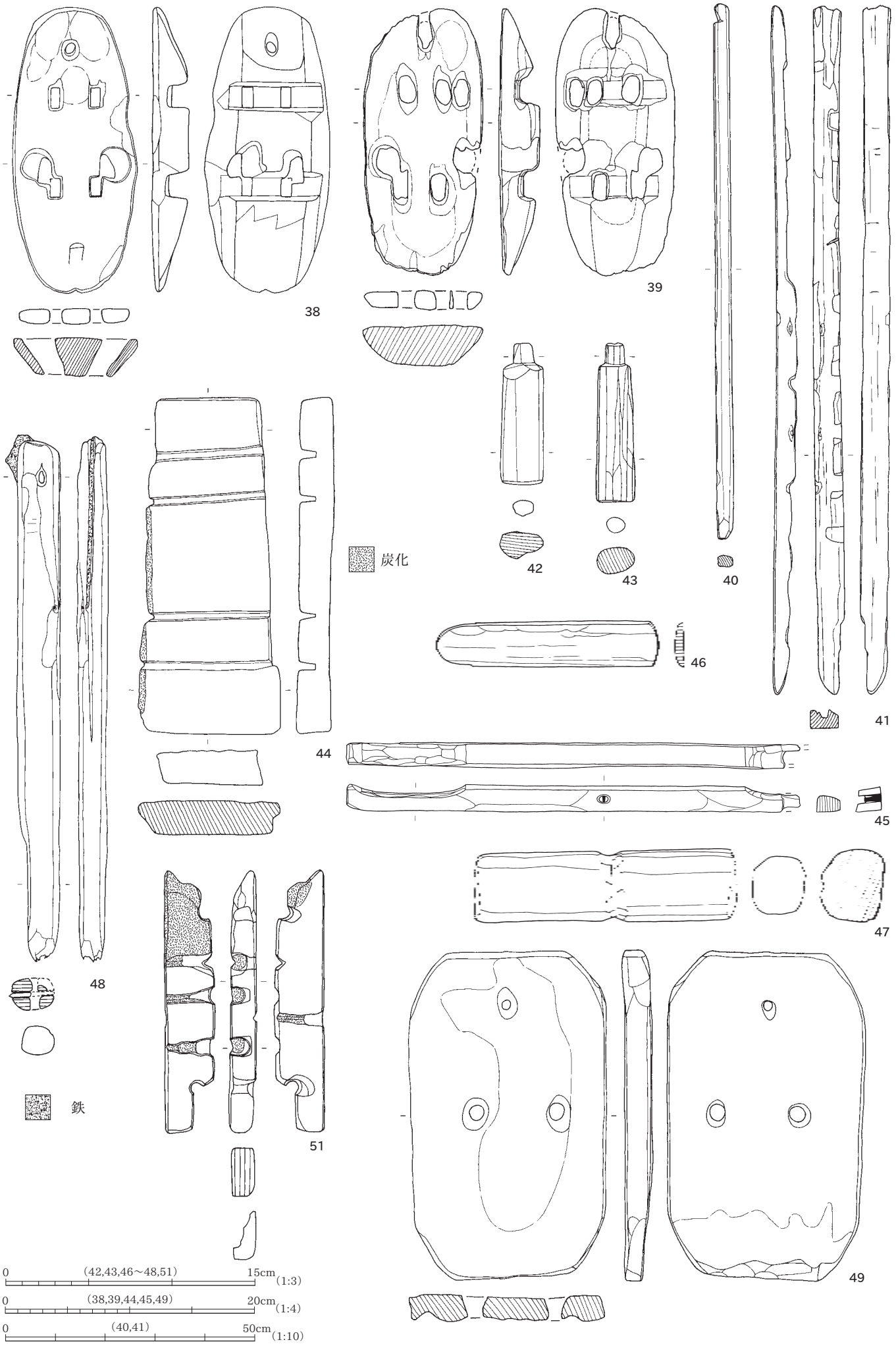
SR1-1層　遺構内

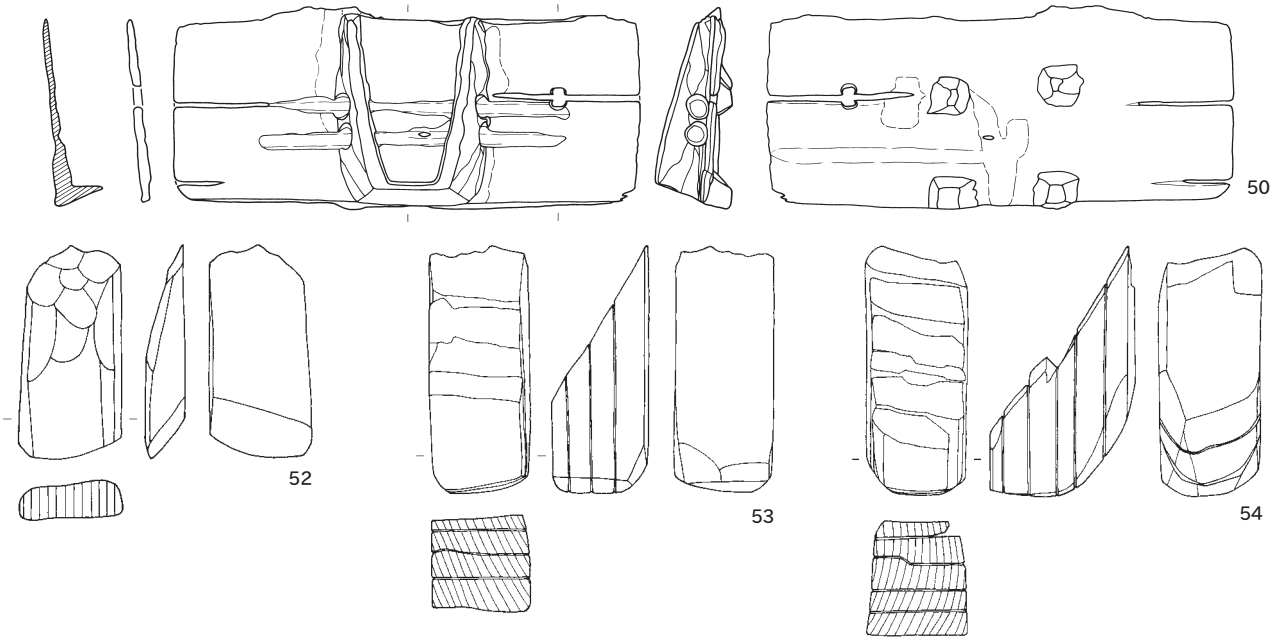

SB336-P1（1）
SB336-P3（2）
SB336-P4（3）
P750（4）
P752（5）
P754（6）
P755（7）
P757（8）
P758（9）
P43（10）
P88（11）
P449（12）
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
0
（全て）
50cm
（1:10）

SR1-1層（13～54）


15
（外黒・内黒）
16
（外黒・内黒）
17
（外黒・内黒）
19
（不明）
18
（外黒・内黒）
20
（表黒・裏黒）
13
14
23
21
22
24
25
28
29
26
0 (21) 10cm (1:2)
0 (15～20,24) 15cm (1:3)
0 (13,14,22,23,25,26,28,29) 20cm (1:4)

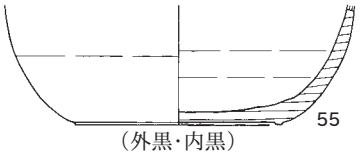

27
30
34
31
32
35
33
炭化
36
37
0
（全て）
20cm
(1:4)


38
39
炭化
42
43
40
46
41
44
45
47
48
鉄
51
49
0 (42,43,46～48,51) 15cm (1:3)
0 (38,39,44,45,49) 20cm (1:4)
0 (40,41) 50cm (1:10)

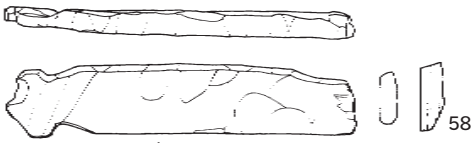


SR1-1・2層　遺構内

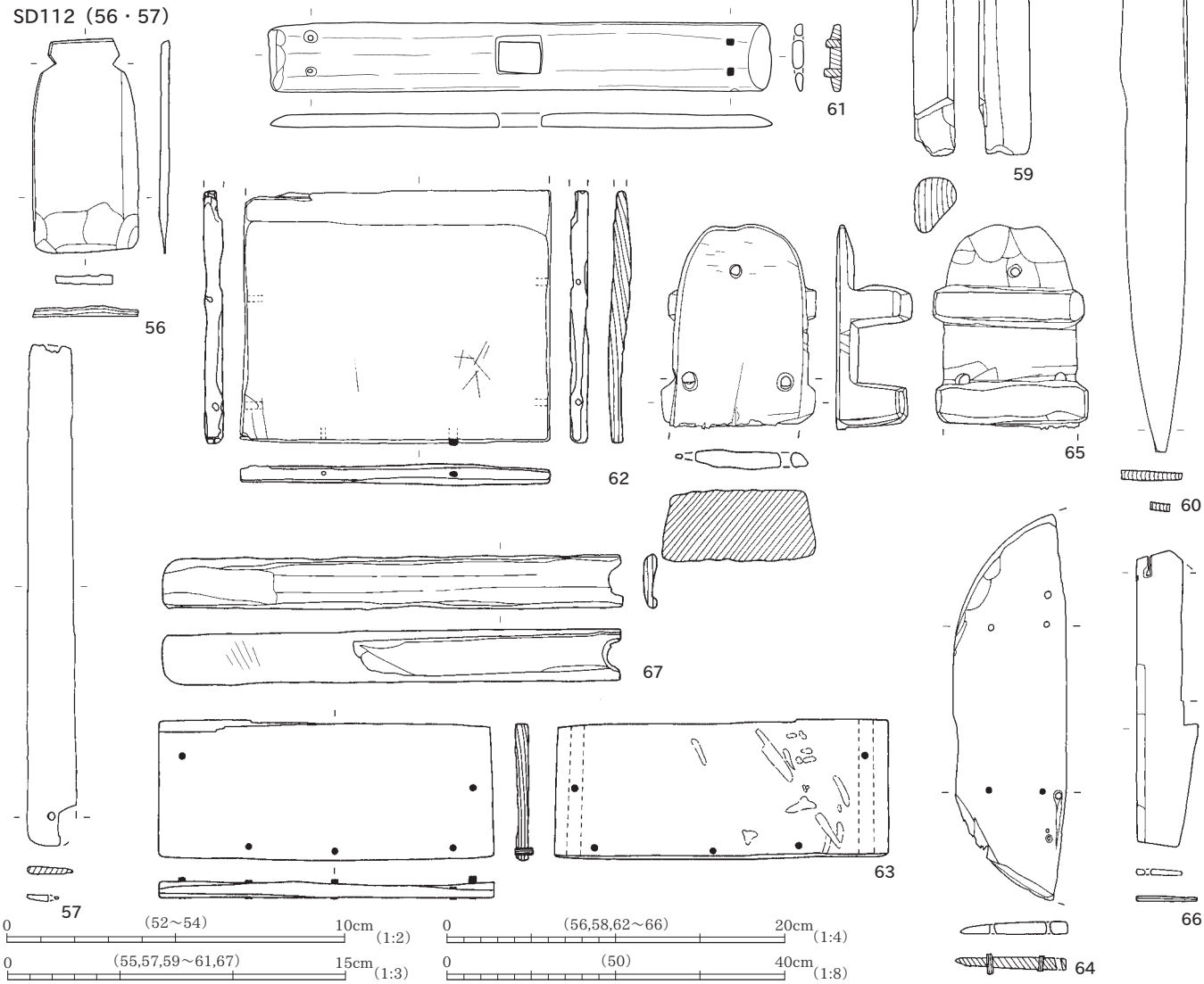
SD111（55）

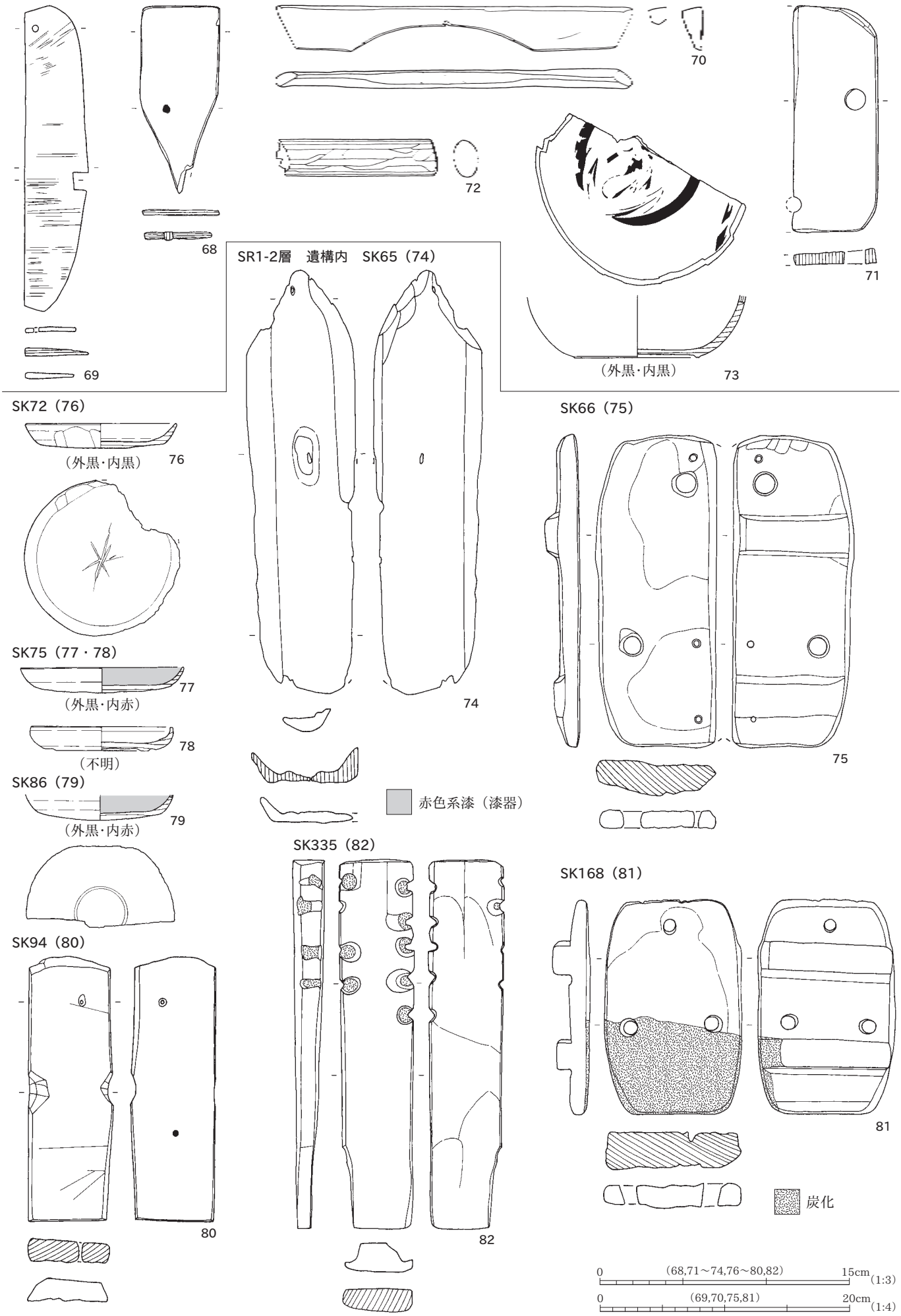


SR165（58～73）



SD112（56・57）

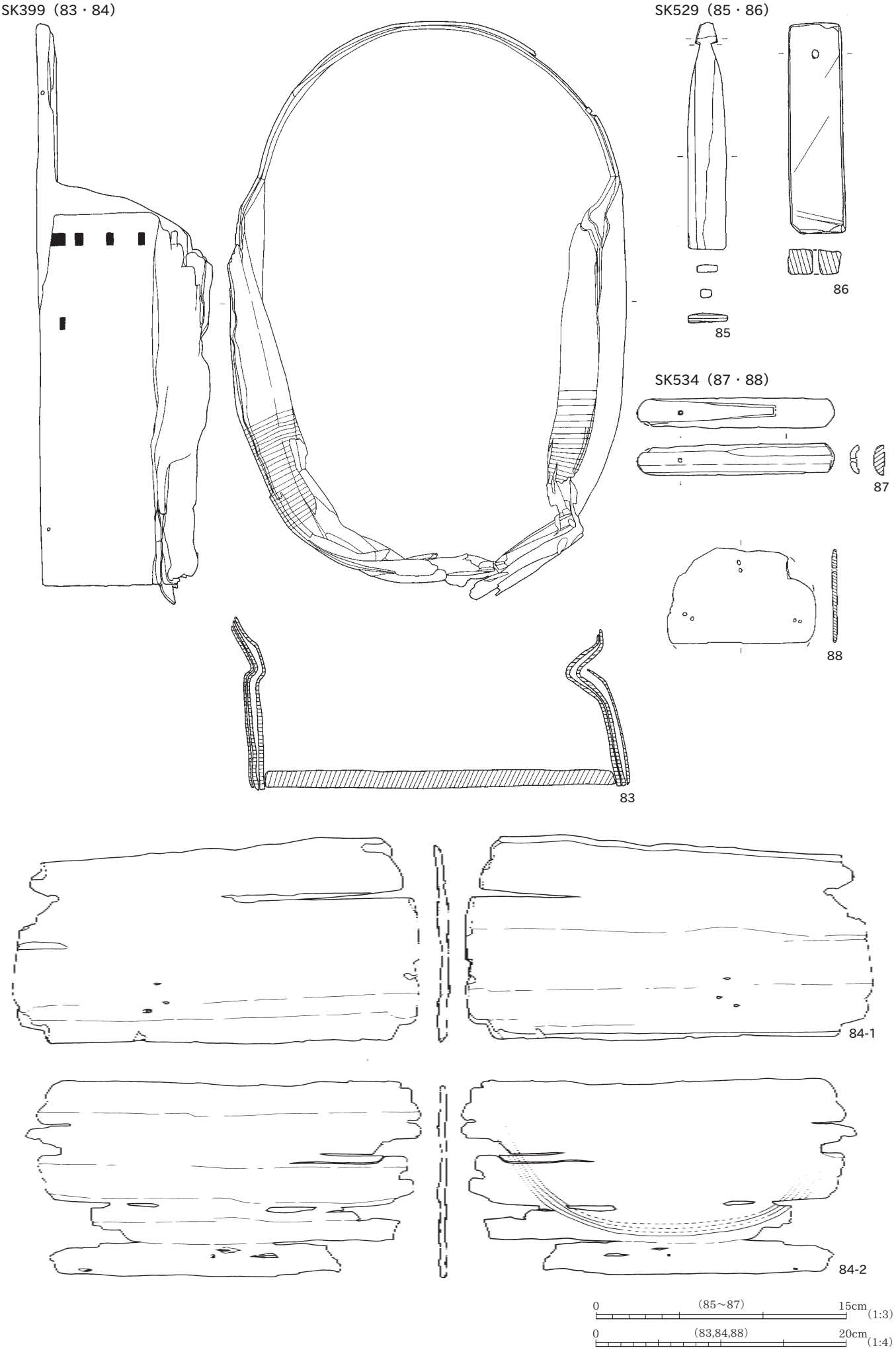


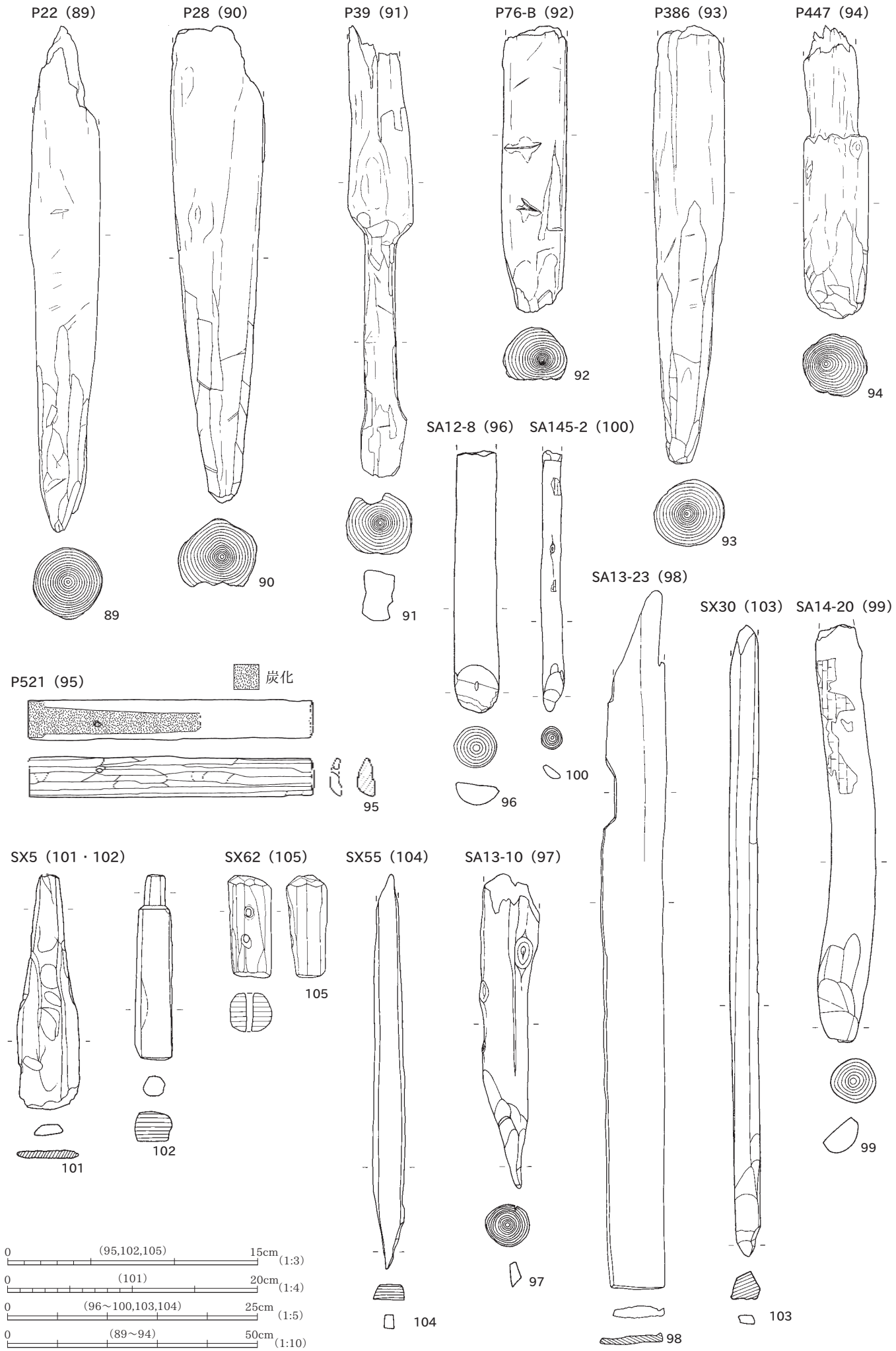

68
69
70
71
72
73
（外黒・内黒）
SR1-2層　遺構内　SK65（74）
74
SK72（76）
（外黒・内黒）
76
SK75（77・78）
77
（外黒・内赤）
78
（不明）
SK86（79）
79
（外黒・内赤）
SK94（80）
80
SK335（82）
82
SK66（75）
75
SK168（81）
81
赤色系漆（漆器）
炭化
0　（68,71～74,76～80,82）　15cm（1:3）
0　（69,70,75,81）　20cm（1:4）

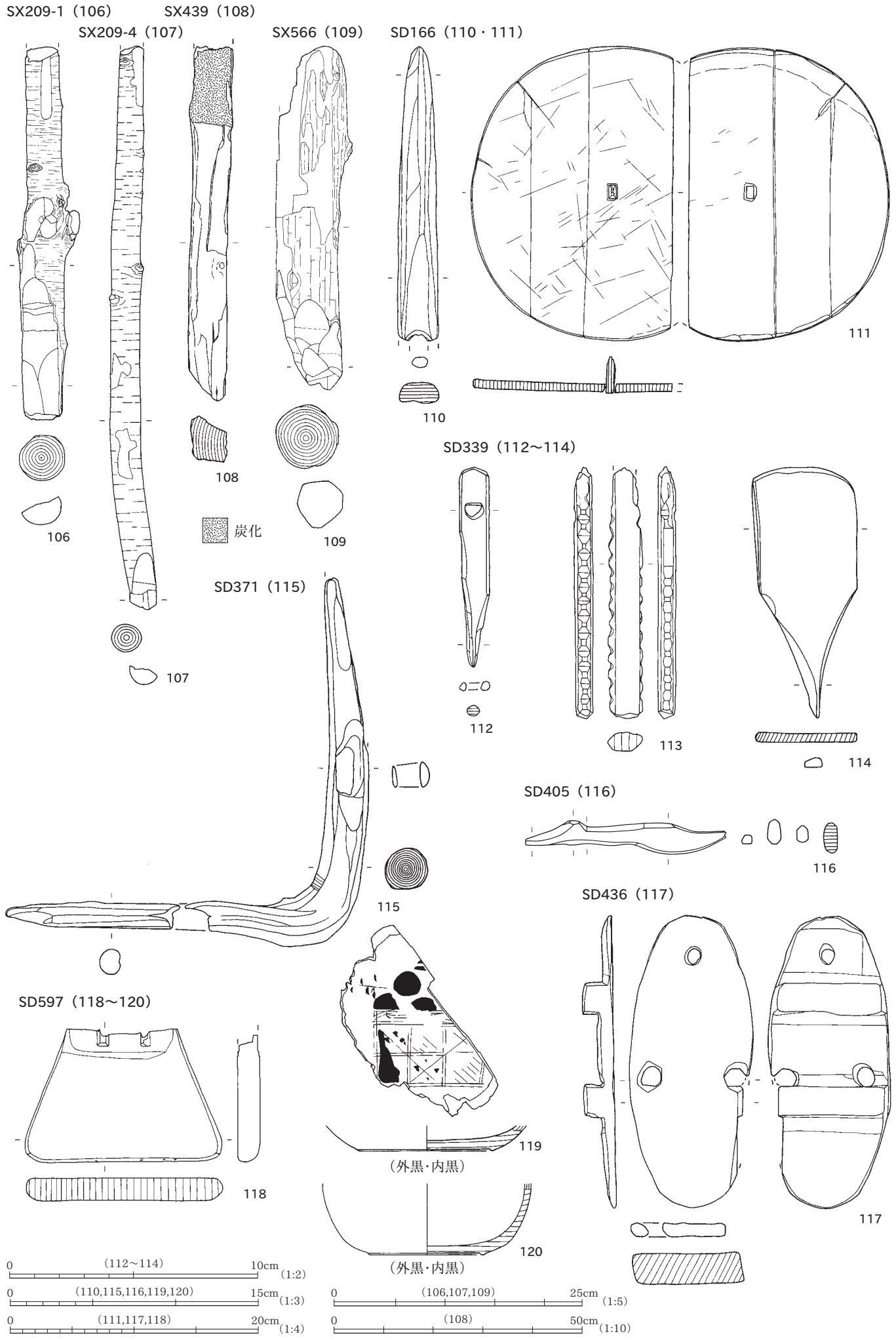
SK399（83・84）

SK529（85・86）

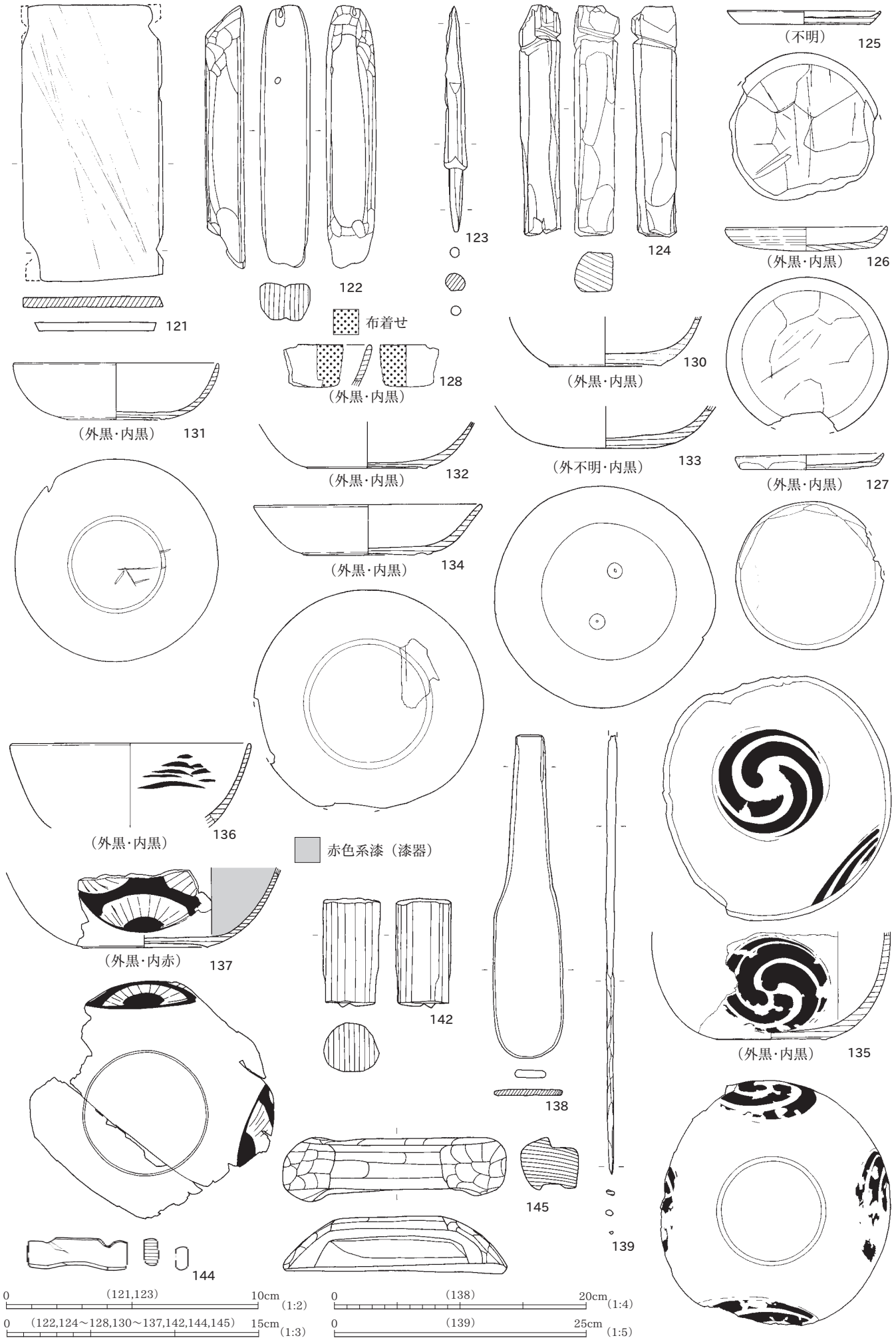
SK534（87・88）

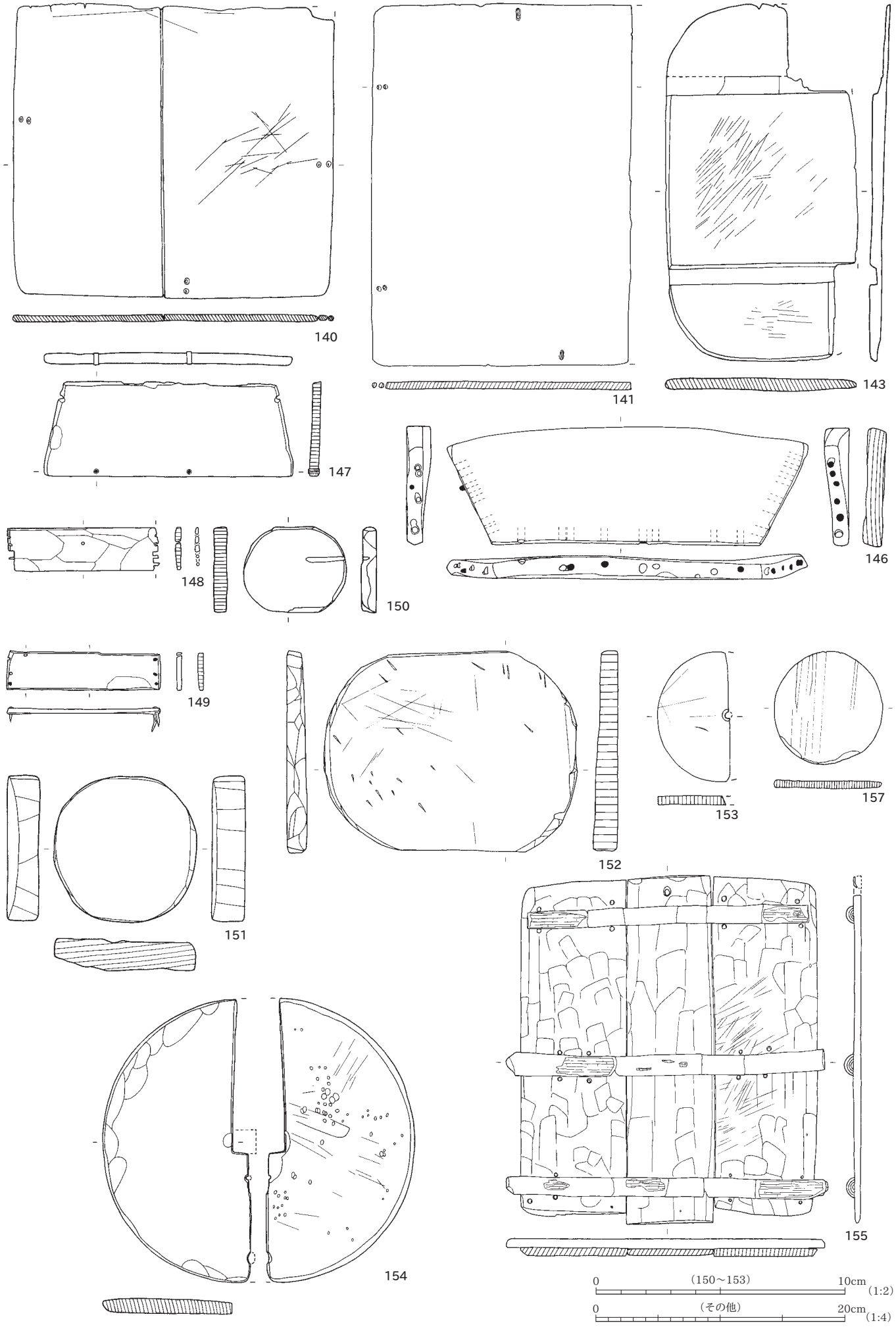


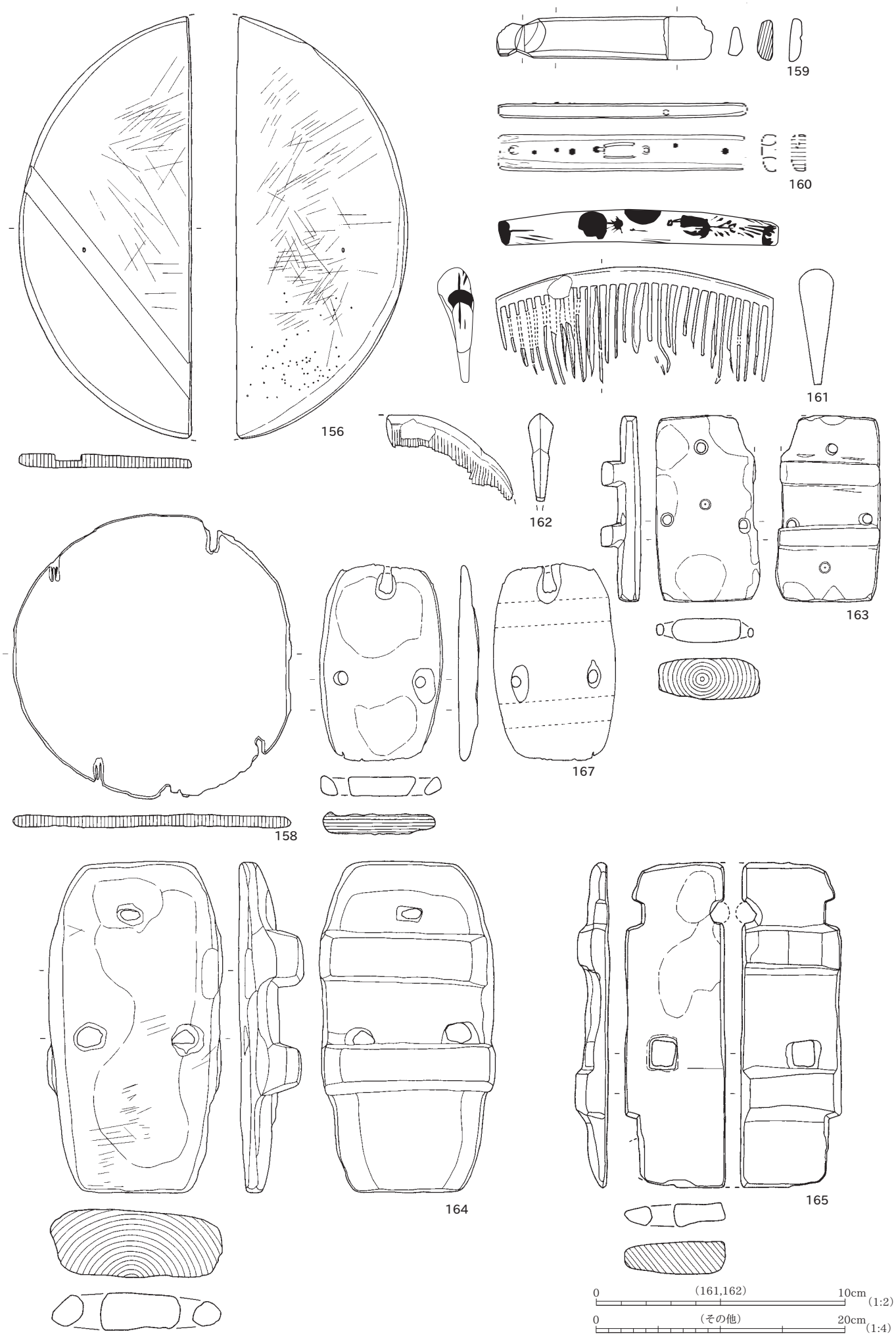

P22（89）
P28（90）
P39（91）
P76-B（92）
P386（93）
P447（94）
SA12-8（96）
SA145-2（100）
SA13-23（98）
SX30（103）
SA14-20（99）
P521（95）
炭化
SX5（101・102）
SX62（105）
SX55（104）
SA13-10（97）
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
0 (95,102,105) 15cm (1:3)
0 (101) 20cm (1:4)
0 (96～100,103,104) 25cm (1:5)
0 (89～94) 50cm (1:10)

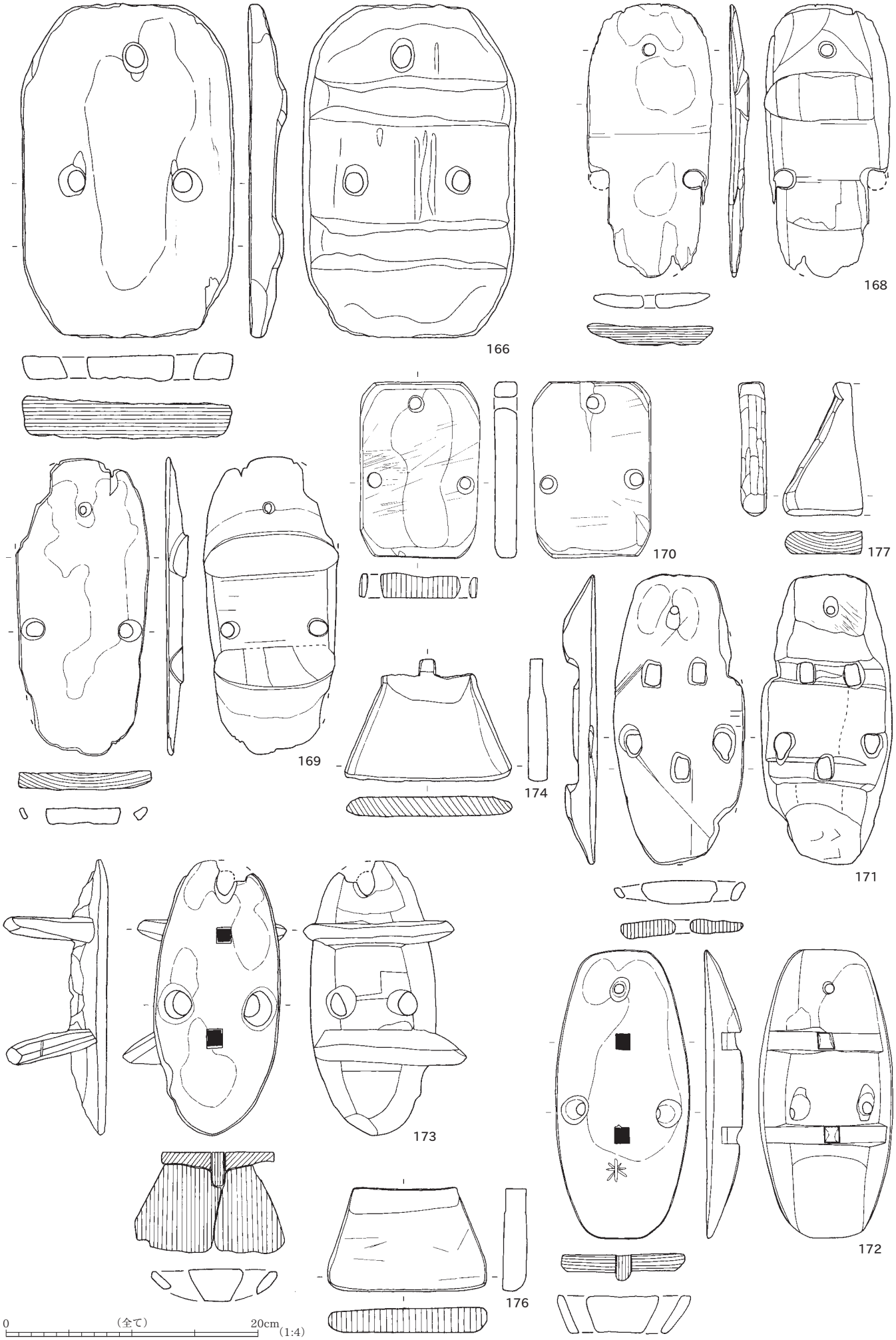

SX209-1（106）
SX209-4（107）
SX439（108）
SX566（109）
SD166（110・111）
SD339（112～114）
SD371（115）
SD405（116）
SD436（117）
SD597（118～120）
炭化
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
（外黒・内黒）
120
（外黒・内黒）
0 (112～114) 10cm (1:2)
0 (110,115,116,119,120) 15cm (1:3)
0 (111,117,118) 20cm (1:4)
0 (106,107,109) 25cm (1:5)
0 (108) 50cm (1:10)

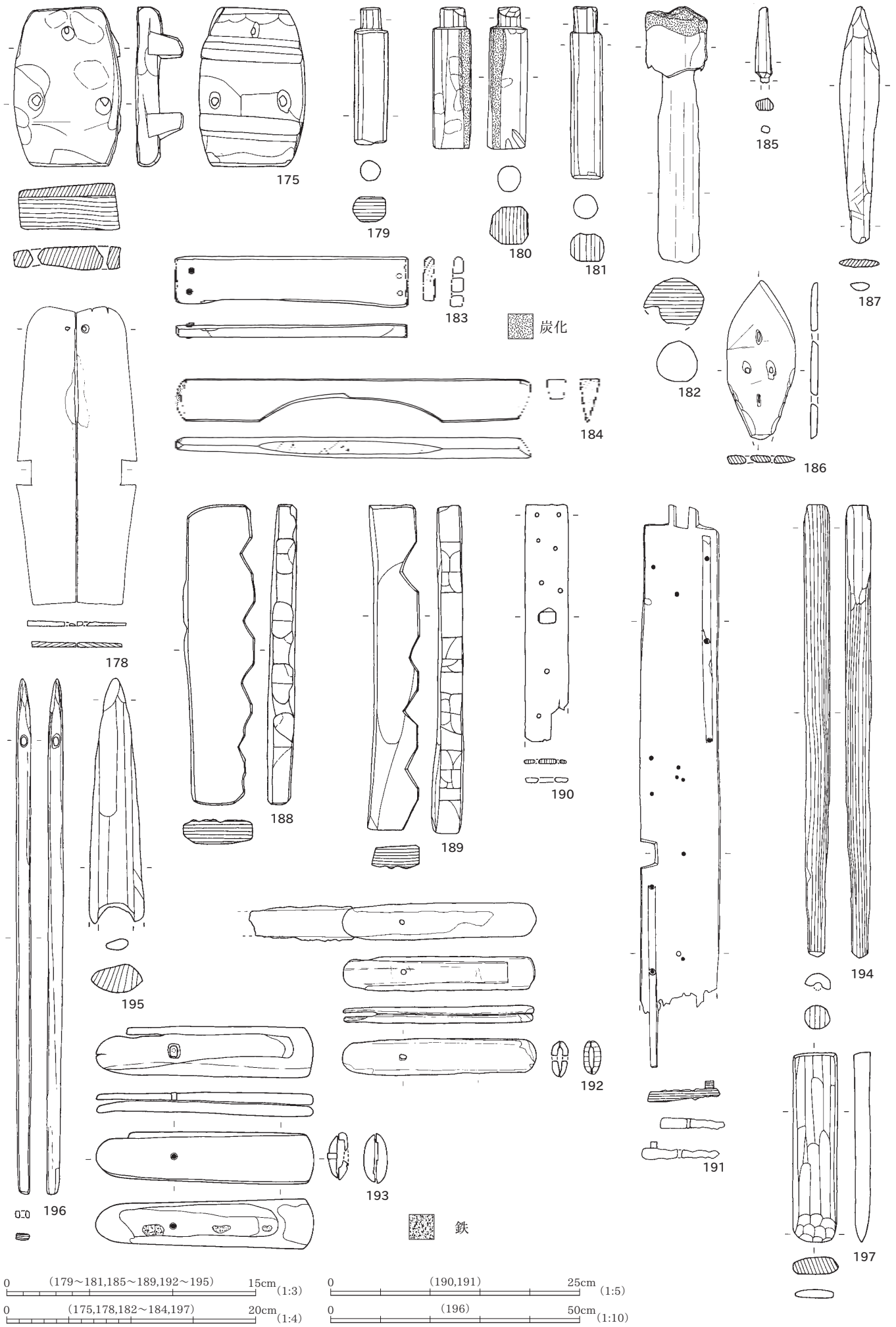
SR1-2層（121～201）

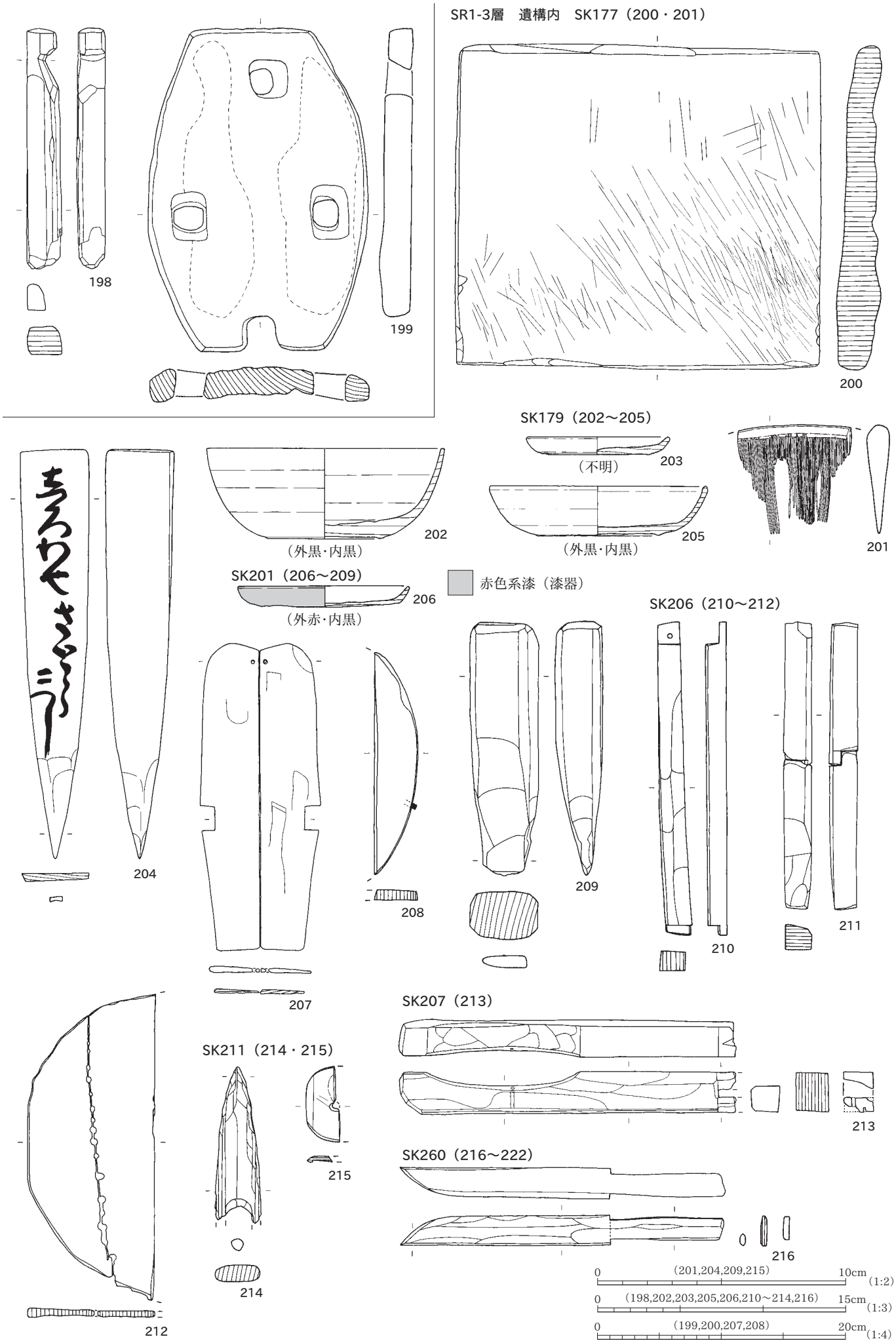


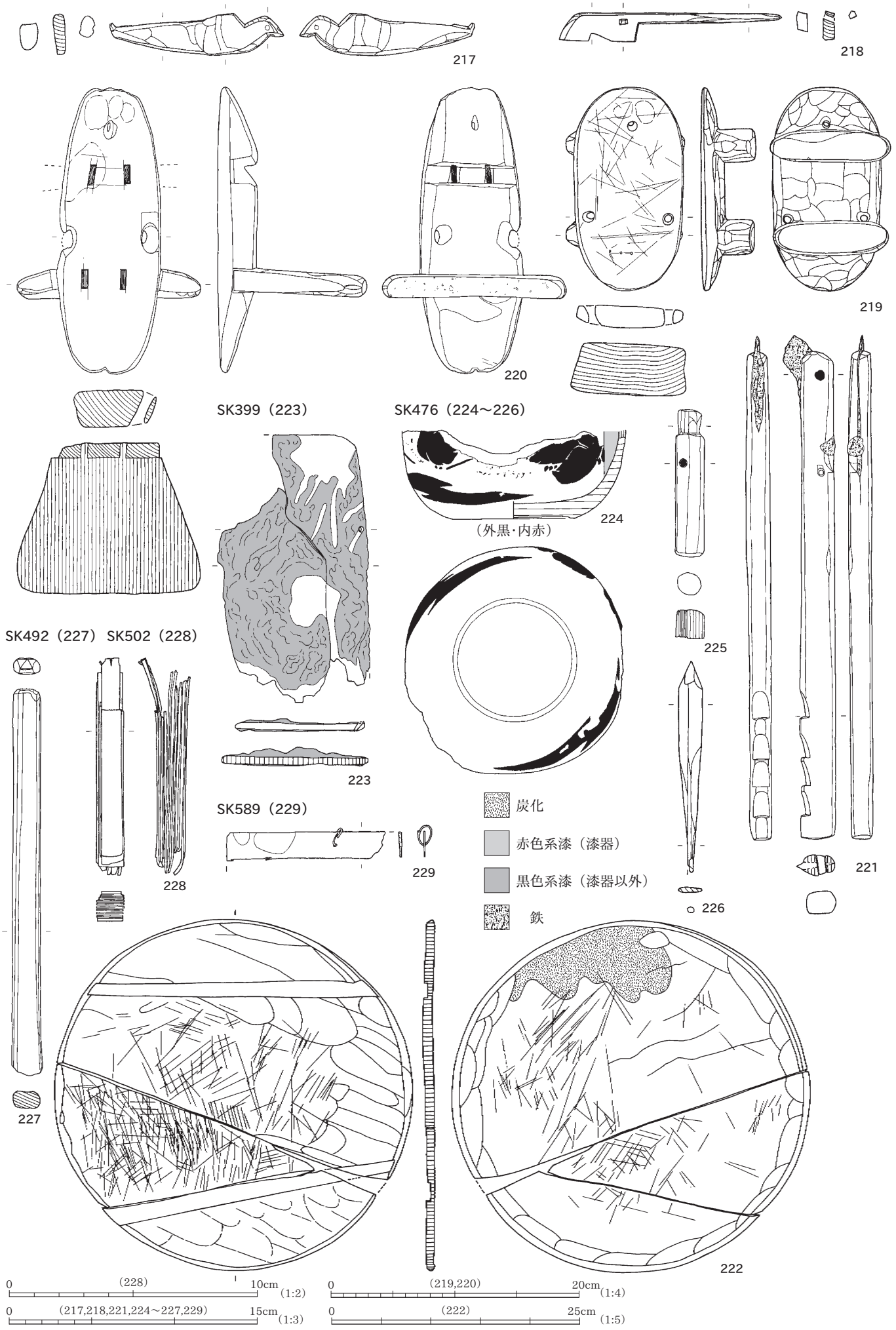

140
141
143
147
146
148
150
149
152
153
157
151
154
155
0 (150～153) 10cm (1:2)
0 (その他) 20cm (1:4)


159
160
161
156
162
163
167
158
164
165
0
(161,162)
10cm
(1:2)
0
(その他)
20cm
(1:4)

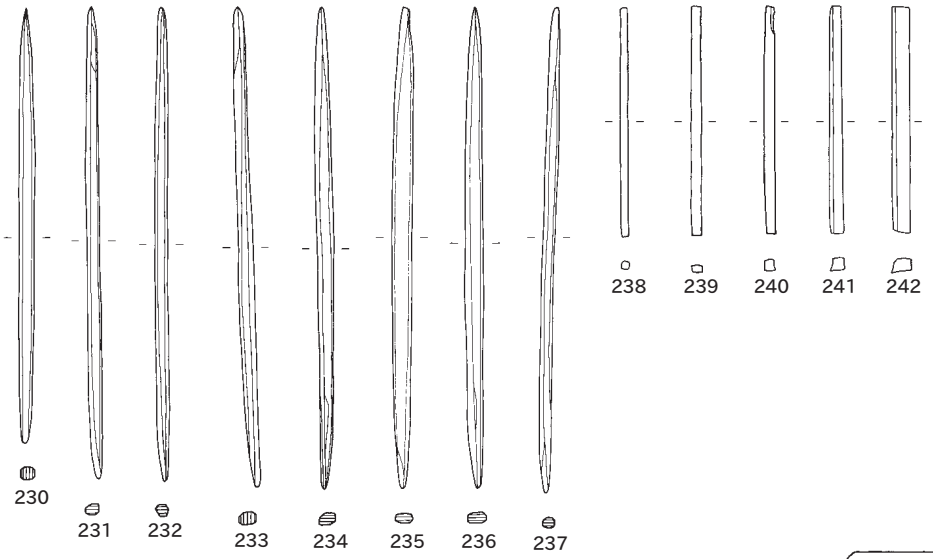

166
168
170
177
169
174
171
173
172
176
0
（全て）
20cm
(1:4)


175
179
180
181
185
187
183
炭化
182
184
186
178
188
189
190
194
195
192
191
196
193
鉄
197
0 (179～181,185～189,192～195) 15cm (1:3)
0 (190,191) 25cm (1:5)
0 (175,178,182～184,197) 20cm (1:4)
0 (196) 50cm (1:10)

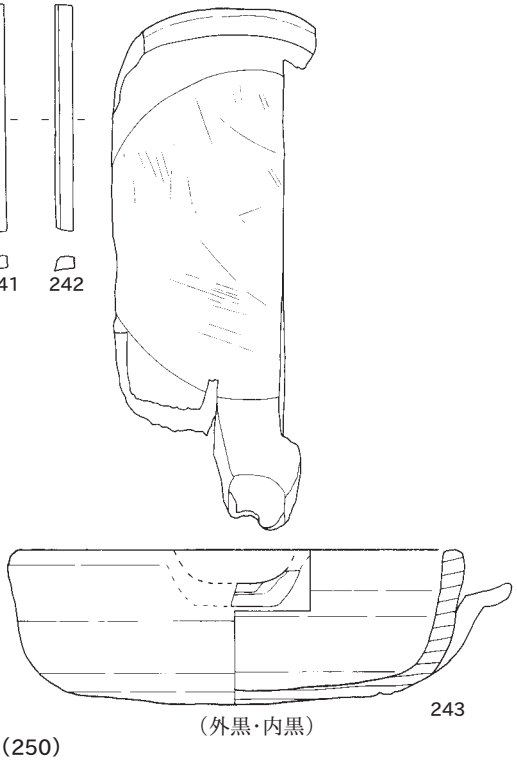

SR1-3層　遺構内　SK177（200・201）
198
199
200
SK179（202～205）
（不明）
203
202
（外黒・内黒）
205
（外黒・内黒）
201
SK201（206～209）
206
（外赤・内黒）
赤色系漆（漆器）
SK206（210～212）
204
208
209
210
211
207
SK207（213）
213
SK211（214・215）
215
214
212
SK260（216～222）
216
0 (201,204,209,215) 10cm (1:2)
0 (198,202,203,205,206,210～214,216) 15cm (1:3)
0 (199,200,207,208) 20cm (1:4)


217
218
219
220
SK399（223）
SK476（224～226）
224
（外黒・内赤）
225
221
223
SK492（227）SK502（228）
228
SK589（229）
229
226
227
222
炭化
赤色系漆（漆器）
黒色系漆（漆器以外）
鉄
0 (228) 10cm (1:2)
0 (217,218,221,224～227,229) 15cm (1:3)
0 (219,220) 20cm (1:4)
0 (222) 25cm (1:5)

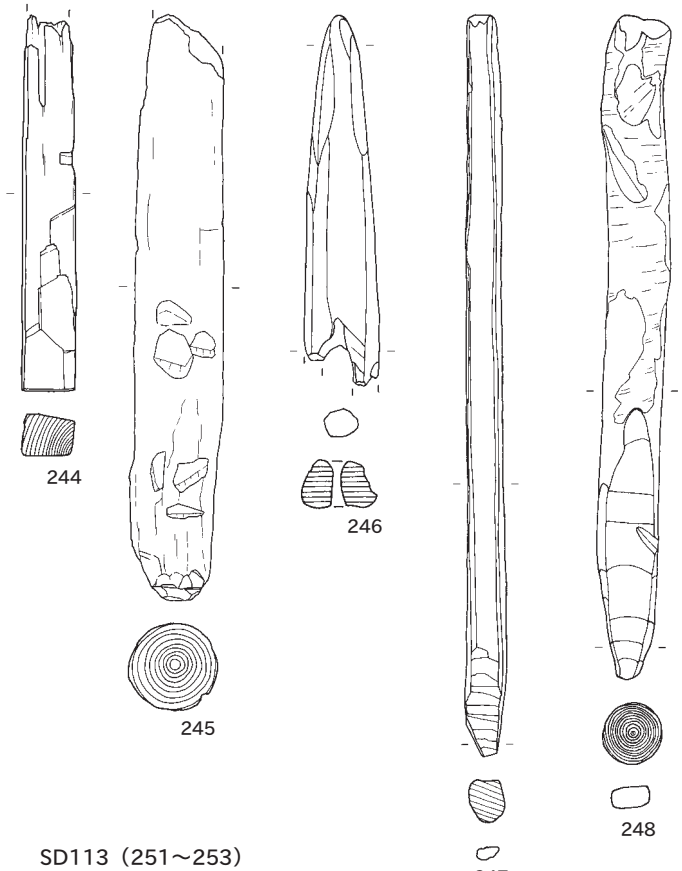
SK660（230～242）



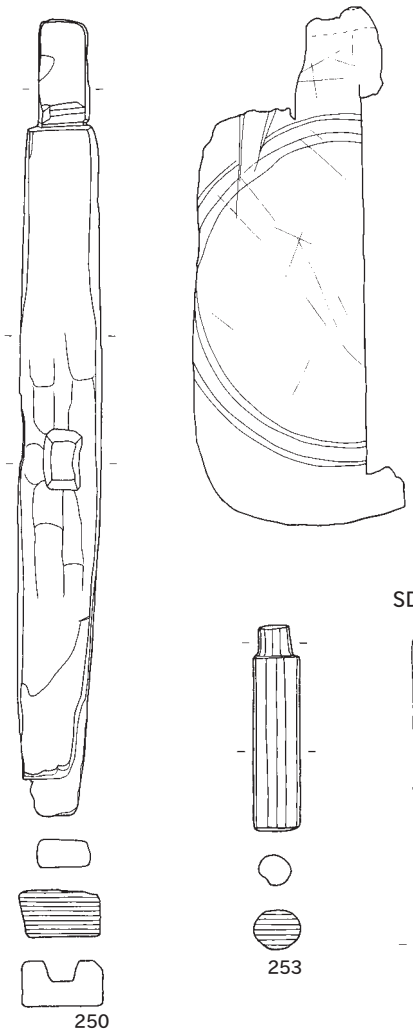
P275（243）



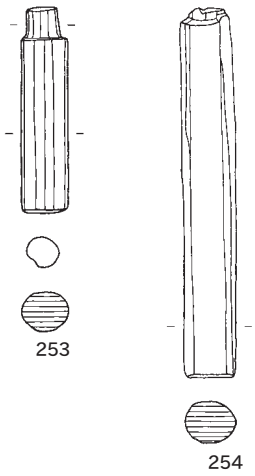
P551（244）P669（245）SX131（246）SX248（247）SX277-2（248）



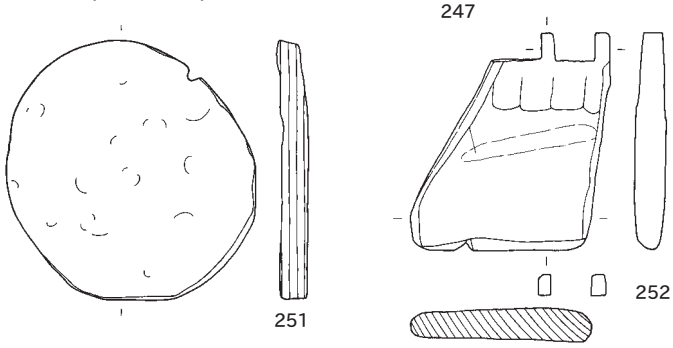
SX518（250）



SD259（254）



SD113（251～253）



0　（238～242,251）　10cm（1:2）

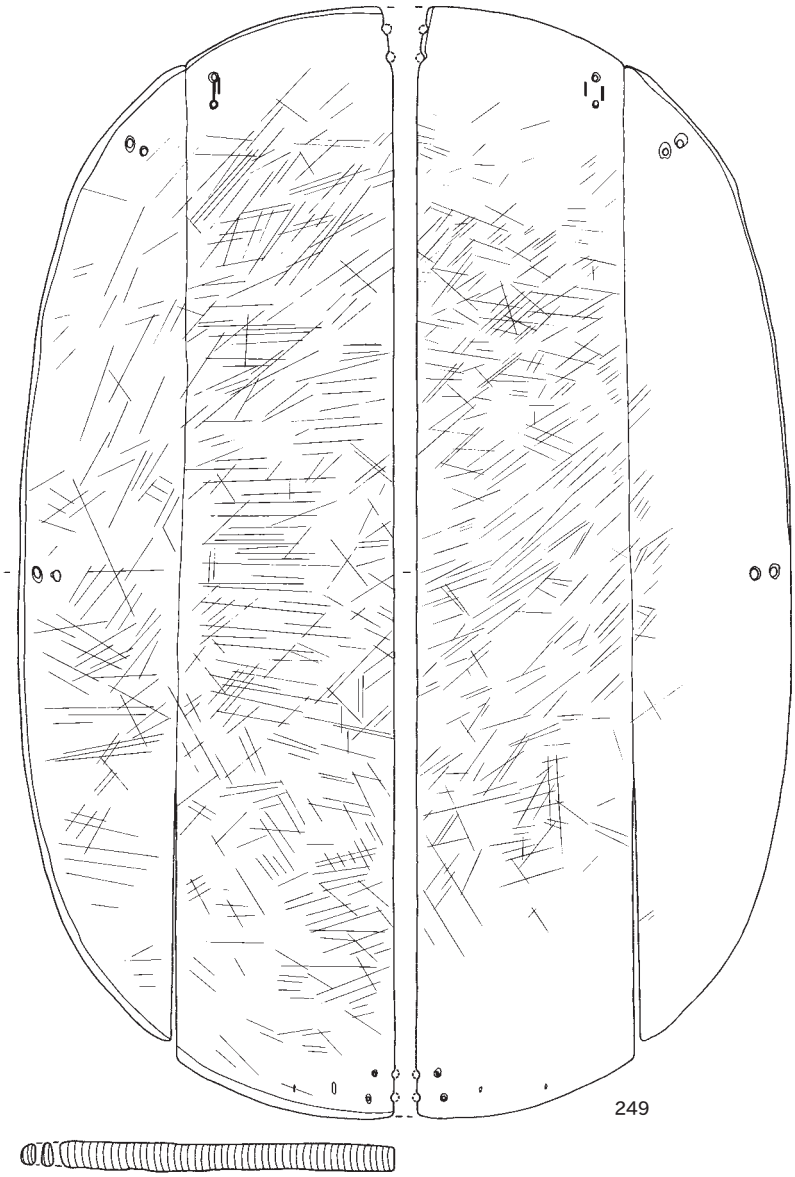
0　（230～237,243,246,253,254）　15cm（1:3）

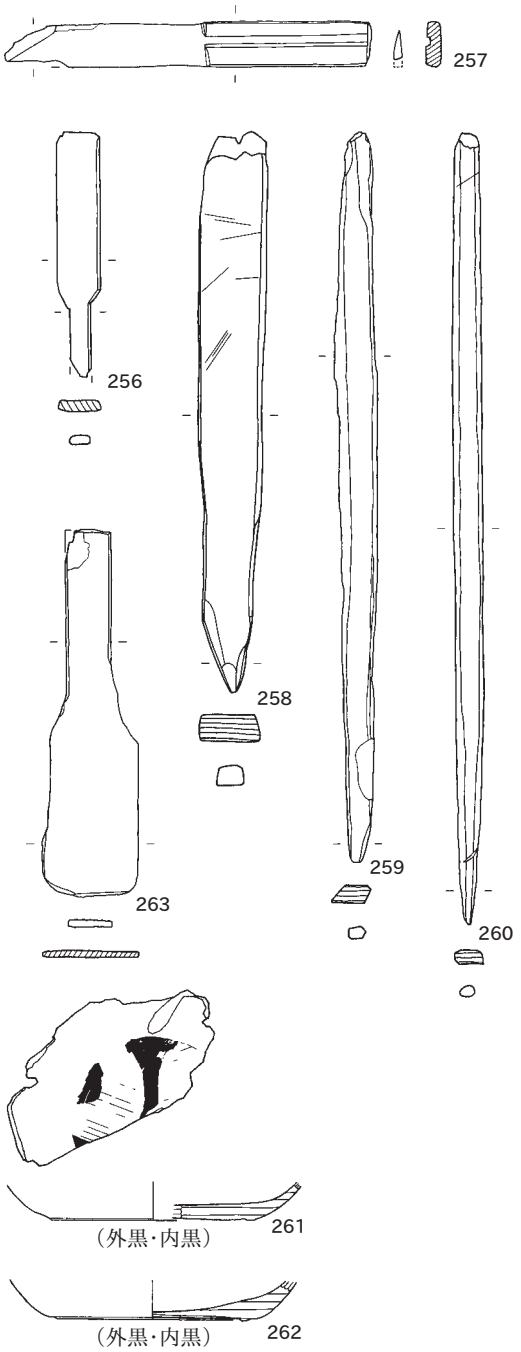
0　（252）　20cm（1:4）

0　（247,248,250）　25cm（1:5）

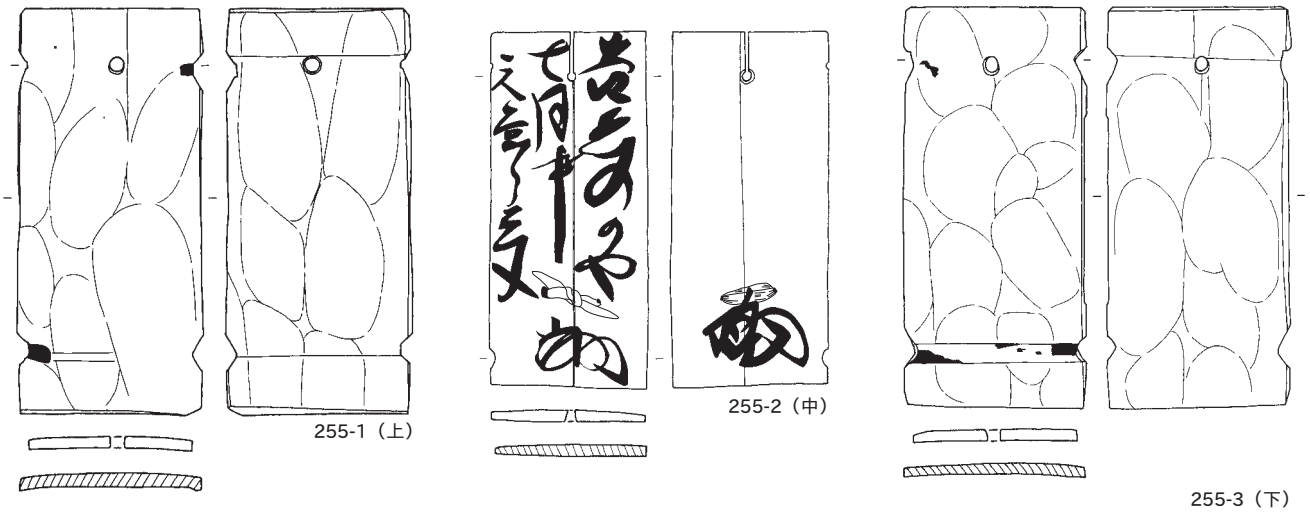
0　（244,245）　50cm（1:10）

SX277-5（249）





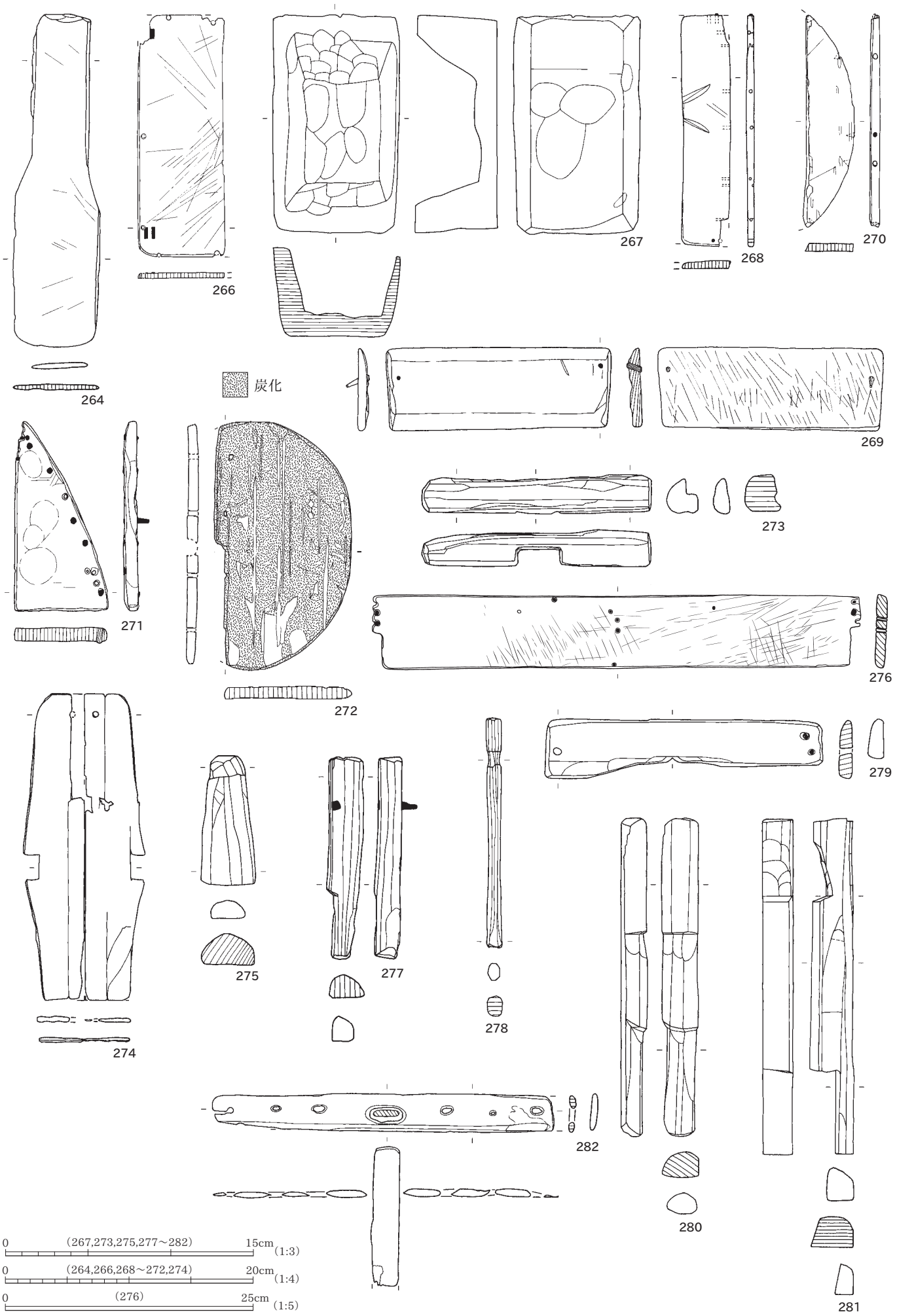
SR1-3層（255～295）

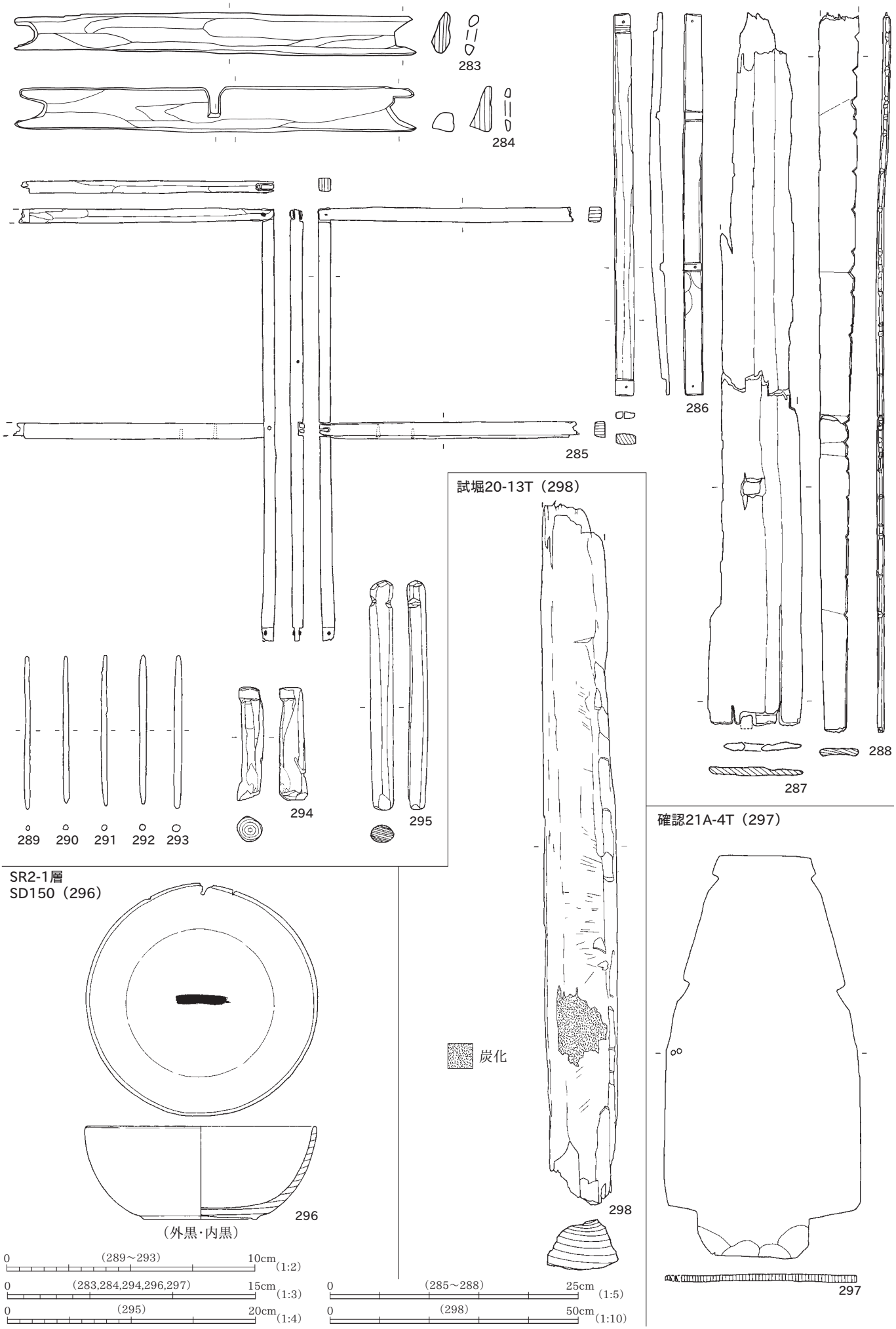


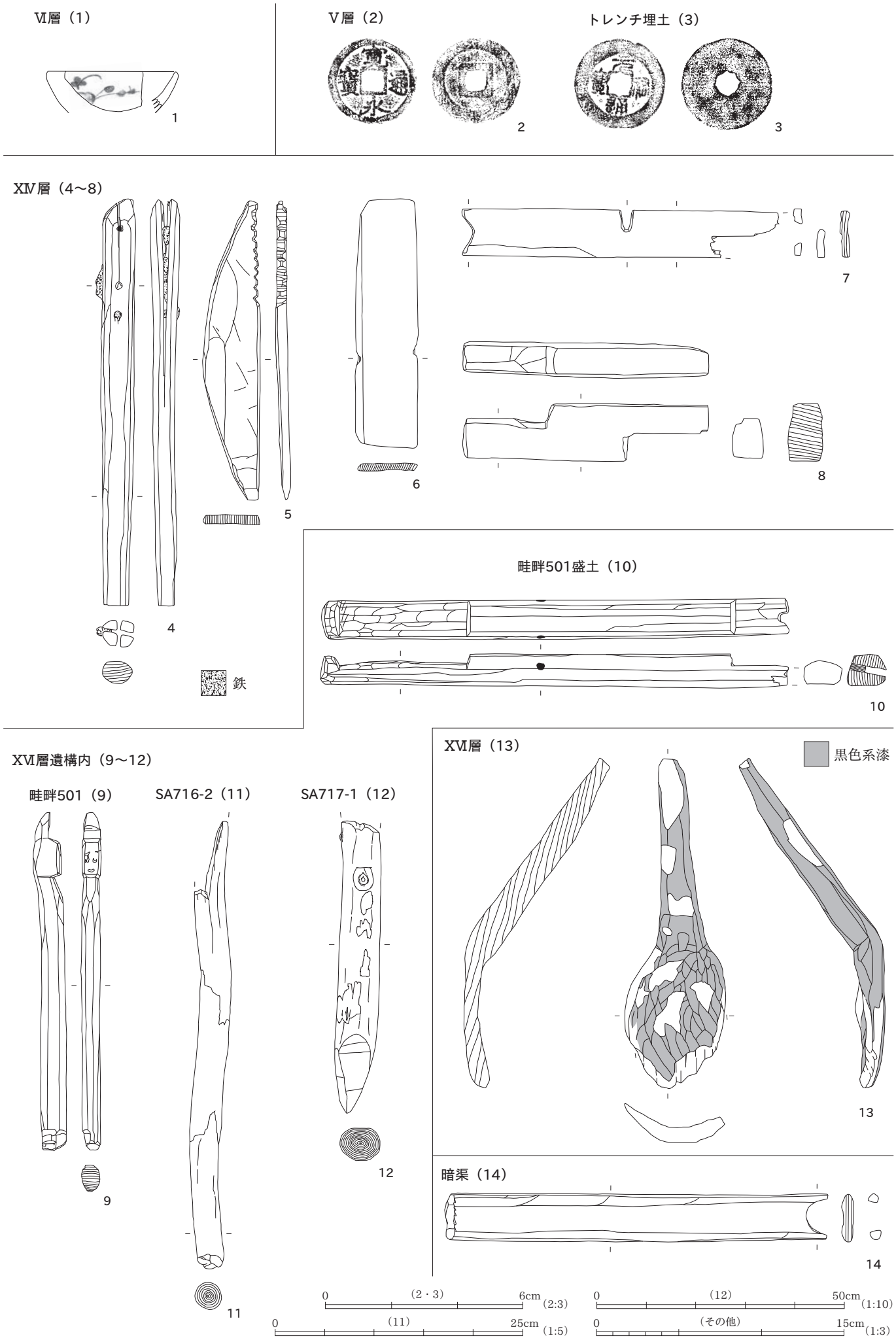
0　(255)　10cm (1:2)

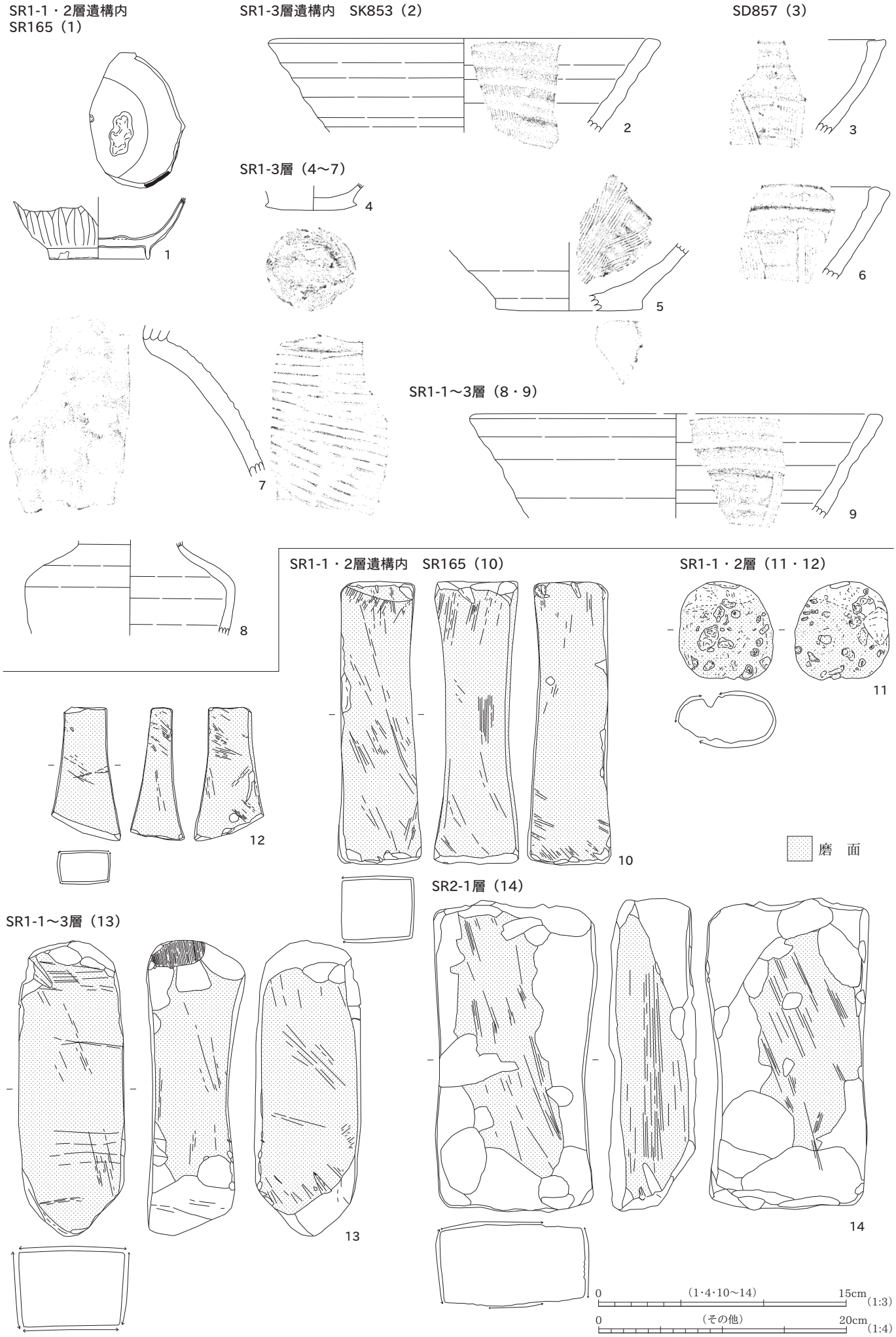
0　(256,257,259～262)　15cm (1:3)

0　(249,258,263)　20cm (1:4)

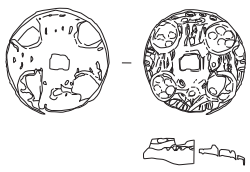

炭化
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
0 (267,273,275,277～282) 15cm (1:3)
0 (264,266,268～272,274) 20cm (1:4)
0 (276) 25cm (1:5)


283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
試堀20-13T（298）
298
炭化
確認21A-4T（297）
297
SR2-1層
SD150（296）
296
（外黒・内黒）
0 （289～293） 10cm (1:2)
0 （283,284,294,296,297） 15cm (1:3)
0 （295） 20cm (1:4)
0 （285～288） 25cm (1:5)
0 （298） 50cm (1:10)

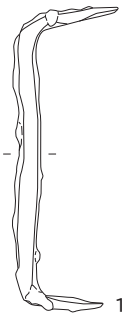

Ⅵ層（1）
1
Ⅴ層（2）
2
トレンチ埋土（3）
3
XⅣ層（4～8）
4
5
6
7
8
鉄
畦畔501盛土（10）
10
XⅥ層遺構内（9～12）
畦畔501（9）
SA716-2（11）
SA717-1（12）
9
11
12
XⅥ層（13）
黒色系漆
13
暗渠（14）
14
0 (2・3) 6cm (2:3)
0 (11) 25cm (1:5)
0 (12) 50cm (1:10)
0 (その他) 15cm (1:3)


SR1-1・2層遺構内
SR165（1）
SR1-3層遺構内　SK853（2）
SD857（3）
SR1-3層（4～7）
SR1-1～3層（8・9）
SR1-1・2層遺構内　SR165（10）
SR1-1・2層（11・12）
SR1-1～3層（13）
SR2-1層（14）
磨　面
0　（1･4･10～14）　15cm（1:3）
0　（その他）　20cm（1:4）

SR1-3層（15～17）



15

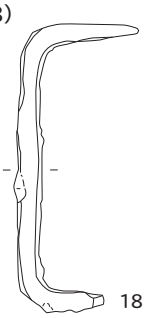


16

17

0 (15) 6cm (2:3)

SR1-1～3層（18）

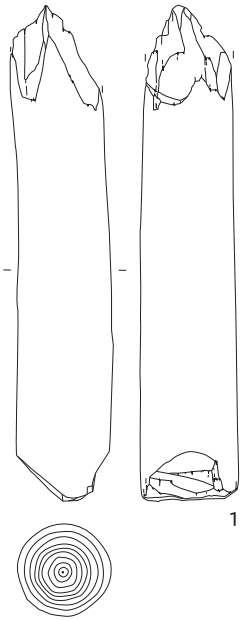


18

0 (16～18) 10cm (1:2)

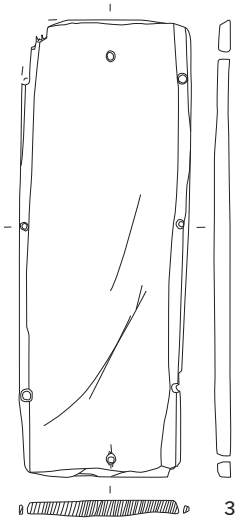
SR1-1層遺構内（1・2）
P804（2）　SB336-P8（1）

2



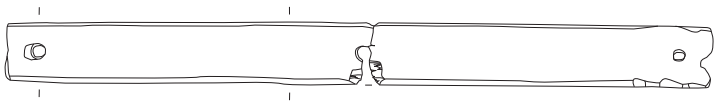
1

SR1-1・2層遺構内（3・4）
SD112（3）



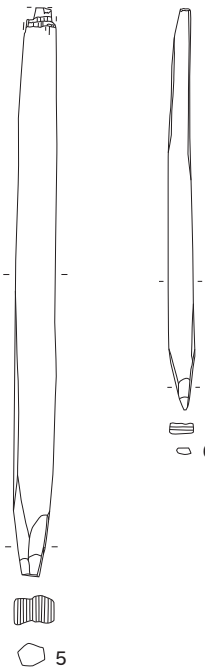
3

SR165（4）



4

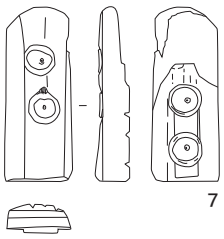
SR1-2層遺構内（5～6）
SA825-7（5）SA825-8（6）



5

6

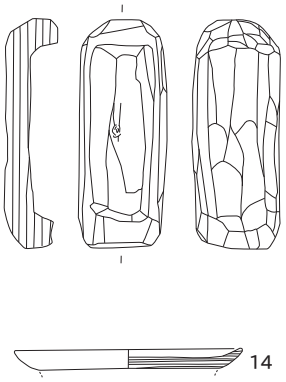
SR1-2層（7）



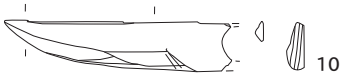
7

SR1-3層（8～36）

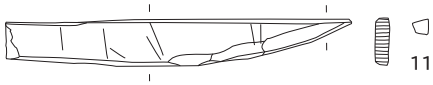
8



9



10



11

14

（外黒・内黒）

12

13

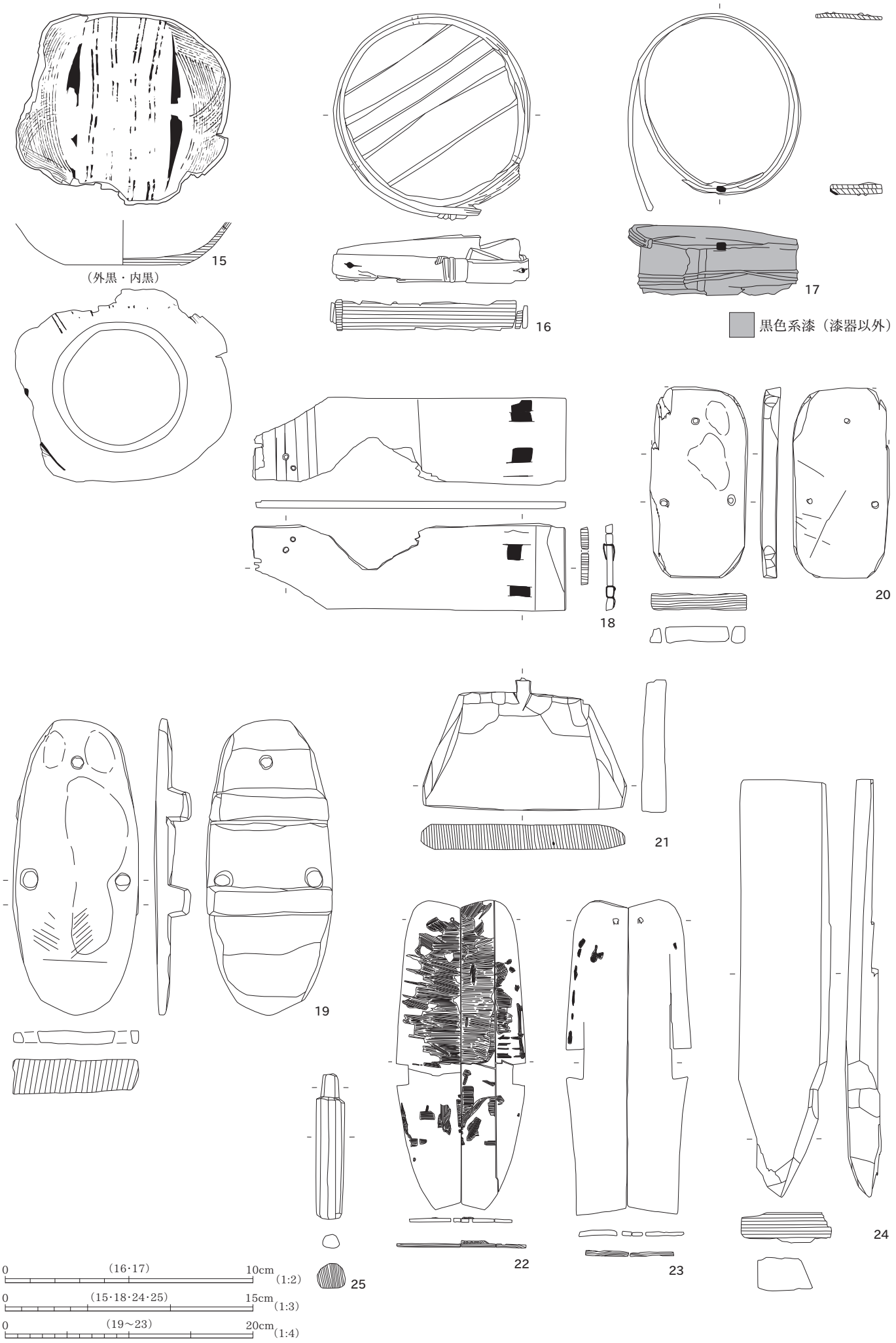
0 (7～9) 10cm (1:2)

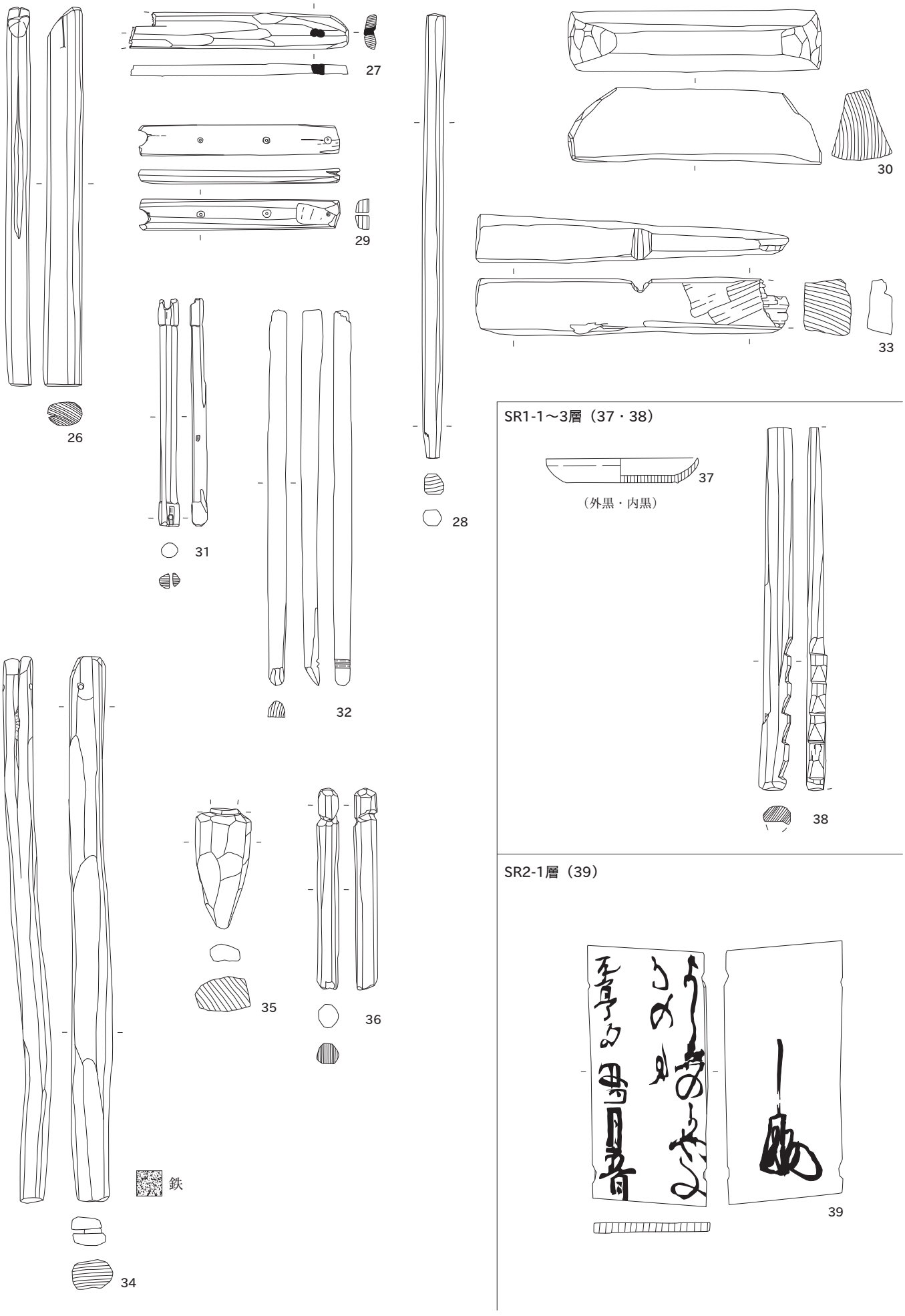
0 (3·10·11·14) 15cm (1:3)

0 (4) 20cm (1:4)

0 (5·6·12·13) 25cm (1:5)

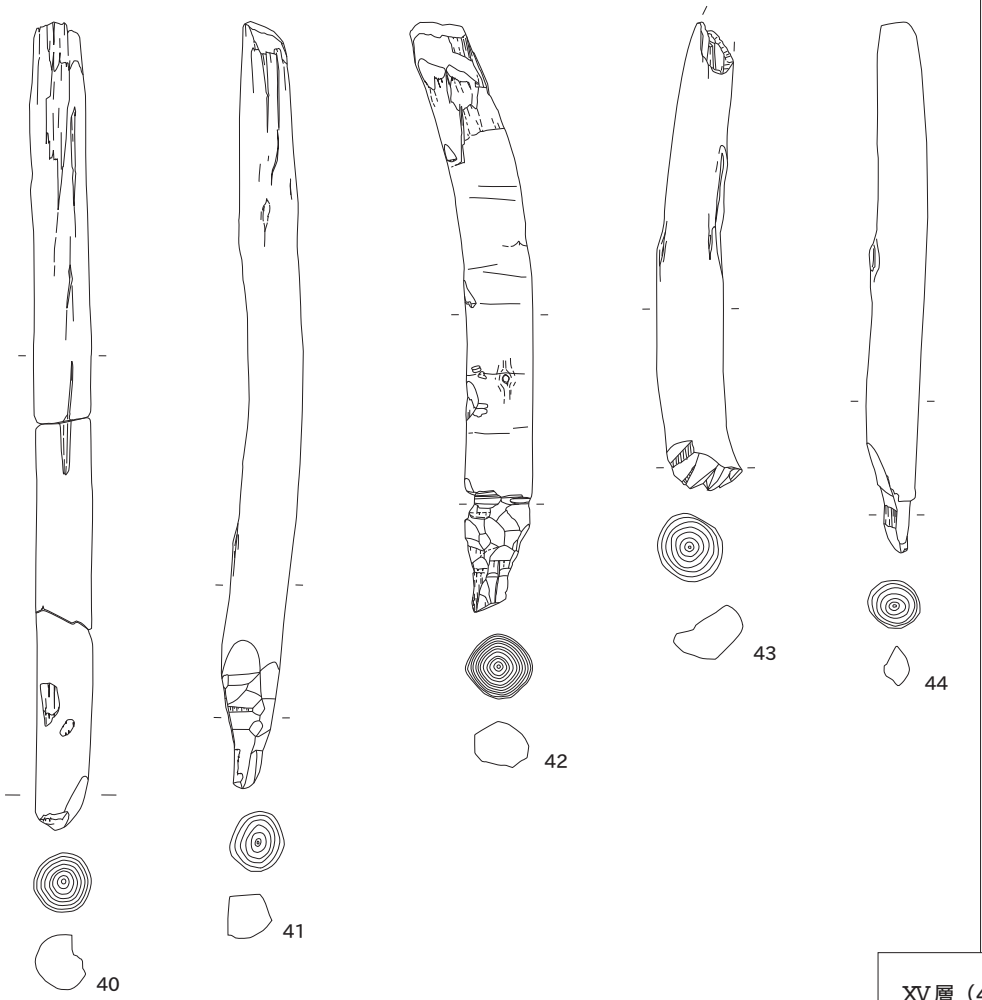
0 (1·2) 50cm (1:10)


15
（外黒・内黒）
16
17
黒色系漆（漆器以外）
18
20
19
21
22
23
24
25
0 （16･17） 10cm (1:2)
0 （15･18･24･25） 15cm (1:3)
0 （19～23） 20cm (1:4)


26
27
28
29
30
31
32
33
SR1-1～3層（37・38）
37
（外黒・内黒）
38
SR2-1層（39）
35
36
鉄
34
39
0
(39)
10cm
(1:2)
0
(その他)
15cm
(1:3)

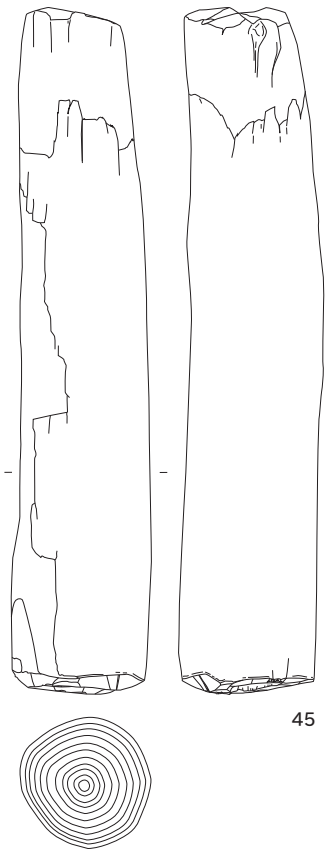
X層遺構内（40～44）

SA871-3（40）　SA871-9（41）　SA871-15（42）　SA872-2（43）　SA872-6（44）

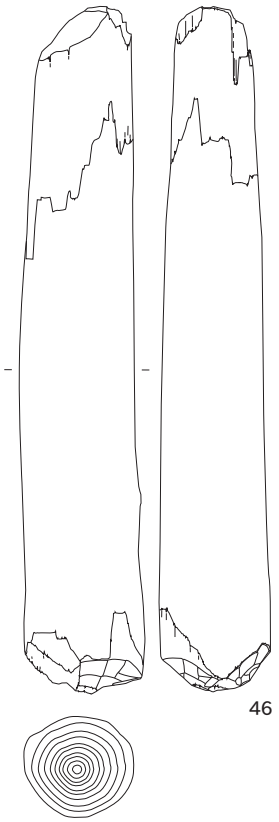


XⅡ層遺構内（45・46）

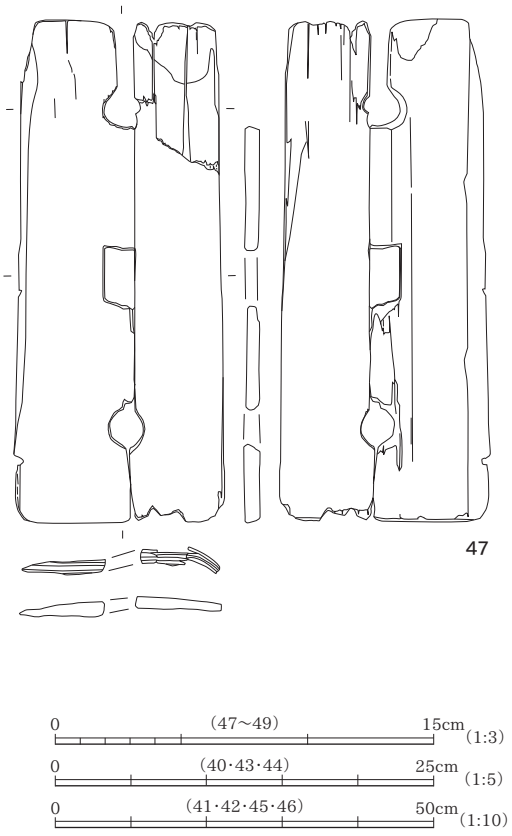
P916（45）



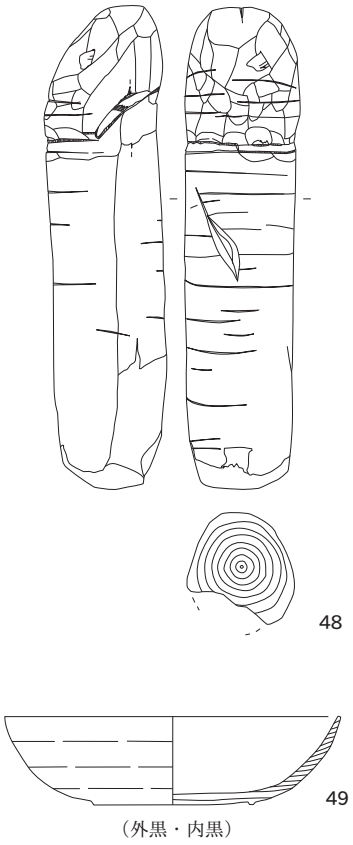
P917（46）



XⅡ層（47）



XV層（48・49）



1947 年 9 月 24 日　米軍撮影航空写真（南から）

遺跡と周辺の地形（南から）

遺跡と周辺の地形（東から）

X層水田、SR1-1・2層　北区1・南区1　全景

X層水田、SR1-1・2層南区1　遺構集中部　全景

基本層序⑫（西から）

基本層序⑱・⑲（北から）

第一号木簡（図版 82-255）出土状況（8G1 グリッドの SR1-3 層から出土、東から）

第二号木簡（図版 79-204）出土状況（SK179〔6E11 グリッド〕の 4 層から出土、南から）

刀子・下駄出土状況（6E14 グリッドの SR1-2 層から出土、北から）

人形出土状況（SR165〔5F20 グリッド〕の 2 層から出土、東から）

漆器椀 3 枚重ね出土状況（6F8 グリッドの SR1-2 層から出土、北東から）

編組出土状況（SR165〔5F4 グリッド〕の 3 層から出土、南から）

烏帽子？出土状況（6E5 グリッドの SR1-2 層から出土、北から）

鉄椀出土状況（6E18 グリッドの SR1-1 層から出土、南から）

SK399　曲物と曲物蓋出土状況（覆土上層から出土、東から）

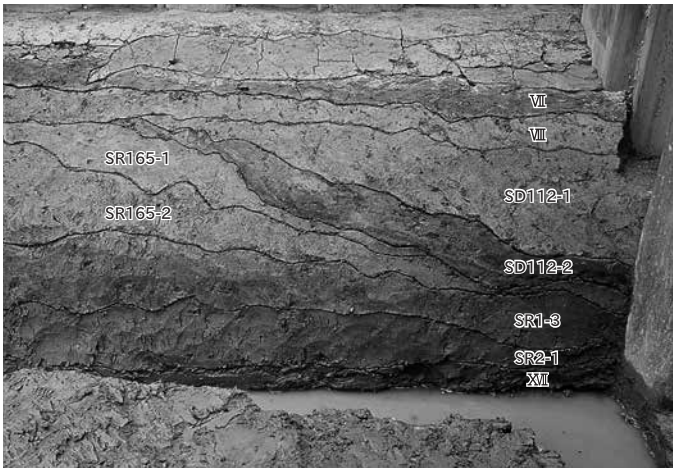
SK399　曲物出土状況（覆土上層から出土、東から）

SR1-1・2層（7・8Ｉグリッド）　完掘（西から）

SR165　青磁椀　出土状況（西から）

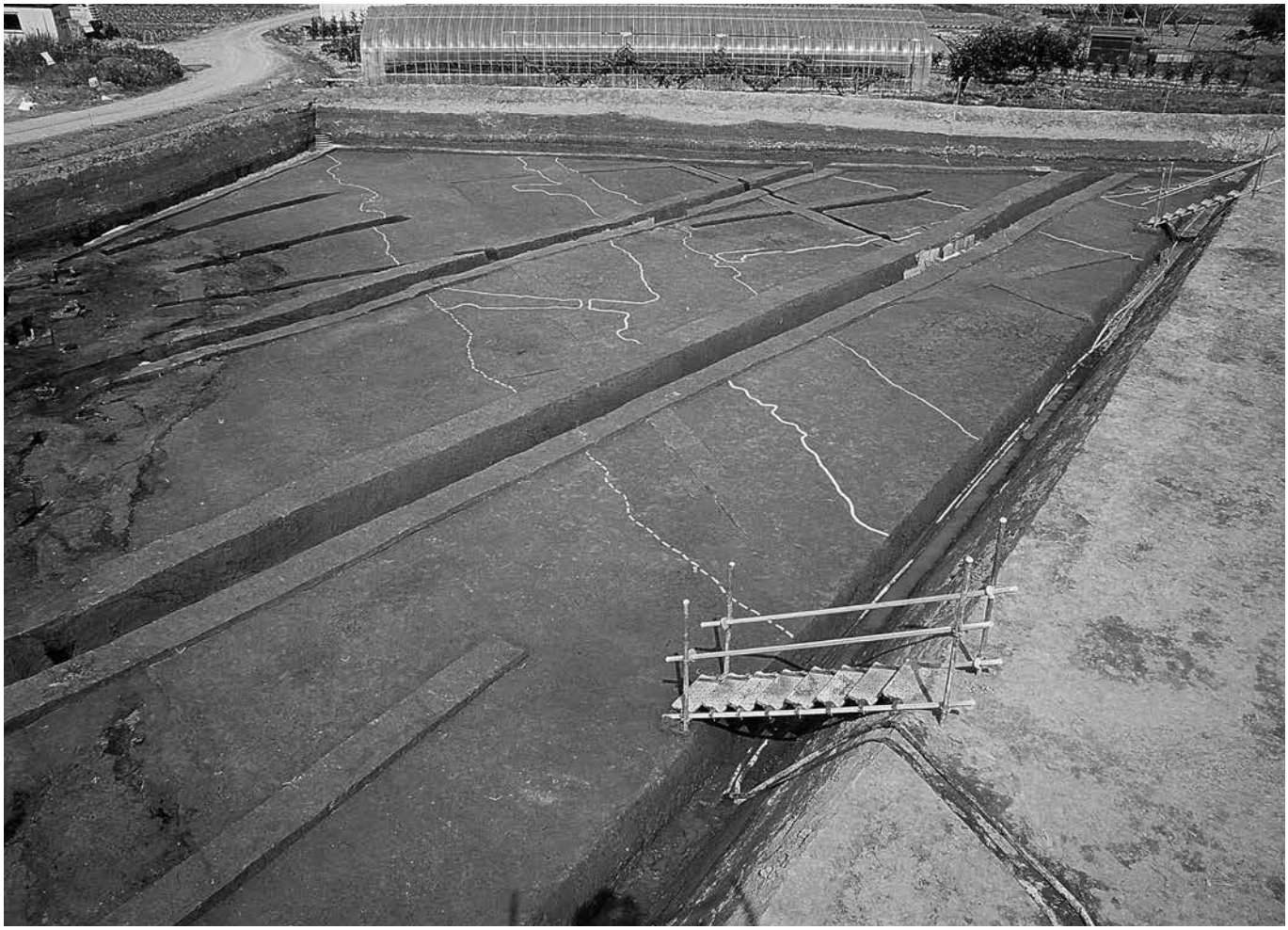
SD112　遺物出土状況（北から）

SR165　断面（南から）

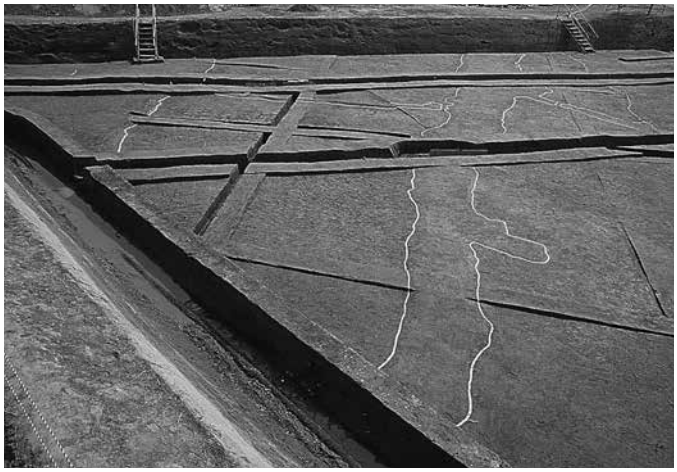


SD112、SR165　断面（南から）

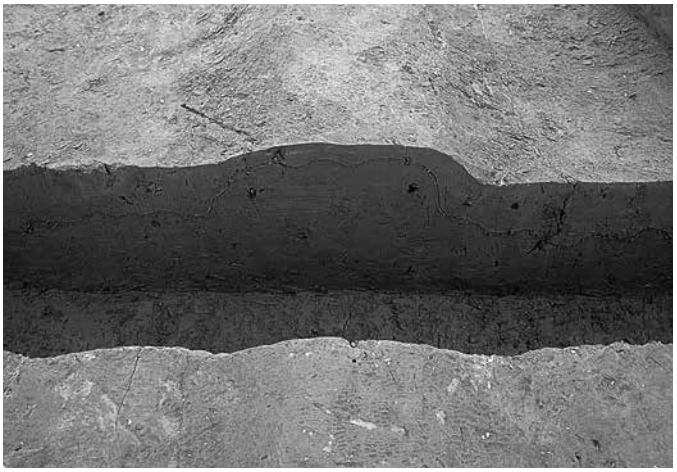
X層水田南区１　全景



X層水田南区１　全景（南西から）



水田　完掘（北東から）

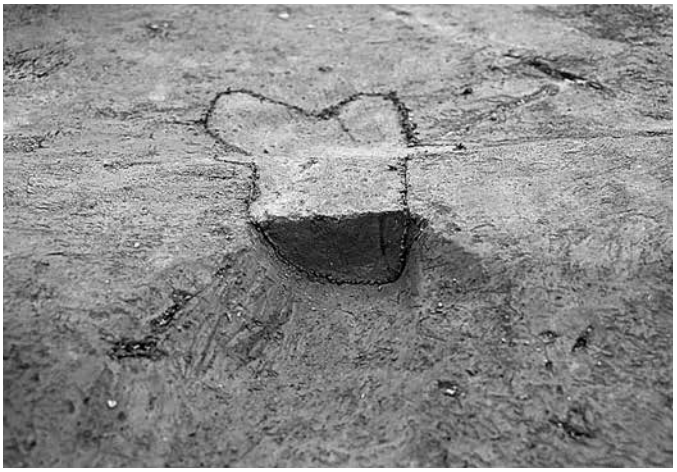


畦畔 204　断面 H-H'（北西から）

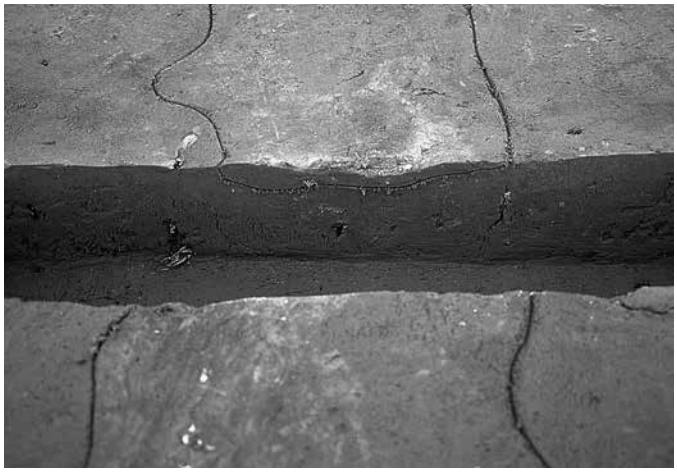
水田土層断面（水田 G-G'）（南西から）

水口 A・B　完掘（西から）

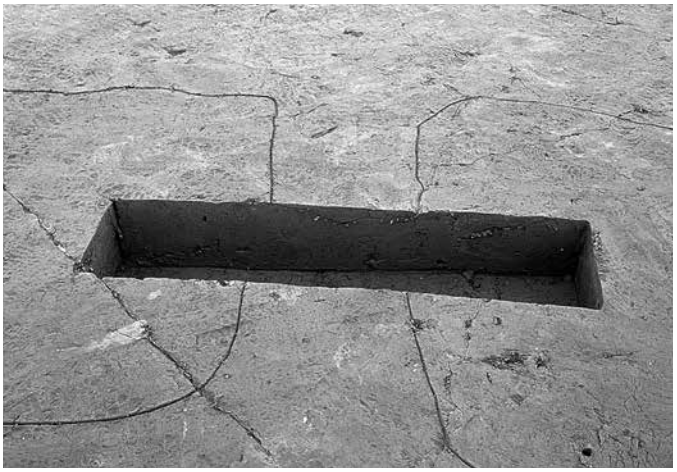
水口 A　断面（西から）



水口 B　断面（西から）



水口 C　断面（南西から）



水口 D　断面（西から）

SB336　全景（南西から）

SB336-P2　断面（南西から）

SB336-P3、P751　断面（南西から）

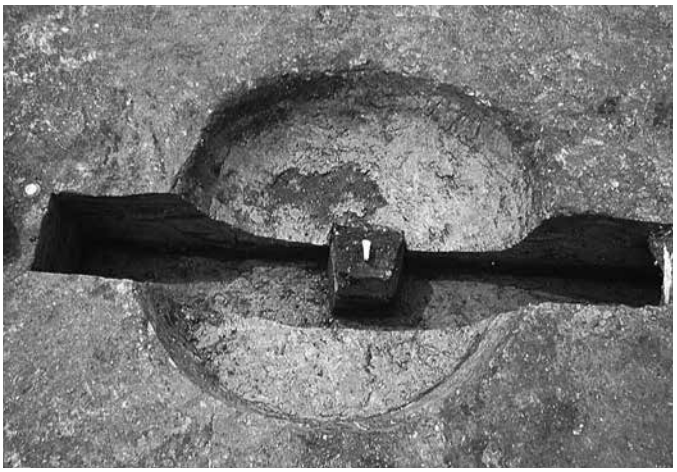
SB336-P4　断面（南西から）

SB336-P6　断面（北東から）

SB336-P7　断面（北東から）

SB336-P8　断面（南西から）

SK4　断面（南東から）



SK4　完掘（南東から）

SK29　断面（北西から）

SK29　完掘（北西から）

SK65　断面（南西から）

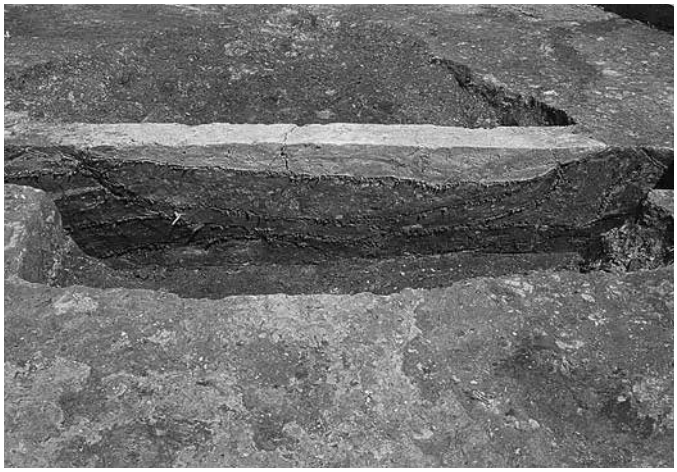
SK65　完掘（北東から）

SK69　断面（南東から）

SK69　完掘（北西から）

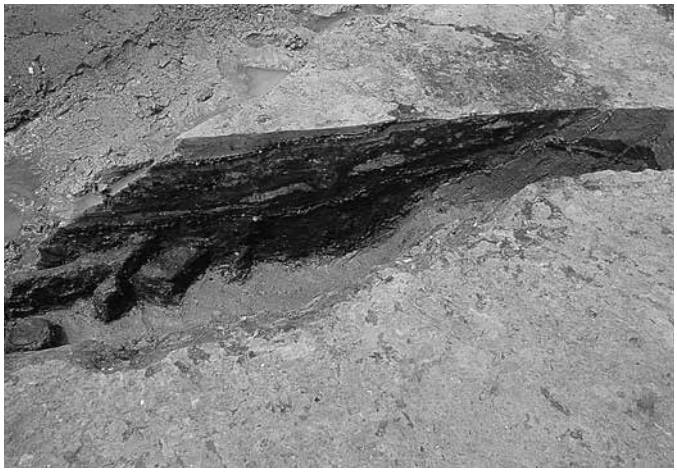
SK70　断面（北西から）

SK70　完掘（南東から）



SK72　断面（南東から）

SK72　完掘（南西から）



SK75　断面（北東から）

SK75　完掘（北から）

SK85　断面（南西から）

SK85　完掘（西から）

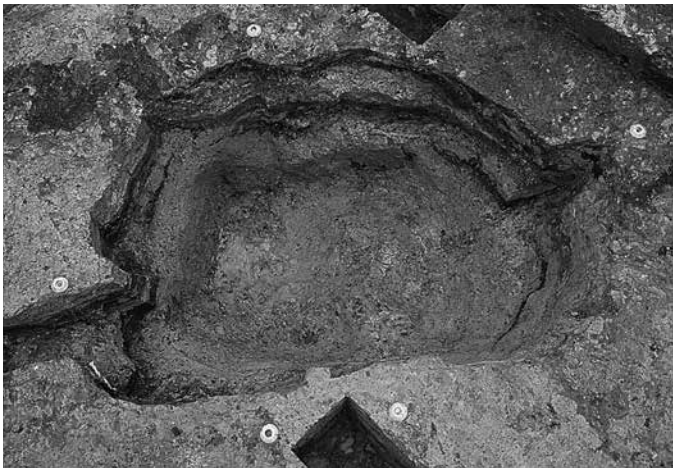
SK86　断面（南から）

SK86　完掘（北から）

SK94　断面（南西から）

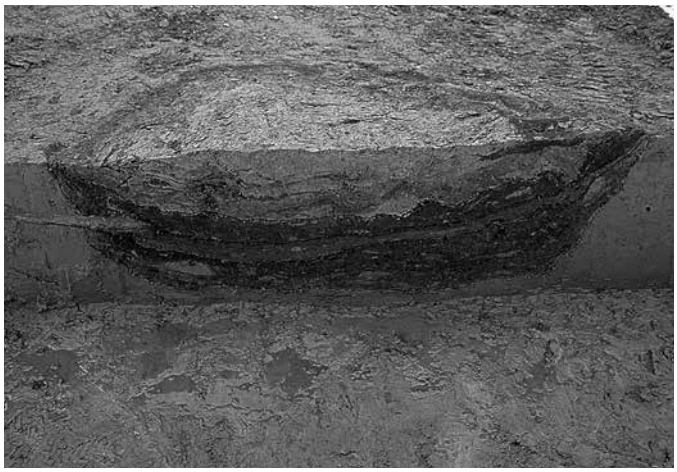
SK94　完掘（南東から）

SK167　断面 A-A'（東から）

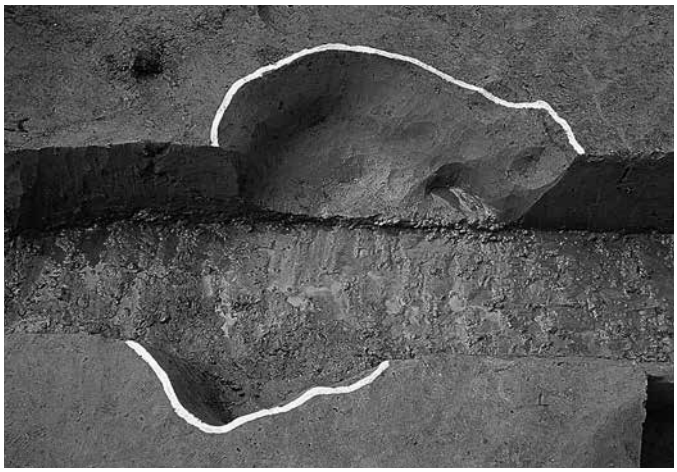

SK167　完掘（北から）

SK169　断面（南から）

SK169　完掘（北から）



SK267　断面（北から）



SK267　完掘（北から）

SK334　断面（西から）

SK334　完掘（北から）

SK335　断面（北から）

SK335　完掘（北西から）

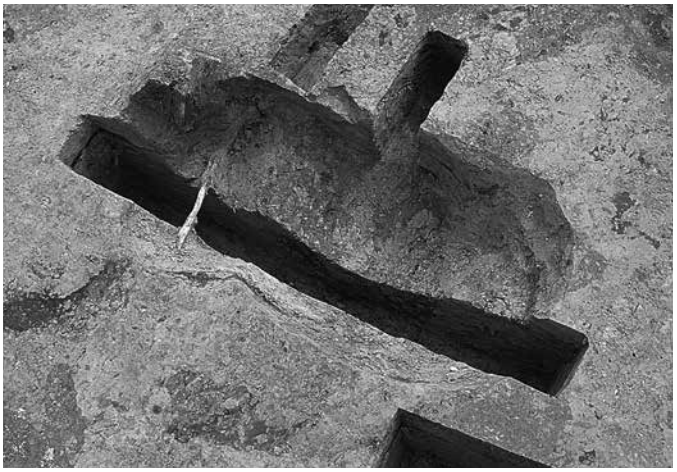
SK381　断面（北から）

SK381　遺物出土状況（北東から）

SK399・400　断面（南から）

SK399・400　完掘（北から）

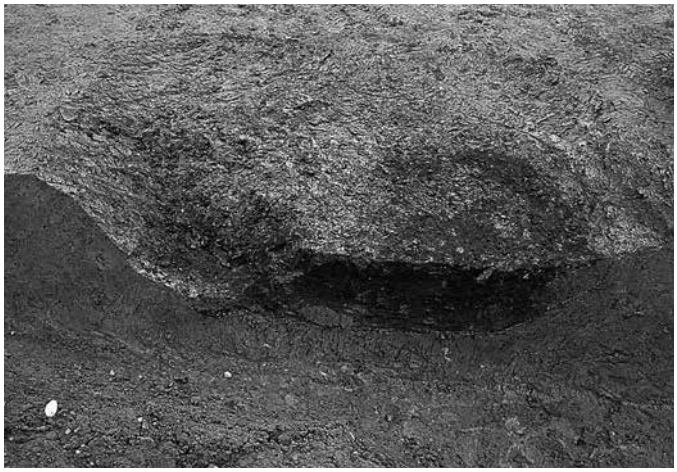
SK410　断面（北から）



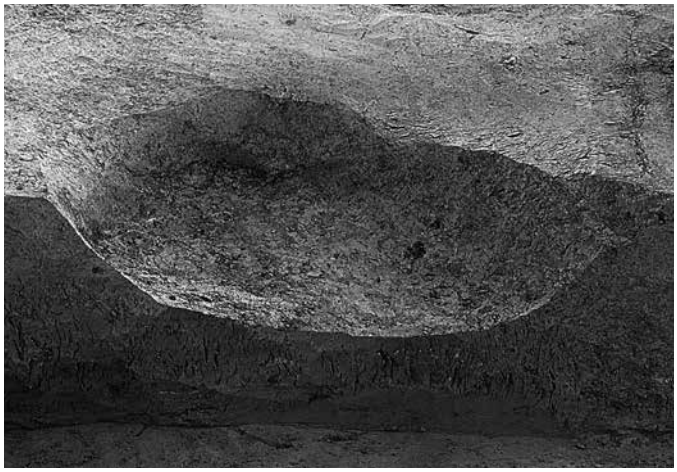
SK410　完掘（北西から）

SK473　断面（南西から）

SK473　完掘（北東から）



SK488　断面（北から）

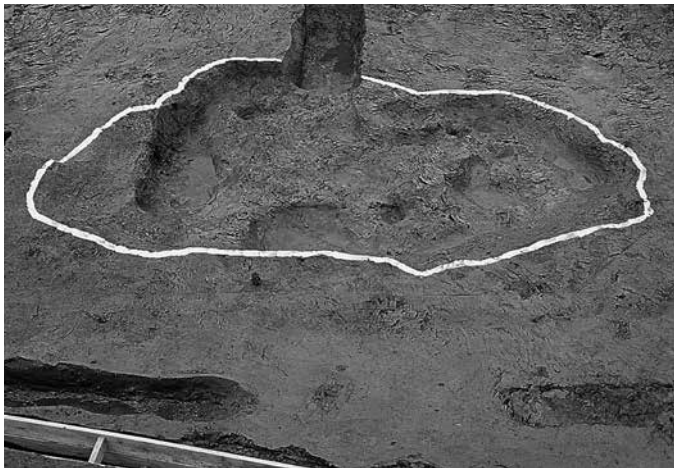


SK488　完掘（北から）

SK527　断面（西から）

SK527　完掘（西から）

SK529　断面（南東から）



SK529　完掘（南東から）

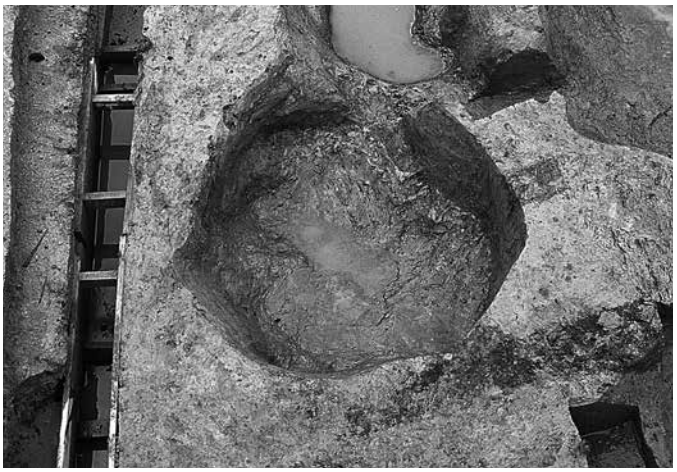
SK534　出土状況（北西から）

SK547・534　断面（北東から）

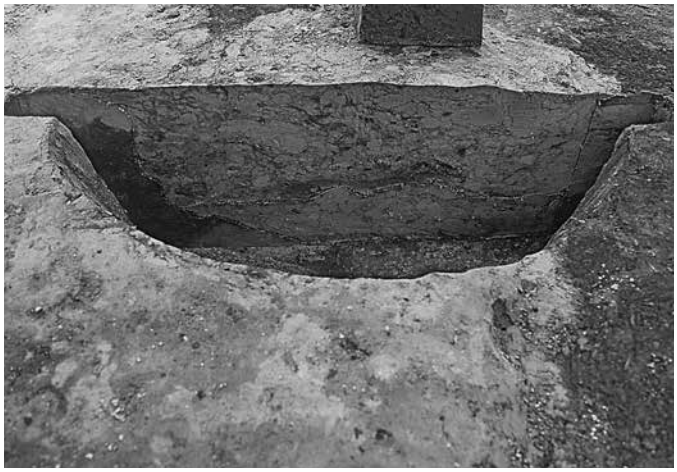
SK534　完掘（北東から）

SK547　完掘（北東から）

SK562　断面（北東から）



SK562　完掘（北東から）

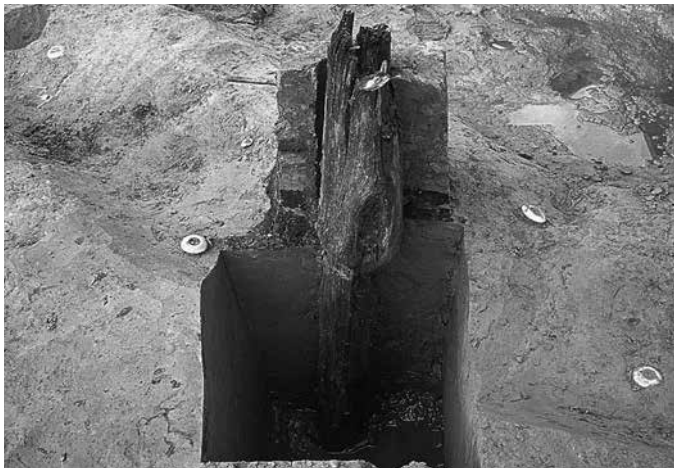


SK802　断面（東から）

SK802　完掘（東から）

P22　断面（南東から）

P28　断面（南東から）



P39　断面（南から）

P43　断面（北東から）

P63・56　断面（南西から）

P76A・P76B　断面（南西から）

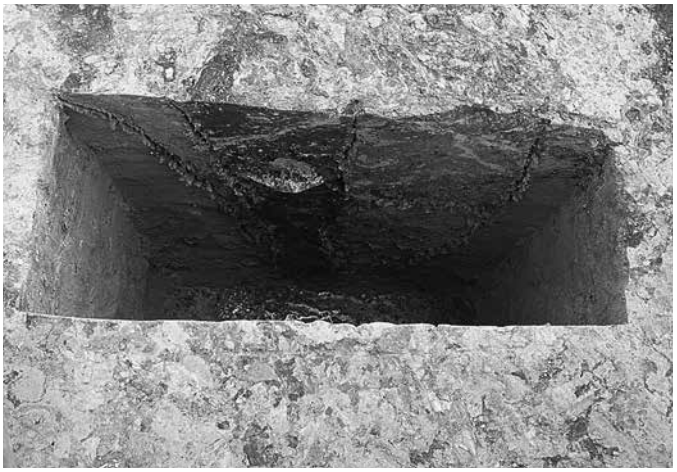
P80　断面（東から）

P81　断面（南から）

P88　断面（東から）

P159・SK65　断面（南西から）

P386　断面（南から）



P414　断面（南西から）

P447　断面（南から）

P449　断面（西から）

P611　断面（南から）

P750・756　断面（南東から）

P752　断面（南東から）

P753　断面（南西から）

P754　断面（南東から）

P757　断面（北東から）

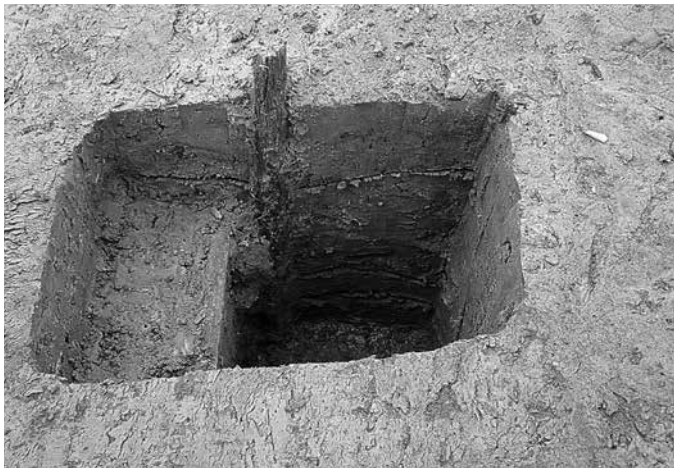
P804　断面（南から）

P805　断面（北東から）

P807　断面（北西から）

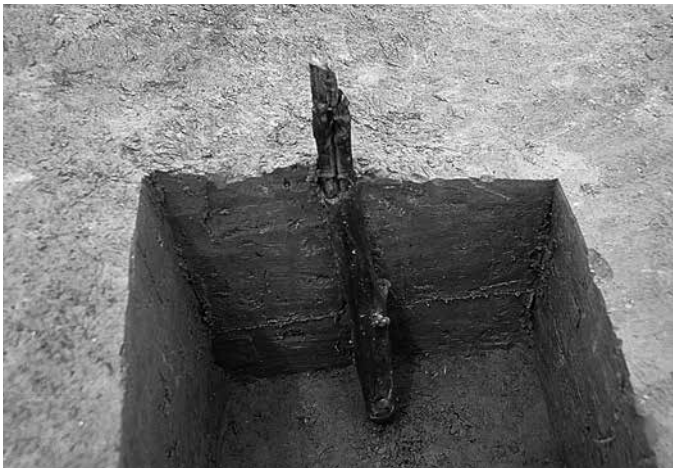
P818　断面（東から）

P832　断面（北から）

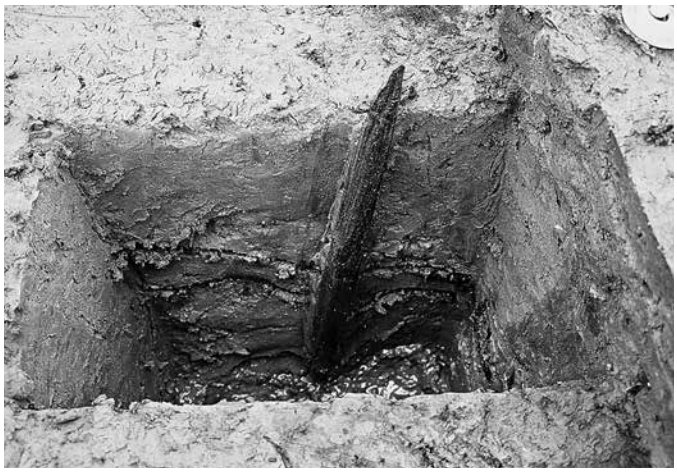


SA12-10　断面（南西から）

SA13-23　断面（東から）



SA14-6　断面（南から）

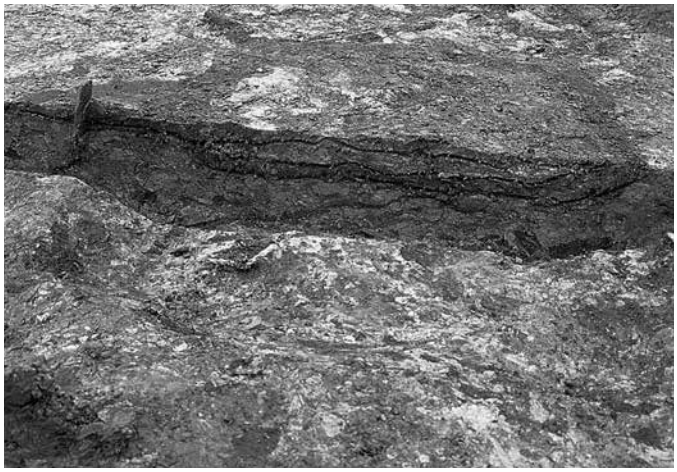


SX55　断面（北東から）

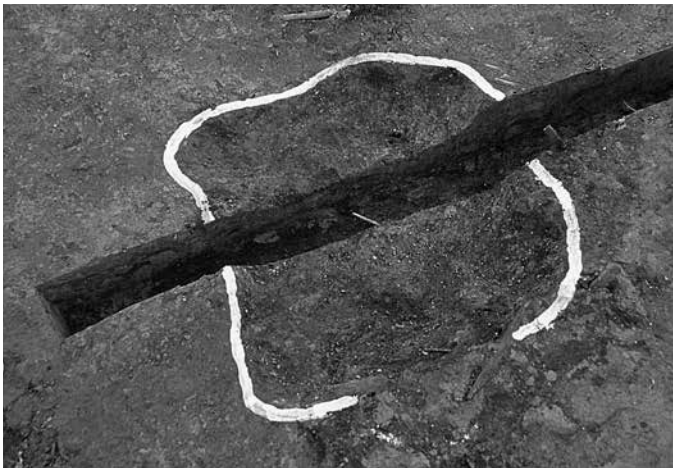
SX439　断面（南から）

SX5　灰分布状況（南から）

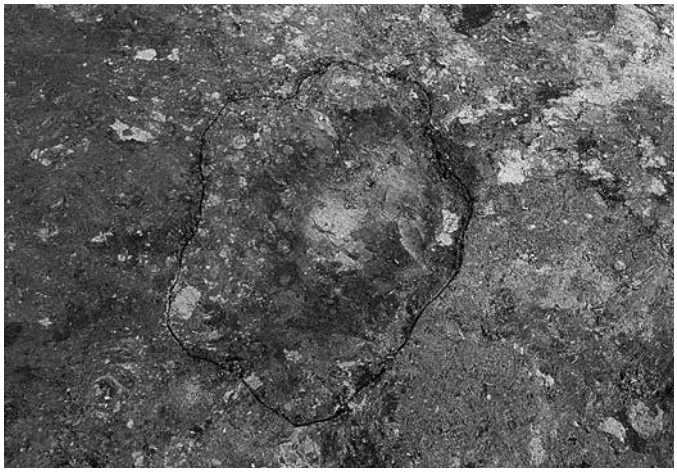
SX91　検出状況（南東から）



SX332　断面（南西から）



SX332　完掘（東から）



SX345　検出状況（南西から）

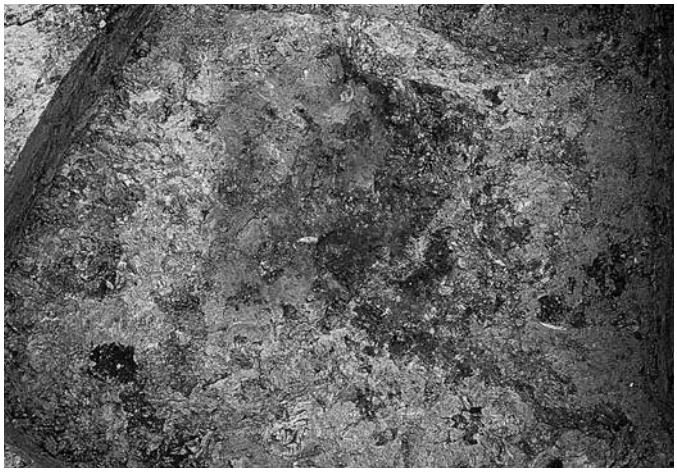
SX345　断面（北西から）

SX346　検出状況（南西から）

SX346　断面（南西から）

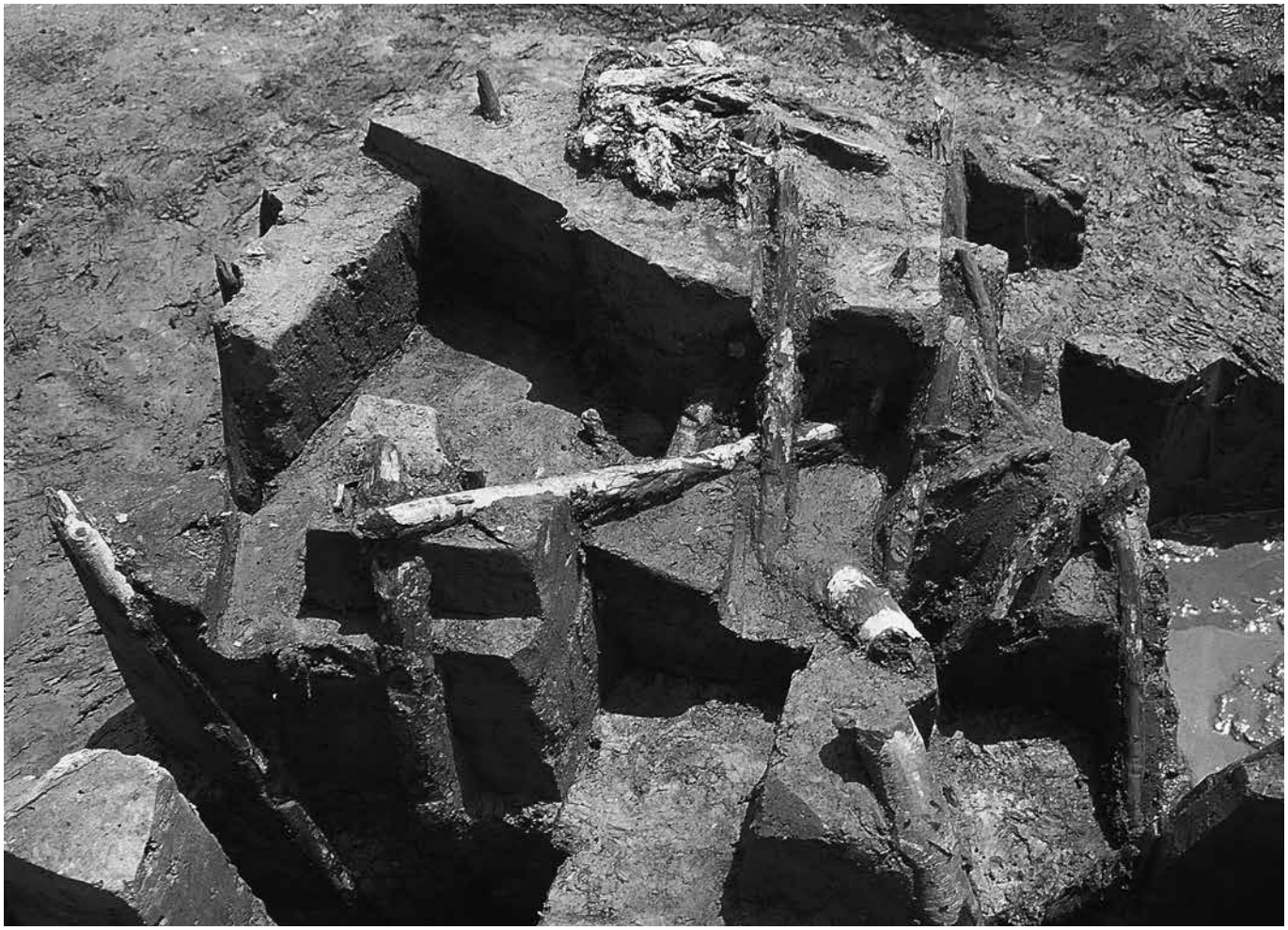
SX347　検出状況（南西から）

SX485　検出状況（南東から）



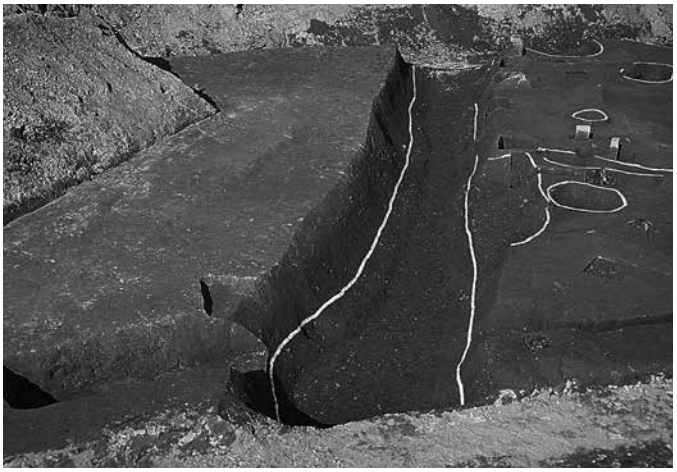
SX487　検出状況（西から）

SX487　断面（南から）



SX209　検出状況（北西から）

SD111　南区１　完掘（南西から）

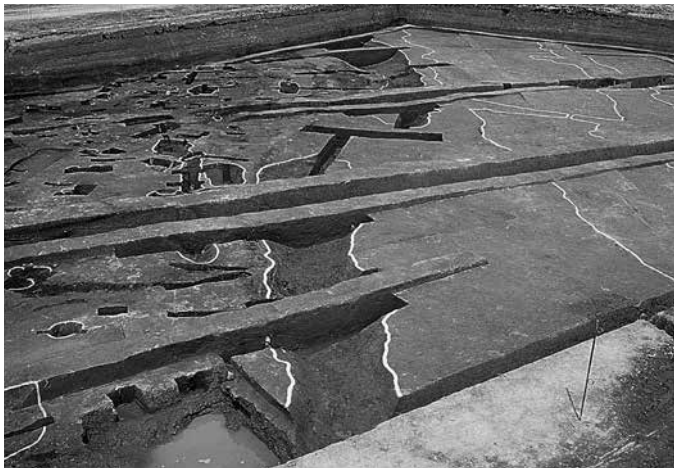


SD111　農道下　完掘（南西から）

SD111　北区１　完掘（南西から）

SD111・113・150　断面 A-A'（南西から）

SD114　断面（南東から）



SD112　完掘（南北から）

SD114　断面（北東から）

SD129・130　完掘（南東から）

SR165　断面 B-B'（西から）

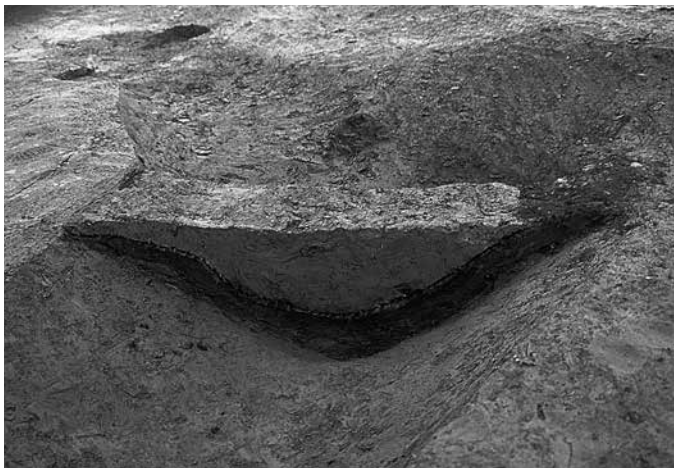
SR165　断面 B-B'（南から）

SD166　断面（北東から）

SD166　完掘（北西から）

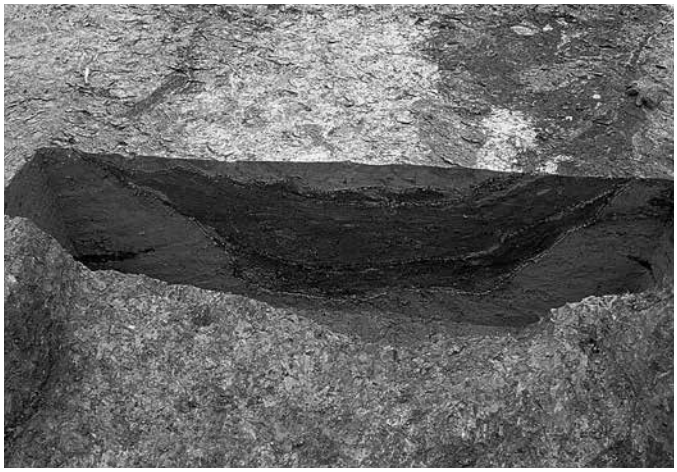
SD339　断面（南東から）

SD339　完掘（南東から）



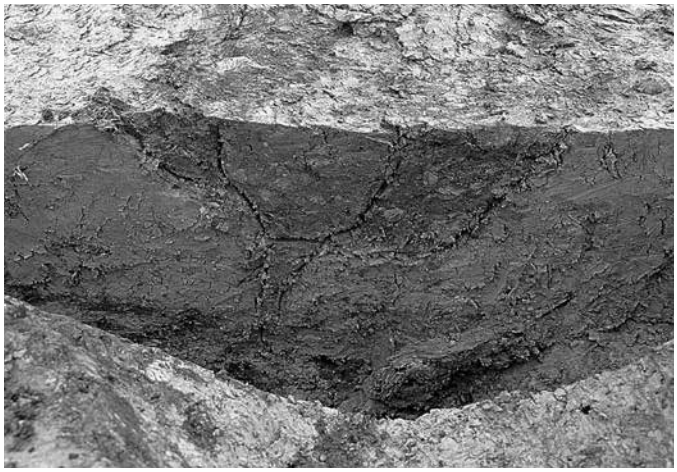
SD172　断面（東から）

SD172　完掘（東から）

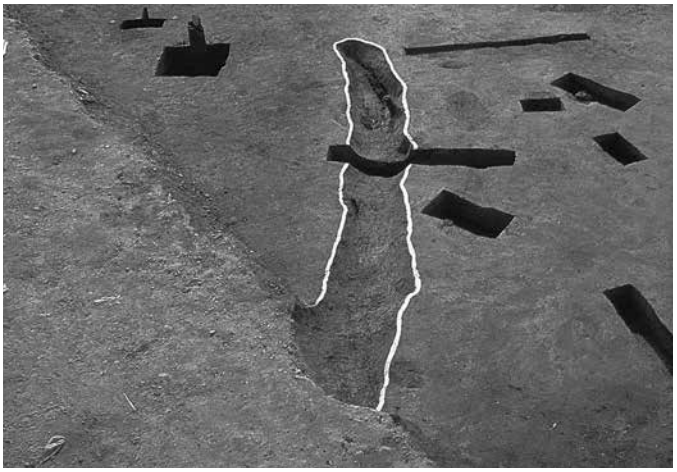


SD330　断面（南東から）

SD330・SD338　完掘（南東から）



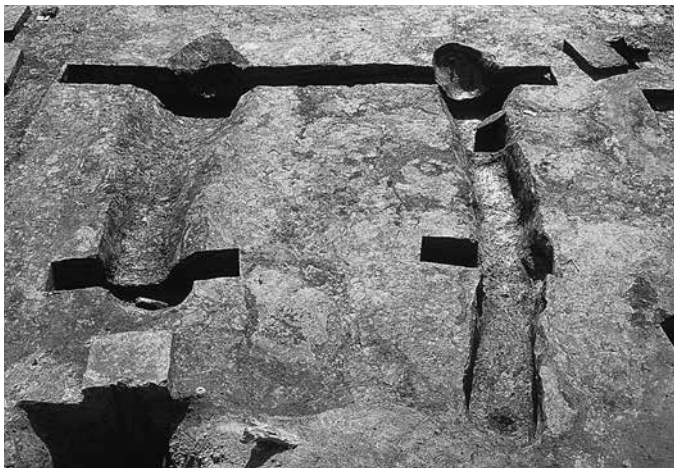
SD331　断面（南東から）



SD331　完掘（北西から）

SD436・593　断面（南東から）

SD445　断面（南東から）

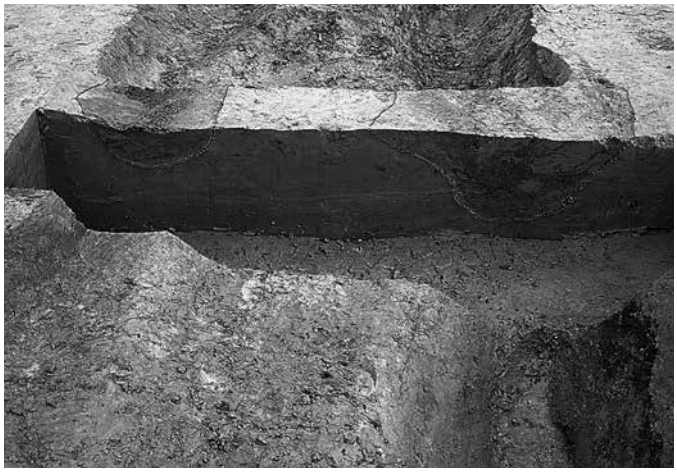


SD436・445　完掘（北西から）

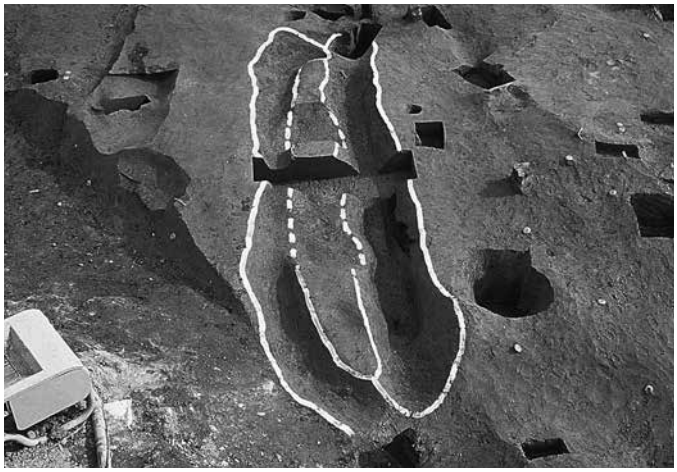
SD448　断面（東から）

SD448　完掘（東から）

SD540　完掘（南から）



SD597・598　断面（北西から）



SD597・598　完掘（北西から）

SR1-3 層　南区 1　全景

SR1-3 層　農道下　全景

SR1-3 層（7・8I グリッド）完掘、遺物出土状況

SR1-3 層（7・8Ｉグリッド） 完掘（西から）

第三号木簡（7H13 グリッド）出土状況（東から）

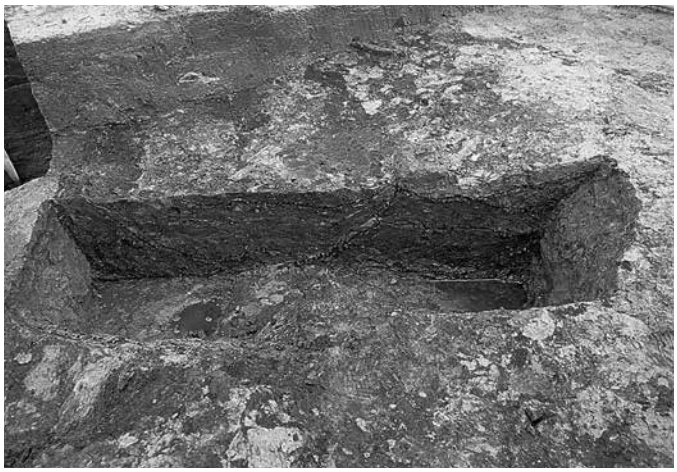
草履出土状況（東から）

SX821　遺物出土状況（北から）

漆器椀出土状況（北から）

SK174　断面（南東から）

SK174　完掘（南東から）



SK678・177　断面（南西から）

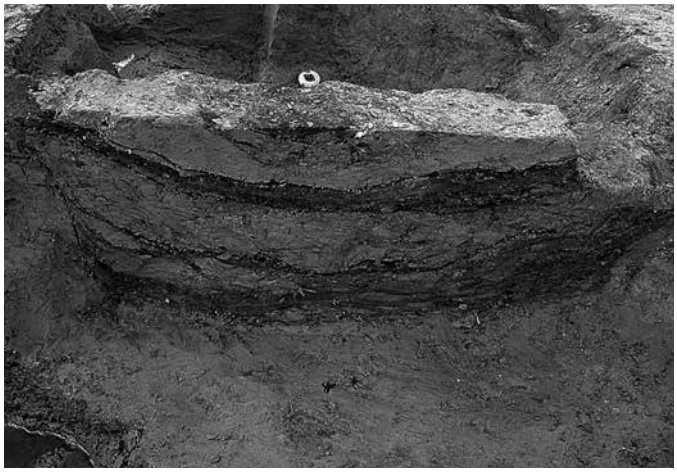
SK678・177　完掘（南東から）

SK179　断面（南西から）

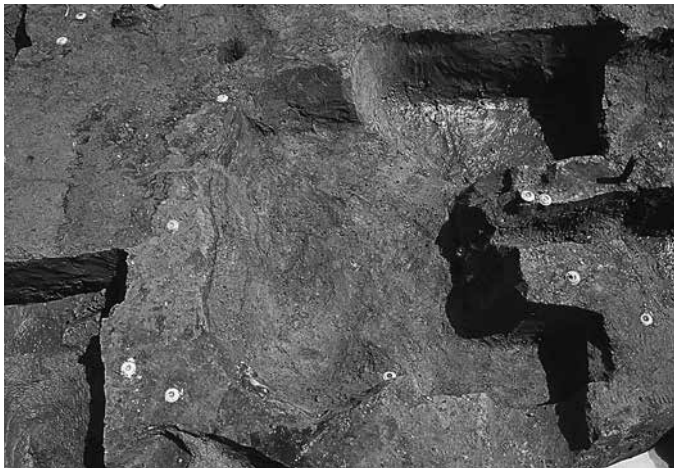
SK179　完掘（南東から）

SK201　断面（南東から）

SK201　完掘（北西から）



SK206　断面（南東から）

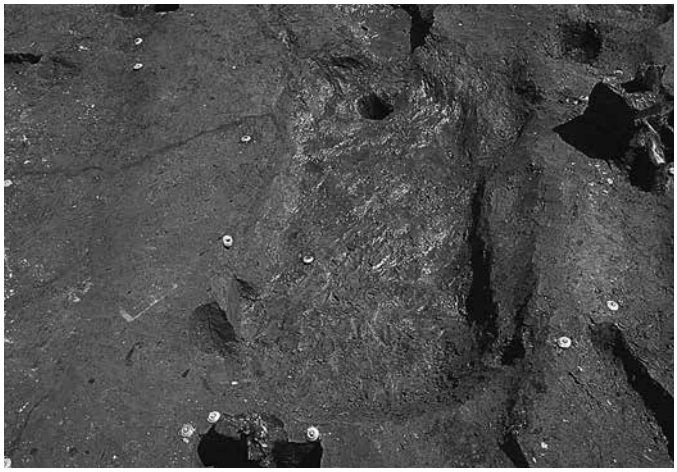


SK206　完掘（北西から）

SK207　断面（北西から）

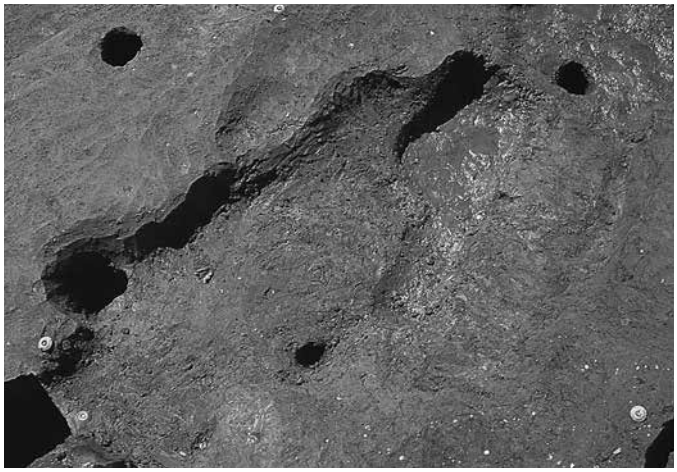
SK207　完掘（北西から）

SK211　断面（南西から）



SK211　完掘（北西から）

SK227　断面（南西から）



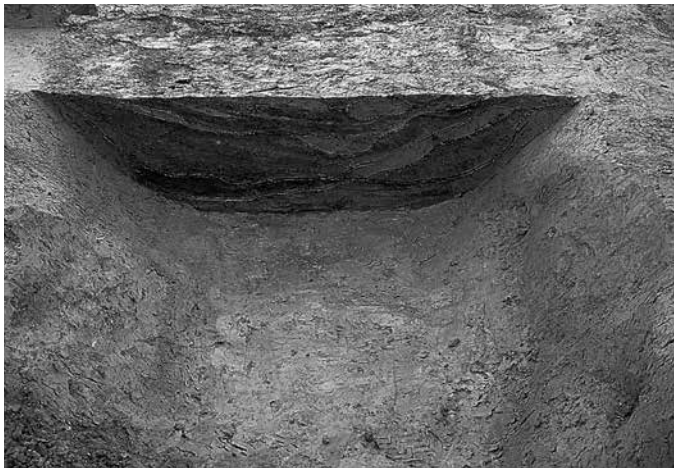
SK227　完掘（東から）

SK260　鋏出土状況（南西から）

SK260　完掘（南東から）

SX277　断面（南西から）

SK476　編組出土状況（底面から出土、南から）



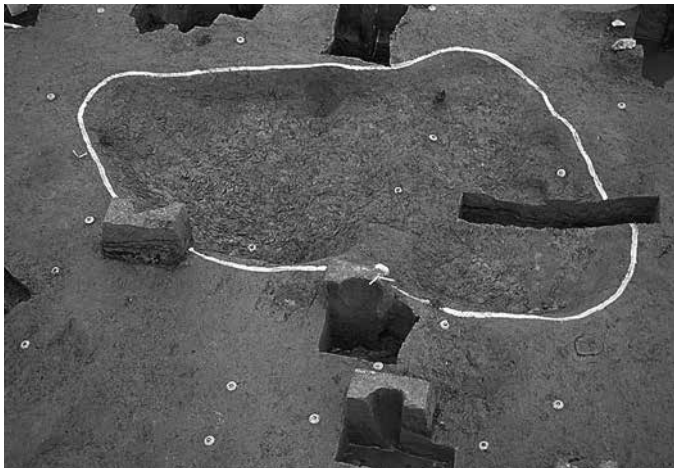
SK476　断面（南西から）

SK476　完掘（北西から）

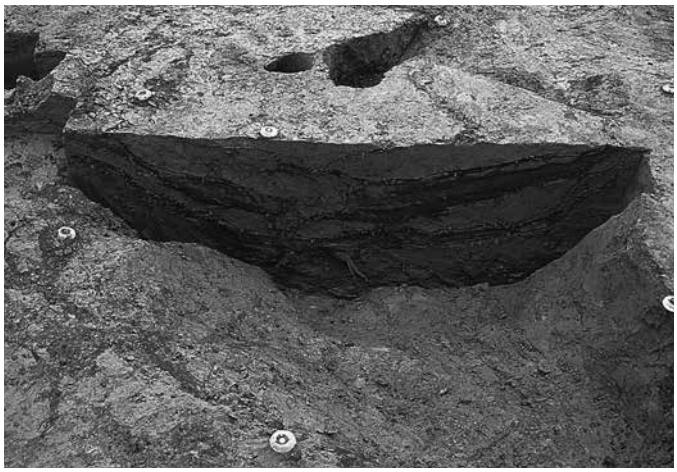
SK490　断面（南東から）

SK490　完掘（南東から）

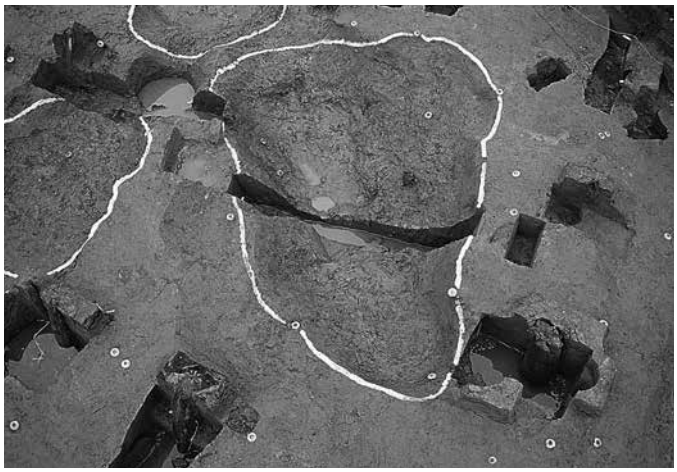
SK491　断面（南東から）



SK491　完掘（北西から）

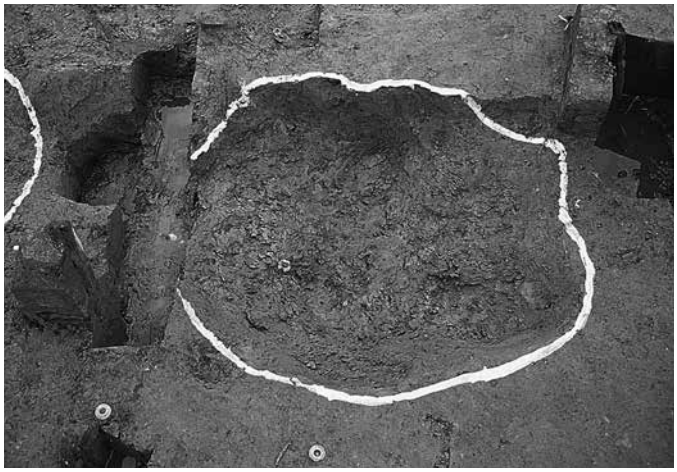


SK492　断面（北西から）



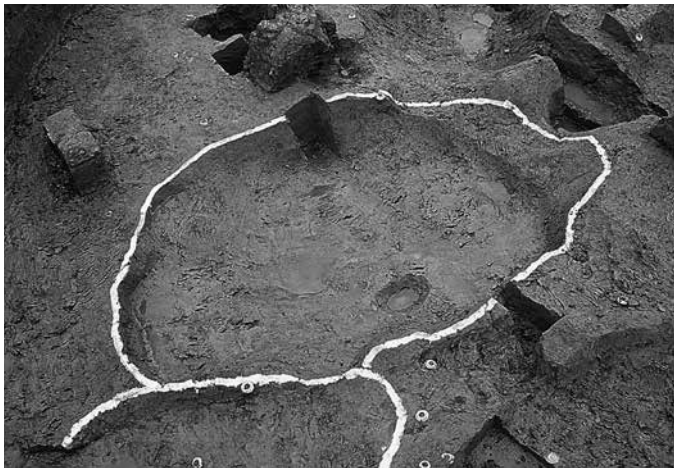
SK492　完掘（北西から）

SK502　断面（北西から）

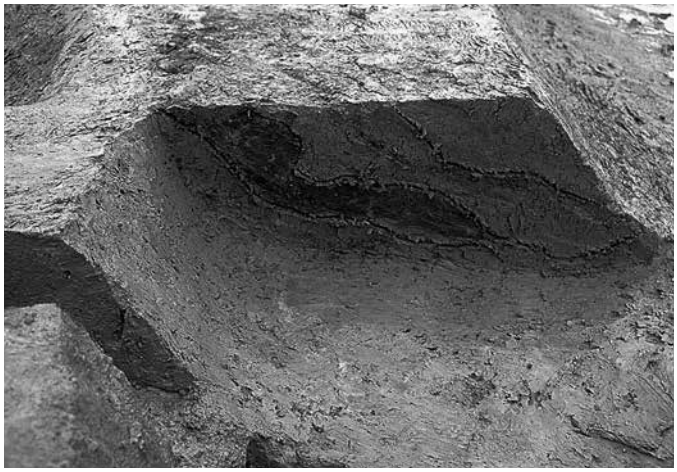


SK502　完掘（北東から）

SK503　断面（南東から）



SK503　完掘（東から）

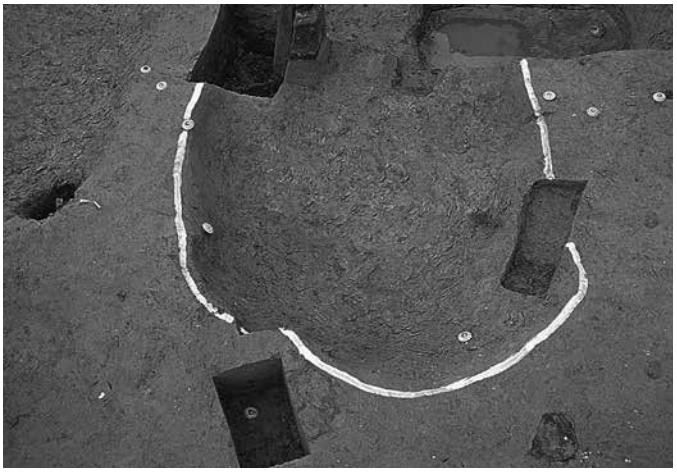

SK504　断面（北東から）

SK504　完掘（北東から）

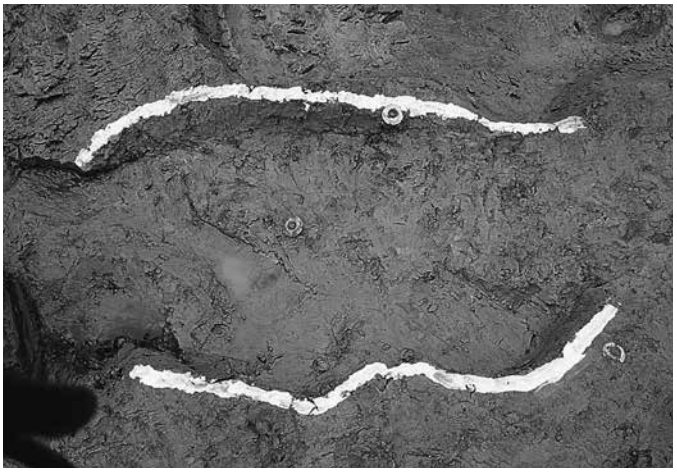
SK508　断面（南東から）

SK508　完掘（南東から）

SK512　断面（南西から）

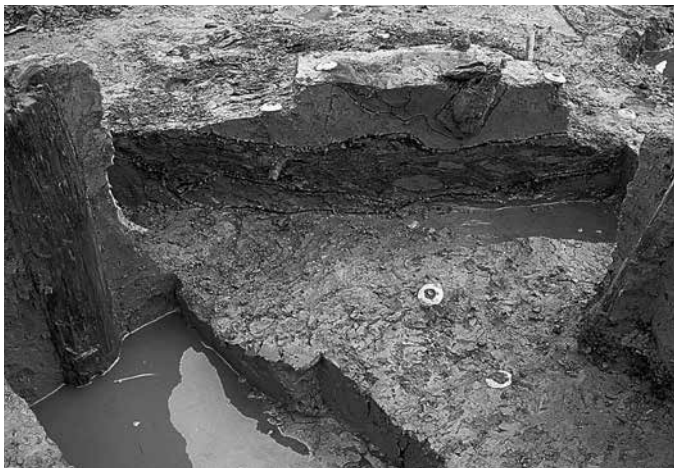

SK512　完掘（南西から）

SK514　断面（東から）

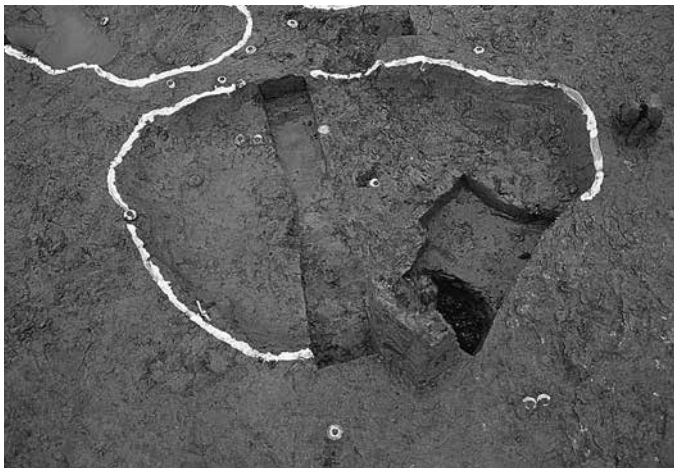

SK514　完掘（東から）

SK520　断面（北から）

SK520　完掘（北から）



SK528　断面（北西から）



SK528　完掘（北東から）

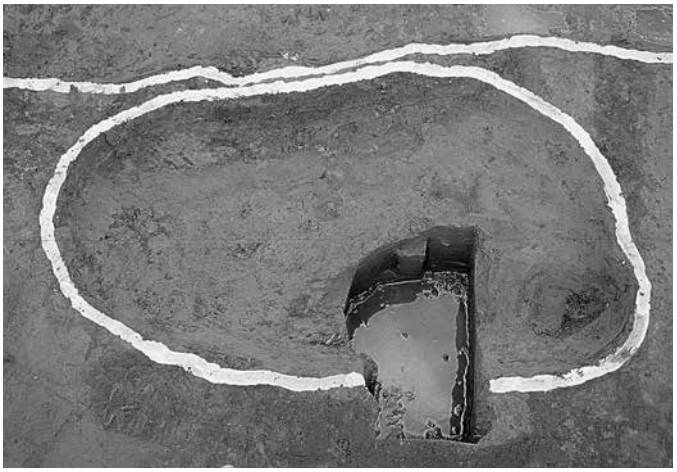
SK530　断面（南東から）

SK530　完掘（南東から）

SD541・SK542　断面（南西から）

SK542　完掘（南西から）

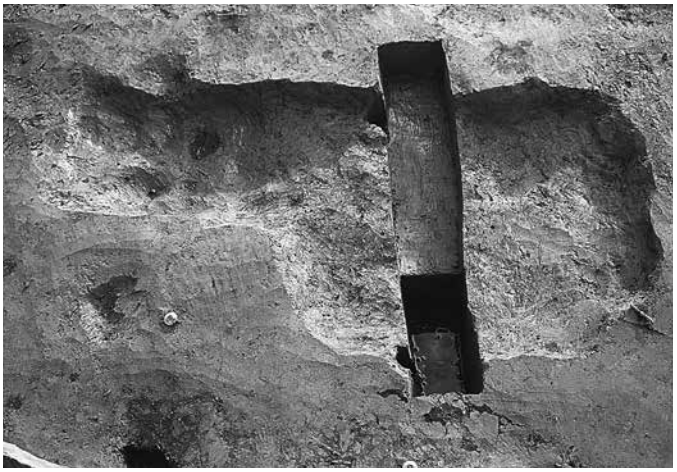
SK543　断面（南東から）

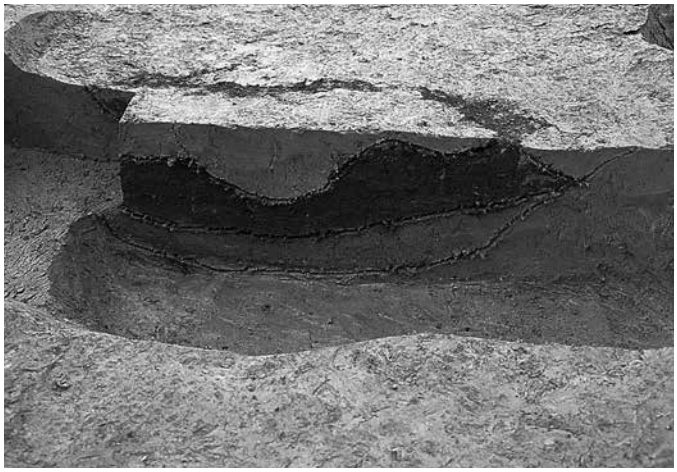

SK543　完掘（南西から）

SK589　断面（北西から）

SK589　完掘（西から）

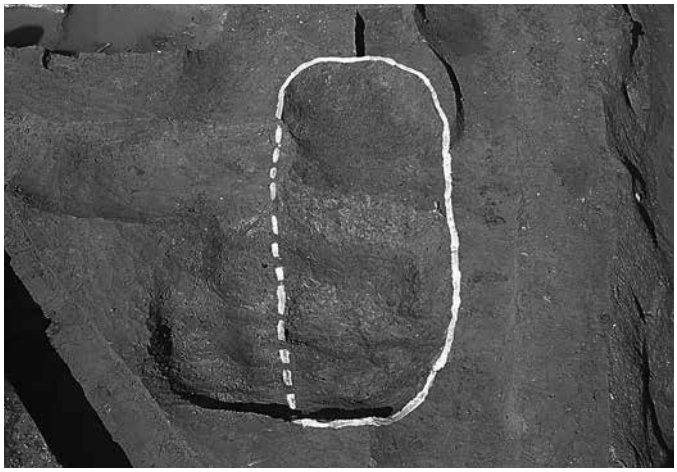
SK554　断面（北西から）


SK554　完掘（北東から）


SK619　断面（北東から）

SK619　完掘（北東から）

SK641　断面（南東から）



SK641　完掘（南東から）

SK660　遺物出土状況（南から）

SK660　完掘（南西から）

SK837　断面（西から）

SK837　完掘（北西から）

SK853　断面（西から）

SK853　完掘（南西から）

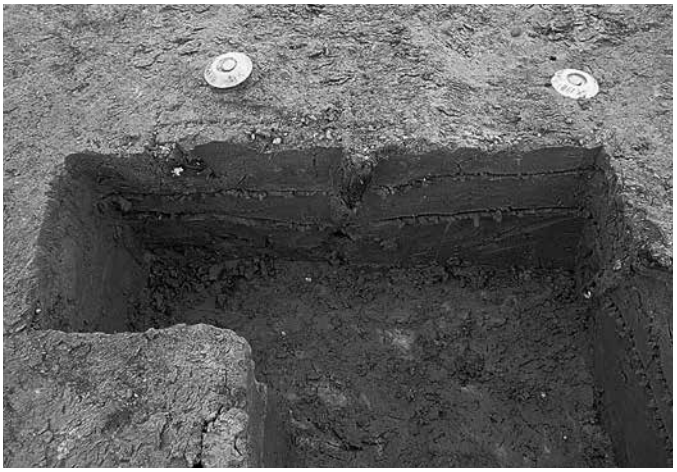
P551　断面（北西から）

P669　断面（南西から）

SA215　完掘（北から）

SA812　断面（西から）

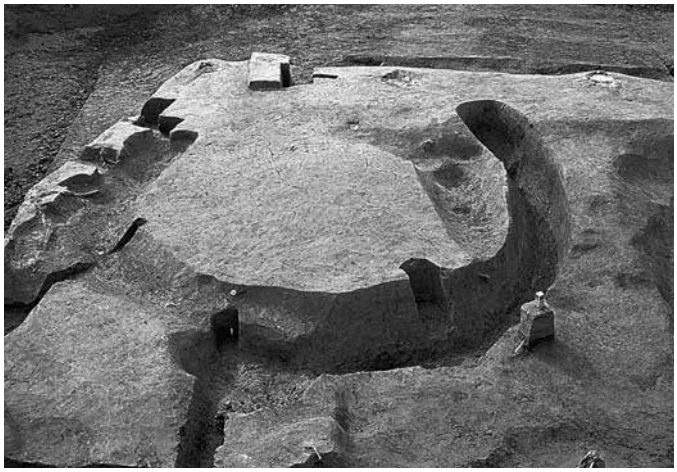
SA823　断面（北西から）



SX116・117　断面（南東から）

SX118・119　断面（南西から）

SX122・123・124　断面（西から）

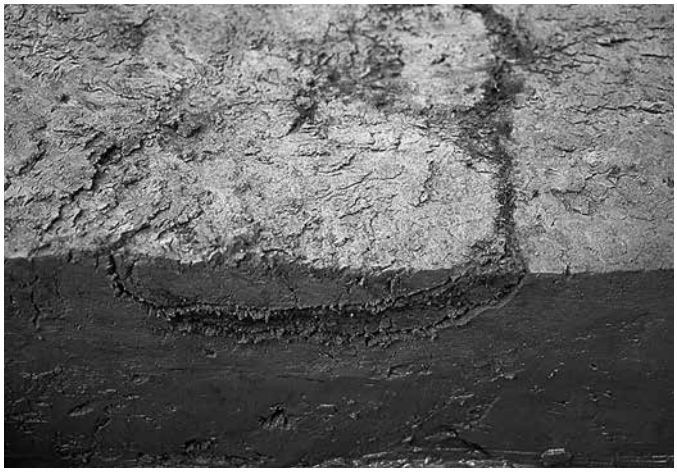


SD259　完掘（東から）

SD499・SK498　断面（南から）

SD590　断面（南東から）

SD606　断面（北から）



SD635　断面（南東から）

SD635　完掘（北東から）

SD857　断面（南西から）

第四号木簡（8Ｉ7グリッド）　出土状況（南から）

SA280　西側完掘（北西から）

SA280　東側完掘（北から）

SA16-1　断面（南西から）

SA16-2　断面（南西から）

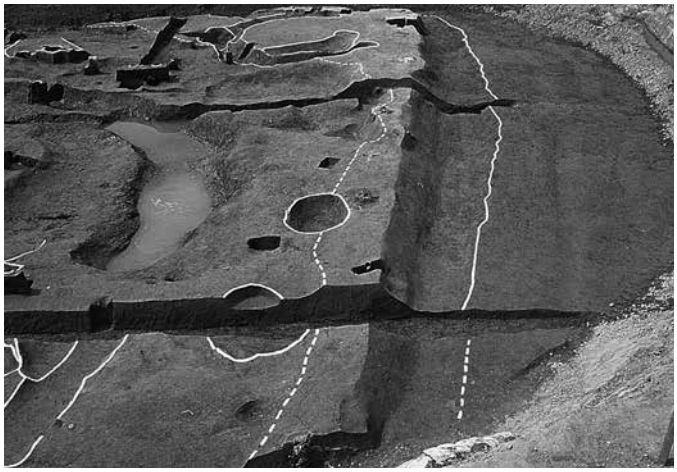
SA17-1　断面（東から）

SA17-4　断面（南西から）

SA18-1　断面（南西から）

SD150　北区　完掘（南西から）

SD150　南区　完掘（南西から）

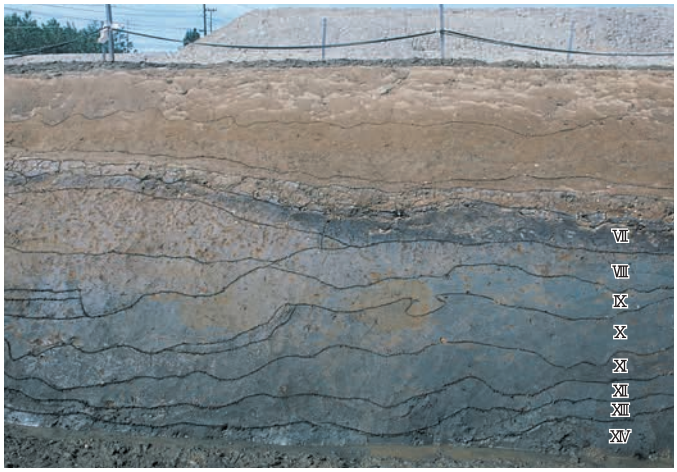


SD150　南区　完掘（北西から）

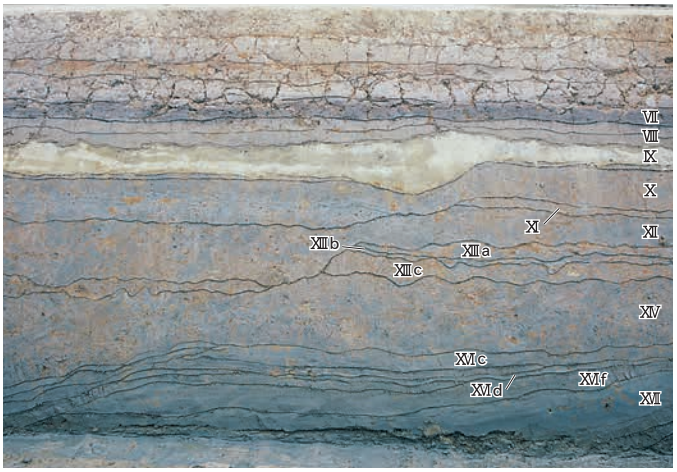
基本層序③（東から）

基本層序②（東から）

基本層序④（北から）



基本層序⑦（南から）

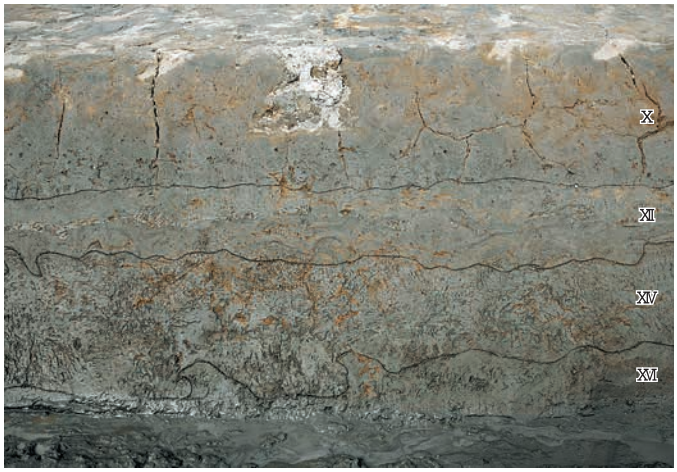


基本層序⑳（北から）

水田土層断面 C'-C"（畦畔 201・304・403・502）（南西から）

水田土層断面 A-A'（北西から）

水田土層断面 A'-A"（北西から）

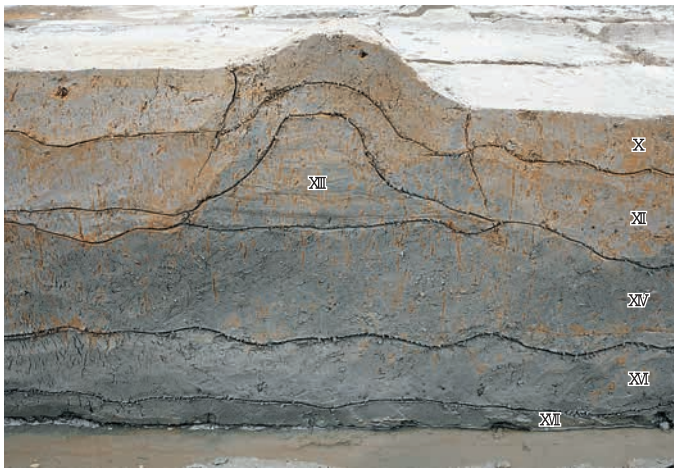


水田土層断面 B-B'（南西から）

水田土層断面 B'-B"（南西から）

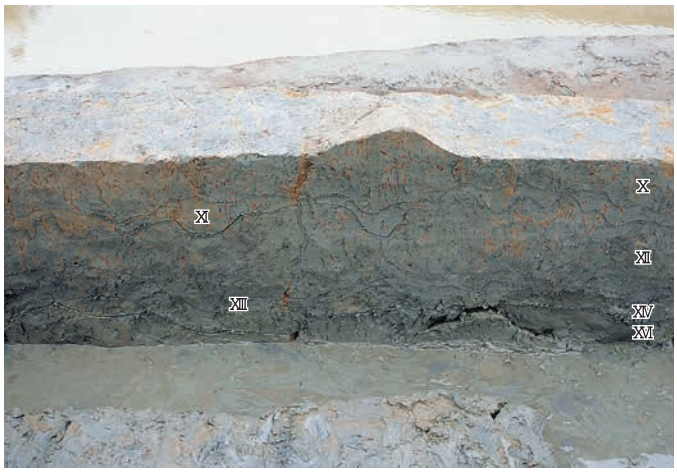
水田土層断面 C-C'（畦畔 206・302・402・501）（南西から）

水田土層断面 C''-C'''（畦畔 503）（南西から）



水田土層断面 D'-D''（畦畔 209・307・407）（南東から）

水田土層断面 D'''-D''''（畦畔 210・308・408）（南東から）



水田土層断面 E-E'（畦畔 212・410・513）（南東から）

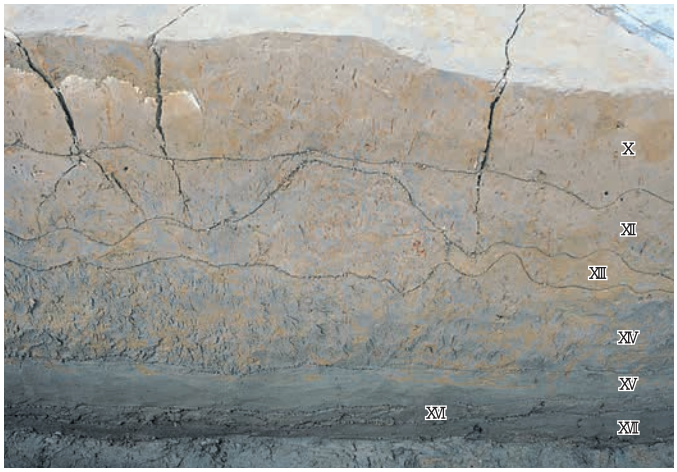
水田土層断面 E''-E'''（畦畔 214・311・411）（南東から）

水田土層断面 F-F'（南西から）

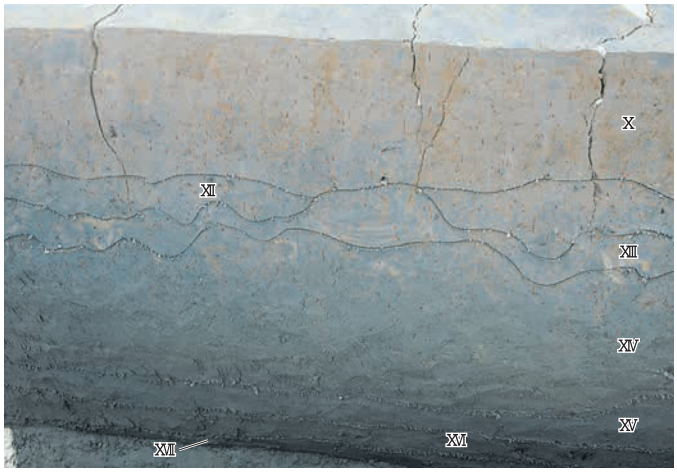
水田土層断面 G-G'（南から）

北区 1　北壁基本層序⑤（畦畔 217・312・412）（南から）

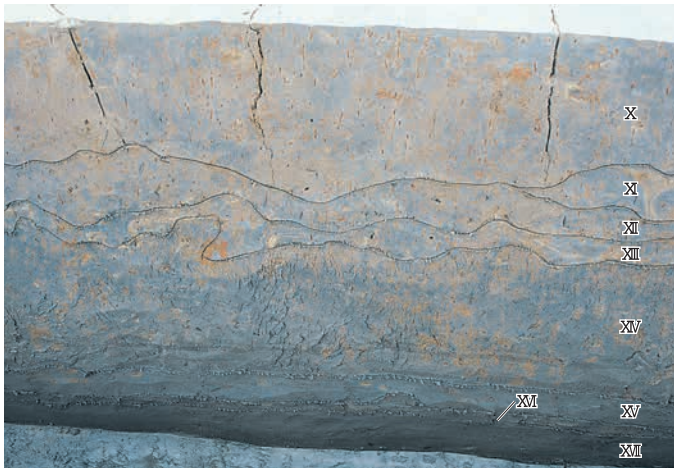
北区 1　西壁断面（畦畔 313）（東から）



水田土層断面 I'- I"（畦畔 218・327）（南西から）

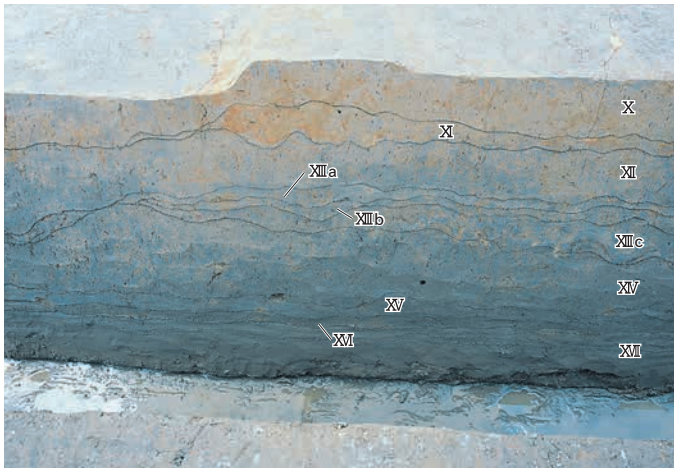


水田土層断面 H-H'（畦畔 328）（南東から）

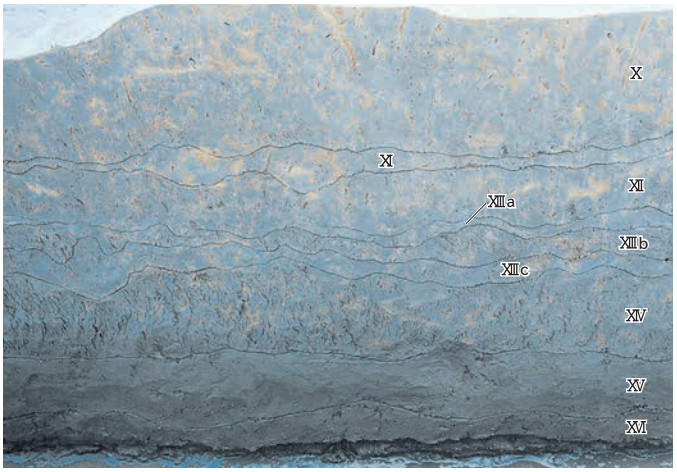


水田土層断面 H'-H"（畦畔 314）（南東から）

水田土層断面 N-N'（畦畔 320）（北西から）



水田土層断面 J-J'（畦畔 219・315・413）（北東から）

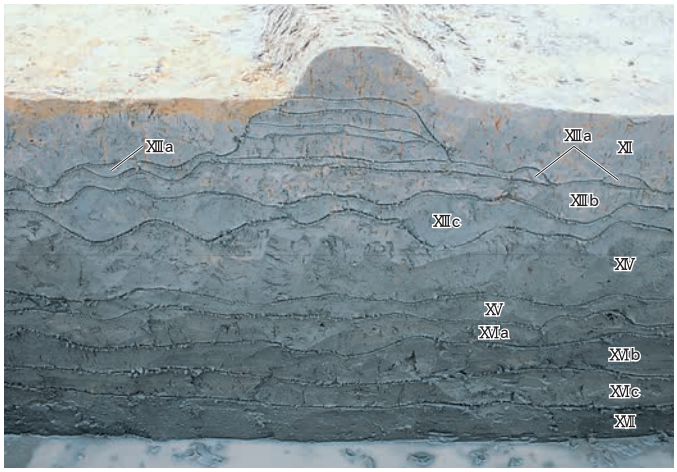


水田土層断面 J"-J'"（畦畔 221）（北東から）

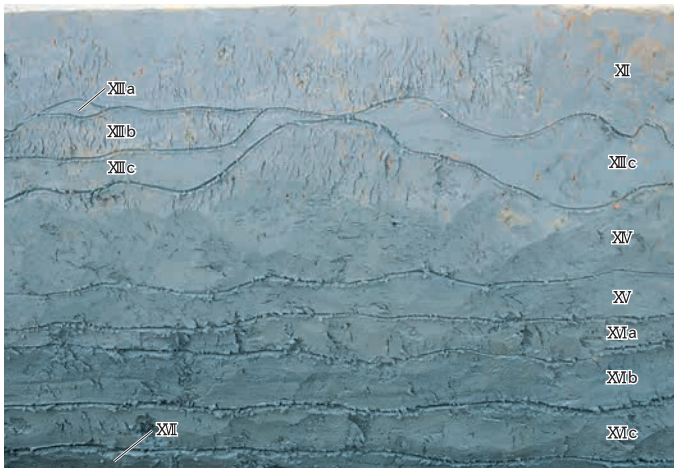
水田土層断面 K'-K"（畦畔 226・321）（南東から）

水田土層断面 K'-K"（畦畔 418）（南東から）

北区 2　東壁 1（畦畔 324・422）（西から）

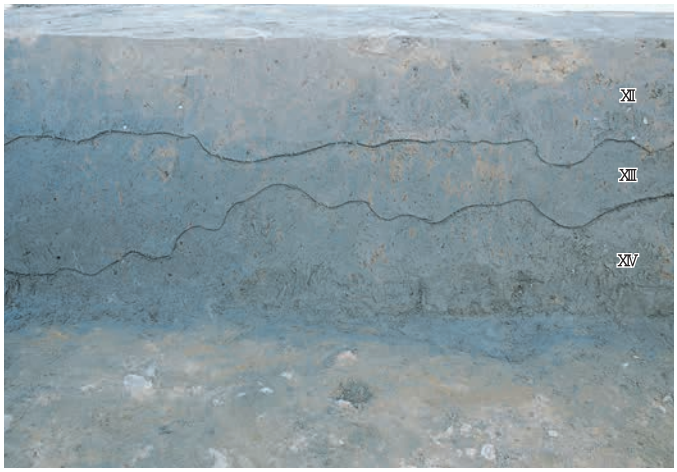


水田土層断面 L-L'（畦畔 321）（南東から）



水田土層断面 L-L'（畦畔 418）（南東から）

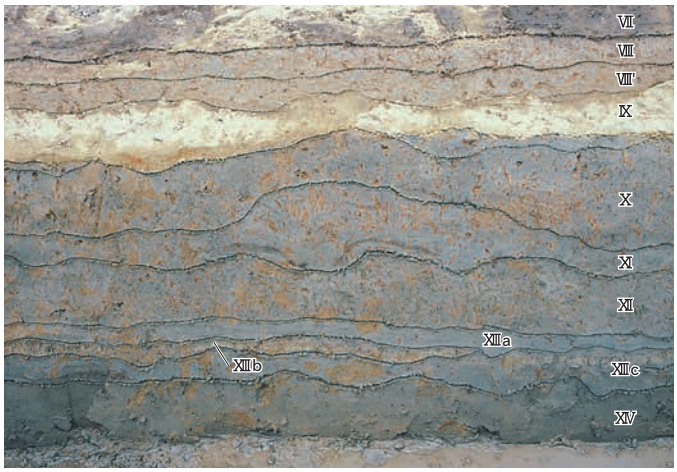
水田土層断面 L''-L'''（畦畔 322・420）（南東から）



畦畔 418　断面（西から）

水田土層断面 M-M'（畦畔 319）（南西から）

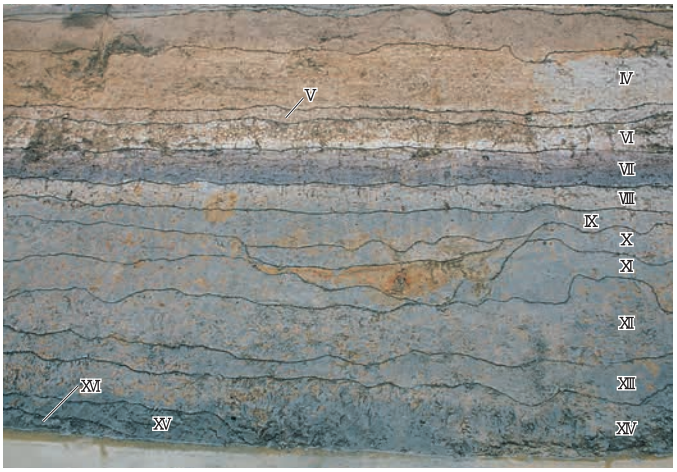
水田土層断面 M''-M'''（畦畔 316・414）（南西から）



北区１　西壁（畦畔 220）（東から）

北区２　南壁（畦畔 417）（北から）

北区２　西壁１（畦畔 318・416）（東から）



北区２　西壁１（畦畔 321、SD870）（東から）

北区２　東壁２（畦畔 326・424）（西から）

北区２　東壁２　基本層序⑮（畦畔 317）（西から）

Ⅷ層上面　検出状況（南東から）

Ⅷ層上面　検出状況（北東から）

北区２　北壁　断面（南から）

Ⅷ層上面　検出状況（北から）

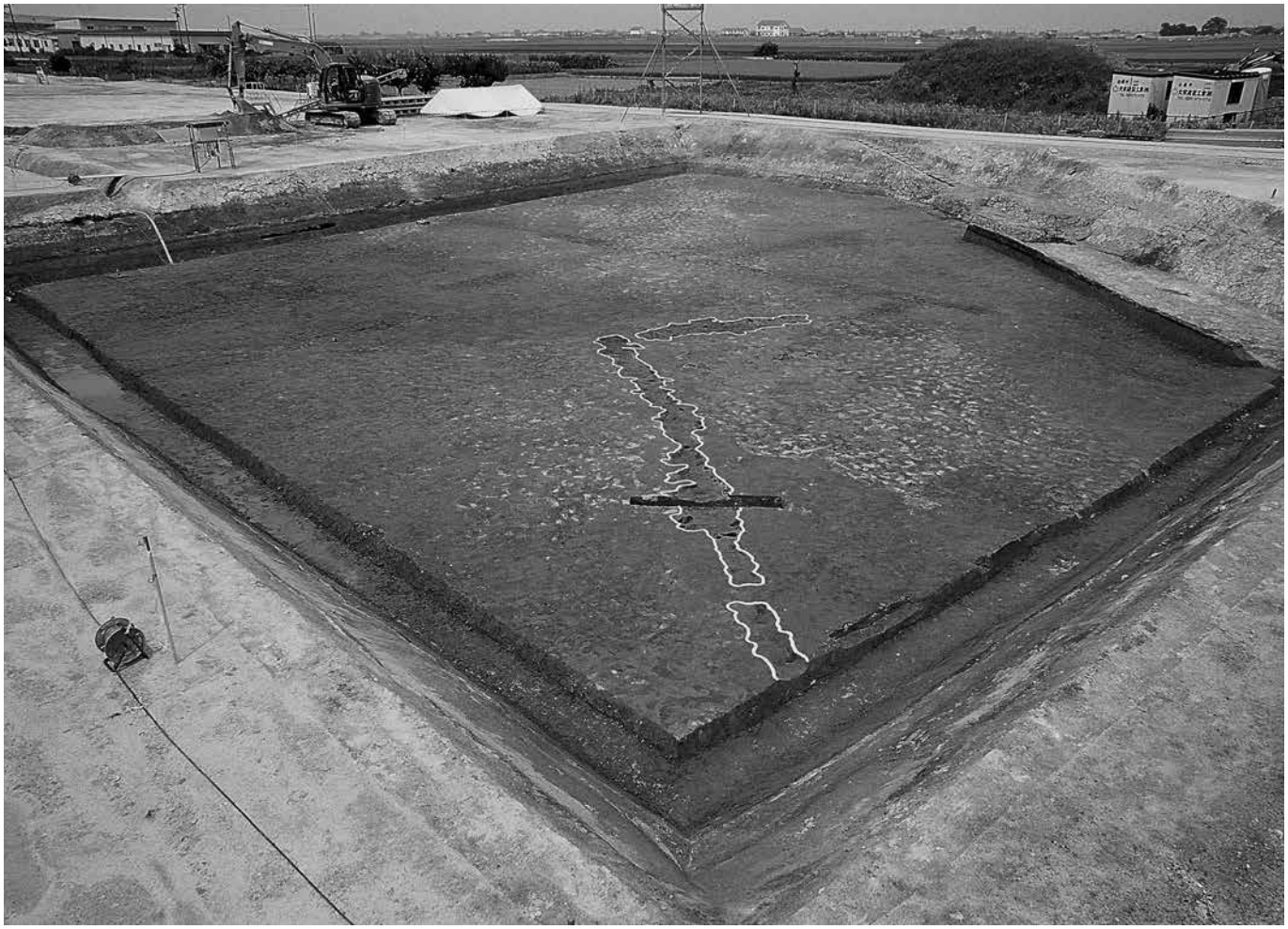
Ⅷ層上面　検出状況（北東から）

SX880　完掘（南東から）

SX880　断面（東から）

SX879　断面（北から）

X層水田　南区１・２　全景



X層水田　北区１　全景（南西から）

X層水田　南区１　完掘（東から）

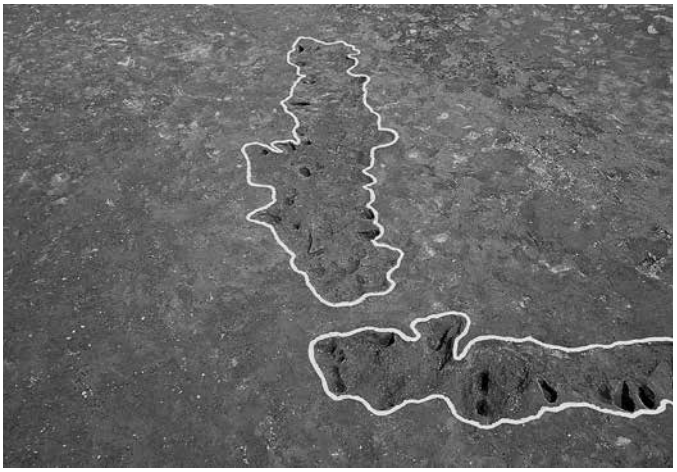
X層水田　南区２　完掘（西から）

X層水田　南区１・２　完掘

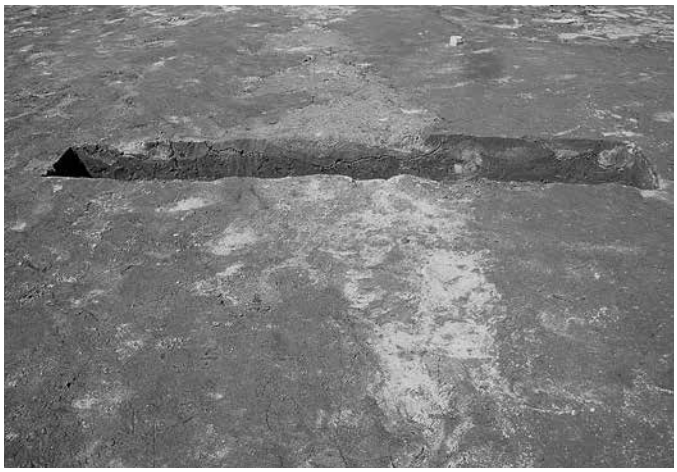
X層水田　畦畔 209　完掘（南東から）

X層水田　畦畔 209　完掘（南西から）

SD701　断面（南東から）



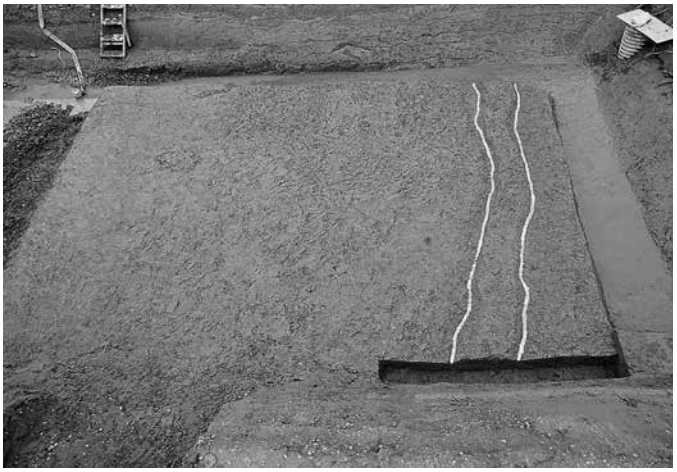
SD701　完掘（北西から）



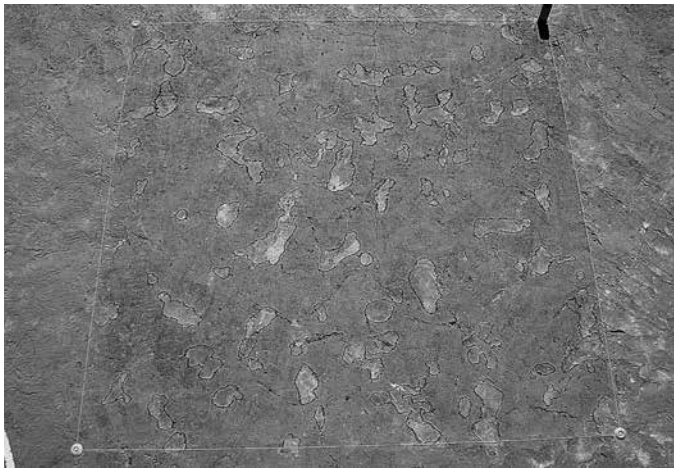
SD702　断面（南西から）

SD702　完掘（北東から）

X層水田　南区１　2・3FG グリッド　完掘（北東から）



X層水田　南区２　1FG グリッド　完掘（南から）



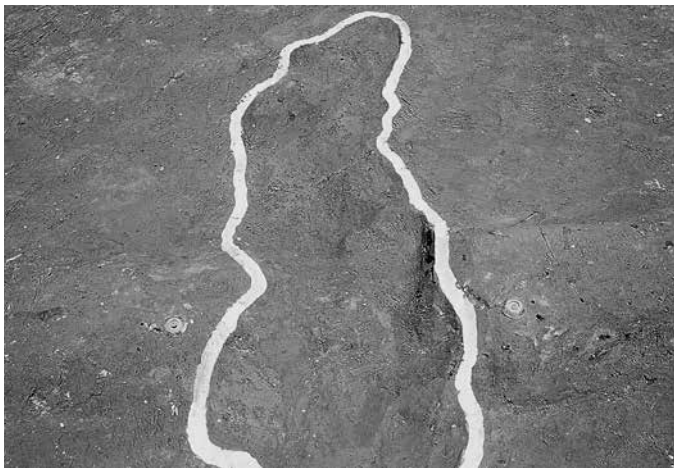
X層水田　2E5 グリッド　足跡　検出状況（東から）

X層水田　2E5 グリッド　足跡　完掘（東から）

X層水田　畦畔 209 水口　断面（南西から）

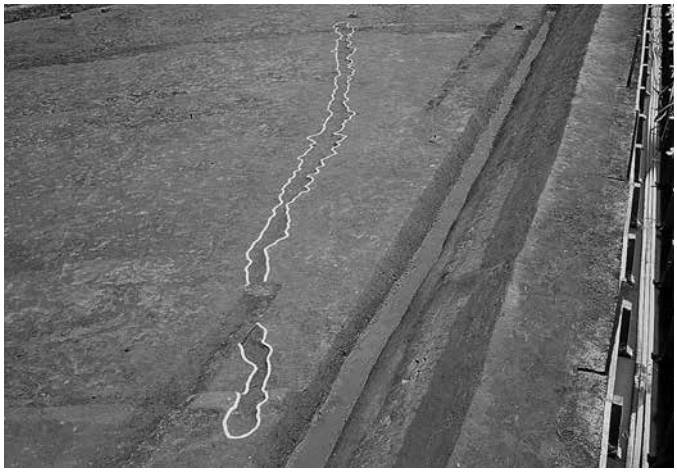
X層水田　畦畔 209 水口　完掘（南西から）

SD700　断面 A-A'（南西から）



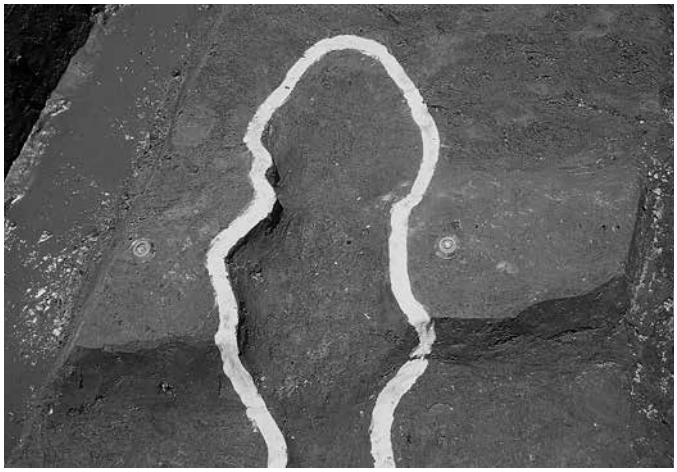
SD700　A-A' 完掘（南西から）

SD700　断面 B-B'（南西から）



SD700　完掘（南西から）

SD700　断面 C-C'（南西から）



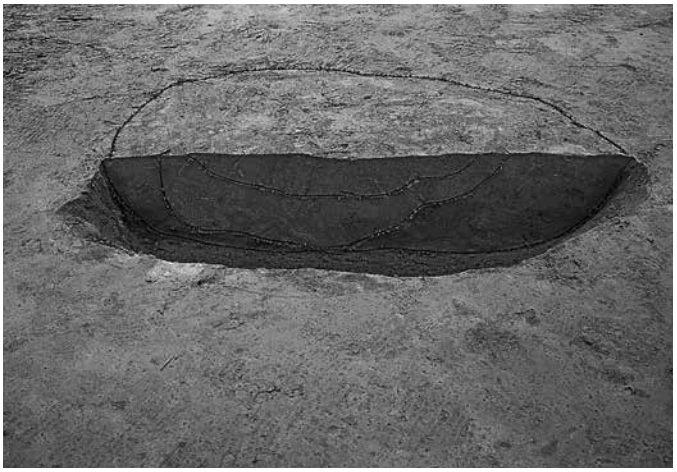
SD700　C-C' 完掘（北東から）

X層水田　北区 1　全景（南から）

畦畔 217　完掘（南から）

畦畔 218　検出状況（北東から）

畦畔 218　完掘（南西から）

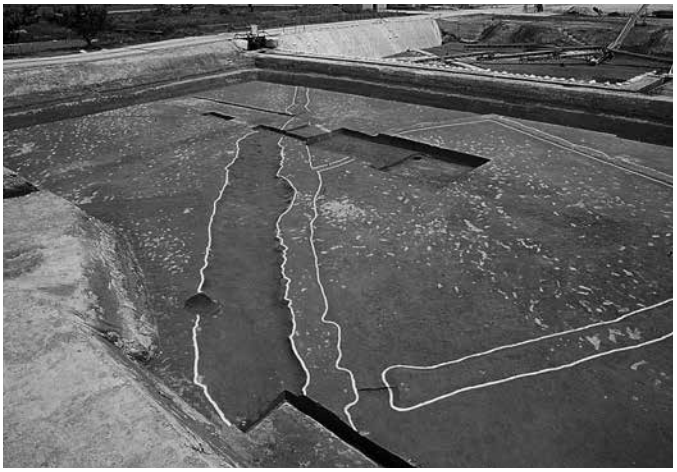


SK808　断面（南から）

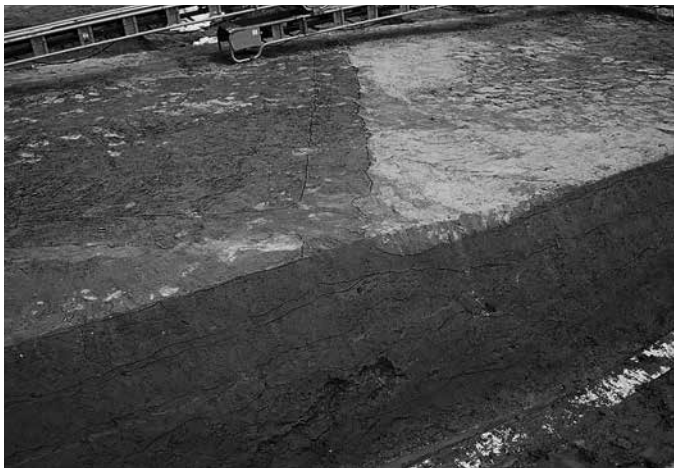
X層水田　北区２　全景（北東から）

X層水田　北区２　全景（南東から）

X層水田　北区２　全景（北西から）

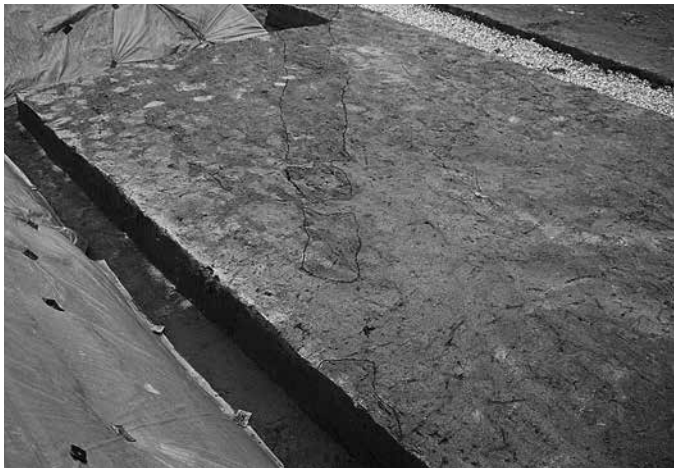


SD848、畦畔 223、畦畔 221　完掘（北西から）



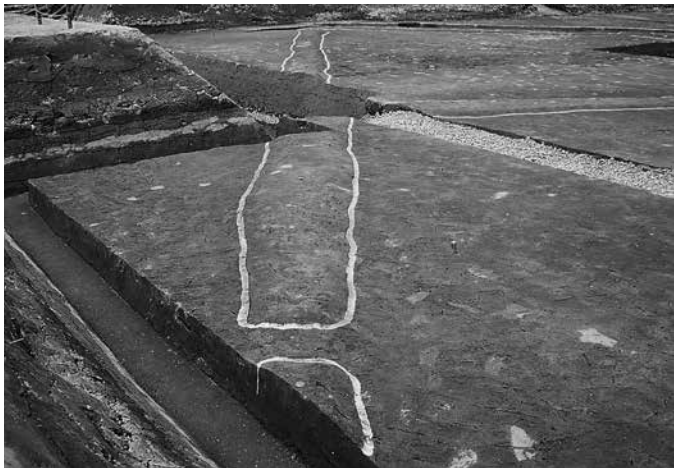
畦畔 219　検出状況（南から）

畦畔 219　完掘（南西から）



畦畔 220　検出状況（南西から）

畦畔 220　水口　断面（南東から）



畦畔 220　完掘（南西から）

畦畔 220、畦畔 222　完掘（北西から）

SK849　断面（東から）

SK849　完掘（東から）

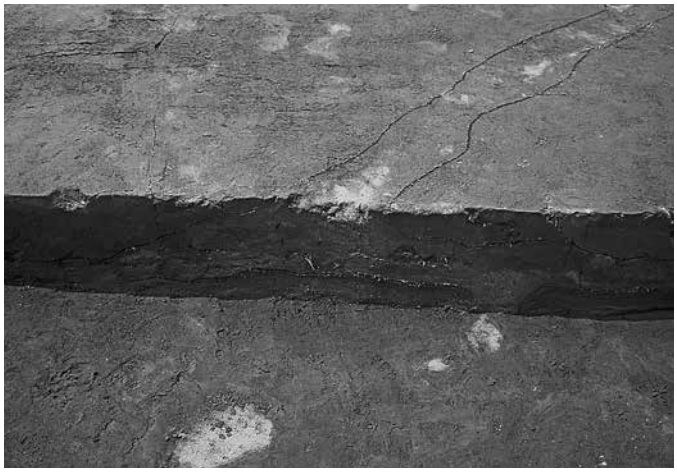
SK850　断面（北東から）

SK850　完掘（北東から）

SD848・畦畔223　検出状況（北西から）

SD848　断面（南東から）

畦畔225（擬似畦畔B）・畦畔316　断面（南から）



畦畔224（擬似畦畔B）　断面（北から）

X層水田　北区２　全景（東から）

SA871　検出状況（北西から）

SA871　検出状況（北から）

SD870　断面（南から）

SA871-2　断面（北から）

SA871-5　断面（北から）

SA871-9　断面（北西から）

SA871-30　断面（南から）

SA872-6　断面（西から）

SA875-2　断面（南西から）

X層水田　北区２　全景（南から）

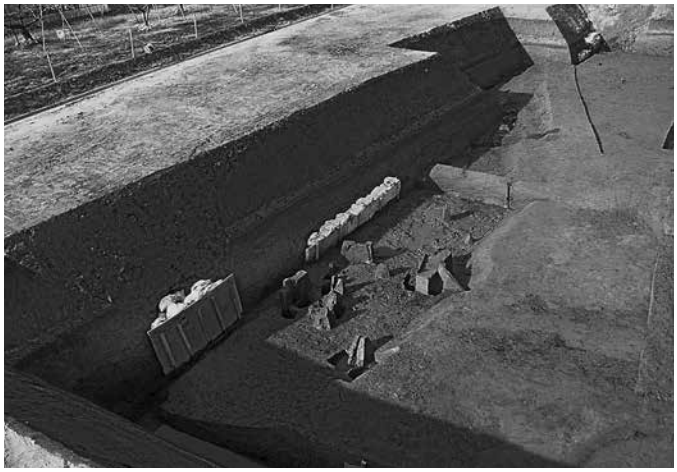
SD848・870　完掘（西から）

SD870　北区２　完掘（東から）

SD870　腐植物上層検出状況（北から）

SA871-33　断面（北東から）

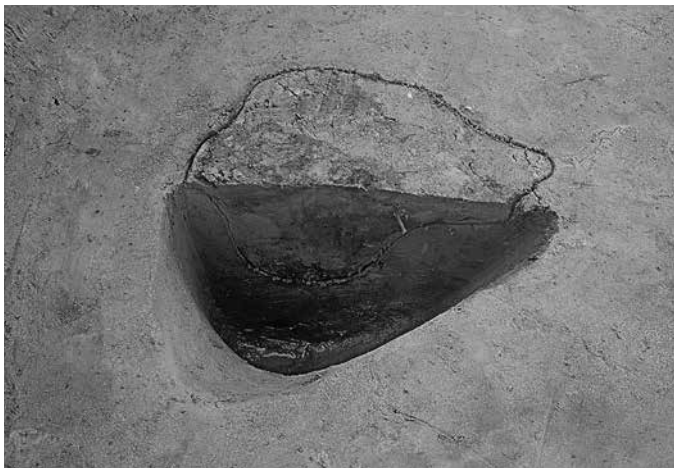
SA871-44 ～ 51　検出状況（北東から）


SD870 北区３　完掘（南東から）

SD870 内検出の杭群（西から）

SX884　断面（南西から）

SX885　断面（北東から）



P890　断面（北から）

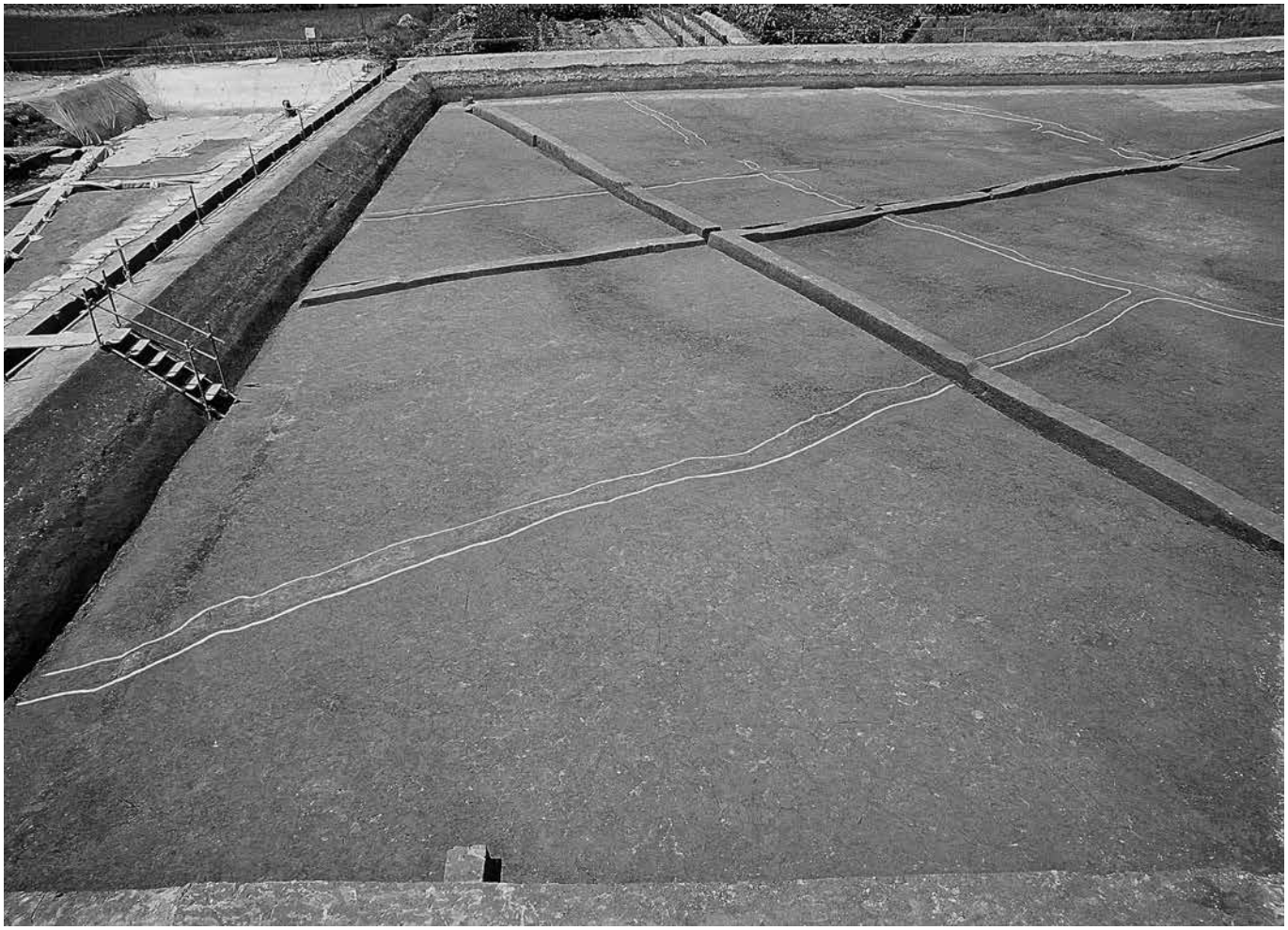
X層水田　北区 2　全景（南から）

X層水田　北区 2　全景（南から）

SA889-1　断面（南東から）

SX882　断面（北西から）

SX883　断面（北東から）



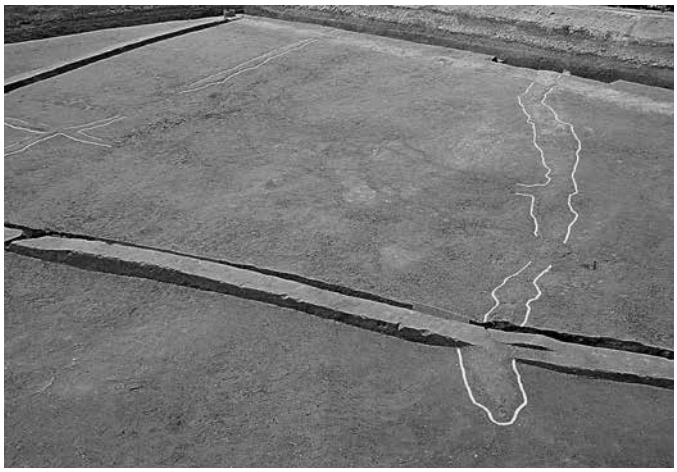
Ⅻ層水田　南区１　完掘（東から）

Ⅻ層水田　南区２　完掘（西から）

XII層水田　南区１　完掘（北東から）

XII層水田　南区１　完掘（北西から）

XII層水田　南区１　完掘（北から）



XII層水田　南区１　完掘（北東から）

XII層水田　南区１　完掘（南東から）

SX703　断面（北から）

SX707・708　断面（北から）

SX708 下半　断面（北から）

XII層水田　北区 1　全景（南東から）

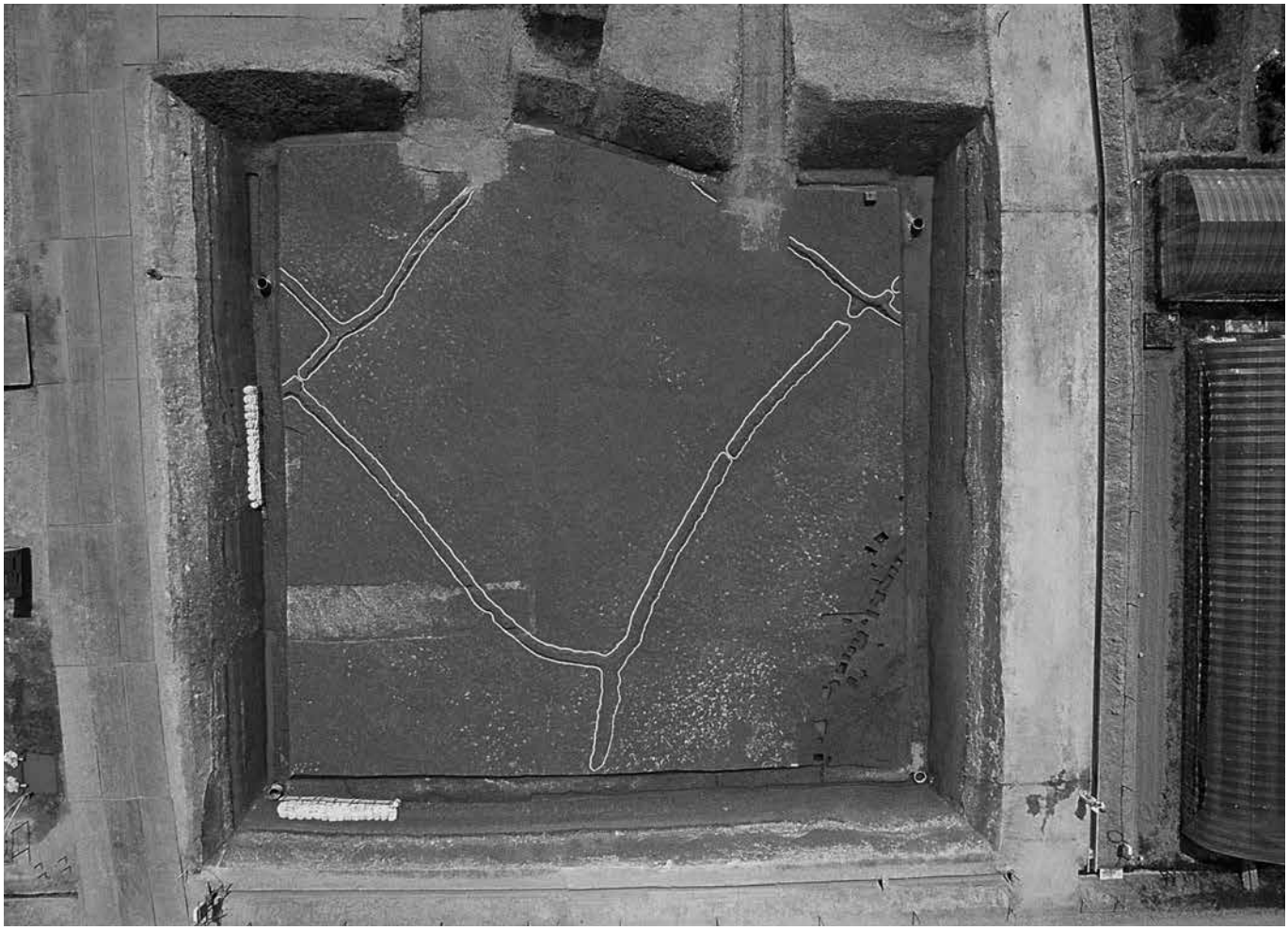
XII層水田　北区 1　全景（北東から）

畦畔 312・313　検出状況（南から）

畦畔 312・313　完掘（南から）

SD810　断面（南東から）

XII層水田　北区２　全景（北から）



XII層水田　北区２　全景（北から）

Ⅻ層水田　北区 2　全景（南東から）

Ⅻ層水田　北区 2　全景（南西から）

畦畔 320　検出状況（北西から）

畦畔 320、SD851　完掘（北西から）

畦畔 316・321　検出状況（北から）

畦畔 316・321　完掘（北から）

Ⅻ層水田　北区 2　全景（南東から）

畦畔 319・322　完掘（北から）

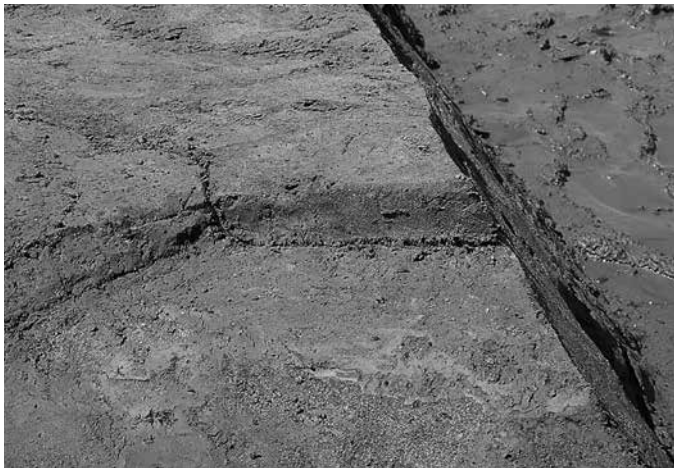
畦畔322　検出状況（東から）

畦畔316・322・324　完掘（北東から）

畦畔316　遺物出土状況（南西から）

畦畔319・321　完掘（北西から）

畦畔319水口1　検出状況（東から）

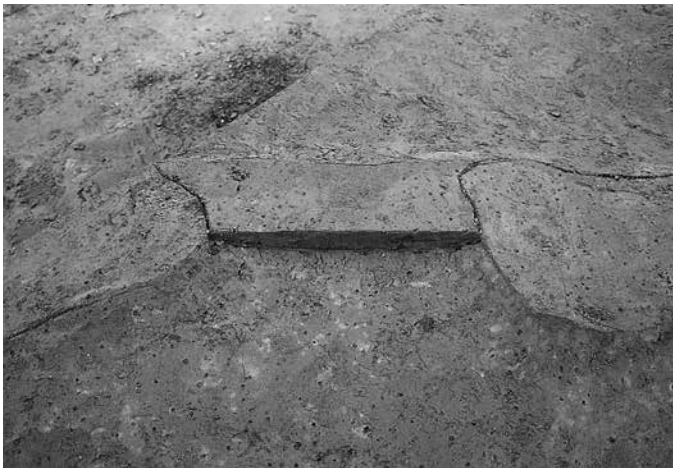


畦畔319水口1　断面（東から）

畦畔319水口4　検出状況（北西から）

畦畔319水口4　断面（北西から）

畦畔 318 水口　検出状況（南東から）



畦畔 318 水口　断面（南東から）

畦畔 316 水口　検出状況（北西から）

畦畔 319 水口 3　断面（南東から）

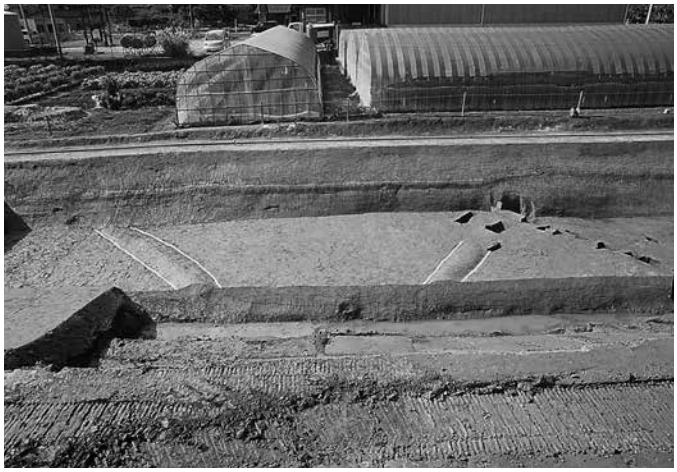
SD851・852　検出状況（北西から）

SD851　断面 A（北西から）

SD851　断面 B（南から）

SD852　断面（南西から）

Ⅻ層水田　北区2　全景（南から）

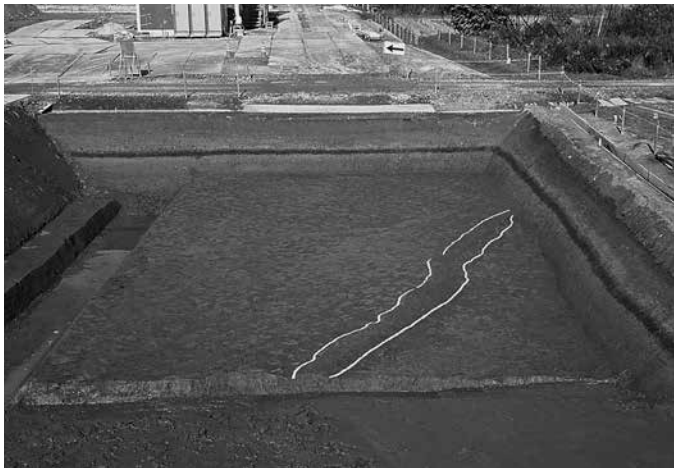


畦畔318・321　完掘（東から）

SX886-1　断面（南西から）

SX887　断面（北東から）

Ⅻ層水田　全景（南から）



Ⅻ層水田　全景（南から）

畦畔325・326　完掘（北東から）

畦畔317　完掘（北東から）

P915 ～ 919　検出状況（北西から）

P915　断面（北東から）

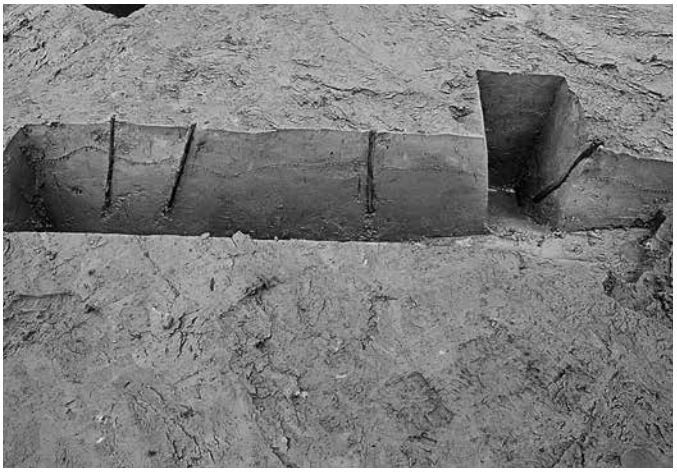
P916　断面（北西から）

P917　断面（北西から）

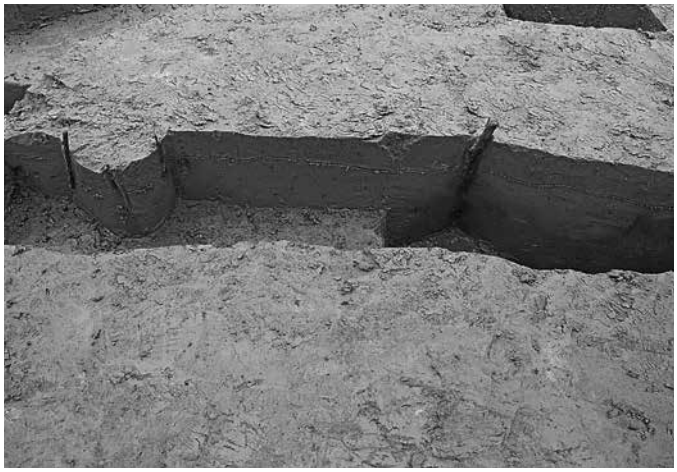
P918　断面（北西から）

P919　断面（北西から）

SA910　検出状況（東から）



SA910-1 ～ 4　断面（南東から）



SA910-5～8　断面（南東から）

SA910-9～11　断面（南東から）

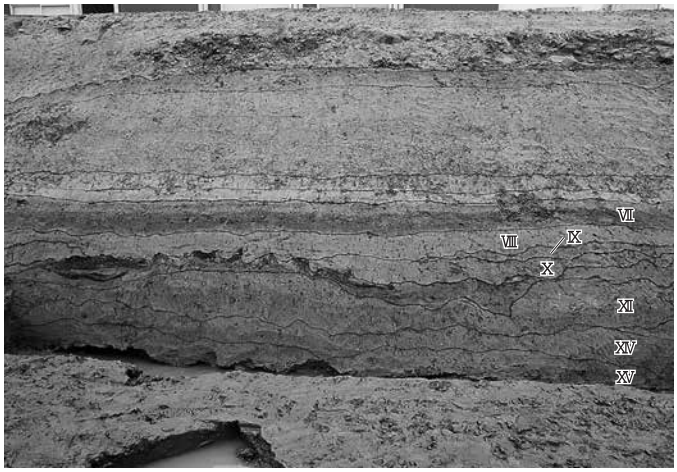
SA911　検出状況（東から）

SX901　断面（北西から）

SX902　断面（北西から）

SX906　断面（北西から）

XII層下駄　出土状況（北から）



北区３　基本層序⑧（西から）

XⅣ層水田　南区１・２　全景（東から）

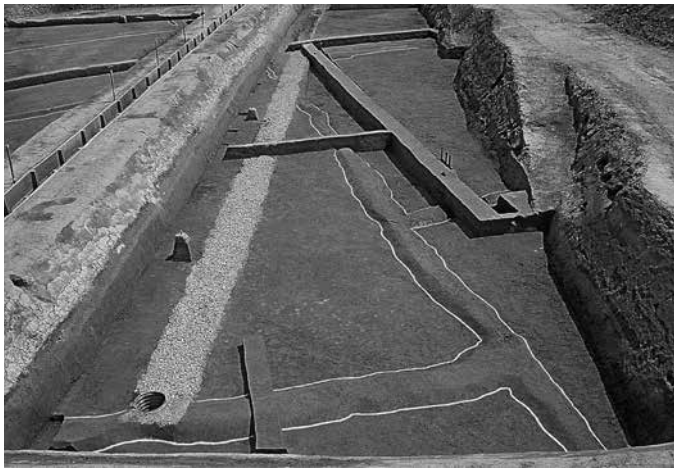
畦畔 402 盛土内　粗朶　検出状況（南西から）

XⅣ層水田　南区１・２　全景

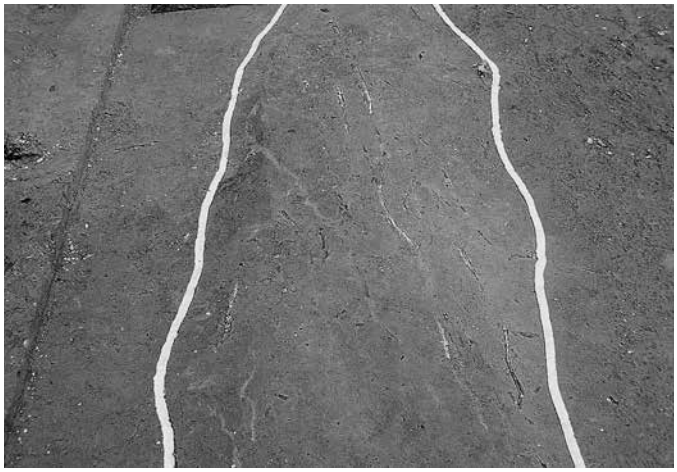
XⅣ層水田　南区１　完掘（北東から）

XⅣ層水田　南区１　完掘（北東から）

XⅣ層水田　南区１　完掘（北東から）

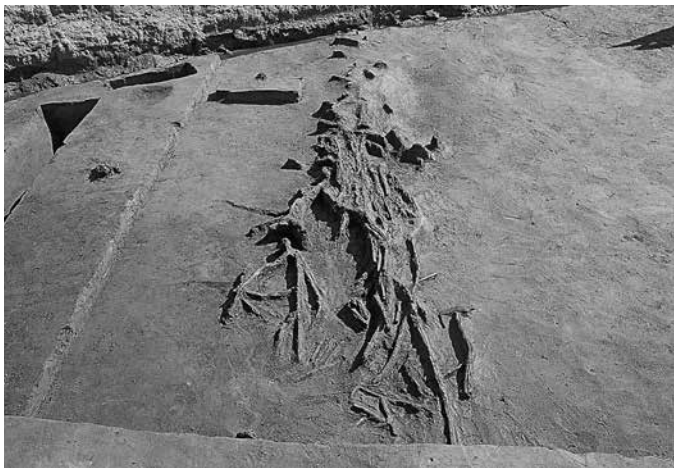


XⅣ層水田　南区２　完掘（西から）



畦畔 402　粗朶　確認状況（南西から）

畦畔 402　粗朶　検出状況（北東から）



畦畔 402　粗朶　検出状況（南西から）

畦畔 402　粗朶断面（北西から）

SD709　断面（北東から）

SD709　完掘（北東から）

SX710　断面（北東から）

SX711・712・713　断面（南東から）

XⅣ層水田　北区２　全景（南東から）

XⅣ層水田　北区２　全景（南東から）

XⅣ層水田　北区１　全景（南から）

XⅣ層水田　北区１　全景（南東から）

畦畔 412　完掘（南から）

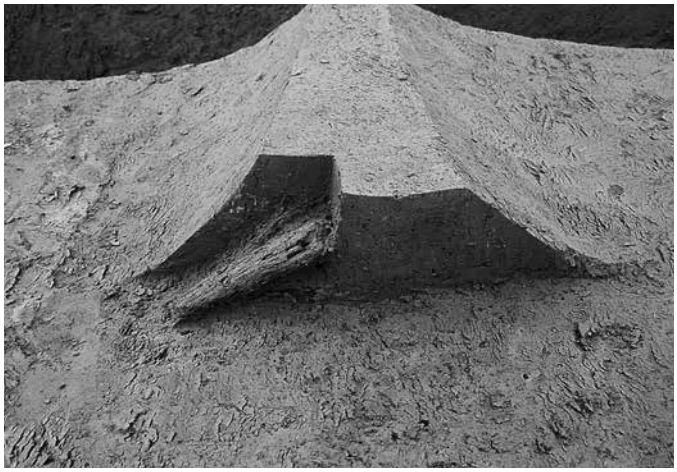
畦畔 418・413・421　完掘（北から）

XⅣ層水田　全景（南から）

畦畔 422・414　完掘（南東から）

畦畔 414　完掘（南西から）

畦畔 414 水口　断面（南東から）



畦畔 414 遺物出土状況（北東から）

畦畔 414 遺物出土状況（北東から）

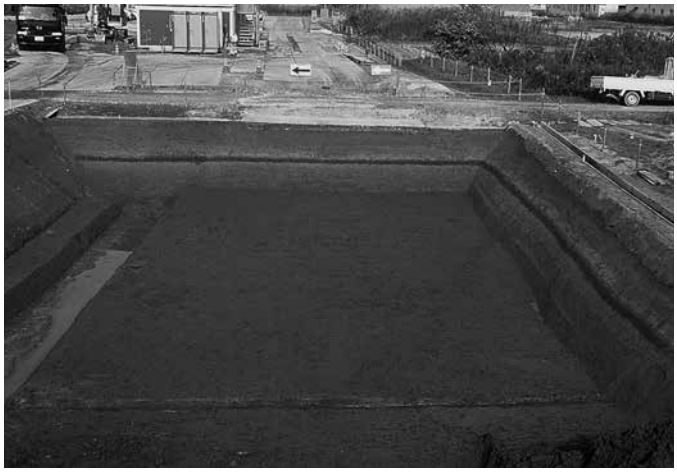
XIV層水田（北区 2）　全景（南東から）

畦畔 416　検出状況（南東から）

XIV層水田　全景（南から）

畦畔 423・424　完掘（北東から）

畦畔 415　完掘（北東から）



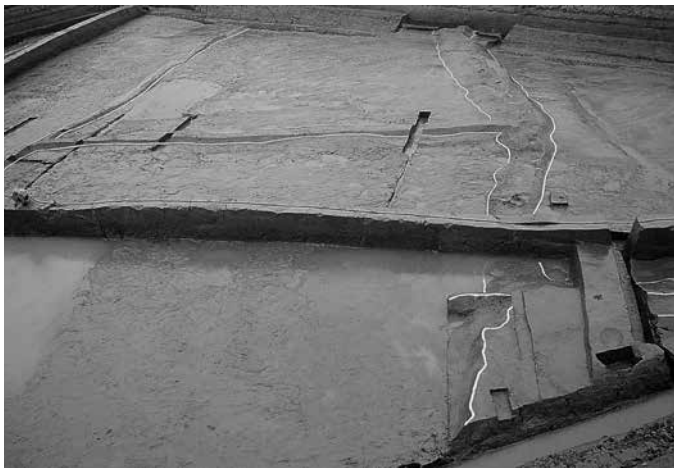
XIV層水田　全景（南から）

XVI層水田　南区１・２　全景（東から）

畦畔 501　畦畔上樹皮敷き　検出状況（南西から）

XVI層水田　南区１　完掘（北東から）

XVI層水田　南区１　完掘（東から）



XVI層水田　南区１　完掘（北東から）

XVI層水田　南区１　完掘（北から）

XVI層水田　南区１　完掘（南西から）

XVI層水田　南区１　完掘（南西から）

XVI層水田　南区１北隅　完掘（南から）

XVI層水田　南区２　完掘（西から）

畦畔 501　畦畔上樹皮敷き　検出状況（北西から）

畦畔 501　畦畔上樹皮敷き　検出状況（北西から）

畦畔 501　畦畔上（4B24 グリッド）人形出土状況（北東から）

畦畔 501　畦畔上（5C16 グリッド）礫・遺物出土状況（北東から）

XVI層水田　5C16・17 グリッド　遺物出土状況（南から）

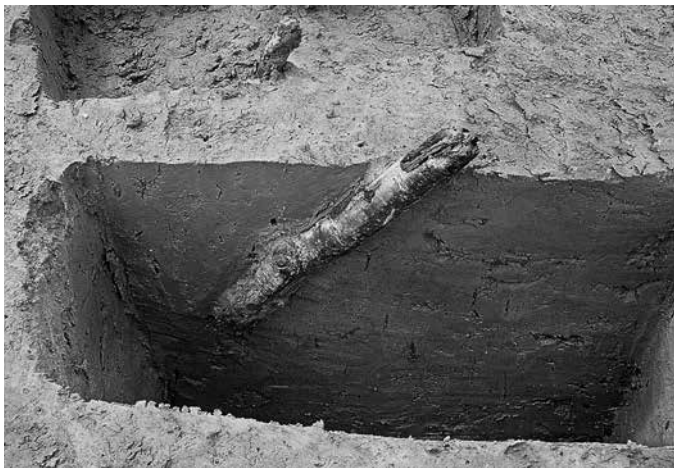
XVI層水田　5C16 グリッド　杓子出土状況（南から）

SX714　断面（北西から）

SX714　完掘（南東から）

SA716-2　断面（南西から）

SA716-2～5　検出状況（北東から）



SA716-10　断面（北東から）

SA716-12～21　検出状況（北東から）

SA717-1　断面（南西から）

SA717　全景（北西から）

SX718　断面（西から）

SX719　断面（東から）

XVI層上面検出状況（南西から）

XV層漆器椀　出土状況（北から）

SX866　断面（北東から）

SX867　断面（北から）

SX868　断面（北西から）

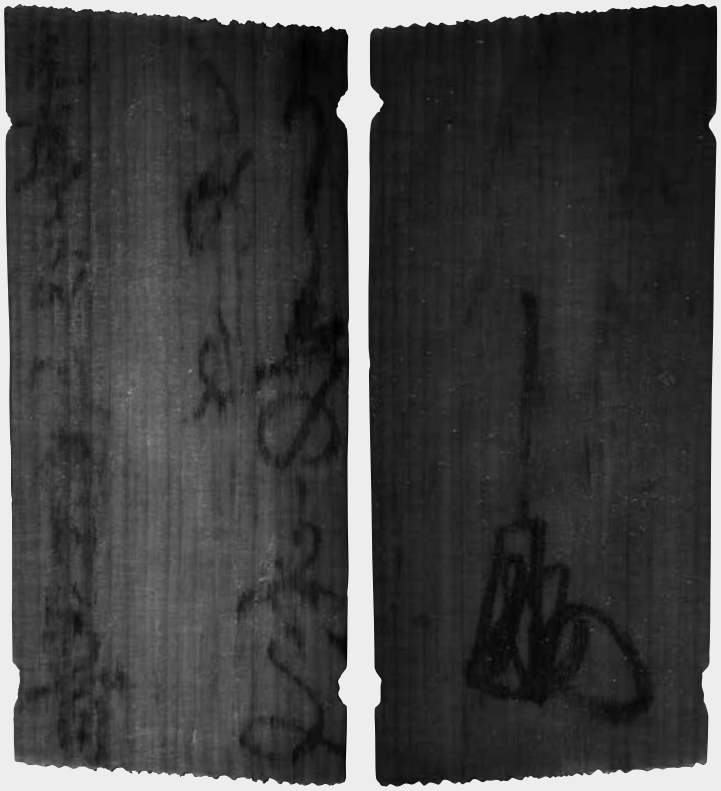
表　　裏

第一号木簡（S=1/1）（図版 82-255）

第二号木簡（S=1/1）
（図版 79-204）

第三号木簡（S=2/3）
（図版 87-8）

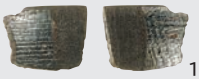
表　　裏



第四号木簡（S=1/1）（図版 89-39）

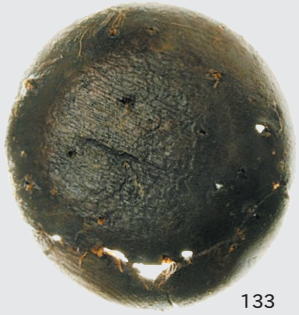
その他　〔1:3〕
111　〔1:4〕

119


128

129

120


133

130

125

132

127

131

134

136

126

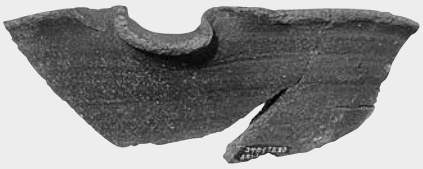
137

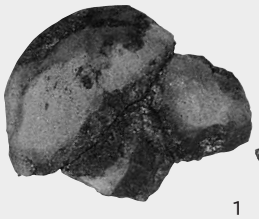
135

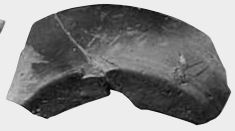
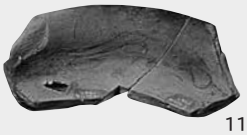
129　〔1:2〕
その他　〔1:3〕

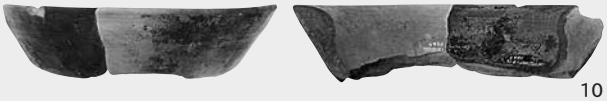
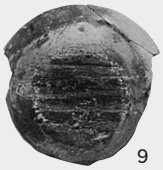
265 〔1:2〕
その他 〔1:3〕

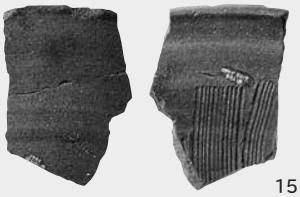
その他　〔1:2〕
304 ～ 308　〔1:4〕



4

1

5


11


10

9

12

15

13

3

16

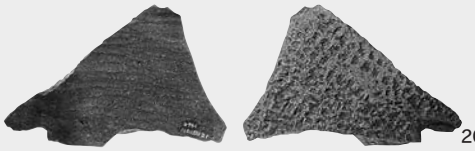
18

17

19

14

1・9 ～ 12　〔1:3〕
その他　〔1:4〕

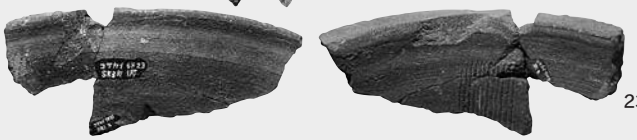

20

22

21

24

25


23

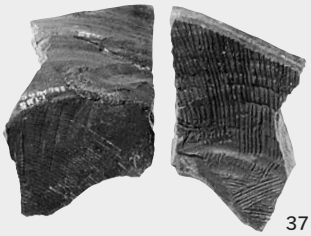
32

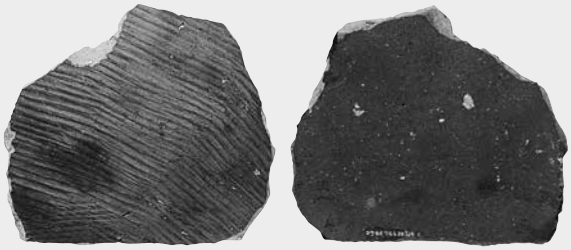
26

35

27

36

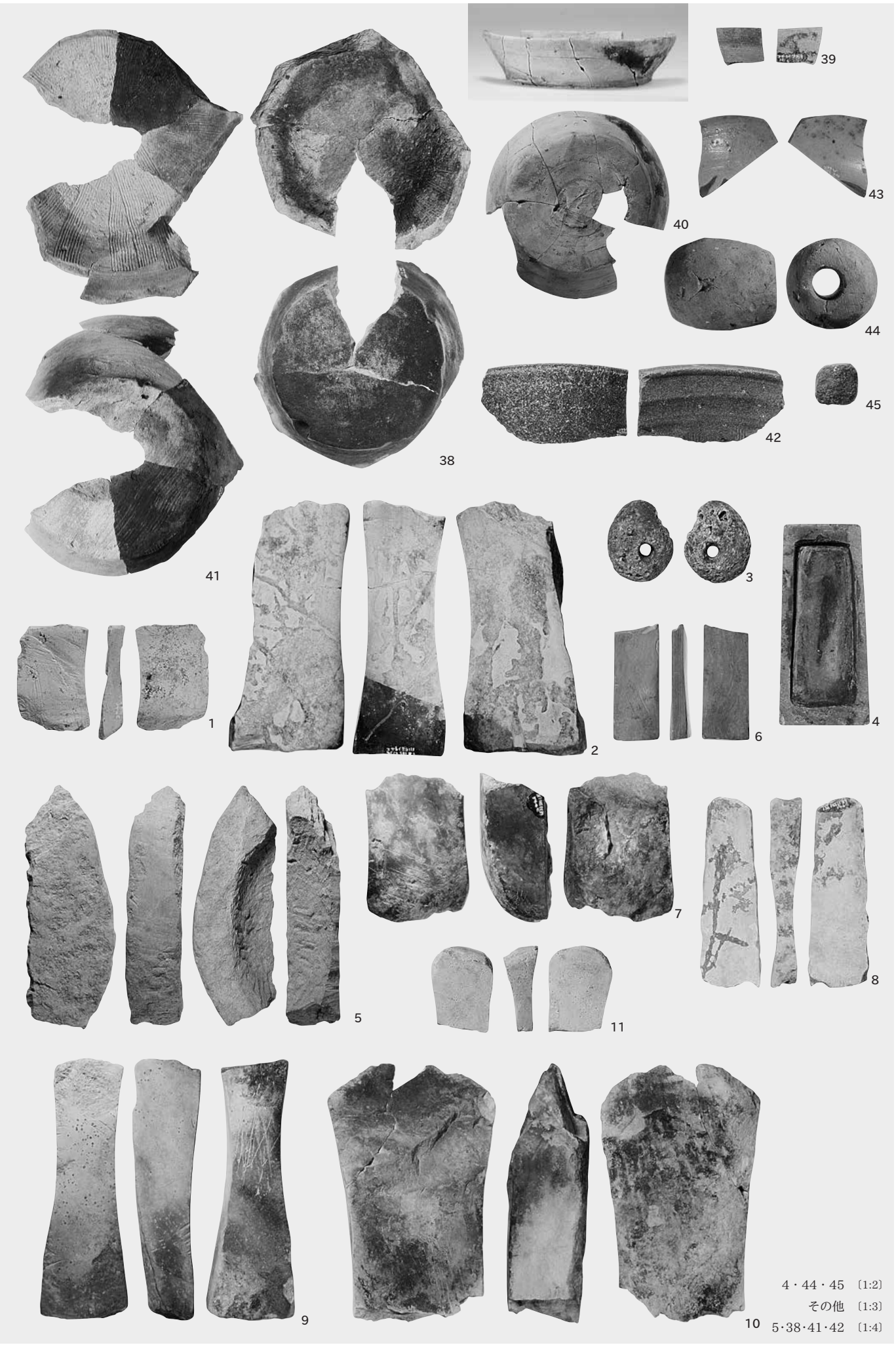

37


28

29

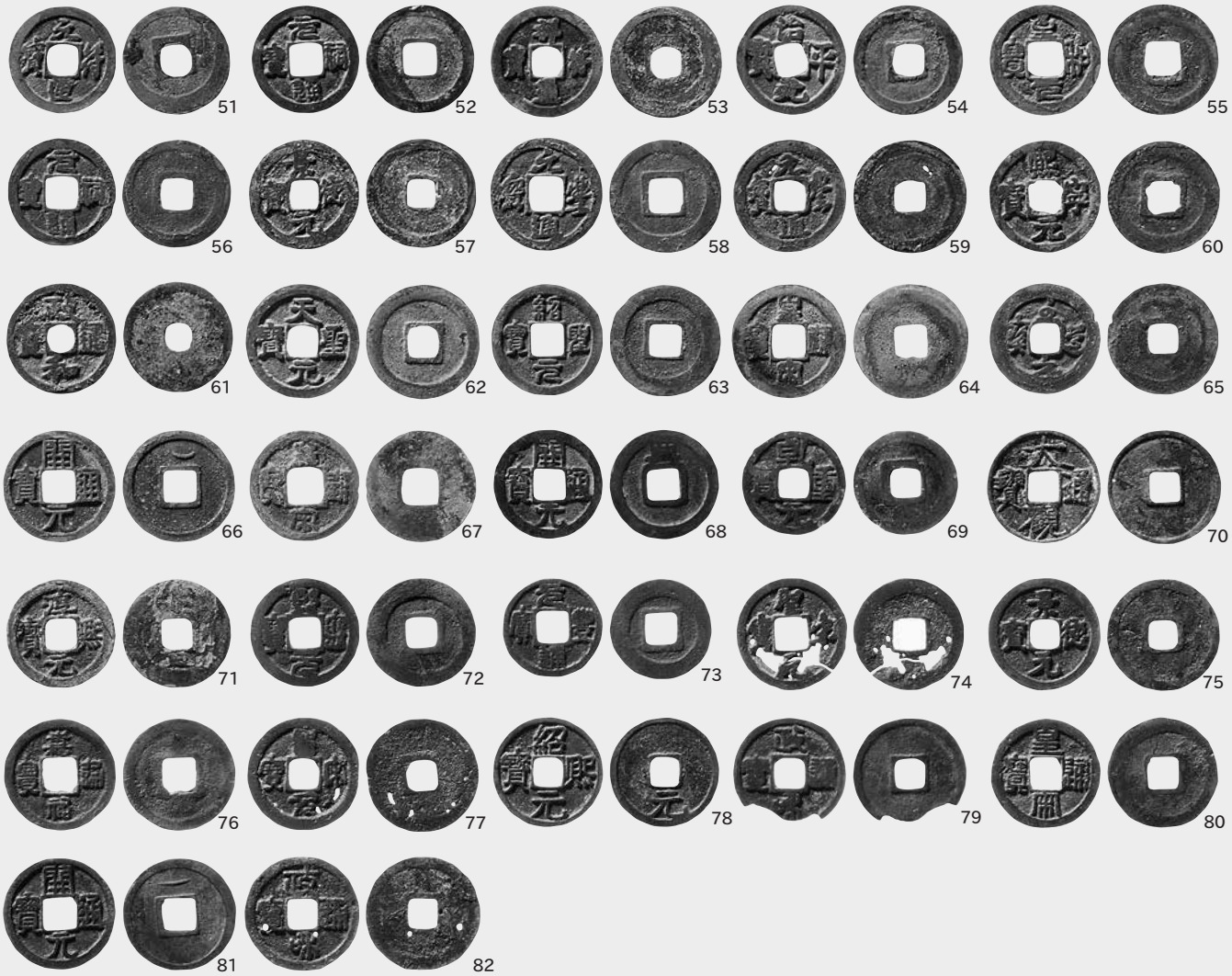
34

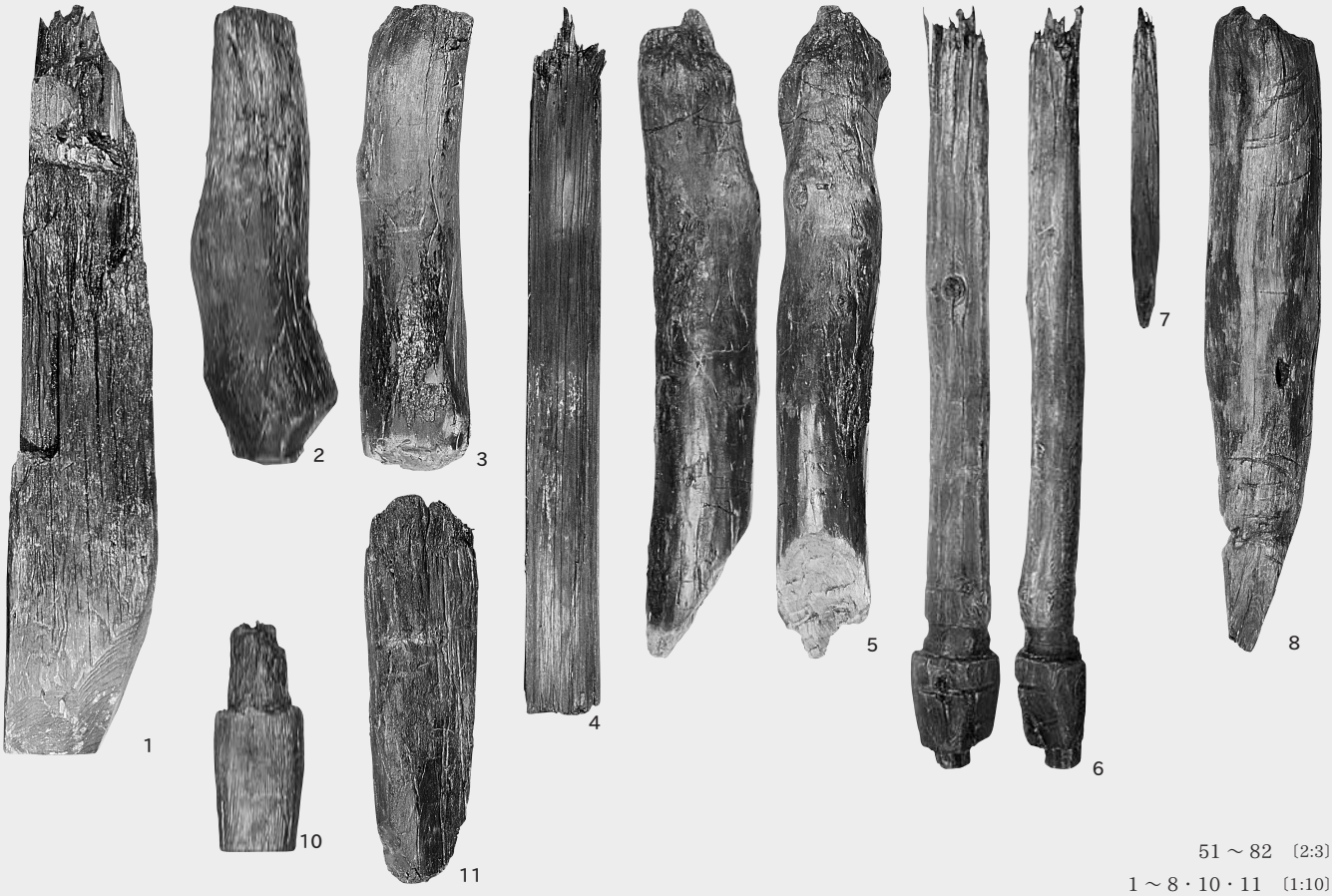
その他　〔1:3〕
20・21・23・26～29・34～37　〔1:4〕



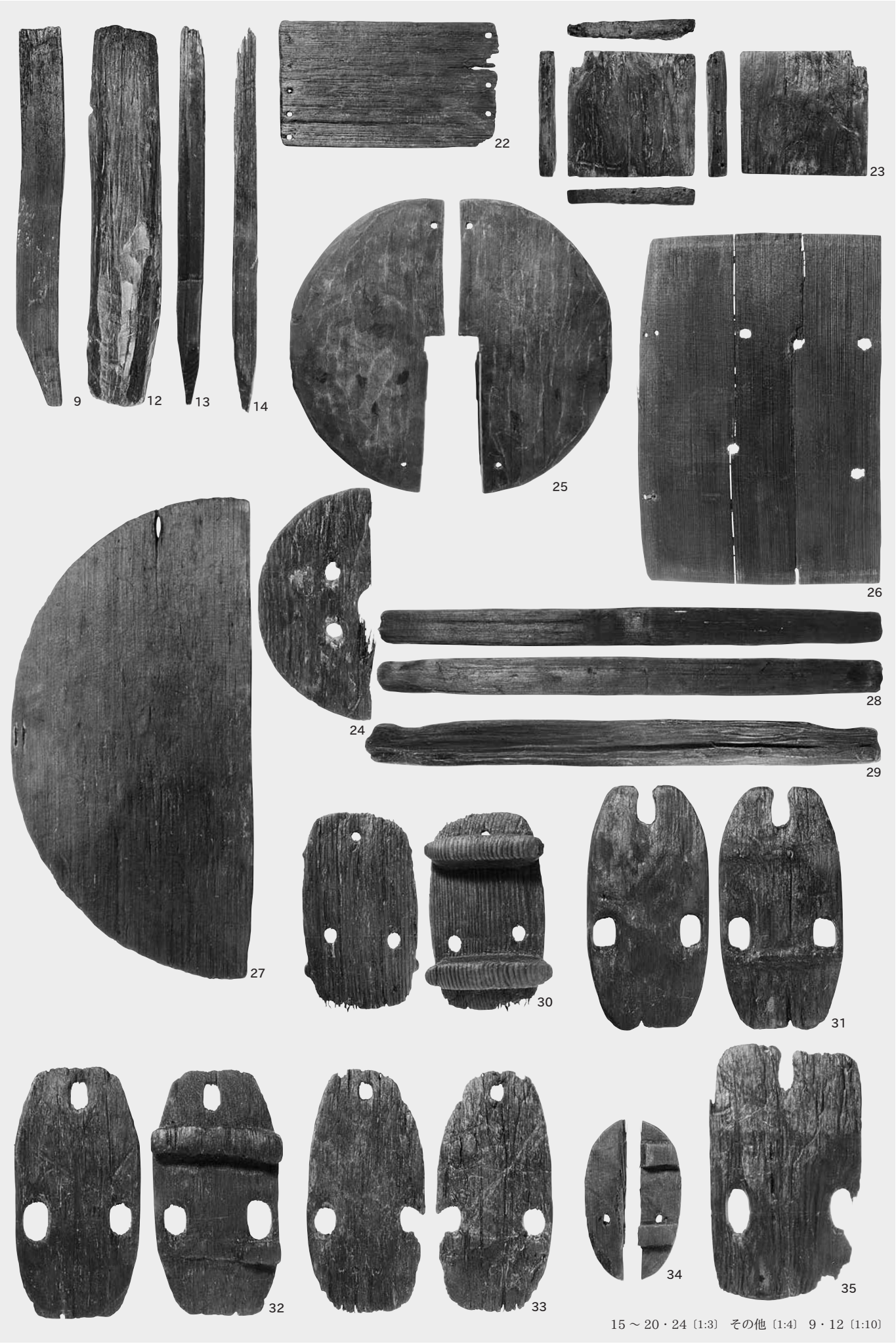
4・44・45 〔1:2〕
その他 〔1:3〕
5·38·41·42 〔1:4〕

20 ～ 22　〔2:3〕
16・18・25・29 ～ 31・34 ～ 39・43 ～ 48　〔1:2〕
12 ～ 15・17・19・23・24・26 ～ 28・40 ～ 42・49・50　〔1:3〕
32・33　〔1:4〕

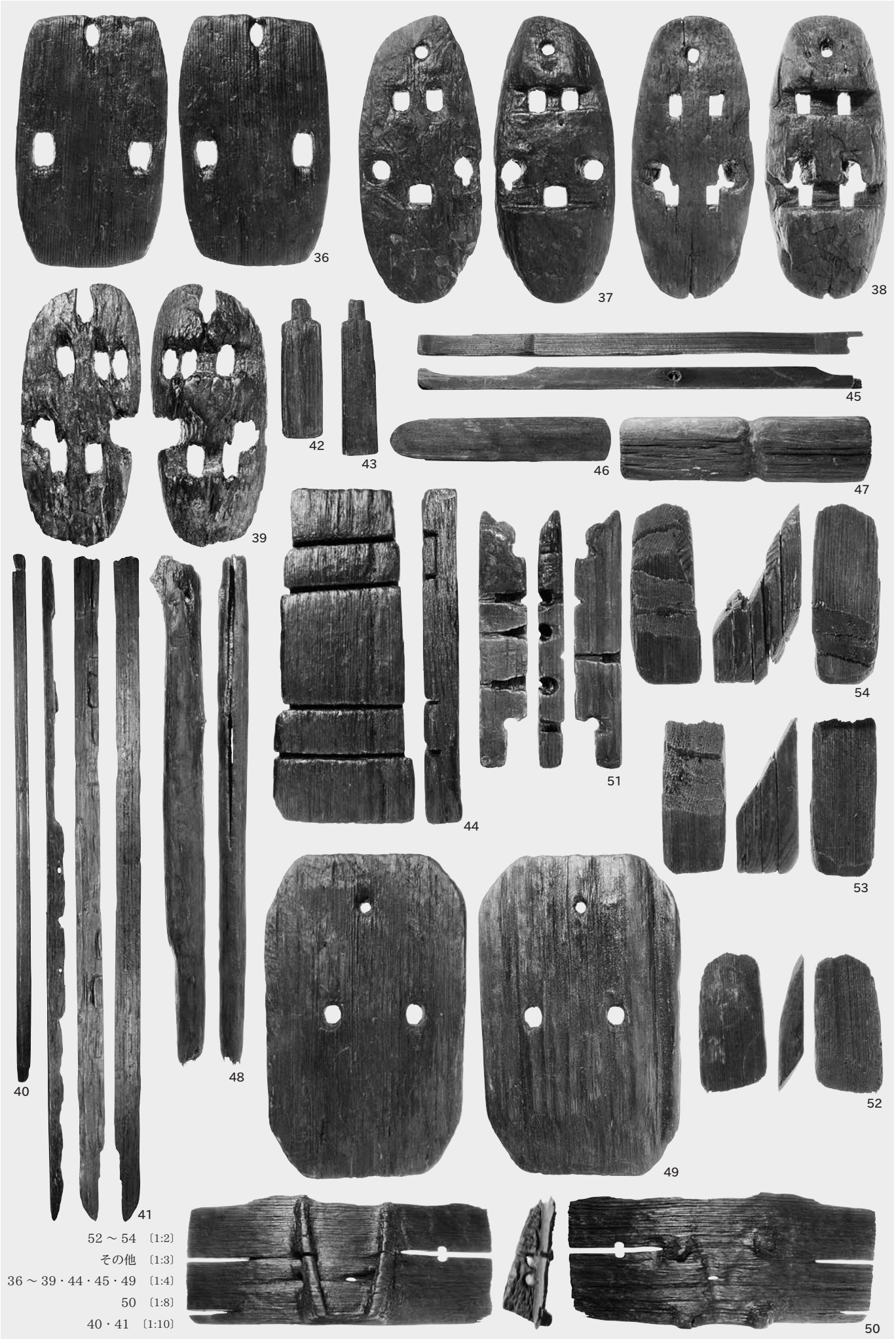




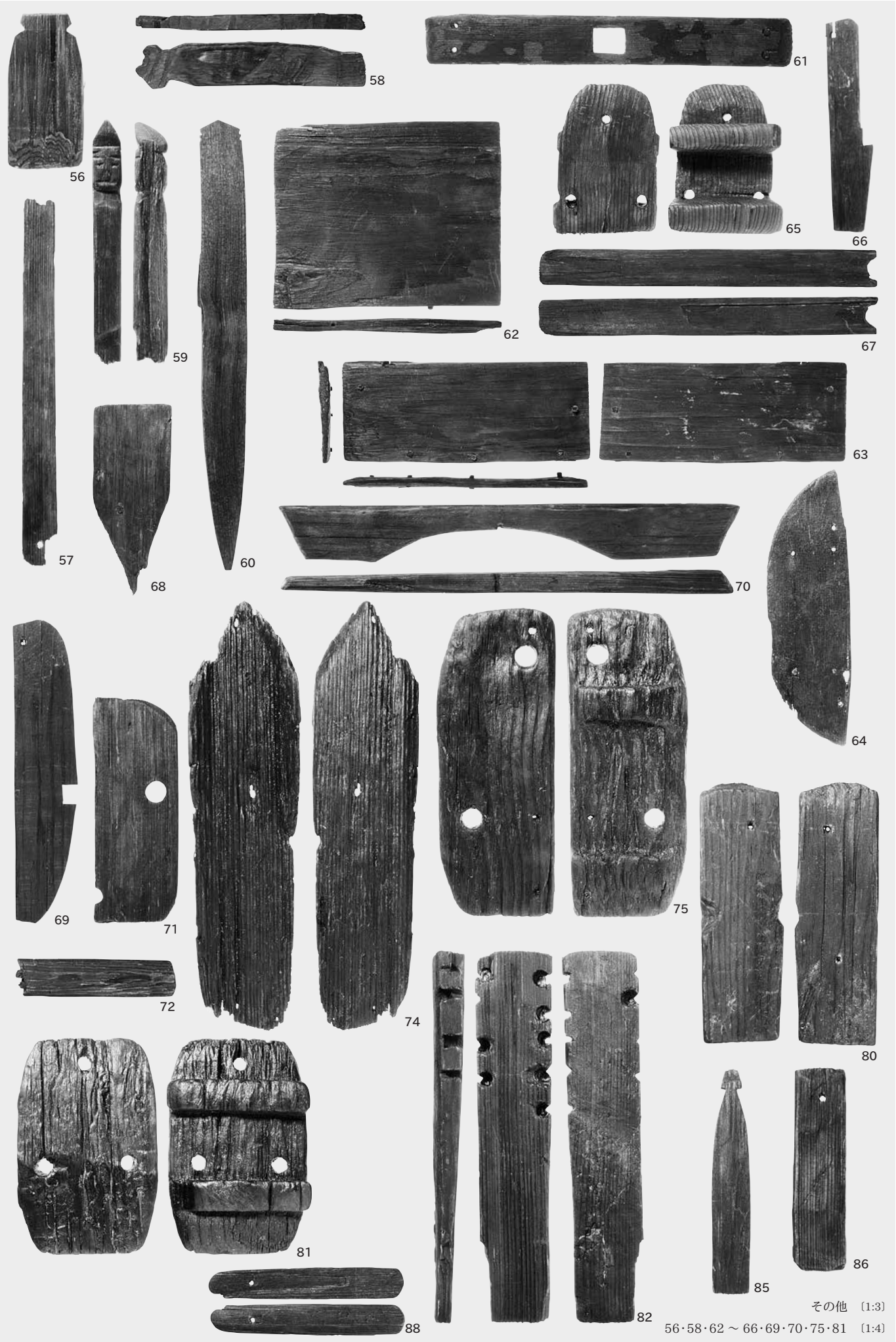
51 ～ 82 〔2:3〕
1 ～ 8・10・11 〔1:10〕



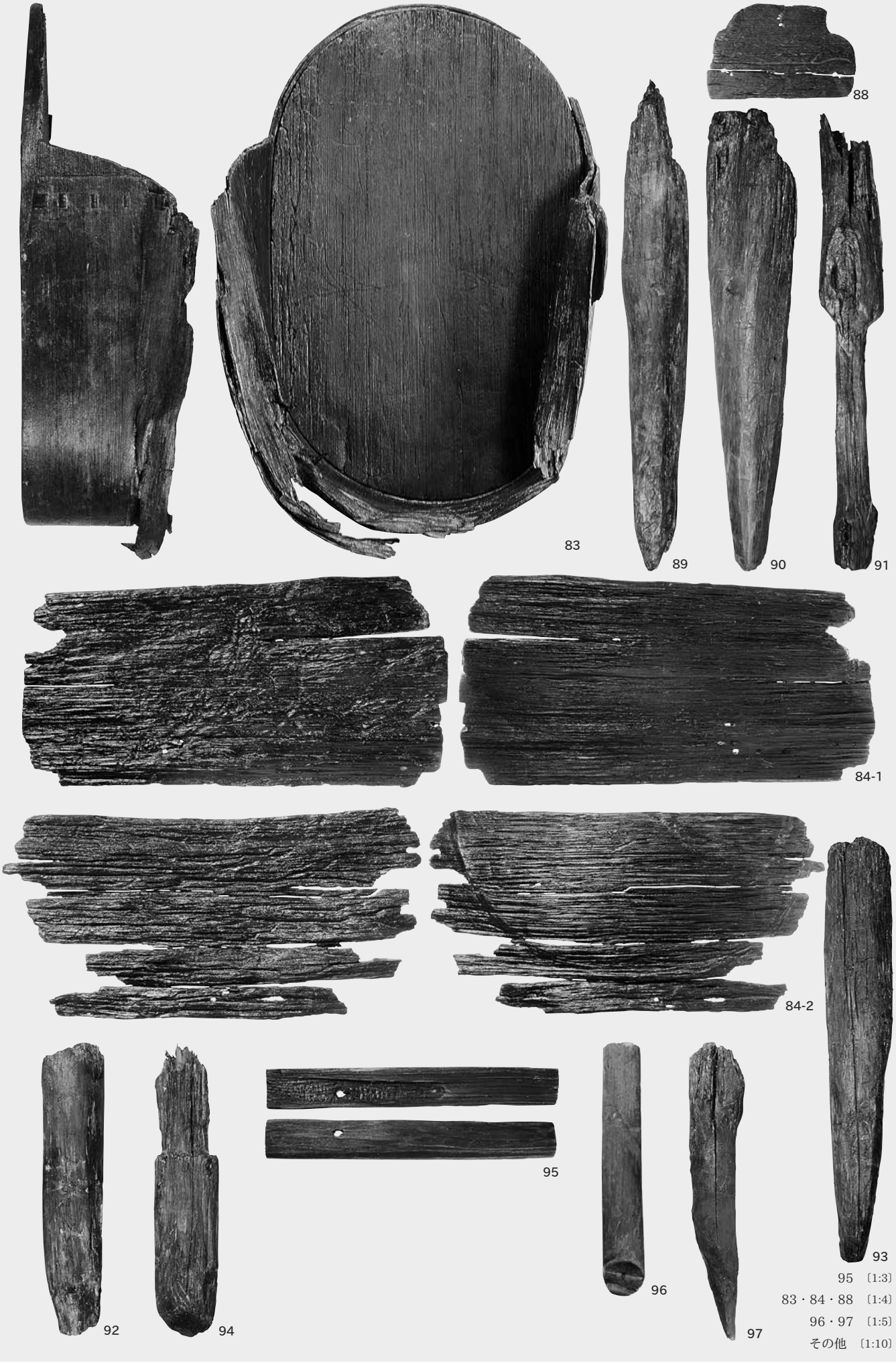
15 ～ 20・24〔1:3〕 その他〔1:4〕 9・12〔1:10〕



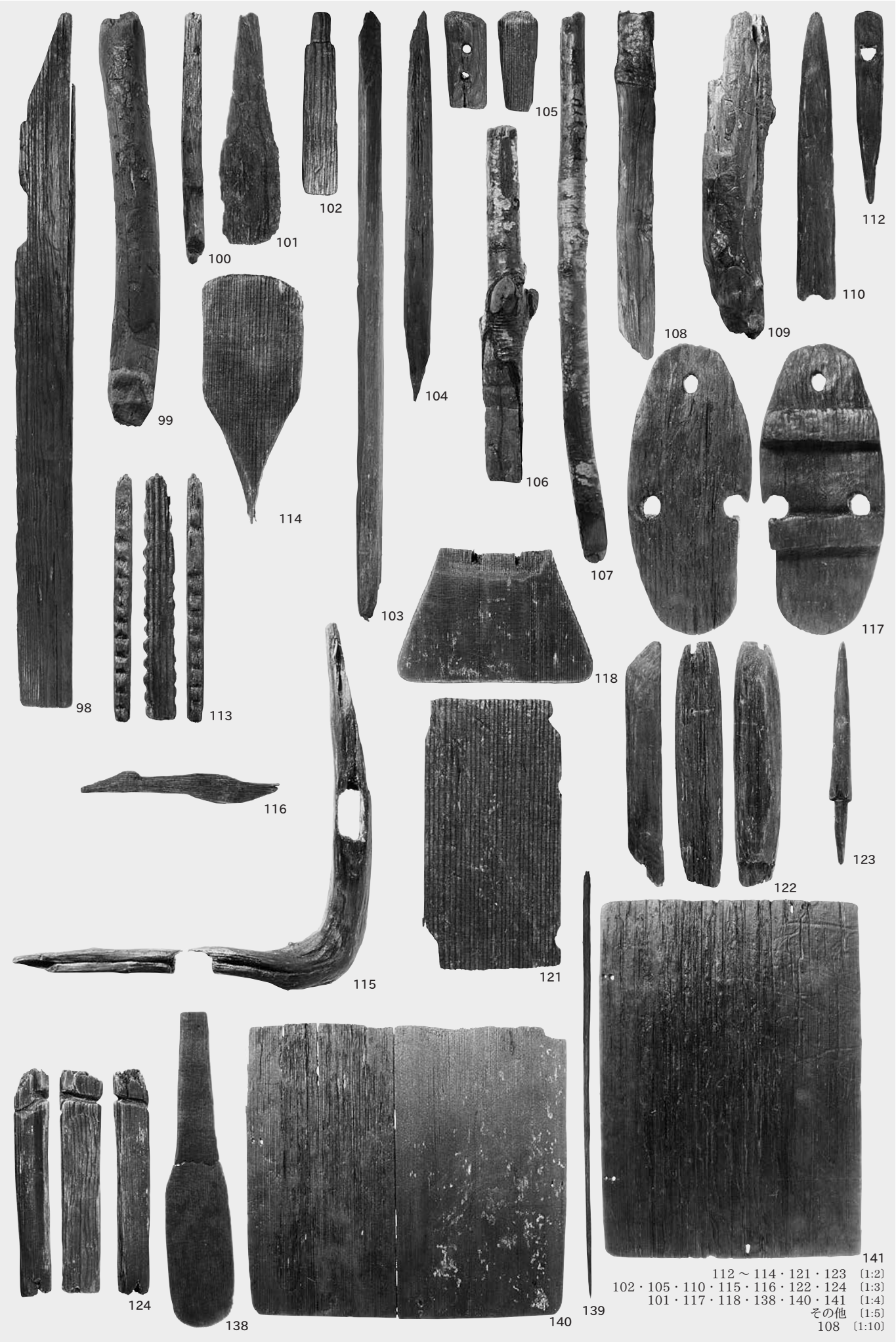
52 ～ 54　〔1:2〕
その他　〔1:3〕
36 ～ 39・44・45・49　〔1:4〕
50　〔1:8〕
40・41　〔1:10〕



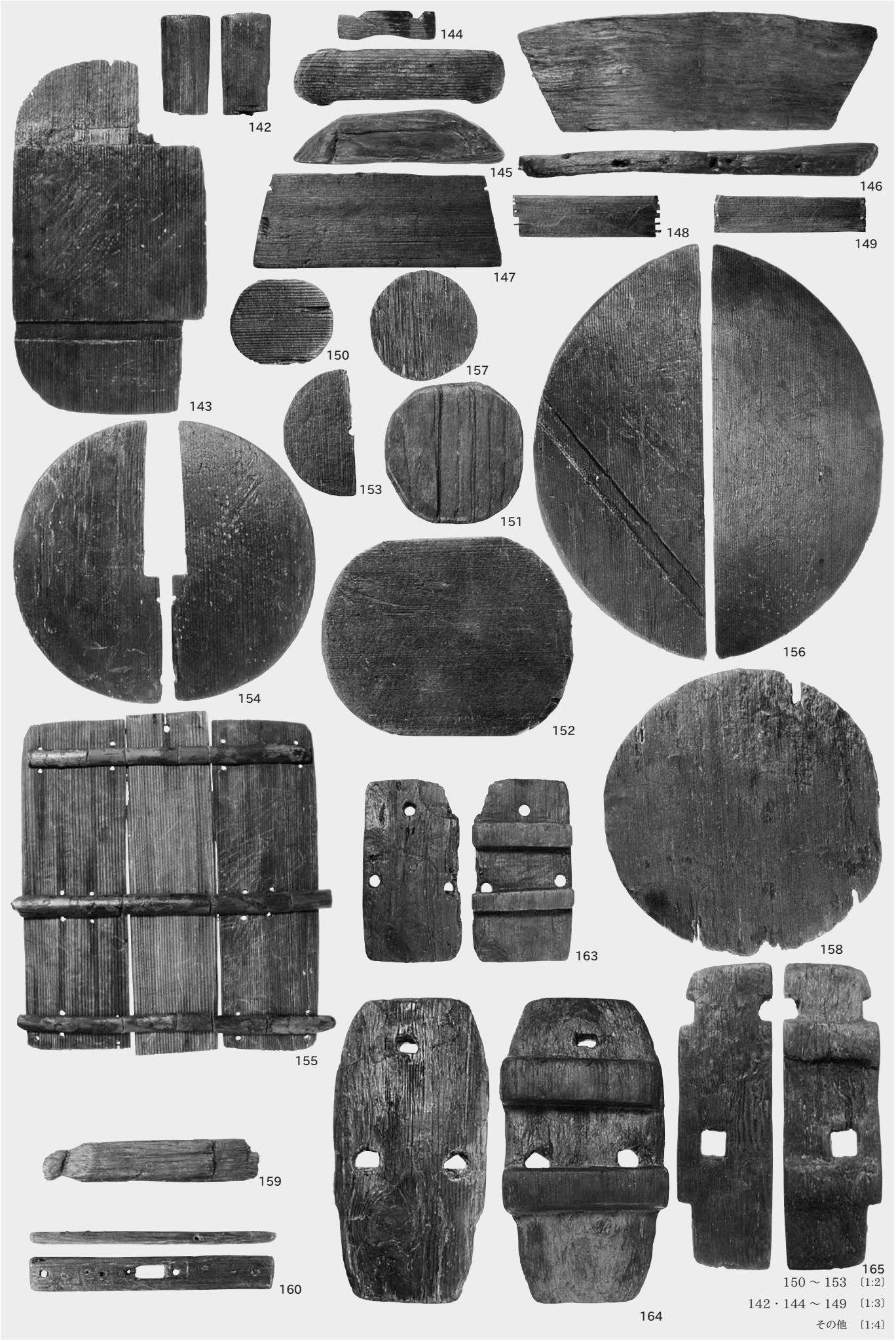
その他　〔1:3〕
56・58・62 ～ 66・69・70・75・81　〔1:4〕



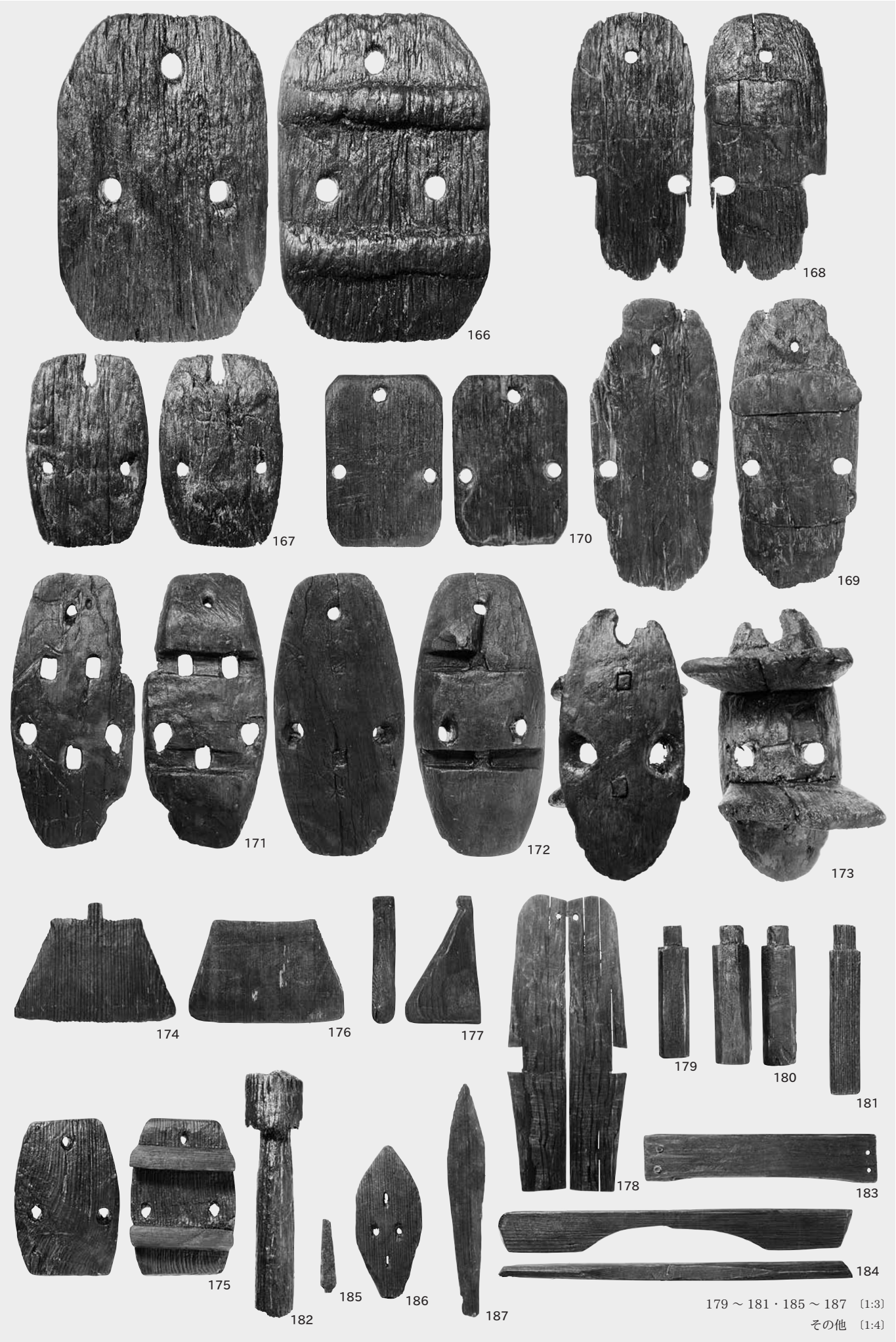
95 〔1:3〕
83・84・88 〔1:4〕
96・97 〔1:5〕
その他 〔1:10〕



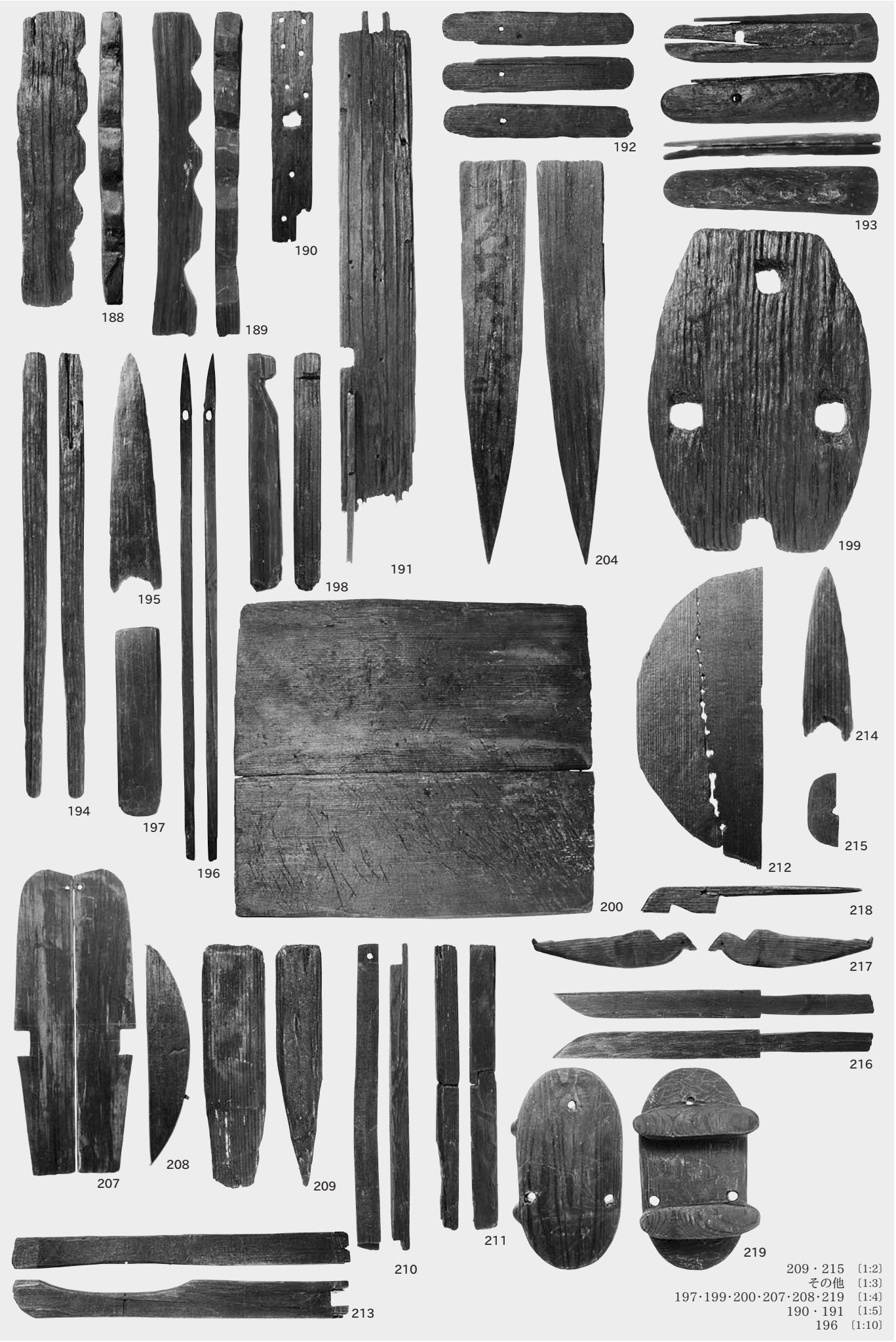
112 ～ 114・121・123 〔1:2〕
102・105・110・115・116・122・124 〔1:3〕
101・117・118・138・140・141 〔1:4〕
その他 〔1:5〕
108 〔1:10〕



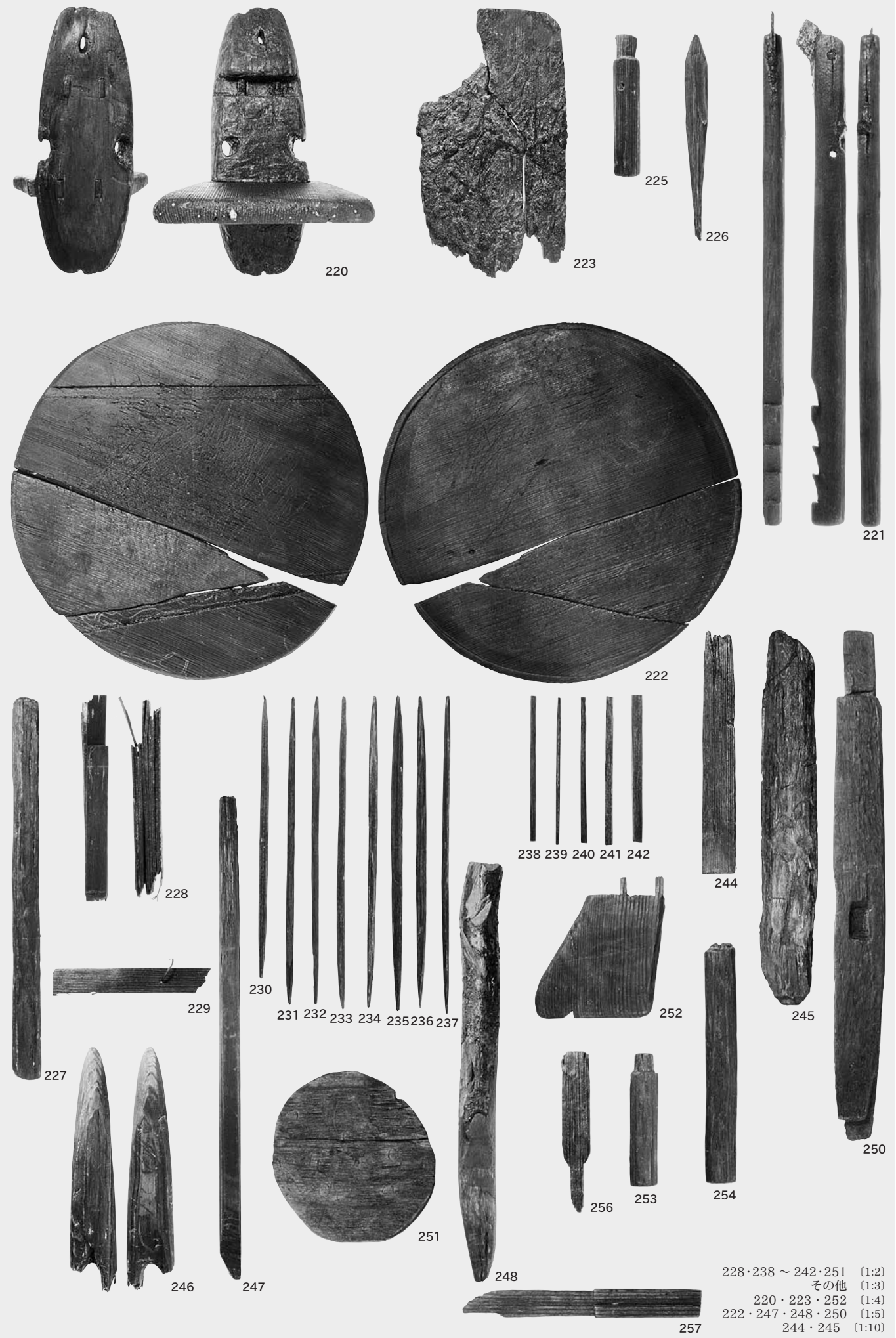
150 ～ 153 〔1:2〕
142・144 ～ 149 〔1:3〕
その他 〔1:4〕



179 ～ 181・185 ～ 187　〔1:3〕
その他　〔1:4〕



209・215 〔1:2〕
その他 〔1:3〕
197・199・200・207・208・219 〔1:4〕
190・191 〔1:5〕
196 〔1:10〕



228・238 ～ 242・251 〔1:2〕
その他 〔1:3〕
220・223・252 〔1:4〕
222・247・248・250 〔1:5〕
244・245 〔1:10〕

249

258

259

260

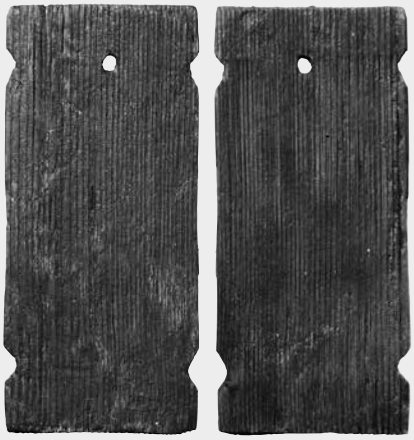
263

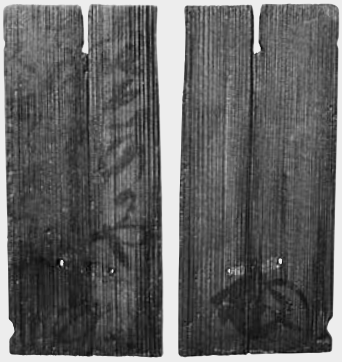
264

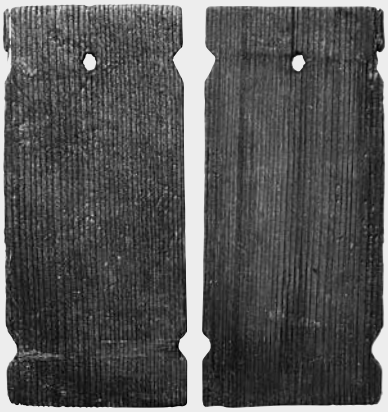
268

266

267


255-1（上）


255-2（中）


255-3（下）

270

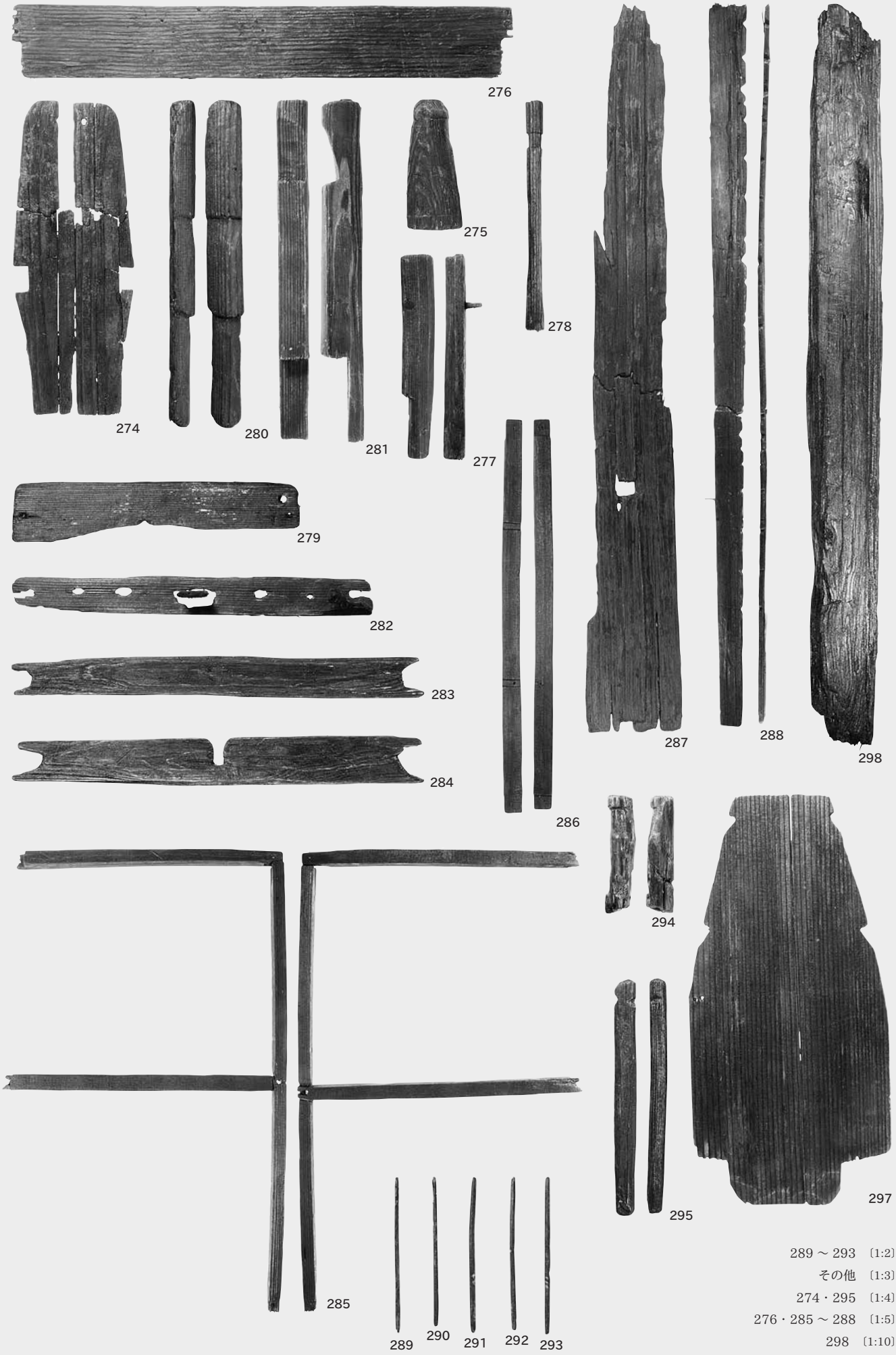
271

272

269

273

255 〔1:2〕
259・260・267・273 〔1:3〕
その他 〔1:4〕



289 ～ 293 〔1:2〕
その他 〔1:3〕
274・295 〔1:4〕
276・285 ～ 288 〔1:5〕
298 〔1:10〕

Ⅵ層

1

Ⅴ層　　トレンチ埋土

2　3

XⅣ層

4

5

6

7

8

畦畔 501 盛土（10）

10

XⅥ層遺構内

畦畔 501（9）　SA716-2（11）　SA717-1（12）

9

11

12

XⅥ層

13

暗渠

14

11〔1:5〕12〔1:10〕2・3〔2:3〕その他〔1:3〕

1

14

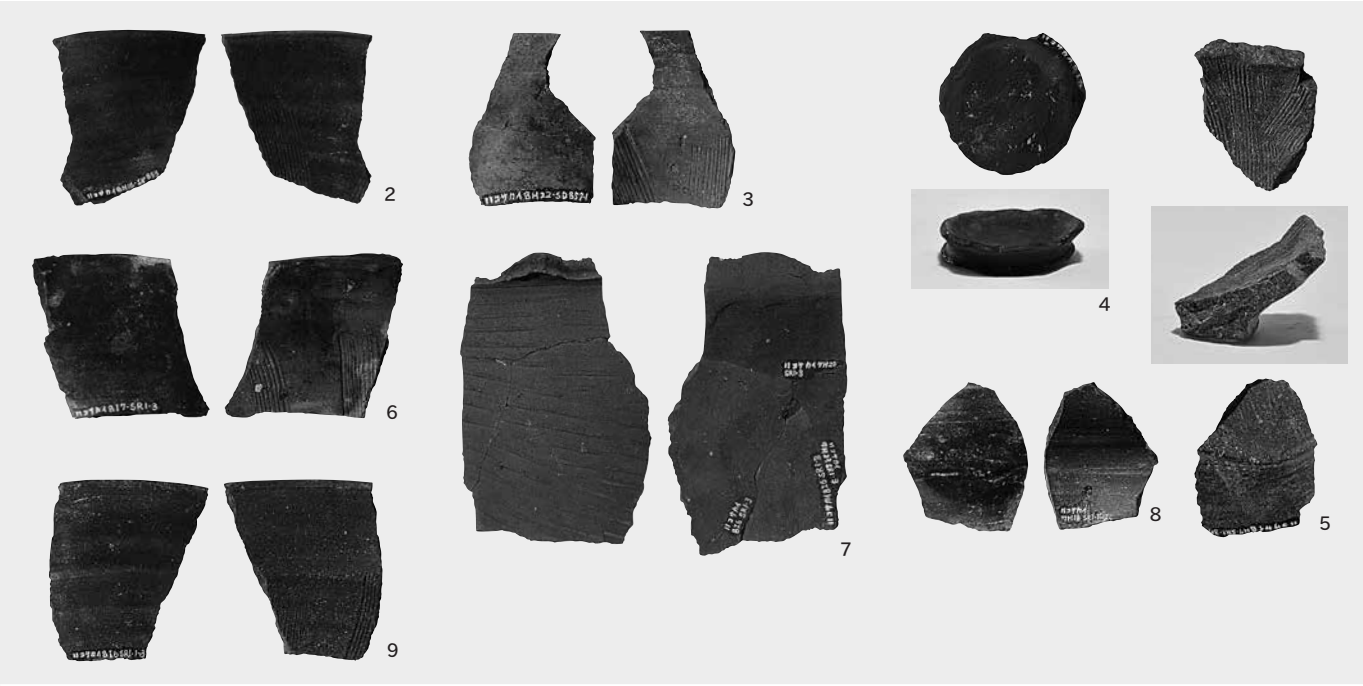
15

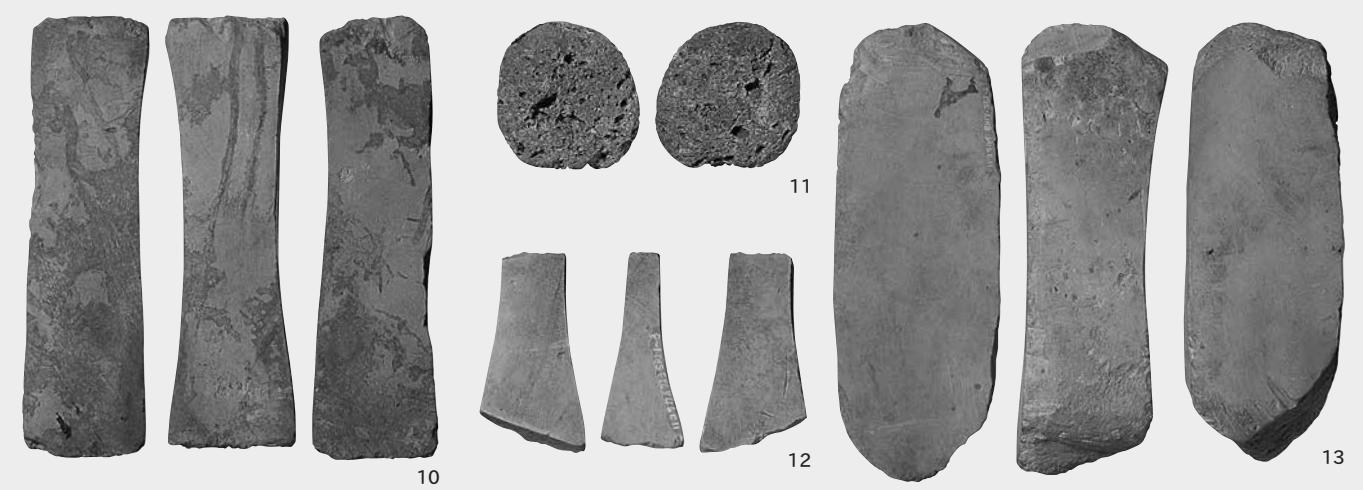
17

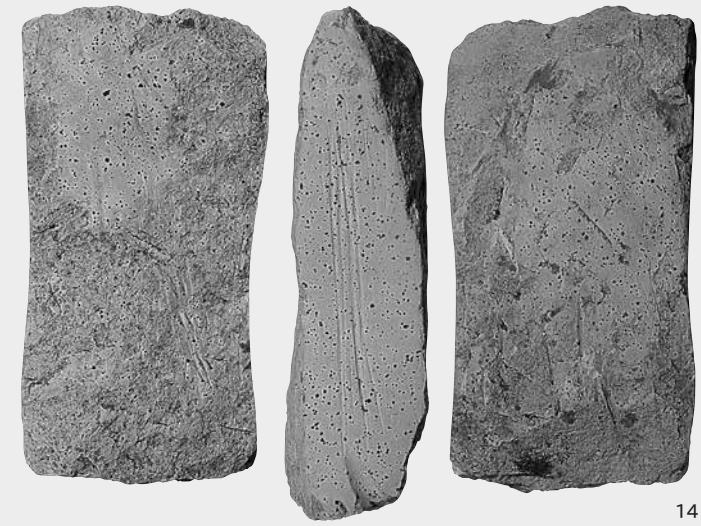
37

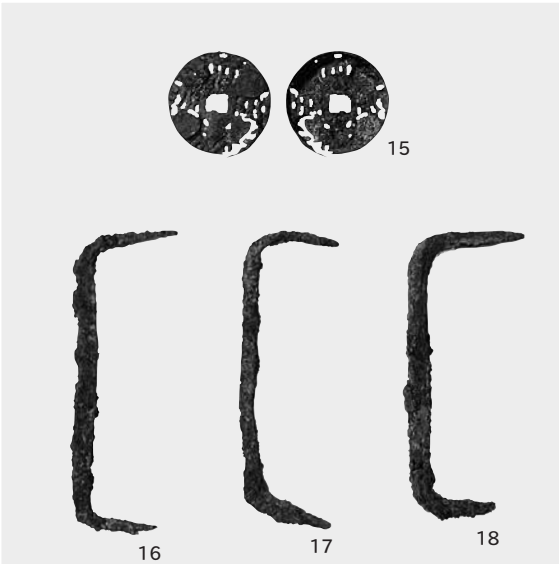
49

17 〔1:2〕
その他 〔1:3〕



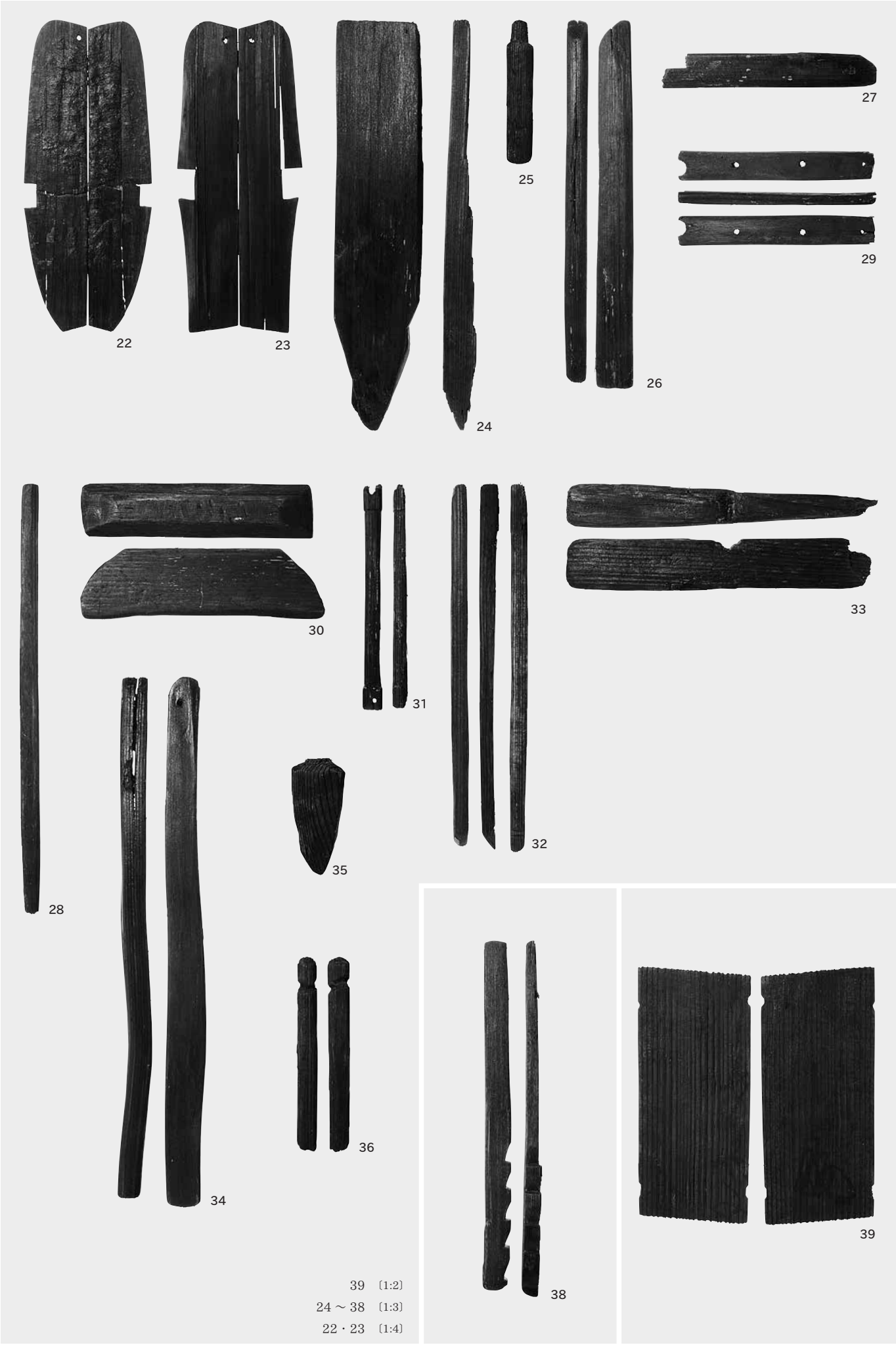






16 ～ 18　〔1:2〕
4・10 ～ 14　〔1:3〕
15　〔2:3〕
その他　〔1:4〕

7～9 〔1:2〕
3・10・11 〔1:3〕
4 〔1:4〕
5・6・12・13 〔1:5〕
1・2 〔1:10〕



39 〔1:2〕
24 ～ 38 〔1:3〕
22・23 〔1:4〕

40

41

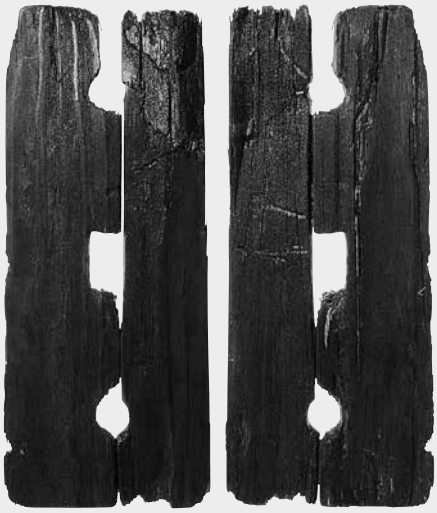
42

43

44

45

46


47

48

47・48 〔1:3〕
40・43・44 〔1:5〕
41・42・45・46 〔1:10〕

報告書抄録

ふりがな	こさかいづけいせき
書名	小坂居付遺跡
副書名	一般国道８号白根バイパス関係発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 238 集
編著者名	佐藤友子･鈴木俊成（以上、埋文事業団）、荒谷伸郎･石垣義則･折原洋一･佐藤　俊（以上、株式会社ノガミ）、斉藤崇人・斉藤紀行・高橋敦・馬場健司・松元美由紀・（以上、パリノ・サーヴェイ株式会社）、花森功仁子（株式会社ジェネテック）
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956－0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地１　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2012（平成 24）年８月 31 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
小坂居付遺跡（こさかいづけいせき）	新潟県新潟市南区小坂字居付 177 番地ほか（にいがたけんにいがたしみなみくこさかあざいづけばんち）	15106	744	37 度 47 分 07 秒	139 度 01 分 15 秒	20090420～ 20091105 20100413～ 20101012 20110412～ 20111227	22,100	道路（一般国道８号白根バイパス）建設

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
小坂居付遺跡	屋敷地、生産遺跡（水田）	鎌倉時代末～室町時代（13 世紀末～14 世紀）	掘立柱建物１、土坑 109、溝 72、杭列 18、柱・柱穴 272、灰分布範囲２、焼土７、杭集中部１、杭・串 387、集石４、樹根列２、窪地６、水田面は５面に累重、水口・水路	土師質土器・珠洲焼・瀬戸焼・美濃焼・青磁・土錘・砥石・鉄椀・鉄皿・鉄鍋・刀子・鉄鏃・鋏・鉄鉤・銭貨・硯・木簡・烏帽子？・櫛・下駄・田下駄・茅針・漆器椀・漆器皿・折敷・箸状木製品・曲物・人形・斎串・串・鳥形・舟形	第一号木簡茅札に「元亨３(1323)年」、第四号木簡茅札に「元亨５(1325)年」の文字あり。第二号木簡に「しろわせ」と書いた種子札あり。シタン製刀子柄あり。

屋敷地では掘立柱建物１棟をはじめ、多数の柱根・土坑等を検出した。この屋敷地には柳の並木が植栽され、区画溝が廻っていた。遺物は屋敷地から珠洲焼・土師質土器・青磁等の土器・陶磁器類、砥石等の石製品、鉄椀等の金属製品が少量と大量の木製品が出土した。屋敷地では刀子の柄・鞘を生産していたが、柄には唐木であるシタン製のものがあり、当時の東アジアとの貿易を考える上で注目される。また、元亨３（1323）年、元亨５（1325）年の紀年銘のある茅札や米の品種を書いた種子札が出土した。屋敷地周辺に広がる水田は最大５面に累重していた。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 238 集

一般国道8号白根バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

小坂居付遺跡

2012(平成24)年８月 30 日印刷
2012(平成24)年８月 31 日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950－8570　新潟市中央区新光町４番地１
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956－0845　新潟市秋葉区金津 93 番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　新高速印刷株式会社
〒950－0963　新潟市中央区南出来島２丁目１番25号
電話　025（285）3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 238 集

『小坂居付遺跡』の表記について誤りがありましたので、下記のように訂正してお詫びします。

頁	行	誤	正
例言	下から 14・15 行目	佐藤俊：(中略)、第Ⅶ章１B、	佐藤俊：(中略)、第Ⅶ章１B・２A、
76	下から 14 行目	51 は田下駄である。	50 は田下駄である。
87	下から 3・4 行目	８は第三号木簡・呪符である。(中略) 符籙という呪いの記号が複数書かれる。	８は第三号木簡・出天咫呪符である。(中略) 出天咫という呪句と符籙という呪いの記号が複数書かれる。
158	上から 15・16 行目	第三号木簡は呪符である。(中略) 頭部を圭頭に切り、呪いの記号である符籙を書く。１字目は「出」のようにも見える。最後の五芒星は墨痕が良く残る。	第三号木簡は出天咫呪符である。(中略) 頭部を圭頭に切り、「出天咫」の呪句の後に呪いの記号である符籙を書く。「天咫」は北斗星の異名である。最後の五芒星は墨痕が良く残る。
158	上から 19 行目	「(符籙)」	「出天咫（符籙）☆」
161	下から 2 行目	第三号木簡は呪符で符籙が書かれる。	第三号木簡は出天咫呪符である。
188	下から 14 行目	備考　第三号木簡「(符籙)」	備考　第三号木簡「出天咫（符籙）☆」